R180.3-067ウ
1200500766302

始

内閣文庫
8.2.20
正本

サイキ5-5

(圖)宗教
(巻)
永久保存

威以香水於如來前
而作是言我今以此香
供奉上如來及比丘
僧作願衰隨為我納
受作此言已即便捨
水余時婆羅門即受
之說偈呪願
若人能布施　斷除悭怪貪
若人能忍辱　永離於瞋恚
若人能精進　則遠於懈怠
能具此三行　速證菩提道

若有貧窮人　无財可布施
見他脩施時　而生隨喜心
隨喜之福報　與施等无異
余時婆羅門大臣及
餘人民見王奉施如
來僧伽藍皆悉踊躍
生隨喜心余時頻比
婆羅王施僧伽藍已
心大歡喜頭面礼足

5-5

佛書解說大辭典

大東出版社藏版

東和
198

本書編纂要解

一、本書は佛教に關する刊行物を東西兩洋に亘り、その大は一切經に收むる數千の經論より、その小は市井に埋もるゝ一論一文の小册子に至るまで、これを擧ぐるは勿論、遠く散逸してその影を止めざるもの、或は貴重なる寫本の類に至るまで一切の典籍を收め盡し、これに現代最新の配列法（書名の首字を所謂五十音順音引假名遣に配列）により一々に內容解說を施し、且つその所在を明示したものである。

一、本書は邦語漢語佛教典籍（昭和七年十月卅一日刊行の分迄）の全部六萬五千五百餘を收む。卽ち各種藏經より約八千、佛教全書、佛教大系等一般佛教叢書並に各宗關係の全書全集類約七千、各大學圖書館（京大、龍大、谷大、京專、高野山、正大、駒大、立正、東洋等）並に宮內省圖書寮、內閣文庫、帝國圖書館其他一般圖書館所藏のもの約十萬、東域傳燈目錄、諸宗章疏錄、八家請來目錄、眞宗敎典志、扶桑禪林書目、其他諸目錄より約二萬の古逸註疏書目、出三藏記、歷代三寶紀等より僞經、抄經、闕本、失譯經の書目約一萬五千を涉獵し、以上全部の書目カード中の同一書を整理して六萬五千五百餘部の佛敎典籍を採錄した。

一、本書は以上六萬五千五百餘部の典籍を便宜上五類に分類した。卽ち「第一類、藏經」「第二類、全書」「第三類、單行本の古寫本、古刊本」「第四類、現在の單行本」「第五類、古逸書類」の五類であつて、其內容解說にあたつては、六萬有餘全部に亘り詳細なる解說をなすことは到底紙數上よりも許されぬ事であり、且つ其の必要を認めぬ點もあるので、大體詳細解說するものとせざるものとに分ち、前記五類中の第一、二類卽ち藏經、全書類を主とし、これに他の類本にして重要と認むるものに限り出來る丈內容そのものについて詳細な

る解說を施した。

一、本書の內容解說の形體はその要點を次の十項目とした。卽ち、❶題名、書名、異名略名異名併記。❷卷數。❸存、缺。❹著者又は譯者、生存年代を併記。❺著作年代又は譯出年代。❻內容解說。❼末書(注釋書參考書)。❽寫刊の年月。❾現所藏者、圖書館書庫名。❿發行所名。の十項目である。この十項中前記第一、二類は❽❾❿を省略し、第三類は特に❾の圖書館の函號を詳記し、披覽者に備へ、第四類は❿の發行所名を記して入手に便益あらしめ、第五類は❼の注釋參考書に力を入れて研究に有利ならしめた。この方針に依れるを以て藏經の經律論、各宗の宗典類は悉く詳細なる解說が❻に於いて執筆され、且つその解說に責任をもつべく夫々執筆者の署名を附記した。

一、本書の解說に於ける十項目の內容について一定の方針を示せば左の通りである。

❶、題名にはすべて具名、略名、異名をつけた。且つ日本音、支那音の讀方、梵語名、西藏語名、巴利語名を附記した。日・支・梵・藏・巴とあるがそれである。而して日本音の讀方はすべて羅馬字法を採用し、一字一字の間に接尾符(—)を附し、全體としては音便慣讀法を用ひ、促音其他の用法は便宜上大藏經南條目錄補正索引(昭和五年刊)に從つた。支那音はすべて現在の北京官話の正しい發音に依り、支那音を羅馬字に移す場合學者によつて相異る點ありと雖も、本書は最も普通に廣く行はれてゐるトーマス・ウヰード氏の式に從つた。大正一切經刊行會版の昭和法寶總目錄では佛蘭西語法を用ひたが、本書は右により英語法に依つて羅馬字化した。梵藏兩語名の記入は主として西藏甘殊爾勘同目錄(大谷大學圖書館昭和六年刊)により、巴利語名の記入は漢巴四部四阿含互照錄(赤沼目錄—昭和四年刊)に從ふことにした。

❷、卷數は其典籍の卷數を記したが、丁卷の不同なる場合あるものは一々これを附記した。

❸、存缺に就ては、存は現在行はれてゐる藏經の種類別所收卷數、全書類は其所載卷號を記した。而して各種藏經及び目錄

には左の如く略符號を使用した。茲に出てくる數字番號は本書の「佛教典籍總論」並に「昭和法寶總目錄」と連絡をとり研究に資することにした。

大正——大正新修大藏經。縮——縮刷大藏經。卍——卍字藏經。卍續——續藏經。北——北宋版。南——南宋版。元——元版。明北——明北藏。清——清藏。麗——高麗版。天——天海版。指——指要錄。法——法寶標目。至——至元法寶勘同總錄。明南——明南藏。〆——南條目錄。出三藏記——出三藏記集。三寶紀——歷代三寶紀。法經錄——衆經目錄(法經等撰)。仁壽錄——衆經目錄(彥悰撰)。靜泰錄——衆經目錄(靜泰撰)。內典錄——大唐內典錄。譯經圖紀——古今譯經圖紀。武周錄——大周刊定衆經目錄。開元錄——開元釋敎錄。貞元錄——貞元新定釋敎目錄。佛全——大日本佛敎全書。眞全——眞宗全書。眞大——眞宗大系。日藏——日本大藏經。

❶、著者又は譯者は其人の生存年代を出來る丈精査して各種の史傳、目錄、年鑑、年表、系譜等により現存せるあらゆる參考資料を涉獵して正確を期した。但し傳記は人名辭書に讓るべき性質のものであるから特にこれを省略した。年代はすべて西曆を用ひ、年號は其の人物の生死國により、其國の年號をとり、一國に生れ他國に死したものは何れかの一國の年號を用ひた。年代中—線を用ひ、「年代—年代」なるは生死年を、「年代—」は生年、「—年代」は寂年のみ明らかなるもの、又兩者不明にて生存中の或る時期明白なるものは「—年代—」として記入した。年時帝世等すべて明らかならざるも、略々其時代を推定し得らるゝものは其推定年代に「?」の符號を用ひた。僧傳並に資料中生年を明記せざるも寂年享壽の判明してゐるものはその逆算により概ねこれを記入した。生死年代に諸說あるものは其中の一を採用若しくは一說として別出したものがある。

❺、著作年代は著作者しくは譯出の年號を記入した。

❻、內容解說は前述の如く主として第一・二類につき冗長繁文を避けて、名義・大綱・分科・判釋・傳通の範圍に於て詳記した。原典飜譯に關する歷史的說明譯出者の傳記等はこれを省略した。略名、異名を有するものは大藏經、全書類に標題とされ

た題名の箇所に於て說明した。例へばクの部「倶舍論」ではその題下に具名「阿毗達磨倶舍論」と記し、詳細なる解說はアの部「阿毗達磨倶舍論」に於てなしたるが如し。

❼、注釋參考書は典據を出來る丈詳細に調査して列記し、大體製作の年代順に從つて列擧した。

❽、寫刊の年月、寫とあるは寫本、刊とあるは刊本のことにして、その出來の年代である。

❾、現所藏者、圖書館書庫名は個人所藏のものは何某藏とし、圖書館所藏のものは其館名並に其館に於ける書目の兩號を記入した。館名の略符は左の通りである。

谷大——京都大谷大學圖書館。龍大——京都龍谷大學圖書館。京大——京都帝國大學圖書館。正大——東京大正大學圖書館。駒大——東京駒澤大學圖書館。立大——東京立正大學圖書館。高大——紀州高野山大學圖書館。京專——京都(東寺)專門學校圖書館。哲——哲學堂圖書館。帝國——東京上野圖書館。內閣——內閣文庫。帝室——宮內省圖書寮。寶藏院——高野山寶藏院所藏。金剛三昧院——高野山金剛三昧院所藏。寶壽院——高野山寶壽院所藏。寶菩提院——京都寶菩提院所藏。

而して略符の下の數字等は何れも其所藏圖書館に於ける書架番號である。而して藏經、全書、叢書類は一般に現行されてゐるから所藏者(書庫)、發行所名は概ねこれを記入しないことにした。

カ

火吽軌別錄 ❶(日)Kwa-un-ki-betsu-roku (支)Huo-hung-kuei-pieh-lu. ❷一卷 ❸存、大正一八・九三六 Zk. 914、縮倫二、卍續二・九・三

❹本軌は善無畏三藏の傳述である。故に一本の題の下には「三藏善無畏」の五字がある。由來護摩のことを說きし祕密佛敎の經軌は諸多あるが、其根本なるものに三種存することは、請儀軌祭承錄に「護摩の本軌に、凡そ三本あり、一には瑜伽護摩軌、二には火吽供養軌、三には建立護摩軌云々」とある通りで、本軌は比較的短文ではあるが重要なものである。凡そ密敎護摩の特色は大日經疏第二十に、「護摩の義とは、謂く慧火を以て煩惱の薪を燒き盡して餘なからしむるの義なり云々」とある如くである。故に火吽の二字に就ても祭承錄第一によれば「火吽とは、火は火法護摩の義、吽は是れ淨菩提心の種子なり。疏の第二十に云く、智火とは卽ち菩提心の慧光なり、乃至無始以來の無明の薪積めるを燒き、復遺餘なきことと劫燒の時の火の灰燼皆盡きて蕩然として無垢なるが如し。是れ今の吽字の智火を以て無明煩惱を燒盡するが故に火吽の軌と名づくる也云々」とある。本軌は空海圓珍の將來する所にして、其の特徵を言へば、火天本尊の兩段を說き、三寶院の略儀は本軌に依る。又息災等四種の差別を說き、初行護摩七日間修する常規は本軌に據つたものである。今內容を概論せば、最初「夫れ陀羅尼の法を修行せんと欲はゞ先づ須らく道場を嚴飾し、內外淸潔に衣服鮮淨にして諸の宜雜及び諸の穢論を離るべし云々」と述べて、日の初めて出づる時に供養を起首することを說き次で結界護身の法より觀想の法を出し、金剛合掌して雙膝を地に著けて、次に嚩字を想へ、世界を焚き殄して灰燼の如くならしむと。乃至復觀ぜよ阿字萃聚變と成ると。復想へ、寶塔大日尊と成りて寶蓮花に坐せり云々」と述べ、更に火法に四種あり、第一扇底迦の法(息災法)は、災を息め罪を滅す法、第二補瑟徵迦の法(增益の法)は、滿願及び諸の勝事を成就する法、第三阿毘遮魯迦の法(降伏の法)は、怨敵を退治するの法、第四預迦羅の法(敬愛の法)は敬愛和合を求むるの法なりと說き、此等四種に相應する壇等供具の物質に就て述べ、次で護摩木(火木)は夜合木、桑、松、榎、栢等の木を用いて作り、檀木を井形に積み百八枝(乳木)を燒く法等を說き、更に護摩の供養物として、圓伽丸香林香三昧香五穀常合香等の造り方を述べ、次で此等を初め火天に次に本尊に火木と共にそれ〴〵供養する法を說く。又扇火の法を說きて、扇を以て火を扇ぎ、口を以て吹くことを禁じ、更に護摩のとき、火焰の相、火焰の色、火の音等によつて吉祥の相と不吉祥の相とを知るので、その相違によつて息災增益降伏敬愛の護摩に各〻適不適ありと說き、復た「火を燒き供養すること七日を限りとなす。もし、事已むことを獲ずんば三七することも亦得」といひて、常の初行護摩七日修することの本據を出してゐる。諸儀軌祭承錄第一(高野山八葉學會)、請儀軌決影、諸儀軌決傳授私勘(櫻田雷等)、傳法院流傳授私勘(櫻田雷等)、國譯一切經祕密敎部第二解題等參照。

❾古寫本(櫻尾高山寺)應保二寫(東寺寶菩提院)(岡田契昌)

火吽供養儀軌 ❶(日)Kwa-un-kyō-gi-ki. (支)Huo-hung-kung-yang-i-kuei. ❷一卷 ❸存、大正一八・九三四 Zk. 915、縮倫一、卍續二・九・四 ❹唐善無畏(一開元二三Ａ.D.735)譯

❺本軌は善無畏三藏の傳述である。故に一本の題の下には「三藏善無畏」の五字がある。由來護摩のことを說きし祕密佛敎の經軌は諸多あるが、其根本なるものに三種存することは、請儀軌祭承錄に「護摩の本軌に、凡そ三本あり、一には瑜伽護摩軌、二には火吽供養軌、三には建立護摩軌云々」とある通りで、本軌は比較的短文ではあるが重要なものである。凡そ密敎護摩の特色は大日經疏第二十に、「護摩の義とは、謂く慧火を以て煩惱の薪を燒き盡して餘なからしむるの義なり云々」とある如くである。故に火吽の二字に就ても祭承錄第一によれば「火吽とは、火は火法護摩の義、吽は是れ淨菩提心の種子なり。疏の第二十に云く、智火とは卽ち菩提心の慧光なり、乃至無始以來の無明の薪積めるを燒き、復遺餘なきことと劫燒の時の火の灰燼皆盡きて蕩然として無垢なるが如し。是れ今の吽字の智火を以て無明煩惱を燒盡するが故に火吽の軌と名づくる也云々」とある。本軌は空海圓珍の將來する所にして、其の特徵を言へば、火天本尊の兩段を說き、三寶院の略儀は本軌に依る。又息災等四種の差別を說き、初行護摩七日間修する常規は本軌に據つたものである。今內容を概論せば、最初「夫れ陀羅尼の法を修行せんと欲はゞ先づ須らく道場を嚴飾し、內外淸潔に衣服鮮淨にして諸の宜雜及び諸の穢論を離るべし云々」と述べて、日の初めて出づる時に供養を起首することを說き次で結界護身の法より觀想の法を出し、金剛合掌して雙膝を地に著けて、次に嚩字を想へ、世界を焚き殄して灰燼の如くならしむと。乃至復觀ぜよ阿字萃聚變と成ると。復想へ、寶塔大日尊と成りて寶蓮花に坐せり云々」と述べ、更に火法に四種あり、第一扇底迦の法(息災法)は、災を息め罪を滅す法、第二補瑟徵迦の法(增益の法)は、滿願及び諸の勝事を成就する法、第三阿毘遮魯迦の法(降伏の法)は、怨敵を退治するの法、第四預迦羅の法(敬愛の法)は敬愛和合を求むるの法なりと說き、此等四種に相應する壇等供具の物質に就て述べ、次で護摩木(火木)は夜合木、桑、松、榎、栢等の木を用いて作り、檀木を井形に積み百八枝(乳木)を燒く法等を說き、更に護摩の供養物として、圓伽丸香林香三昧香五穀常合香等の造り方を述べ、次で此等を初め火天に次に本尊に火木と共にそれ〴〵供養する法を說く。又扇火の法を說きて、扇を以て火を扇ぎ、口を以て吹くことを禁じ、更に護摩のとき、火焰の相、火焰の色、火の音等によつて吉祥の相と不吉祥の相とを知るので、その相違によつて息災增益降伏敬愛の護摩に各〻適不適ありと說き、復た「火を燒き供養すること七日を限りとなす。もし、事已むことを獲ずんば三七することも亦得」といひて、常の初行護摩七日修することの本據を出してゐる。諸儀軌祭承錄第一(高野山八葉學會)、請儀軌決影、祕密佛敎護摩(佐伯興人)、傳法院流傳授私勘(櫻田雷等)、國譯一切經祕密敎部第二解題等參照。

❾古寫本(櫻尾高山寺)應保二寫(東寺寶菩提院)(岡田契昌)

火許供養儀軌 ❶(日)Kwa-kyo-kyō-yō-gi-ki. 國譯火許供養儀軌 ❷一卷 ❸存、國譯祕敎經軌第四 ❹塚本賢曉譯

火急用意 ❶(日)Kwa-kyū-yō-i. ❷一卷 ❸存 ❺文化四刊 ❾(京大、一・二六、カ・一)

火怒金血脈辨明論 ❶(日)Kwa-koku-kin-ketsu-myaku-ben-mei-ron. ❷一卷 ❸存、法華三卷書卷中 ❹日蓮記 ❾元文三刊(谷大、餘大・七一九) 寶曆三刊(龍大、研傳)享和二刊(龍大、二六九二・二)

火生長者受報經 ❶(日)Kwa-shō-chō-ja-ju-hō-kyō. (支)Huo-sheng-chang-che-shou-pao-ching. ❷二卷 ❸缺 ❹根本說一切有部毘奈耶雜事第二第三卷の抄出。 ❼(參考) 開元錄第一六、貞元錄第二六

火性三昧法湖大事 ❶(日)Kwa-shō-zan-mai-hō-ko-dai-ji. ❷一卷 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

火定同行實 ❶(日)Kwa-jō-dō-gyō-jitsu. ❷一卷 ❸存 ❹皿元記 ❺享保六刊 ❾(谷大)

火葬論 ❶(日)Kwa-sō-ron. ❷一卷 ❸存 ❹英トムプソン著、舟橋振譯 ❺明治一二刊 ❾(帝國、二五・二八五)

火頭金剛儀軌 ❶(日)Kwa-tō-kon

-gō-zō-yō. (支)Hou-t'ou-chin-kang-hai-ang-yang. ❷一卷 ❸缺 ❼〔參考〕 傳敎大師將來越州錄

火天 ❶(日)Kwa-ten. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第四〇阿娑縛抄第六之内 ❹承澄(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)撰

火布惹耶私記 ❶(日)Kwa-fu-nya-ya-shi-ki. ❷一卷 ❸存 ❹仁海(天曆九—永承元 A. D. 955—1046 一說永承元、年九六寂) ❾寫本(京大、日大未・三三六)

火滅經 ❶(日)Kwa-mek-kyō. 現代宣譯火滅經 ❷一卷 ❸存、現代宣譯根本佛敎聖典叢書第四 ❹赤沼智善譯

可圓慧恭大和尚行狀 ❶(日)Ka-en-e-kyō-dai-o-shō-gyō-jō. ❷一卷 ❸存 ❼〔參考〕 大日本佛敎全書續刊豫定書目

可和尚碑文 ❶(日) Ka-o-shō-hi-mon. (支)K'o-ho-shang-pei-wên. ❷一卷 ❸缺 ❹琳撰 ❼〔參考〕 智證大師請來目錄

可喜縛呂口決 ❶(日)Ka-ki-baku-ro-ku-ketsu. 柿袋口決、相承由敎開書 ❷一帖 ❸存 ❾寫本(金剛三昧院)

可睡齋御由緒定例書 ❶(日)Ka-sui-sai-go-yui-sho-jō-rei-sho. ❷一卷 ❸存 ❼〔參考〕 禪籍目錄

可睡齋略譜 ❶(日)Ka-sui-sai-rya-ku-fu. ❷十二枚 ❸存 ❹大通著 ❾寫本(帝國、二三一・二三五)

加賀松岡寺由緒 ❶(日) Ka-ga-shō-kō-ji-yui-sho. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大、別置)

加句靈驗佛頂尊勝陀羅尼記 ❶(日)Ka-ku-rei-gen-buc-chō-son-shō-da-ra-ni-ki. (支)Chia-chü-ling-yen-fo-ting-tsun-shêng-t'o-lo-ni-chi. ❷一卷 ❸存、大正一九・三八六 No. 974c、卍續二・九・四 ❹唐武徹(—永泰元 A. D. 765—)述 ❻尊勝陀羅尼誦持の靈驗功德を說いてをる。

佛徹は不空と同時代の人であつて、その尊勝陀羅尼は金剛智から王開士、それから蔣那、最後に武徹に相承したと言ふことになつてをる。波利譯の陀羅尼の上に句が添加された因緣は如何といふに、玄宗皇帝の開元年中、山西省の五台山の麓に、王栞といふ居士があつた。此の居士が遠方へ旅行した不在中、計らずその父が死んだのである。居士は父の臨終に遇はないのを遺憾とし、波利譯の尊勝呪數十萬遍を至心に讀誦した。少しも功驗がないので五台山を去らうとした。その時突然一老人が出現して王に語つて云く「汝は勤敏であるが、然し汝の誦する文句は脫落が多いので功驗が少いのである。我今汝に全文を授くべし」と言つて授けて吳れた。その授かつた陀羅尼を誦すること千遍、空中簫管の響聞え、天人數人掌に圍繞せられて一天仙が現はれて、「我は是れ汝の父、汝が誦する陀羅尼の功德により今や正に天仙の王たることを得たり」と言つて天に上昇したといふ。次に又この王と同時代に王少府といふ人がゐた。この人が波利譯の尊勝呪を誦し、その數が正に數萬に至つた。或る夜、夢に一梵僧が表はれ、少府に謂つて言く「賢者の念誦殊に精誠である。歎くらくは、本誤りあるが故に功薄し」と少府稽首してその眞を請ひ口授された。その後、前記の王とこの王少府とは代宗皇帝の天寶年間、共に洛陽に來り住してゐた。一方金剛智から直接尊勝呪を稟受した王開士も此所にゐた。然るに突然王少府が頓死して又蘇生したのでその不思議な出來事を聞かんとして、王開士、五台山の王なる人が王少府を訪問した。その不思議な因緣は次の如くであつたさうである。最初王少府が頓死するや、忽ち二人の使者が來つて、之に隨つて行くこと數十里、一大樹の下に至つて休息した。その間に彼はふと思ひ出して尊勝呪を呪して見ると二使者は天上界に生れることを得た。斯くすること無慮、地獄の罪人を悉く救ふことを得たといふ。この三人が互に自身の傳承した陀羅尼を讀み合ふと音旨字數少しの異りもなく、符節を合すが如く一致したといふのである。 (久野芳隆)

加持印言記 ❶(日) Ka-ji-in-gon-ki. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(正大、一四八・二)

加持祈禱 ❶(日)Ka-ji-ki-tō. 眞言祕密兩部祕法加持祈禱 ❷一卷 ❸存 ❹小野清秀著 ❽昭和四刊

加持祈禱眞言祕密の解剖と其奧傳 ❶(日)Ka-ji-ki-tō-shin-gon-hi-mitsu-no-kai-bō-to-sono-oku-den. ❷一卷 ❸存 ❹日下敏道著 ❽昭和六刊 ❿東京中央出版社

加持薫香作法 ❶(日) Ka-ji-kun-kō-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❽德川時代寫 ❾(寶龜院)

加持作法集 ❶(日) Ka-ji-sa-hō-shū. ❷二冊 ❸存 ❽德川中期寫 ❾(金剛三昧院)

加持の力 ❶(日)Ka-ji-no-chikara. ❷一卷 ❸存 ❹京都眞言宗各派聯合法務所文書傳道部編 ❽明治四二刊 ❾(高大、寄・一・五七)

加持病患祈禱肝文鈔 ❶(日)Ka-ji-byō-gen-ki-tō-kan-mon-shō. ❷二卷 ❸存 ❹日輝(寛政一二—安政六 A. D. 1800—1859)述 ❽明治一一刊 ❾(谷大、龍大・二四七四)(京大、日大未・七四八)(立大、A〇八・七一、七三、七四、九七) ❿東京須原屋

加州安心異亂記 ❶(日)Ka-shū-an-jin-i-ran-ki. 文政年度加州安心異亂記 ❷一卷 ❸存 ❻加州安心諍論記の異本 ❾寫本(谷大、宗大・二四八九)

加州安心異論記 ❶(日)Ka-shū-an-jin-i-ron-ki. 文政年度加州安心異論記 ❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大、宗大・二五〇四)

加州安心諍論記 ❶(日) Ka-shū-an-jin-jō-ron-ki. 文政年度加州安心諍論記 ❷四卷 ❸存 ❹易行院法海(明和五—天保五 A. D. 1768—1834)記 ❺文政五(A. D. 1822) ❾寫本(谷大、宗大・七一)

加州安心爭論講者書上 ❶(日) Ka-shū-an-jin-sō-ron-kō-ja-kaki-age.

❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大、宗大・一一六二)

加州石川郡白山緣起 ❶(日)Ka-shū-ishi-kawa-gun-haku-san-en-gi. ❷一卷 ❸存、日本大藏經修驗道章疏第三 ❻本書は石川縣白山谷白山の緣起を漢文を以て記したもので、端首は缺け、處々に闕文がある。初めに天女が夢に現じて告げがあつた事を記し、方便身として九頭龍の形を示し、眞身として十一面觀音の姿を示現し、我は是れ妙理大菩薩なりと、此林中に蹤び上皇を守り、中天下の諸君公を守り、下民を撫づとて、日本は神國なりとて、神代の神名を語り、われは伊弉册尊なり、今は妙理菩薩と號す、白山はわが神政の都なり、日本の男女は元神なりとて、神武天皇に至るまでの神代の歷世年代を語りて、わが眞身はこの天嶺に在り、往きて禮すべしとて姿を隱された。是に於て泰澄は淨身清體天嶺に登り、岡浮檀金の長四寸なる本尊が八葉の蓮華に乘じ、珠玉瓔珞を垂れて光を放ち玉ふを拜し、社頭を建て勸請し、白山妙理大權現と號したと述べてある。 (中吞在嶂)

加州金澤御安心一卷記 ❶(日) Ka-shū-kana-zawa-go-an-jin-ik-kwan-ki. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大)

加州金澤御坊御教示 ❶(日)Ka-shū-kana-zawa-go-bō-go-kyō-ji. ❷一卷 ❸存 ❹圓乘院法住(—明治七 A. D. 1874)述 ❾寫本(谷大)

加州法義爭論聞書 ❶(日)Ka-shū-hō-gi-sō-ron-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大、宗大・三三三八)

加毛物語 ❶(日)Ka-mo-mono-gatari. ❷三卷 ❹敎念聞諸記 ❻本書を修補したものに淨土異聞錄三卷あり現存。當時の奇瑞奇蹟を輯錄したもの。 ❼〔參考〕 淨土眞宗敎典志第二

加茂地藏院親玄方印信 ❶(日)Ka-mo-ji-zō-in-shin-gen-gata-in-jin. ❷一裹 ❸存 ❽德川時代寫 ❾(寶龜院)

加樓鳥陀夷經 ❶(日)Ka-ru-u-da-i-kyō. (支)Chia-lou-wu-t'o-i-ching. (巴)M. 66 Laṭukikopama S. ❸存、中阿含經第五〇(大正一No. 26. 192)

甲斐萬福寺文書 ❶(日)Ka-i-man-puku-ji-mon-jo. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大、別置)

伽陀假譜 ❶(日) Ka-da-kari-fu. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(高大)

伽陀口傳 ❶(日)Ka-da-ku-den. ❷一帖 ❸存 ❽德川時代寫 ❾(寶龜院)

伽陀金剛眞言 ❶(日)Ka-da-kon-gō-shin-gon. (支) Chia-t'o-chin-kang-chên-yen. ❷一卷 ❸存、大正二一・二〇二 No. 1241、縮閏一四、卍續一・二・五 ❻本眞言は、阿吒薄拘(Āṭavaka)大元帥無邊神力甘露咒と同類にして、無畏三藏譯の阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌卷上に、甘露咒は梵字で明記されてある(大正二一・一八八)。又この甘露咒は、漢音譯で阿吒薄鉤附囑咒とも稱せられて、現に大正藏經第二十一卷(二〇二)に出てある。但し今の伽陀金剛眞言は、前記の二咒とは稍異つた所もあるが、大體に於て、同一系統の眞言であると見做すことが出來やう。 (神林隆淨)

伽陀祕讃類 ❶(日)Ka-da-hi-san-rui. ❷數百帖 ❸存 ❽足利中期寫 ❾(金剛三昧院)

伽彌尼經 ❶(日) Ka-mi-ni-kyō. (支)Chia-mi-ni-ching. (巴)S. XLII. 6 Pacchābhūmaka S. ❸存、中阿含經第三(大正一No. 26. 17)

何義經 ❶(日) Ka-gi-kyō. (支)Ho-i-ching. (巴)A. X. 1 Kimatthiya. ❸存、中阿含經第一〇(大正一No. 26. 42)

何苦經 ❶(日) Ka-ku-kyō. (支)Ho-ku-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❼〔參考〕 出三藏記第四

何苦經 ❶(日)Ka-ku-kyō. (支)Ho-ku-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(—太始二—建興元 A. D. 265—313—)譯 ❻中阿含經卷第三十六の別譯 ❼〔參考〕 三寶紀第六、內典錄第二、武周錄第八

何苦經 ❶(日)Ka-ku-kyō. (支)Ho-ku-ching. (巴)cf. A. V. 31 Verses. ❸存、中阿含經第三六(大正一No. 26. 148) ❼〔參考〕 法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

何耶揭唎婆觀世音菩薩受法壇 ❶(日)Ka-ya-ki-ri-ba-kwan-ze-on-bo-satsu-ju-hō-dan. (支)Ho-yeh-chieh-li-p'o-kuan-shih-yin-p'u-sa-shou-fa-t'an. ❷一卷 ❸存、大正二〇・一七一 No. 1074、縮餘二、卍續一・三・二 ❻雜密の儀軌で、馬頭觀音法に屬する。造壇法及び馬頭觀音印明十種を說明してをる。 ❽文和二寫 ❾(寶壽院) (久野芳隆)

何耶揭唎婆像法 ❶(日)Ka-ya-ki-ri-ba-zō-hō. (支) Ho-yeh-chieh-li-p'o-hsiang-fa. 賀耶揭哩婆儀軌 ❷一卷 ❸存、大正二〇・一七〇 No. 1073、縮餘二、卍續一・三・二 ❻之は雜密の儀軌である。末尾に賀耶揭哩婆儀軌と書いてある。主として馬頭觀音の畫像方法を說き明したもので、四面二臂蓮華及び眞陀摩尼を持する像を詳述してをる。その文の內容は全く陀羅尼集經第六と一致する。その圖は覺禪鈔を參照すると載せてある。又次に四面二臂右手施無畏、左手蓮華を把る畫像法を說いてをる。第三に誦咒の方法を說き、第四に療病の印及び明乞食の印及び明を說明してをる。それから毘那夜迦を縛するとか、不淨を失するを治することとか護身とかの咒を說いてをる。 (久野芳隆)

何欲經 ❶(日)Ka-yoku-kyō. (支)Ho-yü-ching. (巴) A. VI. 52 Khattiya. ❸存、中阿含經第三七(大正一No. 26. 149)

河州紀行 ❶(日)Ka-shū-ki-kō. ❷一卷 ❸存 ❹昌瑞(光格帝代 A. D. 1780—1816?)記 ❾寫本(龍大、二〇五九・一)

河州御教示 ❶(日)Ka-shū-go-kyō-ji. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大、宗大・八八六)

數字略號 ❶題名(書名) ❷卷數 ❸存缺 ❹著者 ❺作者年代 ❻內容解說 ❼末書(註釋書參考書) ❽寫刊の年月 ❾現所藏者(書庫名) ❿發行所名

河州志紀郡土師村道明尼律寺記 ❶(日)Kawa-shu-shi-kki-gun-ha-shi-mura-dō-myō-ni-ritsu-ji-ki. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三 ❹河内國南河内郡道明寺村真言宗土師寺の記で和文を以て綴られてゐる。始めに道明寺はもと土師寺といふ、土師の里の寺なる故である。開基聖德太子尼衆の御妻を建立せんと土師八嶋力をあはせ、住宅を捨てゝ寺とし、土師氏は代々禮慕となつた。光仁天皇の時土師古人に姓菅原を賜はり、道實鰥に至つた。是善鰥の妹覺善比丘尼出塵の志深く、當寺に於て落飾されたので、道實鰥も屢來られ、元慶四年に一夏九旬の間に一刀三禮して十一面觀音の像を刻まれて、新に一堂を造つて安置された。同八年には五部大乘經を書寫して納められ、仁和二年には鏡に金泥を以て阿字を書して、阿字觀を修せられ、延喜元年太宰權帥に左遷せらるゝ時、一夜を此寺に過され、遺身として佛舍利五粒を疊善尼に遺じ、自身の像を刻みて殘された。筑紫にて遷去の後遺物として、阿彌陀經、心經、寶冠、石帶、笏、鐘などを送られた。天慶四年土師寺を改めて道明寺とした因緣、治安三年御堂關白道長が、高野詣の序、大和七大寺を巡禮し、當寺に一夜宿され事、寛元四年興正菩薩が當寺に於て文殊供養を修せられ、永仁六年四月忍性律師の請願に依りて西大寺を始め三十四ケ寺に守護不入の沙汰を蒙つた時、當寺も其一寺であつた。元龜元年高屋城兵亂の火災にかゝり燒失したので、其後造營は出來たが、昔の型ばかりのものである。

拾遺附錄に惟宗朝臣孝言が道明寺にて作られる詩及び菅原道實の詩を載せてある。

奥書に右の一卷この度念用故御望に任せ惡筆とは思へども、書寫せしむるなり、まことに後見の嘲りを取入り候。惠宗院秀海とある。この人の作か、唯書寫か詳でない。（中谷在禪）

河州本和讃 ❶(日) Kawa-shu-hon-wa-san. ❷一卷 ❸存、異義集(了祥稿本)第一 ❹親鸞(承安三—弘長二A. D. 1173—1262)撰 ❺河内國八尾の惠願寺に傳ふる三帖和讃の古寫本なり。謂はゆる御草稿和讃と稱するもの丶一種である。親鸞の作られし三帖和讃には行間に假名にて略解を施せる部分ありて、この略解の文句も寫傳本の種類に依りて異同具略あり。文明五年に蓮如の開版せられし一本廣く行はれ、これに相違するものを御草稿本と稱するなり。寛政十一年深勵文明本を底本とし、河州本羽州本等の異本を對照し、御草稿和讃と題して開版せり。河州本筆寫の年代は室町時代の中期と推定すべし。（光氏祐祥）

河中草龍經 ❶(日)Kawa-chu-sō-ryū-kyō. (支)Ho-chung-ts'ao-lung-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❺彌陀會卷第四十三の抄出 ❼(參考) 出三藏記第四、仁壽錄第三、普泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

河中大聚沫經 ❶(日)Kawa-chu-dai-ju-mak-kyō. (支)Ho-chung-ta-chu-mo-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第三、開元錄第一五、貞元錄第二四

河滴集 ❶(日)Kawa-teki-shū. ❷一卷 ❸存 ❹元亨泉 ❼(參考)日本禪林撰述書目

河東祇樹一源統禪師行狀 ❶(日)Kawa-hi-gi-ichi-gen-tō-zen-shi-gyō-jō. ❷一卷 ❸存、續群書類從第九輯 ❹岐陽方秀(康安元—應永三一 A. D. 1361—1424)撰 ❺應永二六(A. D. 1419) ❻京都祇園社畔の祇樹庵の開山一源會統禪師の行業を、岐陽方秀和尚が、應永二十六年十月初旬論辰(A. D. 1419)に撰文したものである。一源は、肥後菊地に生れ、南禪寺二十五世平田慈均に嗣ぎ、永源寺寂室元光禪師に參じ、應安初年尼玄智の發願にて祇樹庵を創し、摂津光雲寺に化を宣べ、後小松天皇應永六年四月二十五日(A. D. 1399)示寂した。壽七十一、臘五十。春屋妙葩、龍湫周澤、悔海管見、古劍妙快、伯英德俊、剛中令柔、南宗綱等の當時の諸衆と交遊した。（大久保堅瑞）

河南小部集 ❶(日)Kawa-nan-shō-bu-shū. ❷一卷 ❸存 ❹道隱(寛保元—文化一〇A. D. 1741—1813)撰 ❾寫本(龍大)

呵責謗法鈔 ❶(日) Kawa-shaku-hō-ho-shō. ❷九卷或六卷 ❸存 ❹日芳(—延享三A. D. 1746—)撰 ❺延慶三刊 ❾(立大、A〇五・五七—五八)

呵責謗法滅罪鈔 ❶(日)Kawa-shaku-hō-hō-metsu-zai-shō. ❷一篇 ❸存、日蓮聖人御遺文、原文對照口語譯日蓮上人全集第一四條書之內 ❹日蓮(貞應元—弘安五A. D. 1222—1282)述 ❺文永一〇(A. D. 1273) ❻佐渡流罪中の日蓮が一の谷から鎌倉の四條金吾に與へた書。

巳前には伊豆の國へ流され今又佐渡の國へ流されたことは、法華經の故であつて、ひたすら謗法を呵責するためである。隨つて如何なる難に遭ふとも其は謗法を呵責する功德によつて過去の重罪を滅し、今生に佛果を得るためであると思へば、流罪死罪も法悅であると感懷を述べ、又流罪中にも人人が慰問したり供養したりするのは、教主釋尊がそれらの人々の心に入り替らせたまふたものであらうと思つて感涙にむせぶ旨を語り、更に天變地異の頻發は末法應時の救濟者たる本化の大菩薩出現の先瑞である旨を明し、最後に母の追孝と兄弟間の親睦とを論したものである。

❼錄外錄考下、錄外考文六 （馬田行啓）

呵調阿那含經 ❶(日)Ka-chō-a-na-gon-kyō. (支)Ho-tiao-a-na-han-ching. 荷鳴阿那含經 ❷一卷 ❸存、大正一四・八二一No. 555、鳩摩羅什七、卍一五・一、北845竟、南253竟、元252竟、明北715孝、清715孝、開245無、天347竟、出792無、法262無、至1079上、明南725孝、N. 719 ❹竺法護無羅譯 ❺東晉太元六—二〇(A. D. 381—395)

❻練めて短少の經。呵離阿那錄(Ānāgāmin)の布施其他の功德を記す。佛が令聞(Yaśavant)國祇陀恒(Jetavanānāthapiṇḍadasyārāma)に在る時、呵離阿那錄は五百の優婆塞を將いた。佛が何の功德により然るかを問うたのに對し、彼は佛所說の四事即ち一、布施。二、善說。三、瞻視同學給足有無。四、同學者對共不計を來行する故と答へた。佛はこの四事は三世諸佛所說の凡てであると言つた。彼は歡喜して歸宅し、客奴婢に善惡の道を說き、四天王の稱譽も等心に入つては耳を傾けなかつた。比丘が彼に問うて、遂に自衣有る無きは何を嚴飾する故かと言ふのに對し、彼は佛語至誠にて自衣不信者は泥梨中に墮つべきを恐れ、佛語を信ずる者は來つて我に承事し、我を布施し、人を煩擾するを喜ばない爲であるとした。佛は之を聞いて、呵離阿那錄の八事を說き、求めざるを人に知らしめんと欲せず、乃至信・自羞・自慚・精進・自觀・得禪・黠慧、人に知らしめんと欲せず、人を煩擾せしめざらんとしてゐると說いたとした。

行文不易であるが、さして特殊の思想はない。西藏藏經に一致するものがあると。❼(參考) 三寶紀第七、內典錄第三、譯經圖紀第二、開元錄第三、貞元錄第五 （平等通昭）

果韋王經 ❶(日)Kwa-i-ō-kyō. (支)Kuo-wei-wang-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

果分考文集末書切紙 ❶(日)Kwa-bun-kō-mon-shū-matsu-sho-kiri-gami. ❷一卷 ❸存、續淨土宗全書第一四 ❹良天聖觀(正應二—應安二A. D. 1289—1369)述 ❺良慶(正應二—應安二A. D. 1289—1369)述 ❻良慶の述作たる名越派の相傳本果分不可說を、論果分下、因分下、宗家果分下、餘宗許果分下、果分之中、果分下の六段に分けて註釋し、終りに經藏本尊事が述べてある。❾(弊城矢ノ目知來寺月形庵) （原田靈道）

果分考文助證 ❶(日)Kwa-bun-kō-mon-jo-shō. ❷一卷 ❸存、續淨土宗全書第一四 ❹良山妙觀(永仁二—康安元A. D. 1294—1361)說永仁元 A. D. 1293生)記 ❺延文三(A. D. 1358)五月 ❻本書は名越派の相傳たる果分不可說を證明する爲めに、その助證として華嚴宗、三論宗、法相宗、密宗及天台宗の五倚大乘の因分果分の說明を擧ぐるものにして、結文に「淨土宗因分果分事、果分上果分(意氣雖と多且先付二華嚴經二考ゝ之)普賢菩薩因位發二十大願「此願於二極樂二令二成就圓滿、此菩薩內證花嚴經也」と述べ、更に果分不可說に對する門下の疑問を解く爲に、良山が壯年の頃聽ける會通並に證文を擧て說示してある。❾(弊城矢ノ目知來寺月形庵) （原田靈道）

果分考文抄 ❶Kwa-bun-kō-mon-shō. 果分不可說 ❷一卷 ❸存、續淨土宗全書第一四 ❹良慶明心(文永六—建武三A. D. 1269—1336)述 ❺正中二(A. D. 1325)五月 ❻果分考文抄に就いて良山のなせる談義を其資良天が記したもの、果分不可說に關する重要事項を抽出して問答體を以て注釋してある。卷末に良天は「宋流の龜鏡として異義を存すべからず、此書は闇に燈を得たるが如く、盲人の眼を得たるが如し」と云ふ。以て本書の名越派に於ける地位を知ることが出來る。❾(弊城矢ノ目知來寺月形庵)(越前西福寺不明函) （原田靈道）

果分述傳集裏書 ❶(日)Kwa-bun-jutsu-den-shū-narabini-ura-gaki. ❷一卷 ❸存、續淨土宗全書第一四 ❹良山妙觀(永仁二—康安元 A. D. 1294—1361一說永仁元A. D. 1293生)記 ❺文和二(A. D. 1353) ❻此書は淨土法門の果分不可說の意義を相傳する旨を述ぶるものにして、一果分事、二學匠傳持事、三道場莊嚴事、四本尊次第事、五重書次第讀事、六免許狀事の六項より成る。良辨尊觀は正和二年七月、良慶明心(眞)は元亨三年正月、良山妙觀は文和二年正月末代の爲めに設我得佛十方衆生を手本とし、宗要、傳通記、決疑鈔並手印、果分不可說切紙、一紙一言を殘さず相傳せしむる事が述べてある。付法傳持次第に矢目有(統)說以下を擧ぐるは後人の添附である。

裏書には本書を果分述傳と題する意義と此書の密號を留箭と云ふ理由を、次に袋中良定が本書を某所に得て之を本所(矢目如來寺)に返すことを自書してある。❾(弊城矢ノ目知來寺月形庵) （原田靈道）

果分不可說 ❶(日)Kwa-bun-fu-ka-setsu. 果分考文抄 ❷一卷 ❸存、續淨土宗全書第一四 ❹良慶明心(文永六—建武三A. D. 1269—1336)述 ❺正中二(A. D. 1325)五月 ❻本書は名越派傳書の一、浜田良辨尊觀の意に依つて地論の因分可說果分不可說の文を取り、淨土の經論釋に果分不可說の深意あることを主張するものである。論因分可說果分不可說之文、宗家因分可說果分不可說之文、餘宗許果分不可說之文、果分之中果分之文の四段に分けて、實に此教は大之中大、深之中深、上之中上、無上大利直說、果分の智印、終窮之極談と說いてある。良慶の門下良山妙觀は貞和二年八月に此書を相傳して、彌陀果人を法門主とする今教が眞の大之中大なることを追記して以後、名越派嗣承の書と成る。❼(注釋) 果分考文抄助證(良山作)、果分考文抄見聞(良天) ❾(弊城矢ノ目知來寺月形庵) （原田靈道）

果報聞見錄 ❶(日)Kwa-hō-mon-ken-roku. ❷一卷 ❸存、淨園集錄第四 ❹雪嶺記 ❾刊本(谷大、餘大・一六六八)

花間笑語 ❶(日)Kwa-kan-shō-go. ❷四卷 ❸存 ❾寫本(谷大、餘大・三一五四)

花山記 ❶(日)Kwa-zan-ki. 華山私記 ❸缺 ❹遍照(弘仁八—寛平二 A. D. 817—890)記 ❻阿婆縛抄中の金記本、金記請會本、金記

諸會來(大日本佛教全書第三六阿娑縛抄二)等に我引。
❼(参考) 本朝台祖撰悉曇書目、自在金剛集第八

花上集 ❶(日)Ka-mi-tsi-sho. 大雅遺類 ❷一卷 ❸存 ❹文學契證 ❼(参考) 日本禪林撰述書目

迦夷王頭布施經 ❶(日)Ka-i-ō-tō-fu-se-kyō. (支) Chia-i-wang-tou-pu-shih-ching. 迦夷國王頭布施經 ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、歷泰錄第三、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

迦才淨土論 ❶(日) Ka-sai-jō-do-ron. (支)Chia-tsai-ching-tu-lun. 淨土論 ❷三卷 ❸存、大正四七・八三No. 1957、卍續二・一二・三、淨土宗全書第六 ❹唐迦才(—貞觀元A. D. 627—)撰 ❼(注釋) 餘師鈔五卷(刊、被淨)如俊 (参考) 蓮門類聚經釋錄卷上、淨土眞宗教典志第三

迦才淨土論餘暉鈔 ❶(日)Ka-sai-jō-do-ron-yo-ki-shō. 淨土論餘鈔 ❷一卷 ❸存、被淨土宗全書第七 ❹法譽知俊(—寶曆五A. D. 1755—)述

❺淨土論餘暉鈔と云ふ。迦才の淨土論の注釋。全五卷の中、第一卷を玄義として淨土論の大意を明し、第二卷以下を文句として、その文々句々につきて釋を施す。然して第一卷玄義は大意、釋名、入文解釋の三に分ち、大意を更に造論興意、撰述作時、論旨梗概、藏教分齊の四科とし、その中造論興意を教時符契、正論由致の二科に分つ等、細き分科のもとに淨土論の句々につき註釋を施してゐる。卷頭に源國の序、卷末に知東の跋を附し、寶曆二年に刊行したものである。

迦葉因緣經 ❶(日)Ka-shō-in-en-kyō. (支)Chia-shê-yin-yüan-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

迦葉戒經 ❶(日)Ka-shō-kai-kyō. (支)Chia-shê-chieh-ching. 迦葉禁戒經 ❷一卷 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第三

迦葉詰阿難經 ❶(日)Ka-shō-kitsu-a-nan-kyō. (支) Chia-shê-chi-o-nan-ching. 迦葉責阿難雙度羅携驗經 ❷一卷 ❹失譯 ❺雜譬喻經の抄出 ❼(参考) 出三藏記第四、仁壽錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

迦葉解經 ❶(日)Ka-shō-ge-kyō. (支)Chia-shê-chieh-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第四、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

迦葉結經 ❶(日)Ka-shō-ketsu-kyō. (支)Chia-shê-chieh-ching. ❷一卷 ❸存、大正四九・四No. 2027、續藏八、卍二六・九、北1024號、南1045號、元1036號、明北1356號、清1356號、麗1033號、天1031號、指991號、法1011號、至1474番、明南1118番、Nj. 1363 ❹安世高譯 ❺建和二—建寧三(A. D. 148—170)

❻本經は釋尊滅後久しからずして、釋尊の所說の散逸するを恐れ、これを後世に傳授せんと欲し、迦葉座長となり五百の阿羅漢と共に結集せる所謂世に云ふ第一結集の狀況を述べた經である。併しながら本經に於て、經卷法律諸藏を集むとあり、阿難が經を誦宣せる次第に關してはこれを詳述しあるも、優波利が律を誦宣せることに關しては一言も述べてない。又阿難の突吉羅罪に就き本經は九過をあげてゐる點は、他の諸傳よりも詳しい。第一結集に關する諸文獻は左に記する如くである。

四分律。五分律。善見毘婆沙律。根本說一切有部毘奈耶雜事。彌沙塞部和醯五分律。付法藏因緣傳。阿育王傳。大智度論。大唐西域記。デーパヴァンサ。マハーヴァンサ。チュルラヴァッガ。スマンガラ・ヴィラーシニー等。

❼(参考) 三寶紀第四、課經圖紀第一、開元錄第一、貞元錄第二 (中田源次郎)

迦葉結集戒經 ❶(日)Ka-shō-ketsu-kai-kyō. (支)Chia-shê-chieh-chieh-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹東晉代瞿公譯 ❼(参考) 開元錄第一五、貞元錄第二五

迦葉結集傳經 ❶(日)Ka-shō-ketsu-den-kyō. (支) Chia-shê-chieh-chuan-ching. 迦葉結集經、迦葉結集戒經 ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(—太始二—建興元A. D. 265—313—)譯 ❼(参考) 開元錄第一五、貞元錄第二五

迦葉禁戒經 ❶(日)Ka-shō-kon-kai-kyō. (支)Chia-shê-chin-chieh-ching. 摩訶比丘經、眞僞沙門經 ❷一卷 ❸缺 ❹東晉代瞿公譯 ❼(参考) 法經錄第五、開元錄第二五

迦葉禁戒經 ❶(日)Ka-shō-kon-kai-kyō. (支)Chia-shê-chieh-ching. 摩訶比丘經、眞僞沙門經、禁戒經 ❷一卷 ❸存、大正二四・九一二No. 1469、續藏一〇、卍一七・三、北9910番、南944番、元945番、明北1105初、清1105初、麗923入、天924番、指994入、法923入、至1244番、明南1298比、Nj. 1111 ❹劉宋沮渠京聲(—大明八A. D. 464—)譯

❺摩訶迦葉を對告衆として禁戒を說けるもの。

始めに比丘の爲すべからざる行爲十八條を擧げ、次に沙門の眞僞と持戒の關係、四事像持戒の人卽ち似而非なる持戒相の四條を示し、最後に禁戒の無形無著なることを說く。

此經は經錄には多く小乘律部に編入されてゐるが、正に大乘戒經に屬するものである。それは比丘の非行中に「人の善惡道を作すを止む」といふ如き、又戒の無形なるを說いて「戒は諸の罪惡なく安定して世道に就度する、是の如きを持戒と爲す」といふ如きに依て知らるゝ。

此經を京摩譯とするは歷代三寶紀第十以下であつて、出三藏記集の安公失譯經錄中に「迦葉戒經一卷、或云迦葉禁戒經」と云ひ、法經錄には譯人を出さず、又歷代三寶紀第七には始興錄に依りて晉末退公の譯する「迦葉禁戒經一卷、一名摩訶比丘經、一名眞僞沙門經」を擧ぐ。然るに眞僞沙門經は出三藏記集新集失譯錄に列ねるもので、三寶紀第十には宋慧簡譯とする。かくして二經は並び行はれ法經錄、內典錄は並擧してゐるのであるが、智昇は二經の首尾全同なるによりて「迦葉禁戒經一卷、一名摩訶比丘經、本名眞僞沙門經」とし、譯者を三寶紀、內典錄によりて京聲とした。斯くて此經の譯者は遽かに決定し難いものがある。

❼(参考) 三寶紀第一〇、衆經目錄第五、內典錄第四、課經圖紀第三、開元錄第五、貞元錄第八 (大野法道)

迦葉仙人說醫女人經 ❶(日)Ka-shō-sen-nin-setsu-i-nyo-nin-kyō. (支)Chia-shê-hsien-jên-shuo-i-nü-jên-ching. ❷一卷 ❸存、大正三二・七八七No. 1691、續藏九、卍一五・五、北1224陪、南1239陪、元1233陪、明北1243陪、清1233陪、麗1227兵、天1219陪、法1241殺、至1167外、明南397風、Nj. 936 ❹宋法賢(—成平四A. D. 1001—)譯

❺極めて短少の經である。嘱咐迦仙人が懷孕して滿十月乃至十二月にて出產するが、其の中間に病患あり、苦痛を受けるが、その方藥救療を師迦葉に問うた、師は救療の爲に方藥を逐べた。第一月は胎藏不安にて栴檀香蓮華優鉢羅花を水に入れ、乳汁乳糜を入れ同煎し溫服すれば、損惱が無い。第二月は青色優鉢羅花・俱母那花根・薑角仁鞞細嚕迦等藥を等分し篩にて抹と爲し、乳汁と煎用する。第三月は迦俱磨叱嚕迦俱磨藥及び蔴麻根等の諸藥を水と和し絺細とし、乳汁を入れ煎じ、乳糜及び蜜を入れ、冷服する。第四月は蔗蔘草根と枝葉等憂鉢羅花と菓蔕等を用ひ、水に和し乳汁と煎じ冷服する。第五月は瓠子根及び憂鉢羅花を等分し、篩にかけ細とし、葡萄汁・乳汁・乳糜に入れ煎じ冷服する。第六月は閉阿羅藥子摩地迦羅惹藥・薩訖多嚕藥を用ひ、水と和し細とし、乳汁を入れ同煎し、乳糜と蜜を入れ、冷服する。第七月は蔗蔘草の枝葉と根とを篩にかけ抹と爲し、乳糜と蜜にて丸とし、酉汁にて服し、又柔豆粥飯を食する。第八月は三精讚藥蓮花青憂鉢羅花蔗蔘草を各等分とし、冷水にて和し研して細とし、乳汁糜蜜を入れ同じく煎じて冷服する。第九月は蔗麻根・迦俱磨藥・含羅計・般尼藥・沒哩賀底藥を用ひ、等分し冷水にて和し研して細とし、乳汁を入れ煎じ、冷服する。第十月には柔豆憂鉢羅花を用ひ、等分し水にて和し研して細とし、乳糜と蜜と乳汁にて煎じ、冷服する。第十一月は青憂鉢羅花娑路隣藥蓮花と草を等分し、同じく處方する。第十二月は迦俱磨叱嚕迦俱磨藥・甘草・憂鉢羅花を同じく處方して服させれば、蔭藏安らかであるとする。

行文平易であつて、散文より成る。この經は佛教的色彩は全く無く、純然たる醫書と見做すべきものである。何故にかゝる論書が經藏に編入されたかは、諒解に苦しむ。壽命吠陀(Āyurveda)等から系統を引く外道書中の印度醫書の一に屬するものである。 (平等通昭)

迦葉獨證自誓經 ❶(日)Ka-shō-doku-shō-ji-sei-kyō. (支) Chia-shê-tê-chen-tzu-shih-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第四、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

迦葉赴佛泥洹經 ❶(日)Ka-shō-fu-butsu-dai-on-kyō. (支) Chia-shê-fu-fo-ni-yüan-ching. 佛般泥洹時迦葉赴佛經、迦葉赴佛涅槃經 ❷一卷 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第四、法經錄第三、三寶紀第四、武周錄第一一

迦葉赴佛般涅槃經 ❶(日)Ka-shō-fu-butsu-hatsu-ne-han-kyō. (支) Chia-shê-fu-fo-pan-nieh-pan-ching. 般泥洹時大迦葉赴佛經、摩訶迦葉經、佛般泥洹摩訶迦葉赴佛經 ❷一卷 ❸存、大正一二・一一五No. 374、續辰一〇、卍二六・六、北995號、南1011號、元1005號、明北1243既、清1243既、麗1001號、天993號、指961號、法925號、Nj. 1330 ❹竺曇無蘭譯 ❺太(元)六—二〇(A. D. 361—395)

❻佛の上足の弟子大迦葉が、佛の入涅槃の時、波和と俱尸那羅との中途に在りて、佛の入滅を知り、急ぎその場所に赴くことを記した經典であつて、D. 16 Mahāparinibbāna(Nj. 152)、長二遊行經(大正一・一七一以下)、佛般泥洹經下(大正一・二〇六三c以下)、大般涅槃經(大正一・一八九以下)に含まるゝ記事を別行したものである。この別行經典にては、人々迦葉を呼んで佛の伽と爲すと云ふこと、最後の偈中に「法身慧常存、莫呼永泥洹」とあることが注意を呼ぶものであり、從つて別行されて後に原本に後期の變化があつたことを示してゐるものである。 (赤沼智善)

迦葉佛藏抄 ❶(日)Ka-shō-butsu-zō-shō. (支)Chia-shê-fo-tsang-chao. ❷一卷 ❹隋信行(大同七—開皇一四A. D. 541—594)撰 ❼(参考) 開元錄第一八

迦葉品梵藏漢六種合刊 ❶(日)Ka-shō-bon-bon-zō-kan-roku-shu-gō-kan. (支)Chia-shê-p'in-fan-tsang-han-liu-chung-ho-k'an. 大寶積經迦葉品梵藏漢六種合刊 ❷一卷 ❸存 ❹飯和憲(ヘールスタイン)編 ❺民國一三刊 ❼(京大、佛教・八一一八)

迦葉問論 ❶(日)Ka-shō-mon-ron. (支)Chia-shê-wên-lun. 迦葉問毘尼論 ❷一卷 ❸提婆經 ❼(参考) 內典錄第一〇、開元錄第一八、貞元錄第二八

迦旃延說法沒盡偈經 ❶(日)Ka-sen-en-setsu-hō-mo-tsu-ge-kyō. (支) Chia-chan-yen-shuo-fa-mo-chin-chieh-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❼(参考) 武周錄第一一、開元錄第二、貞元錄第四

迦旃延無常經 ❶(日)Ka-sen-en-mu-jō-kyō. (支)Chia-chan-yen-wu-ch'ang-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❺生經第二卷の抄出 ❼(参考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、歷泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

迦旃延無常經 ❶(日)Ka-sen-en-mu-jō-kyō. (支)Chia-chan-yen-wu-ch'ang-ching. ❹存、生經第二(大正三No. 154. 17)

迦旃延 ❶(日)Kasen-nen.(支)Chia-chan-chieh. 迦旃延偈經、迦旃延說法盡偈 ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第三、法經錄第一、仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一一

迦提羅越問五戒經 ❶(日)Kadai-ra-otsu-mon-go-kai-kyō.(支)Chia-ti-lo-yüe-wen-wu-chieh-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

迦絺那經 ❶(日)Kachi-na-kyō.(支)Chia-chih-na-ching. ❸存、中阿含經第一九(大正一、No. 26, 80)

迦丁比丘說當來變經 ❶(日)Kacho-hi-ku-setsu-tō-rai-hen-kyō.(支)Chia-ting-pi-chiu-shuo-tang-lai-pien-ching. 大仙迦丁所記當來祕識要集、迦丁比丘當來變經 ❷二卷 ❸存、大正四九・七、No. 2028、續藏八、卍二六・九、北1045黃、南1053黃、元1057黃、明北1064英、清1154英、麗1043黃、天1045黃、指1062黃、法1034黃、至1495祖、明南1135其、Zip 1371 ❻宋代(A. D. 420—479)譯

❺本經は迦丁比丘當來變經と云ひ、詳しくは大仙迦丁所記當來祕識要集と云ふ。最初に迦丁比丘は正法滅に誠せんとするの現時、多くの出家は佛法を護持せず、佛戒を持たず、佛塔寺を莊嚴することに心を致し、且つ文字に貪著し祕惜して傳へず、嫉妬心・慢心を懷き互に相誇毀し鬪諍し、引いては俗人の中に入つて飲酒し經率にふける等々の生活をなし、却つて持戒清淨護法の比丘あるを見てはこれを罵辱する等漸次墮落し行く現狀を嘆いてゐる。次に拘睒彌國に於ける說戒最後の大布薩會、卽ち法滅時の記事をあげ、正法滅に滅せんとするの時期近きことを示してゐる。されば今の內に正法を護持し戒律を奉行して勤行精進せずんば悔ゆるも及ばざることを誡めてゐる。

以上本經は正法末の狀況を記せる經である。法滅時の記事に就いては本經の外に雜阿含經卷第二十五。阿育王傳。迦旃延說法喪盡偈。大集月藏分法滅盡品。摩訶摩耶經。婆沙論卷百八十三等あり。

❷(參考) 出三藏記第四、法經錄第三、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一一、開元錄第五、貞元錄第八 (中田源次郎)

迦毗色迦王に送れる馬鳴の書翰に就て ❶(日) Kashikiki-o-mo-miyo-no-sho-kan-ni-tsite. ❷一卷 ❸存 ❹寺本婉雅著 ❾刊本(谷大、餘大・三六七四)

迦留多王經 ❶(日)Karuta-ō-kyō.(支)Chia-liu-to-wang-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第三、法經錄第三、仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第二、第一五、貞元錄第四、第二五

迦樓羅 ❶(日)Karura. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第五〇卷釋鈔之內 ❾承澄(元久二—弘安五、A. D. 1205—1282)撰

迦樓羅王念誦次第 ❶(日)Karura-ō-nen-jus-shi-dai. ❸存 ❾寫本(寶龜院)

迦樓羅及諸天密言經 ❶(日)Karura-kyū-shi-ten-mitsu-gon-kyō.(支)Chia-lou-lo-chu-shi-tien-mi-yen-ching. 迦樓羅王持念經 ❷一卷 ❸存、大正二一・三三一、No. 1252 ❻唐代般若力譯

❺末尾には迦樓羅王持念經とある。最初迦樓羅の說明をなし、次に辨事印、嘴印、加嘴印、薩波(蛇)印、那羅嘴(鮑魚)印、跋迦又(金翅鳥)印、心印を說く。それから伏毒の法、療毒の法、自眼藥法、敎毒法を叙述してゐる。次に迦樓羅受度(善識)曼荼羅を說いてゐる。その次は畫像法がある。四臂二手合掌二手興願の印をなす像が說明されてゐる。十卷抄第九にその圖像が載せてある。次に五大天觀門を述べてゐる。卽ち千頭風天(雲輝抄參照)、火天、地天、水天、虛空天を述べてゐる。次に堅固壇門に於いて壇作法を設き、更に進んで療蛇毒の法を說き明してゐる。最後に存想壇法卽ち病人と行者との處する壇の位壇を想念する方法を說き明してゐる。 (久野芳隆)

科往生拾因 ❶(日)Kaō-jō-jū-in. 往生拾因 ❷一卷 ❸存 ❺延寶六刊 ❾(立大、A 三〇・二六)

科學上より見たる弘法大師 ❶(日) Kagaku-jō-yori-mi-ta-kō-bō-dai-shi. ❷一卷 ❸存 ❹青柳榮司著 ❺昭和三刊 ❻京都六大社

科學上より見たる極樂の實在 ❶(日)Kagaku-jō-yori-mi-ta-gok-raku-no-jitsu-zai. ❷一卷 ❸存 ❹伊藤圓定著 ❺大正九刊 ❻日本輝書刊行會

科學と佛敎の調和 ❶(日)Kagaku-to-butsu-kyō-no-chō-wa. ❷一卷 ❸存 ❹加藤三吾著 ❺明治二六刊 ❾(正大、一〇七・一四六)(谷大、外津・七九一)(帝國、一八・三三三)

科觀音經選註 ❶(日)Kakan-non-kyō-sen-chū. 觀音經選註 ❷一卷 ❸存 ❹亮法(元和八—延寶八、A. D. 1622—1680)錄 ❺寬文一〇刊 ❾(高大、寄・一・二三)

科光明眞言經照闇鈔 ❶(日)Kakō-myō-shin-gon-kyō-shō-an-shō. 光明眞言經照闇鈔 ❷三卷 ❸存 ❹亮法(元和八—延寶八、A. D. 1622—1680)述 ❾刊本(高大、寄・一・三二)

科十一面陀羅尼經鈔並尊像文 ❶(日) Kajū-ichi-men-da-ra-ni-kyō-shō-narabini-son-zō-mon. 十一面陀羅尼經鈔並尊像文 ❷二卷 ❸存 ❹亮法(元和八—延寶八、A. D. 1622—1680)述 ❺延寶七刊 ❾(高大、寄・一・三二)

科新經序鈔 ❶(日) Kashin-kyō-jo-shō. ❷一卷 ❸存 ❹亮法(元和八—延寶八、A. D. 1622—1680)述 ❾刊本(高大、寄・一・二四)

科隨求陀羅尼經鈔 ❶(日)Kasui-gu-da-ra-ni-kyō-shō. 隨求陀羅尼經鈔

❷三卷 ❸存 ❹亮法(元和八—延寶八、A. D. 1622—1680)述 ❺元和元刊 ❾(高大、寄・一・三二)

科千手陀羅尼經報乳記 ❶(日) Kasen-shu-da-ra-ni-kyō-hō-nyū-ki. 千手陀羅尼經報乳記 ❷二卷 ❸存 ❹亮法(元和八—延寶八、A. D. 1622—1680)述 ❺延寶三刊 ❾(高大、寄・一・三二)

科註十住心論 ❶(日)Kajū-jū-shin-ron. 祕密曼荼羅十住心論科註 ❷二十卷 ❸存 ❹秀翁(寬永三—元祿一二、A. D. 1626—1699)述 ❻寬文九(A. D. 1669)

科註住心品要解 ❶(日)Kajū-shin-pon-yō-kai. ❷七卷 ❸存 ❹憲照述 ❺天和二(A. D. 1682) ❾大日經住心品疏の注釋

科註卽身成佛義 ❶(日)Kasoku-shin-jō-butsu-gi. ❷四卷 ❸存 ❹龍雲空性述

科註般若心經祕鍵 ❶(日)Kasō-chō-han-nya-shin-gyō-hi-ken. ❷二卷 ❸存 ❹眞賢(—正德二、A. D. 1712)述

科註佛說虛空藏菩薩求聞持法經 ❶(日)Kasō-butsu-setsu-kō-kū-zō-bo-satsu-mo-mon-ji-hō-kyō. ❷二卷 ❸存 ❹龍雲空性述

科八齋戒作法要解 ❶(日)Kahachi-sai-kai-sa-hō-yō-kai. 八齋戒作法要解 ❷一卷 ❸存 ❾刊本(高大、寄・一・一一)

科父母恩重經鈔 ❶(日)Kafu-bo-on-jū-kyō-shō. 父母恩重經鈔 ❷二卷 ❸存、日本大藏經方等部章疏第六(元和八—延寶八、A. D. 1622—1680)述 ❺延寶三刊 ❾(高大、寄・一・二三)

科發微錄 ❶(日) Kahotsu-bi-roku.(支)Ko-fa-wei-lu. 發微錄 ❷三卷 ❸存 ❹淨源(大中祥符四—元祐三、A. D. 1011—1088)撰 ❺萬治四刊 ❾(高大、寄・一・一六)

科目專愚鈔 ❶(日)Kamoku-sen-gu-shō. ❷一卷 ❸存 ❹琢通記 ❺元文二寫 ❾(谷大、餘大・二三五〇)

科文集 ❶(日)Kabun-shū. ❷一卷 ❸存 ❺安永四寫 ❾(谷大、宗大・一四一)

珂磧上人行業記 ❶(日)Kasaki-shō-nin-gyō-gō-ki. ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一七 ❹珂然(寬文九—延享二、A. D. 1669—1745)記 ❺元祿一一(A. D. 1698) ❻東京市世田谷區鬼澤淨眞寺の開山超譽珂碩の傳を漢文に綴つたものである。初めに元和四年正月武州に生れたること、父が妹の夫と少憁より設戰し、兩者共に死したることが、他日珂碩出塵の緣となり、珂山を拜して出家し、梵網經の「一切男子是我父、一切女人是我母、我生無不從之受生、故六道衆生皆是我父母」の文に感奮し、九品佛像を造り、日本國中の人の名位總牌に擬し、一たび瞻禮するものをして生々世々人身を失はず、正見念佛して齊しく往生淨土成等正覺を遂げしめんとの誓を起し、日涌無量壽經四十八卷、盛夏も衣を解かず、新寒にも火を近けず、心を造像に注ぎて止まなかつたことを叙し、靈巖寺の敷地埋葬、殿堂建設に關する功績を擧げ、嵯峨を救ひたること、御略の漁夫等の奇病を濟ひたること等を錄し、造像の費に充てんとて日々三錢を貯へ、昔日の願を成ぜんとするに、連りに火災に遇ひて、費を失ひしも、願心愈熾であつた、寬文四年に一驅が出來た。弟子の珂憶が京師から來て、心配なさるな、私が助力するといふと、丈六の九體の像、手傳はすなら苦勞はしない、貧道二生の願力なればこそ、隨て費を募ることもしないのである、それがまたから遲れたわけでもある、さういふことはしてくれるなといふので、珂憶は九體の像は師のお誓ひなれば、どうか光背の小化佛は私にさせてくれといふので、宜に任せたのが、九品のうちの六體の圓光の中の六千六十六驅である。寬文七年に至つて九體が揃うたので、更に發願の釋尊像を造つて、靈巖寺に置いたのが、暴風雨に海嘯の厄に遇うた。寬文八年越後村上の領主の請に應じて泰聖寺に住し、毒龍降伏のことあり。後武藏奧澤地に淨眞寺を創め、深川の地より九品佛を移したのが、今の九品佛堂及龕護殿のはじめであつた。次に珂碩が病者の爲に苦惱を除きたること、亡者の冥福を薦めて得脫せしめること、儒者の子の病惱を濟ひて渴仰を得たる例を擧げ、異類惡濟其の蹟は著はなるも、誠罪唯南無阿彌陀佛の一行のみ、何の方術かあらんといふのが、珂碩の眞骨頂であつたことを述べて、終りに元祿七年十月七日の入寂の模樣、茶毘後舍利を得たる事を記し、最後に法孫なる記者珂然が、謹んで行業を記し、且つ繫ぐに、頌を以てすと、一篇の讚を揭げてゐる。 (中谷在輝)

珂然和尙行業略傳 ❶(日) Kanen-o-shō-gyō-gō-ryaku-den. ❷一卷 ❸存、近世往生傳之內 ❹隆圓(—文政頃 A. D. 1818—1829)記

❺本書は隆圓の近世往生傳三編より拔萃したものを、天保十二年に珂然の住寺大阪生玉の法泉寺の十四世橋譽が報恩の爲めに印行したもので、和文で書いてある。

珂然の父は松井吉勝とて家代々武士であつたが、吉勝の代に京を去て大阪に下り商賈となつたことから始めて、幼にして玉手安福寺珂憶上人の弟子となり、岐嶷たる才は其頃から喚發して居た、後東上して增上寺に籍し、廓堂上人の室に敎をうけ、內外の典籍を研究し、學成りて後叢林を辭して身を雲水に托した、後大阪の生玉法泉寺に住持し、宗風を宣揚し、餘暇には自他宗の經論及び傳書等を講じて學徒を導き、院を大藏轉經院、居を修史室と稱し、撰述の書には、吉水實錄、親鸞福論往生傳、小閑藏知津、淨宗護國編成語考、珂碩、開證、義山、忍徹、證禪等の行業記、正宇通作者辨、已上は上木したもので、其他唯識論討要記、法相義語筆成編、聖廟別傳、日耳堂編語燈錄燈杖、元亨釋書索隱、往生論註纂要、三部、安樂集、四帖疏、唯識、百法等の講義、頌義會疏、字典體製等があつたが、未刊のものは散逸して仕舞つたと記し、次に河內石川郡東條科長里の聖德太子御廟窟の

弘法大師の建てた石幢が損じたのを、發起勤進して新しく淨土三部經を刻して更に外園に造り、御廟中の二十句の文石を刻みて建てたる事を記し、次に延享二年十月十一日入寂、壽七十七歳、法泉寺にある肖像の賛を和譯して掲げてある。最後に學信和尙の興學編に師を許せるを引きて「文章といひ、學才といひ、誠に天下高徧の人なりき」と稱し法孫人なく著述稿本悉く散減して傳はらざるを惜んでゐる。

附錄は法泉第十四世播譽の筆にて、その中に小橋成道寺法譽上人の珂然上人略傳あることを記し、一心寺の鐘並名號の緣起の碑も珂然の作なること、其他百萬遍知恩寺の鐘銘、大阪生玉圓通寺、同所法音寺の鐘銘も珂然の作なること、及び珂然の師は珂憶、珂憶の師は珂碩なること、天保十三年が百回忌に相當する爲め報恩の爲め印行する旨を記してゐる。
❾天保一二刊(正大、一五一六・二二八) （中谷在禪）

家源餘滴 ❶(日)Ka-gen-yo-teki. ❷二卷 ❸存 ❺慶長年間寫 ❾(龍大、研佛)

家乘錄 ❶(日)Ka-jō-roku. ❷二卷 ❸存 ❼〔參考〕 禪籍目錄

家中鈔 ❶(日)Ka-chū-shō. ❷一卷 ❸存 ❹日精(―天正一二 A. D. 1584)述 ❾原本(佐渡世尊寺藏)寫本(立大、DO・二七三)

家庭教談 ❶(日)Ka-tei-kyō-dan. ❷一卷 ❸存 ❹荒井滉光著 ❺大正二刊 ❿東京一鳴社

家庭講話 ❶(日)Ka-tei-kō-wa. ❷一卷 ❸存 ❹佐々木玲龍著 ❺大正二刊 ❿修養世界社

家庭講話 ❶(日)Ka-tei-kō-wa. ❷一卷 ❸存 ❹河崎顯了著 ❺昭和三刊 ❾(谷大)

家庭說教 ❶(日)Ka-tei-sek-kyō. ❷一卷 ❸存 ❹河崎顯了著 ❺明治三九刊 ❾(谷大、宗律・一五七)

家內教示辨筆記 ❶(日)Ka-nai-kyō-ji-ben-hik-ki. ❷一卷 ❸存 ❹易行院法海(明和五―天保五 A. D. 1768―1834)述 ❺明治二四刊 ❾(谷大、宗小・一二六)

家內示談 ❶(日)Ka-nai-ji-dan. ❷一卷 ❸存、日本敎育文庫第一一 ❹龍潤述

假字類聚 ❶(日)Ka-ji-rui-ju. ❷五卷 ❸存 ❾寫本(正大、一〇一・二八)

假定の殼を破りて ❶(日)Ka-tei-no-kara-o-yaburi-te. ❷一卷 ❸存 ❹二階堂陸生著 ❺大正一〇刊 ❾(谷大、外津・二四五六)

假名書正法眼藏 ❶(日)Ka-na-gaki-shō-bō-gen-zō. ❷十七卷 ❸存 ❼〔參考〕 禪籍目錄

假名書目錄 ❶(日)Ka-na-gaki-moku-roku. ❷一卷 ❸存 ❹光遠院惠空(正保元―享保六 A. D. 1644―1721)撰 ❾寫本(谷大、宗大・三二二〇)

假名聖教 ❶(日)Ka-na-shō-gyō. 眞宗假名聖教 ❷八十八部 ❸存 ❾惠空筆寫本(谷大、宗丙・四八)

假名聖教 ❶(日)Ka-na-shō-gyō. 眞宗假名聖教 ❷二十四部 ❸存 ❾端ノ坊舊藏本(谷大、宗丙・四九―七二)

假名聖教闢典錄 ❶(日)Ka-na-shō-gyō-kwan-ten-roku. ❷十三卷 ❸存、眞宗全書第四八 ❹玖成(―天保頃 A. D. 1830―1844―)撰 ❺天保三(A. D. 1832)脫稿

❻假名聖教各書の著作年代等を稽へ、更に題號並に本文に亘り、法彙左券、法要典據、其他諸註等、先覺の成せる諸末註を援引して其の缺を補ひ、專ら文の典據を考證し、また本文の辭句を解釋せる註釋書の頁數をも擧げたり。闢典とは善導序分義に古人云、言不ㇾ關ㇾ典君子所ㇾ慚とあるより取りたるものか。本願寺派の法要典據を併見すれば、假名聖教研究に至便である。本書中に書目、人名等は之を人物部、書目部に讓るとある故、義山師の動作御傳纂讚の如く、其部內を分つて詳解を加へしもの、如くなるも、惜しいかな今日その各部門の存否すら不明である。 （柏原祐義）

假名聖敎眞宗法要御引文 ❶(日)Ka-na-shō-gyō-shin-shū-hō-yō-go-in-mon. ❷一卷 ❸存 ❹玖成(―天保頃 A. D. 1830―1844―)編 ❺天保一五刊 ❾(龍大、研眞)

假名聖敎體撕 ❶(日)Ka-na-shō-gyō-tai-zei. ❷一卷 ❸存 ❹堀江慶了(―明治二九 A. D. 1896)著 ❾寫本(谷大)

假名聖敎跋文集 ❶(日)Ka-na-shō-gyō-batsu-mon-shū. ❷一卷 ❸存 ❾古寫本(龍大、別置)

假名聖敎目錄 ❶(日)Ka-na-shō-gyō-moku-roku. ❷一卷 ❸存、眞宗全書第七四 ❹光遠院惠空(正保元―享保六 A. D. 1644―1721)記

❻親鸞著書五、同消息集三、覺如著十四、存覺著二十九、法然聖覺隆寛從覺蓮如等著十三、作者未知十九、不審多端書十、撰號あるも不明確の書三十九、都合百三十二部の書目を出す。就中、覺如著のうちに歎異鈔を列ねて「如信上人記云云」と註し、また安心決定鈔をも出して「作者云云たれども、當家の傳は覺如上人也、山科記に見へたり、但西山家撰」と註する點、注意に價す。
❾寫本(龍大、一〇三・五一) （柏原祐義）

假名法語 ❶(日)Ka-na-hō-go. ❷一卷 ❸存、一休和尙全集、新訂禪學名著集 ❹一休宗純(應永元―文明一三 A. D. 1394―1481)述

❻一休禪師假名法語と世稱するもので、京都紫野大德寺四十八世一休宗純禪師が信者の婦女子に示された假名法語である。夢幻の世の中に油斷なく佛法を修行し、久遠を今日として無念無想の佛を唯心に觀ぜしめ、參禪に心を盡すことをすゝめ、栢樹子、南泉斬猫、百丈野狐等の禪門に於ける公案古則の取扱ひ方をも平易に示したものである。 （大久保堅瑞）

假名法語 ❶(日)Ka-na-hō-go. ❷一卷 ❸存、禪門法語集之內 ❹至道無難(慶長八―延寶四 A. D. 1603―1676)述 ❾明治二八、大正一〇刊(駒大)大正四寫、眞讃稿寫本(京大、日大未・四九五)

假名法語 ❶(日)Ka-na-hō-go. ❷一卷 ❸存、白隱和尙全集之內 ❹白隱慧鶴(貞享二―明和五 A. D. 1685―1768)述

❻日本臨濟中興の祖と稱せらるる白隱慧鶴禪師の信者の某居士に示された「白隱禪師假名法語」である。道情も進み精進の助けにもなる法語をと乞はれて、山梨了徹居士の勇猛なる參禪物語より始め、時々思ひ出しては修道するが如きは、妄想情念に打負かされて打泣きつつ念佛する樣なもので「虫食の薬にもならざる修行なるべし。誰にもせよ二度三度も呼吸の息も絕え果てて、自ら生死を辨へぬほど踏み進まざれば、しかとしたる得力は、努々是れあるべからず。縱ひ一旦凹地一下の得力これありて後も、動靜の二境を嫌はず、正念工夫の相續肝要たるべし」と示して居る。安禪者流へのよき頂門の一針である。 （大久保堅瑞）

假名法語 ❶(日)Ka-na-hō-go. ❷一卷 ❸存 ❹漢道撰 ❾刊本(京大、二五タ・五)

假名葎 ❶(日)Ka-na-mugura. ❷一卷 ❸存 ❹白隱慧鶴(貞享二―明和五 A. D. 1685―1768)述 ❺明治一七刊 ❾(帝圖、一〇九・一九五、一八三・二八八)(立大、A五〇・三)(京大、二五カ・四)

假名葎附新談義 ❶(日)Ka-na-mugura-tsuketari-shin-dan-gi. ❷一卷 ❸存 ❹白隱慧鶴(貞享二―明和五 A. D. 1685―1768)述 ❾白筆本複刻(駒大)

荷澤和尙禪要 ❶(日)Ka-taku-o-shō-zen-yō. (支)Ho-tsê-ho-shang-ch'an-yao. 河澤和尙禪要 ❷一卷 ❸存 ❼〔參考〕 智證大師請來目錄

荷澤顯宗記 ❶(日)Ka-taku-ken-shū-ki. (支)Ho-tsê-hsien-tsung-chi. 顯宗記 ❸存、卍三〇・一〇 ❹唐荷澤神會(總章元―上元元 A. D. 668―760)述 ❼〔參考〕 禪籍志卷上

訶宇門 ❶(日)Ka-ji-mon. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第二八智證大師全集第四 ❹圓珍(弘仁五―寬平三 A. D. 814―891 一說寬平四、年七八寂)撰

訶宇門灌頂祕印 ❶(日)Ka-ji-mon-kwan-jō-hi-in. ❷一卷 ❸存 ❺文政五寫 ❾(立大、A二〇・一四九)

訶利底母因緣經 ❶(日)Ka-ri-tei-mo-in-en-gyō. (支)Ho-li-ti-mu-yin-yüan-ching. 呵利底母因緣經 ❷一卷 ❻根本說一切有部毘奈耶雜事第三十卷の抄出。 ❼〔參考〕 貞元錄第二六

訶梨帝母 ❶(日)Ka-ri-tei-mo. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第五〇疊禪鈔之內 ❹疊禪(―壽永頃 A. D. 1182―1185―)撰

訶梨帝母 ❶(日)Ka-ri-tei-mo. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第四〇阿娑縛抄之內 ❹承澄(元久二―弘安五 A. D. 1205―1282)撰

訶利帝母眞言經 ❶(日)Ka-ri-tei-mo-shin-gon-gyō. (支)Ho-li-ti-mu-chên-yen-ching. (梵)Hariti-mantra. 訶利帝母經、訶利帝母法 ❷一卷 ❸存、大正二一・二八九 No. 1261、縮閏一四、卍二七・二、北1375暑、南1379阿、元1368阿、明北1442諱、淸1442諱、麗1332阿、天1359阿、法1144戸、至670若、明南1151無、三十帖策子第一六、Nj. 1449. ❹唐不空(神龍元―大曆九 A. D. 705―774)譯

❻本書は訶利帝母眞言法とも傳つてをり、略して訶利帝母經といふ。この中最も主要なるものは形像法である。曰く「天女形純金色、身に天衣を著け頭に瓔珞を冠し宣臺上に坐し兩足を垂下す。垂足兩邊に於て二孩子を畫き宣臺に倚ひて立つ、二膝の上に各一孩子を坐せしめ左手を以て懷中に一孩子を抱く、右手の中に於て吉祥果を持す。」と、總體は訶利帝母念誦法ともいふべきもので、之を分類すると眞言、形像、壇法、誦呪法とすることが出來る。 （久野芳隆）

訶利帝母眞言法 ❶(日)Ka-ri-tei-mo-shin-gon-hō. (支)Ho-li-ti-mu-chên-yen-fa. 訶利帝母眞言經、訶利帝母經、訶利帝母法 ❷一卷 ❸存、大正二一・二八九 No. 1261、縮閏一四、卍二七・二、北1375暑、南1379阿、元1368阿、明北1442諱、淸1442諱、麗1332阿、天1359阿。法1144戸、至670若、明南1151無、三十帖策子第一六、Nj. 1449 ❹唐不空(神龍元―大曆九 A. D. 705―774)譯 ❼〔參考〕 貞元錄第一五 （久野芳隆）

訶利帝母天法 ❶(日)Ka-ri-tei-mo-ten-bō. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

訶利帝母念誦次第 ❶(日)Ka-ri-tei-mo-nen-ju-shi-dai. ❸存 ❾(寶龜院)

賀島文書 ❶(日)Ka-shima-mon-jo. ❷三通 ❸存 ❾寫本(立大、DO・三三〇)

賀茂社櫻會緣起 ❶(日)Ka-mo-sha-sakura-e-en-gi. ❷一卷 ❸存、續群書類從第一五 ❹掃除頭佐國撰 ❺永保三(A. D. 1083)

❻京都賀茂神社の神主賀茂成助が三春の分節に、法華經を開演するのを、聞寄の者、櫻會といふた。それは別に期日を定めてなく、二三月の櫻の開く季節に行はれて來た。この法會を留めんことは殊勝なる神壇の嚴飾である。近年法華二十八品と各一品づゝ八相讃に迎へて、或は自書し、或は人をして書課せしむることが行はれる。これは法樂を神明に捧げ、皇運の遐昌を祈るものだと、神主賀茂成經の令に依て漢文を以て記したものである。 （中谷在禪）

華塢國師別傳 ❶(日)Kwa-u-koku-shi-betsu-den. ❷一卷 ❸存 ❼〔參考〕 禪籍目錄

華山院家四十八問答 ❶(日)Kwa-zan-in-ke-shi-jū-hachi-mon-dō. 華山院家六八問答 ❷一卷 ❸存、大正八三・四九〇 No. 2633 ❹道敎顯意(仁治元―嘉元二 A. D. 1240―1304 一說嘉元三、年六七寂)述 ❺正應五(A. D. 1292)

❻華山院家の四十八の下問に對し、道敎顯意が、簡單に而も明晰に淨土宗の本旨を答

數字略號 ❶題名(書名) ❷卷數 ❸存缺 ❹著者 ❺著作年代 ❻內容解説 ❼本書(註釋書參考書) ❽寫刊の年月 ❾現所藏者(書庫名) ❿發行所名

へたもので、その四十八問とは、(一)釋尊出世本懷在念佛往生、可云哉。(二)聖道淨土二門可有一門一乘義乎。(三)淨土宗意寓聖道修行、歟。(四)十劫正覺以前不可有念佛往生、歟。(五)五劫思惟發願時歟修行時歟。(六)彌陀正覺十界統攝佛歟。(七)十方西方淨土可有勝劣、耶。(八)大經十九二十願諸行本願歟將又來迎果遂願歟。(九)化前序述二代諸經、歟。(一〇)觀經九品大經邊地同歟異歟。(一一)諸經觀經定散同歟異歟。(一二)大經本願念佛觀經九品念佛小經七日念佛同歟異歟。(一三)念佛行者可發菩提心、耶。(一四)念佛往生必依宿習、歟。(一五)所得無生何位乎。(一六)章提得忍序正之間何時哉。(一七)不減罪可往生乎。(一八)不稱念唯以聞可往生哉。(一九)臨終煩惱可往生、歟。(二〇)往生時及法滅百歲、歟限後五百歲、歟。(二一)善導者彌陀化身歟釋迦再誕歟。(二二)本國舌相此會衆見歟不見歟。(二三)除疑心往生歟凡夫難離疑惑煩惱哉。(二四)所寂定散如彌陀因中功德者可爲往生行乎。(二五)能化佛成自力行、成佛所化衆生何不成自力行哉。(二六)依五戒十善力受人天善處惜、遇淨土教云云、自力行不成者難持五戒十善、歟。(二七)歸他力一人不可有機慕、歟。(二八)歸他力願可爲機慕、歟。(二九)自力他力念佛可有分別、歟。(三〇)攝取光明不照餘行者、歟。(三一)諸行往生者可預攝取光益、哉。(三二)攝取光明一照之後還作罪不可拾、歟。(三三)攝取光明不斷照歟念佛之時照歟。(三四)三心限念佛者歟互諸行歟。(三五)三心有退不退乎。(三六)三心有淺深乎。(三七)三心以何心爲本乎。(三八)眞實心約所歸歟約能歸歟。(三九)二河白道垂燒渴可渡歟將又以不渡燒之喻上可渡乎。(四〇)不發三心可往生乎。(四一)平生業成人雖作罪可往生、哉。(四二)臨終業成人發猛利心依無後心念佛歟不歟者不可往生、歟。(四三)平生業成人依臨終惡念墮惡道、歟。(四四)依平生行得臨終正念歟。(四五)依行者正念預來迎歟得行者正念、歟。(四六)下品下生念聲以何爲正乎。(四七)不預來迎得往生、人可有歟。(四八)臨終狂亂人猶可往生、乎である。

華山院家六八問答 ❶(日)Kasan-in-ke-roku-hachi-mon-dō. 華山院家四十八問答 ❷一卷 ❸存、大正八三・四九 No. 2633 ❹道教顯意(仁治元—嘉元二 A. D. 1240—1304 1 説嘉元三、年六七説) ❺正應五(A. D. 1292) ❻明治三一刊 ❼(龍大、二六八五・一)

華山私記 ❶(日)Kasan-zan-shi-ki. 花山記 ❷福昭(弘仁八—寛平二 A. D. 817—890)記 ❸阿娑縛抄中の金記末、金記諸會本、金記諸會末、大日本佛教全書第三六阿娑縛抄二)等に援引。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、密乘撰述目錄

華山志 ❶(日)Kasan-zan-shi. 華山誌 ❷五卷 ❸存 ❹明代王世昌編 ❺寫本(京大、藏・二〇カ・二)

華山禪師語錄 ❶(日)Kasan-zen-shi-go-roku. ❷三卷(卷五—七) ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

華頂和尚小傳 ❶(日)Kasan-chō-o-shō-den. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

華頂寓談 ❶(日)Kasan-chō-gū-dan. ❷一卷 ❸存 ❹敎譽記 ❺文化一一刊 ❻(谷大、宗大・一〇五二)(京專)

華頂山大谷寺知恩敎院略記 ❶(日)Kasan-chō-dani-ji-chi-on-kyō-in-ryak-ki. ❷一卷 ❸存 ❹謙光(—享保一四 A. D. 1729—)記 ❻寫本(正大、一五一四・三三)

華頂山古經目錄 ❶(日)Kasan-chō-kyō-mo-ku-roku. ❷一卷 ❸存 ❹小林圓逢編 ❺大正一四刊 ❻京都中外出版株式會社

華頂山大法會圖 ❶(日)Kasan-dai-hō-e-zu. ❷一卷 ❸存 ❺寶曆一一刊 ❻(京大、一・二一カ・一五)

華頂山大法會圖錄 ❶(日)Kasan-chō-zan-dai-hō-e-zu-roku. ❷一卷 ❸存 ❻文化八刊(谷大、宗大・二八二二、宗大・三二三二) 萬延二刊(谷大、宗大・三二三一)

華頂山知恩院大谷寺記錄書 ❶(日)Kasan-chō-zan-chi-on-in-dani-ji-ki-roku-sho. ❷一卷 ❸存 ❻寫本(正大、一五一四・三六)

華頂誌要 ❶(日)Kasan-chō-shi-yō. ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一九 ❹知恩院編 ❺明治四四(A. D. 1911) ❻京都市東山區林下町淨土宗總本山知恩院が開祖圓光明照大師(法然上人)七百年遠忌記念に出版せるもの。華頂とは知恩院の山號である。單行本は四六倍版で百十二頁で口繪に所藏の國寶其他什寶物、境內の寫眞を掲げてゐる。內容目次は第一開創緣由。第二開祖略傳。第三開德顯彰。第四祖忌報恩。第五歷代略譜。第六寺門沿革。第七知恩院宮。第八門葉廣業。第九古文書類。第十伽藍興。第十一靈寶什器となつてゐる。同寺には明治初年に調査編纂せる「華頂山古記錄拔萃」、「知恩院由緣記」等の寫本がある。本書は淺井法順師が是等を參照して更に補訂せられたやうである。單行本は既に絕版となつてゐるので、同院より昭和五年善導大師遠忌記念に「知恩院」(井川編)と題し、宗義を加へ、實物其他補訂して三六版二百七十三頁口繪附で出版してゐる。 ❼明治四四刊、大正二補訂刊 ❽(谷大、宗大・三二六六)(帝室、七一一・一〇)(龍大、二九七四・二四)(井川定慶)

華頂禪師假名法語 ❶(日)Kasan-chō-zen-ji-ka-na-hō-go. ❷一卷 ❸存 ❹華頂文秀(元文五—文政一〇 A. D. 1740—1827)語、眞壽編 ❽刊本(駒大)

華頂禪師語錄附華頂禪師行由錄 ❶(日)Kasan-chō-zen-ji-go-roku-tsuketari-kō-yu-roku. ❷一卷 ❸存 ❹華頂文秀(元文五—文政一〇 A. D. 1740—1827)語、眞壽編 ❺天保一〇刊 ❻(駒大)

華頂仁叟禪師書目 ❶(日)Kasan-chō-jin-sō-zen-ji-shō-mo-ku. ❷一卷 ❸存、金剛三昧經通宗記附錄之內 ❻寫本(京大、藏・一四ヲ・一)

華頂本堂金之事實 ❶(日)Kasan-chō-hon-dō-kin-no-ji-jitsu. ❷三卷 ❸存、知恩院略記之附錄 ❹豐恂(—文化六 A. D. 1809—)記 ❻(正大、一五一四・三三)

華頂無見覩禪師和韻 ❶(日)Kasan-chō-mu-ken-to-zen-ji-wa-in. ❷一卷 ❸存、慧日永明壽禪師山居詩之內 ❻寫本(京大、藏・二四ヱ・二)

華頂要略 ❶(日)Kasan-chō-yō-ryaku. ❷本紀一五〇卷、其中第五五、九六、九九、一四五の各卷を各上下二卷、第九七、九八の兩卷を各四卷、第一二八卷を五卷、(その第五を更に上下に分つ)、第一四九卷を六卷に分つを以て計一七〇卷となる。之に附錄三八卷を併せ、本紀附錄合計二〇八卷、外に首卷を加へて總計二〇九卷より成る。 ❸存 ❹本紀藤原爲純編(自第一卷至第八六卷)。藤原爲純增補(自第八七卷至一五〇卷)。附錄藤原爲純編 ❺享和三年二月十六日爲善の自序あれども、爲善最後の所記かと思はるゝ第二七卷所敎門首傳には、文化十一年十二月廿八日の記事があるから、蓋し此頃まで稿筆されたものであらう。而して爲純の增補は、之を承けて文化十二年より起筆、天保五年十一月十九日の記事に終るから、當時まで增補并に附錄されたものゝやうである。

❻天台宗延曆寺三門跡の一なる京都東山區粟田口町にある青蓮院に關する諸般の事蹟、并に山門に關する諸種の事項を記述したもので、青蓮院第二十九世入道尊眞親王の令旨によりて、始め藤原爲善の編纂せるものにかゝる。其根幹を成す史料は天台始祖傳敎より青蓮院第十八世入道尊道親王に至る應永以前の部は、專ら同院第八世入道尊圓親王の編纂にかゝる門葉記を基本とし、其より以後第二十九世入道尊眞親王享和年中に至る間は、尊眞增補の門葉記は言ふまでもなく、執事廳務公文所并に綱所の記錄を始め、或は僧綱里僧綱等の私記引付等、其他王府并に諸家の記錄古文書を探訪して成れるもので、享和以後文化に至る纂修并に文化十二年より天保五年に至る藤原爲純の增補及び附錄の編纂に至りては、更らに多數の參考史料を得たるもの、如く、首卷に見ゆる引用書目の如きは、實に內外の史料八十有九種を掲げてある。

內容は先づ首卷に總目錄及び引書目錄を掲ぐ。この外に凡例を擧ぐること總目錄に見ゆるも、私の據る所の京都府立圖書館本には之を闕如する。次に本紀は、第(一)卷に自叙、御門跡相承次第略系、根本傳第一傳敎大師、同第二慈覺大師、同第三安惠和尙、同第四相應和尙、同第五慈覺大師、無動寺檢校次第并に略傳、橫川三昧院檢校次第略傳。第(二)卷には台家眞言正統血脈相承次第、三昧流來由の事、二九一箇之事、御門跡相論枝葉之事、比叡山三門跡猊下之御本坊以下總御管領所之事由、同殿舍堂塔新古指圖を收めて居る。次に第四卷より第三十一卷までは、專ら門主傳并に附第の傳を納れ、即ち第(四)卷には門首御傳として第一行玄大僧正、第二覺快法親王、第三慈鎭和尙、附第御傳として眞譽宮法眼、良琳法印、眞性大僧正、慈賢僧正。第(五)卷には門首御傳として第四良快大僧正、第五慈源大僧正、第六入道道覺親王、第七尊守大僧正、附第御傳として慈慶大僧正。第(六)卷には門首御傳として第八尊助法親王、第九慈禪大僧正、第十道玄准三宮、第十一慈實大僧正、附第御傳として慈忠法印。第(七)卷には門首御傳として第十二慈助法親王、第十三慈玄大僧正、第十四慈深禮僧正、第十五良助法親王、第十六慈道法親王、附第御傳として祐助法親王、入道行圓親王、道澄法親王、道惠法親王。第(八)卷には門主御傳として第十七入道尊圓親王、附第御傳として尊實法親王。第(九)卷には門主御傳として第十八入道尊道親王、附第御傳として慈濟大僧正、聖助法親王、尊濟大僧都。第(一〇)卷には門主御傳として第十九入道道圓親王、第二十義圓准三宮、第廿一義快大僧都。第(一一)卷には門首御傳として第廿二尊應准三宮、附第御傳として入道尊傳親王。第(一二)卷には門首御傳として第廿三入道尊佩親王、附第御傳として童形宮。第(一三)卷には門首御傳として第廿四尊朝法親王。第(一四)卷には門首御傳として第廿五尊純法親王、附するに輪門の祖入道尊敎親王。第(一五)卷には門首御傳として第廿六入道尊證親王、附第御傳として童形宮。第(一六)卷には門首御傳として第廿七入道尊祐親王の元祿十二年より享保十六年まで。第(一七)卷には同親王の享保十七年より延享四年まで。第(一八)卷には門首御傳として第廿八入道尊英親王。第(一九)卷には門首御傳として第廿九入道尊眞親王の寶曆年中。第(二〇)卷には同親王の明和年中。第(二一)卷には同親王の安永年中。第(二二)卷には同親王の天明年中。第(二三)卷には同親王の寬政元年より同十年まで。第(二四)卷には同親王の寬政十一年より同十二年まで。第(二五)卷には同親王の享和年中。第(二六)卷には同親王の文化元年より同六年まで。第(二七)卷は同親王の文化七年より同十一年まで。第(二八)卷には同親王の文化十二年より同十四年まで。第(二九)卷には同親王の文政元年より同七年まで。第(三〇)卷には門首御傳として第三十入道尊實親王の文化五年より文政八年まで。第(三一)卷には同親王の文政九年より天保五年までの各事蹟を掲げて居る。次に第三十二卷より第五十四卷までは門下傳を編み、即ち第(三二)卷には脇門跡として本覺院、淨土寺、寂場坊、般若院、實藥院、曼殊院。第(三三)卷には外樣院家として本願寺、東本願寺、惡鎭寺、附するに專修寺、佛光寺、興正寺、龜綱寺。第(三四)卷には院家として定法寺、安居院、聖光院、知恩院。第(三五)卷には同じく院家として尊勝院、東南院、眞珠院、常樂院。第(三六)卷に

は同じく院家として上乗院、依正院。第(八三七)巻には諸院家として蓮実院、功徳院、法輪院、石泉院、貞性院、妙觀院、明應院、報恩院、南光院、禪明院、照泉院、蓮泉院、智樂院、蓮明院、佛心院。第(三八)巻には同じく諸院家として十乗院、密乗院、無量壽院、妙解院。第(三九)巻にも諸院家として金剛壽院、寶光院、寶光明院。第(四〇)巻も本諸院家として不動院、三光院、阿闍院、東福院、德壽院、設樂院、蓮光院、竜橋寺。第(四一)巻には坊官舊家として鳥居小崎家、同匠流、大谷伊豫家、同匠流、長谷家、大中臣練長流、各家、五條家、葛野別部卿家、鹿谷家。第(四二)巻には諸家舊家第一として渡邊家、隠岐家、道藤家。第(四三)巻には諸家譜代として伊丹家、東並河、西並河、武田家。第(四四)巻には同じく諸家譜代として望月家、永原家、梅島家、勝見家、大賀家、山田家。第(四五)巻には諸家散在或は諸穢の部として與利對馬、奏吉右衛門、坂井太兵衛、岡本三郎左衛門、伊藤左兵衛、桐山右衛門、片岡宗休、武部内記、藤本頼母、澤野頼母、長野右内、齊藤休翁、羽倉伊織、香川主膳、植田主殿、高山平馬、壺井柔女、川口左内、草屋粗負、松井雅樂、土岐國書、奈古屋左衛門、德永主馬、七條帰部、神谷率節、荒木帰部、松野典膳、黒村報負、佐野小七郎、猫口修理、桧沼織衛、山本源太、山本雅樂、長井六之丞、松本頼母、坂堂倫歌、戸田主馬、津田數馬、森谷求馬、吉田主膳、小倉正親。第(四六)巻には近代諸家或は散在の部として横圓逸記、入江主膳、久須見左源、花房要人、片岡隼人、中路大炊、大生織部、平賀國書、桂左治馬、小倉平馬、服部彌太、三谷城玄蕃、近藤弾正、岡本弾正、藤木左衛門、来川左京、荒川帯刀、西井長道、横山國書、清水求馬、野村内記、葉田勇進、出野金吾、藤嶋鬼一郎、城勘解由、駒井大學、濱口良厳、關因幡、阿佐美伊織、恒技帯刀、板垣矢柄、木村三浦之介、稲田内蔵、林典膳、内海主殺、綴喜岩尾、井上清記、竹田右兵衛、河本恕平、北川司馬、堀文庫。第(四七)巻には中小性交名、青侍、下の輩、茶道交名、次に地方等の家傳として八木の諸流、西村理右衛門の流、小西傳右衛門の流、西村其之丞の流、國松左太夫の流、田中九郎左衛門、神先金十郎の流、次に徒士、貼所御具預小頭、行事、食役所筆工、中番、三門番。第(四八)巻には醫師の部として安田立益、有馬共安、河村意倫、井上友詮、坂口立益、北尾芳庵、大西良積、綿川松稲、村上貫納、今井宗泉、上田義伯、吉形霞栖、仁志名元清、松木道逸、田丸義貞、伊良子群蜜、武川幸哲、井口泰治、三木貞伸、浦名順正、伊益晴賢、坂上元昌、中山柳蔡、早水了古、高階東逸、松山玄中、壺井右衛門、竹中立言、池田主殿、渡邊芳仙、山本正安、片山壽石、林立一、中津河立敬、肥都立助、鵜殿立吉。第(四九)巻には幾盛光堂供僧、御内佛僧、御承仕。第(五〇)巻には多武峯御本坊御留守居職、鞍馬寺御本坊御留守居職。第(五一)巻には坊官以下近習已上被召出の次第、侍法師交名、承仕交名、次に門下諸官位勤例を院家、出世、坊官、侍法師、承仕、醫師、諸太夫、侍に分ち。第(五二)巻には諸役補任として執事、雑務附坊官一萬、御知行方支配、遠例列次第、御家司、青侍支配、華頂山阿彌陀堂堂預職附取調方、入木道御門人支配、御用人、次に御代官、これは町方、郷方、勤定方、講方、貸附方、官僧支配、非常方を兼ね、次に金銀元方、御納戸方、勤定方講方、貸附方添役、次に貼方は差物方、御献方、金蔵寺預、鞍馬地下申次とし、次に御書物方、御佛具方、御道具方、御修理方、御山方附藍方、御庭方附花禮方、御右筆方、御里坊御留守居附御使役、江戸御用所詰貸附方官僧方、非常方添役、次に地方役を栗田口百姓町人申次として非常方勤定方講方貸附方町方等の下役これを兼ね。第(五三)巻には金蔵寺、之れを地蔵堂之坊と唐申堂之坊に分ち。第(五四)巻には華頂山阿彌陀堂雑記を敢めてある。琦で第(五五)巻は上下兩巻に分ちて御門領舊記を掲げ。第(五六)巻には栗田口諸寺社として惣神院新宮社、同別當歓喜院、良恩寺、安養寺、定信院、金剛寺、金臺寺、城安寺、眞覺寺、佛光寺墓所、梅宮社。第(五七)巻には栗田口舊跡考上。第(五八)巻は同記下。第(五九)巻には御門室現在聴構之記、栗田口村雑記第一慶長より延享まで。第(六〇)巻には同村雑記第二寛延より明和まで。第(六一)巻には同村雑記第三安永以降。第(六二)巻には御門領入組として岡崎村、鹿ケ谷村、浮土寺村、田中村、千本廻、壬生村、中堂寺村、上植野村、東九條村、鞍馬村、大和國百濟村、廣瀬村、菅田村。第(六三)巻には御書領所として無動寺山上の大乗院、東塔南谷の青蓮坊、東塔北谷の桂林院、横川飯室谷の妙香院、同谷の浮戒院、西塔山上の東陽坊、洛東大谷の十樂院、洛北山の常壽院、洛東神樂岡南の廣樂寺、洛東五條末の愛宕坊を掲ぐ。次に第六十四巻より第八十巻までは御寺務所を敢め。第(六四)巻には比叡山東塔院南の無動寺、江州比良山西麓の葛川寺、附するに回峯行者之事由。第(六五)巻には多武峯寺舊記。第(六六)巻は多武峯縁起、同堂舎の指圖、毎歳御吉書、同新層御添書。第(六七)巻には多武峯寺古證文。第(六八)巻には尊證親王談山御登臨之記。第(六九)巻には多武峯雑記一開基より延享まで。第(七〇)巻には同雑記二寛延より享和まで。第(七一)巻には同雑記三文化以降。第(七二)巻には鹿苑寺、琛場寺。第(七三)巻には鞍馬寺。第(七四)巻には鞍馬寺雑記二延寶より寛文まで。第(七五)巻には同雑記三元文より享保まで。第(七六)巻には同雑記四文政以降。第(七七)巻には同雑記四文政以降。第(七八)巻には善峰寺。第(七九)巻には眞如堂。第(八〇)巻には太山寺、附するに其末寺を敢む。次に第(八二)巻は御社務所として上賀社、附するに其末社。第八十三巻より第八十七巻までは附属の諸寺

社を掲げ、第(八三)巻には京洛外の部を新古に亘りて挙ぐ、即ち雲林院、浮土寺、曼珠院、寶乗院、康樂寺、眞如堂、東名寺、寂勝寺、定法寺、石泉院、法輪院、惣勝院、金蔵寺、阿彌陀堂、歓喜院、感神院新宮、良恩寺、安養寺、定信院、知恩院、一心院、安養寺、長樂寺、双林寺、松泉院、景德院御影堂、栗田宮、光明院、光明寺、東藥師寺、瓦勢山、愛宕寺、六波羅密寺、神宮寺、鞍馬寺、樂音寺、城興寺、圓乗院、上品蓮臺寺、行願寺、法興院、神樂寺、祇陀林寺、元慶寺、慈德寺、善峰寺、蓮華壽院、眞龍院、三鈷寺、往生寺、觀念三昧院、西願寺、圓明寺、普賢寺、勝光明院、常壽院、花園寺、寂勝金剛院。第(八四)巻には東國の部、即ち先づ近江の無動寺、日吉新御塔、横川三昧院、葛川寺、神宮寺、多賀大社、竹生嶋、百濟寺、法通寺、福林寺、梵釋寺、法定寺、教興寺、法界寺、羽東寺、定林寺、德陳寺、願興寺、通保寺、僧寺、尼寺、法藏寺、穴太寺、三尾社、蓋原寺、正興寺、岑寺、林光寺、願全寺、聖興寺、龍寶寺、美濃の南神宮寺、信濃の松月寺、伊勢の大覺寺、永樂寺、法廣寺、法光院、三河の眞來寺、澁山寺、甲山寺、眞福寺、遠江の蓮華寺、武藏の星野山、淺草寺、吉祥寺、下總の大鯉寺、大聖寺、安樂寺、無量院、千福寺、西林寺、常陸の千妙寺、西蓮寺、藥王寺、圓妙寺、三光院、能仁寺、藥王院、上野の眞光寺、高橋寺、觀音寺、下野の日光山、清水寺、宗光寺、陸奥の淨蓮寺、大高寺、中山寺、若狭にて三方寺、林興寺、羽賀寺、小野寺、上淵寺、西神社、山王社、神宮寺、越前の文家寺、平泉寺、氣比宮、神通院、香見社、八幡宮、天滿宮、竜橋寺、加賀の温泉寺、大聖寺、天神宮、倶利迦羅寺、能登の千興寺。第(八五)巻には西國の部、即ち大和の多武峯寺、攝津の梶原寺、佛勝寺、法蔵寺、仲山寺、頭陀寺、無量壽庵、大日堂、能福寺、和田神詞嶋松院、櫻磨の三枝寺、大山寺、清水寺、興樂寺、潮海寺、大谷寺、長林寺、班鳩寺、佛中の清泰院、安藝の秀岳院、丹波の蓮興寺、願皇寺、大日寺、榮松寺、神宮寺、明王院、丹後の感相寺、但馬の頼全寺、河會寺、小田井寺、因幡の藥師寺、伯耆の大山寺、出雲の鰐淵寺、神宮寺、三穂社、寶照院。第(八六)巻は南海の部にして、紀伊の法音寺、定音寺、伊豫の三昧院、觀自在寺、豊前の寶村院、豊後の六郷山三十箇寺、肥前の觀音寺、寶琳院、本莊院、寶光明院、安福寺、東福院、元忠寺、千栗社、饒社、肥後の阿蘇山、乾龍寺、池邊寺、筑後の高良山、坂東寺、永興寺、建仁寺、横尾寺、長命寺が挙げられて居る。次に第八十七巻以下は筑紫の編纂にして、第(八七)巻は御由緒の寺院として、石清水社僧の善法寺、新善法寺、田中坊、東竹坊、祇園感神院社僧の寶壽院、寶光院、竹坊、東梅坊、西梅坊、松林坊、目代新坊、佩西派浮土宗本山の知恩院、附するに御荷擔之記、一心院を挙げてある。次に第八十八巻より第九十巻までは御館入の寺院を出し、第(八八)巻には主として洛中を敢む。即ち愛宕院、松梅院、龍林、俊乗坊、魚山兩院、利生院、山王寺、因幡堂、佛照寺、大宅寺、勝金剛院、遣迎院、壬生寺、南之坊、西之坊、新德寺、永觀堂、光雲寺、金戒光明寺、清淨華院、松林院、大光寺、七觀音院、歓喜光寺、泉涌寺、金光明院、小藥師寺、寶生院、愛染寺、光明寺、清水寺、寶性院、慈心院、立本寺、寶塔寺、本禪寺、本圓寺、圓龍院、妙覺寺、本法寺、滿願寺、安禪寺、妙也寺、願興寺、興德寺、雲源寺、御靈社、寶藏寺。第(八九)巻は東國の部にして、近江の本像寺、眞常寺、蓮長寺、寶域院、弘誓寺、桑實寺、光延寺、西教寺、圓超寺、觀音護國寺、來迎寺、正通寺、光善寺、眞柳院、西光寺、觀音寺、覺圓寺、西光寺、成菩提院、大吉寺、竹生島、美濃の正覺寺、南神宮寺、若門院、信濃の善願寺、善光寺、伊勢の玉泉寺、金剛證寺、西來寺、尾張の曇芥羅寺、常德寺、黄龍寺、萬松寺、三河の來光寺、歓成院、遠江の善福寺、廣樂寺、駿河の光長寺、本門寺、甲斐の本遠寺、萬福寺、武藏の本龍院、仙壽院、圓成院、永代寺、正念寺、吉祥寺、上總の本浄寺、下總の日本寺、下野の醫王院、出羽の西勝寺、萬榮寺、越後の常敬寺、陸奥の御西寺、仙岳院、筑紫寺。第(九〇)巻は西國の部にして大和の東大寺、龍松院、松元寺、吉野山、和泉の眞敬院、敬蓮寺、重樂院、西德院、攝津の圓光寺、久昌寺、四天王寺、眞龍寺、光智院、本山寺、清蓮寺、來迎寺、大念佛寺、紀伊の雲蓋院、聴持寺、養珠寺、蓮華院、高野山、播磨の寶藏寺、壇位山一山、法華山明王院、稱念寺、源德寺、美作の化生寺、備前の迎照院、丹波の福正寺、伯耆の太山寺、出雲の寶照院、長門の若門院、阿彌陀寺、阿波の觀音寺、讃岐の神惠院、金光院、豊前の英彦山、筑前の安樂寺、肥前の梅林寺、肥後の神宮寺、正歓寺、常在院、正立寺、明專寺、神護寺、本覺寺、薩摩の南泉院、對馬の萬松院が挙げられて居る。次に第(九一)巻には桓武天皇千年御忌のこと、及び文化二年の宸筆御八講の記。第(九二)巻には寶暦御灌頂之記。第(九三)巻には明和二年東照宮百五十回御參向之記。第(九四)巻には寛政十一年上皇六十御賀御所之記。第(九五)巻には文化十年の後櫻町院御中陰光明供之記。第(九六)巻には文化十二年の東照宮二百回御參向之記上巻を上下二巻に分ち。第(九七)巻には同記の中巻を入れて更らに四巻とし。第(九八)巻には同記の下巻を入れて、同じく四巻とする。第(九九)巻は同雑記にして、定帳、手文、進物、勤定のことに亘り、而してこれを上下二巻に分つを以て日光の記に合して十二巻となる。次に第(一〇〇)巻は文化十三年の准三宮宣下之記。第(一〇一)巻には聴宮御附第之記。第(一〇二)巻には同宮初度御參内御參院之記。第(一〇三)巻には同宮御紐直之記。第(一〇四)巻には同宮親王宣下之記。第(一〇五)巻には登實親王御入室得度之記上巻。第(一〇六)巻には同記の中巻。第(一〇七)巻には同記の下巻

を載く。第(一〇八)巻には同親王御住山之記の上巻。第(一〇九)巻には同記の下巻を入る。第(一一〇)巻には同親王傳法灌頂之記の上巻。第(一一一)巻には同記の中巻。第(一一二)巻には同記の下巻を載む。而して第(一一三)巻には入本道之記、附するに御門人交名を出す。第(一一四)巻には紫衣之記と紫衣御許容の人名年月日等を記し。第(一一五)巻は色衣以下御許容之記にして、三緒五條袈裟、小五條袈裟、赫紋白大五條袈裟、一色衣、委袋衣、木蘭色衣、社人等俗服、板搏之事。東代四方輿、轎輿、綱代鉤輿、金紋挾箱、幕挑灯、麒子口瓦、永補任、非門下合印に分つ。次に第(一一六)巻には諸侍等館入年月交名。第(一一七)巻には百姓町人館入年月交名。第(一一八)巻には延暦寺縁起集、これに日吉社を附載する。第(一一九)巻は山務拜殿雜集として、良快僧正之御記、惠永御受戒之記、拜堂用寶物目錄、尊純親王開要集、尊敬親王拜堂受戒之記を載め。第百二十巻より第百二十六巻までは天台座主傳舊記并に新補記にして、第(一二〇)巻は始より十七代喜慶僧都まで。第(一二一)巻は十八代慈惠大師より七十代公圓權僧正まで。第(一二二)巻は七十一代慈鳳和尚より七十八代慈賢僧正まで。第(一二三)巻は七十九代慈源大僧正より八十七代慶覺大僧正まで。第(一二四)巻は八十八代青蓮院道玄准后より百六十六代曼殊院覺恕准后まで。第(一二五)巻は百六十七代青蓮院中興尊朝親王より二百十二代青蓮院尊眞親王まで。第(一二六)巻は二百十三代輪王寺公延親王より二百二十四代梶井承眞親王に至る。尋で第(一二七)巻には延暦寺堂社僧房之記を載め。第(一二八)巻は延暦寺雜事之記として、天台鎮護口決等之記錄名目、正覺院歷代略、同法流之事、住侶末寺等永補任之事、延暦寺住侶並社司宮仕等官位勸例を集む。第(一二九)巻は延暦寺諸法會之雜記として、東塔の兩法華會、これに附して探題職辭退之記、西塔の勸學會、横川の臨時大法元三會、三塔巡會の別請堅義會、東塔の前唐院法華八講、東塔の長講會、横川の元三會、東塔の日吉大宮社禮拜講、三塔の日吉十禪師社新禮拜講、中絕の無動寺勸學講を載せて居る。次に第(一三〇)巻は日吉山王記の上巻。第(一三一)巻は同記の下巻並に行丸記一巻と四至內相摸雜記二巻を入る。第(一三二)巻には日吉敎米雜記。第(一三三)巻には雲上雜集三巻を載め、上巻は鳥羽帝以後起運錄の抄出、中巻は齋宮皇宮女院の御傳、下巻は諸進獻物品目にして大典侍旬宮內侍のことに及び。第百三十四五の兩巻は將軍家略系にして、第(一三四)巻は鎌倉組朝御傳より、京洛親王將軍傳、足利意氏將軍系、室町將軍傳、小田信長公系傳、豐臣秀吉公系傳に至り。第(一三五)巻は同傳の中下兩巻を入れ、中巻は德川家康公より同家基公まで、下巻は同家齊公以降を載せて居る。次に第(一三六)巻は攝政家略系傳の左巻として近衛殿と鷹司殿。第(一三七)巻は同右巻として九條殿、二條殿、一條殿を入る。而して第(一三八)巻には殿上諸家略系傳三巻ありて、上巻は三條家以下御子左流、中巻は日野、勸修寺、四條、水無瀨、藪、高倉、宮小路、下巻は源清平清安中下丹江。第(一三九)巻には親王家略系傳として、伏見殿、京極殿、有栖川殿、閑院殿の各略傳を揭げ。第百四十巻より第百四十五巻までは諸門跡傳と中絕門跡傳にして、第(一四〇)巻所載の第一には、東大寺門跡として仁和寺、大覺寺、勸修寺、三寶院、隨心院、安井蓮華光院。第(一四一)巻所載の第二には、延暦寺門跡として梶井圓融坊、青蓮院、妙法院。第(一四二)巻所載の第三には延暦寺門跡として毘沙門堂、曼殊院、鑑寶院金輪王寺。第(一四三)巻所載の第四には、圓城寺門跡として圓滿院、聖護院、實相院、照高院。第(一四四)巻所載の第五には、興福寺門跡として一乘院、大乘院、これに附して知恩院、並に比丘尼寺の曼華院、安祥寺、大聖寺、光照院、寶鏡寺、圓照寺、靈鑑寺、林丘寺、中宮寺、三時知恩寺、慈學院、法華寺、總持院、寶慈院、本光院、瑞龍寺を入れ、第(一四五)巻は兩巻に分ちて中絕門跡傳を揭ぐ。先づ上巻には東大寺として上乘院、安祥寺、禪林寺、東南院、延暦寺として十樂院、妙香院、本覺院、淨土寺、禪那院、實乘院、圓城寺として平等院、法住寺、常住院、如意寺、下巻には仁和寺院室として諸院家を納れた。尋で第百四十六と第百四十七の兩巻には武家雜集を編みて、第(一四六)巻所載の上巻は將軍家御由緒之事。第(一四七)巻所載の下巻には所司代、町奉行、これに大阪伏見奈良の町奉行を附載し、禁裏附と仙洞附のことに及び、附錄として武家傳奏衆、院傳奏衆、議奏衆、仙洞評定衆、東宮三卿衆、門室肝煎、同御世話掛、諸役人衆當式番物之事、女房衆高倶返物之事を揭ぐ。第(一四八)巻には僧中裝束集類聚を、僧綱職會、法林裝束、童形裝束、鉢抄、燈盞法王衣林制法條々、僧眼記、法林裝束雜事、近代裝束抄、法中時用裝束集、聖道衣料編、天台宗僧侶經歷選擧衣體次第に分ち。第(一四九)巻には御因事之記を載めて六巻に分ち、巻一は文政鶴林雜記上にして文政七年三月十三日より同月二十九日まで、巻二は同記の中にして同四月一日より同二十九日まで、巻三は同記の下にして同五月一日より六月二十九日まで、巻四は同後御因事之記にして、天保鶴林雜記の上を入れ天保三年九月四日より二十六日に至り、巻五は同記の中にして同月二十七日より十月二十九日に至り、巻六は同記の下にして十一月一日より十二月三十日に至る。終に第(一五〇)巻には門室年中行事、文化九年と文政七年に加筆された寶暦六年五月の奥向御定書、御中居定書、御役料定書、天保以後改革定書、御臺所以下三御門番所、其外の捉書を載せてある。

附錄の內容は第一より第三までは洁宮御傳三巻にして第(一)の上巻は天保十年より同十一年十二月まで。第(二)の中巻は天保十二年正月より同十三年六月まで。第(三)の下巻は天保十三年七月より同十四年六月まで。第(四)は喜久宮御傳の天保十四年七

月以降。第(五)巻(六)闕く。第(七)は永正當門中分別之記、諸禮座席式。第(八)は天保十年七月の法宮御相續別錄。第(九)は同十三年の同御色直深曾貴別錄上。第(一〇)は同別錄の下。第(一一)は同十四年五月の同別殿移徙之別錄。第(一二)は同年九月の喜久宮御相續別錄。第十三より第十五までは栗田口雜集と題し。第(一三)上巻には文祿三年八月の御門下給人方水帳、天正十七年十一月の矢野左京亮撿地高附、同年の栗田口岡崎村合打高附、慶長十六年十二月栗田口御藏納目錄、同十七年十月板倉伊賀守栗田口改帳、同年閏十月の同改帳、慶長十六年十二月の栗田口村高並に給人方目錄、年代不詳の御知行帳、寛永十七年三月の新御領御收納請取書、同十九年七月の御門跡御代官上納目錄、餘部村之事に關する鈴木三郎九郎書翰、御門領配當目錄及び其他、慶安四年十二月の御收納米請取書、小西傳九衛門所持古水帳、大谷治部卿方水帳、御門下給地現在目錄、同藏米給分現在目錄、御門跡領總勸定目錄。第(一四)の中巻は專ら御門跡舊領雜集として、寛文三年の門領勸定目錄、寶暦三年御藏米勸定目錄、常陸介益卿之私記、前下野守爲輝之私記、大谷給知行水帳寫、鳥居少路給知行水帳寫、同新家給知行水帳寫、隱岐給知行水帳寫、進藤給知行水帳寫、淺邊給知行水帳寫、御門下給知行目錄。第(一五)の下巻には寛永十六年二月の境內町名不審之事、寛永十九年の觸狀三通、寛文十一年の百姓訴狀、元祿三年八月の造作法度觸狀、元祿五年九月の寺社改產出書、享保三年の御門領村々吟味之覺、享保八年栗田口家作禮物授、寶暦十年の古町持畑讓狀、安永七年の白川橋修造之事、御門領總勸定目錄、天保五年の御門領人數改、同年の同高辻入會改書、同八年の同酒造高改書、弘化三年十二月の惣御成筒勸定目錄を載む。次で第(一六)には地志漫錄並に栗田史、天王社並に別當の事。第(一七)には寛政元年より天保十四年に至る境內諸寺院指圖等、並に定紋之事を附載する。第(一八)には天保十三年の廳務鳶純逼見之記、並に古證文。第十九より二十四までは境內民衆明細書にして之を六巻に分ち。第(一九)の一巻には谷川町、東分木町、今道町。第(二〇)の二巻には東町、中之町、夷町、西町、五軒町。第(二一)の三巻には大井手町、今小路町、分木町、西海子町、七軒町。第(二二)の四巻には南槐町、八軒町、土居內町、梅宮町、提町、古川町。第(二三)の五巻には北木元町、南木元町、唐戸鼻町、逸町、高畑町、稻荷町。第(二六)の六巻には柚木町、定法寺町、堀池町、石泉院町、東紺小路町を入る。第(二五)には南畑並に越石二所、東西田中、華頂島、天王畑。第(二六)には栗田山下畑年貢圓面證文、梅宮畑、下京畑之事、白川筋諸稱之事、安永弘化年間の栗田口建家夫役銀納之事、寛永十七年の柳尖之事。第(二七)には非常捉、桃灯調、檢約書申渡並に其他。第(二八)には定信院改革雜記、これに什物目錄を附載する。第(二九)には延享以後の鄕士之事。第三十より第三十四までは諸庄にして、之を五巻に分つ。第(三〇)の一巻には愛宕郡の岡崎村、鹿谷村、淨土寺村、田中村。第(三一)の二巻には葛野郡の壬生村、千本廻。第(三二)の三巻には乙訓郡の上植野村、葛野郡の中堂寺村、東九條村。第(三三)の四巻には愛宕郡の鞍馬山、同御本坊之事、同寺門前、野中村。第(三四)の五巻には大和國御領總勸見分之記、平靜郡の菅田村、廣瀨郡の廣瀨村、百濟村、內御領所の讃山を配して居る。第三十五より第三十九までは雜記五巻にして、第(三五)の一巻には御祠堂金銀貸附之事、同天保以來江戸貸附、同大阪貸附、同伏見貸附、月次十七日講、有年講。第(三六)の二巻には天明三年以後の西國中國盲僧支配之事、同雜記。第(三七)の三巻には吉水藏と板倉藏の御藏書目錄、一切經目錄、門乘記目錄、談山法海藏目錄、御重寶目錄、並に上野日光慈眼堂藏書目錄を附載する。第(三八)の四巻には總勸略同。第(三九)の五巻には御門跡御相承聖教同治次第、同御門室蔑殿之事、同管領機盛光法現行年紀並に同法用支度之記、同法再興之事由、聖本門跡以下の舊記一巻之寫、家光將軍御等天台密法之事、御門室代々得度勸例、同尊祐親王御得度之記、仁平二年以降傳法灌頂之記、御代々御得度勸例、尊祐親王御得度記、仁平以後傳法灌頂之記、正德四年の尊祐親王御灌頂之記、御灌頂御傳法系圖、仙洞龜山殿當麻井殿寢殿之圖、位記請取之事、護持僧參內之事、この外に牛車輦車參內之事、後七日御修法之事、座主宮七佛藥師法之事、日吉社司所司院中絕參之事、京洛路次之事、御懺法講勸例、諸寺院之事、鬼床之事、書寫上人之事、御印譜の各項を附載する。次に第四十より第四十三までは山門と題して四巻に分つ。第(四〇)の一巻には延暦十三天元三、永正十五年の中堂供奠記、弘安八應永三年の大講堂供奠、應永六年の相國寺塔供奠、元永元年の最勝寺供奠、保延五年の成勝寺供奠、長承元年の得長壽院供奠、承保四年の法勝寺供奠、法金剛院供奠、成勝寺供奠、保延三年の鳥羽新御堂供奠、東大寺供奠。第(四一)の二巻には傳教大師遺書類集、同撰集目錄、義眞和尙撰集目錄、慈覺大師撰集目錄、智證大師撰集目錄、慈惠大師撰集目錄、惠心僧都撰集目錄、次に鐘銘類聚として西塔の永和二年菅原長嗣、江州寶光寺の文保二年、得敬院の寛永六年菅原和長、雲母寺の元和九年無動寺の寛文五年惡怨親王、高雄神護寺の貞觀十七年菅原是善、石清水八幡宮、眞正極樂寺の寶暦九年菅原綱忠、吉祥院の道眞、大唐興善寺、同西明寺、大和矢田寺の寛元四年藤原光、筑前名島辨天、大隅安樂寺、近江園城寺、同關清水社の天正十四年、同三井高觀音の貞享元年、同大音明神、同多賀島の寛文三年、同雪野寺、和州藥師寺塔銅柱の各銘文を揭載する。第(四二)の三巻には勸修集にして曆應四年印海の山門法華淸淨院、文明十五年鎭若太夫の同元三大師寶前鐘鑄勸進、寶德四年の同山王勸進並緣起、大永二年の同二宮緣起、天正十一年の同日吉大宮造營緣起、天

正十一年の同聚眞子念佛堂、天正十二年の同山門再建條起、天正十年の同山門再興勸進帳、同戒壇再興條起、天文十二年と天正十二年の同惠心院造營勸進、天正十三年の同大講堂造立條起、天正十六年の同鉾碁院報恩會、結鄙と行安との山門領紛狀、慶長五年の同無動寺明王堂、寛永六年の同相輪檔、古摩堂萬人講、至德元年の筑川本堂上棟、天正十三年の同明王護摩堂、文明十五年の勢州正法寺塔婆基、同東照院再建、慶長十八年の同常明寺、慶長十六年の同惠日山觀音寺、文明十五年の江州酒波寺再造費、同年の同樂實寺塔婆供養、文明十五年の同聖非集福寺、三井寺請堂社修造勸進、文永七年の和州大藏寺弘法大師御影堂、文龜元年の同吉野郡天河求聞持堂、寶德二年の信州長石寺、長享二年の紀州高野山清淨心院塔婆、豐後六郷山千燈寺講堂、永享十二年の淡州泉涌院、永正七年の因州仙林寺三重塔婆、永正十四年の東山大谷知恩院再建勸進、明應元年の山城牛尾觀法寺記、天文五年の洛陽十念寺、天正三年の雲州鰐淵寺本堂、文祿五年の城州餘馬寺修造勸進、勢州書寫山、慶長十六年の惣地山常樂寺、洛敎學房勸學、寛永四年の城州岩倉山大雲寺記、慶長十六年の洛華堂、慶長の越前氣比宮、元和三年の洛浩乾神、寛永九年の城州紙園乘師堂、天正五年の同粟田口神師社、同青門神寶條起、同八大王子社條起、江州唐崎祖條起、天正二十年の同記、冷泉爲泰の粟田御別殿准后宮御庭記を載せてある。第(四三)の四卷には興福寺別當次第、東寺長者次第、園城寺長吏次第、熊野三山檢校次第、醍醐寺座主次第、西塔院主次第、橫川長吏次第、無動寺檢校次第、法華會探題次第、四天王寺別當次第並に塔供養及び同別當職之事、祇園社別當次第、平等院之事、同執印次第を收む。次に第(四四)は諸國帖類案と題して、武州東叡山之國、同三條山脊上寺之國を掲載してある。

⑨寫本　(京都府立圖書館)　(藤原猶雪)

華頂要略門主傳　❶(日)Kwa-chō-yō-ryaku-mon-shu-den.　❷華頂要略第四卷より第三一卷に至る二八卷を別行したもので、要略第四卷を門主傳第一、二、三の三卷に、同じく第五卷を第四、五、六、七、第六卷を第八、九、一〇、一一の各四卷に、第七卷を第一二、一三、一四、一五、一六の五卷に、第八卷を第一七卷に、第九卷を第一八卷に、第一〇卷を第一九、二〇、二一の三卷に、第一一卷を第二二卷に、第一二卷を第二三卷に、第一三卷を第二四卷に、第一四卷を第二五卷に、第一五卷を第二六卷の上下に、第一六卷を第二七卷の上に、第一七卷を同下に、第一八卷を第二八卷に、第一九卷より第二九卷までを第二九卷の一より一一までに、第三〇卷と第三一卷を第三〇卷の一と二に配し、總て三〇卷より成る　❸存、大日本佛敎全書第一二八　❹藤原爲業編(自第一卷至第二九卷之九)藤原爲純編(自第二九卷之一〇至第三〇卷之二)　❺享和三年(一八〇三)爲業最初の編纂成り、其の後擴修されて文化一一年(一八一四)に至る。文化一二年(一八一五)以降の爲純の編纂は、天保五年(一八三四)の記事に終る。❻青蓮院門主第一世行玄大僧正より以後、第三〇世入道尊實親王に至る間の、門主の傳紀並に附弟傳を中心として、青蓮院に關する事蹟を編纂せるもの。所收の門主並に附弟の人名は、華頂要略の第四卷より第三一卷に至る目次に詳かであるから、本項には重複をさけて省略する。　❼大正二年刊　(藤原猶雪)

華鳥集　❶(B)Kwa-chō-shū.　❷一卷　❸缺　❹淨信(天慶五—寛仁元 A.D. 942—1017)撰　❺(參考)　淨土依憑經論章疏目錄、淨土眞宗敎典志第一

華芳錄輝　❶(B)Kwa-hō-roku-ki.　❷一卷　❸存　❹國光編　❺大正二刊　❻(帝室、一二二・九)

過去因果經　❶(B)Kwa-kō-in-gwa-kyō.(支)Kwa-chō-yin-kwo-ching.　❷四卷　❸缺　❹東晉佛陀跋陀羅(一—元嘉六 A.D. 429)譯　❺別宋求那跋陀羅譯過去現在因果經と同本、第五譯、同本。　❻(參考)　開元錄第一五、貞元錄第二四

過去行植波羅蜜經　❶(B)Kwa-kō-gyō-dai-hō-ra-mitsu-kyō.(支)Kuo-chi-hsing-ta-po-po-lo-mi-ching.　❷一卷　❸失譯　❹悲華經の抄出　❺(參考)　出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

過去現在因果經　❶(B)Kwa-kō-gen-zai-in-gwa-kyō.(支)Kuo-chi-hsien-tsai-yin-kuo-ching.　過現因果經、因果經　❷四卷或五卷　❸存、大正三・六二〇 No. 189. 鳩摩羅什譯、紀元384頃、北魏太平真君5年(444)、南齊永明2年(484)、梁天監2年(503)、陳天嘉3年(562)、隋開皇20年(600)、唐貞觀22年(648)、天寶3年(744)、法琳(627—690)、明南宋紹興2年(1132)、明萬曆43年(1615)、明南宋紹興2年(1132)、Nj. 665　❹求那跋陀羅(太元一九—泰始四 A.D. 394—456)譯　❺劉宋元嘉二一—三〇(A.D. 444—453)　❻本經は、佛自身の說かれた形になつて居る佛傳である。何故に、佛傳が、現名を取るに至つたかの理由は、經の初後に能く記されて居る。經は、初に、佛が祇園精舍に在せる時、請比丘が佛の過去の因緣を說きつ聞きつせんとして、集會して論議せるに筆を起して、佛が是等の比丘に對して、その本生たる善慧仙人の求道より說き出して、第三者の地位に立つて、八相成道を述說し、最後に、過去に種ゑたる因は、無覺勝を經るも、終に勝滅せずして、能く現在の一切種智を成就するを得たるを述べてある。これ、過去現在因果の名稱の起つた理由であつて、現在の一念を從爲修行によつて、現在の一念を從爲に過すべからざるを敎へて居るのである。過去の因を知らんとせば、現在の果を見よ、未來の果を知らんとせば、現在の因を見よ」といふ「善惡因果經」の語句は、全くこの經より得たるものに外ならぬ。

本經は、四卷に分たれ、釋尊の前生たる善慧仙人の布髮受記に始まつて、大乘菩薩の化度に終り、行文流暢、繁簡宜しきに適し、佛傳中の優なるものであるが、單に卷を別つのみにて、內容を示すべき品名を無

示せぬから、今內容の上より、左の如く章節を分けて見る。

第一卷——善光佛出世・善慧仙人布髮受記・生兜率天・下生託胎・誕生・三十四瑞應・阿私陀仙占相・三時殿・母后生天・學請書籍

第二卷——發試武藝・灌頂太子・圓浮樹下靜觀・納妃・四門遊觀・出家・苦行林一宿・宮中悲惱

第三卷——王飾大臣追尋・頻王迎見・問道二仙・六年苦行・捨苦行・菩提樹下・降魔成道・免天勸請・向鹿野苑・二商主供養・優波御外道・目犍連王保護・初轉法輪

第四卷——耶舍出家・度三迦葉・頻王迎佛・竹園精舍・舍利弗・目犍連歸佛・大迦葉出家・結文

是等四卷の所說を、彌天の三分法に從つて分てば、善光佛出世・善慧仙人布髮受記・生兜率天・下生託胎は、釋尊の本生に屬するものなれば、佛傳そのものよりせば、畢竟序分に當るべく、最後の結文は、本生と佛傳とを綜合せるものなれば、流通分に當るべく、その中間の、誕生より次迦葉出家に至るまでは、實に佛傳そのものなれば、正宗分に當るといふべきである。佛傳そのものまりせば、この三分法を以て見るべきであるが、然し經の題名よりせば、初後にその意趣を知るべく、經は單に之を佛傳として見ず、釋尊の一身に表現せられたるものを、各自の生活規範とすべきを勸發したものである。

本經に於て、特に注意せらるべきものは蓋、(一)善慧本生中に大乘分子を織り込める事。(二)陰誠より降魔に至る間に於て釋迦の筆致ある事。(三)太子と阿羅邏仙人との問答に於て、佛敎對敎論の敎理上の根本相違を示し、太子と苦行仙人との問答に於て、又釋尊と優樓頻螺迦葉との問答に於て、佛敎對婆羅門敎の宗敎上の根本相違を示せる事。(四)頻毗婆羅王に對する說法に於て、佛敎の根本義を概說せる事であらう。是等の中に於て、第二は文藝の妙諦を發揮し、他の三は思想上に於て佛敎の特色を發揮して居る。

佛傳には、現存大藏經中、少くも十七種以上あるが、その中に於て、本經は純小乘的でなく、また純大乘的でなく、大小調和のものといふべく、中心を爲す佛傳が、全く小乘的なるに反して、追加の本生の中に於ては、六度・十地・一切法空の如き大乘分子を加へて居るのである。本經の中心を爲す部分の構想は、馬鳴菩薩造の「佛所行讚」に極めてよく一致する。即ち太子出家以後に於ける、車匿及び白馬犍陟を中心としての宮中の悲惱の如き、又、阿羅邏仙人の說ける數論の敎理の如き、又、降魔の下に於ける魔王三女の活動の如き、又、成道前に於ける負薪神の讚嘆の如き、又、成道後に於ける十二因緣・八正道の思惟の如き、又、頻王に對する說法の如き、いづれも「所行讚」の說相と、符節を合すが如くで、唯敎文と韻文との差があるに過ぎぬ。兩者の間には、必然の關係ある事を思はしむるが、本經の如き散文の佛傳が素材となつて、かの靈妙なる「所行讚」あらしめたものではなくて、本經の成立は、たしかに「所行讚」の後であつたと思ふ。それは「所行讚」が直に誕生より始むると異り、本經は、その前に本生を加へて居る事によつて知らるゝ。

さて又、追加の部分と思はれる初の部分の善慧本生は、恐らくは「佛本行經」の善思本生なるべく、またその菩薩として兜率天に上生せる聖善自は、「菩曜經」Lalitavistara には、まだ名がないが、「大莊嚴經」に來つて名があらはれて居る淨輪本生、「修行本起經」の無垢光本生に相當するものであらう。他には之あるを見ぬのである。又誕生時の三十四瑞應は、獨り「菩曜經」、「大莊嚴經」に於てのみ、三十二瑞應として載せられ、優樓頻螺迦葉濟度の方便として、三洲より三果を取り來れる事は、これまた「菩曜經」、「大莊嚴經」及び「中本起經」に見られるのみである。十七種の多き佛傳あるに關らず、聖善慧本生に於て、誕生三十四瑞に於て、三洲三果に於て、「菩曜經」、「大莊嚴經」に一致するのは、本經が「所行讚」の外に「菩曜經」との間に特殊の關係あるを語るものである。「所行讚」は、大小乘分のものであるが、「菩曜經」は純大乘の佛傳である。本經が、大小乘分の「所行讚」の結構を承けつゝ、之に純大乘佛傳たる「菩曜經」を加味するのは、本經が是等兩經を承けたもの、少くも兩經の間に立つ事を語るものであらうと思ふ。

本經は文章流暢、如何にも能く釋尊を傳へてあるので、評後他の佛傳に比して、頗る流傳した事は、其題名に倣つて「善惡因果經」といふ樣な僞經あらしめた事によつても知られるが、一層多く之を知らしめるのは、繪因果經といふ特殊の藝術の存在によつて判ぜられる。日本國寶全集」第三十六輯の中に、京都の上品蓮臺寺と宇治の報恩院とに、各々斷簡として保存せらるゝ二本までを揭載してある。之れが解說によれば、既に正倉院文書中に、經目を見る事によつて、天平時代に於て、早く既に存在した事を語る。兩本、共に黃麻紙の卷子本で上下の二欄に分ち、下欄には竪三寸六分の間に、界線を引いて、八字詰に經文を書寫し、上欄には竪三寸八分の中に、下の經文に應ずる事相を圖示して居る。共に字格は嚴正なる唐風の楷體で、天平寫經の代表的なものと認められる。繪は、彩色の輪郭による簡單な彩形に、丹朱・綠青・群青・雌黃・胡粉等を彩り、絕じて大まかな手法である。國中の樓閣の樣式、人物の胡服、樹石の描法等に、六朝風の餘影が存し、近來西域出土の繪經斷片に照合して、唐朝に存した一種の形式であつた事を知らしめる。類品に、益田孝氏藏のもの、東京美術學校のものがあるが、上下二欄の寸法の相違、字體の相違によつて、上の二本と區別せられ、よつて以て少くも二通り以上の經文があつた事を推せしめる。繪と經文と相待つて、何程か各時代の人の心を打つたものであらう。

❼(參考)　三寶紀第一〇、內典錄第四、譯經圖紀第三、開元錄第五、貞元錄第七　(常盤大定)

過去現在因果經　❶(B)Kwa-kō-

gen-zai-in-gwa-kyō. 國譯過去現在因果經 ❷四卷 ❸存、國譯大藏經經部第一一、國譯一切經本緣部第四 ❹常盤大定譯

過去現在因果經 (日) Kwa-ko-gen-zai-in-gwa-kyō. 現代意譯過去現在因果經 ❷一卷 ❸存、現代意譯根本佛教聖典叢書第一二 ❹宮城信雅譯

過去五十三佛名 ❶(日)Kwa-ko-go-jū-san-butsu-myō. (支)Kuo-ch'ü-wu-shih-san-fo-ming. 五十三佛名經 ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❻觀藥王藥上經の抄出 ❼〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

過去香蓮華佛世界經 ❶(日)Kwa-ko-kō-ren-ge-butsu-se-kai-kyō. (支)Kuo-ch'ü-hsiang-lien-hua-fo-shih-chieh-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❻悲華經の抄出 ❼〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第二、歷代三寶紀第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、內典錄第一、開元錄第一六、貞元錄第二六

過去諸佛說戒經 ❶(日)Kwa-ko-sho-butsu-sek-kai-kyō. 現代意譯過去諸佛說戒經 ❸存、現代意譯根本佛教聖典叢書第五 ❹泉芳璟譯

過去諸佛名 ❶(日) Kwa-ko-sho-butsu-myō. (支) Kuo-ch'ü-chu-fo-ming. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼〔參考〕 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一四、貞元錄第八、第二四

過去莊嚴劫千佛名經 ❶(日)Kwa-ko-shō-gon-kō-sen-butsu-myō-kyō. (支) Kuo-ch'ü-chuang-yen-chieh-ch'ien-fo-ming-ching. 集諸佛大功德山經、莊嚴劫千佛名經 ❷一卷 ❸存、大正一四・三六五 No. 446、縮黃三、卍一一・六、南404長、明北401長、清401長、麗391己、指363己、法395己、明南395長、No. 405 ❺歷代(A. D. 502—557)譯

❻佛名經類の一。明藏には本經に三劫三千佛緣起、宋畺良耶舍譯なる序項を添加し、賢劫千佛名經並に星宿劫千佛名經を併せて三世に配し、三千の佛を讚仰するものとせり。この序說は觀藥王藥上二菩薩によりて、普光佛を始として一切法常滿王佛に終る五十三佛を出して、佛名を稱することにより て罪障の消滅を說く。經の形式及び思想より見れば、斯くして三世を合一して三世三千佛と解するを最も當を得たるものとすべきが如し。況んや本經の首部に「聞是三世三劫諸佛世尊名號」と說くに於てをや。經に現はれたる思想は懺悔を勸むると共に任意に佛名を羅列せる如き觀あれども、一且名詮自性の教條に想到せば佛名それ自體に個々の理想を教示開陳せるを首肯すべし。因と經に說くが如く、本經を讀頌する者は阿彌陀佛の如く、無量の壽命を得と示し、彌陀一佛を人中尊佛より金剛王佛に及ぶ千佛に開陳して讀頌せるもの故、賢劫千佛名經以外の二經は佛の說話の形式を執らず、本經は經に曰くと云ひ、未來星宿劫千佛名經は失れ善を修すれば福至ると說く如き、又明藏本が他の諸藏本と大異ある如き、これ等は本經が儀禮用に各處に讀頌せられたるを見るべきである。 (和田徹城)

過去世佛分衛經 ❶(日)Kwa-ko-se-butsu-bun-e-kyō. (支) Kuo-ch'ü-shih-fo-fen-wei-ching. 過去佛分衛經、分衛經 ❷一卷 ❸存、大正三・四五二 No. 180、縮宙六、卍一二・五、北523行、南596行、元530行、明南525賢、清465景、麗524景、天531行、No. 469 ❹竺法護譯 ❺西晉太始二—建興元(A. D. 266—313)

❻過去世にある一人の母が佛の乞食分衞せる端正の姿に歸依し、その兒を出家せしめた時、兒の手を洗つた水瓶の口より九龍出で、殘水を兒の頭に灑げば華蓋と成り、佛微笑して五色の光出でしを見、その母は怪みて佛に問へば佛はこれより後十四劫を經てこの兒は佛となるべしと記を授けた。其の母は七百世の間轉輪王の母となり、後に不退轉に至るであらう。この小兒とは我身であつたとこれだけの說話で經典は終を告げてゐる。佛の本生を物語る一經である。 (泉芳璟)

過去千佛名 ❶(日) Kwa-ko-sen-butsu-myō. (支)Kuo-ch'ü-ch'ien-fo-ming. ❷一卷 ❹失譯 ❼〔參考〕 法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一一

過去彈琴人經 ❶(日)Kwa-ko-dan-kin-nin-kyō. (支)Kuo-ch'ü-t'an-ch'in-jên-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❻雜阿含經第四十八卷の抄出 ❼〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

過去帳 ❶(日)Kwa-ko-chō. 高井田長榮寺過去帳 ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集第一七 ❹慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)撰

❻河內國高井田長榮寺所藏の過去帳である。長榮寺は慈雲尊者が延享元年二十七歲の時住職して正法律を唱道せられた寺である。此の過去帳は尊者の本師たる攝州田邊法樂寺の忍綱貞紀尊者、唐朝終南山の道宣律師、宋朝の元照律師及び尊者が同寺在住中に物故せる法弟と緣故者との法名を記して朝夕廻向せられたものである。從つて尊者の寂後後人が追加せる部分もある。全集には△印を附して後補を區別してゐる。
❾慈雲尊者眞筆(長榮寺藏) (小田慈舟)

過去無邊光淨佛土經 ❶(日)Kwa-ko-mu-hen-kō-jō-butsu-do-kyō. (支) Kuo-ch'ü-wu-pien-kuang-ching-fo-t'u-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❻大集經第十一卷の抄出 ❼〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

過去鳴鼓人經 ❶(日)Kwa-ko-mei-ku-nin-kyō. (支)Kuo-ch'ü-ming-ku-jên-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❻雜阿含經第四十七卷の抄出 ❼〔參考〕 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

過魔法界經 ❶(日)Kwa-ma-hok-kai-kyō. (支) Kuo-mo-fa-chieh-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❻大集經第十六卷虛空藏品上の抄出 ❼〔參考〕 出三藏記第四、

法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第一二、開元錄第一六、貞元錄第二六

過命神經 ❶(日)Kwa-myō-jin-kyō. (支)Kuo-ming-shen-ching. ❷一卷 ❼〔參考〕 法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四

嘉會宗義鈔 ❶(日) Ka-e-shū-gi-shō. ❷二卷 ❸存 ❹日澄(—永正七 A. D. 1510)述 ❾元祿四刊(正大、一八四・三七)(立大、A〇四・四〇四) 大正一二寫(立大、D〇・五七)

嘉會壇 ❶(日)Ka-e-dan. ❷一帖 ❸缺 ❹圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—891、一說寬平四、年七八寂)撰 ❼〔參考〕 本朝台祖撰述密部書目

嘉會壇灌頂次第 ❶(日)Ka-e-dan-kwan-jō-shi-dai. ❷六卷 ❸缺 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—)述 ❼〔參考〕 諸宗章疏錄第二、本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄

嘉會壇念誦次第 ❶(日)Ka-e-dan-nen-ju-shi-dai. 嘉會壇念誦法 ❷三卷 ❸存 ❹玄靜(—延喜四 A. D. 904—)撰 ❼〔參考〕 本朝台祖撰述密部書目

嘉會壇念誦法 ❶(日) Ka-e-dan-nen-ju-hō. 嘉會壇念誦次第 ❷三卷 ❸存 ❹玄靜(—延喜四 A. D. 904—)撰 ❽享保二〇寫 ❾(谷大、餘大・一八〇五)(京大、日大宋・三九五)

嘉永御調理顚末 ❶(日)Ka-ei-go-chō-ri-ten-matsu. ❷一卷 ❸存、南越是海全集卷上

❻此書は是海師佐々木徵周が大派本願寺より異義者として調理せられたる顚末を自ら記したるもの。是海は文政元年越前の農家に生れ、八歲にして僧となる。性頗悟好んで宗典を學び、後に龍山の說に歸して異解を主張せり。嘉永三年冬、國元優講圓藏寺濟忍と勸め方相違につき三個條筋違ひを書き上げ福井別院へ裁判の儀を願ひ出でたるを發端とし、同五年の冬國內より訴ふるものあり、本山は使僧を別院に派し、濟忍及び察司の順忍、俊了、廣海、神興、界雄等と聽取せしめた。彼は益々他を排擊し自說を主張せんが爲に、其翌六年自ら進んで本山に教論を願出した。斯くて時の講師本法院、嗣講一蓮院等による調理が開かれたるも、彼は之に服せず、十七個條の質問書を呈出し、此間に鷹司家の儒臣三國大學といへるもの是海に歸依し、本山に質疑書を出すあり、甚だ紛雜を極めたることであつたが、本書は是海自らの記錄であつて、嘉永五年の冬より安政元年の春に及ぶ長期に亙れる調理の顚末であるが、以て彼の主張內容を知るに足る。 (大須賀秀道)

嘉興藏目錄 ❶(日)Ka-kō-zō-moku-roku. (支)Chia-hsing-ts'ang-mu-lu. ❷一卷 ❸存 ❽民國九刊 ❾(正大、一〇〇・三四)(谷大、餘大・三八〇七)(龍大、二〇一一・三)

嘉祥寺安樂行院繪圖 ❶(日)Ka-jō-ji-an-raku-gyō-in-e-zu. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(帝室、四一九・一四)

嘉泰普燈錄 ❶(日)Ka-tai-fu-tō-roku. (支)Chia-t'ai-p'u-têng-lu. ❷三十卷 ❸存、卍續二乙・一〇・一—二 ❹雷庵正受述 ❺南宋嘉泰元(A. D. 1202)

❻平江府報恩光孝禪寺の雷庵正受(字虛中)禪師が、佛行道昌、佛海慧遠兩禪師の慫慂により景德傳燈錄、廣燈錄、續燈錄の僧傳に繼ぎ遺逸せる宗師、帝王、公卿、師尼、道俗等の機緣語要を集め、十七年を費し、南宋寧宗嘉泰元年(A. D. 1202)本書三十卷總目三卷を大成したものである。本書の書名も亦これより出でゝ居る。

卷一より卷二十一までが示衆機緣の語要で、南嶽下十七世、青原下十六世に及び。卷二十二、三に聖君賢臣。卷二十四に應化聖賢、法嗣未詳者。卷二十五に諸方廣語。卷二十六に拈古。卷二十七、八に頌古。卷二十九に偈贊。卷三十に雜著である。卷首に嘉定四年元日弟子黃汝霖の撰に成る雷庵受禪師行業並に正受より寧宗帝への上進書、卷末に嘉泰五年陸游の跋。鎌倉末期の宋本覆刻本には、正受の上進書と共に皇帝書があり「此板見在淨慈寺長生庫印行」の陰文木記がある。天和二年本には梅峰笠信和尙が梓行する旨の跋が附してある。何れも總目錄三卷を卷頭に收む。 (大久保堅瑞)

嘉泰普燈錄總目錄 ❶(日)Ka-tai-fu-tō-roku-sō-moku-roku. (支)Chia-t'ai-p'u-têng-lu-tsung-mu-lu. ❷三卷 ❸存、卍續二乙・一〇・一 ❹雷庵正受撰 ❺南宋嘉泰元(A. D. 1202)

❻宋の雷庵正受の編に成る嘉泰普燈錄の總目錄三卷は、總目卷上に普燈錄の第十卷までを收めて居る。卽ち青原第十三世たる雲門七世及び洞山九世。南嶽第十四世たる臨濟十世、黃龍三世、楊岐二世である。總目卷中は、普燈錄の第十一卷より第二十卷に及び、青原十五世たる雲門九世、洞山十一世。南嶽第十六世たる臨濟十二世、黃龍五世、楊岐五世を收め。總目卷下は、普燈錄卷二十一より卷三十に及び、卷二十一に南嶽十七世たる臨濟十二世、黃龍六世を收めて居る。以上二十一卷が示衆機緣の語要を收め、卷二十二以下第三十卷までは普燈錄に記せし如きものである。 (大久保堅瑞)

嘉曆記 ❶(日)Ka-reki-ki. ❷一軸 ❸存 ❽嘉曆元寫 ❾(金剛三昧院)

かな說法 ❶(日)Ka-na-sep-pō. ❷一卷 ❸存 ❹紫信編 ❽安永六刊 ❾(龍大、二六七九・一〇)

𛀙そ抄 ❶(日)[illegible] ❷七卷 ❸缺 ❹信證(應德三—康治元 A. D. 1086—1142)述 ❼〔參考〕 本朝台祖撰述密部書目

牙旃虛偈決 ❶(日)Ga-ki-ko-gi-ketsu. ❷二卷 ❸存 ❹守一撰 ❼〔參考〕 大日本佛教全書續刊豫定書目

瓦官寺維摩碑 ❶(日) Gwa-kwan-ji-yui-ma-hi. (支)Wa-kuan-ssŭ-wei-mo-pei. ❷一卷 ❸缺 ❼〔參考〕 傳教大師將來越州錄

瓦礫集 ❶(日)Gwa-reki-shū. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大、宗大・一二四二)

我觀縱橫論 ❶(日)Ga-kwan-jū-ō-ron. ❷一卷 ❸存 ❹梅花啓正著 ❺大

正八刊 ⑩東京三松堂

我觀眞宗 ❶(B)Ga-kwan-shin-shū. ❷一卷 ❸存 ❹村上專精(喜永四—昭和四 A. D. 1864—1929)著 ❺昭和四刊 ⑩東京金港堂

我觀密教發達誌 ❶(B)Ga-kwan-mik-kyō-hat-tatsu-shi. ❷一卷 ❸存 ❹雄明雷弄著 ❺大村西崖著密教發達誌の批評。(一)自。敎興・至・隋。(二)初唐。(三)盛唐。(四)中唐。(五)中唐承・前以至・晚唐。 ❻大正一四刊 ⑩東京丙午出版社

我昔遇薩埵偈 ❶(B)Ga-shaku-gu-zat-tsu. ❷一卷 ❸存、弘法大師全集第一四 ❹弘法大師空海の作と稱する偈頌で、我昔遇薩埵、親墨傳印明、發ニ無比誓願、陸ニ遠地異域、衆夜怒ニ萬民、住ニ菩賢悲願、內身證ニ三昧、持ニ無氏下生、と云ふ二頌八句の頌文である。一說には雲居寺鹿西上人所持の弘法大師筆金剛般若經の奥に書いてあつたと云ひ、一說には醍醐天皇が夢告によつて弘法大師の廟窟に法服を贈賜し給ひし時、大師が定中から動文に答へられた偈文だと云つてゐる。弘法大師全集は爲信未快部にこれを收めてゐるが恐らく後人の僞作であらう。尤もかなり古くから大師作と稱せられてゐて、觀瑜の御遺告釋疑抄上(弘長二年 A. D. 1262作)に此偈文を引證し、爲信宗に用ひてゐる眞生會法則にも此偈文を用ひてゐる。 (小田慈舟)

我身光 ❶(B)Ga-shin-kō. ❷一卷 ❸存 ❹(正大、一〇九・一九七)

我慢抄 ❶(B)Ga-man-shō. ❷一卷 ❸存 ❹呆實(德治元—康安二 A. D. 1306—1362)記 ❺延文三(A. D. 1358) ❻德治三年二月、益信に對して本覺大師の訓誡と大師正とを謁ふ時、叡山僧侶嗜酒坊害の事あり。呆實之を慨し、叡山僧徒の誡を戒したるが本書。 (一)後宇多院於ニ東寺ニ御灌頂。(二)圓成寺僧正大師號。(三)勝觀圓成兩流對揭無ニ問。(四)以ニ大師號ニ傳敎孫弟ニ無ニ問。(五)以ニ大師號ニ傳敎弟子ニ無ニ問。(六)傳敎弘法兩大師法流統末。(七)慈覺大師所傳同爲ニ傳流ニ。(八)稱ニ大師不ニ傳ニ他說ニ無ニ問。(九)七佛藥師法相傳不ニ分明ニ。(一〇)鑑盛光法事ニ正流相承ニ。(一一)弘法傳敎師資陳謝無ニ問ニ。(一二)稱ニ東寺起請ニ爲ニ不實ニ。(一三)以ニ仁和寺ニ稱ニ山門末寺ニ無ニ問ニ。(一四)稱ニ於ニ東寺ニ不ニ可ニ發ニ三人大師ニ其爲ニ御案ニ。 ❷(參考) 諸宗章疏錄第三、本朝台祖撰述書部書目 ❺永應元刊 ❻(京尊〈哲・け・四・右・八〉(龍大、研傳)〈谷大、餘大・一〇八五〉京大・二六カ・二〇〈高大・寄・一・五五〉1657—1729)撰 ❼勝覺(天喜五—大治四 A. D. 1057—1129)撰 ❽義範、範俊、定賢三師所傳の大事口訣を記す。三師の各一書をとつて我友之鈔と名づく。

伽山集又鈔 ❶(B)Ga-san-shō-yō-kō. (支)Chi'ieh-shan-chi-yu-kao. ❷一卷 ❸存 ❹朝鮮祐敎著 ❺(參考) 朝鮮佛敎總書刊行豫定書目

伽耶山頂經 ❶(B)Ga-yā-san-chō-kyō. (支)Chia-yeh-shan-ting-ching. (梵)Gayāśirṣa-sūtra(藏)Lhaga-pa ri-yi shal-bya-ba theg-pa chen-poi mdo. ❷一卷 ❸存、大正一四・四八三No. 465、續宗二、卍一〇・六、北324號、南23ま號、元238號、明北235男、洪235男、麗233鳥、天240號、相203鳥、法159鳥、至531必、明南235男、Ni 239 ❹菩提流支譯 ❺元魏永平元—天平二(A. D. 508—535) ❻短少の經。大乘敎義に立脚し、散文にて書かる。世尊は伽耶(Gayā)城伽耶山頂にて諸菩薩の中にて、阿耨多羅三藐三菩提(Anuttaraṃyaksaṃbodhi)が身を以て得られたか、心を以て得られたかを思惟し、文殊菩薩(Mañjuśrī)の問によつて菩提相發菩提心を說明し、文殊は月淨光德天子の問により菩薩は大悲を以て本と爲し、大悲は直心を、直心は一切衆生平等心を、一切衆生平等心は無異離異行を、又其は深淨心を、深淨心は阿耨多羅三藐三菩提心を、其は六波羅蜜を、六波羅蜜は方便慧を、方便慧は不放逸を、不放逸は三善行を、三善行は十善業道を、十善業道は持戒を、持戒は正憶念を、正憶念は正觀を、正觀は堅念不忘を以て本と爲すと述べる。天子は更に文殊に四種心あり、能く因を成就し、果を成就するとし、之を初發心・行發心・不退發心・一生補處發心とし、夫々を說明する。次に菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る略道即ち方便道と慧道、助道と斷道、有碍道と無碍道、有漏道と無漏道、智道と斷道とを述べ、智道は初地乃至七地、斷道は八地乃至十地であるとする。更に文殊菩薩は勇修行智菩薩の問によつて不相應相應を說明し、十種智・十種發・十種行・十一種無盡觀・十種對治法・十種寂靜地・幾種の二種知實修行を擧げ、之によつて遂かに阿耨多羅三藐三菩提を得ると述べる。

明かに大乘の立場から菩提を說明する經典である。

❼(參考) 三寶紀第九、內典錄第四、譯經圖紀第四、開元錄第六、貞元錄第九 (平等通昭)

伽耶婆經 ❶(B)Ga-yā-bā-kyō. (支)Chia-yeh-po-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹齊代江泌盧女尼子撰 ❺辰傳經 ❻(參考) 出三藏記第五、法經錄第二、仁壽錄第四、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

伽藍開基記 ❶(B)Gi-ran-kai-ki-ki. ❷十卷 ❸存 ❹惠玉道璨(—貞享頃 A. D. 1684—1687—)撰 ❺元祿五刊 ❻(龍大、二九〇四・二六)(谷大、餘大・二〇二三)

伽藍記 ❶(B)Ga-ran-ki. (支)Chieh-lan-chi. 洛陽伽藍記 ❷五卷 ❸存、大正五一・九九九 No. 2092 ❹楊衒之撰 ❺元魏武定五(A. D. 547) ❻刊本(京大、龍・二四カ・九)

伽藍經 ❶(B)Ga-ran-kyō. (支)Chieh-lan-ching. (E)A. III. 65 Kesaputti-ya. ❷存、中阿含經第三(大正一No. 26, 15)

伽藍相續辨 ❶(B)Ga-ran-sō-zoku-ben. ❷一卷 ❸存 ❹萬仞道坦(—享保頃 A. D. 1716—1735—)述 ❷(參考) 禪籍目錄

臥雲稿 ❶(B)Ga-un-kō. ❷一卷 ❸存 ❹瑞溪周鳳(明德二—文明五 A. D. 1391—1473)撰 ❷(參考) 禪籍目錄

臥雲集 ❶(B)Ga-un-shū. ❷六卷 ❸瑞溪周鳳(明德二—文明五 A. D. 1391—1473)撰 ❷(參考) 扶桑禪林書目

臥雲日件錄 ❶(B)Ga-un-nit-ki-roku. ❷缺 ❹瑞溪周鳳(明德二—文明五 A. D. 1391—1473)記 ❺相國寺より鹿苑寺(金閣寺)に三度遷住し第十一代の天下の僧錄司となり足利義敎、義政に崇敬せられた瑞溪周鳳禪師の文安三年四月三日(A. D. 1446)より八十二歲示寂の六日前である文明五年五月三日(A. D. 1473)に至る二十八年間の記錄である。

自序に「文安三年三月晦。予遇ニ崇寧・移ニ壽星軒遇國ニ。無ニ事。記ニ日用事ニ。名曰ニ日件錄ニ。蓋取ニ諸永明壽禪師傳ニ。所ニ謂錄ニ其行事ニ日百件也。」と記して居る。その內容は義政歸後の幕府と五山との情勢、特に五山住僧間の消息を窺ふに足る好資料に滿ちたものであるが、近藤瓶城が續史籍集覽に於て「臥雲日件已逸全寫其拔萃亦所看猶也以一本校寫魯魚不少是由久時以寫本傳之」と述べて居る如く、佚逸して傳らず、唯だ僅に懷高妙安和尙の拔萃した臥雲日件錄拔尤二卷のみが現存して居る事に依つて其の原說を窺ふのみである。

臥雲日件錄拔尤 ❶(B)Ga-un-nit-ken-roku-bats-yū. ❷二卷 ❸存、續史籍集覽第七、八 ❹瑞溪周鳳(明德二—文明五 A. D. 1391—1473)記、懷高妙安(文明一二—永祿一〇 A. D. 1459—1567)拔萃 ❺永祿五(A. D. 1562) ❻相國、南禪を經て鹿苑に遷住し第三十一代の僧錄司となつた懷高妙安和尙が、瑞溪周鳳禪師の二十八年間に渉る七十四卷の臥雲日件錄を拔抄して二卷としたもので、原本は佚逸せるため本書に據つて其の全貌を窺知するのみである。續史籍集覽所收の內題の下に「北禪和尙自筆所也。永祿五年壬戌。光源惟高安和尙拔書焉。蓋至ニ二月廿一日ニ終。時十三歲。」と記して居る如く妙安示寂の五年前たる永祿五年(A. D. 1562)に成つたものである。其の拔抄の內容は、日件錄第一冊の文安三年四月三日より第七十四冊の文明五年五月三日に至るもので、五月八日に臥雲西軒に於て周鳳の示寂せる旨を補記して居る。 (大久保堅璋)

臥雲夢語集 ❶(B)Ga-un-mu-go-shū. ❷一卷 ❸存 ❹瑞溪周鳳(明德二—文明五 A. D. 1391—1473)撰 ❷(參考) 禪籍目錄

臥雲老人知空傳 ❶(B)Ga-un-rō-jin-chi-kū-den. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

臥時觀念作法 ❶(B)Ga-ji-kwan-nen-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❹足利時代寫 ❺(寶龜院)

臥龍宇水禪師語錄附行狀 ❶(B)Ga-ryū-u-sui-zen-ji-gyō-roku-fubetsu-gyō-jō. (支)Wo-lung-yu-shui-chan-shih-yu-lu ju hsing-chuang. ❷一卷 ❸存 ❹明代圓悟語、觀謙等編 ❺刊本(駒大) **臥龍吟** ❶(B)Ga-ryū-gin. ❷一卷 ❸存 ❹中立一鴻撰 ❷(參考) 日本禪林撰述書目

峨山逸話 ❶(B)Ga-san-itsu-wa. ❷一卷 ❸存 ❹深山一郎編 ❺明治三四刊 ❻(駒大〈京大、一・二一カ・一〉)

峨山和尙行實 ❶(B)Ga-san-ō-shō-gyō-jitsu. 峨山和尙紹碩行實 ❷一卷 ❸存 ❹慧明記 ❷(參考) 禪籍目錄

峨山和尙行狀 ❶(B)Ga-san-ō-shō-gyō-jō. ❷一卷 ❸存、續群書類從第九

峨山和尙語錄 ❶(B)Ga-san-ō-shō-go-roku. 息耕語錄 ❷一卷 ❸存 ❹峨山息耕(寛永五—明治三三 A. D. 1628—1900)謹橋本昌順編 ❷(參考) 禪籍目錄

峨山和尙山雲海月 ❶(B)Ga-san-ō-shō-san-un-kai-getsu. ❷一卷 ❸存 ❹峨山紹碩(建治元—貞治四 A. D. 1275—1365)述 ❷(參考) 禪籍目錄

峨山假名法語 ❶(B)Ga-san-kana-hō-go. ❷一卷 ❸存、禪學大系組錄部第六、禪門法語集卷中

峨山月潭澈禪師和韻 ❶(B)Ga-san-get-tan-tō-zen-ji-wa-in. ❷一卷 ❸存、慧日永明壽禪師山居詩之內 ❹寫本(京大、藏・二四ヱ・二)

峨山稿 ❶(B)Ga-san-kō. ❷二卷 ❸存 ❹月潭道澄(—元祿六 A. D. 1693—)著 ❺元祿一二刊(駒大〈帝國、一九一・六六〉)元祿一二刊(京大・日大未・五〇八)

峨山語黑印 ❶(B)Ga-san-ki-ki-ku-in. ❷二卷 ❸存 ❹弘道(—寶曆頃 A. D. 1751—1763—)撰 ❺寶曆一〇刊(正大、一一八八・九四)宮本(龍大・二六一九・一〇)

峨山語式 ❶(B)Ga-san-ki-shiki. ❷一卷 ❸存 ❷(參考) 禪籍目錄

峨山禪師行實 ❶(B)Ga-san-zen-ji-gyō-jitsu. ❷一卷 ❸存 ❹伊藤道海編 ❺大正九刊 ❻(駒大)

峨山禪師言行錄 ❶(B)Ga-san-zen-ji-gen-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹白隱慧鶴山編 ❺明治四一刊 ❻(駒大〈京大、一・二一カ・九〉)

峨山中興年代記 ❶(B)Ga-san-chū-kō-nen-dai-ki. ❷一卷 ❸存 ❺大正一三寫 ❻(密宗、四二三・二〇)

峨眉山月圓說 ❶(B)Ga-bi-san-getsu-en-setsu. ❷一卷 ❸存 ❹大典顯常(寛永一二—享保元 A. D. 1635—1716)述 ❷(參考) 禪籍目錄

峨眉集 ❶(B)Ga-bi-shū. ❷二十卷 ❸存 ❹日傑(元祿一六—寛保三 A. D. 1703—1743)撰 ❺寛保二(A. D. 1742) ❻文化一一刊(谷大・餘大・二二五二〈立大・A〇四・六八—七〇〉宮本〈立大・A〇四・七一、A〇四・三一八〉(智・て・四・右・七)

峨眉集 ❶(B)Ga-bi-shū. 校訂峨眉

集 ❷二卷 ❸存 ❹日蓮宗全書出版會編 ❺明治四四刊 ❾(立大、B〇九・一〇)(龍大、研佛)

峨眉集遺篇 ❶(日)Ga-bi-shū-i-hen. ❷一卷 ❸存 ❹日深(元祿一六—寛保三 A. D. 1703—1743)撰 ❺大正八寫 ❾(立大、D〇・一一・一二)

畫贊搖鯖船 ❶(日)Gwa-san-yō-ro-sen. ❷一卷 ❸存 ❹白隱慧鶴(貞享二—明和五 A. D. 1685—1768)撰 ❼(參考) 禪籍目錄

畫圖解說佛教美術講話 ❶(日)Gwa-zu-kai-setsu-buk-kyō-bi-jutsu-kō-wa. 佛教美術講話 ❷一卷 ❸存 ❹小野玄妙著 ❺昭和二刊 ❿東京甲子社書房

畫圖讚文 ❶(日)Gwa-zu-san-mon. ❷一帖 ❸存 ❾玻璃版(谷大、別・五)

畫圖略要鈔 ❶(日)Gwa-zu-ryaku-yō-shō. ❷一卷 ❸存 ❹西吟(慶長一〇—寛文三 A. D. 1605—1663)述 ❻法華普門品の講義 ❾寫本(龍大、別置)

畫像須知 ❶Gwa-zō-shu-chi. ❷一卷 ❸存 ❹中西誠應記 ❺弘化五刊 ❾(正大、一〇五・一四)(龍大、研史)(哲、む・八・左・三七)

誐那婆底祕要 ❶(日)Ga-na-ba-tei-hi-yō. (支)O-na-p'o-ti-pi-yao. 毘那夜迦誐那鉢底瑜伽悉地品祕要、誐那鉢底瑜伽祕要、含光儀軌、含光記 ❷一卷 ❸存、大正二一・三二一 No. 1273、縮餘四、卍續二・九・四 ❹唐含光(—天寶六 A. D. 747—)記 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❺觀應二寫 ❾(寶壽院)

餓鬼經 ❶(日)Ga-ki-kyō. (支)O-kuei-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

餓鬼陀羅尼修要 ❶(日)Ga-ki-da-ra-ni-shu-yō. ❷一卷 ❸存 ❾(哲、あ・一・左・三)

餓鬼報應經 ❶(日)Ga-ki-hō-ō-kyō. (支)O-kuei-pao-ying-ching. ❷一卷 ❸存、大正一七・五六〇 No. 746、縮宿六、卍一四・三、北768言、南780言、元774言、明北673璧、清673璧、麗769思、天769言、指730思、法757思、至1004職、明南649鼓、Nj. 677 ❺東晉代(A. D. 317—420)譯 ❻極めて短少の經。尊者大目犍連(Mahā-maudgalyāyana)は佛が耆闍崛山(Gṛdhra-kūṭa)にある折恒水邊を遊行して、多くの餓鬼(Preta)に會ひ、受罪の因緣を問はれた。諸鬼と目連との一問一答は次の如くである。一鬼が問うて頭痛に苦しむのは目連は杖にて衆生の頭を打つた爲花報果を受け地獄に在るとし。一鬼の全身腐爛するは、豬羊を爍るを喜ぶ爲。一鬼食して飽くるを得ないのは衆生に食せしめ飽かしめなかつた故。一鬼頭痛に苦しむのは道德を散せず、罵辱した故。一鬼が男女を生み端正なるも早死なのは人の折兒を見て殺生をし肉を噉ふを喜んだ故、一鬼、一夫あり、夫が多婦を畜へるは、人を爲りし時、夫主を欺はず、邪淫無礙であつた故。頭痛し男根腐爛するのは塔廟清淨之處にて婬を行つた故。此身膿盜不淨なのは有德を尊ばず、善人を輕謗し、沙土にて沙門を擲つた故。一斛を嘗にせず、足らないのは本比丘と作り、僧の爲物を求めて自ら食した爲。腳膸項瘦なのは、人、畜生に重きを負はした故。常に熱湯を患ふるは、漁獵を求め魚を沙土に投げ、害死せしめた故。狂癡無智なのは人に酒を施した爲。生む所の子反つて我を噉ふのは、人と爲つた折孝養を修せなかつた爲。食して常に吐くのは食を乘むる人に諷罵して與へた爲。一生貧財乏しからず、しかも弊衣に樂着するのは、布施を好むも施して後悔いた故。常に悲所に倚り、無常處に宿るは、客來り安穩ならず、諷罵した故。非男非女なのは慈心なく犍六畜を好んだ故。覺して行く能はないのは、無道を行ふを好み、人獸を拘擊し行かしめなかつた故。一身熱湯を患ひ、恒河の清流を見、入浴し熱害を除かんとして入れば、全身爛壞し、五藏焦爛するのは、人時に相師となり、人の吉凶を相し、實少く虛多く、自ら有德と稱し、利養を求めた爲。一鬼の體大に牙利き惡狗に身を噉はれ苦しむのは、天祠主と爲り、牛羊の血を取り天を祀り、吉利を得ると百姓を惑した爲。一鬼の身不淨中に在り、全身強浸し、食ふ所は不淨であるのは、婆羅門と爲り、佛法を信ぜず、沙門道人を供養せず、一道人に鉢に不淨を盛り、食で覆いて供した故。處々に香出で、自然の斧有り之を斬截するのは、僧の爲石蜜漿を作る時少許を盜み取つた故。飢餓し頭上に屎食を取り、大力鬼が頭上にて打つのは佛國主と爲り、僧物を呑み、衆僧を供養しなかつた故。腹大に甕の如く、身分少に咽細針孔の如く食を下し得ぬのは、聚落主と作り、豪強を恃み、人民を欺いた爲。一鬼肩上の銅瓶より洋銅を自ら頭上に灌ぐのは、出家し、僧の飲食を掌り、一酥瓶を餘處に藏著し、客の道人に與へず、舊僧に與へた爲。人來り、諸刀劍にて身を割剝し、腹を破り、五藏を出すのは、婆羅門と作り、正法を信ぜず、牛羊を以て祭つた故。又魁膾主と作り、殺人を知り、慈心無かつた故。膝下に大熱鐵轉じ、焦爛するのは、出家し、餅を作り、僧食せざるに先立つて之を食した故、自然に赤鐵丸が空中より口に入り腹に至り、全身焦爛するのは沙彌となり、菴摩果を煮、僧中之を行ひ、和上に七枚を與へた爲。室狹行ひ來り、發動迴還し、餉むを得ず、愁惱悶害するのは、卜問師と作り、心を囘惑させた爲、身内熱が有るのは、國王の第一夫人と作り、他の小夫人を嫉妬し、腹上に熱酥を注いだ故。一鬼の性恐怖多く、人の來るを畏れるのは、邪婬を行ふを好み、人の婦女を犯し、發覺を畏れた爲。自然の熱鐵、鐵網有り、身に纏絡し、燒熱するのは、網にて魚獸を殺し、籠にて飛鳥を取つた故、手足無く、曠野で鳥獸に食ひ食はれるのは、鉦鼓の時、墮落せしめた爲。鐵釘あり身上を刺し、肌を破るのは、馬師牛師象師と作り、他財を食り、鍼刺道無く、痛苦を受けしめた爲。頭首無く、眼耳鼻口は胸前に在るのは、殺人を見、頭を捉へ歡喜して捻き、慈心無き爲であると。

この經は鬼問目連經と同經異譯らしく、記述項目少しく異る所もあり、前後してゐる所もあるが、大體記述事項が一致してゐる。善惡因果應報の小乘的思想に立脚してゐる。地獄餓鬼思想の發達した部派佛教の所產の經であらう。特に目連が鬼と問答するのは、目連が佛弟子中神通第一と稱せられ、餓鬼趣に落ちた母を救ふたことがある等の聯想からであらう。行文平明、簡潔である。　(平等通昭)

餓鬼報應經 ❶(日)Ga-ki-hō-ō-kyō. (支)O-kuei-pao-ying-ching. 目連說地獄餓鬼因緣經 ❷一卷 ❹失譯 ❼(參考) 武周錄第二、開元錄第三、貞元錄第五

蝦蟇經青咀品 ❶(日)Ka-ma-kyō-shō-ko-bon. (支)Hsia-mu-ching-ch'ing-ku-p'in. ❷一卷 ❸缺 ❻疑僞經 ❼(參考) 開元錄第一八

鵝珠鈔 ❶(日)Ga-shu-shō. 祕密雜要鈔、祕雜要鈔、雜要鈔、雜集鈔、心目鈔、北院守覺親王鵝珠鈔 ❷七卷、六卷或三卷 ❸存 ❹心覺(永久五—治承四 A. D. 1117—1180)說 壽永元年六四寂)撰 ❻經軌等諸師の時の抄記。事相に關する筆錄 ❼(參考) 大日本佛教全書檢刊豫定書目

[illegible] ❶(日)Ga-ra-ba. ❷一紙 ❸存 ❺鎌倉時代寫 ❾(寶龜院)

[illegible] ❶(日)Ga-ru-ba-kō-sha. ❷一卷 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835) ❼(參考) 諸宗章疏錄第三

[illegible]顯次第 ❶(日)Ga-ru-ba-... ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❾(金剛三昧院)(寶龜院)

[illegible] ❶(日)Ga-ru-ba-ko-sha-da-ru-ma. 胎藏略次第、胎藏梵字次第 ❷一軸 ❸存 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)撰 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❺平安時代寫 ❾(高大、寄・一・六二)

介庵和尚源流頌 ❶(日)Kai-an-o-shō-gen-ru-ju. (支)Chieh-an-ho-shang-yüan-liu-sung. 金明介庵和尚源流頌 ❷一卷 ❸存 ❹清代介庵悟進作、眞理等編 ❼(參考) 禪籍目錄

介庵進禪師語錄 ❶(日)Kai-an-shin-zen-ji-go-roku. (支)Chieh-an-chin-ch'an-shih-yü-lu. 介庵悟進語、眞理等編 ❷二卷 ❸存 ❹清代 ❺清、康熙刊 ❾(駒大)

介爲舟禪師語錄附行狀塔銘 ❶(日)Kai-i-shū-zen-ji-go-roku-tsuke-tari-gyō-jō-tō-mei. (支)Chieh-wei-chou-ch'an-shih-yü-lu & hsing-chuang-ta-ming. ❷二卷 ❸存 ❹明代介爲行舟語、海寬等編 ❺清、康熙一〇刊 ❾(駒大) ❿嘉興府楞嚴寺

介石和尚語錄 ❶(日)Kai-seki-o-shō-go-roku. (支)Chieh-shih-ho-shang-yü-lu. 介石智朋禪師語錄、介石禪師語錄、介石語錄 ❷一卷 ❸存 ❹宋代介石智朋語、正賢等編 ❾寫本(京大、藏・一・七カ・三)

介石語錄 ❶(日)Kai-seki-go-roku. (支)Chieh-shih-yü-lu. 介石智朋禪師語錄、介石禪師語錄、介石和尚語錄 ❷二冊 ❸存 ❹宋代介石智朋語、正賢等編 ❾(哲、け・七・左・二七)日本古版(內閣)

介石終南禪師遺稿 ❶(日)Kai-seki-shū-nan-zen-ji-i-kō. (支)Chieh-shih-chung-nan-ch'an-shih-i-kao. ❷二卷 ❸存 ❹演元等校 ❼(參考) 禪籍目錄

介石上人碑文 ❶(日)Kai-seki-shō-nin-hi-mon. (支)Chieh-shih-shang-jên-pei-wên. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 大日本佛教全書檢刊豫定書目

介石禪師語錄 ❶(日)Kai-seki-zen-ji-go-roku. (支)Chieh-shih-ch'an-shih-yü-lu. 介石智朋禪師語錄、介石語錄、介石和尚語錄 ❷二卷 ❸存 ❹宋代介石智朋語、正賢等編 ❼(參考) 禪籍目錄 ❺正德三刊

介石智朋禪師語錄 ❶(日)Kai-seki-chi-hō-zen-ji-go-roku. (支)Chieh-shih-chih-p'êng-ch'an-shih-yü-lu. 介石禪師語錄、介石語錄、介石和尚語錄 ❸存、卍續二・二六・二 ❹宋代介石智朋語、正賢等編 ❻育王山衞翁如琰禪師の法嗣、南岳下十八世雙林介石智朋禪師の八會語錄で、門下の正賢、宗坦、延輝、淨珠、智瓊、志謙及び悅堂祖誾等の編纂に係るもので、本書上梓に際し南宋度宗咸淳四年正月十五日(A. D. 1265)林希逸の撰に成る序文を載せて居る。其の內容は、南宋理宗紹定二年二月三日介石初住の溫州瓜山羅漢禪寺入寺語錄、(正賢編)臨安府臨平山佛日淨慧禪寺語錄、慶元府大梅山保福禪寺語錄、慶元府香山孝慈眞應禪寺語錄、婺州雲黃山寶林禪寺語錄(宗坦、延輝編)平江府承天能仁禪寺語錄(淨球、智瓊編)安吉州拍山崇恩資壽禪寺語錄、臨安府淨慈報恩光孝禪寺語錄(志謙、祖誾編)、及び小參二十二則、拈古二十六則、示衆法語四篇、偈頌三十一首、讚佛祖二十七首、小佛事十條とを收めて居る。　(大久保堅瑞)

回教及印度教佛教 ❶(日)Kwai-kyō-oyobi-in-do-kyō-buk-kyō. ❷一卷 ❸存、百科全書之內 ❹大島貞益譯 ❺明治一〇刊 ❾(京大、一・二七カ・一)

回光錄 ❶(日)Kwai-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹桐島榮一郎(明治六—明治四〇 A. D. 1873—1907)著 ❺明治四〇刊 ❾(正大、一〇九・一二五)(帝國、三一・三三五) ❿金尾文淵堂

回國雜記 ❶(日)Kwai-koku-zak-ki. ❸存、國文東方佛教叢書第一紀行部

貝塚記 ❶(日)Kai-zuka-ki. 卜半錄 ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大、一九二・二一一三)

貝塚天滿御移住記 ❶(日)Kai-zuka-tem-man-go-i-jū-ki. ❷一卷 ❸存 ❺大正二寫 ❾(谷大、宗大・一九三三)

戒婬文 ❶(日)Kai-in-mon. (支)Chieh-yin-wên. ❷一葉 ❸存 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)撰 ❾(正大、一三二・二一)

戒緣起 ❶(日)Kai-en-gi. ❸缺 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891 一說寛平四、年七八寂)述 ❼(參考) 本朝台祖

撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

戒學先路 ❶(日)Kai-gaku-sen-ro. ❷一卷 ❸存 ❹義帥(—文化頃? A. D. 1804—1817—)撰 ❾寫本(正大、一一八四・一一七)

戒學要語 ❶(日)Kai-gaku-yō-go. ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集第六 ❹慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)述 ❻慈雲が主唱した正法律の綱要を、戒法、戒體、戒行、戒相の四に分けて述べたるもの。戒法には十善を基本とすること、開制輕重の別を説き、戒體には善律儀戒は法性に順じて發す菩提心によりて發得するもので淨法界を體とするといひ、七衆の階級あるも通じて十善增增の德は初受戒より佛果の頂に至るまで淨法界の出動として一貫すと説き、戒行には獨一の菩提心を三聚淨戒とし攝律儀は七衆の律儀、梵網十重、瑜伽の四重であり、攝善法戒は梵網の始めの三十、瑜伽の始めの三十であり、饒益有情戒は梵網の後の十八、瑜伽の後の十二等であるが、實は各に三聚具足して菩薩の大行を成就すと説き、戒相には十善を説く。しかもそれは十條の規定を遵守することでなくして、一戒光明が生命ある者に對して不殺生戒善となるので、此對境に於て慈悲心增長し、夢中にも逆惱を與へ損害を加ふる心なし等といひ、終りに一切の威儀は小律の規定を採用すべく、凡慮を以て佛制を取捨すべきで無いと説き、「佛へこし法の水がめ水清く濁さじと思ふもらさじとおもふ」の歌に佛制を厳護する心を寓して結ぶ。諦濡の序、智幢の跋がある。

本書は簡約ではあるが能く慈雲の正法律が小律の規定と大乘戒とを融和し、十善を以て統一したるを見るべく、且つ菩提心の生活相に發露するものとして戒行を見たる特色に注意すべきである。❽文政四刊(正大、一一八四・一五二) (大野法道)

戒經 ❶(日)Kai-kyō.(支)Chieh-ching.(巴)A. X. 3 Sīla & A. X. 4 Upanisā. ❸存、中阿含經第一〇(大正一 No. 26. 47, 48)

戒具三昧道門經 ❶(日)Kai-gu-sam-mai-dō-mon-kyō.(支)Chieh-chü-san-mei-tao-mên-ching. ❷一卷 ❸缺 ❻疑僞經 ❼(參考) 法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

戒果莊嚴經 ❶(日)Kai-kwa-shō-gon-gyō.(支)Chieh-kuo-chuang-yen-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹慶頭撰 ❺齊永明五(A. D. 487) ❻疑僞經 ❼(參考) 法經錄第四、仁壽錄第四、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

戒灌頂之覺 ❶(日)Kai-kwan-jō-no-oboe. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(正大、一一八八・一一九)

戒光記 ❶(日)Kai-kō-ki. ❸缺 ❹靜然記 ❼(參考) 本朝台祖撰述密部書目

戒光山西教寺中興初祖眞盛上人別傳 ❶(日)Kai-kō-zan-sai-kyō-ji-chū-kō-sho-so-shin-jō-shō-nin-betsu-den. ❷一卷 ❸存 ❹眞際記 ❽享保四刊 ❾(龍大、研史)

戒光坊決 ❶(日)Kai-kō-bō-ketsu. ❸缺 ❼(參考) 本朝台祖撰述密部書目

戒香經 ❶(日)Kai-kō-gyō.(支)Chieh-hsiang-ching.(巴)A. Ⅲ. 79 Gandha. ❷一卷 ❸存、大正二・五〇八 No. 117、縮辰六、卍一五・五、北1267[illegible]、南1279[illegible]、元1273[illegible]、明北906深、清906深、麗1266時、天1239[illegible]、法1372歳、聖1159閣、明南937與、Nj. 911 ❹宋法賢(—咸平四 A. D. 1001)譯 ❻この經典は A. Ⅲ. 79 Gandha. 增二三・五(大正二・六一三)、雜三八・一二(大正二・二七八)、別雜一・一二(大正二・三七六)、戒德香經(大正二・五〇七竺曇無蘭譯)と及び戒香經の六本が有り、この中 A. 最も多く異なり、戒德香經は末尾の附加多く、他は大低大同小異である。世間の香は根香、華香、果香の三種ともに、風に逆つて行かないものであるが、獨り戒の德香のみは風に隨ひ又風に逆つても行き亘るものであることを記したるものである。(赤沼智善)

戒山和尚行業記 ❶(日)Kai-san-o-shō-gyō-gō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹慧淑記 ❽寶永七刊 ❾(正大、一七一・五)

戒珠抄 ❶(日)Kai-shu-shō. ❷二卷 ❸存 ❹圓慈惠篤(應永一九—明應元 A. D. 1412—1492)述 ❾寫本(龍大)

戒疏 ❶(日)Kai-sho.(支)Chieh-shu. 四分比丘戒本疏 ❷一卷 ❸存、卍續一・六二・一 ❹唐代定賓述 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2275

戒疏發隱事義 ❶(日)Kai-sho-hotsu-on-ji-gi.(支)Chieh-shu-fa-yin-shih-i. 梵網菩薩戒經義疏發隱事義、梵網經心地品菩薩戒義疏發隱事義 ❷一卷 ❸存、卍續一・五九・五、雲棲法彙第五 ❹明袾宏(嘉靖一一—萬曆四〇 A. D. 1532—1612)述

戒疏發隱問辯 ❶(日)Kai-sho-hotsu-on-mon-ben.(支)Chieh-shu-fa-yin-wên-pien. 梵網經心地品菩薩戒義疏發隱問辯 ❸存、雲棲法彙第五 ❹明袾宏(嘉靖一一—萬曆四〇 A. D. 1532—1612)述

戒疏發揮記 ❶(日)Kai-sho-hok-ki-ki.(支)Chieh-shu-fa-hui-chi. 四分律含注戒本疏發揮記 ❷八卷或三卷 ❸存、卍續一・六二・一 ❹宋允堪(—嘉祐六 A. D. 1061)撰 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

戒正信邪經 ❶(日)Kai-shō-shin-ja-kyō.(支)Chieh-chêng-hsin-hsieh-ching. ❷一卷 ❻疑僞經 ❼(參考) 武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

戒消災經 ❶(日)Kai-shō-sai-kyō.(支)Chieh-hsiao-tsai-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❼(參考)出三藏記集第四、法經錄第五

戒消災經 ❶(日)Kai-shō-sai-kyō.(支)Chieh-hsiao-tsai-ching. 戒消伏災經、戒伏銷災經 ❷一卷 ❸存、大正二四・九四四 No. 1477、縮寒一〇、卍一七・三、北932奉、南946奉、元942奉、明北1108初、清1108初、麗939入、天936奉、宋895入、法923入、聖1246、明南1292比、Nj. 1113 ❹支謙譯 ❺吳黃武二—建興二(A. D. 223—253)

❻五戒の功德にて災害を免れたる説話を記す。舍衞國中の一顯者佛の五戒十善を持つので造酒家が無くなつた程であつた。或大家の一子それは五戒を持てる者が他國に商用に行く時父母に因く飲酒を誡められたが、途に舊友に出遇つて之を破つた。歸國の後之を告げたので放逐の身となり他郷に放浪することゝなつたが、或る客舍の主人を感化し三歸五戒十善を授けた。其主人はそれから佛陀に詣はうとして給孤園の邊まで行き一亭で噉人鬼の災害を受けかゝつたが五戒の功德によつて之を免れ、彼を救つた噉人鬼の妻と二人で佛所に詣でる途中四百九十八人を教化し、五百人で佛所に行き、佛は彼等の宿世を説くといふのが大略である。

此經を支謙譯とするは三寶紀・内典錄・開元錄で、法經錄・仁壽錄には譯人名を出さない。譯語から見て恐らく東晉以後のものであらう。

❼(參考) 三寶紀第五、法經錄第五、仁壽錄第一、内典錄第二、譯經圖紀第一、開元錄第二、貞元錄第三 (大野法道)

戒消災經略釋 ❶(日)Kai-shō-sai-kyō-ryaku-shaku.(支)Chieh-hsiao-tsai-ching-lüeh-shih. ❷一卷 ❸缺 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

戒場莊嚴及神名配位之圖 ❶(日)Kai-jō-shō-gon-oyobi-shim-mei-hai-i-no-zu. ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集第六 ❹慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)述 ❻受戒の戒場を莊嚴する樣式の圖と、三重戒壇に六十二神を配屬する圖とを揭げて略釋したるもの。

戒場の莊嚴圖の外に別に南天の際に講堂を用ふる坐座をも揭げてある。その序に「受戒の前日に至て、先づ戒場を掃除し、次に塔の飾りを掛け、次に神名の札を配し、次に圖に合せて諸具一一調べ置き、當日早天に之を運ばせて圖の如く莊嚴すべし。塔前の供物餅菓花華は時の宜しきに隨ふべし」といふ。戒壇の初重に十四金剛神を配し、第二重の四角に四天王を、及び各天王に四神軍主あるを四邊の七階道に配し、第三重には二十八星神を配し、すべて六十二神ある。

此圖の意はもと慈雲の定むる所であるが、原本は智幢法樹の記したものである。(大野法道)

戒圖報恩鈔 ❶(日)Kai-zu-hō-on-shō. ❷六卷 ❸存 ❽寶永七寫 ❾(谷大餘大・二三八六)

戒殺四十八問 ❶(日)Kai-setsu-shi-jū-hachi-mon.(支)Chieh-sha-ssŭ-shih-pa-wên. 戒殺問答 ❷一卷 ❸存、卍續二・一二・二 ❹清代周思仁述 ❻殺生戒について四十八問を舉げて答釋したるもの。作者の引あり。悲慘なる殺刼の到來するは人の殺生業の報ひであるから、之を逃れるためには殺生戒を守るべきを説く。

内容は四十八問を十二項に該括す。一、生物養人の疑は鳥獸等は天が人を養ふために與へたるものなれば殺して食するも可ならんとするもの五條。二、俗見斷殺の疑は有用ならざる動物は殺すも可ならんとするもの六條。三、業重難救の疑は動物は殺さるべき罪報を有すとするもの五條。四、祭血餔神の疑は神に延壽功名等を禱るに犧牲は唯一の方法なり等三條。五、享親祭祖の疑は親を養ふ爲めにするは可とする等四條。六、燕賓從俗の疑は客を遇するに蔬食は不可とする等一條。七、古聖敎殺の疑は伏羲孔子の言によるもの二條。八、仁民愛物の疑は仁愛は本であり戒殺放生は末とするもの二條。九、因果差別の疑六條及び十、懸業有無の疑四條は之れを缺き、其部分に阿彌陀佛の名を持する功德を説く。十一持齋斷肉の疑は持齋の缺點に立つもの七條、但し二條を缺く。十二佛理難信の疑は梁武は奉佛して後に餓死するは如何等三條。但し二條を缺き、其部分に臨終持名、發願懺悔持名を記すが、此部分は第九項の同部と共に恐らく他書との錯亂であらう。(大野法道)

戒殺放生物語 ❶(日)Kai-setsu-hō-jō-mono-gatari. ❷二卷 ❸存 ❽刊本(京大、一・二四カ・三)

戒殺放生文 ❶(日)Kai-setsu-hō-jō-mon.(支)Chieh-sha-fang-shêng-wên. ❷一卷 ❸存、雲棲法彙第二二 ❹明袾宏(嘉靖一一—萬曆四〇 A. D. 1532—1612 說萬曆四三、年八一寂)撰 ❻戒殺文と放生文とを合せて呼べるもの。戒殺文は殺生を誡しめ、放生文は放生を勸めたものであつて、自ら註を加へて居る。其殺生を戒しむるには生日、生子、祭先、婚禮、所禱、營生に於て殺生すべからざることを論し、放生を勸むるには生命の重んずべきことより、古今の生物を愛せし芳蹟を列ねて放生を行ずべきを敎へてある。そうして二文共に其功德を回して淨業へ往生せんと願ずる祝願の文を添へてある。

此二文を合せて戒殺放生文として雲棲の序が加へられ、光緒重刊の雲棲法彙の本には、釣弋説、書放生卷後及び諸寺の放生池記を列ね、顧雲鴻の跋を加へ、更に小雲棲放生記等が附刻されてあり、光緒三十年の單行本には嚴訥の序の外に普勸戒殺文等が附刻され、日本に於ても寬文元年には嚴訥の序と黄檗隱元の跋とを加へて板行され、更に同十一年には頭書が施されて板行されたが如きものがあつて、支那、日本に少なからざる感化を與へた書である。(杉紫朗)

戒殺放生文篇 ❶(日)Kai-setsu-hō-jō-mon-hen. ❷一卷 ❸存 ❹玄光撰 ❽元祿六刊 ❾(龍大、二六一九・七)

戒殺文 ❶(日)Kai-setsu-mon.(支)Chieh-sha-wên. ❷一卷 ❸存、檜尾叢書二集第三七 ❹清代黎遂球述 ❾(京大、藏四カ・一)(會圖、一七八・二)

戒相應法經 ❶(日)Kai-sō-ō-hō-kyō.(支)Chieh-hsiang-ying-fa-ching. 戒相應法、戒相應經 ❷一卷 ❹失譯 ❻雜阿含第三十卷の抄出 ❼(參考) 出三藏記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

戒體 ❶(日)Kai-tai. ❷一卷 ❸缺 ❹圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—891)

一說寛平四、年七八寂)述 ❼(參考) 本朝台祖撰述密部書目

戒體義 ❶(日)Kai-tai-gi. ❷一卷 ❸缺 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891 一說寛平四、年七八寂)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、山家祖德撰述篇目集卷上

戒體義章 ❶(日)Kai-tai-gi-shō. ❷一卷 ❸存 ❹普寂(寶永四—天明元 A. D. 1707—1781)述 ❾寫本(正大、一一八六・一〇)

戒體即身成佛義 ❶(日)Kai-tai-soku-shin-jō-butsu-gi. ❷一卷 ❸存、日蓮聖人御遺文 ❹日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282)述 ❺仁治三(A. D. 1242)

戒體積芳訣 ❶(日)Kai-tai-seki-hō-ketsu. ❷一卷 ❸存 ❹鳳潭(承應三—元文三 A. D. 1654—1738)述 ❽正德元刊 ❾(龍大、二六一九・八—九)(谷大、餘大、一九〇四)(正大、一一八六・五)(哲、む・八・右・七) ❿京都景雲堂

戒壇院本尊印相鈔 ❶(日)Kai-dan-in-hon-zon-in-sō-shō. ❷一卷 ❸存 ❽大正八寫 ❾(正大、一一八五・六)

戒壇院本尊供養事 ❶(日)Kai-dan-in-hon-zon-ku-yō-no-koto. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一二二東大寺叢書第二 ❺建長元(A. D. 1249)十一月二十八日

❻後深草帝の建長元年十一月二十八日、東大寺戒壇院講堂に本尊佛として安置し奉れる、一丈六尺の釋迦像を供養したる慶讃大法要の式次である。

當日は導師として別當法務法印前權大僧都定親之に當り、呪願は尊勝院法印權大僧都宗性勤め、大衆百十人あり、梵唄を詠じ、法用舞を舞ひ、高麗樂、延喜樂などを奏して、頗る盛んだつたことを想像せしむるのである。

（中谷在禪）

戒壇開山行狀 ❶(日)Kai-dan-kai-san-gyō-jō. ❷三卷 ❸缺 ❹凝然(仁治元—元亨元 A. D. 1240—1321)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

戒壇勸文 ❶(日)Kai-dan-kam-mon. ❸缺 ❼(參考) 本朝台祖撰述密部書目

戒壇圖經 ❶(日)Kai-dan-zu-kyō. (支)Chieh-t'an-t'u-ching. 關中創立戒壇圖經 ❷一卷 ❸存、大正四五・八〇七 No. 1892、卍續二・一〇・一 ❹道宣(開皇一六—乾封二 A. D. 596—667)撰 ❺唐乾封二(A. D. 667) ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下

戒度無極經 ❶(日)Kai-do-mu-goku-kyō. (支)Chieh-tu-wu-chi-ching. ❷一卷 ❻六度集經第四卷の抄出 ❼(參考) 仁壽錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

戒德香經 ❶(日)Kai-toku-kō-kyō. (支)Chieh-tê-hsiang-ching. 戒德經 ❷一卷 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第三

戒德香經 ❶(日)Kai-toku-kō-gyō. (支)Chieh-tê-hsiang-ching. (巴)A. III. 79 Gandha. 戒德經 ❷一卷 ❸存、大正二・五〇七 No. 116、縮辰六、卍一四・一、北722若、南736若、元728若、明北584綠、麗719止、天723若、指684止、法711止、至958仕、明南596綴、Nj. 588 ❹竺曇無蘭譯 ❺東晉(太元六—二〇 A. D. 381—395) ❻戒香經の項を見よ ❼(參考) 三寶紀第七、內典錄第三、譯經圖紀第二、開元錄第三、貞元錄第五

戒入堂 ❶(日)Kai-nyū-dō. ❷一紙 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

戒波羅蜜菩薩法 ❶(日)Kai-ha-ra-mitsu-bo-satsu-hō. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

戒法隨身記 ❶(日)Kai-hō-zui-shin-ki. ❷三卷 ❸存 ❹淨豐記 ❺貞享四刊 ❾(龍大、二六一二・一)(正大、一一八四・一二一)(哲、む・八・右・四) ❿京都永田長兵衞

戒法の手引 ❶(日)Kai-hō-no-te-biki. 菩薩戒童蒙談抄 ❷一卷 ❸存 ❹寂室堅光(寶曆三—天保元 A. D. 1753—1830)述、弘津說三校 ❺明治三一刊 ❾(駒大) ❿東京永平寺出張所

戒法門 ❶(日)Kai-hō-mon. ❷一卷 ❸存、日蓮聖人御遺文 ❹日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1222—1282)述 ❺寬元元(A. D. 1243)

戒法律經 ❶(日)Kai-hō-ritsu-kyō. (支)Chieh-fa-lü-Ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

戒本經箋要 ❶(日)Kai-hon-kyō-sen-yō. (支)Chieh-pên-ching-chien-yao. ❷一卷 ❸缺 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)撰 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

戒本疏 ❶(日)Kai-hon-sho. (支)Chieh-pên-shu. ❷四卷 ❸缺 ❹唐懷素(貞觀八—登龍元 A. D. 634—707)述 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄

戒本大義 ❶(日)Kai-hon-dai-gi. ❷一卷 ❸存 ❾(哲、む・六・右・二八)

戒本大要 ❶(日)Kai-hon-tai-yō. ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集第一四 ❹慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)說、宗議尼記 ❺寛政七(A. D. 1795)

❻三種の戒本、即ち諸部律の戒本、梵網菩薩心地戒本、瑜伽菩薩地戒本の要義を述べたるもの。

諸部律の戒本は七衆の階級を紊し、僧寶の系統を繼ぐ爲めに依用すべきもの、梵網菩薩心地戒本は菩薩の心地を詳かにして道俗を攝化するに必要のもの、瑜伽戒本は末世に正法を護持する綿密に役立つものとし、梵網のみに依て比丘沙彌の行位を立つる者あるは迷謬とする。更に梵網戒本の意義を述べ十重四十八輕中、飲戒、不敬師長戒、坐無衣缽戒、別請僧戒、不重經律戒、貪財惜法戒、瑜伽戒本の四重四十三輕戒中、遮罪共不共戒、性罪不共戒、諸菩薩藏戒について實踐上の注意を加ふ。

慈雲の唱導せし正法律は前掲三種の戒を打つて一團としたものであるから、それらを適用するのであり、從て特殊のものゝみに立脚する思想を排拒する。故に本書中、第四波羅夷法に像似の正法を宣說し信解するといふを解して、『此に像似の正法と言ふは佛世及び賢聖在世の法ならずして、別に一經或は一文に依て建立せる法門なり。乃至、彼の法傷に見來れば一文一句の本據あるに似たり。審諦に思惟するに佛在世に無き所、賢聖在世に無き所、多くは末世濁惡魔民事の地に興るゆゑ像似の正法と言ふなり』といふ。

（大野法道）

戒密綱要 ❶(日)Kai-mitsu-kō-yō. ❷一卷 ❸存 ❹天台宗務廳教學部編 ❺大正九刊

戒文集 ❶(日)Kai-mon-shū. ❷一卷 ❸缺 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891 一說寛平四、年七八寂)撰 ❼(參考) 本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上

戒律研究 ❶(日)Kai-ritsu-ken-kyū. ❷二卷 ❸存、國譯大藏經附錄 ❹境野黃洋著 ❺昭和三刊

戒律再興願文 ❶(日)Kai-ritsu-sai-kō-gwan-mon. 戒律興行願書 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一〇五、日本大藏經戒律宗章疏第二 ❹貞慶(久壽二—建保元 A. D. 1155—1213)記 ❺承元年間(A. D. 1207—1210)

戒律興行願書 ❶(日)Kai-ritsu-kō-gyō-gwan-sho. 戒律再興願文 ❷一卷 ❸存、日本大藏經戒律宗章疏第二、大日本佛教全書第一〇五 ❹貞慶(久壽二—建保元 A. D. 1155—1213)記 ❺承元年間(A. D. 1207—1210)

❻興福寺系の戒律宗を再興せんとする願文。門人戒如の奧書あり。

内容は毘尼は佛法住世の要圖なるに係はらず、昔の盛行に反し時と共に衰へたるを痛恨し、戒律の正系たる鑑眞を祖とする四分律の研學行持を盛んにするは世の爲の豆益なりとし再興の念願を陳ぶ。

承元年間(1207—1210)は貞慶の晩年で、其二年に後鳥羽上皇の宣建である海住寺に住したのであるが、南都の戒が聖武朝當時より相傳しながら不振に陷れるを歎いて此願を立て、或は一院家を建立し、或は律部關係の章疏を智寫して興學の料に供する等の計畫をした。門人覺眞は常喜院を建てて其用に充てることゝなり、又門人に戒如出で、其門に圓晴・覺澄・覺盛・叡尊が出て盛觀を呈するやうになつたのはこの立願の結果と見らるゝ。戒如がこの願書に唱和した「律學事」一篇を附錄としてゐる。

（大野法道）

戒律傳來記 ❶(日)Kai-ritsu-den-rai-ki. 戒律傳來宗旨問答 ❷三卷 ❸存、大正七四・一 No. 2347、日本大藏經戒律宗章疏第二、大日本佛教全書第一〇五 ❹豐安(淳和帝代 A. D. 824—833)撰 ❺天長七(A. D. 830)

❻淳和帝の勅命に依り四分律宗を主とする戒律の傳來を撰述したるもの。作者の序あり。

三卷なりしも上卷のみ存す。四章あり。一に佛傳西域は佛滅後印度に於ける律の誦出と傳持、五部二十部の分裂、四分律の所屬を、二に凡聖流演は支那の受戒と傳律の史要を、三に百濟傳倭は鑑眞已前の狀勢を、四に唐傳日本は道傳戒法と建招提寺とに分たれるが鑑眞の渡來と傳律を述ぶる前項で終つてゐる。

豐安は唐招提寺に住し律宗第五祖とされる偉匠。大正藏本は國寶古寫本を底本としたもので明治三十七年八月九日唐招提寺戀覺坊智海の奧書あり。天長勅撰の六宗書を略叙し、本書を宇智郡五條町にて發見したるを記す。

（大野法道）

戒律傳來宗旨問答 ❶(日)Kai-ritsu-den-rai-shū-shi-mon-dō. 戒律傳來記 ❷三卷 ❸存、大正七四・一 No. 2347、日本大藏經戒律宗章疏第二、大日本佛教全書第一〇五 ❹豐安(淳和帝代 A. D. 824—833)撰 ❺天長七(A. D. 830)

戒律の根本 ❶(日)Kai-ritsu-no-kom-pon. ❷一卷 ❸存 ❹長井眞琴著 ❺昭和四刊 ❿東京丙午出版社

戒律要義 ❶(日)Kai-ritsu-yō-gi. ❷一卷 ❸缺 ❹凝然(仁治元—元亨元 A. D. 1240—1321)撰 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

改永平寺世牌記 ❶(日)Kai-ei-hei-ji-se-hai-ki. ❷一卷 ❸存 ❹卽中玄透(—文化四 A. D. 1807)撰 ❼(參考) 禪籍目錄

改革根元錄 ❶(日)Kai-kaku-kon-gen-roku. ❷一卷 ❸存 ❹石井活雲記 ❺天保二刊 ❾(龍大、一九七一・七、研史)(谷大、宗大・一三〇一)(帝國、二一二・九八)

改正寺法草案 ❶(日)Kai-sei-ji-hō-sō-an. ❷一卷 ❸存 ❹中井玄道、森川智德共編 ❾刊本(龍大、二〇九四・一)

改正色目 ❶(日)Kai-sei-shiki-mo-ku. ❷一卷 ❸存 ❾刊本(龍大、別置)

改正眞流正傳鈔並私解目錄 ❶(日)Kai-sei-shin-ryū-shō-den-shō-narabini-shi-ge-moku-roku. ❷六卷 ❸存、日蓮宗宗學全書(本妙法華宗部第一及第二之內) ❹日壽(寛政六—嘉永六 A. D. 1794—1853)述

❻本妙法華宗の派祖日眞が嫡弟日諦に瀉瓶相承し、日諦より嫡弟日修に口訣相傳せる「眞流正傳鈔」(詳しくは「眞源法流正傳鈔」と言ひ、後世「青藍鈔」とも稱す)を同流の日壽が改訂し更に私解及び目錄を加へたもので、私解の部分には「私云」と書いて區別してある。

「眞流正傳鈔」は片假名交り文なりしが、後世漢文に改修したる由。眞門流は日眞日諦共に獨特の宗義は口傳相承によつたから、派祖以來の宗義を知るには本書に依る外に途はない。

本書は同門獨特の宗義たる一部修行、本勝迹劣、唯壽量、事ノ一念三千、本果實證の義に依り、法華經一部二十八品に就て三百五十餘箇條を揭げて注解を加へたものである。内容目次即ち目錄は三百五十餘箇條の多數であるから、直接本書に就て見るを便とするが、今參考のため例示すれば次の如くである。

序品下、正釋=通序=之大意、通別序分別

之事並私解(下略)
方便品下、當品顯號釋口決之事並私解、唯佛與佛等文之事並私解、十如是之事並私解(下略)

尙ほ目錄には、右の如く各品每に「下」とあるが、これは上下の下ではなく、「に就て」の意味である。德川期の書にはこの例が間々ある。 (馬田行啓)

改正付法傳 ❶(日)Kai-sei-fu-hō-den. ❷一卷 ❸存 ❾(京都)

改正文底義 ❶(日)Kai-sei-mon-tei-gi. ❷一卷 ❸存、日蓮宗々學全書(本妙法華宗部第二之內) ❹日東(—文政七 A. D. 1824)錄、日久、日壽、日政等改正 ❺天明三(A. D. 1783)錄、嘉永四(A. D. 1851)改正

❻本妙法華宗の學匠日東(前名日照)が、天明三年に筆錄した「文底義」を、嘉永四年に至り同門の日久、日壽、日政三師が評議して改修し意義を明瞭ならしめたもので、本妙法華宗の宗義を知る最要の書である。本妙法華宗獨特の宗義たる一部修行、本勝迹劣、唯壽量、本ノ一念三千ノ南無妙法蓮華經、本果實證之理を明したもので、他流の本迹勝劣論は未だ途中の本迹であり本迹二門相對の勝劣であつて、眞の本迹勝劣論ではないとて、別に本化附屬の本迹勝劣を說き、壽量文底の事ノ一念三千卽本果實證の妙理なることを詳說してある。 (馬田行啓)

改定眞言宗安心和讚弘法大師和讚 ❶(日)Kai-tei-shin-gon-shū-an-jin-wa-san-kō-bō-dai-shi-wa-san. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(京都)

界外淨土事 ❶(日)Kai-ge-jō-do-no-koto. ❷一冊 ❸存 ❽文明六寫 ❾(寶壽院)

界趣輪廻事 ❶(日)Kai-shu-rin-e-no-koto. ❷一帖 ❸存 ❽文明一一寫 ❾(寶壽院)

快元僧都記 ❶(日)Kwai-gen-sō-zu-ki. ❷一卷 ❸存、群書類從第一六輯

❻本書は群書類從卷第四百五十六に採收。著者快元は鎌倉鶴岡八幡宮寺の供僧なり。續群書類從卷第百四に採收の八幡宮寺供僧次第によれば快元(中納言法印)永正二年(乙丑)九月廿一日、前の供僧俊朝より讓與とあり、又次の供僧融元の下には、天文十年(辛丑)九月日讓狀(但快元讓狀也)隨快元法印西院受法學云云とあれば、眞言宗の人なりし事も明かなり。本書は享祿五年五月十八日より天文十一年五月十四日に至る間の日記なり。蓋し首尾を缺ける斷簡ならむか。快元眞言宗の人なれば弘法大師七百回年忌を高野、東寺、醍醐等に於て勤修の記事あり、又當時小田原北條氏綱と鶴岡八幡宮との關係、倘快元が氏綱に尊信せられし程度など想像せられて興味深く、又氏綱の卒去をば諸書天文十年七月十九日と記するも本書は十七日他界去る四日出家五十五歲可惜可惜と記す、以て異とすべし。 (土宜覺了)

快人快馬 ❶(日)Kwai-jin-kwai-ba. ❷一卷 ❸存 ❹宗演(—大正八 A. D. 1919)著 ❽大正八刊 ❿東京日新館

快全御教授記 ❶(日)Kwai-zen-go-kyō-ju-ki. ❷一卷 ❸存 ❹快全(—應永三一 A. D. 1424)口、永遍(—應永二四 A. D. 1417—)記 ❽文政一二寫 ❾(金剛三昧院)

快馬鞭 ❶(日)Kwai-ba-ben. ❷一卷 ❸存、禪門法語全集第三 ❹東嶺圓慈(享保六—寛政四 A. D. 1721—1792)著、無隱撰

❻正宗國師白隱和尙の神足、勅諡佛護神照禪師東嶺圓慈和尙の法語並に道歌の少分を禪師の滅後九年、其の徒霧隱和尙の輯錄せられたものである。快馬鞭の書名は、霧隱の後序に「今玆(寛政十二年庚申)の春遊方の日、師の遺稿の入道要訣と曰ふ者を得て之れを讀むに、恰も面のあたり示誨を聽くに似たる者あり。故に、四方に散在せる者を繹求して、編して快馬鞭と曰ふ。乃ちこれを版に鋟る。世に公にせんと欲するに匪ず、唯た信男信女に與へて、快馬の一鞭と爲さんと欲する者なるのみ」と云ふに依りて知り得る。卷首に寛政十二年二月、上足濃州大寳の序を安じ、卷末に霧隱の後序を附する。後序は東嶺和尙行實を以て之れに充つ。蓋し佛護神照禪師行實の最古のもので、美作州圓通沙門道契の續日本高僧傳第八所收の「豆州龍澤寺沙門圓慈傳」は、此後序を藁けたるものに外ならぬ。一部收むるところは、一、入道要訣、二、奉大聖寺宮、三、答輕蔑神佛人、四、示村林無文齋、五、示世鑑利貞禪尼、六、示世鑑了智禪尼、七、發心修行之文、八、病中三の用心の事、九、發願文の事、十、道歌二十一首より成り、一・四・五・七・八・九の六編は文章體、二・三・六の三編は消息文體を以てして、何れも假名文にて綿めて禪道佛法の深意を釋顯して、誰人にも解り易く懇心垂れるものがある。初學者の爲には所謂る快馬の一鞭として、誠に適切なるものであらう。法語の中、一、入道要訣は、寶曆七年、東嶺和尙三十七歲の所撰に係り「有信士某君者、先携白紙一卷來謁、令書予予數誡予諸而敢之箭久矣。歲月相過無暇思索、因操筆任意漫書之、曰入道要訣、願長伴看過、以爲進道之一鞭也。寶曆丁丑孟陬日、東嶺圓陀圓慈書」の識語を有する。禪宗の凡夫地より直に佛地に登るに就て、一に同性の義、二に異發の義、三に慣習の義、四に進修の義、五に歸本の義の五の料簡ありとし、通佛教の教意に卽して、禪の第一義を說示し、解說懇切を極める。十、道歌二十一首は、小引を安じて「庚午の夏江戸牛島の庵に在て道歌二十一首を詠じてもつて信男信女にあたへたまふ」と云ふ。庚午は恐らくは、寛延元年なるべく、時に和尙三十歲たり。五、六に世鑑利貞禪尼と云ひ、世鑑了智禪尼と云ふは、荊叢毒蘂第八に收むる白隱和尙の「世鑑氏蕨鶴民圖」に「世鑑氏名政幸、參禪常勇猛、修萬善不倦、書齋行無怠、去年來明石破予兩重關、閱予隻手聲、能止一切音、塵未上予堂、證操入予室、如來眞骨身、得分粒七顆、盛金玉寶塔、附圓慈(東嶺和尙)歸插、寄予雲門山(無量寺)、爲法城鐵護」と見へ、東嶺手澤の書入本

に「京・鮭阜屋喜兵衞、江州神崎長勝寺村清水氏子也、父曰了久、母慈照、爲世鑑氏、懇求住洛陽三條、曰世鑑八郎兵衞政幸、名實參淨相地觀居士」と見へる世鑑氏の鈴者であらう。二、奉大聖寺宮は、文に「靜宮樣不圖遠く行脚に思召立せられ、御淋しきのあまり(中略)一には陛下の御心を休め奉るの端ともならんや、遂には成菩提院樣、涅槃路上を莊嚴し奉らんとのすゝ志なるのみ」と見へて、靜宮は中御門天皇の皇女成子內親王、御母は源內侍、閑院宮典仁親王の御息所とならせ給ふ。明和八年辛卯五月十二日、四十二歲にて薨去、廬山寺に葬り、同腹の姉宮に在し、倫宮と號す、法諱永泉、後に永晃と改む。寛保二年壬戌九月十九日、大聖寺にて御得度、天明元年辛丑十月二日、二品に叙し、文化五年戊辰七月二日、准三后に叙し、四日薨去、壽七十七。大歡喜寺に葬り奉り、勝妙樂院宮と號し奉る。これに依りて此編は、明和八年辛卯、和尙五十三歲の作なることを知り得られる。三界唯一心、心外無別法の禪の妙旨を解說し奉りて餘蘊なきものである。三、答輕蔑神佛人の一編は、「儒道にて事足りぬ」と信じて、神佛を蔑視する有人の來信に答へたもので、儒道の綸意を說き、和尙獨自の神道觀を表白して餘すところ無く、宗門無盡燈論二卷を初め其の他の撰著と相待ちて、其の神道說を研究するもの、見逃すべからざる好資料である。四、示村林無文齋の一編は、宛名の示す同參の一居士に與へたもので、「大凡修行は時を知るを第一とす」る所以を解說せるもの。七、發心修行の文は、發願修行の心の眞實なるべき旨を說きて、參禪工夫の要諦を示せるもの。八、病中三の用心の事は、一に死を縮め、二に正念相續、三に願を勵ますの三の用心を說きて、病中の用意を示せるもの。九、發願文の事は、一に三寶に歸依して必ず一度は我に具りたる佛の性を見屆けずんば置かず。二に早く我が性德の一切智を得て、普く衆生をして佛道に歸せしめずんば置かず。三に生々世々此の二の願に依て、衆生と共に菩薩行願の海に遊んで、無上道を成就せんことを誓へるもので、蓋し學佛の徒のために發願の要を說くと倶に、和尙自身の誓願に供したるものである。本書は寛政十二年に上梓、翌明和元年辛酉に公刊せられ、和尙の開創に係る靜岡縣龍澤寺に其版木を藏する。

❽寛政十二刊(駒大)、明治二六刊(駒大)(谷大、龍谷・一一九) (今津洪嶽)

快遍問答 ❶(日)Kwai-hen-mon-dō. ❷三卷 ❸存 ❺應永二四(A. D. 1417)

❻快全(—應永三一 A. D. 1424)と永遍(—應永頃 A. D. 1394—1427—)との問答記。

❾寫本(金剛三昧院)

快遍問答鈔 ❶(日)Kwai-hen-mon-dō-shō. ❷三卷 ❸存 ❹永遍(—應永頃 A. D. 1394—1427—)問、宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)答 ❼(參考)諸宗章疏錄第三 ❽寛正二寫 ❾(寶龜院)

怪異經 ❶(日)Kwai-i-kyō. (支)Kuai-i-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考)出三藏記集第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

界梨式 ❶(日)Kai-ri-shiki. ❷一卷 ❸缺 ❹圓仁(延曆一三—貞觀六 A. D. 794—864)撰 ❼(參考)密乘撰述目錄

契經行相鈔 ❶(日)Kai-kyō-gyō-sō-shō. (支)Ch'i-ching-hsing-hsiang-ch'ao. ❷一卷 ❸存 ❹朝鮮僧璞編 ❼(參考)朝鮮佛教總書刊行豫定書目

皆往院名古屋御坊に於て御教誡及御教諭 ❶(日)Kai-ō-in-na-go-ya-go-bō-ni-oite-go-kyō-kai-oyobi-go-kyō-yu. ❷一卷 ❸存、尾州五僧安心紀理第八 ❾寫本(谷大、宗大・六一)

皆乘沈話 ❶(日)Kai-jō-chin-wa. ❷一卷 ❸存 ❹高岡山人述 ❾(龍大)

海意經 ❶(日)Kai-i-kyō. (支)Hai-i-ching. ❷七卷 ❸缺 ❹宋代然法春譯 ❼(參考)仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一四、貞元錄第二四

海意菩薩所問淨印法門經 ❶(日)Kai-i-bo-satsu-sho-mon-jō-in-hō-mon-gyō. (支)Hai-i-p'u-sa-so-wên-ching-yin-fa-mên-ching. 海意菩薩淨印法門經、淨印法門經 ❷十八卷 ❸存、大正一三・四七三 No. 400、縮玄六、卍一五・九—一〇、北1427宮、南1422阜、元1421阜、明北971似、淸971似、麗1507州禹、天1446用、至526德建、明南1034讀、Nj. 926 ❹宋惟淨(—大中祥符六 A. D. 1013—)譯

❻本經(Sāgaramati paripṛcchā)は、大方等大集經第五品(海慧菩薩品)の異譯であつて、大集經には三譯があつたと記す經錄もあるが、寧ろ現存の曇無讖譯のみではなかつたかと考へられる(大方等大集經參照)から、今經の異譯も、かの第五品の外には無いのであらう。經は菩薩が淨印三摩地に住すれば、速に菩提を證することを得るが、この淨印三摩地門を獲得すべき方法として、菩薩の修すべき所を、詳細廣汎に說き、その間諸種の法數を揭ぐること多く、依つて以て大乘の本義を示さんとしたもので、般若の思想によつて、諸方面から、菩提心を說き、菩薩の行ずべき所を揭げたものである。

卽ち如來神通境界大寶莊嚴最勝道場大菩薩宮中へ、無量功德寶無垢珠妙莊嚴國から、海意菩薩が來り(卷一)、諸菩薩の自說で、佛は凡夫・隨信行・隨法行・無相行並に四果と緣覺との九性を超え、諸佛の種性に入つて、この三摩地を得るので、菩薩の超す一切智心寶卽ち菩提心を淨實珠に喩へ、是が磨治を待受し、摧壓に堪え(卷二)、次で穿つも亦壞せざることを述べ、その間に菩薩の修すべき所を出し(卷三)、菩薩の身・語・意の諸業が、智を以て先導となすこと、これこの三摩地の根本であるとし、この三摩地を得たるものは、八種の不共神通を得ることを說き(卷四)、進んでこの三摩地は甚深なるも、諸法平等の觀を以て、一切の魔怨を降伏すれば、是を得べきことを示し(卷五)、四魔を壞する法と魔業の根本とを說い

數字略號 ●異名(書名) ●卷數 ●存缺 ●著者 ●著作年代 ●內容解說 ●末書(註釋書參考書) ●寫刊の年月 ●現所藏者(書庫名) ●發行所名

て菩薩行に及び、三毒を調伏して解脫を得べきを述べ(巻六)、菩薩の智慧と發心、並に過去世の堅固鎧菩薩の精進とを云ひ(巻七)、佛法と佛法を聞いて怖畏せざる菩薩の諸力を說き、正法護持の德を示し(巻八)、更に護法の物語があつて諸菩薩が所見を述べる(巻九)。轉じて一法乃至四法の法數を以て、大乘を稱受し、利益する法と、大乘を增長し乃至隙尋する法を述べられる(巻十・十一)と、諸天は是を大集會の正法、或は無上大法寶藏であると讚へ、この法を受持する功德を述べる。佛はこの廣大の正法を護持せんためには、阿字等の門句、解脫等の印句(巻十二)、並に自身を金剛の如しとする金剛句を受持すべきを說き、四種の菩薩と、菩薩の大悲誓願に就いて述べ(巻十三)、更に喩を以て、菩薩は巧方便を修すべきことを示し、菩薩の慧と方便との淸淨なることを說き(巻十四)、善淨境界王の物語を出して出家の利益を出し(巻十五)、更に菩薩を得るには如說に行ずべきことを述べ、この行を障ふる魔事と、是を破する法門とに及んでゐる(巻十六)が、經にはこの部分に脫落がある。この破魔法門を聞いて來つた天魔波旬を海意は諸樂莊嚴世界に往かしめると、魔はここで、かの大集會の正法を宣說し、かの國人が是を說いた釋迦佛及びその菩薩を見んと願ふので、海意をして是を見せしめ、魔王も亦その神力によつて、かの國から歸る。次で佛が四天(巻十七)、帝釋・梵天を呼召する呪、並に諸魔天を摧伏する呪を說いて、その擁護を得べきことを述べ、この正法の功德を示して、最後に經の附囑がある(巻十八)。

本經に諸の法數を稱ぐること多いのは、大集經中に編入せられる所以であり、大乘を說くに當つて阿字等の字母を說き、種々の呪にまで及んで居る上に、經の全體は空思想に立つてゐる。これ大方等大集經の初二品と極めて相似てゐる。言ひ換へると、かの經の第五會たる今經は、かの經の初二品を詳說したものとは云へないが、彼に見るが如きものが更に他面から說かれたもの、即ちかの初二品の內容が、更に發展して今經となつたものと見ることが出來、その限りに於て、今經は亦大集經の中心要素を成すものと云ふことができやう。(蓮沢成淳)

海印和尙語錄 ❶(日)Kai-in-wa-shō-roku. (支)Hai-yin-ho-shang-yu-lu. 海印昭如禪師語錄 ❷一卷 ❸存、卍續二・二七・四 ❹元行純(仁宗帝代 A. D. 1312—1321)等編

海印懸譚 ❶(日)Kai-in-ken-dan. 海印玄々錄 ❷三卷 ❸存 ❹寫本(龍大、二〇三・二)

海印三昧論 ❶(日)Kai-in-san-mai-ron. (支)Hai-yin-san-mei-lun. 華嚴海印三昧論 ❷一卷 ❸存、大正四五・七七三 Vol. 1869、卍續二・八・四 ❺新羅明晶述 ❻海印三昧とは佛の果三昧であつて、法藏の妄盡還源觀には「海印とは眞如本覺なり、妄盡き、心澄みて、萬象齊しく現ず、猶し大海の、風に因つて浪を起し、風止息すれば、海水澄淨にして、象の現ぜざる無きが如し、故に名けて海印となす」と云つてゐる。如來の智慧海には識の浪生ぜず、澄淨明靜で、頓に一切衆生の心念根狀を現はすと同時に、一切の法門をも現じ、度すべき衆生と說くべき法と、一時に現じて前後が無い。かくの如き佛の果定中に印現せる法門を、ありのままに說いた經であるから、華嚴經は海印三昧一時炳現の法門とも名づけらるのである。

本論は無量塵沙の法門も、悉くこの三昧の中に入ることを云ひ、この三昧の要義を示すのに、二十八句の偈頌を以てして之を陀羅尼と名け、是に法と義との二義あることを述べてゐるが、その偈は「生死と涅槃とは異處に非ず、煩惱と菩提とは體無二であり、涅槃は親しきに人の識る無く、菩提は近きも茫だ見難い。身心には本來生無く、一切の諸法も、亦生無く滅無く住處無し、則ち是れ涅槃の體である。智者は一の中に一切を解し、一切の法中に一を解す。無量の法は則ちこれ一法、一法は則ち是れ無量の法である……縱く十方に諸つて成佛を求むるも、知らず身心もと成佛せるを云云」と云つて、相容無碍、互相攝入の義を示し、三世諸佛の祕密の法藏も、此の陀羅尼偈に過ぐることなきを說いて、この偈を十四字十四行の一種の圖式に改め、この圖式に據つて、經の要義(一道は三世の際を離れたること、三乘の行に應じて一道にも差別のあること、菩薩の五十二位、十波羅蜜と四攝、修行して絕えざれば成佛すべきことなど)を述べたものである。內題下には華嚴經に依ることを記してゐるが、論中には殊にその十地品に依る旨を述べてゐる。❼(参考) 東域傳燈目錄卷上、諸宗章疏錄第一、奈良朝現在一切經疏目錄(應澤成淳)

海印寺 ❶(日)Kai-in-ji. ❸存 ❹高麗版(龍大、別置)

海印寺事蹟 ❶(日)Kai-in-ji-ji-seki. (支)Hai-yin-se-shih-chi. ❷一卷 ❸存 ❹朝鮮鄭陞著 ❼(参考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

海印寺大藏經板由來記 ❶(日)Kai-in-ji-dai-zō-kyō-ban-yu-rai-ki. ❷一卷 ❸存 ❹高麗版(龍大、別置)

海印寺大藏經版調査報告書 ❶(日)Kai-in-ji-dai-zō-kyō-ban-chō-sa-hō-kokū-sho. ❷一卷 ❸存 ❹(龍大、二〇九九・五五)

海印寺大藏目錄 ❶(日)Kai-in-ji-dai-zō-mok-roku. ❷二卷 ❸存 ❹刊本(龍大、二〇九九・五五)

海印昭如禪師語錄 ❶(日)Kai-in-shō-nyo-zen-ji-go-roku. (支)Hai-yin-chao-ju-shan-shih-yu-lu. 海印和尙語錄 ❷一卷 ❸存、卍續二・二七・四 ❹元行純(仁宗帝代 A. D. 1312—1321)等編 ❺南岳下二十一世普照大師海印昭如禪師の三會語錄を門下の行純、道彰、從心が編錄したものである。

即ち行純は李侧に禪師の塔銘を請ひ、道彰また曾德裕の塔銘を乞ひ、從心と共に禪師の三會語錄を編し、元仁宗延祐四年七月曾巽申の序、同七年十二月十五日古林清茂

禪師の說を求め、禪師六十七歲寂世の元仁宗皇慶元年六月十六日(A. D. 1312)より十年後に禪師の法弟たる虛谷希陵禪師の元英宗至治元年五月十五日(A. D. 1321)の撰に成る說語を附して梓行したものである。

その列次は前記の曾巽申の序、袁州木平興化禪寺語錄(行純編)、臨江瑞筠山慧力禪寺語錄(道彰編)、饒州東湖薦福禪寺語錄(從心編)及び頌古七則、偈頌二十八首、佛祖讚八首、自眞讚三首、說三條、法語四則、小佛事四條、並に李倜及び曾德裕の撰に係る塔銘二條を載せ、巻末に希陵の說語を附してある。

その家風は直下證取の道を舉揚し、承當の即處に第二人無く第二見無く、第二念無しと提撕して居る。久しく雪巖先師に侍して識く其の末後の句子を得たり所以に三會の說法は、縱擒自若、活殺自在にして著著出身の路有り。」と言ふ法弟希陵の評語はよく其の面目を傳へて居る。(大久保堅瑞)

海印圖 ❶(日)Kai-in-zu. (支)Hai-yin-tu. ❸存 ❼(参考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

海有八事經 ❶(日)Kai-u-hachi-ji-kyō. (支)Hai-yu-pa-shih-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第三、開元錄第二、第一五、貞元錄第四、第二五

海雲記 ❶(日)Kai-un-ki. (支)Hai-yun-chi. 金胎兩界師資相承 ❷一卷 ❸存 ❹唐代海雲(一太和八A. D. 834—)集 ❺大正八、藏・二四カ・一)

海雲禪師拾拾集 ❶(日)Kai-un-zen-ji-kan-shō-shū. ❷二卷 ❸存 ❹海雲安易記 ❺文化一三刊 ❻(京大、日大未・五三四)

海雲相承次第記 ❶(日)Kai-un-sō-jō-shi-dai-ki. ❷一卷 ❸存 ❹海雲記 ❺正德二寫 ❻(谷大、餘大・一〇〇五)

海雲第一代國拙禪師行狀 ❶(日) Kai-un-dai-ichi-dai-koku-setsu-zen-ji-gyō-jō. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(正大、一七一・八)

海會演和尙語錄 ❶(日)Kai-e-yen-wa-shō-go-roku. (支) Hai-hui-yen-ho-shang-yu-lu. ❷一卷 ❸存、項邪慧覺和尙語錄之內 ❹宋代才良等編 ❺寫本(京大、藏・一七〇・二)

海槃菩薩品 ❶(日)Kai-ban-bo-sa-hon. (支)Hai-pan-p'u-sa-p'in. ❸存、大方等大集經第八—一一(大正一三No. 397. 8) ❹北涼曇無讖(太元一〇—元嘉一〇A. D. 385—433)譯

海應大和上傳 ❶(日)Kai-ō-dai-wa-jō-den. ❷一卷 ❸存 ❼(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

海學堂臨末口授 ❶(日)Kai-gaku-dō-rin-matsu-kō-ju. ❷一卷 ❸存 ❹旭輝、慧淨記 ❺寬政一二刊 ❻(谷大、宗大・一七一八)寫本(龍大)

海外遺跡探險記 ❶(日)Kai-gai-i-seki-tan-ken-ki. 神州の精華日持聖人海外遺跡探險記 ❷一卷 ❸存 ❹柿花啓正著 ❺大正八刊 ❻(谷大、餘洋・四九六)

海外亮天禪師錄 ❶(日)Kai-gai-ryō-ten-zen-ji-roku. ❷一卷 ❸存、瑞岡珍牛禪師之附錄 ❹海外亮天 ❺大正一〇刊 ❻(駒大) ❼大阪法華寺

海舟言行錄 ❶(日)Kai-shū-gen-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹得東正彥編 ❺明治四〇刊 ❻(駒大) ❼東京光融館

海州廣照寺眞徹大師寶月乘空塔碑 ❶(日)Kai-shū-kō-shō-ji-shin-tetsu-dai-shi-hō-gatsu-jō-kū-tō. (支)Hai-chou-kuang-chao-ssu-chen-che-ta-shih-pao-yueh-ch'eng-k'ung-ta-pei. ❸存 ❹高麗太祖二〇(A. D. 937) ❼(参考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

海洲優婆塞會經 ❶(日)Kai-shū-u-ba-soku-e-kyō. (支) Hai-chou-yu-p'o-sai-hui-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

海住山寺五箇條起請 ❶(日)Kai-jū-san-ji-go-ka-jō-ki-shō. ❷一卷 ❸存 ❹貞慶(久壽二—建保元 A. D. 1155—1213)撰 ❺寫本(谷大、餘大・一六一三)

海上物語 ❶(日)Kai-jō-mono-gatari. ❷二卷 ❸存 ❹正三(天正七—明暦元 A. D. 1579—1655)述 ❺寬文六刊 ❻(帝國、一三九・五四)

海心林葉鈔 ❶(日)Kai-shin-rin-yō-shō. ❷二卷 ❸缺 ❹道範(元暦元—建長四 A. D. 1184—1252)述 ❼(参考) 諸宗章疏錄第三

海水管經 ❶(日) Kai-sui-kan-kyō. (支)Hai-shui-p'i-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

海藏和尙紀年錄 ❶(日)Kai-zō-o-shō-ki-nen-roku. 海藏紀年錄 ❷一卷 ❸存、續群書類從第九 ❹龍泉令淬(一貞治四 A. D. 1365)撰 ❺東福寺十五世として海藏院に住した正覺國師虎關師錬禪師の傳記を法嗣龍泉令淬和尙が撰したものである。虎關は、後宇多天皇弘安元年四月(A. D. 1278)に生れ、三聖寺寶覺眞空に薙髮し、規菴、桃溪、無隱、一山、約翁等に參じ、神儒釋の學を修め、其の才筆學德を以て、後伏見天皇、光明天皇、後村上天皇、光嚴天皇の詔問に奉對し足利尊氏等の歸依を受け、南禪、東福寺に遷住し、濟北庵、淨伽寺等を兼ね、光明天皇貞和二年七月二十四日(A. D. 1346)壽六十九、臘六十にて寂世した。著著に元亨釋書三十卷、濟北集二十卷、佛語心論十八卷等多數の著述がある。龍泉は、後醍醐天皇の庶子と云ひ、虎關に常侍し、淨伽、圓通、博多の承天、京の萬壽寺等に歷住し、貞治四年十二月十一日(A. D. 1365)に寂世したのである。(大久保堅瑞)

海藏和尙行狀 ❶(日)Kai-zō-o-shō-gyō-jō. 海藏和尙虎關行狀 ❷一卷 ❸存、虎關和尙錄之附錄 ❹眞慈(一應安七A. D. 1374)編 ❼(参考) 諸藏目錄

海藏和尙傳 ❶(日)Kai-zō-o-shō-den. 虎關國師傳、東福寺虎關國師傳 ❸存、元亨釋書便蒙之附錄 ❹智達撰 ❺享

保二刊 ⑭(駒大)

海蔵紀年錄 ❶(日)Kai-zō-ki-nen-roku. 海蔵和尚紀年錄 ❷一卷 ❸存、續群書類從第九 ❹龍泉令淬(一—貞治四A.D. 1365)撰 ❼(参考) 日本禪林撰述書目

海蔵寺文書 ❶(日)Kai-zō-ji-mon-jo. 武蔵海蔵寺文書 ❷一卷 ❸存 ❺大正一一冨 ⑭(駒大)

海蔵念佛典決 ❶(日)Kai-zō-nen-butsu-ten-ketsu. ❷三卷 ❸存 ❹定仙述 ❺天保八刊(正大、一五二・一一二)弘化四刊(谷大、宗大・四九二)(龍大・二六八六・一五)(立大、A三〇・一四一) ⑭京都澤田吉左衛門、伊勢寂照寺

海蔵略韻 ❶(日)Kai-zō-ryaku-in. ❸存 ❹虎關師錬(弘安元—貞和二A.D. 1278—1346)撰 ❼(参考) 禪籍目錄

海滴集 ❶(日)Kai-teki-shū. ❷一卷 ❸存 ❹宗吳天柱記 ❼(参考) 日本禪林撰述書目

海東有本現行錄 ❶(日)Kai-tō-u-hon-gen-gō-roku. (支)Hai-tung-yu-pen-hsien-hsing-lu. 新編諸宗教藏總錄、義天目錄 ❷二卷或三卷 ❸存、大正五五・一一六五No. 2184、大日本佛教全書佛教書籍目錄第一 ❹義天(一—建中靖國元A.D. 1101)錄 ❺高麗宣宗七(A.D. 1090)

❻本錄は海東の傳華嚴大教沙門義天の撰述に係るものであつて、其外題を新編諸宗教藏總錄と云ひ、又各卷の內題には海東有本現行錄とある。然し普通には義天目錄と呼び慣らされて居る。章疏目錄の嚆矢をなすものであつて、西紀一〇九〇年頃に宋、遼、日本、朝鮮に流行して居つた經律論の章疏を出來得る限り之を蒐集して記錄したものである。從て本錄が將來されて平安朝の末期以後は、學者が章疏類の有否を論ずる場合には、屢々本錄の記載をその標準となして來たから、其爲に學者間には尊重されて居る經錄である。本錄は筆寫に依て傳へられたのみならず、元祿六年に書肆井上忠兵衛に依て自玄天龍の序を添へて之を刊行されて居る。

本錄の著者義天は高麗の文宗の第四子にして、求法の爲に入宋し、宣宗の三年に高麗に歸り、興王寺に住持した人である。彼は早くより內外の典籍の蒐集に心を用ひ、宋にある間にも釋典經籍一千卷を集め、それを寶と歸つて王に獻じた。王は之を興王寺に藏せしめ、同寺に教藏都監を置き、更に宋、遼、日本より未だ彼土に存せざる聖典を購入し、又宣宗の六年には義天自ら南遊して古書を搜集したから、興王寺の教藏は非常に充實し、三藏の章疏類のみにても一千十部四千七百四十餘卷の多きに上つた。宣宗の七年八月義天は之を錄して海東有本現行錄と名付けて發表し、又本錄に載せられたものは後に全部刊行されたと傳へられて居る。

本錄の組織は上中下の三卷に分れ、上卷には經の章疏、中卷には戒律の章疏、下卷には論の疏鈔を登錄し、上卷には華嚴經の疏を始めとして六百十八部二千七百二卷、中卷には梵網經の疏を始めとして一百四十五部四百六十八卷、下卷には大乘起信論の疏を始めとして三百二十二部一千六百八十七卷、合計一千八十五部四千八百五十七卷である。この數字は義に述べた一千十部四千七百四十餘卷と多少異つて居るけれども、卷數の中には別卷の都合上「一卷或二卷」「五卷或十卷」等と記載して居るものが隨處にあるから、其等の卷數の撰び方に依て大體接近して來る筈である。

義天が何が故に斯る章疏類のみの目錄を撰し、章疏目錄に紀元を與へたかと云へば、彼自身の序に說明して居る如く、一般の經錄に於ては開元釋教錄の如き完全なる經錄が出來て、經論の傳持に便宜を與へて居つても、章疏類の目錄が完成して其等の散逸を防がなければ、佛陀の遺教を完全に護持して行くことが出來ないといふにあつた。

⑦(参考) 諸宗章疏錄第二 (林屋友次郎)

海東紀行 ❶(日)Kai-tō-ki-kō. ❷一卷 ❸存 ❹面山瑞方(天和三—明和六A.D. 1683—1769)撰 ❼(参考) 禪籍目錄

海東古德傑撰片鱗 ❶(日)Kai-tō-ko-toku-ketsu-sen-hen-rin. (支)Hai-tung-ku-te-chieh-chuan-pien-lin. ❷一卷 ❸存 ❹朝鮮御歌編 ❼(参考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

海東高僧著述目錄 ❶(日)Kai-tō-kō-sō-chō-jutsu-moku-roku. (支)Hai-tung-kao-seng-chu-shu-mu-lu. ❷一卷 ❸存 ❹朝鮮御歌編 ❼(参考) 禪籍目錄

海東高僧傳 ❶(日)Kai-tō-kō-sō-den. (支)Hai-tung-kao-seng-chuan. ❷二卷 ❸存、大正五〇・一〇一五No. 2065. 大日本佛教全書第一一四遊方傳叢書第二 ❹高麗覺訓撰 ❺高宗二(A.D. 1215)

❻本書は佛教を朝鮮に流通せしめた諸高僧の傳記を集めたものである。海東とは支那より朝鮮を指して呼べる名稱にして、宋高僧傳の撰者贊寧は屢々同書にこれを用ひてゐる。

本書は朝鮮逸書の一にして黑板勝美氏並鮮の夾、淺見倫太郎氏より氏に贈りたる寫本を原本として用ひられたものなることは大日本佛教全書に記する所である。

本書は秦苻堅の命を受け佛像經論を齎し高句麗國に來り始めて佛教を朝鮮に傳へたる(A.D. 372)順道より釋玄大(A.D. 650頃)に至るまでの諸高僧傳を記せるものである。今左にその目次を示さう。

流通一之一

順道　亡名　義淵
曇始　摩羅難陀　阿道　黑胡子　元表
玄彰　法空　法雲

流通一之二

曇德　明觀　智明　慈育　圓光
安含　胡僧　流支　阿離耶跋摩　慧業
曇和　安弘　玄照　玄畅　玄奘　玄遊　僧哲
慧輪　無名二人
玄大

〔注〕流通一之二　安含の下に安和と原本にあるも安弘の誤りならん。又玄畅の下に原本には名二人とあるも無名二人の誤りならんと考へ、本文にはこれを訂正致した事をこゝに附言する。

(中田源次郎)

海東僧寶傳 ❶(日)Kai-tō-sō-hō-den. (支)Hai-tung-seng-pao-chuan. ❷一卷 ❸存 ❼(参考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

海東佛祖源流 ❶(日)Kai-tō-butsu-gen-ryū. (支)Hai-tung-fo-tsu-yuan-liu. ❸存 ❹朝鮮御歌編 ❼(参考) 禪籍目錄

海南一勺合編 ❶(日)Kai-nan-i-shaku-gō-pen. (支)Hai-nan-i-shao-ho-pien. ❷十卷 ❸存 ❹清代徐白鮑撰 ❺香陀羅山觀音の靈蹟に關する故事、詩文等を收む。

❻光緒一〇刊 ⑭(帝國)二三三・二二二)

海如和上言行錄 ❶(日)Kai-yo-wa-jō-gen-gō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹田中海應編 ❺大正一三刊 ⑭千葉縣德藏寺

海如和上傳 ❶(日)Kai-yo-wa-jō-den. ❷一卷 ❸存 ❹田中海應編 ❺大正一三刊 ⑭千葉縣德藏寺

海八德經 ❶(日)Kai-hat-toku-kyō. (支)Hai-pa-te-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❼(参考) 出三藏記第四、三寶紀第四

海八德經 ❶(日)Kai-hat-toku-kyō. (支)Hai-pa-te-ching. (巴)A. VIII. 20 Uposatha. ❷一卷 ❸存、大正一・八一九No. 33、縮宿七、卍一四・三、北781鼎、南794鼎、元785鼎、明北656壁、清656壁、麗785言、天78ノ鼎、指742言、法770言、至1017從、明南656尺、Nj. 672 ❹鳩摩羅什(建元二—義熙九A.D. 344—413 一說弘始一一寅)譯 ❻錢泰弘始四—一四(A.D. 402—412)

❻この經典は、中三七鬱波經(大正一・四七八b)、A. VIII120 Uposatha恆水經(大正一・八一七法炬譯)、法海經(大正一・八一八)、增四八・二(大正二・七八六a)の前半Cullavagga IX 1、五分律二八(大正二二・一八〇)と及びこの經典との八本があり、經錄に依ればこの外に海有八事經があつたやうであるが、今は缺譯である。この八本の中、恆水經は大乘化したる經典にて、最も異なり、他はそれ〴〵異なる所があり、皆原本を異にするものである。中とA.が最も善く相應してゐる。內容は十五日の說戒の日に、鬱波國の恆伽河畔に佛を初め衆僧が集まり、既に時が來たけれども座中に汚穢の比丘あるが爲めに、佛說戒し給はず。目連がその佛意を知りてその比丘を引きづり出した後に、佛は僧伽の德を述べて、海の八德に比し給ふたものである。この經典は鳩摩羅什譯と云はれて居るけれども實はさうではなく、竺法蘭の譯であらう。

⑦(参考) 開元錄第四、貞元錄第六 (赤沼智善)

海福獨本禪師語錄 ❶(日)Kai-fuku-doku-hon-zen-ji-gō-roku. 獨本禪師語錄 ❷二卷 ❸存 ❹獨本性源(元和四—元祿二A.D. 1618—1689)語、道珠編 ⑦(参考) 禪籍目錄

海峯集 ❶(日)Kai-hō-shū. (支)Hai-feng-chi. ❷一卷 ❸存 ❹朝鮮海峯著 ⑦(参考) 朝鮮佛教總書刊行豫定書目

海龍王經 ❶(日)Kai-ryū-ō-kyō. (支)Hai-lung-wang-ching. (梵)Sāgara-nāgarāja-paripṛcchā(藏傳)(藏)Hphags-pa-klu-rgyal-gyi-rgya-mtsho-shus-pa-shes-bya-ba-theg-pa-chen-poi-mdo. ❷四卷 ❸存、大正一五・一三一No. 598、縮字九、卍一二・五、北579鼎、南590鼎、天597鼎、明北452景、清452景、麗377改、天597鼎、指359改、法571改、至597改、明南597鼎、Nj. 456 ❹竺法護譯 ❻西晉太康六(A.D. 285)

❻本經は海龍王問總持品又は集諸法實淨法門品とも云はれ、半前は靈山に於ける說法であり、後半は龍宮に於て說かれたもので、海龍王の爲に、菩薩の所行並に大乘無盡の法を述べたものである。

(行品)海龍王が佛に、菩薩が惡趣を棄て、諸を超え、諸佛を離れず、善友に依ふ等約五十項に亘つて、その修すべき所を貫すので、佛は一一法數に依つて答へられるので、(分別品)この說法を聞いた諸天は、かの波羅奈の夫に對して、是を再轉の法輪と名け、(六度品)菩薩所行の六度は、凡て智慧を以て建立せられてゐることを述べ、(無盡藏品)菩薩は人の爲に說法するも、人とは名のみにして、空・無想・無願なるを說くに始まり、否定的態度で佛道には文無く、佛言にも言無し、跡無く想無く、名無く思無きが、即ち佛數で、是を昏に隨つて說くが佛言なりとして諸法の無盡なることを述べる(卷一)。(總持品)更に四法を以て無盡の藏・總持を說き、之が德を示し、この無盡の藏・總持を得れば、究竟して本淨なることを述べ、(總持身品)この藏に住したる菩薩の諸力を述べ、(總持門品)無盡藏王の物語を出して、この總持は八萬四千の法藏・行・三昧の首であり、之を受持するものは三十二の無長を得る。(分別名品)この龍王に今亦この說を聞いて道意を發し、未來は成佛すべきことが說かれ、(授決品)龍王の眷屬の多いのは、戒行不具で、龍中に生ずるもの多きが救す所と云ひ、龍王の一子に記別が授けられる(卷二)。(請佛品)龍王は海中の有情の爲に、佛を龍宮に請ずると、彼の化作した實際によつて降り、(十德六度品)龍王に對して大海の有情、形貌の異るのは罪福に因るので、皆これ心によつて得る所なるを說き、之を駁するには十善六法を行ずべきを云ひ、(燕居阿須倫受決品)燕居無善神に對して、菩薩は八法あつて諸德を超え、四事あつて身の長大等を得ることゝ記別とが說かれ、(無焚龍王受決品)人は空にして無我なりと解するが受決であり、諸法の平等無異なるを覺了するが成道である旨が說かれ、(女寶錦受決品)龍女寶錦が、女身にて成佛せざれば男身にても成佛せざらん、道心には男女なしとて、男女の別を排して成佛の記を受け、(天帝釋品)阿修羅が天と鬪ふや、互に怨を結び讎を起すので、諸忉利天と無善神(阿修羅)とを和せしめんことを帝釋が乞ふ、佛は無常の理を說いて和せしめる(卷三)。(金翅鳥品)諸龍は金翅鳥の爲に食せられるので擁護を求めると、佛は衣を與へてその鎧を持たん者はかの鳥に犯觸せられざるを述べて授記せられ、金翅鳥には衆

生の命を害して身を養ふべからざることを説いて授決せられ、(舎利品)佛は無縁の慧あり、功徳自在なれば、佛の滅後、この大海に舎利を留めて供養するを得しめたまはんことを諸龍が請ひ、(法供養品)大海に法数を殺して佛は寶山に歸り、更に如来を供養する法が説かれ、次で阿闍世王が來つて、この龍の過去の物語と授記とが述べられ、(空淨品)決を受けた龍王が、王に對して、一切諸法の無想無願であることを述べ、(嘱累受持品)經の附嘱と受持とがあつて終る(巻四)。

かく經は二十品に分たれるが、その主とする所は、無盡藏品の至總持身品に説く所、即ち大乘の法を無盡藏總持として示す所にある。而もその説相が消極的であるのは、般若の影響を多分に表はしてゐる。又安樂集の下には、本經行品中の第二「八事あつて諸佛を離れず……常に諸佛を念じ……佛の名を聞いて彼の國に願生し云々」とあるに依つて、海龍王が阿彌陀佛國に往生すべき修行を問うたのに對して、佛の説示された所とし、又慧遠が嘗て、本經を通して雨を乞ひ、瓦蛇の瑞を感じたのから、雨乞の時には、屢來多く此の經を誦し、我が國でも奈良朝時代には盛に流行したものであるといふ。

❼(参考)　出三藏記第二、三寶紀第六、内典錄第二、譯經圖紀第二、開元錄第二、貞元錄第三、第四　(蓮澤成淨)

海龍王經　❶(日)Kai-ryō-ō-kyō.　❷一卷　❸缺　❹西晉代帛法祖譯　❼(参考)　開元錄第一四、貞元錄第二四

海龍王經　❶(日)Kai-ryō-ō-kyō.　(支)Hai-lung-wang-ching.　❷四卷　❸缺　❹北凉曇無讖(一玄始三 A. D. 414—)譯　❼(参考)　仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一四、貞元錄第二四

晦菴光狀元和尚語要　❶(日)Kwai-an-kō-jō-gen-wa-shō-go-yō.　龜山晦菴光狀元和尚語要　❷一卷　❸存、卍續二・二四・一　❹宋晦菴彌光(一紹興二五 A. D. 1155)説

❺大慧宗杲禪師の法嗣にして南岳下十六世たる泉州報恩寺晦菴彌光禪師の上堂語要十五、法語一、拈古二を收めたものである。彌光は閩人李氏の子、十五歲にして開岩文慧禪師に祝髮し圓悟、黃檗琳、高菴悟等の諸尊宿に歷參し大慧宗杲に嗣法した。別號を光狀元と云ひ、泉州報恩寺に住すること十年の後、福州龜山に移り、南宋高宗紹興二十五年二月十五日(A. D. 1155)寂した。機緣悟由は宗門統要續集第二十二卷、聯燈會要第十七卷、嘉泰普燈錄第十八卷、五燈會元第二十卷、續傳燈錄第三十二卷、禪宗正脈第二十卷、佛祖綱目第三十七卷、教外別傳第十卷、五燈嚴統第二十卷、高僧摘要第一卷、明高僧傳第六卷、續指月錄第一卷等にも收められて居る。　(大久保堅璃)

晦巽傳祕訣　❶(日)Kwai-ton-ki-ketsu.　❷一卷　❸存　❹寫本(寶龜院)

晦翁悟明禪師語要　❶(日)Kwai-ō-go-mei-zen-shi-go-yō.　(支)Hui-weng-wu-ming-chan-shih-yü-yao.　❸存、卍續二・二四・一、續古尊宿語要四　❹晦翁悟明

❺木庵安永の法嗣にして南岳下十八世たる晦翁悟明禪師の語要で、續古尊宿語要卷四には上堂語要二則を收めて居る。續傳燈錄卷三十五、聯燈統卷二十二等にも亦その本錄及び語要を收めて居る。泉州崇福寺に住し、その著聯燈會要三十卷は叢林に珍重されて居る。　(大久保堅璃)

晦御念誦次第　❶(日)Kwai-go-nen-ju-shi-dai.　❸存　❹寫本(寶龜院)

晦山顯和尚語錄　❶(日)Kwai-zan-ken-wa-shō-go-roku.　❷二十七卷　❸存　❹唐正論語、元珍編　❺寫本(京大、藏・一七カ・二)

晦臺元鏡禪師語錄　❶(日)Kwai-dai-gen-kyō-zen-ji-go-roku.　(支)Hui-t'ai-yüan-ching-ch'an-shih-yü-lu.　❸存、卍續二・三〇・一　❹晦臺元鏡(一泰昌元 A. D. 1620—)語、道盛編

❺青原下三十五世にして無明慧經禪師の法嗣、建陽東苑晦臺元鏡禪師の語錄を嗣法門人たる浦城參筆山の疊浪道盛和尚が編纂したものである。明の泰昌元年冬(A. D. 1620)建陽一枝山に於ける結制開堂の上堂小參示衆十數則、拈頌偈贊の内、拈古十三則、五位正偏頌、三玄三要頌及び其の他の偈贊四十首を收め、黃論伯の撰文、疊浪道盛の立石せる晦臺元鏡禪師の塔銘を添へ、更に疊浪道盛の撰文に成る建昌龍山の龐空常忠禪師の傳を附して居る。塔銘に據れば、晦臺の語錄一卷を西陵の李宋華序を撰して刻行し現に流刊行本あり、また別に山居詩集一卷ありと記して居る。　(大久保堅璃)

晦堂和尚語錄　❶(日)Kwai-dō-wa-shō-go-roku.　(支)Hui-t'ang-ho-shang-yü-lu.　資壁頭心禪師語錄話要　❷一卷　❸存、卍續二・二五・二　❹宋資壁頭心語

晦夫集　❶(日)Kwai-fu-shū.　❸存　❹信仲以寫(一寶德三 A. D. 1451)撰　❼(参考)　禪籍目錄

開韓試問四十二章答　❶(日)Kai-kan-shi-mon-shi-jū-ni-shō-to.　❷一卷　❸存　❹元諱重空(承應元—元文四 A. D. 1652—1739)撰　❺享保二刊　❻(谷大、餘大・五四八)(龍大、二六五・五)(立大、八一二・四九七)

開會神道　❶(日)Kai-e-shin-tō.　❷一卷　❸存、泰雲尊者全集第一〇　❹泰雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)述

開莚書說　❶(日)Kai-en-sho-setsu.　❷一卷　❸存、白隱慧鶴(貞享二—明和五 A. D. 1686—1768)述、東胡編

開戒手讀　❶(日)Kai-kai-te-kaku.　❷一卷　❸存　❹鼎谷元定編　❼(参考)　禪籍目錄

開覺自性般若波羅蜜多經　❶(日)Kai-kaku-ji-shō-han-nya-ha-ra-mi-ta-kyō.　(支)Kai-chüeh-tzu-hsing-pan-jo-po-lo-mi-to-ching.　❷四卷　❸存、大正八・八五四 No. 251、韶月九、卍續一・一・四、龍1514番　❹宋施淨(一大中祥符六 A.

D. 1013—)譯

❸五蘊乃至諸法の自性は、無所得の般若波羅蜜なることを、開顯し覺悟せしむるを主としたもので、全編皆須菩提に對する佛の無問自説である。同じく般若部に屬する經ではあるが、他のそれと異りて、積極的な説相が目立つてゐる。

初に五蘊は無相の法なるを明すれば、諸苦自ら止むべく、衆相皆寂靜なるを解すること、これ菩薩の所行なるを示し、次で法の開と明とは平等で、是に解入すれば菩提を得ることを述べ、進んで諸の邪説を出して之を破し(巻一)、次に五蘊に於て信解心・厭離心・不壞心の三種の種子を具すれば淨法とし、又無著・無和合・淸淨の三心を發して、如實平等に觀察すれば菩提の果を得べきを説き、更に菩薩の解脫を得るものと、得難きものとの所解を列し、貪瞋癡慢(巻二)、見疑等に於て、捨離すべき五法、並に四無量六度の法に於て修すべき五相を示し(巻三)、次で菩薩が善知識に親近し、如來を供養すべき五相を擧げ、菩薩が有相と無相との六波羅蜜を行じて、理の如く相應すれば、これ六波羅蜜を圓滿することを述べ、空・無相・無願の三摩地を了すべきことを説いて、最後に三種の義を以て、諸法の無常・苦・無我・涅槃寂靜なる旨を述べてゐる(巻四)。

以上の如き經の體裁から推じて、本經は、出來上つた般若思想を飛想し、之に據つて般若の綱格を示さんとしたものといふべく、始に般若説の誤解と覺しきものを列擧し、中頃捨離すべき法と、修すべき所とを示し、終に般若の四德を以て結んでゐるあたりは、般若經中に於ても、比較的後期に成れるを示すものと見ることが出來やう。　(蓮澤成淨)

開甘露門　❶(日)Kai-kan-ro-mon.　(支)Kai-kan-lu-men.　❸存、卍續二・一六・五　❹幻住庵清規附錄　❺元中峰明本(景定四—至治三 A. D. 1263—1323)述

❻南岳下二十二世中峯明本禪師の撰に成る施餓鬼會の施食の次第、法文及び疏である。中峯その施餓鬼に對しては「神心到ぜず、法性遍周なり。既に生滅の因無し、安んぞ昇沉の跡有らんや。」……其の逢ふに當りては即ち寶の絲網成な是れ鐵圍となり、悟時に至るに及んでは惟だ獅吼の山俱に金地となる。故に名數に言ふあり、生にして無生、法性漠然たり。無生にして生、業果儼然たりと、是を法に定相なく念に隨つて變遷すと謂ふ。」と明快なる意見を開陳して居る。無生にして生、業果儼然たるが故に甘露の供養物を獻じ、神呪を誦し加持して誠心を運び六道の群靈を拔出せんとするのである。　(大久保堅璃)

開疑鈔　❶(日)Kai-gi-shō.　❷五卷　❸缺　❼(参考)　淨土眞宗教典志第二

開經偈和解　❶(日)Kai-kyō-ge-wa-ge.　❷一卷　❸存　❹中村寂靜編　❺大正五刊　❻東京精巧圖會

開化魔經　❶(日)Kai-ke-ma-kyō.　(支)Kai-hua-mo-ching.　❷一卷　❸缺　❹失譯　❺大集方等分の抄出　❼(参考)　出三藏記第四、仁壽錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

開華院法住師手記錄　❶(日)Kai-ke-in-hō-jū-shi-shu-ki-roku.　❷一卷　❸存　❹開華院法住(一明治七 A. D. 1874)記　❾寫本(谷大、宗大・四一四二)

開華院法住師日記　❶(日)Kai-ke-in-hō-jū-shi-nik-ki.　❷三卷　❸存　❹開華院法住(一明治七 A. D. 1874)記　❾自筆本(谷大、宗甲・二七)

開元詩格　❶(日)Kai-gen-shi-kaku.　(支)Kai-yüan-shih-ko.　❷一卷　❸缺　❹徐陵奉(書然)記　❼(参考)　日本國承和五年入唐求法目錄、入唐新求聖教目錄

開元寺求得經疏記等目錄　❶(日)Kai-gen-ji-mo-to-me-kyō-sho-ki-tō-mo-ku-roku.　(支)Kai-yüan-ssu-ch'iu-te-ching-shu-chi-teng-mu-lu.　❷一卷　❸存、大正五五・一〇九二 No. 2169、大日本佛教全書第二八智證大師全集第四　❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891 一説寛平四、年七八歲)錄

❺本錄はその外題を開元寺求得經疏記等目錄となし、その內題を日本國求法僧圓珍目錄となして居る。普通智證大師目錄又は圓珍目錄の名で總稱されて居る開元寺求得經疏記等目錄、福州溫州台州求得經律論疏記外書等目錄、青龍寺求法目錄、日本比丘僧圓珍入唐求法目錄、智證大師請來目錄の五部目錄の中の一つである。而してその中前四者は隨身目錄であつて、彼が入宋求法の節蒐集した經論等を整理手控へした目錄であり、後の一つは巡官目錄と呼ばれるもので、入宋中に蒐集した經論等を太政官に進獻した時の目錄である。

爰に解説される開元寺求得經疏記等目錄は、智證大師圓珍が入唐求法の節、福州開元寺に居つて蒐集した經疏記等を手控へした目錄である。彼の入唐は唐の宣宗大中七年(文德天皇仁壽三年)の八月であつて、唐商の船に乘じて福州の逸江縣に着し、其年の十月溫州に入る迄福州の開元寺に滯在して居つた。其間に蒐集した經疏記等が四十六部一百五十六卷及び梵夾二夾に上つたのでこの開元寺求得經疏記等目錄である。彼はそれより溫州の開元寺に入り、又其年の十二月に台州の國淸寺に移つた。其間に寫得した經疏記等が更に三百卷に上つた。これに前記の開元寺求得經疏記等目錄にあるものを合して總計四百五十八卷のものを錄したものが福州溫州台州求得經律論疏記外書等目錄である(唯開元寺錄にある城都抄一卷及び四分律科文一卷の都合二部二卷だけが福州溫州台州目錄の中に拔けて居る)。故に、開元寺求得經疏記等目錄は福州溫州台州求得經律論疏記外書等目錄の中にその中の唯二部二卷を除いた全部のものが重複記載されて居るものである。又青龍寺求法目錄は彼が大中九年九月長安の青龍寺に行つた時に寫得したものの目錄であつて、本錄の內容は前記の福州溫州台州目錄とは全然別物でその中に重複したものがない。彼は青龍寺を出でた後も長安洛陽の地を遊歷し、又越州の開元寺に到り、大中十

年の六月には合州の國清寺に再び戻つて來て居る。かく二度目に國清寺に戻つて來る迄に集めたものをば大中十一年の十月に一度取纏めてそれを目錄になして居る。それが日本比丘僧圓珍入唐目錄である。故に、この日本比丘僧圓珍入唐求法目錄中には福州溫州台州求得經律論疏記外書等目錄（其中に開元寺求得經疏記等目錄中二部二卷を除ける其他の全部を含む）及び青龍寺求法目錄と、その以外の場所に於て集められたものが含まれて居らなければならない筈である。然し實際に內容を比較して見ると、青龍寺目錄にあるものは全部含まれて居るけれども、開元寺目錄や福州溫州台州目錄にあるもので洩けて居るものが多くない。開元寺目錄にあつて圓珍入唐求法目錄に存しないものを擧ぐるならば、無相論二卷、道基鈔六卷、和上變像一鋪、梵字無礙大悲心陀羅尼一夾、觀世音菩薩像一卷、法華經疏十卷、涅槃經疏十卷、相思詩一卷、四分律科文一卷、城都抄一卷の十點である。開元寺目錄や福州溫州台州目錄にあるもので圓珍入唐求法目錄に缺けて居るものを通觀するに、大體眞言經軌に關するもの、既に其當時日本に將來されて居るもの、及び純然たる彼自身の態味に關係して居るもののみのやうであるから、恐らくこの圓珍入唐求法目錄なるものは、彼が歸朝後太政官に提出すべき進官目錄の原稿として作られたものであらう。この圓珍入唐求法目錄が作られた大中十一年の十月から大中十二年五月迄の間に蒐集したものを追加すると共に、既に圓珍入唐求法目錄に記載したものであつても、之を提出する必要がないと認めたものを除き、進官目錄としての智證大師請來目錄が作られて居る。開元寺求得目錄に記載して居るものの中、圓珍入唐求法目錄にあつて、智證大師請來目錄中に缺けて居るものは孫名經疏三卷、四分律音訓上下合一卷の二部五卷である。（林屋友次郎）

開元寺微詩錄 ❶(日)Kai-gen-ji-mi-shi-roku.(支)K'ai-yüan-ssŭ-wei-shih-lu. ❷二卷 ❸存 ❹黃慎淨著 ❺(京專)

開元釋教廣品歷章 ❶(日)Kai-gen-shaku-kyō-kō-hon-ryaku-shō.(支)K'ai-yüan-shih-chiao-kuang-p'in-li-chang. ❷三十卷 ❸缺 ❹玄逸記 ❼(參考)智證大師請來目錄、東域傳燈目錄卷下

開元釋教錄 ❶(日)Kai-gen-shaku-kyō-roku.(支)K'ai-yüan-shih-chiao-lu. 開元目錄、開元錄 ❷二十卷 ❸存、大正五五・三七二 No. 2154、續結四—五、卍二九・二—四、北1065笠現、南1081笠昇、元1076笠昇、明北1429率駕肥、清1558塔武丁、麗1068笠昇勝、天1055笠昇、指1024笠星勝、法1051笠昇勝、至1541塔更、明南1526宗至輝、M. 1435 ❹智昇(總章元—開元二八 A. D. 654—740)撰 ❺唐開元一八(A. D. 730)

❻開元釋教錄は京兆西崇福寺沙門釋智昇の撰集に係る一切經目錄であつて、普通略して開元錄と呼ばれて居る。智昇の撰述に係る經錄は本錄以外に續大唐內典錄一卷、續古今譯經圖紀一卷、開元釋教錄略出四卷等のものがある。皆共に開元錄の撰集と同時の開元十八年の撰集になつて居る。本錄はその卷第一に於ける總序及びその卷第九の智昇自身の撰著の自記中にもそれを記して居る如く、彼が藏經を閲するに當り、出三藏記集を始めとして法經、費長房、道宣、其他の諸經錄を參校するに、その記事に誤譯缺陷殆からざるを發見し、之を遺憾として諸經錄の記載を比較研究し、之を藏經の實際の內容と對照し、多年苦心の結果開元十八年に至つて本錄及び前揭の三錄を公にするに至つたものである。本錄はかく多年諸經錄を比較研究することに依て出來たもので、本來は純然たる私撰の經錄であつたけれども、宋の高僧傳の著者贊寧がこれを評して「經法之譜無出昇之右」と云ひ、又四庫全書總目提要の撰者が「佛氏舊文鼓爲大備」と嘆じて居る位經錄として從來存したものより傑出して居つた爲に、後に勅して大藏に編入せられたるのみならず、本錄の現定入藏目錄の內容たる總一千七十六部五千四十八卷の衆經は、其後の入藏經の標準として公認せられ、勅撰入藏錄以上の價値が認められるゝに至つた。現に刊行藏經の先驅をなした宋版諸大乘經の如き皆本錄の入藏錄を基準に雕印されて居るのである。

本錄の組織に就て云へば、全體を總別の二錄に分ち、總錄は總括群經錄と名づけ、後漢より本錄が撰集された唐の玄宗の開元十八年に至る迄の譯經三藏の記傳と、其等の譯經三藏の譯出經を時代順に記載せるものであつて、所謂代錄と云はるゝものに當つて居る。別錄は別分乘錄と名付けられ、其中には有譯有本錄及び有譯無本錄の二錄から成る刊定入藏錄と、大乘經律論入藏目錄、小乘經律論賢聖集傳入藏目錄の二錄より成る現定入藏錄とのこの二つの入藏錄をその基本となし、それに本錄と他の經錄との相違點、總括群經錄の內容と刊定入藏錄の內容との相違點、及び刊定入藏錄と現定入藏錄との關係を明かにすることを目的とした從屬の經錄たる刪略繁重錄、拾遺補闕錄、疑惑再詳錄、僞妄亂眞錄の四錄を收めて居る。以上の諸錄と諸卷の關係を表に示せば次の如し。

總錄 總括群經錄 自第一卷至第十卷

- 有譯有本錄 自第十一卷至第十三卷 三卷
- 有譯無本錄 第十四卷及第十五卷 二卷
- 支謙別行錄 第十六卷 一卷

刊定入藏錄

別錄

- 刪略繁重錄 第十七卷 合二錄 一卷
- 補闕拾遺錄
- 疑惑再詳錄 第十八卷 合二錄 一卷
- 僞妄亂眞錄

從屬目錄

- 大乘經律論入藏目錄 第十九卷 一卷
- 小乘經律論賢聖集傳入藏目錄 第二十卷 一卷

現定入藏錄

以下其等の諸目錄の特質に就て略說しよう。

（一）總括群經錄　この錄は歷代三寶紀及び大唐內典錄の代錄の記載を基礎として、其等を一層完全なものに整理修正して居るものであつて、後漢の孝明皇帝永平十年より唐の玄宗皇帝開元十八年に至る迄の凡そ六百六十四年間に於ける東來入竺の傳譯編素及び此土賢聖集傳の撰者者等百七十六人の譯著書及び失譯の聖典凡そ二千二百七十五部七千四十六卷を後漢、曹魏、吳、西晉、東晉、苻秦、姚秦、乞伏秦、前涼、北涼、劉宋、蕭齊、蕭梁、元魏、高齊、北周、陳、隋、李唐の十九代に時代的に分類し、各時代毎にその時代の簡單なる說明と、その時代に於ける譯者と譯經の數を提綱し、又各時代の中に於てはその時代に於ける譯經を譯者別に分類し、各譯者の譯經を一目瞭然たらしむると共に、一々の譯經にはその具名、略名、異名、卷數、飜譯の年時、譯場及び筆受潤文等の關係者、有譯たるや失譯たるや、單譯なりや重譯なりや、大乘なるや支派別生經なるや等、凡そ判定入藏目錄の撰集に當つて必要なる事項をば、先出經錄の研究と實際藏經の內容を考査した結果の上から一々その出所典據を記載して示して居る。猶此錄の卷第十の一卷は彼列古今諸家目錄なるものに當てられ、其中に於て開元錄以前の諸經錄の錄名、撰集者、その撰集の時代、現存の有無、その內容及び組織の梗概を揭げたる上、其等の經錄の長所短所に對して極めて適切な短評を加へて居る。これは經錄の研究者使用者に對して非常に有益な暗示を與へるものである。この錄の記載內容と各卷との關係は次の如くである。

- 第一卷
  - 後漢　從明帝永平十年丁卯至獻帝延康元年庚子。凡一十一帝一百五十四年　所出聖典　一百五十一部二百三十七卷
    - 傳譯編素　一十二人
    - 失譯經　一百四十一部一百五十八卷
    - 總計　二百九十二部三百九十五卷
  - 內　現在　九十七部一百三十一卷　闕　本　一百九十五部二百六十四卷
  - 曹魏　自文帝黃初元年庚子。至元帝咸熙二年乙酉。凡經五帝四十六年　所出聖典　一百〇二部一百五十六卷
    - 傳譯沙門　五人
    - 內　現在　四部五卷　闕　本　八部一十三卷
  - 吳　從孫權黃武元年壬寅。至孫皓天紀四年庚子。凡經四主五十九年　所出聖典　一百〇二部一百五十六卷
    - 傳譯編素　五人
    - 失譯經　八十七部二百六十一卷
    - 總計　一百八十九部四百一十七卷
- 第二卷
  - 西晉　起武帝大始元年乙酉至愍帝建興四年丙子凡經四帝五十二年　所出聖典　二百七十二部五百三十四卷
    - 傳譯編素　一十二人
    - 失譯經　五十八部五十六卷
    - 總計　三百三十部五百九十卷
  - 內　現在　一百五十六部三百二十一卷　闕　本　一百七十七部二百六十九卷
- 第三卷
  - 東晉　從元帝建武元年丁丑。至恭帝元熙二年庚申。凡一十一帝一百四年　所出聖典　一百二十八部四百二十卷
    - 傳譯編素　一十六人
    - 失譯經　四十部四十八卷
    - 總計　一百六十八部四百六十八卷
  - 內　現在　五十五部三百三十六卷　闕　本　八十三部一百三十三卷
  - 苻秦　起苻建皇始元年辛亥。至苻登太初九年甲午。凡經五主四十四年　所出聖典　一十五部百九十七卷
    - 傳譯沙門　五人
    - 內　現在　七部六十五卷　闕　本　八部一百三十二卷
  - 姚秦　起姚萇白雀元年甲申。至姚泓永和三年丁巳。凡經三主三十四年　所出聖典　九十四部六百二十四卷
    - 傳譯沙門　五人
    - 內　現在　六十六部五百二十八卷　闕　本　二十八部九十六卷
  - 乞伏秦　從乞伏國仁建義元年乙酉。至乞伏暮末永弘四年辛未。凡經四主四十七年　所出經　十五部二十四卷
    - 傳譯沙門　一人
    - 前三秦代失譯經　四十一部八十六卷
    - 總計　五十六部一百一十卷
    - 內　現在　三十二部七十九卷　闕　本　二十四部三十一卷
- 第四卷
  - 前涼　從張軌永寧元年辛酉。至天錫咸安六年丙子凡經八主七十六年　所出聖典　四部六卷
    - 外國優婆塞　一人
    - 內　現在　一部一卷　闕　本　三部五卷
  - 北涼　自蒙遜永安元年辛丑。至茂虔永和七年己卯。凡經二主三十九年　所出聖典　二十九部二百三十六卷
    - 傳譯編素　九人
    - 失譯經　五十三部七十五卷

- 總計　八十二部三百一十一卷
  - 內　現在　二十五部二百九卷　闕　本　五十七部一百二卷
- 第五卷
  - 劉宋　自武帝永初元年庚申。至順帝昇明三年己未凡八主六十年
    - 傳譯編素　二十二人　所出聖典　九十三部二百四十三卷
    - 失譯經　三百七十二部四百七十四卷
    - 總計　四百六十五部七百一十七卷
    - 內　現在　九十三部二百四十三卷　闕　本　三百七十二部四百七十四卷
  - 蕭齊　自高帝建元元年己未。至和帝中興二年壬午。凡經七主二十四年
    - 傳譯沙門　七人　所出聖典　一十二部三十三卷
    - 內　現在　七部二十八卷　闕　本　五部五卷
  - 蕭梁　自武帝天監元年壬午至敬帝太平二年丁丑。凡經四主五十六年
    - 傳譯編素　八人　所出聖典　三十二部一百七十六卷
    - 失譯經　一十四部二十五卷
    - 總計　四十六部二百〇一卷
    - 內　現在　四十三部一百九十一卷　闕　本　六部一十卷
  - 元魏　從道武帝皇始元年丙申。至孝靜東魏孝靜帝武定八年庚申。凡一十三帝一百十五年
    - 傳譯編素　一十二人　所出聖典　八十三部二百七十四卷
    - 內　現在　七十三部二百五十五卷　闕　本　一十部一十九卷
  - 高齊　從文宣帝天保元年庚午至高恒承光元年丁酉。凡經六主二十八年
    - 傳譯編素　二人　所出聖典　八部五十二卷
    - 內　現在　八部五十二卷
  - 北周　從閔帝元年丁丑至靖帝大定元年辛丑。凡經五帝二十五年
    - 傳譯沙門　四人　所出聖典　一十四部二十九卷
    - 現在　六部一十一卷　闕　本　八部一十八卷
  - 陳　自武帝永定元年丁丑。至煬帝禎明三年己酉。凡經五主三十三年
    - 傳譯編素　三人　所出聖典　四十部一百三十三卷
    - 內　現在　二十六部八十九卷　闕　本　一十四部四十四卷
- 第七卷
  - 隋　自文帝開皇元年辛丑。至恭帝義寧二年戊寅。相承三帝三十八年
    - 傳譯編素　九人　所出聖典　六十四部三百一卷
    - 現在　六十二部二百八十七卷　闕　本　二部十四卷
  - 李唐　自高祖武德元年戊寅。至玄宗開元十八年庚午。餘五后。凡一百一十三歲
    - 傳譯編素　三十七人　所出聖典　三百〇一部二千一百七十卷
    - 現在　二百八十一部三千一百四十三卷　闕　本　二十部二十七卷
- 第八卷
- 第九卷
- 第十卷　叙列古今諸家目錄

第十卷　叙列古今諸家目錄

(二)刊定入藏錄中有譯有本錄　刊定入藏錄は曾て翻譯せられた諸聖典をば、それが現存せると否とに係らず、其等の總てを統一的に集錄した目錄であつて、經藏を周備する場合に若し集められゝばこれだけのものを集めなければならないと云ふことを示した過去翻譯聖典の總目錄である。尤も開元錄自體の上では刊定入藏錄と云ふ名稱は使用して居らないけれども、別分乘錄中の有譯有本錄及び有譯無本錄の二錄がそれを構成して居るものである。爰に有譯有本錄、有譯無本錄といふ名稱が附せられて居るけれども、その內容を檢する時はその中には有譯經のみを集めたものではなく、失譯經も全部含まれて居るから、恐らく本來は有無譯有本錄、有無譯無本錄とあつたものを、傳寫の際に有無譯といふ意味を解しなかつた結果、無字を脫漏したものであらう。

先づ有譯有本錄の內容から說明するに、この錄は開元錄卷第十一より第十三に至る三卷を占め、別分乘錄の冠頭に載せられて居るものである。而して、その目的は現存聖典を一目瞭然たる形式に分類組織せんことを主眼としたものであつて、聖典を大別して菩薩三藏(卽ち大乘)、聲聞三藏(卽ち小乘)、及び賢聖集傳の三類に分ち、菩薩三藏と聲聞三藏とは共に之を經律論の三藏及び賢聖集傳の四に分類し、賢聖集傳は之を梵本翻譯集傳と此方撰述集傳とに分つて居る。更に、大乘經、小乘經の二門の中を單重合譯錄と單譯錄とに分類して居るのである。爰迄は大體に於て大周刊定衆經目錄の組織を襲用したものであるが、本錄の特徵は其上に大周刊定衆經目錄がその着想を有し乍ら之を實現することを得なかつた教理的見地に立つた分類を試みて居ることであつて、例へば大乘經單重合譯の內容に於ては、般若、寶積、大集、華嚴、涅槃、其他に衆經を分類し、小乘經錄に於ては單重合譯錄の中に於て根本四阿含、長、中、增一、雜、其他の五部に分類し、小乘律をば訓伏藏と脊屬とに分ち、大乘論藏は釋教論と集議論に、小乘論藏は有部根本身足論と有部及餘支派論とに分つて居る如き、この時代に至つては教判に對する研究が一般に徹底し、佛教の內容系統が大體に如何なる佛教研究家にも理解されて來て居つたのであるから、此種の分類が一般學者に對して非常なる便宜を與へたといふことは爰に言を俟たないところである。有譯有本錄の內容を見易きやうに圖示するならば次の如くである。

- 有無譯有本錄
  - 第十一卷　菩薩三藏經
    - 菩薩契經藏　(五百六十二部二千一百三十三卷)
      - 大乘經單重合譯　(四百三十三部一千八百八十六卷　一百七十九帙)
        - 寶積經新舊譯　二十一部七百五十六卷　二十七帙
        - 大集經新舊譯　二十部二百四十三卷　二十四帙
        - 華嚴經新舊譯　二十六部二百八十七卷　二十帙
        - 涅槃經新舊譯　六部五十八卷　六帙
        - 五大部外諸重譯經　三百七十三部五百八十八卷　六十一帙
      - 大乘經單譯　一百三十一部二百九十三卷五十一帙
    - 菩薩訓伏藏　二十六部五十四卷五帙
      - 大乘釋經論　二十一部一百五十五卷　一十五帙
      - 大乘集義論　七十六部三百六十三卷　三十五帙
    - 菩薩對法藏　(九十七部五百一十八卷　五十帙)
  - 第十二卷　菩薩三藏經　(六百八十二部七百四十二卷　五卷二百五十八帙)
- 第十三卷ノ中　聲聞三藏錄
  - 聲聞契經藏
    - 大乘經單重合譯
      - 根本四阿含經　五部二百三卷
      - 長阿含中別譯經　一十三部四十二卷
      - 中阿含中別譯經　五十三部五十三卷
      - 增一阿含中別譯經　二十四部二十四卷
      - 雜阿含中別譯經　四十二部五十六卷　一十六部一十六卷
    - 小乘經單重合譯　(一百五十三部三百九十四卷)
    - 小乘經單譯　八十七部二百二十四卷
    - 大乘經單譯　(二百四十部六百一十八卷)
    - 大乘經重譯　(一百八十部一百四卷)
      - 諸重譯經　二百八部三百一十七卷
      - 涅槃部中別本　四十六部二百十一部三百十三卷
      - 華嚴部中別本　二十一部二百十七卷
      - 大集部中別本　九十七部一百十三卷
      - 寶積部中別本　五十四部三十部
      - 般若部中別本　二十七部一百十卷
  - 訓伏藏脊屬　四十一部三百五十八卷
  - 正訓伏藏　二十五卷
  - 有部根本身足論　八部一百三十一卷
  - 有部及餘支派論　二十八部五百六十七卷
  - 聲聞對法藏　(三十六部七百九十六卷　七十二帙)
  - 聲聞訓伏藏　(五十四部四百四十六卷　四十五帙)
  - 聲聞三藏錄　(三百三十部一千七百六十二卷　一百六十五帙)
- 第十三卷ノ中　梵本翻譯集傳　(聲聞三藏錄の下に帙數の記載なきは前袋に跨りて分割し難き故である)
- 第十三卷ノ中　賢聖傳記錄　(百八部　百四十一卷)
  - 此方撰述集傳
  - 菩薩三藏岡本　(四百五十部八百七十四卷)
    - 大乘經岡本　(四百八部八百一卷)
      - 大乘經重譯岡本　(一百部一百八十四卷)
        - 般若部中岡本　一十部二十七卷
        - 寶積部中岡本　三十部五十四卷
        - 大集部中岡本　九十七部一百十三卷
        - 華嚴部中岡本　一十二部二十七卷
        - 涅槃部中岡本　四十六部二百十一部三百十三卷
      - 大乘經單譯岡本　二十二部二十五卷
    - 大乘律岡本　四部一十一卷
    - 大乘論岡本　一十六部三十七卷
    - 大乘集義論岡本

とすればその異譯がどれだけあつて、其中何經が現存して居るかといふ如き、或經を本位として之を見るに便宜になつて居る。

(三)刊定入藏錄中有譯無本錄　この錄は前代の諸經錄を通じて或聖典の翻譯のあつたことが傳へられて居るけれども、其等が現存して居らないものを整理登錄したものであつて、從來の經錄に云ふ闕本錄である。本錄も亦有譯無本錄と名付けて居るけれども、正確な意味に於ては有無譯無本錄と云ふべきものなることは前に述べた如くである。この錄は開元錄卷第十五及び卷第十六の兩卷を占めて居る。その內容組織の一般を圖示するならば次の如くである。

第十四卷
第十五卷
有無譯無本錄

- 羅閱三藏闕本
  - 小乘經闕本（六百五十一部 九百三十三卷）
    - 小乘律闕本（六百二十五部 八百一十卷）
      - 小乘論闕本 九部六十五卷
    - 小乘經重譯闕本（一百二十五部 三百六十五部）
      - 小乘經單譯闕本 三十七部四十二卷
      - 諸重譯經闕本（四百八十部 五百五十卷）
        - 根本四阿含闕本 二百九卷
        - 長阿含部分闕本 一十四部 二十八卷
        - 中阿含部分闕本 一十四部 一十四卷
        - 雜阿含部分闕本 四十五部 四十五卷
        - 增一阿含部分闕本 七部 八卷
- 賢聖集傳 四十七部一百八十四卷

一四、支派別行錄　この錄は大小乘經律論及び賢聖集傳の別生目錄にして、總計六百八十二部八百一十二卷の支派別行經をば、前記の有譯有本錄の分類に準じて分類整理したものであつて、之に依て支派別行經の所出を明かにし、學者の研究を助けると共に、經藏の內容經を撰擇する場合に必要缺く可らざるものと、第二次的のものとを分つ一つの標準を示して居るものである。この點は仁壽錄がその序中に於て「別生曩僞不須抄寫」と云つた以來、各經錄撰者は大抵この類の別生經目錄を作成することになつて居る。この錄の內容組織の一般を表示するならば次の如くである。

第十六卷
支派別行錄

- 菩薩三藏別生（一百三十二部 三百四十六卷）
  - 大乘別生經（一百九部 三百三十八卷）
    - 般若部中別生 一百一十部 一百一十九卷
    - 寶積部中別生 一百一十三部 五十五卷
    - 大集部中別生 五十一部 五十八卷
    - 華嚴部中別生 一十部 一十一卷
    - 諸大乘經別生 一百二十五部 一百二十五卷
  - 大乘律別生 七部七卷
  - 大乘論別生 七部一十一卷
    - 長阿含部分別生 一十四部 一十四卷
    - 中阿含部分別生 二十四部 二十四卷
    - 增一阿含部分別生 二十六部 二十六卷
- 小乘經別生

（五）刪略繁重錄　新古の經錄中には同品異名のものや、或は廣中略出のものを別經なるかの如く記載し、或は內容の全然同一なるものも調査が不同なる爲に之を別經の如く誤解して重複記載せるものが尠くない。開元錄は總括群經錄を撰する場合にも又刊定入藏錄を撰する場合にも、其等のものは一應理由を附して刪略して置いたが、かく刪略したものを改めて統一的に目錄にしたものがこの錄であつて、開元錄以前の經錄の記載と相違して居る點を明瞭ならしむる爲に作られて居るものである。この錄に依て刪略されて居るものは一百四十七部四百八卷である。この錄はその刪略さるべき理由の如何に依て之を（A）新括出別生經（B）新括出名異文同經、（C）新括出重上經、（D）新括出合入大部經の四門に分つて記載せられて居る。（A）の新括出別生經とは既に譯出されて居る大部の經より抄出されたるものをば從前の經錄が誤つて獨立の翻譯經の如く取扱へるものを刪略したものであつて、この部門に記載されて居る別生經は六十七部一百八十五卷に上つて居る。（B）の新括出異文同經は異名同本の經を從前の經錄が別經の如く取扱へるを刪略したもので、この部門に於て刪略せるものは二十部五十二卷である。（C）の新括出重上經は例へば眞諦譯の攝大乘論釋十二卷と、攝大乘論十五卷とを從前の經錄が別本と見て居つた如く、內容は同一にして唯調卷のみが違つて居るものを別本の如く誤認せるものを刪略せるもので、この部分に於て刪略せられて居るものは八部三十卷である。而して（D）の新括出合入大部經は北凉の曇無讖譯金光明經四卷と合部金光明經八卷との關係の如きに關するものである。金光明經は始め凉世に於て曇無讖之を譯したるも、四卷十八品に止まつて居つた。然るに後凉世に眞諦三藏三身分別、業障滅、陀羅尼最淨地、依空滿願の四品を譯して二十二品となした。この他にも周世に闍那崛多譯の五卷二十品のものがあつた。然るに隋の大興善寺沙門寶貴なるもの以上の三本を合糅し、更に闍那崛多の譯出にかゝる銀主、喝果の二品を追加して合部金光明經八卷二十四品を完成した。故に、前記の三本は悉く合部中に編入されて居る筈であるから、若し藏中に合部金光明經を入れるとすれば、前の三本は之を刪略されなければならないことになる。この部門には斯の如き種類の合部を存する爲に特寫する必要なきもの五十二部一百四十一卷を揭げて居る。

- 羅閱三藏別生（三百三十三部 三百三十三卷）
  - 小乘律別生 四十二部四十九卷
  - 小乘論別生 無別生
- 賢聖集傳別生 一百三十四部 一百三十四卷
- 雜阿含部分別生（二百八十三部 二百八十三卷）
  - 諸小乘經別生 八十三部 八十三卷

（六）補闕拾遺錄　本錄は舊錄、特に大周刊定衆經目錄に記載洩れされて居るもの、及び大周刊定衆經目錄以後に譯出撰集されたるものを整理一括したものである。大周刊定衆經目錄に洩れたるものは「舊譯有本大周入藏中無」として之を纏められて居つて、この中には闍餘の經錄に存して居つても大周刊定衆經目錄に駁漏されて居るもの、刊定入藏錄の有譯中に入れて居つても現定入藏錄中に入つて居らないもの、又その闕本錄に入れられて居るものでも現在訪得されて居るもの等があつて、後魏の安世高の所譯に係る自誓三昧經一卷、濕室洗浴衆僧經一卷、佛印三昧經一卷等を始めとして、舊闕一百六十四部二百五卷を收めて居る。大周刊定衆經目錄以後の譯出になるものには、天寶萬寶元年より本錄の撰集せられたる開元十八年に至る迄約三十五ヶ年間に於て、實叉難陀、李無諂、彌陀山、寶思惟、菩提流志、義淨、輪波迦羅、金剛智、懷迪、智嚴等に依りて譯出されし九十六部五百二十八卷を大周刊定錄後新譯として入藏錄中に編入し、併せて武周刊定衆經目錄に漏れたる大唐沙門懷素の四分比丘戒本一卷、四分比丘尼戒本一卷等の此土撰述四十部三百六十八卷を爰に拾遺して居るのであつて、特に各種經錄の中唯沙門釋僧祐の出三藏記集十五卷、隋沙門法經等の衆經目錄七卷、隋費長房の開皇三寶錄十五卷、隋翻經學士沙門學士等の衆經目錄五卷（即ち仁壽錄）、大唐沙門釋道宣の大唐內典錄十卷、大唐沙門釋智昇の攝內典錄一卷、大唐沙門釋靖邁の古今譯經圖紀四卷、大唐沙門明佺等の大周刊定衆經目錄十五卷、及び本錄即ち智昇の開元釋教錄二十卷は、この時始めて入藏錄中に列せしめられて居るのである。

前項の刪略繁重錄と本項の補闕拾遺錄との二錄は共に第十七卷に收められて居る所であつて、その內容組織を圖示するならば次の如くである。

第十七卷

- 刪略繁重錄（一百四十七部 四百八卷）
  - 新括出別生經 六十七部 一百八十五卷
  - 新括出名異文同經 二十部 五十二卷
  - 新括出重上經 八部 三十卷
  - 新括出合入大部經 五十二部 一百四十一卷
- 舊譯有本大周入藏中無（六十四部 七十五卷）
  - 菩薩三藏舊譯
    - 大乘經舊譯 五十九部 六十九卷
    - 大乘律舊譯 二部 二卷
    - 大乘論舊譯 三部 四卷

（七）髮遮再詳錄　この錄は經文の內容を檢するにその眞僞を容易に分ち難く、更に識者の研究を必要とするものを單けたものである。その中毗羅三昧經二卷等の八部九卷は、古舊錄は何れも其等を僞妄錄中に編入して居るに拘らず、武周刊定衆經目錄が之を正經となして居る爲に、勅撰錄たる武周刊定衆經目錄に敬意を表して再詳錄に入れたものらしい。其他に法社經二卷等の十四部十九卷がある。是等も舊錄中に正經として揭げて居るも、その內容の疑はしきものか、又は新舊の錄に記載せざるものを單けたものである。

（八）僞妄亂眞錄　聖教が始めて唐土に傳來したる以來既に七百有餘年に及び、その間に不逞の徒があつて佛陀の金口に假して邪見を擅め、或は儒道二教に對抗せんが爲に自己の撰著を梵國の本傳なるが如く裝へるものが相當に上つて居る。年代の推移に連れて其等の眞僞が次第に見分け難からんとするに臨み道安以來經錄撰者の中にその經錄中に僞髮錄を設けたものが尠くなかつた。この錄は廣く斯る古經錄に指摘されて居る僞妄錄を檢し、その內容を精査したる上に斯る僞妄經三百九十二部一千五十五卷を一目瞭然たらしむる如く整理したものである。その所明の內容を表示するならば次の如くである。

- 此方所撰（四十六部 三百七十八卷）
  - 小乘律戒羯磨 一六一部 一十卷
  - 此方所撰集傳 四十部 三百六十八卷
- 菩薩三藏新譯（七十四部 三百五十卷）
  - 新譯大乘經 六十一部 百三十六卷
  - 新譯大乘律 一部 一卷
  - 新譯大乘論 一十二部 一十九卷
- 羅閱三藏新譯（一十九部 百六十七卷）
  - 新譯小乘經 八八部 一十一卷
  - 新譯小乘律 八三部 一百五十九卷
- 新譯賢聖集傳
- 羅閱三藏舊譯（六十四部 七十三卷）
  - 小乘律舊譯 五部 五卷
  - 小乘經舊譯 五十九部 六十八卷
- 大乘經重譯（一百六十四部 二百五卷）
- 大周刊定錄後新譯（九十六部 五百二十八卷）
- 開元釋教錄新編僞經 三十七部 五十四卷
- 苻秦釋道安錄中僞經 二十五部 二十八卷
- 梁釋僧祐錄中僞經 一十四部 一十六卷
- 唐齊釋道備僞撰經 五部 五卷

第十八卷

- 僧妄鬼記錄 三百九十三部 一千五十五卷
  - 薩婆僧法尼函出經 二十一部 三十五卷
  - 元魏孫敬德夢授經 一部 一卷
  - 昆沙門姊光僧造經 一部 一卷
  - 隋岡皇衆經錄中僧經 八十六部 一百四十二卷
  - 隋仁壽錄中僧經 一十一部 四十一卷
  - 大唐內典錄中僧經 二十二部 八十七卷
  - 大周刊定錄中僧經 八十部 一百一卷
  - 隋沙門信行三階集錄 三十五部 四十四卷
  - 諸新抄經增減聖說 四十四部 五百一卷

猶この中には隋の翼寂寺沙門信行撰の三階法及び雜集錄三十五部四十四卷の如く、その所說が佛意に反するや否やは暫く別として、勅命に依て流傳を禁ぜられて居るものをも含められて居るのである。

（九）現定入藏錄　この錄は最に說明した刊定入藏錄中の有無譯有本錄の諸經を實際に書寫し、經藏內に其等を收めたる上に作成された現藏の目錄であつて、本錄第十九卷及び第二十卷の所明である。第十九卷は入藏錄上となして大乘經律論總じて六百三十八部二千七百四十五卷二百五十八帙の內容を明かにし、第二十卷には入藏錄下として小乘經律論總じて三百三十部一千七百六十二卷一百六十五帙の內容を示すと共に、別に賢聖集傳一百八部五百四十一卷五十七帙を收めて居る。兩卷の合計一千七十七部合五千四十八卷であつて、是れ開元入藏錄の總數である。例に依りてその內容を圖示するならば、

- 大乘經重單合譯 三百八十四部 一千八百八十卷 一百七十九帙
  - 大乘經 五百一十五部 五百二十六卷 三千一百七十三卷 二千一百三帙
    - 大乘入藏錄（卷第十九）
      - （一）大乘經 五百一十五部 五百二十六卷 三千一百七十三卷 二千一百三帙
      - （二）大乘律 二十六部 五十四卷五帙
      - （三）大乘論 九十七部五百七十八卷 一百十八卷五十帙
      - 大乘經單譯 一百三十一部 二百九十四帙
      - 釋教論 二十一部 一百五十五卷
      - 集義論 七十六部 三百六十三卷
  - 般若 二十一部 七百三十六卷
  - 寶積 三十四部 一百六十九卷
  - 大集 二十四部 一百一十三卷
  - 華嚴 二十六部 一百八十七卷
  - 涅槃 六部 五十八卷
  - 五大部外諸重譯經 二百七十四部 五百八十九卷

大小乘經律論及聖賢集傳入藏者 一千七十七部 五千四十八卷 四百八十帙

- 小乘入藏錄（卷第二十）
  - 小乘經 四十八帙
    - （一）小乘經 二百四十部 六百一十八卷
      - 小乘經重單合譯 一百五十三部 三百九十四卷 三十一帙
      - 小乘經單譯 八十七部 二百二十四卷 一十七帙
    - （二）小乘律 三百三十一部 一千七百六十三卷 一百六十五帙
    - （三）小乘論 三百三十部 一千七百六十二卷 一百六十五帙
  - 賢聖集傳 一百八部 五百四十一卷 五十七帙
    - （一）梵本翻出 五十四部 四百四十六卷 三百九十八卷 六十八部 一百七十三卷
    - （二）此方撰 四十部 三百六十八卷

如くである。猶この現定入藏錄と最に說明した刊定入藏錄中の有無譯有本錄等の相違點は、內容經の數は兩者とも同一であるけれども、この現定入藏錄の方は現實に、經藏中に書寫した經の整理を主として居るものである爲に、有無譯有本錄中に記載しなかつた紙數を一々の經に記載し、又實際に整理した紙數を記載して居る點に特徵があるけれども、有無譯有本錄に見る如く一一の經に譯者の名を揭げることを省略して居る。故に、この錄は智昇の管理して居つた京兆西崇福寺の經藏を實際に調査する場合には必要な目錄であらうけれども、一般の經錄使用者には有無譯有本錄があればこの錄は殆ど必要がないと云つてよい。

以上の說明に依て開元錄の內容組織の一般を大體說明し盡した筈である。猶本錄が本錄以前の諸經錄に傳出して居る所以は、代錄と刊定入藏錄と現定入藏錄との間に完全な連絡を保たしめて居ることであつて、刊定入藏錄の模範的な形式を調へたものは法經錄であつたけれども、法經錄には代錄が備つて居らなかつたから、一々の經の譯者、翻譯年月、經譯場所、經譯關係者等に關する記載が甚だ缺けて居つた。之れに反して歷代三寶紀は代錄を主とした經錄で、その編纂上には取捨主義に過ぎたと云ふ非難があるにしても、その時代に於て得られ得る限りの資料を集めて譯經史上の事實を相當詳しく記載して居る點に特徵がある。歷代三寶紀にも刊定入藏錄が存して居るけれども、この刊定入藏錄は彼の代錄に記載したものを整理して作つたものではなく、法經錄を變直して——寧ろ法經錄を改惡して——作つたものである爲に、實際には全く役に立たないものになつて居る。この點に就ては歷代三寶紀の項參照）且この法經、費長房の二錄とも現藏に當らないでそれ以前の經錄を參考として執筆で作つた經錄である爲に、其中には實際に存しない經や同本異名のものを別經の如く記載して居る類のものも多く、實際に經藏を作る場合の標準となり難いところが尠くなかつた。この缺點を救ふ爲に仁壽錄が編纂され、現藏を主とした經錄が生るゝに至つたのである。この仁壽錄も法經錄を基礎にして有本のみを整理したものであるから、法經錄が譯者の撰名を誤つて居る如き場合は、其の儘その誤りを繼承して居る部分が尠くない上に無本のものゝ研究上に猶一段の研究を要する點が多かつたのである。故に、この次に出現すべき經錄は歷代三寶紀と法經錄と仁壽錄とが各持つて居る特徵を調和せしめた經錄でなければならなかつたのである。這宜の大唐內典錄はこの目的を以て編纂されたものと考へられるけれども、結局三寶紀の代錄と法經錄と仁壽錄とを表面的に繼合したに過ぎないもので、實際に代錄と刊定入藏錄と現定入藏錄との間に本當の連絡を看出す迄に至らなかつた。然るに智昇に至つて始めて歷代三寶紀の代錄を基礎にして各時代の譯者の譯經を調査し、それを大小二藏、經律論の三藏の何れに屬するかを判斷區分し、それを史料にして刊定入藏錄を作り、それを彼が集め得た經藏內の聖典と比較して有本と無本とを分ち、代錄と刊定入藏錄との間に於ける出沒、刊定入藏錄と現定入藏錄との間に存する關係を明かにする爲に支流別行錄等の五錄を從屬せしめ、そこに始めて統一的な一切經目錄を完成することが出來た。これ四庫全書總目提要の撰者が「佛氏舊文鼓篋大備」と讚美して居る所以であつて、宋の高僧傳の著者贊寧が「經法之譜無出昇之右」と云つて居る如く、尠くも既存の經錄中で開元錄に出づるものはなく、其後の經錄は總てこの開元錄を基礎に其後の譯出經を追加して居るに過ぎないものである。

（林屋友次郎）

開元釋教錄略出

❶（日）Kai-gen-shaku-kyō-roku-ryaku-shutsu.（支）K'ai-yuan-shih-chiao-lu-lüe-chu. ❷四卷 ❸存、大正五五・七二四No. 2155. 館結五、卍二九・四、北1093英、南1107英、元1101英、明北1479餘、清1539復、天1093英、明南1599倚、Xp. 1486 ❹智昇／總章元—開元二八（A. D. 638—740）撰 ❺唐開元一八（A. D. 730）

❶本錄は總四卷より成り、開元釋教錄の著者智昇の住したる西崇福寺の經藏を索引する爲に作られた經藏目錄であつて、開元釋教錄卷第十九及び卷第二十の現定入藏錄の內容を基礎にして、それに卷第十一、十二、十三の有無譯有本錄に依て譯者名を附加して居るものである。これ開元釋教錄略出の名ある所以である。

試みに開元釋教錄の卷第十九及び卷第二十の現定入藏錄と、開元釋教錄略出との登錄經を比較するに、

開元現定入藏錄	開元釋教錄略出
二十一部	×二十二部
二十四部	×八十二部
二十四部	二十四部
二十六部	二十六部
六部	六部
二百七十四部	×二百七十三部
一百三十一部	一百三十一部
二十六部	二十六部
九十七部	九十七部
一百五十三部（實數一百四十四部）	×一百五十三部
八十七部	八十七部
五十四部	五十四部
四百四十九卷	×四百四十六卷
三十六部	三十六部
一百八部	一百八部

經一卷が追加されて居る爲であつて、この笈多譯の金剛般若に就ては開元錄卷第八の沙門笈多の說明中に「初笈多翻金剛斷割般若波羅蜜經一卷及善樂經一十五卷。未及練覆值僧娑論廢不暇重修。今卷部在京。」とあるものがそれに當つて居る。その本は現存して居つても未だ入藏されて居らないものであるから現定入藏錄には之を除いたが、その本が現に殘つて居るから爰に加へたものであらう。又寶積部に於ては兩者の間に四十八部の不同がある。然し、この不同に就ては開元錄の卷第十九の末尾に於て「與前廣錄（有無譯有本錄を指す）部數不同者前廣錄中以大寶積經諸部合成分爲四十九部上錄此合爲一部故缺四十八部不同。」と說明して居る如く、現定入藏錄では寶積經の四十九會を總括して一部となしたから、それを一部每に計算するに比して四十八部の差が出たものに過ぎない。然し、その內容は結局同一である。又五大部以外の諸經に於ては現定入藏錄は百七十四部となして居るのに、略出は百七十三部になして、その間に一部の差がある。これは現定入藏錄が同本異名の月光童子經と申日經とを二重に計算したのを略出の方がそれを訂正した爲であらう。又略出の方にも間違ひがあつて須賴經を二重に揭出して居る。然し、總數の計算の上ではこの二重の須賴經を入れれば二百七十四部になるのに二百七十三部と書いて居るから、或は轉寫の際に誤入したものであるかも知れない。小乘經重譯の部では兩者共に百五十三部と記載して居る。然し現定入藏錄の小乘經重譯の部の實數を當つて見ると一百五十四部あつて、略出にない花積陀羅尼儀軌經一卷なるものが餘分にあ

- 內容聖典
  - 大乘
    - 經
      - 重譯
      - 單譯
    - 論
    - 律
  - 小乘
    - 經
      - 重譯
      - 單譯
    - 論
    - 律
- 賢聖集傳
- 般若
- 寶積
- 大集
- 華嚴
- 涅槃
- 其他

る。乍併、現定入蔵録の花積陀羅尼雜須經の下注には「此經在藏現同無處訪本」とあるから、入藏されて居つた經であるけれども實際存しなかつた爲に、實數を計算する時にはこの一部を省いて唯名稱だけを掲げて置いたものであらう。然し、實際に存しないものであるから略出の上ではその名稱も除いて了つたものである。今一つ違つて居るところは小乘律の部であるが、現定入藏録も略出も部數は何れも五十四部になつて居るけれども、卷數が前者は四百四十九卷となり、後者は四百四十六卷になつて居つて三卷の違ひが生じて居る。この相違は現定入藏録が四分雜羯磨一卷と書くべき筈のところを一と四の置き處を誤つて一分雜羯磨四卷と書いた爲に三卷多くなつたのであつて、略出はこれを訂正した爲に三卷減くなつたのである。以上述べた如き特殊な理由に依るものを除けば、開元釋教録の現定入藏録の内容と略出の内容とは全然同一のものである。唯形式の上に於て現定入藏録には一々の經に譯者名を記載しなかつたのを、略出には之を記載して居るのと、現定入藏録が一々の經毎に紙數を掲げて居つたのを、略出は一帙毎の紙數を掲げて各經に掲ぐることを省略し、帙毎に千字文の名號を附して居るとの違ひがある。この相違は現定入藏録と略出との編纂の目的の相違より生じて居るもので、開元釋教録の現定入藏録も西崇福寺の經藏を基礎にして現實の經藏に當つて撰集されたものであるけれども、然しその目的は今後新に經藏を設傳せんとするものの爲に經藏に傳付くべき内容經に標準を與へんことを主眼としたものであるに對し、略出の方は既に出來上つて居る西崇福寺の經藏を索引する爲の目録として編纂されたものであるから、各帙の名號を明かにし、譯者名を示す如きことが非常に必要なこととなつて來るから、それを附加したものに過ぎない。

猶本録の卷第四の終には開元釋教録卷第二十略出別録なるものが附加されて居る。要するに開元釋教録卷第二十の末尾に於ける別録の要點を書いたものである（開元釋教録卷第二十の説明參照）。（林屋友次郎）

開元大衍曆 ❶(日)Kai-gen-dai-en-koyomi.(支)K'ai-yuan-ta-yen-li. ❷五十二卷 ❸缺 ❹唐一行(弘道元—開元一五 A. D. 683—727)撰 ❺諸宗章疏録第三に細註して云く、出宋僧傳。其曆編入唐書律曆志。且爲不刊之典云云 ❼(參考) 諸宗章疏録第三

開元目録 ❶(日) Kai-gen-moku-roku.(支)K'ai-yuan-mu-lu. 開元釋教録、開元録 ❷二十卷 ❸存、大正五五・四七七No. 2154. 結四—五、卍二九・二—四、北1055笙陵、南1081笙昇、元1076笙昇、明北1472車駕肥、清1505感武丁、麗1059笙昇、天1065笙昇、指1034笙昇階、法1051笙昇階、至1541楚更、明南1536宗至禪、Nj. 1485 ❹智昇(總章元—開元二八 A. D. 668—740)撰 ❺唐開元一八(A. D. 730) ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目録 ❾寫本(龍大、研佛)(正大一、〇〇・二)(京大、藏・一サ・一)

開眼 ❶(日)Kai-gen. ❷一帖 ❸存 ❾寫本(金剛三昧院)

開眼供 ❶(日)Kai-gen-ku. ❸存 ❺足利時代寫、德川時代寫 ❾(寶龜院)

開眼供養 ❶(日)Kai-gen-ku-yō. ❾(寶龜院) ❷一紙 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

開眼供養作法 ❶(日)Kai-gen-ku-yō-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❹淨嚴(寫永一六—元祿一五 A. D. 1659—1702)記 ❾正德元寫(金剛三昧院)德川時代寫(寶龜院)(京專)

開眼供養私鈔 ❶(日)Kai-gen-ku-yō-shō. ❷一帖 ❸存 ❺天正九寫 ❾(寶龜院)

開眼供養法作法 ❶(日)Kai-gen-ku-yō-hō-sa-hō. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大、餘小・九三)

開眼作法 ❶(日)Kai-gen-sa-hō. ❷一紙 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

開眼法 ❶(日)Kai-gen-hō. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

開眼略作法 ❶(日)Kai-gen-ryaku-sa-hō. ❷一卷 ❸存 ❺明治二〇寫 ❾(谷大、餘小・一〇一)

開悟院惠龍御調理 ❶(日)Kai-go-in-i-ryō-go-chō-ri. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大)

開皇三寶記 ❶(日)Kai-kō-san-bō-ki.(支)K'ai-huang-san-pao-chi. 歷代三寶紀、開皇三寶録、開皇寶録、長房録、三寶紀 ❷二十卷 ❸存、大正四九・二二No. 2034、鎌倉六、卍三〇・七、北1057詩、南1073設、元1069設、明北1497磐祖、清1529伊、麗1062延設、天1056設、指1017延設、法1044延、至1534樂勿、明南1530主、Nj. 1504 ❹隋費長房(—開皇一七 A. D. 597—)錄 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目録

開皇三寶錄 ❶(日)Kai-kō-san-bō-roku.(支)K'ai-huang-san-pao-lu. 歷代三寶紀、開皇三寶録、開皇寶録、長房録、三寶紀 ❷二十卷 ❸存、大正四九・二二No. 2034、鎌倉六、卍三〇・七、北1057詩、南1073設、元1069設、明北1497磐祖、清1529伊、麗1062延設、天1056設、指1017延設、法1044延、至1534樂勿、明南1530主、Nj. 1504 ❹隋費長房(—開皇一七 A. D. 597—)錄 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目録

開皇三寶錄卷總目 ❶(日)Kai-kō-san-bō-roku-kwan-sō-moku.(支) K'ai-huang-san-pao-lu-chüan-tsung-mu. ❷一卷 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目録

開講說要 ❶(日)Kai-kō-setsu-yō. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大、二六・二九・一三)

開合指南抄 ❶(日)Kai-gō-shi-nan-shō. ❷一卷 ❸存 ❹徐慶(—寶祿頃 A. D. 1741—1743—)述 ❾寫本(正大、一四二・四五)

開合名目抄 ❶(日) Kai-gō-myō-moku-shō. 補忘記、根來寺名目集 ❷二卷 ❸存 ❹親應(明暦二—寶永七 A. D. 1656—1710)編 ❾寫本(谷大、餘大・三七七一)

貞享四刊(龍大、二六六八・一七—一八、研佛)(京專)(帝國、一二四・二一五)

開權顯實章 ❶(日)Kai-gon-ken-jitsu-shō. ❷三卷 ❸缺 ❹香樂述 ❼(參考) 東域傳燈目録卷下

開山曉幡隆大和上行狀略記 ❶(日) Kai-san-gyō-han-ryū-dai-wa-jō-gyō-jō-ryaku-ki. ❷一卷 ❸存 ❹法間戒定記 ❺明治二六刊 ❾(正大、一五一六・一九〇)

開山七朝帝師御傳記 ❶(日)Kai-san-shichi-chō-tei-shi-go-den-ki. 大本山相國寺開山七朝帝師御傳記 ❷一卷 ❸存 ❹小島文郎著 ❺明治四一刊 ❾(龍大・二九六五・七五)

開山聖應大師傳 ❶(日)Kai-san-shō-ō-dai-shi-den. 聖應大師傳 ❷二卷 ❸缺三卷 ❸存、兩足師鈴史傳之内 ❺安永七刊 ❾(谷大、宗大・一八七)(正大、一五一六・一二七)

開山聖人御遺書 ❶(日)Kai-san-shō-nin-go-yui-sho. ❷一卷 ❸存、異義集(了祥稿本)第五 ❹傳、親鸞(承安三—弘長二 A. D. 1173—1262)述 ❺巻末に「右五箇條親鸞聖人御遺書、武藏州法恩寺代々祖師相傳也」といひ、親鸞聖人の御遺書と稱して五ケ條(自力を捨て他力を求むる意、一心一向の意、唱名の意、雜行を止める意、神の誓に交り禁戒をも保たぬ行相のこと)をあげてあるが、正統の眞宗々義に悖る解釋を含み、或は「唱ふれは佛も我もなかりけり南無阿彌陀佛の聲はかりしてしといふ歌を引くなど、もとより偽書たること明白である。恐らく覺如・蓮如兩師所破の異義の一派の作れるものであらう。 ❾寫本(谷大、宗甲・一七)

開山聖人御臨終事 ❶(日) Kai-san-shō-nin-go-rin-jū-no-koto. ❸缺 ❼(參考) 淨土眞宗聖教目録

開山聖人傳繪 ❶(日)Kai-san-shō-den-e. ❷一卷 ❸存、親鸞傳叢書之内

開山聖人要文五箇條 ❶(日)Kai-san-shō-nin-yō-bun-go-ka-jō. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大、一一三・九)

開山禪師行事寫 ❶(日)Kai-san-zen-ji-gyō-ji-utsushi. ❷三卷 ❸存 ❾寫本(帝室)

開山大和上生緣筆記 ❶(日)Kai-san-dai-wa-jō-shō-en-hit-ki. ❷一卷 ❸存、蟲雲草者全集第一七

開山呑龍上人傳 ❶(日)Kai-san-don-ryū-shō-nin-den. ❷一卷 ❸存 ❹日野雲瑞(文政元—明治二九 A. D. 1818—1896)記 ❺明治一一刊 ❾(正大、一五一六・一九二—一九四)(京大、一・二一カ・一六)

開山無住國師略緣起 ❶(日)Kai-san-mu-jū-koku-shi-ryaku-en-gi. ❷一卷 ❸存 ❾刊本(京大、一・二一カ・一一)

開山無人和尚行業記 ❶(日)Kai-san-mu-nin-o-shō-gyō-ki. ❷一卷 ❸存、續群書類從第九 ❹京都の永圓寺開山戒律宗の見蓮如導和尚の傳記で、無人とは其の德の故を以てした世稱である。東福寺六十二世在先希讓禪師が、無人の弟子觀音寺長老蓮忍律師の請により、後小松天皇應永九年四月八日(A. D. 1402)に撰文したものである。京都永圓寺(律苑僧寶傳卷十四、本朝高僧傳卷六十二に永圓寺)藝州迎接院(本朝高僧傳卷六十二に勢之迎續院)等の復建並起廢十五所、建立尼寺數十所、住院十餘所に及び北朝後光嚴天皇延文二年五月二十七日(A. D. 1357)北野觀音寺に示寂した。壽七十四(但し本書に弘安八年誕賀とあるが、七十四寂世ならば弘安七年誕辰となる)永圓寺住院中に天龍寺夢窓國師に參禪し其の印可を受け、信濃善光寺、京都本願寺等諸名刹に於ても說教し貴賤肩摩して師に聽教したと云ふ事である。(大久保壓瑞)

開山預囑語 ❶(日) Kai-san-yo-shoku-go. ❸存、黃檗清規附錄 ❹高泉(寛永一〇—元祿八 A. D. 1633—1695)編 ❾刊本(龍大、二六七六・三)

開四分家拾遺鈔 ❶(日)Kai-shi-bun-ke-shō-i-shō.(支)K'ai-sze-fen-chia-shi-i-ch'ao. 開四分宗拾遺鈔 ❷十卷 ❸缺 ❹唐懷素(—永淳元 A. D. 682—)述 ❼(參考) 智證大師請來目錄、東域傳燈目錄卷下

開四分宗拾遺鈔 ❶(日)Kai-shi-bun-shō-shō-i-shō.(支)K'ai-sze-fen-tsung-shi-i-ch'ao. 開四分宗拾遺鈔 ❷十卷 ❸缺 ❹唐懷素(—永淳元 A. D. 682—)述 ❼(參考) 智證大師請來目錄、東域傳燈目錄卷下

開四分律宗記科文 ❶(日)Kai-shi-bun-ritsu-shū-ki-kwa-mon.(支)K'ai-sze-fen-lü-tsung-chi-k'e-wen. ❷一卷 ❸缺 ❹唐懷素(—永淳元 A. D. 682—)作 ❼(參考) 智證大師請來目錄、東域傳燈目錄卷上

開四分律宗記義鏡鈔 ❶(日)Kai-shi-bun-ritsu-shū-ki-gi-kyō-shō.(支) K'ai-sze-fen-lü-tsung-chi-i-ching-ch'ao. ❷二卷 ❸存 ❹唐行滿(—大曆三 A. D. 768—)撰 ❼(參考) 大正一切經綴刊豫定書目

開四分律宗記要鈔 ❶(日)Kai-shi-bun-ritsu-shū-ki-kwa-mon. (支) K'ai-sze-fen-lü-tsung-chi-k'e-wen. ❷一卷 ❸缺 ❹唐懷素(—永淳元 A. D. 682—)作 ❼(參考) 智證大師請來目錄、東域傳燈目錄卷上

開迹顯本宗要抄 ❶(日)Kai-shaku-ken-pon-shū-yō-shō. ❸存 ❾寫本(立大、D〇・一四八)

開迹顯本法華二論義得意鈔 ❶(日) Kai-shaku-ken-pon-hō-ke-ni-

ron-ni-tokro-i-kho. ❷六巻 ❸存、日蓮宗々學全書(本門宗部之内) ❹日辰(永正九—天正四 A. D. 1512—1576)述 ❺永祿三(A. D. 1560)

❻本門宗中興の碩學日辰の著。

日辰嘗て法華三十講品釋の古式に則り法華二十八品並に開結二卷につき各々二個の論題を揭げ二論義式を用ひて論議し「略二論義」二卷を著はしたが、更に法義の内容にわたり幾多の問難答釋を設けて精細なる二論議を盡したものが本書である。

本門宗は日蓮正宗(石山系)と共に興門流の分派である要山系である。故に本書は要山系の立場から法華三部十卷を解釋すると共に、石山系の教義をも論評し、八品派即ち本門法華宗の教義をも論破してゐるもので、要山系即ち本門宗の宗義を知る最重要の資料である。

目次は卷一に無量義經、序品、方便品、卷二に譬喩品、信解品、藥草喩品、授記品、化城喩品、卷三に五百弟子品、人記品、法師品、寶塔品、提婆品、勸持品、安樂行品、卷四に涌出品、壽量品、卷五に壽量品、卷六に分別品、隨喜品、法師功德品、不輕品、神力品、屬累品、藥上品、妙音品、觀音品、陀羅尼品、嚴王品、普賢品、普賢經、附錄として佩守論義がある。壽量品最も詳細で、一卷餘を占め、涌出、神力、方便の各品これに次いでゐる。(馬田行啓)

開迹問辨 ❶(日)Kai-shaku-mon-ben. ❷一卷 ❸存 ❹知空(寛永一一—享保三 A. D. 1634—1718)述 ❺元祿一三寫 ❻(谷大、宗大・二八三八)

開宗記 ❶(日)Kai-shu-ki. (支)K'ai-tsung-chi. 開四分律宗記 ❷十卷 ❸存、卍續一・六六・一—三 ❹定賓述 ❺唐長安三(A. D. 708) ❻(參考) 諸宗章疏錄第一

開宗史觀 ❶(日)Kai-shu-shi-kwan. ❷一卷 ❸存 ❹石橋誠道著 ❺大正一三刊 ❻京都知恩院

開宗事類 ❶(日)Kai-shu-ji-rui. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(帝國・二〇六・二六)

開宗八選 ❶(日)Kai-shu-hac-sen. ❸缺 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A. D. 767—822)撰 ❺(參考) 山家祖德撰述篇目集卷上

開宗要義辨 ❶(日)Kai-shu-yo-gi-ben. ❷二卷 ❸存 ❹德運(—慶應二 A. D. 1865—) ❺慶應二刊(龍大、研眞) 明治三刊(谷大、宗大・二三〇九)

開城洪圓寺敎雄墓誌 ❶(日) Kai-jo-kō-en-ji-kyō-yū-to-shi. (支)K'ai-ch'eng-hung-yüan-sse-chiao-hsiung-mu-chih. ❸存 ❹高麗毅宗七(A. D. 1153) ❼(參考) 朝鮮佛敎總書刊行豫定書目

開城靈通寺住持智偈墓誌 ❶(日)Kai-jō-rei-tō-ji-jū-chi-ni-tō-shi. (支)K'ai-ch'eng-ling-t'ung-sse-chu-chih-chih-ni-mu-chih. ❸存 ❹高麗明宗二三(A. D. 1193) ❼(參考) 朝鮮佛敎總書刊行豫定書目

開心觀心私記 ❶(日) Kai-hin-kan-jin-shi-ki. ❷一帖 ❸存 ❹寫延二寫 ❺(高大、寄・一・六九)

開心鈔 ❶(日)Kai-shin-shō. 象雲覺夢鈔 ❷三卷 ❸存、大正七七・七三六No. 2450 ❹呆寶(德治六—貞治元 A. D. 1305—1362)述 ❺貞和五(A. D. 1349)十二月

❻眞言宗義並に禪密對辨に關する論文三十篇を集めた書である。每篇問答體にて微細なる點に亘つて論難し、宗義の奧旨を明にすることに努めてゐる。小品ではあるが呆寶の學說を知るには重要なる書である。從來世に流布せる刊本と東寺觀智院藏の著者自筆草本とは上卷に於て餘程出沒があり、各篇の題名も異つてゐるから、大正藏經には此兩本を併せ載せてゐる。その目次は下の如くである。但し括弧内は草行本の篇目を示したのである。上卷に禪宗屬顯門。淺勝私建門。禪敎前後門。過失種種門。末世相應門。護國濟生門。證道唯密門。本分絲不門。心體同異門。祕密修禪門の十篇(禪密構屋門。機敎前後門。淺勝私建門。瘦著德失門。本分絲不門。末世相應門。護國濟生門。證道唯密門。心體同異門。祕密修禪門)。中卷に即身成佛門。煩惱即道門。煩惱種種門。三毒曼荼門。即惡祕密門。不斷煩惱門。斷除煩惱門。不如實知門。無明緣起門。妄覆眞覺門の十篇。下卷に即時頓眞門。倍論當住門。一專法界門。即難分別門。事理建立門。理惡體性門。法性自德門。二見同異門。法界一多門。相與無相門の十篇がある。即ち上卷は禪宗に關するもの、中卷は煩惱菩提の問題に關するもの、下卷は即時頓眞等眞言宗の最も重要なる宗義に關するものを論じてゐる。又草本には上卷の題下に修業覺夢鈔と云ふ異名を出してゐる。

❼(參考) 本朝台祖撰述密部書目 ❽貞和五著者草本(京都東寺觀智院金剛藏) 慶長末活版(谷大、餘丙・三四) 寛永元(高野版) 寛永四末活(高野版日光天海藏)

開心祕決 (小田慈舟) ❶(日)Kai-shin-hi-ketsu. ❷十一卷 ❸存 ❹憲深(建久三—弘長三 A. D. 1192—1263)親快(建保三—建治二 A. D. 1215—1276)口決、親尊(—康元頃 A. D. 1256—)記

❺憲深、親快の口決を、親尊の記したもの。(一)諸佛。(二)諸佛頂。(三)諸經。(四)諸書藏。(五)諸明王。(六)諸天。(七)部部。(八)ダキニ口訣、附延命院次第。(九)灌頂雜々。(一〇)祕佛私記。(一一)ダキニ祕記。

❻寫本(谷大、餘大・九八二)(正大、一四八・二〇一)(京大、日大來・三五三)(高大、寄・一・六四)德川中期寫(金剛三昧院)

開心祕訣藏 ❶(日) Kai-shin-hi-ketsu-zō. ❷八帖 ❸存 ❹享德三寫 ❺(寶龜院)德川中期寫(金剛三昧院)

開心佛國事 ❶(日)Kai-shin-butsu-koku-ji. ❷一帖 ❸存 ❹鎌倉時代寫 ❺(寶龜院)

開善大乘義章 ❶(日)Kai-zen-dai-jō-gi-shō. (支)K'ai-shan-ta-ch'eng-i-chang. ❷一卷 ❸缺 ❹(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第二

開祖聖人傳縮並鈔記目錄 ❶(日) Kai-so-shō-nin-den-o-chi-narabini-shō-ki-moku-roku. ❷一卷 ❸存、(先啓の淨土眞宗聖教目錄再刻本及三刻本の附錄) ❹先啓記 ❺寶曆七(A. D. 1757)頃初稿、後補正

❻眞宗の開祖親鸞の傳繪。傳記。讃文等の諸文獻記錄類を集載解說批評したもの。淨土眞宗聖教目錄の寶曆七年版及び明和六年版の附錄として上梓されたが寶曆二年の初刻本には附載されてゐない。そして寶曆七年本と明和六年本とでは書目並に解說に不同あり、前者には三十二部、後者には三十部を擧げてある。

❼大日本佛敎全書の佛敎書籍目錄第一に編入せるものは寶曆七年本。眞宗全書目錄部に編入せるものは明和六年本。佐々木月樵編親鸞傳叢書に編入せるものは明和六年本の轉寫本である。 ❽初版寶曆七年刊、改訂再刻刊明和六年本 ❾(谷大、宗大・三九四四) ❿大阪柏原屋淺川清右衛門

開題 (櫻部文鏡) ❶(日)Kai-dai. ❷五卷 ❸存 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)撰 ❺(京專)

開題考文抄 ❶(日)Kai-dai-kō-mon-shō. ❷三卷 ❸存、續淨土宗全書第一四 ❹妙觀(永仁元—康安元 A. D. 1293—1361)述 ❺貞和五(A. D. 1349)五月

❻元亨四年(A. D. 1324)の春、筑紫から一人の修行者が信州善光寺月形房に明心を訪ね、二祖(淨土宗)聖光上人から相傳の授手印を示した。明心は三祖良忠上人相傳の授手印を見ると、多くの門下が寫傳して書き樣も自ら不同であり、何れが二祖上人撰述の原型であるかと歎じてゐた折であつたから、借覽して妙觀に寫さしめ、且つ妙觀の乞によりて授手印を講說し「入二淨土宗骨一樣、以二選擇集意一、和尙御釋得レ意、以二和尙御釋一、三經一論得レ意故、先選擇集能々相傳メマセ也」と說示した。この講說を筆錄したものは「口傳題下」と名づけられてゐるもので、明心が淨土の宗義につき派祖(淨土宗名越派)尊觀相傳の祕奧を傳授した名越派重要の典籍である。師明心から一宗の祕頓を受けた妙觀は、この時の有樣を自著に「此口傳、南大門月形房二間談義所師南向坐、良山(妙觀)左座末座西向坐ロ二傳之二、良山志深、義道微細哉、故師始述二此義一、但指二愚身一言二菩賢文殊一、事、身雖二愚鈍一依二佛法興隆之志一、忝蒙二過分之譽一」と云つてゐる。爾後數年、妙觀は師明心の座下に宗要を研究し、嘉曆三年(A. D. 1328)宗義宣揚のため奧州石川に、次いで東海道に赴いた。この間常に相傳の「口傳題下」の研究に專心し、これが註釋を著はし、名づくるに問題考文抄を以てした。「口傳題下」は短篇であるが、本抄述作にあたりては、上中兩卷に於て聖道門諸宗の綱領と、これらの諸宗、所說の敎理は深遠であるが、末世の衆生にとりては迂遠であり解し難く、證を得ること絲めて難しと述べ、殊に理深解淺難證に就ては說明甚だ詳細を絲めてゐる。下卷では淨土門を說くに、聖道諸宗と對比し、導空神然相傳の說を擧げ、口傳題下の文を提示して詳解を加へてゐる。

❼(注釋) 問題考文抄口筆一卷妙觀撰。問題考文抄聞書一卷聖觀撰 (高瀨承厳)

開題考文抄聞書 ❶(日)Kai-dai-kō-mon-shō-kiki-gaki. ❷三卷 ❸存、續淨土宗全書第一四 ❹聖觀(應安二 A. D. 1369)述

❺妙觀の開題考文抄を註解したもので、卷首には聞書とあり、卷中及び卷末には三卷見聞とある。思ふに折に觸れて述作し推敲の遑なかつたため題號の統一を缺いたものであらう。本書は卷頭に「口傳題下」の文を擧げて略敍し、次いで考文抄の文を逐次的に擧げて字句の解釋を施すに、多くの經論註疏等を引用し、中には今日傳はらない著述などもあつて、著者が如何に博學の人であつたかを想像するに難くない。著者は考文抄の著者妙觀の門下で、名越一流に關する多くの著述を殘してゐる。(高瀨承厳)

開題考文抄口筆 ❶(日)Kai-dai-kō-mon-shō-ku-hitsu. ❷一卷 ❸存、續淨土宗全書第一四 ❹妙觀(永仁元—康安元 A. D. 1293—1361)述

❺開題考文抄の著者妙觀が、抄を述作したる後、更に聖淨二門の諸家が祕奧の義として解說する法を、往生論註には性功德と釋し、これを華嚴の法王如來性起に合す。今はこの法體の上に本願の一意を立つるを選擇の一義とすといふ外、眞言、天台、華嚴、三論、法相、佛心、禪の諸宗につき解說を補足したものである。(高瀨承厳)

開導錄 ❶(日)Kai-dō-roku. 蓮如上人開導錄 ❷一卷 ❸存 ❹明三慧編 ❺明治二九刊 ❻(京大、一・二一カ・二二)

開寧葛項寺石塔碑 ❶(日) Kai-nei-kat-kō-ji-seki-tō-hi. (支)K'ai-ning-ko-hsiang-sse-shih-ta-pei. ❸存 ❹新羅元聖王頃(A. D. 785—798) ❼(參考) 朝鮮佛敎總書刊行豫定書目

開版訓譯聖決書 ❶(日)Kai-han-kun-yaku-shō-ketsu-sho. ❷一卷 ❸存 ❹瑜伽敎如(弘化四—昭和三 A. D. 1847—1928)編 ❻(京專)

開敷覺華鈔 (高瀨承厳) ❶(日)Kai-fu-kak-ke-shō. 悉曇鈔 ❸存 ❹妙瑞(—寛延頃 A. D. 1748—1750—)述 ❺大日經住心品疏の釋

開峰深祕之大事 ❶(日)Kai-hō-jim-pi-no-dai-ji. ❷一帖 ❸存、修驗密典第四深祕修法集

❺諸寺衆峰開創の際、結論すべき印明を記したものである。外五鈷と無所不至と智拳との三種の印契より成り、明は三印に通じて心經の咒である。玄奘三藏流沙の邊にて鬼神から之を受傳し、此の印明の功德で天竺に到り大般若經を傳へることが出來た。また修驗道祖役行者は玄奘の門人より之を傳へ以て大峰を開創したと云ふことが附記されて居る。また諸寺衆峰を開き佛法興隆、心願成就の秘要この作法に過ぎる者なしとも記されてゐる。嘉永八年七月、醍醐三寶院門跡第三十九世定演が第四十世演護に授與した事も奧書によつて判る。(服部如實)

開禍道寧禪師語錄 ❶(日) Kai-fuka-dō-nei-zen-ji-go-roku. (支)K'ai-fa-tao-ning-ch'an-shih-yü-lu. 開禍寧禪師語錄、開禍寧和尚語錄、開禍寧語錄 ❷一卷 ❸存、卍續二・二五・三 ❹宋代義果編 ❺楊岐派五祖法演禪師の法嗣南岳下十四世道寧禪師の潭州開禍報慈禪寺住院五星霜の語錄を法嗣大溈山月菴善果和尚が編纂したものである。上下二卷に上堂示衆の法語、偈頌及び末後の遺誡を收め、卷末に同學の佛果圜悟克勤禪師の跋文及び南宋孝宗淳熙六年紹興日南康雲居山眞如禪院の法孫祖證が開中鏤版の舊本により、懷璋慕雄者となり紹先幹緣となりて重刊流通する旨の題語を識して居る。更に卷首には加賀大乘寺二十九世蜜山道鶴禪師の序及び卷末に享保二十年三月初吉(A. D. 1735)蜜山の法嗣大乘寺三十七世慈鱗(一作元)玄益が、法嗣公雲道鯨の當院より持參せし本書を自己の珍藏せし本書と同內容なるを喜び道鯨の京師に赴くにより默照の捐貲と共に道、默二人勤力募緣し刊行する旨を、紀州瑞龍山林泉寺に於て識した跋語を載せて居ることにより本書の流傳を知ることが出來る。

(大久保堅瑞)

開禍寧和尚語要 ❶(日)Kai-fuka-nei-o-shō-gyō-yō. (支) K'ai-fa-ning-ho-shang-yü-yao. ❸存、卍續二・二三・五續古尊宿語要第三之內 ❹宋道寧(—政和三 A. D. 1113)撰 ❺本書は楊岐派五祖法演禪師の法師にして南岳下十四世たる開禍道寧禪師の語要の一部を收錄したもので上堂示衆の語要十則である。

(大久保堅瑞)

開禍寧和尚語錄 ❶(日)Kai-fuka-nei-o-shō-gyō-roku. (支)K'ai-fa-ning-ho-shang-yü-lu. 開禍道寧禪師語錄、開禍寧語錄 ❷一卷 ❸存、卍續二・二五・三 ❹宋道寧(—政和三 A. D. 1113)撰、善果編

開禍寧語錄 ❶(日)Kai-fuka-nei-gyo-roku. (支)K'ai-fa-ning-yü-lu. 開禍道寧禪師語錄、開禍寧和尚語錄、開禍寧語錄 ❷一卷 ❸存、卍續二・二五・三 ❹宋道寧(—政和三 A. D. 1113)撰、善果編

開禍寧禪師語錄 ❶(日)Kai-fuka-nei-zen-ji-go-roku. (支)K'ai-fa-ning-ch'an-shih-yü-lu. 開禍道寧禪師語錄、開禍寧和尚語錄、開禍寧語錄 ❷一卷 ❸存、卍續二・二五・三 ❹宋道寧(—政和三 A. D. 1113)撰、善果編

開法諫迷抄 ❶(日) Kai-hō-kan-mei-shō. ❷一卷 ❸存 ❹原本(慶應二年身延善覺院藏)(立大、A〇四・三五〇)

開發抄 ❶(日)Kai-hotsu-shō. ❷一帖 ❸存 ❺天正四寫 ❻(寶龜院)

開明門院尊儀一周御忌御法事雜記 ❶(日)Kai-myō-mon-in-son-gi-i-shū-gyō-ki-zō-hō-ji-zak-ki. ❷一卷 ❸存 ❻寫本(帝室、二四・二二)

開蒙偶談 ❶(日)Kai-mō-gū-dan. ❸存 ❹行策(荊溪)說 ❼(參考) 禪籍目錄

開目鈔 ❶(日)Kai-moku-shō. ❷二卷、上下の分冊につき異本二三あり ❸存、大正八四・二〇八No. 2583、縮刷一〇、日蓮聖人御遺文、原文對照口語譯日蓮上人全集第二 ❹日蓮(眞應元—弘安五 A. D. 1232—1282)述 ❺文永九(A. D. 1272) ❻開目とは、諸法不信の徒の屬膜を破つて佛眼信智を開かしむるの義を以て名づく。その意、日蓮は末法の正師なり、法華經は末法の正法なるを知らしむるに在り。而してその說く處導師の開顯を以て正意とす。その然る所以は、日蓮數々の大難を經て遂に佐渡に流さるるに至つて、門外の誹謗は勿論、門家の中にも漸く疑惑の眼を以て上人を非議するものあるに至れり。玆に於て數々の大難は法華經の色讀のみ、これあるが故に日蓮は法華經の行者、本化上行菩薩の再誕ある本來の主張を開始し、これによつて外惡嫉の徒を破斥し、內疑惑の門弟檀那に安心を與へられたのである。

これを明すに人法の二を竝べ說き、人については先づ釋尊の主師觀三德具備の大導師なるを說き、末法に入つては日蓮即ち主師觀三德具備の大導師なりと結し、法については儒道、外道、骨纏、迹門、本門の五段に檢覈し、末法の正法を法華經と定めたのである。

この書に於て注目すべきは、一に報身、應身の顯本を說きて佛陀の人格的方面を高張したること。二に日蓮自身の本地上行の顯本を主張したると同時に、その半面に懺悔滅罪の義を主張し、今生の值難はこれ我が先世の謗法の重罪の招くところの結果のみ、法華經を弘通することによつて速に宿罪を消滅して成佛の期を早めたるを喜ぶ切々の情は、强き日蓮の裏に人間的日蓮を表現したるものがあり。三に我れ日本の柱とならん、我れ日本の大船とならん、我れ日本の眼目とならんの三大誓願を絕叫して、大日本的佛法の特色を發揮した點である。

尙本書と觀心本尊抄とを、日蓮聖人の二大著書とし、その宗の根本的聖典である。而して本書を人の開顯、本尊抄を法開顯とし、又本抄を敎、本尊抄を觀とし、人法、敎觀の旨歸この二抄に盡すとせられてゐる。聖人佐渡に入つて先づこの書を著して自身の開顯をなし、末法正導の師なるを明にし、次に觀心本尊抄を著して宗旨の三大祕法を開顯して末法應時の妙法を說かれたのである。又この二書と安國論、報恩鈔、撰時鈔とを併せて日蓮の五大部と稱する。

❼(注釋) 身延日朝開目抄見聞四卷。立本寺日禎開目抄講談二卷。要法寺日性御書註三卷。妙覺寺日講錄內啓蒙六卷。大石寺日寬愚記四卷。玉澤日妙拾遺一卷。同扶老二卷。佛敎大系開目鈔等(已上刊行) (望月歡厚)

開目鈔愚記 ❶(日)Kai-moku-shō-gu-ki. ❷一卷 ❸存、日蓮宗々學全書(日蓮正宗部之內) ❹日寬(寬文五—享保一一 A. D. 1665—1726)述 ❺卷頭に「富山大石學頭、大貳阿闍梨日寬記」とあつて他書の如く述作年代を記してないが、日寬が學頭に任ぜられたのは正德元年で、享保三年には大石寺を重したのであるから恐らく正法末年の述作であらう。日寬が興門流石山系(正宗)の立場に於て重要御書を註釋した中の一書で、同宗獨特の解釋が隨處に見られる。

當鈔大意事、當鈔題號事、夫一切衆生等文、此佛陀等文、但シ此經等文、文底祕沈文、我實成佛已來無量無邊文、雖ドモ然未ダ發迹顯本、觀一念三千不ル顯文、至ニ本門ニ破ニ始成正覺ニ四數果疏等文、九界具ニ無始佛界ニ等文、其上下隆等文、不ル知大過等文、此經此書肝心等文、證前實塔上等文、十方諸佛來集等文、寶塔虛空等文、釋迦多寶並座文、人天大會星列等文、大日經金剛頂經等文、所謂上行等文、我實成佛已來文、一言大虛妄疏文也文、此土本土ナリ等文、諸佛釋迦如來分身等文、禪宗下賤者等文、父母語不ル可ル不ル知等文、種熟脫名字倚無何況其義文、日蓮イヒシ者等文、九月十二日文、子丑時類ハネラレヌ文、ヲソロシクテヲソロシカラズ文、此釋多寶等文、又守護神等文、我日本國柱トナラン等文、涅槃經疏云出家在家護法等文、末法攝受折伏アルベシ等文、シタシキ父母ナリ文の三十七箇條を揭げて、開目鈔上下二卷の大意及び要文を逐次解釋してある。

(馬田行啓)

開目鈔講義 ❶(日)Kai-moku-shō-kō-gi. ❷二卷 ❸存 ❹日我 ❻(立大、D〇・二五〇)

開目鈔講錄 ❶(日)Kai-moku-shō-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹本田主馬著 ❺大正一五刊 ❻(谷大)

開目鈔撮要 ❶(日)Kai-moku-shō-sa-tsu-yō. ❷二卷 ❸存 ❹日我 ❻(立大、D〇・二二)—安政元 A. D. 1819—1854)述、小林日薰(—明治三八 A. D. 1945)寫 ❺明治三六寫 ❻(立大、D〇・二二)

開目鈔讃仰資料 ❶(日)Kai-moku-shō-san-gyō-shi-ryō. ❷一卷 ❸存 ❹清水龍山註 ❺大正九刊 ❻(立大、B〇二・三—四)

開目鈔私見聞 ❶(日)Kai-moku-shō-shi-ken-mon. ❷四卷 ❸存、日蓮宗々學全書、朝師御書見聞集第一之內) ❹日朝(應永二九—明應九 A. D. 1422—1500)述 ❺文明一一(A. D. 1479) ❻日蓮宗中世の碩學身延の行學院日朝が、日蓮の遺文卽ち御書に註釋したもの丶一種で、開目鈔の註釋としては最古に屬するものである。第一卷には開目抄事、開目抄ト云ヘル題目事、御書云夫一切衆生尊敬スベキ者三アリ所謂主師親コレナリ、御書云又習學スベキ物三アリ、所謂儒外內コレナリ、習云字事、儒家事、三皇五帝事、三王事、天尊事、萬民橋梁事、三皇已前ハ父ヲシラズ人皆禽獸同等事、重華事、湯公事、武王西伯木像造事、丁蘭母形キサム事、比干事、公鳧トイキシ者ハ魏王ノ肝ヲトテ我腹ニ入テ死ヌ事、御書云此等忠ノ手本ナリ云云、等六十題、第二卷には、三大聲世尊此一切衆生大導師大眼目大橋梁大船師大福田等シ、一切衆生大導師事、等七十七題、第三卷には、御書云迹門十四品一向圖前ニ同ズ等云云、御書云本門十四品モ涌出壽量ヲ除テ皆始成ヲ存セリ云云、等九十一題、第四卷には、傳敎大師ハ日本顯密ノ元祖秀句云等者、眞言華嚴等ノ經々ニハ雜亂麤ノ三義名字猶ナシ何況其義者、等八十四題合計三百十二題を揭げて詳細なる註釋を施してある。

(馬田行啓)

開目鈔詳解 ❶(日)Kai-moku-shō-shō-ge. ❷一卷 ❸存 ❹本多日生著 ❺大正八刊 ❻東京大鈴閣

開目鈔要文 ❶(日)Kai-moku-shō-yō-mon. ❷二卷 ❸存 ❹日興(寬元三—正慶元 A. D. 1245—1332)撰 ❼(參考) 大日本佛敎全書敎刊豫定書目

開窟編 ❶(日)Kai-tsu-hen. ❷二卷或三卷 ❸存 ❹運敞(慶長一九—元祿六 A. D. 1614—1693)撰 ❺空海作と稱する守護國界經釋・雜問答の非を指摘して、その眞撰に非ざる事を述べたもの。 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❺貞享三刊 ❻(正大、一四二・八八、一四五・一)(京專)(龍大、二六六四・三)(京大、日大未・四四一)(高大、寄・一・五七)

開窟編辨疑 ❶(日) Kai-tsu-hen-ben-gi. ❷一卷 ❸存 ❹運敞(慶長一九—元祿六 A. D. 1614—1693)撰 ❺運敞開窟編を著はし、守護國界經釋並に雜問答が、空海眞撰に非ざる事を述べたに對し、淨嚴は精疑一卷を著はして疑をたゞす。運敞之に答へて更に本書を著はす。 ❼(參考) 淨土眞宗敎典志第三 ❺貞享五刊 ❻(龍大、二六六四・四)(谷大、餘大・三〇七六)(高大、寄・一・五七)(哲、け・五・右・一)

解說西域記 ❶(日)Kai-setsu-sai-iki-ki. ❷一卷 ❸存 ❹堀謙德著 ❺大正元刊 ❻(谷大、餘洋・三二二)(龍大、二九七一・三)

解說梵語學 ❶(日)Kai-setsu-bon-go-gaku. ❷一卷 ❸存 ❹神亮三郎著 ❺明治四〇刊 ❻(京專) ❼眞言宗高等中學

解題叢書 ❶(日)Kai-dai-sō-sho. ❷一卷 ❸存 ❹廣谷雄太郎編 ❺大正一四刊 ❻(龍大)

楷正錄 ❶(日)Kai-shō-roku. (支) Chieh-cheng-lu. ❸存 ❹朝鮮(雪寶)有訓撰 ❼(參考) 禪籍目錄

楷定記 ❶(日)Kai-jō-ki. 觀無量壽經四帖疏楷定記、觀經疏楷定記 ❷三十六卷 ❸存、大日本佛敎全書第五八—五九、西山全書第六—七 ❹道敎編意(仁治元—嘉元二 A. D. 1240—1304)說嘉元二、年六七淑撰 ❼(參考) 淨土眞宗敎典志第三 ❻寬文四刊(谷大、宗大・六三五)(龍大、二四一五・九〇—九五、研眞)(寶永一七刊(龍大、別置)

楷定記考文 ❶(日)Kai-jō-ki-kō-mon. 四帖疏楷定記考文 ❷四卷 ❸缺 ❼(參考) 淨土眞宗敎典志第三

楷定集 ❶(日)Kai-jō-shū. ❸缺 ❼(參考) 淨土眞宗敎典志第二

誡王經 ❶(日)Kai-ō-kyō. (支)Chieh-wang-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(—太始二—建興元 A. D. 265—313)譯 ❼(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一五、貞元錄第二五

誠具經　❶(日) Kai-gu-kyō (支) Chie-chō-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(一太始二一建興元 A.D.265—313) 譯 ❼(參考) 仁壽錄第五,祐泰錄第五,開元錄第一五,貞元錄第二五

誠鬪東邪見消息　❶(日) Kai-kwan-tō-jā-kyō-shō-sokū. 誠鬪東邪見之徒嬰兒消息 ❷一卷 ❸存,眞宗全書第六二 ❹功存(享保五—寬政八 A.D.1720—1795)作 ❺寬政三(A.D.1791)

❻關東地方に於て,まびくと稱し,子供多くして養育し難いところから,親自ら我子を殺害することが行はれたので,幕府の命により本山から敎誡の爲めに下された消息。　(潮曾眞澄)

誠驗抄　❶(日) Kai-gen-shō　❷一冊 ❸存 ❺慶安二刊 ❹(高大,寄・一・五七)

誠初心學人文　❶(日) Kai-shō-shin-gaku-shin-mon. (支) Chie-chū-shō-shin-hsüeh-jen-wen. ❷一卷 ❸存,大正四八・一〇〇四 Vol. 2319b, 明北1643敎(眞心直說附錄) ❹高麗知訥(紹興二八—大安二 A.D.1158—1210)述

❻高麗第二十代神宗第二十二代熙宗間に獨立の禪宗を擧揚した佛日普照國師知訥の垂誡示衆の文であつて,學佛道初心の人は惡友に遠離して賢善に親近し,五戒・十戒等を受け,常に柔和を念として,善順にして我慢貢高なるべからず。大なるは兄,小なるは弟と考へよとて修道の用心を示衆し,僧房に於ける日常の生活の心得等を懇切に訓誡し,定慧圓明にして自性を徹見し,衆生を度し,人天の大福田と作る樣努めよと示誡してゐる。

❹朝鮮古寫本(帝國,特別・一・わ・二五)朝鮮版(內閣)　(大久保堅瑪)

誠殺生法語　❶(日) Kai-sen-hō-go-ro ❷一卷 ❸存,禪門法語集卷下,指月假名法語附錄 ❹慧印指月(一明和元 A.D.1764 七〇餘歲寂)語,梅友編

槐安國語　❶(日) Kai-an-koku-go. ❷七卷 ❸存,大正八一・五一一 Vol. 2574 ❹白隱慧鶴(貞享二—明和五 A.D.1685—1768)語

❻日本臨濟宗中興の祖,龍潭寺開山兩朝勅諡神機獨妙禪師正宗國師白隱和尙が,京都龍寶山大德寺開山特賜興禪大燈國師勅諡高照正燈・大燈雲匡眞國師宗峰妙超禪師の語錄に對して著語と評唱とを加へられたものである。書名の槐安國語とは,夢物語と云ふに同じい。宇宙は極めて謹嚴の語であるが,底意の深遠不可盡底なるは,禪書の常として云ふ迄も無い。昔,淳子莽なる者あり,忽焉として槐安國南柯郡の太守に任じ,二十年の久しきに涉りて,榮華を極めたるが,一朝覺め來れば,是なん坐上一醉の夢なりしとの故事がある。書目は此の故事に基く。大燈國師語錄及び其の說者・編者の一斑に關しては,其の條の解說に俟つ。本書撰著の因緣は,寬延第二己巳歲晩春伸涖の作に係る正宗國師の自序たる「評唱龍寶開山國師語錄・拙語」に「惟時,寬延第二己巳の曆,孟春開制の日,予が西來住庵の諸子,稽首禮拜して告げて曰く,夫れ大德開祖の如きは,東海日多の先祖にして,華地國師の老婆也。大旗を弄する惡手閥あり,門牆の孤危なること,南泉・長沙に讓ること無く,應麟步驟黃覺慈明の體裁あり。其の餘甚だ高雅にして,偈頌明瞥の風調を帶ぶ。然も久しく大德藏裏に秘して,人多く之を知る無し。今,其の兒孫位を以て數ふべし。其の中,博覽にして二酉を盡し,强記にして三蜚を窮むる底の者と雖も,之れを披閱する者無し。往往にして傳記百家の書を得れば,則ち玉垣を暗路に拾ふが如くにす。獨り乃祖の錄に到りて顧ざる者は何ぞや。傳記百家の如きは,則ち讀まざるも亦可なり。其宗祖の錄に於ては,則ち熟讀せずんばあるべからざる也。願くは師之れを評唱したまへ。今の世に當りて一舉にして一鰐を發する者は,師に非ずして誰ぞや。貴むらくは,兒孫をして此の錄あることを知らしめんと。予,鄙陋して曰く,不可なり,不可なり,夫れ佛祖無上の妙道は職劫の難行なり。忍び難きを能く忍び,行じ難きを能く行じて,而して後に大事を成辦するに到る。吾輩,小德小見慢心慢心,豈輕しく手脚を著くべけんや。諸子の曰く,師向に碧巖錄を講演するもの數次,此書と碧巖錄と重輕いかんぞ。此書の講若し非ならば,則ち碧巖錄も亦必ず非ならん。碧巖錄の講若し是ならば,則ち此書も亦果して是ならん。請ふ師一に此に居れ。請ふこと莫れ,今は是にして昨は非なることを覺ゆと。予が曰く,碧巖錄の如きは,處々皆之れ有り,此書の如きは,大德雲門庵の藏祕にして,而も漫りに印施すること無し。之れを爲んこといかん。諸子の曰く,龍峯に上りて,祕典を詳講することは,吾が輩の任なり。豈師の手を假らんや。予曰く,碧巖錄の如きは,籠頭有り,諸鈔有り,此書の如きは,國字も亦加へず。如何が口を開くことを得ん。況や寡陋の野夫,從前纔に少しく憶持記持することあるも,十の八九は既に遺忘し了れり。大師の造渺たる言字海,瀰漫たる毒波浪に到りては,啞子苦瓜を嚙む,如何が人に說向せむ。唯だ千萬之れを恕せよ。諸子の曰く,陳篇を探りて事實を校讎することは,不敏なりと雖も,伏して請ふ駑鈍を竭さむ。師,唯だ拈弄一遍せば足るらくのみと。予,遁退惟れ谷り,言ふ所を知らず,緘默して竟に休す。越えて衆に首たる者の請(一請)と薦と壽の輩,僧に謀りて大綱を定め,其所能に隨つて之れを役す。期と頭とは,行程數百里,糧を裹み繪を涉りて京師に馳せ,龍峯に上りて印施を懇請す。日ならずして百餘軸を得て,駄載して將ち來れり。魯(元魯)と座とは,陳篇を諸方に借り探りて,竟に百餘軸の珠音を作りて,書中難解の事實を大略抄錄す。露を滴りて朱を磨し句讀を分つ者あり。字義を考ふる者あり。國字を加へ訓點を添ふる者あり。既に集りて大成して,予が面前に惟し出す。予,因辭するに遑あらず,茫茫として覺へず此座に上る。恰も水を何頭に乞ひ圓して,撥ひ來りて又何頭に資らんと願する者の如し。轉た慚惶の至りに堪へず。枉げて俚語一章を綴りて,以て諸子の嗜を止む。格爾丙丁童在りや。明雨滴

の子,玄圓山の蒼,風葉に對しては鞭刑として龍類を解く。功課にか歸するや。鯨海に跨りては毒浪を浪み來り,之子を傷害す。初めは鎌倉に行きて汗を萬壽室に滴らせ,佛國禪師課く他を印可す。後には華洛に走りて,見を絹光庵に呈し,大應國師未だ傳を許さざる在り。久しからずして留石の關を透りては,鑑鳴關を徹見し,中口にして百丈の話を聞きては柱械枷を摩碎す。五條橋下の二十年,折脚鐺內に篇頭を垂し烏羽を養る。九重城裏の五節會,曲木床上に狐涎を吐き狼牙を鳴す。橫嶽百日の住劍は,息訥三世の嶋墜たり,雲門再世の臭骨は,扶桑第一の毒華たり。乾坤を打破して,南都北京の律虎義龍を活捉しては,眼に寰宇を空し,氣佛祖を呑む。法窟に錦居して,西江東湖の驥駟馬領を慄害しては,心は波旬の如く,面は夜叉に似たり。乞者陳裏に席を被りて生擒せらるゝことは甜爪を貪るに依り。貴人頭上に拂を乘りて恣に談笑することは栗棘を呑むに依る。五百年間出の跡知識,三轉語獅天の惡口嗔たり。錄あり大德藏裏,四百年寶惜すること太何の如し。錄無し長安城下,數日程に屈詰すること佛骨に過ぎたり。頭・頭兩僞の忠節を較りては,龐龍の領下を竄ひ,魯・陳二子が隻手を藩うては,宇義等の差を正す。近口頭佛果の老婆禪に効つて,各々鳴休の鼓評唱を請ふ。洗心子が紙炬火を遮くると雖も,錯て雪寶の葛藤窟に陳つ。烏焉を魚魯に涵へ,風鳴を山鶏に貴む。腥風膾は衆し老尻脚,末期手に任せて拋折し,臭血腐今に到りて佛祖を度し,人天の大福田と作る樣努めよと示誡してゐる。

❹朝鮮古寫本(帝國,特別・一・わ・二五)朝鮮版(內閣)　(大久保堅瑪)

誠殺生法語　❶(日) Kai-sen-hō-go-ro ❷一卷 ❸存,禪門法語集卷下,指月假名法語附錄 ❹慧印指月(一明和元 A.D.1764 七〇餘歲寂)語,梅友編

槐安國語　❶(日) Kai-an-koku-go. ❷七卷 ❸存,大正八一・五一一 Vol. 2574 ❹白隱慧鶴(貞享二—明和五 A.D.1685—1768)語

❻日本臨濟宗中興の祖,龍潭寺開山兩朝勅諡神機獨妙禪師正宗國師白隱和尙が,京都龍寶山大德寺開山特賜興禪大燈國師勅諡高照正燈・大燈雲匡眞國師宗峰妙超禪師の語錄に對して著語と評唱とを加へられたものである。書名の槐安國語とは,夢物語と云ふに同じい。宇宙は極めて謹嚴の語であるが,底意の深遠不可盡底なるは,禪書の常として云ふ迄も無い。昔,淳子莽なる者あり,忽焉として槐安國南柯郡の太守に任じ,二十年の久しきに涉りて,榮華を極めたるが,一朝覺め來れば,是なん坐上一醉の夢なりしとの故事がある。書目は此の故事に基く。大燈國師語錄及び其の說者・編者の一斑に關しては,其の條の解說に俟つ。本書撰著の因緣は,寬延第二己巳歲晩春伸涖の作に係る正宗國師の自序たる「評唱龍寶開山國師語錄・拙語」に「惟時,寬延第二己巳の曆,孟春開制の日,予が西來住庵の諸子,稽首禮拜して告げて曰く,夫れ大德開祖の如きは,東海日多の先祖にして,華地國師の老婆也。大旗を弄する惡手閥あり,門牆の孤危なること,南泉・長沙に讓ること無く,應麟步驟黃覺慈明の體裁あり。其の餘甚だ高雅にして,偈頌明瞥の風調を帶ぶ。然も久しく大德藏裏に秘して,人多く之を知る無し。今,其の兒孫位を以て數ふべし。其の中,博覽にして二酉を盡し,强記にして三蜚を窮むる底の者と雖も,之れを披閱する者無し。往往にして傳記百家の書を得れば,則ち玉垣を暗路に拾ふが如くにす。獨り乃祖の錄に到りて顧ざる者は何ぞや。傳記百家の如きは,則ち讀まざるも亦可なり。其宗祖の錄に於ては,則ち熟讀せずんばあるべからざる也。願くは師之れを評唱したまへ。今の世に當りて一舉にして一鰐を發する者は,師に非ずして誰ぞや。貴むらくは,兒孫をして此の錄あることを知らしめんと。予,鄙陋して曰く,不可なり,不可なり,夫れ佛祖無上の妙道は職劫の難行なり。忍び難きを能く忍び,行じ難きを能く行じて,而して後に大事を成辦するに到る。吾輩,小德小見慢心慢心,豈輕しく手脚を著くべけんや。諸子の曰く,師向に碧巖錄を講演するもの數次,此書と碧巖錄と重輕いかんぞ。此書の講若し非ならば,則ち碧巖錄も亦必ず非ならん。碧巖錄の講若し是ならば,則ち此書も亦果して是ならん。請ふ師一に此に居れ。請ふこと莫れ,今は是にして昨は非なることを覺ゆと。予が曰く,碧巖錄の如きは,處々皆之れ有り,此書の如きは,大德雲門庵の藏祕にして,而も漫りに印施すること無し。之れを爲んこといかん。諸子の曰く,龍峯に上りて,祕典を詳講することは,吾が輩の任なり。豈師の手を假らんや。予曰く,碧巖錄の如きは,籠頭有り,諸鈔有り,此書の如きは,國字も亦加へず。如何が口を開くことを得ん。況や寡陋の野夫,從前纔に少しく憶持記持することあるも,十の八九は既に遺忘し了れり。大師の造渺たる言字海,瀰漫たる毒波浪に到りては,啞子苦瓜を嚙む,如何が人に說向せむ。唯だ千萬之れを恕せよ。諸子の曰く,陳篇を探りて事實を校讎することは,不敏なりと雖も,伏して請ふ駑鈍を竭さむ。師,唯だ拈弄一遍せば足るらくのみと。予,遁退惟れ谷り,言ふ所を知らず,緘默して竟に休す。越えて衆に首たる者の請(一請)と薦と壽の輩,僧に謀りて大綱を定め,其所能に隨つて之れを役す。期と頭とは,行程數百里,糧を裹み繪を涉りて京師に馳せ,龍峯に上りて印施を懇請す。日ならずして百餘軸を得て,駄載して將ち來れり。魯(元魯)と座とは,陳篇を諸方に借り探りて,竟に百餘軸の珠音を作りて,書中難解の事實を大略抄錄す。露を滴りて朱を磨し句讀を分つ者あり。字義を考ふる者あり。國字を加へ訓點を添ふる者あり。既に集りて大成して,予が面前に惟し出す。予,因辭するに遑あらず,茫茫として覺へず此座に上る。恰も水を何頭に乞ひ圓して,撥ひ來りて又何頭に資らんと願する者の如し。轉た慚惶の至りに堪へず。枉げて俚語一章を綴りて,以て諸子の嗜を止む。格爾丙丁童在りや。明雨滴說」が即ち當時の遺編で,東嶽和尙手澤の書入本には,明かに「應=甲州下山南松院請=講=槐安國語=」と見える。一部七卷の內容は,卷第一には,前に引く「評=唱龍寶開山國師語錄=拙語」なる自序に次で「槐安國語標目」(目次なり後人の所安に係る)「槐安國語開甚垂示」各一編を卷首に安じ,以下,大燈國師語錄の編次に準じて「龍寶開山語錄中事(往大德語要)」に就て,國師越格の宗乘眼を以て殺活無碍の著語を施こす。第二卷は前卷に續く。第三卷は「龍寶開山語錄中事」の中「住崇福語要」,即ち大燈國師の筑州太宰府萬年崇福禪寺語錄に依り,第四卷は「退崇福歸大德語要」,即ち洛陽龍寶山大德禪寺語錄(退=積岳=歸=本寺=)に依り,第五・六卷は頌古の部にして,次第の如く第五卷には (一)淨居叉手,(二)趙柴茶毘,(三)思問,(四)天陸劫火,(五)百丈耳聾,(六)保福遊山,(七)提婆宗話,(八)三界無法,(九)巖頭別宇,(一〇)古佛露柱,(一一)汝名什麼,(一二)雲門一寶,(一三)禾山打鼓,(一四)仰山遊山,(一五)外道問佛,(一六)言不言話,(一七)大好燈籠,(一八)欄裡失牛,(一九)南泉斬猫,(二〇)僧伽知慢,(二一)祭者領徒,(二二)弟子衰老,(二三)密多傳衣,(二四)玄沙三病の古則二十四則に關する龍寶國師の頌古を,第六卷には,(二五)梁岩眉毛,(二六)犀牛扇子,(二七)皇夢百丈,(二八)大隋問僧,(二九)三角此事,(三〇)不二法門,(三一)趙州孩子,(三二)月夜踏索,(三三)雲門胡餅,(三四)厨東三門,(三五)馬祖不安,(三六)雲中蒼天,(三七)藥

山看猜、(四一)國師立義、(四二)麻三斤話、(四三)不思善惡、(四四)絕蹤木叉、(四五)扇然無聖、(四六)風穴垂話、(四七)胡亂三十年の古則二十四則を主題とする頌古を收めて、圓悟禪師の雪竇明覺大師の頌古百則の一一に垂示・著語・評唱の三を加へて碧巖集を成ぜられたるが如く、垂示・著語及び評唱を加へられる。第七卷は拈古にして、(一)臨濟孤峯、(二)大皇修驗、(三)鼻孔遼天、(四)雲門北斗、(五)雪竇二龍、(六)大死底人、(七)臨濟疑著、(八)雪竇問答、(九)穴野盤餐、(一〇)婆子勘破の拈古十則に通じて著語を附すること、卷第一等に於けると同じい。卷末に國師の大燈國師語錄の講了の垂示を附する。曰く「諸子、初め國師の語錄を提唱せんことを請ふや、予が心裏其だ悅ばず、僭越を畏れて固辭して可きず。京師に行きて語錄を請し來る者百餘軸。中に就て其精萃一軸を取りて、講本と稱して予に附せり。予、顧みず。机上に頓放するもの數日なり。其端由無きに非ず。中頃、某甲居士有り。常に云く、將に讀へり。大燈錄の如き者は、怒雷の巖を裂くに奮しく、金翅の海を劈くに似たりと。大に觀るべきの事あり。何ぞ計らむ、此の如きの莽々鹵々底の閑文字ならんとは。是れ叢林の口碑にして、諸子亦往々聞知する所の者なり。予、竊に謂へらく、其事あり。大明以來彫刻の諸錄を見るに、一紙も亦取る可き無し。縱ひ國師に亦分外の事あるも、豈牙齒を蹴して評唱するに足らんと。此に於てか悶惱して樂まず。一日、簫僧一兩輩を携へて、西に石氏の老翁を訪ふ。一僧あり。予の常に彼に行き淹留日を重ねることを知り、彼の一軸を把りて走り來り、予の肩輿に投入す。予、復た顧みず。既にして二里餘にして、西、柏樹茶店に到り、肩輿且らく休す。予、竊に軸を繙いて披閱するもの兩三紙、戰栗肌を侵し、慚汗背を浹し、老淚下りて自襟に滴る。疊へず手を拍て大笑して曰く、太好老居士好耳朶、者般の迅雷霹靂を聞くことを得ず。雪山の大定なるか、劉伶の醉裏なるか、大好老居士好耳朶と。唱へ了りて手を拍て大笑す。里人行旅皆怪み見る。是んで青楊堤上に上る。是れ風好殊絕の地にして、予常に甚だ之れを愛し、往來する毎に眺望時を移す。此日や全く左右を顧みず、載悅載笑、行きて石氏の柴門に到る。石翁及び舊友老幼十四五輩、皆迎へて門外に立つ。予、一見人事を省みず、問訊を演べず。唯だ言ふ、大好老居士好耳朶、者般の迅雷霹靂を聞かず、大好老居士好耳朶と。老幼皆怪しむ。既にして石氏の室に在る者三五日、二時粥飯の外、別に行き浴に入り、請に應じて客に對するの餘は、皆看讀して卷を釋かず。或は悅み或は眄り、且は悲み且は喜ぶ。一には宿緣淺薄にして馬痴既に從心に近きに、此錄あることを知らずして拜投其だ晚かりしを恨むにあり。一には今時往々にして參禪の大事を業廢して、泥犁裏を出て見ること能はず、八識顚耶の暗窟を死守して、一生を過り了る縱ひ修得十成なるも、二乘相似の化城を出でず、甘んじて直指向上の禪と稱して、者般無比の金文ありと雖も、總じて顧みざることを顧りてなり。三には二十四番の活祖師、鯨海に跨り鯨波を凌ぎ、此向上の宗旨を傳ふるに、此澆末の弊風に吹倒せられて、氣息奔雷（ぐんとする）を悲みてなり。四には叢林半死餘喘、纔に留りて五百年藏祕の聖典に撞着して驚思驚絲を結びしを喜びてなり。既にして歸り來りて門に入るに、諸子欣び迎へて復た之れを評唱せんことを請ふ。予、曼（ず）大笑して彼の迅雷霹靂を言ふ。諸子大に怪しむ。終に彼の始終を說くに、諸子赤各々歡喜して踊舞を忘る。予、又言く、且喜すらくは住菴の諸子、各々擇法眼を具して、數千卷の諸錄の中に於て、特に此藏遺の祕典を取りて、惠日を扶桑澆末の骨髓に挽げ、且つ叢林老後の悲歎を慰むるものは、諸子多年の參禪苦學の得力に非ずや と。諸子の言く、然らず。總て是れ我が師二十年左提右携の功果に依る。豈是れ我が輩の力ならんやと。予曰く、縱ひ予提携に力を盡すと雖も、諸子の實參眞修する無くば、豈此盛事あらんや。諸子に實參眞修あり、且師難透の話頭を留めずんば、豈此田地に到ることを得んや。果莫佛祖の深恩に依るなりと。時に甲陽の海嶽主人、節岩新命來り訪ほる。是れ赤舊參菴居の一員なり。即ち曰く、大燈錄の如きは未曾有の勝會なり。間喜言ふ所を知らず。願くば處々緊要の處に於て下語せられなば、是れ又一場の佛事なるものか。雪竇錄の如きは、能寶大士は其子孫に非ずと雖も、且く其高頌を貴んで親しく下語せらる。況や師は其兒孫なるをや。眉毛を惜まず、請ふ一堂の衲子を供養せよと。予曰く、國師向上の遺音を渉りに評唱せば、且は罪過彌天なり。況や、輕々しく凡解を添ふるに於てをや、向後明眼の宗師を待て是れ可なり。他曰く、諸方住々にして言ふ、大燈錄の如きは獅下餘祕、過上孤危、古今の衲子、萬丈の鐵板路を繫づるが如く、手を挽むに所無し。終に五百年間の霉貧と爲る。豈叢林の手を修うて聖場するを待たんや。大に怪むべしと。諸る者有り、疑ふ者有り、願くば老師下語して以て彼の解嘲に擬せよ。舊參の破衲六七輩、相隨つて請ふて止まず。此に於て燒香禮拜して、下語するもの七八句、諸子慶賀讚嘆して夜光を見るが如くなりとす。予、亦日起して居せず、群玉府に入るが如く、曼華林に立つに似たり。時ならずして大展炷拜し、時ならずして大笑獨語す。猶もすれば食味を忘れんと欲するもの數次、終に拈古趙州勘婆の則に到る。師、拈語して云く、遠く言ふ日下に孤燈を挑ぐ、殊に知らず失錢遭罰と。予、曼（ず）舌を吐き、香を裝ふに遑あらず、禮することを七八拜。自ら彈指懺悔して曰く、嗚呼、能寶國師大知尙の如き者は、參學の精萃なり。知らず幾生の大善知識ぞや、雲門の再世なること誠に鎖らず、日下孤燈の一語に到りては、雪竇に勝ること七歩、驚くべく慨む可し。吾聖蕪羊の眼を張り狐狸の智を恃み、拈弄下語せる大錯了也。況や我が華國大定聖惠皇師、恭しく萩原法皇の寵論を承りて、編撰する所の者なり。恐るべく敬すべし。是れ但だ住菴の諸子の嗜を止むるもの

のにして、大方の明德高賢に御ふるものにあらずと雖も、等を題ゆる罪犯は懺悔の容るゝ所無し。諸子一見せば、必ず丙丁童に付せよ。筆を擲つて曰く、謹んで住菴の諸子に白す、若し人大燈錄を披覽せんと欲せば、先づ須らく槃岩夏末の話に、次に南泉遷化の話、鹽官犀牛扇子、乾峯三種病、五祖牛窓蟻の話、國師三轉語、及び柏樹子話に參ずべし。就機あり。如上の數段の因緣は、見徹して掌上を見るが如くなるを見ずんば、竟りに了知を加ふること莫れ。況んや評唱拈弄をや。大に罪過を增す。若し又毫釐も毀謗の心を生ぜば、永劫に苦輪に墮せん。他勝々々」と。國師の大燈國師語錄に對する以て知るべく、本書撰著の作意又察知し得るであらう。慣例の程知るべきである。國師の下語擧れるは、寬延第二己巳仲秋二十五冥。編輯者は舊參の衲子一諾、元魯、宗實二首座の訂校に係る。寬延開版の後、元治元年の兵燹に罹り板木焚上、明治十八年乙酉九月、土州の橫山指月居士、圓覺寺洪川、大德寺敎宗二師の再鐫の序、祖國寺興國の跋を請うて再刊、山岡鐵舟居士、洪川の序を書す、世に多く流行するものの之れである。（今津洪嶽）

槐安國語開莖垂示 ❶(日)Kwai-an-koku-go-kai-kei-sui-ji. ❷一卷 ❸存、自證廣錄第二之內 ❹白隱慧鶴(貞享二—明和五年 A. D. 1685—1765)述

槐安國語活句集 ❶(日)Kwai-an-koku-go-kwak-ku-shū. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

槐安國語佛薑稿 ❶(日)Kwai-an-koku-go-kot-kyō. ❷二卷 ❸存 ❹元魯、宗實共編 ❺寬延三刊 ❻(駒大)×谷大、餘大・二八二二)

槐安國語附槐安拈古 ❶(日)Kwai-an-koku-go-tsukefari-kwai-an-nen-ko. 校訂槐安國語附槐安拈古 ❷一卷或五卷 ❸存 ❹明治一八刊(帝國・一三八・八一)明治一九刊(帝國・一一・六〇・一〇九・一六四)(駒大)

槐安國語提唱錄 ❶(日)Kwai-an-koku-go-tei-shō-roku. ❷六卷 ❸存 ❹飯田欅隱、岡田覺兒共編 ❺大正一〇刊 昭和二刊 ❻(駒大)

槐安拈古 ❶(日)Kwai-an-nen-ko. ❷一卷 ❸存、校訂槐安國語附錄 ❹一諾編 ❺明治一九刊 ❻(駒大)

槐國和尙大林語錄 ❶(日)Kwai-koku-o-shō-dai-rin-go-roku. ❷二卷 ❸存 ❹槐國萬貞話、利通等編 ❼(參考)禪籍目錄

槐堂遺稿 ❶(日)Kwai-dō-i-kō. ❷三卷 ❸存 ❹祝容日智、文政二—安政元 A. D. 1818—1854)撰 ❻寫本(立大、D○・三三四)

誨子經 ❶(日)Kwai-shi-kyō. (支) Hui-tzū-ching. ❸存、生經卷第四(大正三No. 154. 38)

誨子經 ❶(日)Kwai-shi-kyō. (支) Hui-tzū-ching. ❷一卷 ❸失譯 ❹生經卷第四の抄出 ❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第六、三寶紀第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、內典錄第一、開元錄第一六、貞元錄第二六

誠羅云經 ❶(日)Kai-ra-un-kyō. (支)Chie-lo-yao-ching. 誠羅雲經 ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(—太始二—建興元 A. D. 265—313—) ❼(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一五、貞元錄第二五

嶮谷詩集 ❶(日)Kai-koku-shi-shū. ❷二卷 ❸存 ❹岸風貿文慶(—天明頃? A. D. 1781—1788—) ❺寬政一〇刊 ❻(正大・一〇五・九八)

選逅露志 ❶(日)Kai-ko-ro-shi. ❷一卷 ❸存 ❹大河原月江著 ❺大正三刊 ❻(正大、一〇三二・四三)

懷玉法師慰記 ❶(日)Kwai-gyoku-hō-shi-iki-ki. (支) Huai-yü-fa-shi-chi-i. ❷一卷 ❸缺 ❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

懷舊錄 ❶(日)Kwai-kyū-roku. ❷一卷 ❸存 ❹南條文雄(嘉永二—昭和二 A. D. 1849—1927)著 ❺昭和二刊 ❻東京大雄園

懷中記 ❶(日)Kwai-chū-ki. 灌頂用懷中記 ❷三卷 ❸存 ❹能禪(元久元—正應二 A. D. 1204—1289)記 ❻野澤通用式三卷に基いて撰述されたもので、灌頂三昧耶戒作法、並に初後夜作法を說いたものである。 ❺正元二寫 ❼(金剛三昧院)

改悔 ❶(日)Gai-ke. 改悔文、領解文 ❷一卷 ❸存、眞宗聖典全書(和文部)、蓮如上人全書、眞宗假名法典卷中 ❹蓮如彙壽(應永二二—明應八 A. D. 1415—1499)述 ❼(參考) 淨土眞宗聖教目錄

改悔協文集 ❶(日) Gai-ke-kyō-mon-shū. 改悔文協文集 ❷二卷 ❸存 ❺明治九刊 ❻(谷大、宗大・三五〇八)

改悔私記 ❶(日)Gai-ke-shi-ki. ❷三卷 ❸存 ❹文慈撰 ❺萬治二刊(龍大、一二四三・八〇) 萬治三刊(龍大、一二四三・七九、研眞)×哲、こ・七・中・八)

改悔鈔 ❶(日)Gai-ke-shō. ❷一卷 ❸存 ❹香厳院惠然(元祿六—寶曆一四 A. D. 1693—1764)撰 ❻寫本(龍大、研眞)

改悔大意 ❶(日)Gai-ke-tai. ❷一卷 ❸存 ❹法霖(元祿六—寶保元 A. D. 1693—1741)述 ❻寫本(龍大、一二四三・九三)

改悔批判 ❶(日)Gai-ke-hi-han. ❷七卷 ❸存 ❹香月院深勵(寶延二—文化一四 A. D. 1749—1817)述 ❻寫本(龍大、研眞)

改悔文 ❶(日)Gai-ke-bun. 改悔、領解文 ❷一卷 ❸存、眞宗聖典全書(和文部)、蓮如上人全書、眞宗假名法典卷中 ❹蓮如彙壽(應永二二—明應八 A. D. 1415—1499)述 ❻河內國出口光善寺の傳によると、同寺第二世光淳の室如宗尼(蓮師の孫)の願により書き與へられたもので、現に一本を傳ふ。若し之を史實とすると蓮師晚年の作となる。しかし、按の御文が多く蓮師の吉崎時代にあつたことや、當時「不拜祕事」の徒が多く歸宗したことや、この時代の御文に既に改悔懺悔の語が出てゐることや、又、他に二三異本の寫傳されてゐる

ることなどを考へると、初作は吉崎時代であつて出口本等は其後書き與へられたものとも考へられ、今のところ著作年代を決定すべき根本史料がない。

❻この文は蓮師が愚かな者に代つて既往を改悔して眞宗の正義にもとづいた領解の相を述べたもので、安心、報謝、師徳、法度の四段から成る。（一）モロ〳〵ノ雜行雜修自力ノ心ヲフリステ、一心ニ阿彌陀如來ワレラガ今度ノ一大事ノ後生御タスケ候ヘトタノミ申シテ候（安心）。蓮師は多く自力念佛の行者に對して、たゞ稱へてはたすからず「この念佛のいはれをよくしりたる人こそ佛にはなるべけれ」と諭し、常に善導の六字釋を以て佛の願心と行者の受けごころとを示されたのである。卽ち、南無阿彌陀佛といふは、我をたのめ（南無、歸命）必ずたすけう（阿彌陀佛、攝取不捨）といふ大悲召喚の勅命であつて、この勅命の聞えた聞えごころは、雜行すてゝ後生たすけたまへと彌陀をたのむと敎へられたので、今もこの立場から一念歸命のこゝろばえを述べられたのである。總體他力の信心には機に法を受ける義と機が法に向ふ義とがあつて、しかも受けたまゝ向ふ所に私なき他力廻向の信相が光るのであつて、誤つて能歸を募つてはならない。而して此中の「一心に阿彌陀如來」といふを主として全體をみる時は、改悔文はこのまゝ「善知識ダノミ」の改悔の相であり「御タスケ候ヘトタノミ申シテ候」といふ所からみると、このまゝ「十劫安心」の改悔の相であるのである。（二）タノム一念ノトキ往生一定御タスケ治定ト存ジ、コノ上ノ稱名ハ御恩報謝トヨロコビ申候（報謝）。彌陀をたのむ一念おこる時佛心と凡心と一體し佛の光明に攝め取られるから、そのときを以て我が往生は一定佛の御たすけは治定と存じ、從つて、その上の（信の上の）稱名は佛恩報謝と喜ぶといふのである。以上の「信心正因稱名報恩」は他の淨土門に異る眞宗の根本敎條である。而して此中の「タノム一念ノトキ往生一定御タスケ治定ト存ジ」といふ所を主にすると、改悔文はこのまゝ「不拜祕事」の改悔の相であり「コノ上ノ稱名ハ御恩報謝トヨロコビ申候」といふ所から見ると、このまゝ「無信單行」の自力念佛の改悔の相であるのである。（三）コノ御コトハリ聽聞申シワケ候コト御開山聖人御出世ノ御恩次第相承ノ善知識ノアサカラザル御勸化ノ御恩トアリガタク存候（師德）。他力の信心は善知識の敎化の下からいたゞかれるものであるから、佛恩報謝の次に師德報謝を出したので、特に御開山（宗祖親鸞）聖人以後の善知識を擧げたのは眞宗敎徒としての色合をあらはしたのである。（四）コノ上ハ定メオカセラル、御掟一期ヲカギリ相マモリ申ベク候（法度）。定められる掟といふは御文二の六等に示されてゐる掟で、終生それを守らうと信後の要期を述べたものである。但し嚴格にいふと、この掟を守ることは信前にも信後にも深い意味があるので、御文三ノ十三には「夫當流門徒中に於てすでに安心決定せしめたらん人の身のうへにも、また未決定の人の安心をとらんとおもはん人も、こゝろうべき次第は」と注意して王法仁義がすゝめられてゐる。而してこの師德や法度を中心にみると、改悔文は信心と生活とを離してゐる者の改悔の相を述べたものである。

斯くて蓮師は山科本願寺落成の頃から、報恩講の砌に御影前で改悔を申しあげることを定め（御文四ノ五）、恐らくその頃から先づ改悔文を讀みあげて後に心中の領解を述べることゝせられたやうである。天正八年の本願寺作法次第（實悟記）に「報恩講の事御文にもあそばしおかれ候ごとく、太夜過候へば人をことごとく出され御影堂に一人も人なきやうに成候て、のぞみの人五十人三十人殘り候やうに見え候、人多き時は三十人五十人候て、第一坊守衆改悔候て、次に其外の人一人づゝ前へ出られ、坊守衆の中をわけられおかれて、前にすゝみ、諸人改悔候間、一人づゝの覺悟申され、聽聞申候に殊勝に候ひし。緣などより申候は不可然候。一大事の後生の一儀を緣の端などより被申候は不可然とて、一人宛前へ出て改悔名をなのり高らかに被申候て、一人々々の覺悟も聞え殊勝に候ひき。當時の樣に五十人百人一度に安心（改悔文）とて被申候へども、わけもきこえず息々しきばかりにて何たる事のたふときとも義理の相違もきこえず候事は前代なき事にて候」とあるにて、大凡當初の實況が偲ばれ、形式化の跡をも知るのである。因に、現に本願寺で行はれる報恩講の改悔批判は之れを傳へたものである。

❼〔注釋〕惠明院如晴改悔文科鈔。香嚴院惠然信受本願義。香月院深勵改悔文聞書。圓乘院宣明改悔文記。皆往院鳳嶺改邪文講義。威廣院靈曜改邪文講義。法宣改悔文記。僧鎔改悔文略辨。占部觀順改悔文集說等。❾（谷大、宗小・一二三）（安井廣度）

改悔文意　❶（日）Gai-ke-mon-i.　❷一卷　❸存　❹功存（享保五―寛政八 A. D. 1720―1796）述　❺天明三寫　❾（谷大、宗大・四〇〇三）

改悔文解說　❶（日）Gai-ke-mon-kai-setsu.　❷一卷　❸存　❹石川舜台（天保一二―昭和六 A. D. 1841―1931）著　❺大正一三再刊　❿東京森江書店

改悔文刊行後序仰讃　❶（日）Gai-ke-mon-kan-kō-go-jo-gō-san.　❷一卷　❸存　❾寫本（龍大、一二四三・八三）

改悔文記　❶（日）Gai-ke-mon-ki.　❷一卷　❸存　❹圓乘院宣明（寛延二―文政四 A. D. 1749―1821）述　❺明治二五寫　❾（谷大、宗大・一七九二）

改悔文記　❶（日）Gai-ke-mon-ki.　❷一卷　❸存　❹法宣（享和三―慶應三 A. D. 1803―1867）述　❾寫本（谷大、宗大・二六五）

改悔文義林鈔　❶（日）Gai-ke-mon-gi-rin-shō.　❷一卷　❸存　❾寫本（龍大）

改悔文聞書　❶（日）Gai-ke-mon-

kiki-gaki.　❷一卷　❸存　❹香月院深勵（寛延二―文化一四 A. D. 1749―1817）述　❺明治三一刊　❾（谷大、宗小・一五〇）

改悔文聞書稽鈔　❶（日）Gai-ke-mon-kiki-gaki-kei-shō.　❷二卷　❸存　❹僧鎔述　❾明治一四刊（帝國、一四〇・一八〇）明治一五刊（龍大、研眞）（京大、一・二六・カ・一一）（谷大、宗大・二三五八）

改悔文協文集　❶（日）Gai-ke-mon-kyō-mon-shū.　改悔脇文集　❷二卷　❸存　❺明治九刊　❾（龍大、一二四三・八五）

改悔文偶語錄　❶（日）Gai-ke-mon-gū-go-roku.　❷一卷　❸存、南越是海全集卷下　❹佐々木徹周（文政元―明治二七 A. D. 1818―1894）編　❾刊本（谷大、宗大・三二八一）（龍大、研眞）

改悔文科鈔　❶（日）Gai-ke-mon-kwa-shō.　❷一卷　❸存、眞宗大系第三五　❹惠明院如晴（承應元―享保七 A. D. 1652―1722）述　❺大正六寫（谷大、宗大・二八三〇）

改悔文管窺　❶（日）Gai-ke-mon-kwan-ki.　❷二卷　❸存　❾寫本（谷大、宗大・一七八八）

改悔文管窺錄　❶（日）Gai-ke-mon-kwan-ki-roku.　❷一卷　❸存　❾寫本（谷大、宗大・三〇三〇）

改悔文勸考　❶（日）Gai-ke-mon-kwan-kō.　❷一卷　❸存　❹香月院深勵（寛延二―文化一四 A. D. 1749―1817）述　❾寫本（谷大）

改悔文御演說之記略詳　❶（日）Gai-ke-mon-go-en-zetsu-no-ki-ryaku-syō.　❷一卷　❸存　❹惠成（文政五―明治一五 A. D. 1822―1882）記　❾寫本（龍大）

改悔文講記　❶（日）Gai-ke-mon-kō-ki.　❷一卷　❸存　❹圓乘院宣明（寛延二―文政四 A. D. 1749―1821）述　❼（參考）眞宗大系刊行豫定書目

改悔文講記　❶（日）Gai-ke-mon-kō-ki.　❷一卷　❸存　❹湛流述　❺明治一八（A. D. 1885）　❾寫本（谷大、宗大・三二七七）

改悔文講義　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi.　❷三卷　❸存　❹皆往院鳳嶺（寛延元―文化一三 A. D. 1748―1816）述　❺寛政八（A. D. 1796）　❾寫本（谷大、宗大・六七六、宗大・四三八〇）

改悔文講義　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi.　❷一卷　❸存　❹香月院深勵（寛延二―文化一四 A. D. 1749―1817）述、安藤晃耀校　❾明治九刊（龍大、研眞）明治一五刊（龍大、一二四三・八六）（帝國、一八三・二一九）寫本（谷大、宗大・四〇二〇）

改悔文講義　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi.　❷一卷　❸存　❹圓乘院宣明（寛延二―文政四 A. D. 1749―1821）述　❺文化一四（A. D. 1817）　❾寫本（谷大、宗大・四四五六）

改悔文講義　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi.　❷一卷　❸存　❹賢藏（―文政七 A. D. 1824）述　❾寫本（谷大、宗大・一九九六）

改悔文講義　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi.　❷一卷　❸存、眞宗大系第三五　❹開悟院靈暀（安永四―嘉永四 A. D. 1775―1851）述

改悔文講義　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi.　❷一卷　❸存　❹妙音院了祥（天明八―天保一三 A. D. 1788―1842）述　❺文政五寫　❾（谷大、宗大・一七八四）

改悔文講義　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi.　❷一卷　❸存　❹香樹院德龍（安永元―安政五 A. D. 1772―1858）述　❺文化七（A. D. 1810）　❾寫本（谷大、宗大・一七八七）

改悔文講義　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi.　❷一卷　❸存　❹開華院法住（―明治七 A. D. 1874）述　❺明治四四寫　❾（谷大、宗大・一三九一）

改悔文講義　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi.　❷一卷　❸存　❹宗音（―明治三六 A. D. 1903）述　❾寫本（龍大）

改悔文講義彈斥篇　❶（日）Gai-ke-mon-kō-gi-dan-shaku-hen.　❷一卷　❸存　❹佐々木徹周（文政元―明治二七 A. D. 1818―1894）編　❺明治二二刊　❾（帝國、一〇・一七七）（龍大）

改悔文講解　❶（日）Gai-ke-mon-kō-ge.　❷二卷　❸存　❹易行院法海（明和五―天保五 A. D. 1768―1834）述　❾刊本（龍大、一二四三・八七）（谷大、宗小・五一）（立大、A四〇・八五）

改悔文講述　❶（日）Gai-ke-mon-kō-jutsu.　❷一卷　❸存　❹香山院龍温（寛政一二―明治一八 A. D. 1800―1885）述　❺明治一五刊　❾（谷大、宗小・八五）

改悔文講辨　❶（日）Gai-ke-mon-kō-ben.　❷一卷　❸存　❹威廣院靈曜（―文政五 A. D. 1822）述　❺明治五寫　❾（谷大、宗大・一七九三）

改悔文講辨　❶（日）Gai-ke-mon-kō-ben.　❷一卷　❸存　❹占部觀順（文政七―明治四三 A. D. 1824―1910）述　❺明治一一刊　❾（谷大、宗小・八三、宗小・二二九）

改悔文講話　❶（日）Gai-ke-mon-kō-wa.　❷一卷　❸存　❹慧晃（―安永五 A. D. 1776）述　❺明治二五刊　❾（龍大、一二四三・八八、研眞）

改悔文講話　❶（日）Gai-ke-mon-kō-wa.　❷一卷　❸存　❹眞輪成映述　❺明治四一刊　❾（谷大、宗洋・一七六）

改悔文講話　❶（日）Gai-ke-mon-kō-wa.　❷一卷　❸存　❹牧野紳爽（弘化二―明治四一 A. D. 1845―1908）述　❺明治四四刊　❾（谷大、宗洋・二四五）

改悔文四句分別　❶（日）Gai-ke-mon-shi-ku-fun-betsu.　❷一卷　❸存　❹僧鎔（享保八―天明三 A. D. 1723―1783）述　❼（參考）眞宗全書刊行豫定書目

改悔文私考　❶（日）Gai-ke-mon-shi-kō.　❷一卷　❸存　❾寫本（龍大、研眞）

改悔文試講篇　❶（日）Gai-ke-mon-shi-kō-hen.　❷一卷　❸存　❹香山院龍温（寛政一二―明治一八 A. D. 1800―1885）述　❺明治三三寫　❾（谷大、宗大・二〇四五）

改悔文資糧　❶（日）Gai-ke-mon-shi-ryō.　❷一卷　❸存　❹上杉文秀著　❾刊本（谷大、宗洋・七七六）

改悔文自勸鈔 ❶(日)Gai-ke-mon-ji-kwan-shō. ❷一卷 ❸存 ❹靈鍛(—明治二 A.D. 1869)述 ❾寫本(龍大、一二四三・八九)

改悔文取要 ❶(日)Gai-ke-mon-shu-yō. ❷一卷 ❸存 ❹僧鎔(享保八—天明三 A.D. 1723—1783)述 ❾寫本(龍大)

改悔文集說 ❶(日)Gai-ke-mon-shū-setsu. ❷一卷 ❸存 ❹古部觀順(文政七—明治四三 A.D. 1824—1910)述 ❽明治一六刊 ❾(谷大、宗小・七四)(龍大、研眞)

改悔文正理義解 ❶(日)Gai-ke-mon-shō-ri-gi-ge. ❷一卷 ❸存 ❹圓乘院宣明(寬延二—文政四 A.D. 1749—1821)述 ❽明治二九刊、大正八再版 ❾(龍大、一二四三・九〇—九一、研眞)(谷大、宗非・二八)

改悔文信受本願義 ❶(日)Gai-ke-mon-shin-ju-hon-gwan-gi. ❷一卷 ❸存 ❹香嚴院惠然(元祿六—寶曆一四 A.D. 1693—1764)述 ❼〔參考〕眞宗大系刊行撰定書目

改悔文圖說 ❶(日)Gai-ke-mon-zu-setsu. ❷一卷 ❸存 ❹稻垣湛空(天保九—明治二三 A.D. 1838—1890)述 ❽明治二〇刊 ❾(谷大、宗大・二三五七)(龍大、研眞)

改悔文隨聽記 ❶(日)Gai-ke-mon-zui-chō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹公嚴(寶曆八—文政四 A.D. 1758—1821)述 ❽文化八(A.D. 1811) ❽元治元寫 ❾(谷大、宗大・一六五)

改悔文隨聽記 ❶(日)Gai-ke-mon-zui-chō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹性海(明和二—天保九 A.D. 1765—1838)述 ❾寫本(龍大、一二四三・九二)

改悔文隨筆 ❶(日)Gai-ke-mon-zui-hitsu. ❷一卷 ❸存 ❹公嚴(寶曆八—文政四 A.D. 1758—1821)記 ❾寫本(龍大、研眞)

改悔文隨聞記 ❶(日)Gai-ke-mon-zui-mon-ki. ❷一卷 ❸存 ❹法宣(享和三—慶應三 A.D. 1803—1867)述 ❾寫本(谷大、宗大・一九九一)

改悔文先輩講述評論 ❶(日)Gai-ke-mon-sem-pai-kō-jutsu-hyō-ron. ❷一卷 ❸存 ❹賢藏(—文政七 A.D. 1824)述 ❾寫本(谷大、宗大・二〇三四)

改悔文聽記 ❶(日)Gai-ke-mon-chō-ki. ❷二卷 ❸存 ❹從賢 ❾寫本(谷大、宗大・一七八九)

改悔文同軌 ❶(日)Gai-ke-mon-dō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹元頑 ❾寫本(龍大、一二四三・九四)

改悔文祕錄 ❶(日)Gai-ke-mon-hi-roku. ❷一卷 ❸存 ❹威廣院寰曜(—文政五 A.D. 1822)述 ❾寫本(龍大、一二四三・九五)

改悔文筆記 ❶(日)Gai-ke-mon-hik-ki. ❷二卷 ❸存 ❾寫本(谷大、宗大・四一五八)

改悔文辨談 ❶(日)Gai-ke-mon-ben-dan. ❷一卷 ❸存 ❹大仙述 ❽明治四三刊 ❾(龍大、一二四三・九六)

改悔文法話 ❶(日)Gai-ke-mon-hō-wa. ❷三卷 ❸存 ❹長生院智現(—天保六 A.D. 1835)述 ❾寫本(谷大、宗大・四〇〇四)

改悔文問答 ❶(日)Gai-ke-mon-mon-dō. 得度受驗改悔文問答 ❷一卷 ❸存 ❹香藤現映(—昭和七 A.D. 1932) ❽明治四二刊 ❾(谷大、宗洋・一八八)

改悔文聞記 ❶(日)Gai-ke-mon-mon-ki. ❷一卷 ❸存 ❹香月院深勵(寬延二—文化一四 A.D. 1749—1817)述 ❾寫本(谷大、宗大・七七)

改悔文聞記 ❶(日)Gai-ke-mon-mon-ki. ❷一卷 ❸存 ❹點了撰 ❾寫本(龍大、一二四三・九七)

改悔文要義編 ❶(日)Gai-ke-mon-yō-gi-hen. ❷三卷 ❸存 ❹玄徹(—延享四 A.D. 1747—)述 ❾寫本(谷大、宗大・二六二三)

改悔文略 ❶(日)Gai-ke-mon-ryaku. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大)

改悔文略解 ❶(日)Gai-ke-mon-ryaku-ge. ❷一卷 ❸存 ❹泰巖(正德元—寶曆一三 A.D. 1711—1763)述 ❾安永三刊(龍大、一二四三・九八—九九)安永四刊(龍大、一二四三・一〇〇、研眞)寫本(谷大、宗大・二六二九)

改悔文略解 ❶(日)Gai-ke-mon-ryaku-ge. ❷一卷 ❸存 ❹古部觀順(文政七—明治四三 A.D. 1824—1910)著 ❽明治一四刊 ❾(龍大、研眞)

改悔文略註 ❶(日)Gai-ke-mon-ryaku-chū. ❷一卷 ❸存 ❹柔遠(寬保二—寬政一〇 A.D. 1742—1798)述 ❾寫本(龍大、一七五・四〇)

改悔文略辨 ❶(日)Gai-ke-mon-ryaku-ben. ❷一卷 ❸存 ❹泰巖(正德元—寶曆一三 A.D. 1711—1763)述 ❾寫本(龍大、一五〇二・二二〇)

改悔文略辨 ❶(日)Gai-ke-mon-ryaku-ben. ❷一卷 ❸存、眞宗全書第六二 ❹僧鎔(享保八—天明三 A.D. 1723—1783)述 ❻領解文を解釋したもの。初めに本書製作の由來を說き之を改悔文と稱する所以を敍べて、後に本文を略辨してある。
(瀨留眞澄)

改悔文略辨 ❶(日)Gai-ke-mon-ryaku-ben. ❷一卷 ❸存 ❹開悟院靈暀(安永四—嘉永四 A.D. 1775—1851)述 ❾寫本(谷大、宗大・一八五九)

改邪鈔 ❶(日)Gai-ja-shō. ❷一卷 ❸存、眞宗聖典全書(和文)、眞宗聖教大全卷上、眞宗假名聖教第三、假名聖教(惠空筆寫八十八部)之內、眞宗法要第七 ❹覺如(文永七—觀應二 A.D. 1270—1351)述 ❻本鈔は、門弟乘專の請によつて、當時の眞宗教界に於ける安心上行儀上の異義邪執を破斥すると共に、眞宗の正しき傳統を示し、親鸞門侶の歸趣を說いたものである。

すべて二十ヶ條の異解が舉げられてある。それ等は、第一第二條の名帳、繪系圖を初め、第三裳無衣、黑袈裟を用ふる事、第四同行等侶を自專し放言惡口する事、第五同行勸發の時苦行を策勵する事、第六同行知識に諍撥の時本尊聖教を奪ひ返す事、第七聖教の外題に知識の名字を載せる事、第八同行を互に奪ひ合ふ事、第九同行知識に相從ふべき起請文を書く事、第十俗體にして法名を用ふる事、第十一彼岸を念佛修行の時と定める事、第十二道場を各別に數多く建てならべる事、第十三世出世の二法について得分せよと云ふ名目を常に用ふる事、第十四強ゐて東國の訛音にて念佛する事、第十五一向專修の名言を先とし、佛智不思議の報土往生を沙汰せざる事、第十六祖師先德報恩謝德の集會に殁後葬禮の事のみを沙汰する事、第十七因果撥無と云ふ事を持言とする事、第十八知識をあがめて彌陀如來に擬し、知識所居の當體を別願眞宗の報土となす事、第十九凡夫自力の心行を佛智證得の行體と云ふ事、第二十末弟建立の草堂を本所とし、聖人の御本廟本願寺に參詣すべからずとなす事と云ふ如き意味のものでこれ等を一々批判し破斥してゐるのである。

斯くの如く、本鈔の條々は多種多樣で、恐らく當時の眞宗教界の異義邪執の種々相を示すものと考へられる。然し一般に右の如き異解の主なる所立者は、慈信房善鸞、大町如道、佛光寺了源及びそれ等の系統の者と想定されてゐる。卽ち善鸞は知識歸命を、如道は祕事法門を主唱したものと考へられ、本鈔では第十八條又は第十九條の如きがその所立と見られてゐるが、善鸞や如道の所立が果して如何なるものであつたか、推察すべき確實なる文獻がない爲にこの通說は直に信據し難い。これに反し、了源の繪系圖、算頭錄を始め、了源の先師と仰いだ了海の他力信心聞書、還相廻向聞書及び誓海の教化集等の著書その他を參照すれば、この派の所立には名帳、繪系圖以下本鈔の所破と相通ずるものが尠くない。而かも佛光寺教團は驚くべき迅速さを以て京畿西國に教線を張つたのであつて、或は第二十條に類する如き點もあつたであらうから、本願寺の覺如がこれを鋭く破斥する事は寧ろ當然である。從つて本鈔の所破は全眞宗教界の異解に及ぶものであるにしても、中にも了源及びその系統の所立が、重要な所破の對象となつてゐることは否まれない。

それで本鈔は破邪の書と見るべきであるが、その破邪には云はゞ顯正の一面の裏づけられてゐることは勿論である。就中覺如が、眞宗教團に於ける自らの地位を宣示してゐる事は注意すべき點で、法然並に親鸞の正統が如信を經て彼自身に繼傳せる事を表した所謂三代傳持の主張が、本鈔を通じて力說され、法然、親鸞、如信の三代を、彼を起點として曾祖師、祖師、先師と呼ぶこと三十餘度の多きに及び、恐らく本鈔程この主張の鮮明にされたものはあるまいと思はれる。これが本鈔の根本基調であり、この點から諸異解は破斥されてゐるのである。而してそれと共にこの基調から、宗義上では聞信一念平生業成、多念報恩の覺如教義の面目が力說されてゐるのであり、教團的には、この彼の地位とその留守職たる大谷本廟とによつて、全眞宗教團の統一を計つてゐるのであつて、殊に第二十條の如きはその思念を最も端的に表示してゐる。從つて本鈔は單なる破邪の書ではなく、また力強い顯正の一面の存することを認めねばならぬ。

本鈔は口傳鈔と共に覺如の代表的述作であつて、口傳鈔が顯正の書と見らるゝに對し、本鈔は破邪の書であり、又上述の如く本鈔を顯正の聖教として口傳鈔に對比すれば、口傳鈔は廣く一般法然門流の間に親鸞の一流を宣揚せんとしたものであり、本鈔は親鸞門侶の間に於ける相傳の正統を確守せんとしたものと見られやう。

❼〔註釋〕 聞筆三卷(圓解)。遠測一卷(義門)。丙午錄二卷(義讓)。
〔參考〕 淨土眞宗教典志第二、淨土眞宗聖教目錄 ❾古寫本(龍大、別置)、惠空筆寫影寫本(龍大、研眞)、文化八刊本(谷大、宗大・六四一)
(杉紫朗)

改邪鈔會通返破 ❶(日)Gai-ja-shō-e-tsū-hem-pa. ❷一卷 ❸存 ❹信曉(安永三—安政五 A.D. 1774—1858)述 ❾寫本(龍大)

改邪鈔遠測 ❶(日)Gai-ja-shō-on-jiki. ❷一卷 ❸存、眞宗全書第四五 ❹義門(天明六—天保一四 A.D. 1786—1843)述 ❺文化一五(A.D. 1818) ❻法嗣逢傳の奧書によるに、文化十五年正月二十五日より二月十二日に及びこれを講ず、後江戸にて全錄を講じ、自ら改邪鈔遠測と名づけたるも嘉永己(癸?)丑の災にかかり亦見ずと云ふ。卽ち本書は製作由來、一卷綱領、隨文解釋に分つも、惜いかな隨文解釋を缺いてゐる。製作由來を更に製作起緣、撰述思召とに分ち、製作起緣は乘專の請に依ると述べて別に論ニ文體ニの一項を附し、この項をまた分帖是非、和字成章、遣語雜俗に分つて詳述す。製作思召に就いては、爲レ欲レ遮ニ師承直語ニ故、爲レ欲レ降ニ權化淸流ニ故、爲レ欲レ顯ニ他家所傳ニ故、爲レ欲レ碎ニ末徒邪輪ニ故、爲レ欲レ揚ニ備聖明鑒ニ故として詳記し、更に一卷綱領を能詮大綱、所詮要領に分ち、能詮大綱は破邪顯正なり、所詮要領は信の一念なることを論述す。師は眞宗大谷派における有名なる國學者なれば、所述また見るべきもの多し。
(柏原祐義)

改邪鈔己亥記 ❶(日)Gai-ja-shō-ki-gai-ki. ❷二卷 ❸存 ❹皆遵院宣成(安永六—文久元 A.D. 1777—1861)述 ❽明治四三寫 ❾(谷大、宗大・一三五七)

改邪鈔記 ❶(日)Gai-ja-shō-ki. ❷二卷 ❸存 ❹長生院智現(—天保六 A.D. 1835)述 ❼〔參考〕眞宗大系刊行撰定書目

改邪鈔講義 ❶(日)Gai-ja-shō-kō-gi. ❷十六會 ❸存 ❹僧、閑悟院靈暀(安永四—嘉永四 A.D. 1775—1851)述、如說院惠劔(—天保元 A.D. 1830)述 ❽文化一四(A.D. 1817) ❾寫本(谷大、宗大・一八二五)

改邪鈔講義 ❶(日)Gai-ja-shō-kō-gi. ❷三卷 ❸存 ❹圓解(明和四—天保一一 A. D. 1767—1840)述 ❼〔參考〕眞宗全書刊行豫定書目

改邪鈔講義 ❶(日)Gai-ja-shō-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹香雲院從玄(天明七—嘉永四 A. D. 1787—1851)述 ❾寫本(谷大、宗大・一九八八)

改邪鈔講義 ❶(日)Gai-ja-shō-kō-gi. ❷二卷 ❸存 ❹本法院義讓(寬政八—安政五 A. D. 1796—1858)述 ❺弘化三(A. D. 1846) ❾寫本(谷大、宗大・二〇〇三)

改邪鈔講義 ❶(日)Gai-ja-shō-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹廣陵了榮(文政二—明治三三 A. D. 1819—1900)述 ❺明治一六(1883) ❾(谷大、宗大・一七六七)

改邪鈔講說 ❶(日)Gai-ja-shō-kō-setsu. ❷二卷 ❸存 ❾寫本(谷大)

改邪鈔講錄 ❶(日)Gai-ja-shō-kō-roku. ❷二卷 ❸存 ❹本多祐護(—明治三七 A. D. 1904)述 ❺明治三〇(A. D. 1897) ❾寫本(谷大、宗大・一八二二)

改邪鈔所破 ❶(日)Gai-ja-shō-sho-ha. ❷一卷 ❸存、異義集(了祥稿本)第一〇、同(眞宗大系本)第五 ❹妙香院了祥(天明八—天保一三 A. D. 1788—1842)集

❻改邪鈔は本願寺第三代覺如當時に行はれたる淨土眞宗の異義二十箇條を擧げて、その謬れることを指摘し、正義に入らしめんと努めしもの、本書はこの改邪鈔の二十箇條の標擧のみを抄錄せるに過ぎず。蓋し、本書の目的は當知識歸命の異義に對抗して傳へんがために抄錄せしもの丶如くなるを以て、改邪鈔の第十八條「本願寺の聖人の御門弟と號する人々のなかに、知識をあがむるを以て彌陀如來に擬し、知識所居の當體をもて別願眞實の報土となすといふ、いはれなきこと」を、本書にあつては第一條に擧ぐ。

❾寫本(谷大、宗甲・一七)　(柏原祐義)

改邪鈔隨筆 ❶(日)Gai-ja-shō-zui-hitsu. ❷三卷 ❸存、眞宗全書第四三 ❹圓解(明和四—天保一一 A. D. 1767—1840)述

❻改邪鈔の講錄。製作來由、一部大旨、解題目、正釋文の四大項に分つ。製作來由をまた緣由と造意との二項に分ち、緣由については本鈔は毫攝寺乘專の所望により製作せられしものなる事を詳述し、造意については親鸞聖人御門弟の中の邪義異執禁遏の爲に作るといひ、この邪義異執を善鸞師の異義、如道の邪義、了源の異義として述べ、次に一部大旨については、邪義を破して三代傳持の宗義、他力迴向の信念を顯すが本鈔の大綱要領なりといひ、進んで本鈔の題目、本文を詳解せるもの。由來本鈔の講錄は、その數甚だ多いのであるが、その傳燈なる識見を以て解說を試みられたるもの、本書の如きは稀に見る所である。　(柏原祐義)

改邪鈔筆記 ❶(日)Gai-ja-shō-hik-ki. ❷一卷 ❸存 ❹大安(文化五—明治一六 A. D. 1808—1883)記 ❾寫本(龍大、一二四一・三〇)

改邪鈔丙午錄 ❶(日)Gai-ja-shō-hei-go-roku. ❷二卷 ❸存、眞宗大系第二四 ❹本法院義讓(寬政八—安政五 A. D. 1796—1858)述 ❺弘化三(A. D. 1846)?

❻改邪鈔の講錄。撰述興由、一部大綱、入文解釋の三部門に分ち、撰述興由をまた造緣と造意に分ち、造緣は乘專の請による、造由は末徒の邪義を禁制せんが爲めなりと述べ、次に一部大綱をまた大意と旨歸とに分ち、末徒の邪義を對破して三代相傳の正義を顯すを以て大意とし、一念歸命平生業成の義を顯すを旨歸となすと詳述し、終に入文解釋を下してゐる。解釋細を鑿ち、その本章論の如きは大に見るべきものがある。　(柏原祐義)

改邪鈔法話 ❶(日)Gai-ja-shō-hō-wa. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大)

改邪鈔聞記 ❶(日)Gai-ja-shō-mon-ki. ❷三卷 ❸存 ❹華光院圓解(明和四—天保一一 A. D. 1767—1840)記 ❾寫本(谷大、宗大・四〇五)

改邪鈔聞記 ❶(日)Gai-ja-shō-mon-ki. ❷一卷 ❸存 ❹開華院法住(—明治七 A. D. 1874)記 ❺安政四(A. D. 1857) ❾寫本(谷大、宗大・一九七九)

改邪鈔略述 ❶(日)Gai-ja-shō-rya-ku-jutsu. ❷一卷 ❸存 ❹吉谷覺壽(天保一三—大正三 A. D. 1843—1914)述 ❺明治三八刊 ❾(谷大、宗小・一六四)(龍大、一二四一・三一、研眞)(立大、A四〇・九四)

外人ノ眼ニ映ズル佛敎 ❶(日)Gwai-jin-no-me-ni-ei-zuru-buk-kyō. ❷一卷 ❸存 ❹西山榮久著 ❺明治三三刊 ❾(谷大、外洋・四七八)(京專)(帝國、八二・二二二)

外遊漫筆 ❶(日) Gwai-yū-man-pitsu. ❷一卷 ❸存、愛楳全集之內 ❹藤井宣正(安政六—明治三六 A. D. 1859—1903)著 ❺明治三九刊 ❾(龍大、二〇四二・一—三、研佛)

豈好辨 ❶(日)Gai-kō-ben. ❷一卷 ❸存 ❹會津恒藏著 ❾(龍大、二八一四・二)

愾古錄 ❶(日)Gai-ko-roku. (支) K'ai-ku-lu. ❸存、卍續二・一九・四 ❹漢然圓澄(萬曆九—天啓六 A. D. 1581—1626)述

❻青原下三十一世(或曰三十四世也)北京大昼寺慈舟方念禪師の法嗣漢然圓澄禪師が、末世の佛法陵夷するを慨し、古叢林の禪風を振起せしめんが爲に、烈々たる護法愛宗の念より、警策の垂誡を記されたもので、丁未季夏之望に、二三子と對坐して、叢林の規矩地を掃ひ、佛日將に沈まんとし、僧寶殆んど滅せんとして、三武の法難の今日に於て起らんとするを懼ると嘆ぜし時、二三子其の故を問ふにより、これに答へて、諄々として門下を誡めて居る。明末の弊風甚しかりしを窺ふことが出來る。　(大久保堅瑞)

骸骨 ❶(日)Gai-kotsu. 一休骸骨 ❷一卷 ❸存、一休和尙全集、禪門法語集卷上、禪學名著集 ❹一休宗純(應永元—文明一三 A. D. 1394—1481)述

槪說日本佛敎史 ❶(日)Gai-setsu-

ni-hon-buk-kyō-shi. ❷一卷 ❸存 ❹橋川正(明治二七—昭和六 A. D. 1894—1931)著 ❺昭和四刊 ❿東京文獻書院

槪略三家對辨 ❶(日)Gai-ryaku-san-ke-tai-ben. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大)

柿之葉 ❶(日)Kaki-no-ha. 柿葉 ❷六卷或五卷 ❸存 ❹日性(—慶長一九 A. D. 1614)撰 ❺寬文二刊 ❾(谷大、餘大・五〇一)(龍大、二〇三・六七、研佛)(京大、二六ヵ・二二)

柿袋 ❶(日)Kaki-bukuro. 柿經袋、柿經袋習、持明院口傳、寺月抄 ❷一卷 ❸存、大正七八・一八七No. 2477 ❹眞譽(延久元—保延三 A. D. 1069—1137)撰

❻諸尊法の口決を記した書で、平等房永嚴・三密房聖賢・阿彌陀院經俊入寺等の口傳を受けて類聚したものである。著者が柿色の袋に入れて祕藏してゐたから柿袋・柿經袋等と名づけ、持明院流の口傳を記してゐるから持明院口傳とも云ふのである。又寺月は持明の片寫である。持明院は高野山にあつて著者の住房であり、從つて眞譽の流を世に持明院流又は寺月流と名づける、東密廣澤流の一派である。此書は傳法院流にも相承してゐるが、これは同流第二世兼海に授けて以來相傳するのであらふ。記述が頗る簡單であり、所收の尊法も僅に四十餘尊に過ぎず、且つ尊法の次第裏書等も亂れてゐるが、諸尊法蒐集書中初期のものに屬するから、研究上には價値がある。大正藏經本は仁和寺藏古寫本によつて出してゐるが、完本ではない。　(小田慈舟)

❾古寫本(仁和寺塔中藏)

柿袋口決 ❶(日)Kaki-bukuro-ku-ketsu. 持明院柿袋口決 ❸存 ❾寫本(金剛三昧院)

柿袋口決注解 ❶(日)Kaki-bukuro-ku-ketsu-chū-ge. 持明院流柿袋口決注解 ❸存 ❾寫本(金剛三昧院)

柿袋祕法 ❶(日)Kaki-bukuro-hi-hō. 持明院流柿袋祕法 ❷一帖 ❸存 ❺天和三寫 ❾(金剛三昧院)

柿袋面授記 ❶(日)Kaki-bukuro-men-ju-ki. ❷三帖 ❸存 ❺慶安六寫 ❾(金剛三昧院)

柿本講式 ❶(日)Kaki-no-moto-kō-shiki. ❷一卷 ❸存、群書類從第一〇 ❺文化一一寫 ❾(金剛三昧院)

書置之事 ❶(日)Kaki-oki-no-koto. ❷一篇 ❸存、日蓮宗々學全書(史傳舊記部之內) ❹日現(明應五—永祿四 A. D. 1496—1561) ❺永祿二(A. D. 1559)

❻宗學全書には「現師御書置之事」として、其中に「書置之事」「與本土寺大衆書」「與正住院日進書」(三通)の五篇を含んでゐる。「書置之事」は、長興(鎌倉妙本寺)、長榮(池上本門寺)兩山貫主たる經驗から、將來兩山貫主(これは兼ぬるが古例)たらん者は、宗學は勿論のこと儒道等の諸學に通じ、書藝に勘能に、法談に巧みで、道念堅固、知足無欲の人でなくてはならぬことを說き、第八世日純上人までの實例をあげて後世を警めたものである。　(馬田行啓)

鍵屋內表自問答鈔 ❶(日)Kagi-ya-uchi-omote-ji-mon-dō-shō. ❷一卷 ❸存 ❺大正八寫 ❾(谷大、宗大・二九七六)

各寺由緖書 ❶(日)Kaku-ji-yui-sho-gaki. ❷一卷 ❸存 ❺文政八寫 ❾(正大、一〇三二・一二)

各宗敎要隨問 ❶(日) Kaku-shū-kyō-yō-zui-mon. ❷一卷 ❸存 ❹玉樹道樂著 ❺明治一三刊 ❾(龍大、二五四・一)(晢、え・四・中・三一)

各宗高僧譚 ❶(日)Kaku-shū-kō-sō-dan. ❷一卷 ❸存 ❹横井雪庵著 ❺明治三〇刊 ❾(京大、一・二一ヵ・三)(帝國、七九・八七)

各宗高僧傳 ❶(日)Kaku-shū-kō-sō-den. ❷一卷 ❸存、列傳體日本佛敎史之內 ❹來馬琢道著 ❺明治三三刊 ❾(谷大、餘洋・四九)(帝國、八四・二〇六)

各宗高僧ものがたり ❶(日)Ka-ku-shū-kō-sō-mono-gatari. ❷一卷 ❸存 ❹横井雪庵著 ❺明治三〇刊 ❾(谷大、洋餘・五五)

各宗綱要 ❶(日)Kaku-shū-kō-yō. ❷五卷 ❸存 ❹佛敎協會編 ❺明治二九刊 ❿京都貝葉書院

各宗勤式 ❶(日) Kaku-shū-gon-shiki. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大、別置)

各宗寺格帳 ❶(日) Kaku-shū-ji-kaku-chō. ❷六帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

各宗大意 ❶(日)Kaku-shū-tai-i. ❷一卷 ❸存 ❹松原一絨著 ❾寫本(龍大、二五四・二)

各宗大氣焰 ❶(日)Kaku-shū-dai-ki-en. 眞宗日蓮宗禪宗各宗大氣焰 ❷一卷 ❸存 ❹福原諒七編 ❺明治三三刊 ❾(帝國、八三・四九)

各宗傳通緣起略講 ❶(日)Kaku-shū-den-zū-en-gi-ryak-kō. ❷一卷 ❸存 ❹堀江慶了述 ❺明治二八寫 ❾(谷大)

各宗の死生觀 ❶(日)Kaku-shū-no-shi-sei-kwan. 通俗各宗の死生觀 ❷一卷 ❸存 ❹直繼雲山著 ❺昭和二刊 ❿東京日本佛敎新聞社

各宗佛書目錄 ❶(日) Kaku-shū-bus-sho-moku-roku. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大、二〇一二・一六)

各宗より觀たる阿彌陀經 ❶(日)Kaku-shū-yori-mi-ta-ru-a-mi-da-kyō. ❷一卷 ❸存、梵文阿彌陀經附錄 ❾刊本(龍大、研佛)

各所御坊由緖記 ❶(日)Kaku-sho-go-bō-yui-sho-ki. ❷一卷 ❸存 ❺延寶五寫 ❾(龍大、別置)

各別義通義私記 ❶(日)Kaku-betsu-gi-tsū-gi-shi-ki. ❷一卷 ❸缺 ❹圓仁(延喜一二—寬和元 A. D. 912—985)述 ❼〔參考〕本朝台祖撰述密部書目

角虎集 ❶(日)Kak-ko-shū. 角虎道人文集 ❷一卷 ❸存、續群書類從第一三 ❹常菴龍崇(—天文五 A. D. 1536)撰 ❺天文頃 (A. D. 1532—1555) ❼〔參考〕日本禪林撰述書目、扶桑禪林書目

角虎集 ❶(日) Kaku-ko-shū. (支) Chiao-hu-chi. ❷二卷 ❸存、卍續二・一四・三 ❹清代 濟能纂輯 ❺乾隆三五 (A. D. 1770)

❻題名の角虎とは、太平御覽卷八百九十二に、述異記を引いて「漢中に虎あり、角を生ずと。道家云はく虎千歳なれば即ち牙鋭して角を生ず」とあり、蓋し千年の齢を重ねた角ある虎の意である。

序文に「永明智覺禪師は彌陀の願海を紹ぎ、普賢の行門を開き、三宗を糾集して同じく一貫に歸せしめ、力を極めて唯心の淨土を主張せり。故に角虎の喩あり。世に永明を乃ち東土第一祖の宗師に推す。一言一行執れか敢へて思議するものあらんや」とあるが、本書は濟能禪師が、諸の後學のために、永明禪師の宗風を祖述せる臨濟死心新禪師已下、列代宗師の要語を抄出し、成編集して之れを角虎と名づけ、禪を宗とする者をして敢て淨土を輕んぜず、淨を修するものをして復た禪宗を貶する無からしめたもの。

〔卷上〕 (一)死心新禪師。(二)慧海僕禪師(同)。(三)楚石琦禪師(同)。(四)商州張無盡居士。(五)濟川馮居士。(六)天界信禪師(龍濟宗)。(七)天如則禪師(同)。(八)啞谷陸禪師(同)。(九)天寧瑞禪師(同)。(一〇)古音業禪師(同)。(一一)天童悟禪師(同)。(一二)徑山信禪師(同)。(一三)鄧尉藏禪師(同)。(一四)雲頂能禪師(同)。(一五)眞歇了禪師。(一六)安智覺禪師(同)。(一七)萬松秀禪師(同)。(一八)萬安思禪師(同)。(一九)大方遙禪師(同)。(二〇)大方通禪師(同)。(二一)達觀可禪師(同)。(二二)悉山清禪師(同)。(二三)善昌經禪師(同)。(二四)永覺賢禪師(同)。(二五)淇然禪禪師(同)。

〔卷下〕 (二六)博山來禪師(曹洞宗)。(二七)雪關問禪師(同)。(二八)覺浪盛禪師(同)。(二九)石雨方禪師(同)。(三〇)西遊祈居士。(三一)本覺眞禪師(雲門宗)。(三二)天衣懷禪師(同)。(三三)圓照本禪師(同)。(三四)明教嵩禪師(同)。(三五)法雲秀禪師(同)。(三六)法雲通禪師(同)。(三七)慈受深禪師(同)。(三八)祖傑無爲居士。(三九)范仲淹文公。(四〇)永明壽禪師。(四一)白香山居易。(四二)百丈懷海禪師。(四三)文潞公彦博。(四四)王古侍郎。(四五)王龍舒日休。(四六)陳瓘侍制。(四七)錢象祖丞相。(四八)江公望司諫。(四九)廬山遠祖。(五〇)慧思禪師。(五一)智者大師。(五二)慈照宗主。(五三)德潛愚禪師。(五四)俊堂宗主。(五五)楚峰善奇禪師。(五六)雞雲徹禪師。(五七)雲棲大師。(五八)荷葉道人。(五九)香光子の語要を錄し、修りに起念佛七儀式を附載してゐる。

(成田昌信)

角虎道人文集 ❶(日) Kaku-ko-dō-jin-bun-shū. 角虎集 ❷一卷 ❸存、續群書類從第一三 ❹階智顗(中大通三—開皇一七 A. D. 531—597)撰

❻本書は六章からなつてゐる。辨相法第一、釋覺意三昧名第二、釋覺意三昧方便行第三、釋覺意三昧明心相第四、釋覺意三昧入正觀門第五(一本作=釋覺意三昧入觀門)、釋覺意三昧證相門第六(一本作=釋覺意三昧證相)。天台小部集釋に「釋摩訶般若波羅蜜經覺意三昧辨相法」(佛全二四)と書目を取つたのは誤りで「覺意三昧」で修るべきである。辨相法は第一章の章名であつて本書の題號ではない。覺意三昧とは大智度論四十七(大正二十五ノ四〇一頁)釋摩訶衍品の下の百八三昧の第七十二に出で、これを天台大師智顗は本書及び摩訶止觀二ノ上(大正四六ノ一四頁)に説明してゐる。大論では「是の三昧を得れば諸の三昧をして變じて無漏と成し七覺と相應せしむ。譬へば石汁一斤をもつて能く千斤の銅と變じて金となすが如し」といひ、七覺支を相應する三昧であるとなす。本書も亦「摩訶般若波羅蜜經の覺意三昧を釋す」と題號を揭げてゐるだけに「七覺意の三昧」の義によつて解釋をしてゐる。然るに摩訶止觀では五略の第二修大行の中、四種三昧を明す下、第四非行非坐三昧に於いて南岳大師慧思は獨自意三昧と呼び、大品經には覺意三昧と稱す。三名ありと雖も實に是れ一法なりといつてゐる。摩訶止觀では七覺支(或は七覺意)は論じないで心意識を說くけれども本書は大品經の七覺意と相應する三昧を釋するから、同一なる天台大師の述作であつても本書と摩訶止觀とはその頗向に於いて相違してゐることが知られる。但し摩訶止觀は七覺との相應を述べないだけであつて本書の說と非行非坐三昧の說とは同一である。又覺意三昧に入るに當つて心相を觀察する方法卽ち觀境を定むるに就いて四運心を用ゐ四句推檢を力說してゐる。この四運心は摩訶止觀でも用ゐてゐる。元來、未念、狀念、正念、念已の四種の心相を觀境とする事は東陽の傳大士が早く已に採用したものである。依つて思ふに天台大師は東陽の說と南岳の說と大品の說とを案配して四種三昧の中に非行非坐三昧なるものを設けたものではあるまいか。もしこの推定にして誤りなしとすれば、本書は天台大師が大品經研究の時代になつたものであつて恐らく金陵時代卽ち天台山に入山せぬ以前の製作であらうと考へられる。そして又この非行非坐三昧が大論と傳大士との關係が上記の如しとすれば、傳敎大師の內證血脈譜の天台宗血脈の中に羅什—(妙法蓮華經)—慧林寺傳大士—南岳慧思大師と系統づけたことが誠に最もな系圖であることが知られる。本書は天台大師別傳下卷に「覺意三昧一卷」とあるから天台大師の述作であることは疑ふべからずである。が本邦へ將來した方は謹かと訪ねるに傳敎大師最澄が一人あるのみ。傳敎大師將來錄(全集四、佛全二、大正五五)に「覺意三昧一卷、智者大師出一十九紙」とある。一十九紙は恐く二十九紙の誤りであらう。所以は天台小部集釋は三十紙であるから。本書の內容は行人が生死を解脫し涅槃を證せんと欲するならば必ず妄惑の根本に了達し至道の出要を知らなければならぬ。妄惑の根本は意の實際であり、至道の出要は心源を反照することである。意識の實際とは正因佛性であり、心源を反照することは了因佛性である。この二因に一切法を攝めて漏すところがない。行人は此れによつて覺意三昧に入つて諸法の相を辨明することが出來る。永に覺意三昧の名義を釋し、百八三昧はこの七覺意を得ることであるとなし、七覺支の說明を述べ、次にこの三昧を得る方便は大慈悲を成就し衆生を濟度せんがために無上菩提の道を求め大誓願を發起し六度の行を修することである。六度の方便行を用ゐ六蔽を伏し意を柔軟ならしむれば細心に觀察して正慧門に入ることが出來る。次に然らばこの覺意三昧に入るに就いて觀察の對象となる心相卽ち所觀の對境は幾許かある。觀境は經論に從つて各々不同であるが今は略して四運心を以つて觀境を論述しようといつて四運心を詳述し三世不可得を明し、無常の邊見を離れて中道の正觀を敎へ、次にこの四運心の心相を觀察し實相に通達し圓照分明にして百八三昧乃至無量の三昧に於いて七覺意を具すべきこと卽ち中道の正觀を修修することによつて常に大悲を念じて一切衆生を捨てず、諸波羅蜜を學し、十力を起し、法界の法門を觀察し、一切の功德を長

⑥富永仲基の出定後語を破斥し德川末葉に於ける大乘非佛說論者に對して萬丈の氣を吐けるもの。凡例三條中第三條に「本書の宗とするところ一大佛敎にあり、題とするところ大法城を護るにあり」と云へるを見れば以てその抱負と識見とを窺知するに足る。駁論の體裁は出定後語の標題より初め逐一文を擧げて辨駁してゐる。

❹文政十二刊(龍大、研佛、二八一三・四)寫本(龍大、一七六・二)

廓庵和尚十牛圖 ❶(日) Kaku-an-wa-jō-jū-gyū-zu. ❸存、禪學寶典之內 ❹宋代 師遠廓庵撰 ❺京都貝葉書院(大原性實)

覺阿上人に與ふる法語 ❶(日) Kaku-a-shō-nin-ni-atae-hō-go. ❷一卷 ❸存、國文東方佛敎叢書第三 ❹明峯素哲(建治三—觀應元 A. D. 1277—1350)編

覺阿問答鈔 ❶(日) Kaku-a-mon-dō-shō. 眞言事相敎相交雜見聞 ❷三卷 ❸存 ❹道範(元暦元—建長四 A. D. 1184—1252 一說建長四、年七五寂)口說、覺阿記 ❺建長四(A. D. 1252)

❻覺阿が道範について、眞言の事相敎相の要義をたゞしたに對し、道範が之に答へた口說をしるしたもの。

❼〔參考〕 諸宗章疏錄第三 ❽寬文三刊

❹(京專) (正大、一四二・九七)(谷大、餘大・二六五三)(龍大、研佛)(高大、寄・一・四八)(哲、け・五・右・四〇)

覺意三昧 ❶(日) Kaku-i-zan-mai. (支) Chüeh-i-san-mei. 釋摩訶般若波羅蜜經覺意三昧、釋摩訶般若波羅蜜經覺意三昧 辨相法 ❷一卷 ❸存、大正四六・六二一 Xe. 1922、鎌倉九、卍三・四、明南15ま頃、大日本佛敎全書第二四天台小部集釋、天台小部集釋第一三 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七 A. D. 531—597)撰

❻本書は六章からなつてゐる。辨相法第一、釋覺意三昧名第二、釋覺意三昧方便行第三、釋覺意三昧明心相第四、釋覺意三昧入正觀門第五(一本作=釋覺意三昧入觀門)、釋覺意三昧證相門第六(一本作=釋覺意三昧證相)。天台小部集釋に「釋摩訶般若波羅蜜經覺意三昧辨相法」(佛全二四)と書目を取つたのは誤りで「覺意三昧」で修るべきである。辨相法は第一章の章名であつて本書の題號ではない。覺意三昧とは大智度論四十七(大正二十五ノ四〇一頁)釋摩訶衍品の下の百八三昧の第七十二に出で、これを天台大師智顗は本書及び摩訶止觀二ノ上(大正四六ノ一四頁)に說明してゐる。大論では「是の三昧を得れば諸の三昧をして變じて無漏と成し七覺と相應せしむ。譬へば石汁一斤をもつて能く千斤の銅と變じて金となすが如し」といひ、七覺支を相應する三昧であるとなす。本書も亦「摩訶般若波羅蜜經の覺意三昧を釋す」と題號を揭げてゐるだけに「七覺意の三昧」の義によつて解釋をしてゐる。然るに摩訶止觀では五略の第二修大行の中、四種三昧を明す下、第四非行非坐三昧に於いて南岳大師慧思は獨自意三昧と呼び、大品經には覺意三昧と稱す。三名ありと雖も實に是れ一法なりといつてゐる。摩訶止觀では七覺支(或は七覺意)は論じないで心意識を說くけれども本書は大品經の七覺意と相應する三昧を釋するから、同一なる天台大師の述作であつても本書と摩訶止觀とはその頗向に於いて相違してゐることが知られる。但し摩訶止觀は七覺との相應を述べないだけであつて本書の說と非行非坐三昧の說とは同一である。又覺意三昧に入るに當つて心相を觀察する方法卽ち觀境を定むるに就いて四運心を用ゐ四句推檢を力說してゐる。この四運心は摩訶止觀でも用ゐてゐる。元來、未念、狀念、正念、念已の四種の心相を觀境とする事は東陽の傳大士が早く已に採用したものである。依つて思ふに天台大師は東陽の說と南岳の說と大品の說とを案配して四種三昧の中に非行非坐三昧なるものを設けたものではあるまいか。もしこの推定にして誤りなしとすれば、本書は天台大師が大品經研究の時代になつたものであつて恐らく金陵時代卽ち天台山に入山せぬ以前の製作であらうと考へられる。そして又この非行非坐三昧が大論と傳大士との關係が上記の如しとすれば、傳敎大師の內證血脈譜の天台宗血脈の中に羅什—(妙法蓮華經)—慧林寺傳大士—南岳慧思大師と系統づけたことが誠に最もな系圖であることが知られる。本書は天台大師別傳下卷に「覺意三昧一卷」とあるから天台大師の述作であることは疑ふべからずである。が本邦へ將來した方は謹かと訪ねるに傳敎大師最澄が一人あるのみ。傳敎大師將來錄(全集四、佛全二、大正五五)に「覺意三昧一卷、智者大師出一十九紙」とある。一十九紙は恐く二十九紙の誤りであらう。所以は天台小部集釋は三十紙であるから。本書の內容は行人が生死を解脫し涅槃を證せんと欲するならば必ず妄惑の根本に了達し至道の出要を知らなければならぬ。妄惑の根本は意の實際であり、至道の出要は心源を反照することである。意識の實際とは正因佛性であり、心源を反照することは了因佛性である。この二因に一切法を攝めて漏すところがない。行人は此れによつて覺意三昧に入つて諸法の相を辨明することが出來る。永に覺意三昧の名義を釋し、百八三昧はこの七覺意を得ることであるとなし、七覺支の說明を述べ、次にこの三昧を得る方便は大慈悲を成就し衆生を濟度せんがために無上菩提の道を求め大誓願を發起し六度の行を修することである。六度の方便行を用ゐ六蔽を伏し意を柔軟ならしむれば細心に觀察して正慧門に入ることが出來る。次に然らばこの覺意三昧に入るに就いて觀察の對象となる心相卽ち所觀の對境は幾許かある。觀境は經論に從つて各々不同であるが今は略して四運心を以つて觀境を論述しようといつて四運心を詳述し三世不可得を明し、無常の邊見を離れて中道の正觀を敎へ、次にこの四運心の心相を觀察し實相に通達し圓照分明にして百八三昧乃至無量の三昧に於いて七覺意を具すべきこと卽ち中道の正觀を修修することによつて常に大悲を念じて一切衆生を捨てず、諸波羅蜜を學し、十力を起し、法界の法門を觀察し、一切の功德を長

隔冥記 ❶(日) Kaku-mei-ki. ❸存 ❹風林承章記 ❺(參考) 禪籍目錄

赫日臺次第 ❶(日) Kaku-nichi-dai-shi-dai. 八幡本地作法次第 ❷一卷 ❸存 ❺弘化四寫 ❹(京大、印哲・u・四八)

廓山禪師語錄 ❶(日) Kaku-zan-zen-shi-go-roku. ❸存 ❹廓山遠 ❺(參考) 禪籍目錄

摑邪新編 ❶(日) Kaku-ja-shin-pen. ❷五卷 ❸存 ❹出定笑語を破したもの。❺慶應四刊 ❹(谷大、宗大・二二五)(正大、一〇九一・二六ノ哲、え・八・右・八)

摑網記 ❶(日) Kaku-mō-ki. ❷五卷 ❸存、眞宗全書第五九 ❹持寶記 ❺貞享二(A. D. 1685)

❻禪門某の著せる說問答に對して反駁を試み、淨土眞宗の立場を辯護せるもの。說問答は總じて七十五箇條あり、淨土眞宗に十種の雜行と九種の不審あることを擧げて疑詩す。著者はこれを蜘蛛の網に喩へ、この蜘蛛の網を摑裂するといふ意味で摑網記と題す。

❹貞享四刊(龍大、五・一六一・二ノ谷大、五・宗大・二二四)(大原性實)

摑裂邪網訣 ❶(日) Kaku-retsu-ja-mō-ketsu. ❷一卷 ❸存 ❹天棒 ❺刊本(谷大、餘大・三五一六)(哲、え・八・右・一九)

摑裂邪網編 ❶(日) Kaku-retsu-ja-mō-hen. ❷二卷 ❸存、眞宗全書第五九 ❹潮音(天明三—天保七 A. D. 1783—1836)述

樂するに至る。次に行者は是の如く修行すれば必ず外凡の位に入り進んで內凡初發心住に入り、如來藏の理を開發することを得、自然に妙覺の大海に流入する。初住以上は佛境界であつて凡識の能く量る所ではない。以上略して大品經の覺意三昧（大論の覺意三昧）を修行する最初の境界を說いた。この法門を今生の中に得べきである。これが本書の大要である。が上記の如く摩訶止觀の非行非坐三昧の說く所と同一なることは注意すべきである。

❼（注釋） 覺意三昧文句一卷一十紙漢然述

（參考） 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、天台宗章疏 ❹明、萬曆十九年。延寶五年。（田島德音）

覺意三昧文句 ❶(B)Kaku-i-sam-mai-mon-gu.（支）Chüeh-i-san-mei-wên-chü. ❷一卷 ❸缺 ❹庶羽淡漠然（景雲二—建中三 A. D. 711—782）述 ❼（參考）傳教大師將來台州錄、東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、天台宗章疏

覺運說 ❶(B)Kaku-un-setsu. ❸缺 ❼（參考） 本朝台嶺撰述密部書目

覺圓回章 ❶(B) Kaku-en-kwai-sho. ❷一卷 ❸存 ❹自筆寫本（龍大、別置）

覺園香雪和尚對話 ❶(B)Kaku-en-kō-setsu-o-shō-tai-go. ❷一卷 ❸存 ❹寫本（京大、藏・一七カ・四）

覺王院本乘往生記 ❶(B)Kaku-ō-in-hon-jō-ō-jō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本（龍大、別置）

覺雄方 ❶(B)Kaku-yū-hō. ❷一結 ❸存 ❺德川末期寫 ❹（寶龜院）

覺雄山大福田寶幢寺鹿王院記 ❶(B) Kaku-yū-san-dai-fuku-den-hō-dō-in-roku-o-in-ki. ❷一卷 ❸存、群書類從第一五輯、新校群書類從第一八 ❹妙葩（應長元—嘉慶二 A. D. 1311—1388）記 ❽京都府葛野郡下嵯峨の鹿王院の記である。足利義滿が瑞夢に感じて本寺を創建、始め興聖とあつたのを至德元年寶幢と改め、同二年二月十剃の班に列せしめ、三月これが慶讚を行ふた時の、式次、參拜の公卿を擧げ、行列、奏樂の曲目、經行の次第、將軍、國白、大政大臣の布施を引かれしことを擧げ、この時世子の誕生あり、寶幢若君と命名ありしこと、及び關東朝廷武家の崇敬をうけ、官軍の下賜、保護の厚かりしこと等を漢文を以て記したものである。（中谷在輝）

覺雄相承大事 ❶(B)Kaku-yū-sō-jō-dai-ji. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹（寶龜院）

覺海記傳附地藏由來 ❶(B)Kaku-kai-ki-den-Jizō-tai-jō-yū-rai. ❷一帖 ❸存 ❺寬保二寫 ❹（寶龜院）

覺海法橋法話 ❶(B)Kaku-kai-hō-kō-hō-wa. ❷一卷 ❸存、眞言宗安心全書第一、國文東方佛教叢書第三 ❹覺海（康治二—貞應二 A. D. 1143—1223）口說 ❽本書は覺海法橋の口說を門人が記した書で、眞言宗の宗意安心に關する私見を述べたものである。元來は諸口傳鈔と題する書の一部分で、その書には今の法語の外に悉曇口傳が收めてある。眞言宗安心全書の編者が法語のみを收錄するについて、新に覺海法橋法語と云ふ書名を付したのである。（小田慈舟）

覺嚴禪師年譜錄 ❶(B)Kaku-gon-zen-ji-nen-pu-roku. ❷一卷 ❸存 ❼（參考） 群籍目錄

覺義三昧 ❶(B)Kaku-gi-san-mai.（支）Chüeh-i-san-mei. ❷一卷 ❸缺 ❹智顗（中大通三—開皇一七 A. D. 521—597）述 ❼（參考） 新編諸宗教藏總錄第三

覺快慈鎭尊圓得度記 ❶(B)Kaku-kai-ji-chin-son-en-tokudo-ki. 法源大和尙由來記、圓榮寺廢跡實撿次第 ❷一冊 ❸存 ❹寫本（帝室）

覺華鈔 ❶(B)Kaku-ka-shō. 問數覺華鈔 ❸存 ❹妙瑞述 ❺延享二—寶曆二（A. D. 1744—1752）頃 ❽大日經住心品疏の釋

覺源鈔 ❶(B)Kaku-gen-shō. ❷一〇卷或五卷 ❸存 ❹蓮道記 ❽南勝房覺海と、五智房融源の口傳を記したもの

❹（京尊）刊本（谷大、餘大、三八一九）延寶五刊（高大、寄、一・四八）文政五寫（高大、寄・一・六四）元祿一二寫（寶龜院）元祿一三寫（寶龜院）

覺源禪師年譜略 ❶(B)Kaku-gen-zen-ji-nen-pu-ryaku. 覺源禪師平心處齊和尙年譜略 ❷一卷 ❸存、續群書類從第九

覺源禪師平心處齊和尙年譜略 ❶(B)Kaku-gen-zen-ji-hyō-shin-sho-sai-o-shō-nen-pu-ryaku. 覺源禪師年譜略 ❷一卷 ❸存、續群書類從第九

覺齊 ❶(B)Kaku-sai. ❷一軸 ❸存 ❺延德二寫 ❹（金剛三昧院）

覺師年譜 ❶(B)Kaku-shi-nen-pu. ❷一卷 ❸存 ❹河合日辰著 ❺明治四五刊 ❹（立大、B〇六・五三、B〇六・八五、B六・一一九） ❹京都村上平樂寺

覺者の人生觀 ❶(B)Kaku-sha-no-jin-sei-kwan. ❷一卷 ❸存 ❹木津光寺の開山敎誡覺源禪師平心處齊和尙の年譜である。弘安四年出生、永仁三年登寺唱食たりしより、十七歲、十八歲、二十歲、二十四歲、二十七歲、三十三歲、三十五歲、三十九歲の行藏不定、遊化十方の四十三歲、四十五六歲、四十九歲、五十五歲定光寺開創、五十二歲無爲寺創設、五十九歲、山居小庵、五十七歲雪堂幷に密會、六十二歲佛殿建立、文和二年老病隱居せんとして退藏庵を建つ、七十歲木綿一具を袖にして北濃の山中に隱る、編素來從するもの多きを厭ふて、西國の山を覓めて西池田に宿され、この舍主の言によりて宿緣の遇れ難きを知つて足を駐め、これを地藏寺と名づけた、應安三年八十三歲、十二月二十七日、長藏寺に門下を集めて告別し、二十九日に威音一箭、虛空兩片、鶴尾鬪頭、日面月面と書し、筆を投じて終られしまでの行實を前記の年齡の下に記述したものである、漢文。（中谷在輝）

無庵著 ❺大正一四刊 ❹（谷大）

覺照和尙語錄並行由 ❶(B)Kaku-shō-o-shō-go-roku-narabini-gyō-yu. ❷二十卷 ❸存 ❹覺照述 ❼（參考） 禪籍目錄

覺心集 ❶(B)Kaku-shin-shū. ❷一帖 ❸存 ❺永祿二寫 ❹（寶龜院）

覺信重子有子ノ語 ❶(B)Kaku-shin-shige-ko-ari-ko-no-kotoba. ❷一紙 ❸存、眞宗遺文纂要之內

覺信尼御書 ❶(B)Kaku-shin-ni-go-sho. ❷一篇 ❸存 ❺大谷敷地之事 ❺康安三寫 ❹（龍大、別置）

覺信尼公行實の研究 ❶(B)Kaku-shin-ni-kō-gyō-jitsu-no-ken-kyū. ❷一卷 ❸存 ❹藤原猶雪著 ❺昭和七刊 ❹東京山喜房

覺信尼公と大谷廟堂 ❶(B)Kaku-shin-ni-kō-to-ōtani-byō-dō. ❷一卷 ❸存 ❹梅原眞隆著 ❺昭和七刊 ❹京都義龍人研究發行所

覺信尼公の御法話 ❶(B)Kaku-shin-ni-kō-no-go-hō-wa. ❷一卷 ❸存、準國文庫之內 ❹刊本（谷大・宗大、一四〇〇）

覺禪鈔 ❶(B)Kaku-zen-shō. 百卷鈔、淨土院鈔 ❷百數十卷 ❸存、大日本佛教全書第四五—五一 ❹金胎房覺禪（康治二—建保五以後 A. D. 1143—1217—）撰 ❽書名は後人の命名である。著者に因んで覺禪鈔と云ひ、卷數によつて百卷鈔と名づけ、住坊によつて淨土院鈔と呼ぶ。淨土院は勸修寺の淨土院で、著者が六十歲頃以後常在した住房である。百卷と云ふは大數に約して云ふので、古寫本の卷數は一定してゐない、百卷、百十一卷、百二十一卷、百二十八卷、百四十四卷、百五十六卷等種々である。

本書は廣く經軌章疏古記古圖等を涉獵し、或は諸寺の佛像を拜觀し、諸師の口傳に基き、諸尊法を詳細に記述したもので、各尊法共に本經、名號、形像、三昧耶形、種子、印明、功能、修法の種類、行法の實例事歷、支度、卷數、道場莊嚴、表白、勸請、發願、道場觀、宇輪觀、正念誦、散念誦、護摩等諸種の點に亘り仔細に述べ、尊像並に曼荼羅の圖約四百葉を附してゐる。東寺寶菩提院藏覺禪自筆本一卷は全部着色圖であり、釋迦女院本、勸修寺本等も一部分は著色である。

此書は眞言宗に於ける事相修學の上に缺くべからざる良書であり、圖像鈔、別尊雜記、五十卷鈔等と共に、古密に於ける阿娑縛鈔行林鈔等と對比すべき名著である。

大日本佛教全書本は全篇を九部に分ち、諸佛部、佛頂部（以上第一）諸經部（第二）。觀音部、文殊部（以上第三）菩薩部（第四）。明王部（第五）。天等部（第六）。雜部（第七）として七冊に收めてゐる。その內容目次は兩部大日一卷。佛眼一卷。藥師二卷。七佛藥師一卷。阿彌陀二卷。釋迦二卷。光明眞言二卷（以上諸佛部十一卷）。大佛頂二卷。熾盛光一卷。尊勝二卷附尊勝畫像作法。如法尊勝二卷。大勝金剛二卷。一字金輪一卷（以上佛頂部十卷）。請雨經三卷。止風雨法一卷。法華法三卷。仁王經二卷。理趣經二卷。守護經一卷。六字經一卷。童子經一卷。寶樓閣經。圓滿金剛。水數喜天一卷。寶篋印經。出生無邊陀羅尼。無垢淨光陀羅尼一卷（以上諸經部十六卷）。聖觀音二卷附十八日觀音供。千手觀音。千手鈔二卷。十一面二卷。馬頭一卷。白衣一卷。如意輪。末車去車二卷附轉法輪行樣。不空羂索二卷。准胝一卷。阿摩陀。多羅。被葉衣。青頸一卷。（以上觀音部十四卷）。一字文殊。五字文殊。六字文殊。八字文殊一卷（以上文殊部一卷）。彌勒一卷。虛空藏一卷。五大虛空藏二卷。求聞持次第。同異說一卷。般若。持世一卷。隱求一卷。延命一卷。地藏二卷。善賢一卷附金剛薩埵。善賢延命二卷。五祕密一卷（以上菩薩部十四卷）。不動二卷。愛染二卷。如法愛染一卷。轉法輪一卷。降三世一卷。烏瑟沙摩一卷。孔雀一卷。太元二卷。軍荼利一卷。地藏鎭壇一卷。大威德二卷。金剛童子一卷。金剛夜叉二卷（以上明王部十九卷）。尊星一卷。北斗一卷。北斗供。星宿法一卷。施諸餓鬼一卷。聖天一卷。水數喜天日傳一卷。訶利帝母一卷。迦羅天一卷。吉祥天一卷。地天一卷。水天摩利支天一卷。大自在天一卷。伊舍那天。俱摩羅天一卷。毘沙門天一卷。岡隆天一卷。薬處利童女。那羅延天。深沙大將。金剛力士一卷。十二天一卷（以上天等部十六卷）。造塔二卷。修法表白一卷。御修法所請等一卷。雜要集一卷。大結界法一卷。舍利法一卷。寶珠又說一卷。諸支度一卷。卷數一卷。後七日二卷。同又說一卷。駄都一卷。香藥一卷（以上雜部十五卷）である。

著作年代は明確でないが、現存寫本の奧書によるに著者四十歲前後から建保五年七十五歲の老境に至るまで三十餘年の間に亘り、觀音寺、東山草庵、六條坊門宮小路、綾小路、高野山東別所、祇園、高野山往生院、西明院、白河房、勸修寺淨土院等の各地で撰集したもので、特に元久二年六十三歲以後は淨土院に於て記してゐる。著作の初期は或は三十四五歲頃まで溯り得るかも知れぬ。本書編錄の念願は既に青年時代に發したものと見え、光明眞言法の奧にある寫本日記には自ニ生年十九歲一至ニ于四十二一所ニ珠智一口傳並抄物要事略撰ニ集之一とある。二十歲三十歲頃は專ら諸師を歷訪し諸書を閱覽して準備をしてゐた時代と見える。

今日覺禪鈔と稱せらるゝ中には自著以外に覺禪師が他師から傳領し、又は受傳して書寫したもの約十部、後人の撰出かゝるもの若干卷が混入してゐる。前者の例は理趣經法で、同法下の奧書に應保二年五月廿二日眞乘房阿闍契奉ニ傳ニ之畢一、但法務御記後日書ニ加之一、興— 正治三年正月比奉ニ傳ニ之一、數日居住之間引出物給ニ之 佛子覺禪とある。眞乘房は內山の亮慧で、興—は理明房興然である。又後者の例は地藏菩薩法で、同下の奧書に弘安三年庚辰九月廿二日於ニ河州古市西響田龍王堂一記ニ之了 金剛佛子澄圓六十三とある。

覺禪は仁和寺池上の覺琢、經琢に密法を

受け、眞乘院覺叡、理智院良遍に傳法灌頂を授かり、勸修寺興然、傳法院琳海、房海、覺瑜、明遍等に受法してゐて、此等諸師の口傳が本書撰述に影響あることは勿論であるが、主として興然に師事してゐるので、興然に負ふ所最も多きものゝ如くである。興然の五十卷鈔は覺禪鈔に深大な影響を與へてゐるであらう。又興然は寛信、良勝、亮慧、實任等に受法してゐるから此等諸師の傳は本書に多分に記してある。此外に勝定房惠什等の傳も引用してある。

❹鎌倉・足利・德川時代寫(百五十六卷、勸修寺藏)嘉永二覺禪自筆(仁王經法一卷、圓壽色、寶菩提院藏)延慶三實遍筆(五十三卷、寶龜院藏)元亨年間寫(五十一卷、釋迦文院藏)

(小田慈舟)

覺禪鈔總目錄 ❶(日)Kaku-zen-shō-sō-moku-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(京專)〈正大・一四〇・一〉

覺天和尚大年寺語錄 ❶(日)Kaku-ten-o-shō-dai-nen-ji-go-roku. ❷一卷 ❸存 ❹覺天述 ❼(參考) 禪籍目錄

覺同和尚說法 ❶(日)Kaku-dō-o-shō-seppō. ❷一卷 ❸存 ❹慈泉(正保二—寶永四 A. D. 1645—1707)記 ❺實解五寫 ❹(正大・一五五八・五)

覺道歌 ❶(日)Kaku-dō-ka. (支)Chueh-tao-ko. ❷存、除符經稱性直解附錄 ❹月資撰 ❹(龍大)

覺如樣御代西山久遠寺宮將軍令旨寫 ❶(日)Kaku-yo-sama-miyo-ri-shi-yami-ku-on-ji-no-miya-shi-gun-rei-shi-utsushi. ❷一葉 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

覺如上人畫像贊一首 ❶(日)Kaku-nyo-shō-nin-gwa-zō-san-i-shu. 覺如畫像讚 ❷一卷 ❸存、眞宗遺文纂要之內 ❹尊圓親王(永仁六—延文元 A. D. 1298—1356)撰 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第一

覺如上人敬白文 ❶(日)Kaku-nyo-shō-nin-kyō-byaku-mon. 敬白文、啓白文、發願文 ❷一卷 ❸存、眞宗聖教大全附錄、眞宗假名法典卷下、眞宗法要拾遺第四、眞宗聖典全書(和文)、帖外眞宗法要 ❹覺如(文永七—觀應二 A. D. 1270—1351)述 ❺文保三(A. D. 1319) ❻著者が佛前に於ての勤行念佛の際、用ひられた敬白文であつて、もと題號はなかつたのであらう、それで敬白文、啓白文、發願文などゝ稱せられてある。

其述ぶる所は他力本願の旨であつて、いかなる惡人女人もたゞひ一念に淨土に生るべき身ときだまり、其上には佛恩を報ぜんために稱名念佛すべきことを述べ、最後に「よみおはりて念佛すべし、文保三季己未四月二十八日書之、釋宗昭五十」とある。

古來の眞宗聖教の目錄に、其名を列ねたものは、執れも眞撰とし、朝夕勤行の時、唱へたものであらうと推定し、管窺錄には「たゞとくみ(奉る)と云つて居る。思ふに著者は精修念佛の人であり、又文保三年は其父覺惠の十三回忌辰に當つて居るから、此の如き述作はあつたことであらう。先啓目錄には眞蹟が和州本善寺に在りと記して居る。

❼(參考) 淨土眞宗教典志第一 (杉紫朗)

覺如上人處分狀寫 ❶(日)Kaku-nyo-shō-nin-sho-bun-jō-utsushi. ❷一卷 ❸存 ❹大谷派西山留守職之事を記す ❺曆應二寫 ❹(龍大、別置)

覺如上人の傳統 ❶(日)Kaku-nyo-shō-nin-no-den-tō. ❷一卷 ❸存 ❹梅原眞隆著 ❺昭和七刊 ❹京都顯眞學苑

覺如上人讓狀置文 ❶(日)Kaku-nyo-shō-nin-yuzuri-jō-oki-bumi. ❷一卷 ❸存 ❺曆應二四寫 ❹(龍大、別置)

覺如上人略傳 ❶(日)Kaku-nyo-shō-nin-ryaku-den. 本願寺第三世覺如上人略傳 ❷一卷 ❸存 ❹佐竹智應編 ❺明治三五刊 ❹(谷大、宗報・一〇一〈帝國、三一八・三二〉)

覺鏡上人傳 ❶(日)Kaku-kyō-shō-nin-den. ❷一卷 ❸存、國文東方佛教叢書第五

覺鏡二字音義 ❶(日)Kaku-kyō-ni-ji-on-gi. ❷一卷 ❸存 ❹運敞(慶長一九—元祿六 A. D. 1614—1693)撰 ❺元祿四刊 ❹(立大、A二〇・六九)

覺鏡名字釋 ❶(日)Kaku-kyō-myō-ji-shaku. 名字之事 ❷一卷 ❸存、興教大師全集 ❹覺鏡(高保二—康治二 A. D. 1095—1143)述 ❻著者が自分の名字を釋した小品である。覺は胎藏大日、鏡は金剛界大日で五部諸尊の稱であり、又覺は佛、鏡は法で僧、覺、鏡の三字は佛法僧三寶の實號であると云ひ、或は覺鏡は空海と同意義となるなど、釋してゐる。題名は後人が附けたものと見え、諸本一定してゐない。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❹永祿一一寫(京都隨心院)某實本(東寺觀智院)

(小田慈舟)

覺滿師傳 ❶(日)Kaku-man-shi-den. ❷一軸 ❸存 ❺德川時代寫 ❹寶龜院)

覺夢抄聽書 ❶(日)Kaku-mu-shō-kiki-gaki. ❷二卷 ❸存 ❺室町時代寫 ❹(高大、寄・一・一三)

覺夢談 ❶(日)Kaku-mu-dan. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

覺迷蠡測 ❶(日)Kaku-mei-rei-soku. (支)Chüeh-mi-li-tse. ❷三卷 ❸存 ❹明代普志道撰 ❹寫本(京大、藏・二四カ・六〈〉明版(內閣)

覺母鈔 ❶(日)Kaku-mo-shō. ❷七卷 ❸存 ❹寶實(元弘三—應永五 A. D. 1323—1398)撰 ❻大日經及び疏等に於ける教義要目を摘出して決擇を與へたもの。

〔卷一〕 設時前後。結集。教義分流。法爾隨緣。隨自隨他。主伴能所。遷移常住。五味淡淡。〔卷二〕 佛慧淺深。權實二佛。顯密二教々主。佛身構化分齊。法華教主。初加聖天供。太元本跡。同三加持事。同小呪梵本。大元血脈。或人所授灌頂印明。阿字邪法。白邪法。不動。慈救呪五大尊。使者事。五大尊總印。六觀音。御素木。牛王加持。除災教令。尊星王軌。愛王法。大呪切四種。那麼。第五昌呪。不空羂索明王。灌頂印明。般若寺印信。寶珠事。六一山事。御貨二智事。灌頂行道法事。金剛線。祈雨瑞相事。灌頂印明。又同印明。六字法。結線。金輪。白衣。定光佛。善名稱。持世菩薩。業衣。摩利支。迦樓羅。水迦羅。聖觀音。千手。馬頭。十一面。准胝。文殊。八字文殊。地藏。北斗。星供。傳受集。請雨。金剛童子。太元眞言事。四天王行。大佛頂。童子經。聖天。焰魔曼荼羅。大黑。四天王。水天。五大虛空藏。仁王經法精。顯聖。祈雨。如意輪。九雀法。兩界左右。

〔第四帖〕 別壇古摩。星供作法。香像。八千枚事。珠法外。儀記事。求聞持相承。虛空藏名臨終發心事。觀音功德。千手面。十一面。北斗國曼荼羅。吉祥天功德天同異事。兜攪毘沙門事。

〔第三帖〕 灌頂重授事。妙拳士印明事。六帖奧曼荼羅。寶冠五佛事。五寶等納瓶事。受者加持事。高座加持事。無言行道事。灌頂血脈代數著。乘師法。法華法。那嚕樊香事。東北角壁下。瓶底不黑。隨求。千手。尊勝。佛眼。同三昧耶形。同七寶種子證。三層蓮臺。理趣經法。光明眞言。轉法輪。同筒開眼事。同本尊。同曼荼羅。同法壇數。同法嚴燒在無事。大元法。同加聖天供。太元本跡。同三加持事。同小呪梵本。大元血脈。或人所授灌頂印明。阿字邪法。白邪法。不動。慈救呪五大尊。使者事。五大尊總印。六觀音。御素木。牛王加持。除災教令。尊星王軌。愛王法。大呪切四種。那麼。第五昌呪。不空羂索明王。灌頂印明。般若寺印信。寶珠事。六一山事。御貨二智事。灌頂行道法事。金剛線。祈雨瑞相事。灌頂印明。又同印明。六字法。結線。金輪。白衣。定光佛。善名稱。持世菩薩。業衣。摩利支。迦樓羅。水迦羅。聖觀音。千手。馬頭。十一面。准胝。文殊。八字文殊。地藏。北斗。星供。傳受集。請雨。金剛童子。太元眞言事。四天王行。大佛頂。童子經。聖天。焰魔曼荼羅。大黑。四天王。水天。五大虛空藏。仁王經法精。顯聖。祈雨。如意輪。九雀法。兩界左右。

〔第四帖〕 別壇古摩。星供作法。香像。八千枚事。珠法外。儀記事。求聞持相承。虛

重々。他門所立顯密二教。顯密理體淺深。六字能生眞如所生。一切諸教皆從眞言出生。理智分別。本有菩提心限第九識歟。九識五智互攝法界。顯密二教所立八九差別。不二心識法體。智有爲無爲(附、顯教眞如所生)。〔卷四〕 緣眞識體。相待絕待。見聞觸知悉是法界。圓海不識。言語非第一義。顯密二教淺表分別。心法淺表。四種禪。內外二道分別。無相有二重。有相無相悉地約位分別。明佛或。明正覺三昧。煩惱斷不斷。重障除滅鼠神呪功力歟。法華涅槃勝劣。顯密二教地位分別。十地有悉無悉。華嚴宗一念卽作佛。初心成佛終圓兩教分別。十信滿心成佛。依教禮實位有高下。法華三昧依眞言力。速疾成就。華嚴三昧同依三密加持。二乘廻心。法華華嚴諸教所說隱緣不變。〔卷五〕 以天台神佛爲無明邊城。開示悟入爲四十位。以華嚴神佛爲無明邊城。微細妄執斷位。以華嚴天台佛果判具悉爲諸佛請法歟。三論法相兩宗爲無明邊城。安公同高僧釋。他緣覺心兩住心淺深。〔卷六〕 法華華嚴淺深。一道神無地前地上。驚覺開示。無明有重々。大日經以五字嚴身觀爲金剛定。法華華嚴得益。三世諸佛皆入眞言成佛。菩薩受職灌頂。擇地造壇三密修行軌則。有相無相分別。於無相境立曼陀羅差相。〔卷七〕 生佛二界不增不減。淺深無淺深互有淺深。身心兩部。釋論二門三門分別。入道初門。信解難易。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❹永應二刊

❹(龍大、二六六四・五〈京專〉〈高大、寄・一・四八〉)

覺用抄 ❶(日)Kaku-yō-shō. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、餘小・七一)

覺林房私鈔 ❶(日)Kaku-rin-bō-shi-shō. ❷三卷 ❸存、慧光八帖之內 ❹實憲記 ❹寫本(谷大、餘大・二三三四)

覺凡和尚全錄 ❶(日)Kaku-bō-o-shō-zen-roku. (支)Chüeh-fan-ho-shang-chüan-lu. 天界覺浪和尚全錄 ❷八卷 ❸存 ❹明代覺浪道盛述 ❼(參考) 禪籍目錄

覺論抄 ❶(日)Kaku-ron-shō. ❷一帖 ❸存 ❺建勝三寫 ❹(寶壽院)

鶴城叢書 ❶(日)Kaku-jō-sō-sho. ❷二卷 ❸存 ❹寫本(立大、DO・五三)

鶴巢集 ❶(日)Kaku-sō-shū. ❷一卷 ❸存 ❹原坦山(文政二—明治二五 A. D. 1819—1892)著 ❺明治一七刊 ❹(正大、一七七・八〈帝國、三二・一五八〉) ❹佛仙社

鶴峰悟禪師語錄附行狀塔銘 ❶(日)Kaku-hō-go-zen-ji-go-roku-tsu-ketsu-gyō-jō-tō-mei. (支)Hao-feng-yü-chüan-shih-yü-lu & hsin-chuang ta-mio-ming. ❷一卷 ❸存 ❹明代鶴峯清悟著、上震等編 ❹(龍大)

鶴林寺志 ❶(日)Kaku-rin-ji-shi. (支)Hao-lin-sze-chih. ❷一卷 ❸存 ❹明代明賢記 ❹寫本(京大、藏・二〇カ・一)

鶴林集 ❶(日)Kaku-rin-shū. 千呆鶴林集 ❷一卷 ❸存 ❹千眼性俊(寶永一三—寶永二 A. D. 1636—1705)集 ❼(參考) 禪籍目錄

鶴林鈔 ❶(日)Kaku-rin-shō. 別啓要記 ❷二卷四帖 ❸存 ❹心覺(永久五—治承四 A. D. 1117—1180 一說愛和二、年六四歲)撰

〔第一帖〕 尊勝法本尊事。尊勝陀羅尼印事。所雨法。孔雀經法。求聞持。灌頂間不審事。左邊行道事。持金剛業無言行道事。三昧耶戒時用小供養法事。金剛線結樣。臂圓。大阿闍梨持瓶行道。門前灑水。ムるまい。不動頂上蓮華事。吉祥天法諸阿闍梨梵名。准胝。水月觀音法。正了知大將。香呂代用花。尊勝曼荼羅。金剛界成菩提印事。四橋印內密印事。烏摩妃印事。乘師法。尊勝密印。隨求。五祕密事。孔雀明王。傳人曉疑經。無能勝明王。金剛隨心。持世法。寶藏天。蓮華頂法。大佛頂止雨事。十一面。濟延相傳書。迦樓羅。金輪。理趣會。同不審事。五祕密次第。同軌多本。摩訶迦羅。香隆寺北斗古摩。普集會。降三世。深砂。聖天。大日義釋。仁海抄物。龍樹五明論。如意輪。獨勝奇加明王。大師五大尊像事。毘紐天。烏芻沙摩。普賢延命。不動頂上蓮華。藥師提像事。不動五使者事。

〔第二帖〕 法花。尊勝法。步擲等讀事。御薬木加持。牛只迦大將事。宣豪座事。以大法修別尊事。十八道本尊。求聞持。大元法。烏芻沙摩用昌蒲。不動頭密印事。金剛夜叉法事。牟利曼多羅。千手。佛眼金輪。二尊珠事。八字文殊。紙經曼荼羅。證蛇法事。鳥砂子平。灌頂重受事。五寶等納瓶事。惠果得佛事。青宇經。御修法請文。勸請等句。令利二。不動十四印。六字。四姉妹表四波羅蜜等。瑜祇點樣。四身菩賢。虛空庫獨勒事。五大虛空藏。聞虛

數字略號 ❶題名(書名)名題 ❷數卷 ❸缺存 ❹著者 ❺代年作著 ❻書本(書名)書註釋 ❼(書名)參考書 ❽說解客內 ❾月年の刊寫 ❿(名庫)書者藏所現 ⓫名所行役

聖藏天冠法。爲亡者修吉摩。水月觀音法。正了知大將。香呂代用花枝。痢病對治。南寶陀羅尼事。寶夾印法。金剛泰叉。長七日。五大尊座位。請雨。平等王。歳末御修法。轉法輪。法華。青宇。五大尊總印。尊勝印。無垢轉法輪不動。梅御念誦。仁王經法。東寺講堂佛。大師始終大法本願疏釋迦。敬世觀音。大師爲靈山聽衆。堅惠法師。七佛藥師。瀧頂作法。智拳如來拳。理心生。遊經。奥沙子平。金剛薩埵眞言多種。大師御筆。蘇生呪。大輪〇。三ヶ粹用所。愛王五指拳。人形粹。供料請文。御修法結願詞。古摩要事。願書事。神供方角。御素本加持。種三不知佛供養。不動。鬼宿事。令法久住法事。請雨法願書案。大唐曲成。三十六禽。親王。始新佛。紫鎮光南方。孔雀經同三昧耶形。金輪補子。仁王經曼荼羅。近士近圓。十八道表白。大師御身成佛。三古。御入定行儀。

❹寫本(正大、一〇八・一九九)元享二寫(高大、寄・一六四)

鶴林鈔 ❶(日)Kaku-rin-sō ❷一卷 ❸存 ❹(駒大)

神樂大事 ❶(日)Kagura-daiji. ❷三帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❹(寶龜院)

岳鬧梨十諫書 ❶(日)Gaku-ri-ri-shi-chien-sho. (支)Yo-chi-li-shih-chien-shu. ❷一卷 ❸存 ❹扶宗鑑忠(—元禄五 A. D. 1696)記 ❹寫本(龍大、二六五五・六)

鄂隱和尚行錄 ❶(日)Gaku-in-o-shō-gyō-roku. 佛惠正統國師鄂隱和尚行錄 ❷一卷 ❸存、五山文學全集第三

學一切乘補忘記 ❶(日)Gaku-ichi-jō-hō-mō-ki. ❷二卷 ❸存 ❹(哲、さ・四・中・一)

學苑談叢 ❶(日) Gaku-en-dan-sō. 眞宗學苑談叢 ❷二卷 ❸存、前田慧雲全集第三之內 ❹前田慧雲(安政四—昭和五 A. D. 1857—1930)著 ❺昭和六刊 ❹東京春秋社

學戒類要 ❶(日) Gaku-kai-rui-yō. ❷一卷 ❸存 ❹善寂、戒如等述 ❹寫本(谷大、餘大・三五四九)

學海餘滴 ❶(日)Gaku-kai-yo-teki. ❷十卷 ❸存 ❹日達(延寶二—延享四 A. D. 1674—1747)述 ❺寫保元刊 ❹(谷大、餘大・一一九四)(立大、A四・一二〇—一二二、A〇四・三三三—三三五)(京大、日大未・五七六)(哲、ち・三・左・二一)

學軌十則 ❶(日)Gaku-ki-jū-soku. 淨土眞宗學軌 ❷一卷 ❸存 ❹春厳院惠然(元禄六—寶暦一四 A. D. 1693—1764)撰 ❺寛保二(A. D. 1742) ❹寫保三寫(谷大)

天保二寫(谷大、宗大・三六二四)寫本(谷大、宗大・三一九六)明治二〇刊(谷大、宗小・七一)(龍大、研叢)

學業論題講記 ❶(日) Gaku-gyō-ron-dai-kō-ki. ❷二卷 ❸存 ❹香山院龍温(寛政一一二—明治一八 A. D. 1800—1886)撰 ❹寫本(谷大、宗大・二一一〇)

學來善知識發菩提心法 ❶(日) Gaku-rai-zen-chi-shiki-hotsu-bo-dai-shin-hō. (支)Hsüeh-chi-shan-chih-shih-fa-pu-ti-hsin-fa. ❷一卷 ❺長慶經 ❻

〔參考〕武用錄第一五、同元錄第一八

學科表他部註 ❶(日) Gak-kwa-hyō-ta-bu-chū. 眞言宗學科表他部註 ❷二卷 ❸存 ❹上田照遍(文政一一—明治四〇 A. D. 1818—1907)著 ❺明治一一刊 ❹(高大、寄・一・五九)

學科表註 ❶(日) Gak-kwa-hyō-chū. 眞言宗都學科表註 ❷一卷 ❸存 ❹上田照遍(文政一一—明治四〇 A. D. 1818—1907)著 ❺明治一〇刊 ❹(正大、一四九・三)(高大、寄・一・五七)

學嚴所化安心札書 ❶(日)Gak-gon-sho-ke-an-jin-tatashi-gaki. ❷一卷 ❸存 ❺文化三寫 ❹(龍大、別叢)

學嚴覆疑之記 ❶(日)Gak-gon-fu-shi-no-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別叢)

學嚴濫觴錄 ❶(日)Gak-gon-ran-jō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・二四一七)

學者より見たる弘法大師 ❶(日) Gaku-sha-yori-mi-ta-kō-bō-dai-shi. ❷一卷 ❸存 ❺六大新報社編 ❺明治四〇刊 ❹(京專)(帝國、九〇・四九九)

學衆方眞俗永式錄 ❶(日)Gaku-shu-gata-shin-zoku-e-shiki-roku. ❷一卷 ❸存 ❹古寫本(谷大、餘甲・一〇一)

學生式題正解 ❶(日) Gaku-shō-shiki-kai-shō-ge. ❷一卷 ❸缺 ❹圓耳撰述(—正德元 A. D. 1711—)撰 ❼(參考)山家祖德撰述篇目集卷下

學匠逢事雜記 ❶(日)Gaku-shō-ji-zō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

學匠事蹟綴 ❶(日)Gaku-shō-ji-seki-tsuzuri. ❷三卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

學庠大法寶藏闕本目錄 ❶(日) Gaku-shō-dai-hō-hō-zō-ketsu-pon-mokuroku. ❷一卷 ❸存 ❺文政五—明治二(A. D. 1822—1869) ❹寫本(龍大、二〇一七・四)

學信和尚行狀記 ❶(日)Gaku-shin-o-gyō-jō-ki. ❷二卷 ❸存、淨土宗全書第一八 ❹慧滿、僧敏記、隆圓補 ❺文政四(A. D. 1824)

❹本書は廣島縣厳島光明院の正蓮社行譽敬阿學信の行實を慧滿、僧敏の二人が編輯し、京都專念寺隆圓が見聞するところを增補したのを、三十三回忌に上梓したものである。初めに享保七年伊豫國今治附近島生村に生れたと記し、近世時人傳を引いて異聞に傳へ、今治の圓淨寺眞譽上人を師とし剃染し、少時の慧解道心の事などを記し、次に東上嗣法精勤悲修の狀と護法、持戒の志深かりし事を叙し、求法、遊化の間の行實に及び、伊豫岩城島淨光寺の檀越の招請をうけて、父親孝養の爲に此寺に住され、其間の教化の事がりし事、慈濟の績を述べ、次いで老父往生の後退院して、信岡上人を後董に推擧し、鹿谷法然院の住職に知恩院前大僧正順眞に推され、六月十七日晋山せるが、いさゝか意に懷いぬことありて、同年十一月忽ち退寺し、其後厳島光明院の檀越京に上りて招請あり、以八、厳求

などの古德の跡なつかしとて住職せられ、數年の後弟子俊峯に讓り、自からは隱居加菴軒に退きて、專ら淨業を修せられた。伊豫の松山の長建寺より再三の招請あつたのを因辭されたが、護法利人の爲めと强いて懇請されたので、始めより邪道迷福の事には赴かず、閑窓無爲に淨業を終し、暇あれば講說有餘を從するといふので赴任し、後松山城主が香華院大林寺に轉任せしめて國內の僧侶をも匡さしめた、其間の行化甚だ盛であつたが、意に滿たざる事があつて、大林寺を去つて、宮島に歸り、加菴軒に隱栖され、天明年中の飢饉にあたり、身を以つて慈濟につとめられた。この年より不食の所勞あり、尙ほ病をつとめて教化に從はれたが、翌年寛政元年六月二日よりは專ら終焉の用意をされ、五日に紙筆をもとめ、來也來也、我法王家、快樂即是、大自牛車、いかはかり樂しからまし跡ゝる

花の臺の涅槃御法は

と記し、弟子に三種の愛心のことを垂示し、七日の正午頃をうどかし、アヽと高聲にとなへらるゝこと三遍、弟子の念佛の聲を聞きて、歡喜の相面に溢れて入寂された、と記し、茶毗の後舍利を得たる事などと契裔のことにつき異聞を付記し、日々の行儀を述べ、著述を畢ぐる中蓮門興學編は最も師の力を用ひられたるものにて、師を知り、師を學するもの此書なりと云ふてゐる。逸事數項のうちには後進の警策となるものが少くない。終りに和歌數十首と、懺悔和讃を畢げて本文を結んでゐる。

造影に自題せる詞には

出數離禪有數有禪悖儒違神亦儒亦神世所謂者不禪伍之下士大笑不咲非遣道體如是哦々恠々應變出殁畢竟何如大東國裏八不遣人　已巳春　無爲自題

序は巻頭大僧正貞厳師の撰、跋は專念寺隆圓師の撰、編著の蘇山慈意を光明院の慧滿の記せるものと、白毫菴僧敏の記したものを揭ぐ。

❺文政四刊 ❹(京大、一・二一カ・一三)

學窓隨筆 ❶(日) Gaku-sō-zui-hitsu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、研叢)

學天大僧上遺蹟 ❶(日)Gaku-ten-dai-sō-jō-i-seki. ❷一卷 ❸存 ❹若崎徹治郎著 ❺大正八刊 ❹(正大、一五一六・二五〇)(京大、一・二一カ・一二)(龍大、二九六五・一一三)(立大、B一六・四五)

學天台宗法門大意 ❶(日)Gaku-ten-dai-shū-hō-mon-tai-i. (支) Hsüeh-t'ien-t'ai-tsung-fa-mên-ta-i. 天台宗大意 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二四、天台小部集釋、天台小部集釋第六、傳教大師全集別卷 ❹行滿述

❹本書は傳教大師將來錄には「天台宗大意一卷三紙」とあつて行滿の名を缺く。玄日大法師の天台宗章疏及び永超の東域傳燈目錄には「行滿」と記してゐる。本書の鳧批によれば「貞元二十年(A. D. 804)十月二十日因日本國求法僧最澄故記」とあり卷初に「天台沙門行滿」と記してあるから、先づ行滿の述作に係るものであらう。疑はれてゐる書ではあるが傳法偈によれば十月十四日行滿の付法を受けてゐる。叡山大師傳には八十二卷の授與が行はれてある。十四日と二十日と日附は相違しても同月であり、故らに記したのであれば行滿と傳教とはこの頃寫本の授受が行はれたとても誤りはあるまいと思ふ。乍然、本書が將來錄にある「天台宗大意」であるか否かは斷言し難い。內容は五時八教の大意と一心三觀の略說とであるが、ただ「摩訶止觀の一部の大意は法華三昧の異名を出でずし」といひ「ることと「華嚴と法華と同じく是れ一乘」といひ「若し開權を論ずれば花嚴は別教の主伴(乃至)法華は自牛、開漸歸頓」といふ二點を特に記したことは「唐決集」上の最澄の問に道邃の決義と比較して甚しき差異がある。玆に本書撰述の眞僞論が起ると考へらる。更に攻究の要が存すると思ふ。

❼(參考) 傳教大師將來台州錄、天台宗章疏、東域傳燈目錄卷下 (田島德音)

學頭雲藏上人位舍利塔誌銘 ❶(日)Gaku-tō-un-zō-shō-in-i-sha-ri-tō-shi-mei. ❷一卷 ❸存 ❹信圓(—萬延頃? A. D. 1860—)撰 ❼(參考) 續宗全書刊行豫定書目

學堂緣 ❶(日)Gaku-dō-en. ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集第一六、蘇事之內 ❹皓月尼譯、慈雲(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)注

學堂通軌 ❶(日)Gaku-dō-tsū-ki. 講院學道通規 ❷一卷 ❸存、大正八三・五三四(No. 2543) ❹惠仁編 ❺貞治六(A. D. 1367) ❹刊本(龍大、二六八五・八)

學道掟寫 ❶(日)Gaku-dō-okite-utsushi. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(寶龜院)

學道邪正明鑑 ❶(日)Gaku-dō-jashō-mei-kan. ❷二卷 ❸存 ❹本高(安永八—弘化四 A. D. 1779—1847)述 ❹天保一三刊(駒大)(谷大、餘大・二七二二)天正一五刊(駒大)

學道邪正論 ❶(日)Gaku-dō-ja-shō-ron. ❷一卷 ❸存 ❹(哲、え・五・中・三二)

學道邪魔論 ❶(日)Gaku-dō-ja-ma-ron. ❷二卷 ❸存 ❹一休宗純(應永元—文明一三 A. D. 1394—1481)述 ❼(參考)禪籍目錄

學道無常銘並解義 ❶(日)Gaku-dō-mu-jō-mei-narabini-gi-gi. ❷二卷 ❸存 ❹寫本(駒大)

學道用心集 ❶(日)Gaku-dō-yō-jin-shū. 永平初祖學道用心集 ❷一卷 ❸存 大正八二・二 No. 2581、日本大藏經曹洞宗章疏、永陽大師全集第三 ❹道元(正治二—建長五 A. D. 1200—1253)述

❹日本曹洞宗宗祖佛性傳東國師永陽大師永平道元禪師が、學佛道の初心者に參禪學道の標準を示された十條の章疏である。自己の體驗より出た切實なる修道の心得で言々句々に極めて懇切を極めて居る。入宋歸朝の後、宇治の興聖寺、越前永平寺等に於て門下に乘誡されたもので、北朝後光厳天皇延文二年(A. D. 1357)越前寶慶寺大禪越藤 ❹刊本(龍大、二六八五・八)

學匠宣旨 ❶(日)Gaku-shō-sen-ji. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

學匠事蹟綴 ❶(日)Gaku-shō-ji-seki-tsuzuri. ❷三卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

學庠大法寶藏闕本目錄 ❶(日) Gaku-shō-dai-hō-hō-zō-ketsu-pon-mokuroku. ❷一卷 ❸存 ❺文政五—明治二(A. D. 1822—1869) ❹寫本(龍大、二〇一七・四)

學信和尚行狀記 ❶(日)Gaku-shin-o-gyō-jō-ki. ❷二卷 ❸存、淨土宗全書第一八 ❹慧滿、僧敏記、隆圓補 ❺文政四(A. D. 1824)

❹本書は廣島縣厳島光明院の正蓮社行譽敬阿學信の行實を慧滿、僧敏の二人が編輯し、京都專念寺隆圓が見聞するところを增補したのを、三十三回忌に上梓したものである。初めに享保七年伊豫國今治附近島生村に生れたと記し、近世時人傳を引いて異聞に傳へ、今治の圓淨寺眞譽上人を師とし剃染し、少時の慧解道心の事などを記し、次に東上嗣法精勤悲修の狀と護法、持戒の志深かりし事を叙し、求法、遊化の間の行實に及び、伊豫岩城島淨光寺の檀越の招請をうけて、父親孝養の爲に此寺に住され、其間の教化の事がりし事、慈濟の績を述べ、次いで老父往生の後退院して、信岡上人を後董に推擧し、鹿谷法然院の住職に知恩院前大僧正順眞に推され、六月十七日晋山せるが、いさゝか意に懷いぬことありて、同年十一月忽ち退寺し、其後厳島光明院の檀越京に上りて招請あり、以八、厳求

書道 ❶(名)Gaku-dō. 書道を教える場所。❷ 学問の道。❸ 学問の道。❹ 学問の道。❺ 学問の道。❻ 学問の道。❼ 学問の道。❽ 学問の道。❾ 学問の道。❿ 学問の道。⓫ 学問の道。⓬ 学問の道。⓭ 学問の道。⓮ 学問の道。⓯ 学問の道。⓰ 学問の道。⓱ 学問の道。⓲ 学問の道。⓳ 学問の道。⓴ 学問の道。㉑ 学問の道。㉒ 学問の道。㉓ 学問の道。㉔ 学問の道。㉕ 学問の道。㉖ 学問の道。㉗ 学問の道。㉘ 学問の道。㉙ 学問の道。㉚ 学問の道。㉛ 学問の道。㉜ 学問の道。㉝ 学問の道。㉞ 学問の道。㉟ 学問の道。㊱ 学問の道。㊲ 学問の道。㊳ 学問の道。㊴ 学問の道。㊵ 学問の道。㊶ 学問の道。㊷ 学問の道。㊸ 学問の道。㊹ 学問の道。㊺ 学問の道。㊻ 学問の道。㊼ 学問の道。㊽ 学問の道。㊾ 学問の道。㊿ 学問の道。

殺れられしことより、正成再度の舉兵、護良親王の吉野に據られ兵を擧げられた時笠置の衆徒が奮戰したること、元弘三年三月笠置の衆徒は歸山し、東大寺より派遣されて居た代官共を追ひ、更に南都に攻め入り、先に笠置攻めの時には五萬、十萬の兵の將として、人もなげに振舞ふてゐた長崎、二階堂等も皆薙髮して招提寺、西大寺等の長老に具せられて官軍に降つた。同年六月十三日に護良親王京都に還られた時、笠置寺の衆徒も御供をした。同年七月には笠置合戰の恩賞があり、八月に造營の事、注文進すべき由仰出さるとの記して終てゐるが、七年卽月二十二日 書寫」と最後にあるが、この太平記と同文なる點は、何れが本據になつたのか、明かでないが、太平記の方が先なのではあるまいか。（中谷在輝）

笠置寺緣起抄出 ❶(日)Kasa-ki-dera-en-gi-sho-shusu. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一八寺誌叢書第二 ❹(日)Kasa-ki-dera-shi. ❺(日)Kasa-ki-dera-shi. ❻(日)Kasa-ki-dera-shi. ❼(日)Kasa-ki-dera-shi. ❽(日)Kasa-ki-dera-shi. ❾(日)Kasa-ki-dera-shi. ❿(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓫(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓬(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓭(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓮(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓯(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓰(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓱(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓲(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓳(日)Kasa-ki-dera-shi. ⓴(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉑(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉒(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉓(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉔(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉕(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉖(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉗(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉘(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉙(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉚(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉛(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉜(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉝(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉞(日)Kasa-ki-dera-shi. ㉟(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊱(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊲(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊳(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊴(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊵(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊶(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊷(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊸(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊹(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊺(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊻(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊼(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊽(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊾(日)Kasa-ki-dera-shi. ㊿(日)Kasa-ki-dera-shi. (1)(日)Kasa-ki-dera-shi. (2)(日)Kasa-ki-dera-shi. (3)(日)Kasa-ki-dera-shi. (4)(日)Kasa-ki-dera-shi. (5)(日)Kasa-ki-dera-shi. (6)(日)Kasa-ki-dera-shi. (7)(日)Kasa-ki-dera-shi. (8)(日)Kasa-ki-dera-shi. (9)(日)Kasa-ki-dera-shi. (10)(日)Kasa-ki-dera-shi. (11)(日)Kasa-ki-dera-shi. (12)(日)Kasa-ki-dera-shi. (13)(日)Kasa-ki-dera-shi. (14)(日)Kasa-ki-dera-shi. (15)(日)Kasa-ki-dera-shi. (16)(日)Kasa-ki-dera-shi. (17)(日)Kasa-ki-dera-shi. (18)(日)Kasa-ki-dera-shi. (19)(日)Kasa-ki-dera-shi. (20)(日)Kasa-ki-dera-shi. (21)(日)Kasa-ki-dera-shi. (22)(日)Kasa-ki-dera-shi. (23)(日)Kasa-ki-dera-shi. (24)(日)Kasa-ki-dera-shi. (25)(日)Kasa-ki-dera-shi. (26)(日)Kasa-ki-dera-shi. (27)(日)Kasa-ki-dera-shi. (28)(日)Kasa-ki-dera-shi. (29)(日)Kasa-ki-dera-shi. (30)(日)Kasa-ki-dera-shi. (31)(日)Kasa-ki-dera-shi. (32)(日)Kasa-ki-dera-shi. (33)(日)Kasa-ki-dera-shi. (34)(日)Kasa-ki-dera-shi. (35)(日)Kasa-ki-dera-shi. (36)(日)Kasa-ki-dera-shi. (37)(日)Kasa-ki-dera-shi. (38)(日)Kasa-ki-dera-shi. (39)(日)Kasa-ki-dera-shi. (40)(日)Kasa-ki-dera-shi.

勝田明清

勝田明清

勝田明清

譯 ❷(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

合殺解 ❶(日)Gasatsu-gedo. ❷一卷 ❸存 ❹寂靜(元祿一五—明和八 A. D. 1702—1771)撰 ❺寫本(龍大、二六六二・九七)

月院安心問答信喜問答始末 ❶(日)Gwatsu-in-an-jin-mon-to-shin-ki-mon-dō-shi-matsu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・三二三五)

月光童子經 ❶(日)Gwak-kō-dō-ji-kyō. (支)Yüeh-kuang-tung-tzu-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❷(參考) 出三藏記第三

月光童子經 ❶(日)Gwak-kō-dō-ji-kyō. (支)Yüeh-kuang-tung-tzu-ching. (梵)Candraprabha-kumāra-sūtra. 月明童子經、申日經 ❷一卷 ❸存、大正一四・八一五 No. 534、續宗六、卍一〇・五、北1235號、南1245號、元1250號、明北1255女、明南1230潘、清1225潘、麗1253數、天1232數、No. 210 ❹竺法護譯 ❺西晉太始二—建興元(A. D. 265—313)

❻本經は申日長者が六師外道の慫慂により佛を害せんとし、作りて佛及び衆僧を供養せんと申し出で、門頭に火坑を設け毒飯を準備する等の謀計を回らせるも、佛の神變は殊勝にして謀計悉く功を奏せず、申日長者は至心に懺悔して佛に歸せしといふ物語を叙べたものである。

本經の同本異譯に佛說申日經がある。これは竺法護譯とあるも支謙譯の誤ならんといふことである。又求那跋陀羅譯申日兒本經がある。 (泉芳璋)

月光菩薩經 ❶(日)Gwak-kō-bo-satsu-kyō. (支)Yüeh-kuang-p'u-sa-chi-ng. (梵)Candraprabha-bodhisattva-caryāvadāna. (刊本1896. Divyāvadāna XXII) (藏)Zla-ḥod-kyi rtogs-pa-brjod-pa ❷一卷 ❸存、大正三・四〇六 No. 156、續宗八、卍一五・四、北1156結、南1166千、元1159千、明北247潘、清247潘、天1179千、明南253臨、No. 632 ❹宋 法賢(一成平四 A. D. 1001)譯

❺本經は舍利弗目連が佛に先立ちて入滅せることを說明する本生說話である。佛王舍城に住したまひし時、舍利弗目連佛所に詣り、佛の涅槃を見るに忍びず、先に滅度せんことを申し出た。この時衆の中に一比丘がこの因緣を問へるに對し、世尊は彼等は今日始めて先立ちて入滅するに非ずとて過去の物語を始められる。過去世に印度內に賢石といふ一大城があつた。その王を月光と云ふ。豐樂安穩にして人民みな太平を謳歌した。さてこの月光王は身を施さんといふ願を立てたところ、香醉山から惡眼といふ婆羅門が來て王に命を乞ふた。二人の宰相大月と持地とは百方手段を回らしてこれを防いだが、力及ばず、竟に王は自から頸を刎ねて婆羅門に與へる。この時二人の宰相は王の身命を棄つるを見るに忍びず、彼處に於て自から其の壽命を捨てゝ、梵天に生じた。この月光王が釋尊であり、二人の宰相が舍利弗目連であつた。この說話でこの經は終つてゐる。 (泉芳璋)

月鈔 ❶(日)Gas-shō. 實歸鈔、虛往實歸鈔 ❷一卷 ❸存 ❹深賢(一弘長元 A. D. 1261—)述

月上女經 ❶(日)Gwatsu-jō-nyo-kyō. (支)Yüeh-shang-nü-ching. (梵)Candrottarā-dārikā-paripṛcchā. (引用)or. Candrottarādārikāvyākaraṇa (藏傳)(藏)Ḥphags-pa ḥo-gio zla-m-ḥog luṅ-bstan-pa shes-bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo. ❷二卷 ❸存、大正一四・六一五 No. 432、續八、卍一二・二、北415潘、南455潘、元452潘、明北457潘、清457潘、麗415數、天452潘、明南472潘、No. 441 ❹因那崛多譯 ❺隋開皇一二(A. D. 591)

❻本經は毘耶離城の長者毘摩羅詰の女月上なるものゝ受記物語である。毘摩羅詰はその妻無垢との間に一女を產んだ。この女端麗であつて月上と名づけられ、生れて忽ち長大、八歲の大きさと爲る。諸方より婚朝を申し出づるもの甚だ多く、中には毘摩羅詰を脅かして女を與へよと云ふものもあるので、非常に困惑した。すると月上女は今より七日の後、城中の四衢道頭に詮釋を振つて自から婚を選ぶであらうと云ふ。このことが惟ぜられると城中は人民みな歡喜して只管に其の日を待ち設ける。さて六日目に月上女の右手に忽然として蓮華を生じ、蓮華の上に一の佛像が化現した。この化佛の告によつて月上女は世尊の許に行かうと決心し、七日目に佛所に向つて出かけようとすると、求婚の群集が詰めかける。月上女は虛空一多羅の高さを飛んで佛所に行く。途上舍利弗に邂逅して問答あり、佛所に詣り文殊師利等の菩薩と談論する。月上女の掌中には誓願すると共に次から次へと十蓮の蓮花を生じ、神變奇瑞が現はれる。かくて月上女は其身を轉じて男子と成り、出家して弟子となる。

本經はかの維摩經と一見關係あるが如く見ゆる。即ち毘耶離城の離車族毘摩羅詰をその題材とし舍利弗、劫賓、阿難、文殊師利其他菩薩の名が見える。併し本經の毘摩羅詰は普通平凡の長者であつて決してかの不二門の一默を演ずる底の維摩ではない。但し月上女は實に飛び離れた化女である。本經の作者は恐らく維摩經を知らない。知つたならばこんな風に毘摩羅詰を表現する筈が無い。否維摩經こそこの經から幾多の資料を得たものであらうと思はれる。又月上女の神變物語は恐らく竹取物語の作者に暗示を與へたことは爭へない。 (泉芳璋)

月藏抄 ❶(日)Gatsu-zō-shō. ❷二十四帖 ❸仁聖撰 ❷(參考) 本朝古訓撰述密部書目

月藏分 ❶(日)Gatsu-zō-bun. (支)Yüeh-tsang-fen. 大方等大集月藏經、大集月藏經、月藏經 ❷十卷 ❸存、大方等大集經第四六—五六(大正一三 No. 397, 15) ❹那連提耶舍譯 ❺高齊天統二(A. D. 566)

月藏分依義立名 ❶(日)Gwatsu-zō-bun-e-gi-ryū-mei. (支)Yüeh-tsang-fen i-i-li-ming. ❷一卷 ❸缺 ❹信行(大同七—同皇一四 A. D. 541—594)撰 ❷(參考) 東域傳燈目錄卷上

月藏分抄 ❶(日)Gwatsu-zō-bun-

shō. (支)Yüeh-tsang-fen-ch'ao. ❷一卷 ❸缺 ❹信行(大同七—同皇一四 A. D. 541—594)撰 ❷(參考) 東域傳燈目錄卷上

月天 ❶(日)Gwat-ten. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第四〇阿娑縛抄之內 ❹承曆(元久二—弘安五 A. D. 1205—1282)撰

月天子經受者表白 ❶(日)Gwat-ten-shi-kyō-ju-sha-hyō-byaku. ❸存 ❹寫本(寶龜院)

月電三昧經 ❶(日)Gwatten-dem-mai-kyō. (支)Yüeh-tien-san-mei-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❷(參考) 出三藏記第四、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

月燈經要略 ❶(日)Gwat-tō-kyō-yō-ryaku. (支)Yüeh-teng-ching-yao-lüe. ❷一卷 ❸缺 ❹疑僞經 ❷(參考) 開元錄第一八

月燈三昧經 ❶(日)Gwat-tō-sam-mai-kyō. (支)Yüeh-teng-san-mei-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❷(參考) 出三藏記第四

月燈三昧經 ❶(日)Gwat-tō-sam-mai-kyō. (支)Yüeh-teng-san-mei-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹後漢安世高(一建和二—建寧三 A. D. 148—170—)譯 ❺第一譯、闕本。❷(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

月燈三昧經 ❶(日)Gwat-tō-sam-mai-kyō. (支)Yüeh-teng-san-mei-ching. (梵)Samādhi-rāja-candra-pradīpa-sūtra (引用)Sarva-dharma-svabhāva-samatāvipañca-sūtra-samādhi-rāja (藏傳)(藏)Ḥphags-pa chos thams-cad kyi raṅ bshin mñam-pa-ñid rnam-par-sprosu-pa tiṅ-ne-ḥdzin gyi rgyal-poḥi mdo. 入於大悲大方等大集說經、大方等大集月燈經 ❷十卷 ❸存、大正一五・六二〇 No. 639、續玄一〇、卍一〇・三、北183潘、南194潘、元199潘、明北187女、清187女、麗182惟、天191潘、指172惟、法179惟、至261才、明南184女、No. 191 ❹那連提耶舍(天監一六—同皇九 A. D. 517—526)譯 ❺高齊天保八(A. D. 557)

❻本經は費長房が其の撰著歷代三寶紀に、月燈三昧經十一卷、高齊那連提耶舍、天保八年、天平寺に於いて出だす、と言へるものの即ち是れである。序正流の三分を具備し、勅詔を奉じて一世の碩德を集め譯出せる經なるが故に、文章流麗にして讀む者をして卷を掩ふを知らざらしむ、亦た偶然にあらず。譯出成りし時、彥琮制序せしも今は傳らず、宋・元・明三本藏經は十一卷に、麗本獨り十卷に調卷してゐる。其名を入於大悲大方等大集說經と言ひ、又た大方等大集月燈經と言ひ、又た單に月燈三昧經と呼ぶ。梵本は Samādhirāja-pradīpa sūtra の名を以て、西藏藏にては Ḥphags-pa chos thams-cad kyi raṅ bshin mñam-pa-ñid rnam-par-sprosu-pa tiṅ-ne-ḥdzin gyi rgyal-po shes-bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo. の名を以て現存す。

本經の內容は、佛が月光童子を對告衆として、一切諸法體性平等無戲論三昧を修し、二乘の果を貶めず、寬宏の佛果に到達すべきことを補說されしものにして、維摩經に見るが如き小乘の聖者を彈斥せる事實を記さず。又法華經に於ける如き同會の思想無し。又如來藏思想、阿賴耶識思想等無く、佛身論に於ては法身應身の二身を說けども報身思想なく、龍樹の八不中道觀の思想の影響を受けたる跡無し。中心思想は金剛般若、維摩經等に類する點あり。思ふに是等の諸經典と同じく、大乘經典初期に屬する成立なるべし。第十卷中に諸經中より抽出せる名詞、並に難解の句に對して問答解釋を爲し居れども、後世の發達せる諸大乘經典に見る諸思想無きは、自ら本經の成立年時の古きを物語るものと言ふ可し。龍樹の名著大智度論、並に十住毘婆沙論には幾多の大小乘經典を引用し又た河梨跋摩の成實論にも頗る多くの聖典名を引用すれども、共に本經の名を擧げず。然るに唯識十大論師の隨一なる最勝子著、瑜伽師地論釋には月燈經の名見ゆ。右の事實を根據として譯出年時を最下限とし、成立並に流傳の概況を推知すべし。譯出時の事情より當時廣く傳播せしことを知るを得れども、他の諸宗の正所依の聖典の如く盛んに講讚されたることは認め難く、淨影、天台、嘉祥、慈恩、賢首等の諸名匠の撰述中に於て本經の名を見ること稀である。義天錄、並に傳敎、弘法、慈覺、智證等の求法目錄、永超の東域傳燈目錄等に本經の章疏ありしことを記さず。

一部十卷麗本は品名を揭げず、丹本は第四卷に如來出城品の名を擧げ、宋・元・明三本並に宮本は第九卷以後に數品名を揭げ、梵本は初頭より終りに至る間を第一因緣品以下第四十意戒品に至る四十品に分つ。即ち次の如し。

第一因緣品。第二沙羅樹王佛本生修行品。第三念佛品。第四三昧品。第五摩德品。第六三昧品。第七入惡法品。第八無所有起如來品。第九深法忍品。第十入城品。第十一持經品。第十二陀羅尼三昧品。第十三顯示三昧品。第十四現笑品。第十五受授記品。第十六過去修行品。第十七無量諸佛成三昧喜悅品。第十八不失受持三昧品。第十九顯示不思議佛法品。第二十因陀羅幢報王品。第二十一本生修行品。第二十二顯示如來身品。第二十三顯示如來不思議品。第二十四入無礙解品。第二十五隨喜品。第二十六布施功德品。第二十七說示戒品。第二十八十種利益品。第二十九威德衆玉品。第三十利益品。第三十一說示一切法自性品。第三十二受持利益品。第三十三安穩德品。第三十四具智者品。第三十五善花月法師品。第三十六顯示戒聚品。第三十七美稱品。第三十八身戒品。第三十九口戒品。第四十意戒品。

各卷の所說內容綱概は國譯一切經經集部第一の解題に讓る。

❷(參考) 三寶紀第九、內典錄第四、譯經圖紀第四、開元錄第六、貞元錄第九 (林信雲)

月燈三昧經 ❶(日)Gwat-tō-sam-mai-kyō. (支)Yüeh-teng-san-mei-ching. ❷一卷 ❸存、大正一五・六二三 No. 641、

館玄一〇、卍一〇・四、屏152鞘　❹釈宋代先公譯

❺本經は正宗分のみにして、序分流通分を缺く、始め三界より終り道識に至る九十餘種の法門に就いて六法建立をなす。宋・元・明三本は此の經を缺き、獨り龍藏にのみ存す。諸經錄が大本第七卷の抄譯なる旨を記せども、現存那連提耶舎十卷本第五卷の後半稍其の趣を同うするに止まり而かも全然内容を異にす。現存十卷本は言論乃至陀羅尼門に至る七十三法に就いて四種法門の建立を爲せり。思ふに嘗一法門中大本の六種法門品のみ抄出されて本經となりしものか、そは經の首尾の體裁より推して獨立の完全なる形を存せざるより知らるゝ所である。經の後記に言へる如く先公譯に非ずして恐らくは後漢安世高譯なりと言ふを正しとすべし。安世高譯長く缺本と認められて居りしものが後發見されて、先公譯と經名同じく卷數亦た一卷なるが故に誤りて先公の名を安ずるに至りしものなるべし。

（林信雲）

月燈三昧經　❶(日) Gwatō-sō-sammai-kyō. (支) Yüeh-teng-san-mei-ching.　文殊師利菩薩十事行經、遺教三昧經　❷一卷　❸存、大正一五・六二〇No. 645、館玄一〇、卍一〇・四、北154乗、南153乗、元191乗、明北152慈、清152慈、屏154鞘、天197乗、指152鞘、法153鞘、至252良、明南153慈、N. 152　❹釈宋代先公譯　❺本經は序分、正宗分、流通分の三分を具備し、長行並に重頌より成る。佛、文殊師利童子に對して布施等の六度行、空觀等に就いて十事を說き乃至終り分衛に就いて十事を說かる、文殊師利十事行經の名ある所以である。

那連提耶舎十卷本の第六卷に相當せるものにして法經錄以下の釈宋先公譯月燈三昧經第七卷異譯と言へるもの正しく是である。

❼(參考)　三寶紀第一〇、内典錄第四、譯經圖紀第三、開元錄第五、貞元錄第八

（林信雲）

月燈三昧經　❶(日) Gwatō-sō-sammai-kyō.　國譯月燈三昧經　❸存、國譯一切經經集部第一　❹林信雲譯

月明菩薩經　❶(日) Gwatsu-myō-bosatsu-kyō. (支) Yüeh-ming-p'u-sa-ching. (梵) Candra-prabha-bodhisattva-sūtra.　(推定)月明菩薩三昧經、月明童子經、月明童男經　❷一卷　❸存、大正三・四一一No. 159、館宙六、卍一二・六、北477乗、南491乗、元480乗、明北509鞘、清502鞘、屏473善、天480乗、N. 513　❹支謙譯　❺吳黃武二—建興二(A. D. 223—253)

❻本經は王舍城に於て長者申日の子月明に對して說かれし經典である。菩薩は四願を發すべし。一には一切善權方便を得べし。二には善友と會すべし。三には財寶を一切に與へむ。四には法施と飲食の事を行はむ。是れ四願なりと說き、貪心を離れ、疾める者に醫藥を給せよ。否肌肉をも惜まずと云ひて、過去世諸念願無上王如來の滅後、至誠意比丘の僧上に箭を生ぜし時、國の太子智止は人の肉が唯一の藥餌なるを聞き、自から刀を執りて、僧肉を割きし本生說話を語る。本經は極めて短き一經なるもよく古譯の體を存し譯語の古風なる頗る珍重すべきものがある。

（泉芳璟）

月喩經　❶(日) Gwatsu-yu-kyō. (支) Yüeh-yü-ching. (梵) Candropama.　(巴) S. 16.3 Candupama.　❷一卷　❸存、大正二・五四四No. 121、館辰六、卍一五・七、北1323祇、南1323功、元1315功、明北943風、清943風、屏1473牧、天1305功、至1153臨、明南372解、N. 948　❹宋施護(—太平興國五A. D. 980—)譯

❻この經典は雜阿含四十一卷第十八經(一一三六)の別譯單行經であつて、別譯雜阿含六卷第五經に相當し、巴利尼柯耶では S. 55.3 Candupama に當り、梵文も斷簡ながら殘存してゐる經典(Candropama S. Hoernle Ved. I. p. 45-4)であつて、阿含經典中、梵巴漢ともに現存する少數の經典の一つであり、從つて相互に對照し研究する便宜あるものである。然しこの經典は梵巴漢何れも大差無く、只その比較研究に依つて、梵本は漢譯雜阿含のそれに同一であり、巴利のみが系統を異にするものであることを知り得るのみである。内容は比丘たるものゝ修行を月に喩へて示し、月の初めて暈りて日々に新たなるが如く修行にいそしみ、月の何れの家に入りても著かず因はれず染せられざるが如く、白家俗人の家に入りて利益に因はれざるように教へ、かくの如き行持の人は邊業なりと大迦葉を賞讃し、終りに清淨說法と不淨說法の別を說いた短經ながら興趣深き經典である。

（赤沼智善）

月輪觀　❶(日) Gwatsu-rin-kwan.　❹一卷　❺缺　❹覺超(天德四—長元七A. D. 960—1034)撰　❼(參考)　諸宗章疏錄第二、山家祖德撰述篇目集卷下

月輪觀　❶(日) Gwatsu-rin-kwan.　❷一卷　❸存、慈雲尊者全集第十六(四三四頁)　❹慈雲飲光(享保三—文化元 A. D. 1715—1804)撰

❻密教徒の觀法の一種たる月輪觀につきて月輪の大きさを次第に倍加して觀ずることを說いてゐる。直接に觀法の所作や觀心の工夫を說いたものではない。何人かの質問に對する解答の消息文で、短篇である。

❼著者草本(大阪府田邊法樂寺藏)

（小田慈舟）

月輪觀頌　❶(日) Gwatsu-rin-kwan-ju.　❸存、密藏諸祕釋第九、興教大師全集　❹覺鑁(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)述

❻四言七十六頌、普通の月輪觀の作法と功德とを說く。即ち已の端坐する前の處に、月輪を一肘量に觀き、其色を白淨にして、之に向つて觀想を凝すなり。最初の一肘量を漸く廣大になし、或は四尺・丈等となし、次第に廣げて、居る所の一院に遍滿せしめ、其居住所の鄉中に舒ばし、進んで大千世界に遍滿せしむ。而して心に疲勞を感じたる時は、之を源の一肘量に縮め、之を胸中に收むべきことを說く。興教大師全

集の頌は七十五頌たれど「了々分明」の下に「於一肘量、若心住已」の二頌を加入し「或一丈量」の下より「或二丈量」を削るを可とす。

（宮田榮純）

月輪觀頌消釋　❶(日) Gwatsu-rin-kwan-ju-shō-shaku.　❷一卷　❸存　❹良俊記　❺天明八(A. D. 1788)　❼刊本(高大、寄・一・六九)

月輪觀頌二十讃　❶(日) Gwatsu-rin-kwan-ju-ni-jū-in.　❸存、興教大師全集

❻月輪觀頌には、四言二十頌のものと、四言七十六頌のものと二種あり、依て二十頌の分には特に二十頌と註して七十六頌のものと區別す、此二十頌の月輪觀は實は心月輪觀と名づくべきものである。此心月輪は吾々の心中に本來具有する所の淸淨の心性を指すものにて、此心月輪は十界に遍滿し、譬へば生死に墮し、覺れば本覺に還る、故に眞言祕密の作法に依りて如實に修行して、頓に本來淨を顯現する所以を說きたるものである。

（宮田榮純）

月輪觀之事　❶(日) Gwatsu-rin-kwan-no-koto.　❷一帖　❸存　❹寂快(貞和元—應永二三A. D. 1345—1416)記　❺德川時代寫　❼(寶龜院)

月輪祕釋　❶(日) Gwatsu-rin-hi-shaku.　心月輪祕釋　❷一帖(首欠)　❸存　興教大師全集　❹慶雲(嘉保二—康治二 A. D. 1095—1143)記　❺天治元(A. D. 1124)　❼(寶龜院)

合掌又手本義編　❶(日) Gassō-shō-shu-shu-hon-gi-hen.　❷一卷　❸存　❹諦忍(寶永二—天明六 A. D. 1705—1786)述　❺延享三刊　❼(龍大、二六一・一六九)(正大、一五三三・八四—八五)(高大、寄・一・五七)(谷大、餘大、二六六三)(立大、A三〇・一五九)(哲、あ、一・左・四)(立大、A三〇・一一三)

桂川地藏記　❶(日) Katsura-gawa-ji-chi-ki.　❷二卷　❸存、史籍集覽第二六

❻桂川地藏尊安置の緣起及び地藏の靈驗功德を說く。(上卷)初め地藏六道能化の功德を稱へ、應永二十三年七月四日京都今西ノ宮の祭禮の夜巫女靈夢を感じ、一客人之を占ひて明日西方に地藏菩薩化現すべしと云ふ。果して翌日桂川上に一石地藏尊示現し、光明を放ちて遍く世界を照し、屋々神通あり靈德を現はすこれにより都鄙貴賤幼稚壯老男女官人庶民諸者蹤を接すると云ひ、故事を用ひて其の樣を綱じ、博引舞文凡庸ならざるを見る。(下卷)「應永丙申七月中旬之比桂地藏に參詣の時西の七條松尾御旅所北野伏拜之邊に奇異老翁あり」云云に筆を起し、「巫女曰く此れ地藏菩薩なり一天之歸依四海の尊崇々々議々たり」とて巫女に託して地藏石像の靈驗奇異あつて輕んずべからざる所以を述べ、地藏菩薩は阿彌陀の菩薩號であり、我が國天神地祇十代の本地佛であると云ひ、更に進んで發心門に於ては東方藥師瑠璃光如來四面八臂降三世明王、修行門に於ては南方寶生佛四面八臂軍陀利明王、菩提門に於ては西方無量壽佛六面六臂六足大威德明王、涅槃門に於ては北方天鼓雷音佛三面四臂、命終夜叉明王、皆これ地藏尊の慈悲形であり、其の内證は中台大日如來で不動明王も其の慈悲形なりと說き、蓮華三昧經を引いて檀陀、寶珠、寶印手、持地、除蓋障、日光の六地藏を述べ、「勇猛精進一心不亂泰念地藏菩薩者還盡此一報身心當生極樂國決定無疑矣」云云と結んでゐる。奥書に「弘治二年二月六日誌之」と記し、文化十二年三月十日高田與清記には「桂川地藏記二卷蓋承應明曆年間之寫本也」云云と述ぶ。この書の原本と覺しき古本前田侯爵家にありて、「弘治二年二月初六日誌之」とあるから、著者不詳なるも恐らくは其の頃密家の手になつたものであらう。

（紀氏陸眞）

桂宮樣非常御立退一件書類　❶(日) Katsura-no-Miya-sama-hi-jō-tachi-no-koto-kō-shō-ruī.　❷一卷　❸存　❹寫本(龍大、別藏)

金澤巡禮　❶(日) Kana-zawa-jun-rei.　❷一卷　❸存　❹金子陸英著　❺昭和七刊　❼横濱順禮社

金澤別院沿革史　❶(日) Kana-zawa-betsu-in-en-kaku-shi.　本派本願寺金澤別院沿革史　❷一卷　❸存　❹佐藤晨英編　❺明治三六刊　❼(龍大、一九四・一三)(帝國、八一・八〇九)

金森日記抜　❶(日) Kana-mori-nikki-bats.　❷一卷　❸存、眞宗全書第六九

❻近江國の南部野洲郡地方に於ける蓮如上人の行化に就て記述せるものである。金森は野洲郡小津村に在り。この地方にては金ノ森と稱す。この地に道西坊義從と名づくる人あり、蓮如上人に歸依し常に隨逐して化道を授く。その頃に慶聞坊龍玄あり、これまた蓮如上人に隨侍せり。道西の住居を以て一寺とし、義立寺と稱す。即ち義從と龍玄との名に基けるなり。この金森日記は撰者詳かならず。恐らくは後代に至り遺聞を集め堅田本願寺の舊記等に依りて之を增補し一部の書となせしものなるべし。久しく寫傳せられしが、これを眞宗全書に收めて刊行せり。

（秀氏祐祥）

蟹滿寺釋迦像考證　❶(日) Kani-dera-shaka-zō-kō-shō.　❷一卷　❸存、黑川眞頼全集第三

鐘勸進帳　❶(日) Kane-kwan-jin-chō.　❷一卷　❸存、土佐國群書類從第一九九

❻土佐國中村豐樂寺の鐘勸進の寄附帖である。天文二十四年五月八日敬白とし、小笠原道貫以下部落民に及ぶ所の六十二名の交名帖である。

（紀氏陸眞）

❼(帝國、特別・け・二六)

鐘之緣起附鐘銘　❶(日) Kane-no-en-gi-tsuketari-shi-mei.　❷一卷　❸存

❼寫本(谷大、餘大・三六二二)

鎌倉圓覺寺祖塔正續院佛牙舍利之緣起　❶(日) Kama-kura-en-gaku-ji-so-tō-shō-zoku-in-butsu-ge-shari-no-en-gi.　❷一卷　❸存　❼刊本(京大、藏・一九か・一)(正大、一〇三三・五八)

鎌倉圓覺寺佛舍利記　❶(日) Kama-kura-en-gaku-ji-butsu-shari-ki.　相州

書名略號 ❶題名(名書) ❷名(名書)(書考)(書考多書)(書目)(書目)(書目

鎌倉圓覺寺佛舍利記 ❷一卷 ❸存 ❹寫本(徳大・二九九二・三)

鎌倉切紙 ❶(日)Kama-kura-kiri-kami. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(正大・一五五二・一五七)

鎌倉桑ケ谷問答 ❶(日)Kama-kura-kuwa-ga-yatsu-mon-tō. 桑ケ谷問答 ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大・餘大・二九三二)

鎌倉五山記 ❶(日)Kama-kura-gozan-ki. ❷一卷 ❸存、續群書類從第二七、史籍集覽第二六

❹鎌倉に於ける建長、圓覺、壽福、淨智、淨妙の五山の歴代、及び塔頭造營物等を簡明に記したものである。(一) 相州小坂郷山内縣五福山建長寺の項には開山大覺禪師蘭溪道隆等四十九の塔頭、住僧の論議示寂年月遺偈等の略歴を記し、營造物景勝の詩、佛殿梁牌銘を掲げて居る。(二) 瑞鹿山圓覺寺の項には北條時宗の請狀、開山佛光國師無學祖元等三十四人の略歴及び造營物のことを記して居る。(三) 同所龜谷山壽福金剛禪寺の項には開山千光祖師明庵榮西等十五人の略歴その他を記して居る。(四) 金峰山淨智禪寺の項には開山佛源禪師大休正念等十二人の略歴その他を記して居る。(五) 紹蒔山淨妙禪寺の項には開山退耕行勇等五人の略歴その他を記して居る。尙ほ京都五山開山次第、關東十刹を擧げ、開山及び建立年代を掲げて居る。

❺寫本(帝室)、(帝國、八五・一六四) (大久保堅瑞)

鎌倉五山記考異附住持籍 ❶(日)Kama-kura-gozan-ki-kō-itsuke-tai-jō-ki-seki. ❷一卷 ❸存、史籍集覽第二六

❹本書の内容は五山記と參照して其の異同を詳に掲げてゐる。就中「五山第一」建長興國禪寺を出し、其の創建及び開山道隆を始め、西來庵等の塔頭四十九院と其の住持を列傳し、次に諸伽藍を列擧し、十寮頌禪居翁清損、東西十寮、衆寮、貿衆寮、貿温室、貿僧堂の各頌を載せ、佛殿梁牌銘を掲げ、次に塔頭位次、鐘銘、桂鐘の文を載せ、「五山第二」圓覺興聖禪寺を擧げ、開山祖元を始め正統院等の三十五塔頭と其の住持を列傳し、次いで諸伽藍を述べて梁牌文を掲げ塔頭外諸寮に及ぶ。「五山第三」壽福禪寺を出し、開山榮西を傳し、道遙庵等十五塔頭と其の住持を列傳し、本尊諸寮景觀に及ぶ。「五山第四」淨智禪寺を擧げ、開山正念並びに藏雲庵以下十一塔頭と其の住持を列傳し本尊を掲げ塔頭外の諸寮景觀を述ぶ。「五山第五」淨妙禪寺を出し、開山行勇を始め光明院等の塔頭十と其の住持を略傳し、本尊及び塔外寺觀を叙してゐる。更に「關東十刹第一」の項下に禪興寺の寺觀並びに梁牌文を記し、諸山として長壽禪寺、報國禪寺、長勝禪寺を掲擧し、關東十刹位次を掲げ、「附」として建長寺開山大覺禪師より百七十八世龍派和尙に至る住持位次を掲げ、再び西來庵以下四十九院の開山を列傳し、建長寺勝境を摘錄し、佛殿梁牌銘を記すこと全く前に同じである。次ぎに圓覺寺住持位次を述べ、開山圓通常照國師より百五十二世奕芳和尙に至る住持籍を掲げ、再び正續院以下瑞光院に至る二十塔頭と其の開山を略傳し、「嗣法南州。歸世日」に至つて斷缺してゐる。 (紀氏隆昌)

鎌倉五山誌 ❶(日)Kama-kura-gozan-shi. ❷一卷 ❸存 ❹無着道忠/永慶二—延享元(P. D. 1683—1744)誌 ❺(參考)禪籍目錄

鎌倉光明寺志 ❶(日)Kama-kura-kō-myō-ji-shi. 壇林鎌倉光明寺志 ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一九 ❹鶴門(天明二—天保一〇(P. D. 1782—1839)撰

❺神奈川縣鎌倉町材木座なる淨土宗大壇林光明寺の寺誌である。本書は他の壇林志と同じ體裁の撰述で、目次を上門來歴、伽藍數所、寶器什具、開祖行實、同師創寺、二世傳略、同師系統、同師資名、累世貫主、境内所在、眺望八景、北條系譜、内藤氏統、會下清德の十四とし、山門來歴には當寺が淨土宗の靈場であり、關東の巨刹であり、宗旨の根元なること、宗祖の上足聖光上人が高弟良光上人が關東巡村の化導をめざして、當時の幕府の所在地鎌倉に法輪を樹て執權北條經時の歸依を得て寛元元年五月佐介ケ谷に一寺を建立薬師寺と名づけ、後光明寺と改め、後今の地に移り德川家康江戸に覇府を開くに至り、宗門の規矩が定り、十八壇林の上首となり、關來陽紫勅願の待遇を得て繁昌せることを記し、伽藍數所には本堂、阿彌陀堂、大方丈、新禪堂、三門、外門、勝手門、經藏、鎮守等のことを記す、中にも阿彌陀堂の本尊、新禪堂の額及安置の神財天像に關すること、三門の勅額に對する傳說を記し、鐘樓の條には鐘銘を擧げ寶具什器の下には勅願寺綸旨、勅願本紙、南岳竹布丸條袈裟、一字三禮の彌陀經、紫石硯、大文字名波、阿彌陀佛繪像、中將姫筆稱讚淨土經、當麻曼陀羅、同緣起、其他の書畫等を擧げ、開山略傳には記主禪師良忠上人の略傳、同師創寺の下に光明寺、鴻巣勝願寺、石見妙樂寺、信濃生安寺、下總鎌木光明寺、伊勢の觀音寺、香取西音寺、金尾金照寺、矢向良忠寺、下總相國寺、銚子淨國寺、清水實相寺、大濱長樂寺、白石當信寺等を四十八寺の内宗門の三十一寺を列記し、中にも矢向の條には鐘銘其他を引いて記述し、二世略傳には淑惠良聰上人の略傳、良聰本系には閑院家嫡流の系圖を掲げ、開祖資名には良聰、性眞、尊觀、了慧、禮阿、良空、清阿、松阿、準觀、在阿、定光、如一如空、善阿、俊性一向其他四十名の名を列ね、淑惠良聰の門資として良聲定慧、覺圓、無業、慶覺、存公、惠海、源雪、宏清の外二十名を列ね、良聲定惠の門資として良順聖滿、順聲了專の外十三名、良順聖滿の門資として西性良意の外四名、順聲了專の門資として、良昨常聲の外五名、良昨常聲門資として聖聲慶順外一名、聖聲慶順門資として觀聲祐崇の名が列ねられ、累世貫主の項には三世より八十四世に至る歴代の名を列ねるうち、三世と八世祐崇の下には略して事蹟を擧げ、八世の

時より淨土宗に十夜法要の永修となりしことを記し、三十一世中興傳燈の下に六山傳の定められしこと、四十三世禮通の下には新著聞集を引きて臨終の相を記し、七十世圓海の下には詩文勸誡に勝れたることを擧げて龍部南郭等の詩を引き、境内所在の項には蓮華院、學寮、霊導塚、千體地藏、龍燈松、經時墓、龍宮窟、内藤家廟所、記主水、寶庫、天照山、大悲窟につき記し、眺望八景は大阪の大福寺の風軒了吟が寛政中八景を選びて詩歌を募りて出版した。八景とは光明鳴鐘、由比漁火、興嶽積雪、坂下炊煙、富山夏雲、稻崎秋月、江島神廟、豆海遊艇で、詩は高野山金剛三昧院の快神仁龍、大瑞慈風、快澄玄榮、洲崎一純、台賢勝空、直圓智眞、明純現覺、周觀惠光等で、和歌は風軒了吟と有馬法性寺の學天とである。次に藤門が學友在藤と此の八景を吟詠した詩歌一首寛が揭げてある。北條系譜の次には系譜を略して經時の略傳のみを出し、内藤氏統の項の系譜を略し、會下清德の項に光明寺に無住せる卓出せる淨侶、信阿願生は河内牧方に臺護寺を建て、存譽自閑は大和の超善寺を開き、信譽洞庫は堺の遍照寺を雅め、信長より召されて宗論の任僧となり、光譽春古修學十年堺に龍門寺を開き、靈譽良三は性仁慈にして大和廣岡の刑場に庵を結びて刑死者の冥福に資し、後來迎寺と名づけた。正譽閑道は三浦の出身大和郡山に實相寺を開創し、央譽重信は大和權現寺、如來寺を再興し、玄譽玄天は魚津に次泉寺を興し、光然良明上人は後閑願天皇の皇子で就中氷見に西念寺を開創し、專譽念超は能登の新善光寺を再興し、翁蓮社友鸞は越後鹽澤村に長慰寺を再興し、其他開哲欣求、緣譽知傳、觀譽智了、友眞隆恕、神譽正印は甲府尊體寺を開き、深譽全貞、寂譽春屋は名古屋に相應寺を雅め、黑谷に晋堂し、滿譽玄道、秀興慶傳、讃譽故念、行蓮社勤譽、隱蓮社報順、廣譽友讃、一譽俊當、貞譽良記、愚童遊夢、淨譽順故、眞譽高圓、隱譽順如、聽譽友墓、龍譽了公、深譽江月、慶譽學輪、月秀善宗、念譽行明、靜譽三故、心蓮社三譽、誠譽演甫、鏡譽覺夢、道阿賢公、蘇友頑石、定故祖的、實譽了風、心蓮社祖譽、昌譽道順、信譽重貞、旭譽了哲、應譽良道、鏡譽輪岡、法譽清敎、景譽稻澤友壽、讃蓮社友讃、雲譽友信、淨譽存道、然譽淸善、傳譽一阿、唱蓮社深譽、信蓮社深譽、緣蓮社本譽等を列擧して、其の事蹟を略記し、最後に新著聞集の善貞法師の逸話が引いてある。 (中谷在禪)

鎌倉佐介淨刹光明寺開山御傳 ❶(日)Kama-kura-sa-suke-yi-kō-myō-ji-den. ❷一卷 ❸存、續群書類從第九輯 ❹了惠道光(寛元元—Bō-yō-ji-kō-gen-gan-ni-den. 建保二(A. D. 1234)—1320) ❺弘安一〇(A. D. 1287)八月

❻淨土宗大壇林林神奈川縣鎌倉光明寺の開山、淨土宗第三祖記主禪師然阿良忠上人の傳記である。初めに生國の石見なること、家系藤原氏なることを擧げ、託胎の奇瑞、幼時の卓拳を叙し、十四歳の正月元旦「五濁の憂世に生れしは恨みかたし」と多けれども、念佛往生と聞く時は涙てうれしく成りにけり」と詠して念佛せる時、定月法師が君の念佛は時節を知らず、機緣を辨ぜずというたのを聞いて、竊に念ふに無常迅速時を待たず。念佛最要なり、豈に機緣を憚からんや、生者必滅、汝なんぞ黄泉に歸せざらんと心には哀に思ひながらも口にはそれとも言はなかつた。十六歳にて出家、八萬の法門は皆其の機に被るもの、緣ある敎を聞いて解脫せぬものはない、吾は日に稱名するが、その機ではない、即身の敎に歸し、專ら法華を勤修するに如かずと、これより專ら法華の持者となり、また密敎の法を修して俱に瑞夢を得たりしが、竹林寺記の文を讀んで感涙交々流れ、大智薩埵、釋尊祖師の指敎豈に誤らんと、法照を以て異代の師とし、速に淨土に歸し、日唱一萬、出離を往生に期し、受學を顯密に遂し、佛心敎外の旨を訪ひ、法相、華嚴、律等の宗旨を淺宋の律師俊芿に應け、凡そ諸宗の綱目悉く之を得たることを記し、石州多陀寺に在りし時生佛法師の來語に依りて、善導寺の聖光上人が淨土正統の巨匠なるを知り、嘉前三年九月善導寺に至ると、上人は上妻の天福寺に在りとの事に、聖日天福寺にて上人に謁し、垂示を受け、それより聖年七月まで、大師九帖疏、論註、安樂集、要集、選擇集、一乘戒儀、布薩戒等悉く傳受し、七月六日上人より傳燈血脈と手印を授けられ、八月下旬辭去するに際し、懇ろに都鄙遠近に淨敎弘通を囑され、これより中國を經て洛陽に入り、淨念の請に依りて選擇集を講じ、歸洛を約して講演すべき約を爲して、善光寺に詣で、諸國遊歴講席の忙しさに歸洛の契約を忘れ、仁治元年鎌倉に入り、始め吉谷悟眞寺に住して淨土宗を弘めた。執權經時請して法を聞き、戒を受け、血脈を傳へ、歸仰殊に厚く、佐介谷に一字を建て蓮華寺と號したが、後瑞夢によりて光明寺と改めた。寛治二年豫て歸洛の約ありし淨意法師入寂の報に接し、人命の不定に驚き、上洛して淨土三部經及布薩戒を講說し、宗門に歸するものが頗る多かつた。後嵯峨上皇仙洞御所に召し、聞法受戒あり香衣、上人號を賜つた。建長元年鎌倉に歸り光明寺に住し門下の登親、性心、良空、道光、禮阿、寂惠等が各國足を伸ばして化を助け、淨土宗の弘通は實に盛んであつた。武藏の淨國寺、下野善導寺等皆上人を開山とした。東國經廻二十九年、西方の勸化一日も懈らず、其間阿彌陀佛及二菩薩像をつくる四十八、西方變相三十幅、淨土三部經を書寫する三千部、一乘戒本を寫す只十本、九帖疏等を讀する數を知らず、圓頓戒本三十本、高祖傳五十餘卷皆諸淨刹に納め安置した。建治二年秋より洛陽にある間、後宇多天皇宮中に召され、宗義を問ひ給ひ、受戒された。この一年の間に一條の法然寺、三條の十念寺、木幡の高勝寺の三ケ寺が建立され、弘安九年鎌倉に歸られ、聖年入滅された。著書五十餘卷、臨終の勝相、滅後の感夢數項を擧げ、最後に「平生の德行、臨終の勝相、先聞を記錄し、敢て

盡損せず、投覽者信じて疑ふ勿れ。時に弘安第十天南呂下旬候謹疏」と結んである。同一作者の然阿上人傳は本書と大同小異のものである。

⑤貞享二刊 ⑨(正大、一五一六・一三四)

(中谷在輝)

鎌倉宗要見聞 ❶(日)Kama-kura-shu-yō-ken-mon. 浄土宗要集見聞、東宗要見聞 ❷五卷 ❸存、浄土宗全書第一一 ❼(参考) 總浄土依憑章疏目錄

鎌倉宗要玄談 ❶(日)Kama-kura-shu-yō-gen-dan. 浄土宗要集玄談、東宗要玄談 ❷一卷 ❸存 ❹妙瑞(一天明七A. D. 1787)撰 ⑨寫本(正大、一五五三・六六)

鎌倉順禮記 ❶(日)Kama-kura-jun-rei-ki. 順禮鎌倉記、鎌倉遊覽記 ❷一卷 ❸存、國文東方佛教叢書第七、續群書類從第三三 ❹澤庵宗彭(天正元—正保二A. D. 1573—1645)記

⑮澤庵和尚鎌倉之記と同内容のもので、一名を順禮鎌倉記又は鎌倉順禮記と云ひ、鎌倉を遊覽したる紀行ゆゑ鎌倉遊覽記とも稱せられて居る。内容は鎌倉之記に示すが如きものである。但し、續群本には左の如く卷末に記して居る。「以楠山坦齋所寫眞跡之一本校合畢」

(大久保堅璃)

鎌倉淨土宗要集 ❶(日)Kama-kura-jō-shū-yō-shū. 浄土宗要集、東宗要集 ❷五卷 ❸存、浄土宗全書第一一 ❹良忠(正治元—弘安一〇A. D. 1199—1287)述 ⑨寛永一〇刊(龍大、二六八四・八五—八六) 文政二刊(龍大、研究)

鎌倉清規 ❶(日)Kama-kura-shin-gi. ❷一卷 ❸存 ❹無窓疎石(永徳二—延享元A. D. 1383—1744)撰 ❼(参考) 禪籍目錄

鎌倉禪話 ❶(日)Kama-kura-zen-wa. ❷一卷 ❸存 ❹菅原時保著、大内悅賢編 ❺明治四一刊 ⑨(駒大)(京大、一・二五カ・一〇・一・二五カ・一二) ⑩東京民友社

鎌倉殿中問答 ❶(日)Kama-kura-den-chū-mon-dō. 鎌倉殿中問答記錄、鎌倉殿中問答記 ❷一卷 ❸存 ❹日靜(永仁六—應安二A. D. 1298—1369)記 ⑨刊本(立大、A〇五・四—五) ⑩京都村上平樂寺

鎌倉殿中問答記 ❶(日)Kama-kura-den-chū-mon-dō-ki. 鎌倉殿中問答記錄、鎌倉殿中問答 ❷一卷或二卷 ❸存 ❹日靜(永仁六—應安二A. D. 1298—1369)記 ⑨文化一三刊(正大、一八六・一)(龍大、二八一二・四)(哲、え・六・右・五) 寛保元刊(立大、A〇五・六—八)

鎌倉殿中問答記略註 ❶(日)Kama-kura-den-chū-mon-dō-ki-ryaku-chū ❷一卷 ❸存 ❹日靜(永仁六—應安二A. D. 1298—1369)記、日達(延寶二—延享四A. D. 1674—1747)註 ⑨寛保元刊本(聞寺藏版(立大、A〇五・九)(京大、日大未・五五二)(京大、日大未・五五二)(谷大、餘大・三〇六)文化一三刊

鎌倉殿中問答記錄 ❶(日)Kama-kura-den-chū-mon-dō-ki-roku. 鎌倉殿中問答、鎌倉殿中問答記 ❷一卷 ❸存、史籍集覽第二七 ❹日靜(永仁六—應安二(A. D. 1298—1369)記 ⑭文保元應の間、北條高時以下一族等列座して、僧日印と度々法論問答せしを、釋日靜が記錄したものである。「文保二年十二月二十日於長崎入道圓寂息所問答」、「元應元年八月二十三日、九月四日、同五日、同八日、同十五日」の問答を記述してゐる。何れも四箇の格言即ち念佛無間、禪天魔、戒言亡國、律國賊による諸法問題、法華圓經實權問題等に對する問答で、問者は十宗學、北條高時、律師道日等で答者は何れも日印である。奥に「元應元年乙未九月十六日法主聖人門徒釋日靜注之」と記し、更に「附」として、「本國寺第二祖日朗大上人」「本國寺第三祖日印大上人」の項下に各其の傳記を載せてゐる。

⑨文化一三刊(正大、一八六・二)

(紀氏隆眞)

鎌倉之記 ❶(日)Kama-kura-shi. ❷一卷 ❸存、續々群書類從第九、史籍集覽第一七、澤庵和尚全集 ❹澤庵宗彭(天正元—正保二A. D. 1573—1645)記 ⑮寛永十年十一月初め、品川東海寺澤庵宗彭和尚江戸を發足し鎌倉の諸禪刹を巡覽せる時の紀行文である。初に鎌倉五山建立の來由を略述し、社寺名所の巡覽に際しては吟詠せる多數の詩歌を錄し、佛國に澤庵及び供男二人の像を入れて居る。澤庵和尚全集、史籍集覽、續々群書等の鎌倉之記、澤庵廣錄、禪門法語全集等の鎌倉遊覽記、續群書、國文東方佛教叢書等の鎌倉順禮記等は皆た同内容であつて鎌倉之記を順禮鎌倉記とも鎌倉順禮記とも鎌倉遊覽記とも云ふのである。但し、續々群書類從本卷末には左の如き錄があつて、別項の澤庵廣錄の錄と異るものである。「澤庵先師從傳心印、無上妙道、左右逢原、和言漢語、不勞心力、任心所欲、漫顯紙墨、字々句々、不昧宗旨、見者不覺、袖中得珠、嗚呼先師、辭世四十八年、今讀此卷、追懷往事、如同昨夢、仍書卷末、元祿五壬申年二月十四日春澤聖宗晃」、とあり、別に「右澤庵和尚眞墨之寫也」とある。春澤は大德寺二百二世にして元祿七年五月四日(A. D. 1694)八十二歳示寂ゆゑ、大德寺百五十四世たる澤庵宗彭の正保二年十二月十一日(A. D. 1645)には三十三歳である。澤庵の法系は大德寺百〇八世笑嶽宗訢、一凍紹滴、澤庵宗彭である。春澤は笑嶽宗訢、玉室宗珀、玉舟宗璠、春澤宗晃である。從つて此の春澤の錄文にして誤りなくば、和田萬吉博士の「古版地誌解題」に本書を「按ずるに此書澤庵宗彭の自撰に非ず、同僧の鎌倉に遊びし折の吟咏を骨子として好事者の述作せしものなり。」とあるのは再考すべきである。

(大久保堅璃)

鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事 ❶(日)Kama-kura-no-ni-i-no-zen-ni-gyo-shin-no-go-hen-ji. 報鎌倉二品比丘尼書、答鎌倉二位禪尼書 ❸存、黑谷上人語燈錄(和語)之内(大正八三、No. 2511)、浄土宗全書第九黑谷上人語燈錄(和語)之内、和語燈錄第三之内 ❹澤空(長承二—建暦二A. D. 1133—1212)述、(寛元元—元德二A. D. 1243—1330) ❼(参考) 浄土眞宗教典志第一

鎌倉武士と禪 ❶(日)Kama-kura-bu-shi-to-zen. ❷一卷 ❸存 ❹雲尾順敬著 ❺大正五刊 ⑨東京日本學術普及會

鎌倉法語集 ❶(日)Kama-kura-hō-go-shū. ❷一卷 ❸存 ❹然阿良忠(正治元—弘安一〇A. D. 1199—1287)述、隆圓(—文政頃A. D. 1818—1829)—集 ❺文政九刊 ⑨(谷大、宗大・一七〇五)(京大、日大未・六三二)(哲、こ・四・右・三一)

鎌倉遊覽記 ❶(日)Kama-kura-yū-ran-ki. ❷一卷 ❸存、禪門法語集第一、澤庵廣錄 ❹澤庵宗彭(天正元—正保二A. D. 1573—1645)記

⑮澤庵和尚が鎌倉を遊覽した紀行との義より鎌倉遊覽記と稱したもので、鎌倉之記に示すが如き内容である。但し、澤庵廣錄の卷末には左の如き跋があり、續々群書本の跋と幾分の異りを見る。「澤庵先師昔年遊鎌倉金澤。和語漢語。隨心所欲。揮之紙墨。自書一卷。寄示參玄老人。此人依疎漢語加和調。於字左。要讀無勞。落草之深。但不覺其醜。今玆有人向余云。願書卒由於卷末。令先師眞墨知於後世人。仍寫書之。春澤叟宗晃。」とある。

(大久保堅璃)

鎌倉良忠和尚正流布薩大戒之事 ❶(日)Kama-kura-yō-chū-wa-shō-ryū-fu-sa-tsu-dai-kai-no-koto. ❷一卷 ❸存 ❹鑑玄(元和五—元祿一一A. D. 1619—1698)述 ❺安永八寫 ⑨(正大、一五五二・三五二)

神を越えた人間 ❶(日)Kami-o-koe-ta-nin-gen. ❷一卷 ❸存 ❹鵜島敏著 ❺大正一五刊

神谷大僧正略傳 ❶(日)Kami-ya-dai-sō-jō-ryaku-den. ❷一卷 ❸存 ❺大正九刊 ⑨(正大、五一六・二六六) ⑩貢文社

龜山雜錄 ❶(日)Kame-yama-zatsu-roku. ❷一卷 ❸存 ❻寫本(哲、の・八・左・二)

龜山本德寺開基以來之由來書寫 ❶(日)Kame-yama-hon-toku-ji-kai-ki-i-rai-no-yu-rai-kaki-utsushi. ❷一卷 ❸存 ⑨寫本(龍大)

龜山本德寺記錄 ❶(日)Kame-yama-hon-toku-ji-ki-roku. ❷一卷 ❸存 ⑨寫本(龍大、別置)

鴨長明發心集攷 ❶(日)Kamo-no-chō-mei-hos-shin-shū-kō. ❷一卷 ❸存、況齋叢書第一九 ❹岡本孝保(寛政九—明治一一A. D. 1797—1878)述 ⑮安政五年(A. D. 1858)戊午九月十五日況齋の記述せるもので、鴨長明發心集を逐次注解したものである。即ち序文から始めて熟語難解の句を注釋し、第八卷に擧るもので和紙三十三枚である。

⑨(帝國)一八九・二四三)

(紀氏隆眞)

苅萱道心行狀記 ❶(日)Kari-kai-dō-shin-gyō-jō-ki. ❷一卷 ❸存、續帝國文庫第四九佛教各宗續高僧實傳之内 ❹博文館編

川越蓮馨寺志 ❶(日)Kawa-goe-ren-kei-ji-shi. ❷一卷 ❸存、浄土宗全書第二〇 ❹攝門(天明二—天保一〇A. D. 1782—1839)記 ⑮文政二(A. D. 1819)刊

⑮浄土宗十八檀林の一なる埼玉縣川越市蓮馨寺の寺誌である。他の檀林志と同一體裁で、攝門が三緣山志に引續いて編纂したものである。項目を、寺緣榮運、堂宇數柱、尊像畫像、新古什具、歷代法位、門下傳名、大衆起寺、所賜朱章、拾八末寺の九に分つ。寺緣榮運には川越城主大道寺駿河守政繁の母君慈譽上人に歸依し、知行所平方村に孤峯山實池院蓮馨寺を造立し、後永祿元年駿河守城下に一寺を建て、建立寺と名づけ、後見立寺と改め、四方來遊の學徒の爲めに學資を寄せ、慈譽上人永祿六年緣山に轉住、同九年當寺に再住、先に平方に建立せる蓮馨寺を移し、見立寺を兼務し、高澤大蓮寺、清戸長命寺、信濃永島村善導寺、鯛島安養寺、相模大長寺、深谷專念寺を同創した。天正十八年北條氏の滅亡の後、寺領は沒收せられ、僅かに大道寺母堂追福の二十石を殘されたるのみであつたが、觀智國師が慈譽上人は師であり、緣山の十世であり、傳法の流祖であることを述べたので、天正十九年十一月豐公の判物を朱印に成し、下馬札を建てさせられた。堂宇數柱と目次には記すが、本文には伽藍大小と題して、本堂、開山堂、鐘堂の下に銘銘を錄し、地藏堂等の數棟を擧げてゐる。尊像畫像の下に本尊、後門の釋尊三尊、五智如來、開山像、等を記し、什具新古には佛畫、寫經、書幅、金銀の采配、貨及旗竿、開山九條衣、貝葉經、扁額、開山象牙、大道家系譜及家錄書、開基實池院尼筆和歌及手澤本などを擧げ、これは文祿年間の緣山へ提出せる書類で、其後數回の火災で燒失したり。文政二年六月攝門の巡拜の時には大撰なかつたと記してゐる。歷代法位には開山慈譽上人の略傳と其實家山角家系を擧げ、以下歷代の法位と前住地及轉住地を記す。門下傳燈には靜岡華陽院開山眞譽、浄土國寺開山清巖、觀智國師、本所靈山寺開山大超、伯州米子大蓮寺開山扇譽等三十六名を逸ぬ、大衆起寺には乘蓮社圓譽離念が鎌津櫻井谷此原主村安樂寺を再興し、心蓮社聖譽が丹波氷上郡中山に壽經寺、正覺寺を創建し、崇蓮社友譽道山が信州海野願行寺を興隆し、善蓮社傳譽存慶は信州保科村に延命寺を再建し、念蓮社專譽達道は駒込正行寺を開創し、本蓮社圓譽屈源は四十二歳當山に入院し、五十六歳にして鎌倉光明寺に轉じ六十二歳隱居、伊勢山田に閑居せしが六十六歳にて知恩院に詣みたる事蹟を記す。所賜朱章には天正十九年付寛永十三年付號の朱印を擧げ、直末十八の項には川越大蓮寺、見立寺、脇田村西雲寺、平方村馬蹄寺、杉山城恩寺、川越常光寺、原宿西雲寺、小山三福寺、高坂長松寺、銀谷藥師寺、横沼西福寺、大類村浄國寺、さし扇阿彌陀寺、鶴馬村浄國寺、牛沼龍浄寺、清戸長命寺、鯖谷法界寺、大和田町向善寺の略誌を載せてゐる。

(中谷在輝)

河口慧海師將來西藏品目錄

❶(日)Kawa-guchi-e-kai-shi-shō-rai-chi bet-to-bon-moku-roku. ❷1巻 ❸作 ❹(書名)「法華経」

河口慧海請来目録 ❶(日)Kawa-saki-echi-ō-ji-shō-kwann-on-ji-en-gi. ❷1巻 ❸作 ❹(書名)「観音・寺・縁起」

河内交野小松寺縁起 ❶(日)Kawa-chi-kata-no-ko-matsu-dera-en-gi. ❷1巻 ❸作 ❹〔参考〕 大日本史所収金剛山寺縁起

河内観音寺縁起 ❶(日)Kawa-chi-kō-ki-ji-en-gi. ❷1巻 ❸作、大日本史収金剛寺縁起1 ❹正和三(A. D. 1314)

❺内容に河内国石川郡平石村高貴寺縁起并記録とある。この寺は、文武天皇の勅命をもって役の小角開基の由来にして、役公は山に修験の法を修び、後ち修験の宗祖となり、大峰の金剛蔵王菩薩を刻み、本尊に安置し、大峰の山に登り、役行者と称し、修験を興し、朝に入りて日本を教化し、夜ち仙に登りて日本を教化したりと云えり。役の小角の名は仏教的異称を基礎としたるものなり。

年号は、孝謙天皇の天平勝宝元年、聖武天皇の天平感宝元年、同天皇の天平勝宝元年、孝謙天皇の天平勝宝元年、同天皇の天平宝字元年、淳仁天皇の天平宝字七年、同天皇の天平宝字八年、称徳天皇の天平神護元年、同天皇の神護景雲元年、同天皇の宝亀元年、光仁天皇の宝亀十一年、桓武天皇の延暦元年、同天皇の延暦十一年、同天皇の延暦十二年、同天皇の延暦十三年、同天皇の延暦十四年、同天皇の延暦十五年、同天皇の延暦十六年、同天皇の延暦十七年、同天皇の延暦十八年、同天皇の延暦十九年、同天皇の延暦二十年、同天皇の延暦二十一年、同天皇の延暦二十二年、同天皇の延暦二十三年、同天皇の延暦二十四年、同天皇の延暦二十五年、同天皇の延暦二十六年、同天皇の延暦二十七年、同天皇の延暦二十八年、同天皇の延暦二十九年、同天皇の延暦三十年、同天皇の延暦三十一年、同天皇の延暦三十二年、同天皇の延暦三十三年、同天皇の延暦三十四年、同天皇の延暦三十五年、同天皇の延暦三十六年、同天皇の延暦三十七年、同天皇の延暦三十八年、同天皇の延暦三十九年、同天皇の延暦四十年、同天皇の延暦四十一年、同天皇の延暦四十二年、同天皇の延暦四十三年、同天皇の延暦四十四年、同天皇の延暦四十五年、同天皇の延暦四十六年、同天皇の延暦四十七年、同天皇の延暦四十八年、同天皇の延暦四十九年、同天皇の延暦五十年、同天皇の延暦五十一年、同天皇の延暦五十二年、同天皇の延暦五十三年、同天皇の延暦五十四年、同天皇の延暦五十五年、同天皇の延暦五十六年、同天皇の延暦五十七年、同天皇の延暦五十八年、同天皇の延暦五十九年、同天皇の延暦六十年、同天皇の延暦六十一年、同天皇の延暦六十二年、同天皇の延暦六十三年、同天皇の延暦六十四年、同天皇の延暦六十五年、同天皇の延暦六十六年、同天皇の延暦六十七年、同天皇の延暦六十八年、同天皇の延暦六十九年、同天皇の延暦七十年、同天皇の延暦七十一年、同天皇の延暦七十二年、同天皇の延暦七十三年、同天皇の延暦七十四年、同天皇の延暦七十五年、同天皇の延暦七十六年、同天皇の延暦七十七年、同天皇の延暦七十八年、同天皇の延暦七十九年、同天皇の延暦八十年、同天皇の延暦八十一年、同天皇の延暦八十二年、同天皇の延暦八十三年、同天皇の延暦八十四年、同天皇の延暦八十五年、同天皇の延暦八十六年、同天皇の延暦八十七年、同天皇の延暦八十八年、同天皇の延暦八十九年、同天皇の延暦九十年、同天皇の延暦九十一年、同天皇の延暦九十二年、同天皇の延暦九十三年、同天皇の延暦九十四年、同天皇の延暦九十五年、同天皇の延暦九十六年、同天皇の延暦九十七年、同天皇の延暦九十八年、同天皇の延暦九十九年、同天皇の延暦百年、同天皇の延暦百一年、同天皇の延暦百二年、同天皇の延暦百三年、同天皇の延暦百四年、同天皇の延暦百五年、同天皇の延暦百六年、同天皇の延暦百七年、同天皇の延暦百八年、同天皇の延暦百九年、同天皇の延暦百十年、同天皇の延暦百十一年、同天皇の延暦百十二年、同天皇の延暦百十三年、同天皇の延暦百十四年、同天皇の延暦百十五年、同天皇の延暦百十六年、同天皇の延暦百十七年、同天皇の延暦百十八年、同天皇の延暦百十九年、同天皇の延暦百二十年、同天皇の延暦百二十一年、同天皇の延暦百二十二年、同天皇の延暦百二十三年、同天皇の延暦百二十四年、同天皇の延暦百二十五年、同天皇の延暦百二十六年、同天皇の延暦百二十七年、同天皇の延暦百二十八年、同天皇の延暦百二十九年、同天皇の延暦百三十年、同天皇の延暦百三十一年、同天皇の延暦百三十二年、同天皇の延暦百三十三年、同天皇の延暦百三十四年、同天皇の延暦百三十五年、同天皇の延暦百三十六年、同天皇の延暦百三十七年、同天皇の延暦百三十八年、同天皇の延暦百三十九年、同天皇の延暦百四十年、同天皇の延暦百四十一年、同天皇の延暦百四十二年、同天皇の延暦百四十三年、同天皇の延暦百四十四年、同天皇の延暦百四十五年、同天皇の延暦百四十六年、同天皇の延暦百四十七年、同天皇の延暦百四十八年、同天皇の延暦百四十九年、同天皇の延暦百五十年、同天皇の延暦百五十一年、同天皇の延暦百五十二年、同天皇の延暦百五十三年、同天皇の延暦百五十四年、同天皇の延暦百五十五年、同天皇の延暦百五十六年、同天皇の延暦百五十七年、同天皇の延暦百五十八年、同天皇の延暦百五十九年、同天皇の延暦百六十年、同天皇の延暦百六十一年、同天皇の延暦百六十二年、同天皇の延暦百六十三年、同天皇の延暦百六十四年、同天皇の延暦百六十五年、同天皇の延暦百六十六年、同天皇の延暦百六十七年、同天皇の延暦百六十八年、同天皇の延暦百六十九年、同天皇の延暦百七十年、同天皇の延暦百七十一年、同天皇の延暦百七十二年、同天皇の延暦百七十三年、同天皇の延暦百七十四年、同天皇の延暦百七十五年、同天皇の延暦百七十六年、同天皇の延暦百七十七年、同天皇の延暦百七十八年、同天皇の延暦百七十九年、同天皇の延暦百八十年、同天皇の延暦百八十一年、同天皇の延暦百八十二年、同天皇の延暦百八十三年、同天皇の延暦百八十四年、同天皇の延暦百八十五年、同天皇の延暦百八十六年、同天皇の延暦百八十七年、同天皇の延暦百八十八年、同天皇の延暦百八十九年、同天皇の延暦百九十年、同天皇の延暦百九十一年、同天皇の延暦百九十二年、同天皇の延暦百九十三年、同天皇の延暦百九十四年、同天皇の延暦百九十五年、同天皇の延暦百九十六年、同天皇の延暦百九十七年、同天皇の延暦百九十八年、同天皇の延暦百九十九年、同天皇の延暦二百年、同天皇の延暦二百一年、同天皇の延暦二百二年、同天皇の延暦二百三年、同天皇の延暦二百四年、同天皇の延暦二百五年、同天皇の延暦二百六年、同天皇の延暦二百七年、同天皇の延暦二百八年、同天皇の延暦二百九年、同天皇の延暦二百十年、同天皇の延暦二百十一年、同天皇の延暦二百十二年、同天皇の延暦二百十三年、同天皇の延暦二百十四年、同天皇の延暦二百十五年、同天皇の延暦二百十六年、同天皇の延暦二百十七年、同天皇の延暦二百十八年、同天皇の延暦二百十九年、同天皇の延暦二百二十年、同天皇の延暦二百二十一年、同天皇の延暦二百二十二年、同天皇の延暦二百二十三年、同天皇の延暦二百二十四年、同天皇の延暦二百二十五年、同天皇の延暦二百二十六年、同天皇の延暦二百二十七年、同天皇の延暦二百二十八年、同天皇の延暦二百二十九年、同天皇の延暦二百三十年、同天皇の延暦二百三十一年、同天皇の延暦二百三十二年、同天皇の延暦二百三十三年、同天皇の延暦二百三十四年、同天皇の延暦二百三十五年、同天皇の延暦二百三十六年、同天皇の延暦二百三十七年、同天皇の延暦二百三十八年、同天皇の延暦二百三十九年、同天皇の延暦二百四十年、同天皇の延暦二百四十一年、同天皇の延暦二百四十二年、同天皇の延暦二百四十三年、同天皇の延暦二百四十四年、同天皇の延暦二百四十五年、同天皇の延暦二百四十六年、同天皇の延暦二百四十七年、同天皇の延暦二百四十八年、同天皇の延暦二百四十九年、同天皇の延暦二百五十年、同天皇の延暦二百五十一年、同天皇の延暦二百五十二年、同天皇の延暦二百五十三年、同天皇の延暦二百五十四年、同天皇の延暦二百五十五年、同天皇の延暦二百五十六年、同天皇の延暦二百五十七年、同天皇の延暦二百五十八年、同天皇の延暦二百五十九年、同天皇の延暦二百六十年、同天皇の延暦二百六十一年、同天皇の延暦二百六十二年、同天皇の延暦二百六十三年、同天皇の延暦二百六十四年、同天皇の延暦二百六十五年、同天皇の延暦二百六十六年、同天皇の延暦二百六十七年、同天皇の延暦二百六十八年、同天皇の延暦二百六十九年、同天皇の延暦二百七十年、同天皇の延暦二百七十一年、同天皇の延暦二百七十二年、同天皇の延暦二百七十三年、同天皇の延暦二百七十四年、同天皇の延暦二百七十五年、同天皇の延暦二百七十六年、同天皇の延暦二百七十七年、同天皇の延暦二百七十八年、同天皇の延暦二百七十九年、同天皇の延暦二百八十年、同天皇の延暦二百八十一年、同天皇の延暦二百八十二年、同天皇の延暦二百八十三年、同天皇の延暦二百八十四年、同天皇の延暦二百八十五年、同天皇の延暦二百八十六年、同天皇の延暦二百八十七年、同天皇の延暦二百八十八年、同天皇の延暦二百八十九年、同天皇の延暦二百九十年、同天皇の延暦二百九十一年、同天皇の延暦二百九十二年、同天皇の延暦二百九十三年、同天皇の延暦二百九十四年、同天皇の延暦二百九十五年、同天皇の延暦二百九十六年、同天皇の延暦二百九十七年、同天皇の延暦二百九十八年、同天皇の延暦二百九十九年、同天皇の延暦三百年、同天皇の延暦三百一年、同天皇の延暦三百二年、同天皇の延暦三百三年、同天皇の延暦三百四年、同天皇の延暦三百五年、同天皇の延暦三百六年、同天皇の延暦三百七年、同天皇の延暦三百八年、同天皇の延暦三百九年、同天皇の延暦三百十年、同天皇の延暦三百十一年、同天皇の延暦三百十二年、同天皇の延暦三百十三年、同天皇の延暦三百十四年、同天皇の延暦三百十五年、同天皇の延暦三百十六年、同天皇の延暦三百十七年、同天皇の延暦三百十八年、同天皇の延暦三百十九年、同天皇の延暦三百二十年、同天皇の延暦三百二十一年、同天皇の延暦三百二十二年、同天皇の延暦三百二十三年、同天皇の延暦三百二十四年、同天皇の延暦三百二十五年、同天皇の延暦三百二十六年、同天皇の延暦三百二十七年、同天皇の延暦三百二十八年、同天皇の延暦三百二十九年、同天皇の延暦三百三十年、同天皇の延暦三百三十一年、同天皇の延暦三百三十二年、同天皇の延暦三百三十三年、同天皇の延暦三百三十四年、同天皇の延暦三百三十五年、同天皇の延暦三百三十六年、同天皇の延暦三百三十七年、同天皇の延暦三百三十八年、同天皇の延暦三百三十九年、同天皇の延暦三百四十年、同天皇の延暦三百四十一年、同天皇の延暦三百四十二年、同天皇の延暦三百四十三年、同天皇の延暦三百四十四年、同天皇の延暦三百四十五年、同天皇の延暦三百四十六年、同天皇の延暦三百四十七年、同天皇の延暦三百四十八年、同天皇の延暦三百四十九年、同天皇の延暦三百五十年、同天皇の延暦三百五十一年、同天皇の延暦三百五十二年、同天皇の延暦三百五十三年、同天皇の延暦三百五十四年、同天皇の延暦三百五十五年、同天皇の延暦三百五十六年、同天皇の延暦三百五十七年、同天皇の延暦三百五十八年、同天皇の延暦三百五十九年、同天皇の延暦三百六十年、同天皇の延暦三百六十一年、同天皇の延暦三百六十二年、同天皇の延暦三百六十三年、同天皇の延暦三百六十四年、同天皇の延暦三百六十五年、同天皇の延暦三百六十六年、同天皇の延暦三百六十七年、同天皇の延暦三百六十八年、同天皇の延暦三百六十九年、同天皇の延暦三百七十年、同天皇の延暦三百七十一年、同天皇の延暦三百七十二年、同天皇の延暦三百七十三年、同天皇の延暦三百七十四年、同天皇の延暦三百七十五年、同天皇の延暦三百七十六年、同天皇の延暦三百七十七年、同天皇の延暦三百七十八年、同天皇の延暦三百七十九年、同天皇の延暦三百八十年、同天皇の延暦三百八十一年、同天皇の延暦三百八十二年、同天皇の延暦三百八十三年、同天皇の延暦三百八十四年、同天皇の延暦三百八十五年、同天皇の延暦三百八十六年、同天皇の延暦三百八十七年、同天皇の延暦三百八十八年、同天皇の延暦三百八十九年、同天皇の延暦三百九十年、同天皇の延暦三百九十一年、同天皇の延暦三百九十二年、同天皇の延暦三百九十三年、同天皇の延暦三百九十四年、同天皇の延暦三百九十五年、同天皇の延暦三百九十六年、同天皇の延暦三百九十七年、同天皇の延暦三百九十八年、同天皇の延暦三百九十九年、同天皇の延暦四百年、同天皇の延暦四百一年、同天皇の延暦四百二年、同天皇の延暦四百三年、同天皇の延暦四百四年、同天皇の延暦四百五年、同天皇の延暦四百六年、同天皇の延暦四百七年、同天皇の延暦四百八年、同天皇の延暦四百九年、同天皇の延暦四百十年、同天皇の延暦四百十一年、同天皇の延暦四百十二年、同天皇の延暦四百十三年、同天皇の延暦四百十四年、同天皇の延暦四百十五年、同天皇の延暦四百十六年、同天皇の延暦四百十七年、同天皇の延暦四百十八年、同天皇の延暦四百十九年、同天皇の延暦四百二十年、同天皇の延暦四百二十一年、同天皇の延暦四百二十二年、同天皇の延暦四百二十三年、同天皇の延暦四百二十四年、同天皇の延暦四百二十五年、同天皇の延暦四百二十六年、同天皇の延暦四百二十七年、同天皇の延暦四百二十八年、同天皇の延暦四百二十九年、同天皇の延暦四百三十年、同天皇の延暦四百三十一年、同天皇の延暦四百三十二年、同天皇の延暦四百三十三年、同天皇の延暦四百三十四年、同天皇の延暦四百三十五年、同天皇の延暦四百三十六年、同天皇の延暦四百三十七年、同天皇の延暦四百三十八年、同天皇の延暦四百三十九年、同天皇の延暦四百四十年、同天皇の延暦四百四十一年、同天皇の延暦四百四十二年、同天皇の延暦四百四十三年、同天皇の延暦四百四十四年、同天皇の延暦四百四十五年、同天皇の延暦四百四十六年、同天皇の延暦四百四十七年、同天皇の延暦四百四十八年、同天皇の延暦四百四十九年、同天皇の延暦四百五十年、同天皇の延暦四百五十一年、同天皇の延暦四百五十二年、同天皇の延暦四百五十三年、同天皇の延暦四百五十四年、同天皇の延暦四百五十五年、同天皇の延暦四百五十六年、同天皇の延暦四百五十七年、同天皇の延暦四百五十八年、同天皇の延暦四百五十九年、同天皇の延暦四百六十年、同天皇の延暦四百六十一年、同天皇の延暦四百六十二年、同天皇の延暦四百六十三年、同天皇の延暦四百六十四年、同天皇の延暦四百六十五年、同天皇の延暦四百六十六年、同天皇の延暦四百六十七年、同天皇の延暦四百六十八年、同天皇の延暦四百六十九年、同天皇の延暦四百七十年、同天皇の延暦四百七十一年、同天皇の延暦四百七十二年、同天皇の延暦四百七十三年、同天皇の延暦四百七十四年、同天皇の延暦四百七十五年、同天皇の延暦四百七十六年、同天皇の延暦四百七十七年、同天皇の延暦四百七十八年、同天皇の延暦四百七十九年、同天皇の延暦四百八十年、同天皇の延暦四百八十一年、同天皇の延暦四百八十二年、同天皇の延暦四百八十三年、同天皇の延暦四百八十四年、同天皇の延暦四百八十五年、同天皇の延暦四百八十六年、同天皇の延暦四百八十七年、同天皇の延暦四百八十八年、同天皇の延暦四百八十九年、同天皇の延暦四百九十年、同天皇の延暦四百九十一年、同天皇の延暦四百九十二年、同天皇の延暦四百九十三年、同天皇の延暦四百九十四年、同天皇の延暦四百九十五年、同天皇の延暦四百九十六年、同天皇の延暦四百九十七年、同天皇の延暦四百九十八年、同天皇の延暦四百九十九年、同天皇の延暦五百年、同天皇の延暦五百一年、同天皇の延暦五百二年、同天皇の延暦五百三年、同天皇の延暦五百四年、同天皇の延暦五百五年、同天皇の延暦五百六年、同天皇の延暦五百七年、同天皇の延暦五百八年、同天皇の延暦五百九年、同天皇の延暦五百十年、同天皇の延暦五百十一年、同天皇の延暦五百十二年、同天皇の延暦五百十三年、同天皇の延暦五百十四年、同天皇の延暦五百十五年、同天皇の延暦五百十六年、同天皇の延暦五百十七年、同天皇の延暦五百十八年、同天皇の延暦五百十九年、同天皇の延暦五百二十年、同天皇の延暦五百二十一年、同天皇の延暦五百二十二年、同天皇の延暦五百二十三年、同天皇の延暦五百二十四年、同天皇の延暦五百二十五年、同天皇の延暦五百二十六年、同天皇の延暦五百二十七年、同天皇の延暦五百二十八年、同天皇の延暦五百二十九年、同天皇の延暦五百三十年、同天皇の延暦五百三十一年、同天皇の延暦五百三十二年、同天皇の延暦五百三十三年、同天皇の延暦五百三十四年、同天皇の延暦五百三十五年、同天皇の延暦五百三十六年、同天皇の延暦五百三十七年、同天皇の延暦五百三十八年、同天皇の延暦五百三十九年、同天皇の延暦五百四十年、同天皇の延暦五百四十一年、同天皇の延暦五百四十二年、同天皇の延暦五百四十三年、同天皇の延暦五百四十四年、同天皇の延暦五百四十五年、同天皇の延暦五百四十六年、同天皇の延暦五百四十七年、同天皇の延暦五百四十八年、同天皇の延暦五百四十九年、同天皇の延暦五百五十年、同天皇の延暦五百五十一年、同天皇の延暦五百五十二年、同天皇の延暦五百五十三年、同天皇の延暦五百五十四年、同天皇の延暦五百五十五年、同天皇の延暦五百五十六年、同天皇の延暦五百五十七年、同天皇の延暦五百五十八年、同天皇の延暦五百五十九年、同天皇の延暦五百六十年、同天皇の延暦五百六十一年、同天皇の延暦五百六十二年、同天皇の延暦五百六十三年、同天皇の延暦五百六十四年、同天皇の延暦五百六十五年、同天皇の延暦五百六十六年、同天皇の延暦五百六十七年、同天皇の延暦五百六十八年、同天皇の延暦五百六十九年、同天皇の延暦五百七十年、同天皇の延暦五百七十一年、同天皇の延暦五百七十二年、同天皇の延暦五百七十三年、同天皇の延暦五百七十四年、同天皇の延暦五百七十五年、同天皇の延暦五百七十六年、同天皇の延暦五百七十七年、同天皇の延暦五百七十八年、同天皇の延暦五百七十九年、同天皇の延暦五百八十年、同天皇の延暦五百八十一年、同天皇の延暦五百八十二年、同天皇の延暦五百八十三年、同天皇の延暦五百八十四年、同天皇の延暦五百八十五年、同天皇の延暦五百八十六年、同天皇の延暦五百八十七年、同天皇の延暦五百八十八年、同天皇の延暦五百八十九年、同天皇の延暦五百九十年、同天皇の延暦五百九十一年、同天皇の延暦五百九十二年、同天皇の延暦五百九十三年、同天皇の延暦五百九十四年、同天皇の延暦五百九十五年、同天皇の延暦五百九十六年、同天皇の延暦五百九十七年、同天皇の延暦五百九十八年、同天皇の延暦五百九十九年、同天皇の延暦六百年、同天皇の延暦六百一年、同天皇の延暦六百二年、同天皇の延暦六百三年、同天皇の延暦六百四年、同天皇の延暦六百五年、同天皇の延暦六百六年、同天皇の延暦六百七年、同天皇の延暦六百八年、同天皇の延暦六百九年、同天皇の延暦六百十年、同天皇の延暦六百十一年、同天皇の延暦六百十二年、同天皇の延暦六百十三年、同天皇の延暦六百十四年、同天皇の延暦六百十五年、同天皇の延暦六百十六年、同天皇の延暦六百十七年、同天皇の延暦六百十八年、同天皇の延暦六百十九年、同天皇の延暦六百二十年、同天皇の延暦六百二十一年、同天皇の延暦六百二十二年、同天皇の延暦六百二十三年、同天皇の延暦六百二十四年、同天皇の延暦六百二十五年、同天皇の延暦六百二十六年、同天皇の延暦六百二十七年、同天皇の延暦六百二十八年、同天皇の延暦六百二十九年、同天皇の延暦六百三十年、同天皇の延暦六百三十一年、同天皇の延暦六百三十二年、同天皇の延暦六百三十三年、同天皇の延暦六百三十四年、同天皇の延暦六百三十五年、同天皇の延暦六百三十六年、同天皇の延暦六百三十七年、同天皇の延暦六百三十八年、同天皇の延暦六百三十九年、同天皇の延暦六百四十年、同天皇の延暦六百四十一年、同天皇の延暦六百四十二年、同天皇の延暦六百四十三年、同天皇の延暦六百四十四年、同天皇の延暦六百四十五年、同天皇の延暦六百四十六年、同天皇の延暦六百四十七年、同天皇の延暦六百四十八年、同天皇の延暦六百四十九年、同天皇の延暦六百五十年、同天皇の延暦六百五十一年、同天皇の延暦六百五十二年、同天皇の延暦六百五十三年、同天皇の延暦六百五十四年、同天皇の延暦六百五十五年、同天皇の延暦六百五十六年、同天皇の延暦六百五十七年、同天皇の延暦六百五十八年、同天皇の延暦六百五十九年、同天皇の延暦六百六十年、同天皇の延暦六百六十一年、同天皇の延暦六百六十二年、同天皇の延暦六百六十三年、同天皇の延暦六百六十四年、同天皇の延暦六百六十五年、同天皇の延暦六百六十六年、同天皇の延暦六百六十七年、同天皇の延暦六百六十八年、同天皇の延暦六百六十九年、同天皇の延暦六百七十年、同天皇の延暦六百七十一年、同天皇の延暦六百七十二年、同天皇の延暦六百七十三年、同天皇の延暦六百七十四年、同天皇の延暦六百七十五年、同天皇の延暦六百七十六年、同天皇の延暦六百七十七年、同天皇の延暦六百七十八年、同天皇の延暦六百七十九年、同天皇の延暦六百八十年、同天皇の延暦六百八十一年、同天皇の延暦六百八十二年、同天皇の延暦六百八十三年、同天皇の延暦六百八十四年、同天皇の延暦六百八十五年、同天皇の延暦六百八十六年、同天皇の延暦六百八十七年、同天皇の延暦六百八十八年、同天皇の延暦六百八十九年、同天皇の延暦六百九十年、同天皇の延暦六百九十一年、同天皇の延暦六百九十二年、同天皇の延暦六百九十三年、同天皇の延暦六百九十四年、同天皇の延暦六百九十五年、同天皇の延暦六百九十六年、同天皇の延暦六百九十七年、同天皇の延暦六百九十八年、同天皇の延暦六百九十九年、同天皇の延暦七百年、同天皇の延暦七百一年、同天皇の延暦七百二年、同天皇の延暦七百三年、同天皇の延暦七百四年、同天皇の延暦七百五年、同天皇の延暦七百六年、同天皇の延暦七百七年、同天皇の延暦七百八年、同天皇の延暦七百九年、同天皇の延暦七百十年、同天皇の延暦七百十一年、同天皇の延暦七百十二年、同天皇の延暦七百十三年、同天皇の延暦七百十四年、同天皇の延暦七百十五年、同天皇の延暦七百十六年、同天皇の延暦七百十七年、同天皇の延暦七百十八年、同天皇の延暦七百十九年、同天皇の延暦七百二十年、同天皇の延暦七百二十一年、同天皇の延暦七百二十二年、同天皇の延暦七百二十三年、同天皇の延暦七百二十四年、同天皇の延暦七百二十五年、同天皇の延暦七百二十六年、同天皇の延暦七百二十七年、同天皇の延暦七百二十八年、同天皇の延暦七百二十九年、同天皇の延暦七百三十年、同天皇の延暦七百三十一年、同天皇の延暦七百三十二年、同天皇の延暦七百三十三年、同天皇の延暦七百三十四年、同天皇の延暦七百三十五年、同天皇の延暦七百三十六年、同天皇の延暦七百三十七年、同天皇の延暦七百三十八年、同天皇の延暦七百三十九年、同天皇の延暦七百四十年、同天皇の延暦七百四十一年、同天皇の延暦七百四十二年、同天皇の延暦七百四十三年、同天皇の延暦七百四十四年、同天皇の延暦七百四十五年、同天皇の延暦七百四十六年、同天皇の延暦七百四十七年、同天皇の延暦七百四十八年、同天皇の延暦七百四十九年、同天皇の延暦七百五十年、同天皇の延暦七百五十一年、同天皇の延暦七百五十二年、同天皇の延暦七百五十三年、同天皇の延暦七百五十四年、同天皇の延暦七百五十五年、同天皇の延暦七百五十六年、同天皇の延暦七百五十七年、同天皇の延暦七百五十八年、同天皇の延暦七百五十九年、同天皇の延暦七百六十年、同天皇の延暦七百六十一年、同天皇の延暦七百六十二年、同天皇の延暦七百六十三年、同天皇の延暦七百六十四年、同天皇の延暦七百六十五年、同天皇の延暦七百六十六年、同天皇の延暦七百六十七年、同天皇の延暦七百六十八年、同天皇の延暦七百六十九年、同天皇の延暦七百七十年、同天皇の延暦七百七十一年、同天皇の延暦七百七十二年、同天皇の延暦七百七十三年、同天皇の延暦七百七十四年、同天皇の延暦七百七十五年、同天皇の延暦七百七十六年、同天皇の延暦七百七十七年、同天皇の延暦七百七十八年、同天皇の延暦七百七十九年、同天皇の延暦七百八十年、同天皇の延暦七百八十一年、同天皇の延暦七百八十二年、同天皇の延暦七百八十三年、同天皇の延暦七百八十四年、同天皇の延暦七百八十五年、同天皇の延暦七百八十六年、同天皇の延暦七百八十七年、同天皇の延暦七百八十八年、同天皇の延暦七百八十九年、同天皇の延暦七百九十年、同天皇の延暦七百九十一年、同天皇の延暦七百九十二年、同天皇の延暦七百九十三年、同天皇の延暦七百九十四年、同天皇の延暦七百九十五年、同天皇の延暦七百九十六年、同天皇の延暦七百九十七年、同天皇の延暦七百九十八年、同天皇の延暦七百九十九年、同天皇の延暦八百年、同天皇の延暦八百一年、同天皇の延暦八百二年、同天皇の延暦八百三年、同天皇の延暦八百四年、同天皇の延暦八百五年、同天皇の延暦八百六年、同天皇の延暦八百七年、同天皇の延暦八百八年、同天皇の延暦八百九年、同天皇の延暦八百十年、同天皇の延暦八百十一年、同天皇の延暦八百十二年、同天皇の延暦八百十三年、同天皇の延暦八百十四年、同天皇の延暦八百十五年、同天皇の延暦八百十六年、同天皇の延暦八百十七年、同天皇の延暦八百十八年、同天皇の延暦八百十九年、同天皇の延暦八百二十年、同天皇の延暦八百二十一年、同天皇の延暦八百二十二年、同天皇の延暦八百二十三年、同天皇の延暦八百二十四年、同天皇の延暦八百二十五年、同天皇の延暦八百二十六年、同天皇の延暦八百二十七年、同天皇の延暦八百二十八年、同天皇の延暦八百二十九年、同天皇の延暦八百三十年、同天皇の延暦八百三十一年、同天皇の延暦八百三十二年、同天皇の延暦八百三十三年、同天皇の延暦八百三十四年、同天皇の延暦八百三十五年、同天皇の延暦八百三十六年、同天皇の延暦八百三十七年、同天皇の延暦八百三十八年、同天皇の延暦八百三十九年、同天皇の延暦八百四十年、同天皇の延暦八百四十一年、同天皇の延暦八百四十二年、同天皇の延暦八百四十三年、同天皇の延暦八百四十四年、同天皇の延暦八百四十五年、同天皇の延暦八百四十六年、同天皇の延暦八百四十七年、同天皇の延暦八百四十八年、同天皇の延暦八百四十九年、同天皇の延暦八百五十年、同天皇の延暦八百五十一年、同天皇の延暦八百五十二年、同天皇の延暦八百五十三年、同天皇の延暦八百五十四年、同天皇の延暦八百五十五年、同天皇の延暦八百五十六年、同天皇の延暦八百五十七年、同天皇の延暦八百五十八年、同天皇の延暦八百五十九年、同天皇の延暦八百六十年、同天皇の延暦八百六十一年、同天皇の延暦八百六十二年、同天皇の延暦八百六十三年、同天皇の延暦八百六十四年、同天皇の延暦八百六十五年、同天皇の延暦八百六十六年、同天皇の延暦八百六十七年、同天皇の延暦八百六十八年、同天皇の延暦八百六十九年、同天皇の延暦八百七十年、同天皇の延暦八百七十一年、同天皇の延暦八百七十二年、同天皇の延暦八百七十三年、同天皇の延暦八百七十四年、同天皇の延暦八百七十五年、同天皇の延暦八百七十六年、同天皇の延暦八百七十七年、同天皇の延暦八百七十八年、同天皇の延暦八百七十九年、同天皇の延暦八百八十年、同天皇の延暦八百八十一年、同天皇の延暦八百八十二年、同天皇の延暦八百八十三年、同天皇の延暦八百八十四年、同天皇の延暦八百八十五年、同天皇の延暦八百八十六年、同天皇の延暦八百八十七年、同天皇の延暦八百八十八年、同天皇の延暦八百八十九年、同天皇の延暦八百九十年、同天皇の延暦八百九十一年、同天皇の延暦八百九十二年、同天皇の延暦八百九十三年、同天皇の延暦八百九十四年、同天皇の延暦八百九十五年、同天皇の延暦八百九十六年、同天皇の延暦八百九十七年、同天皇の延暦八百九十八年、同天皇の延暦八百九十九年、同天皇の延暦九百年、同天皇の延暦九百一年、同天皇の延暦九百二年、同天皇の延暦九百三年、同天皇の延暦九百四年、同天皇の延暦九百五年、同天皇の延暦九百六年、同天皇の延暦九百七年、同天皇の延暦九百八年、同天皇の延暦九百九年、同天皇の延暦九百十年、同天皇の延暦九百十一年、同天皇の延暦九百十二年、同天皇の延暦九百十三年、同天皇の延暦九百十四年、同天皇の延暦九百十五年、同天皇の延暦九百十六年、同天皇の延暦九百十七年、同天皇の延暦九百十八年、同天皇の延暦九百十九年、同天皇の延暦九百二十年、同天皇の延暦九百二十一年、同天皇の延暦九百二十二年、同天皇の延暦九百二十三年、同天皇の延暦九百二十四年、同天皇の延暦九百二十五年、同天皇の延暦九百二十六年、同天皇の延暦九百二十七年、同天皇の延暦九百二十八年、同天皇の延暦九百二十九年、同天皇の延暦九百三十年、同天皇の延暦九百三十一年、同天皇の延暦九百三十二年、同天皇の延暦九百三十三年、同天皇の延暦九百三十四年、同天皇の延暦九百三十五年、同天皇の延暦九百三十六年、同天皇の延暦九百三十七年、同天皇の延暦九百三十八年、同天皇の延暦九百三十九年、同天皇の延暦九百四十年、同天皇の延暦九百四十一年、同天皇の延暦九百四十二年、同天皇の延暦九百四十三年、同天皇の延暦九百四十四年、同天皇の延暦九百四十五年、同天皇の延暦九百四十六年、同天皇の延暦九百四十七年、同天皇の延暦九百四十八年、同天皇の延暦九百四十九年、同天皇の延暦九百五十年、同天皇の延暦九百五十一年、同天皇の延暦九百五十二年、同天皇の延暦九百五十三年、同天皇の延暦九百五十四年、同天皇の延暦九百五十五年、同天皇の延暦九百五十六年、同天皇の延暦九百五十七年、同天皇の延暦九百五十八年、同天皇の延暦九百五十九年、同天皇の延暦九百六十年、同天皇の延暦九百六十一年、同天皇の延暦九百六十二年、同天皇の延暦九百六十三年、同天皇の延暦九百六十四年、同天皇の延暦九百六十五年、同天皇の延暦九百六十六年、同天皇の延暦九百六十七年、同天皇の延暦九百六十八年、同天皇の延暦九百六十九年、同天皇の延暦九百七十年、同天皇の延暦九百七十一年、同天皇の延暦九百七十二年、同天皇の延暦九百七十三年、同天皇の延暦九百七十四年、同天皇の延暦九百七十五年、同天皇の延暦九百七十六年、同天皇の延暦九百七十七年、同天皇の延暦九百七十八年、同天皇の延暦九百七十九年、同天皇の延暦九百八十年、同天皇の延暦九百八十一年、同天皇の延暦九百八十二年、同天皇の延暦九百八十三年、同天皇の延暦九百八十四年、同天皇の延暦九百八十五年、同天皇の延暦九百八十六年、同天皇の延暦九百八十七年、同天皇の延暦九百八十八年、同天皇の延暦九百八十九年、同天皇の延暦九百九十年、同天皇の延暦九百九十一年、同天皇の延暦九百九十二年、同天皇の延暦九百九十三年、同天皇の延暦九百九十四年、同天皇の延暦九百九十五年、同天皇の延暦九百九十六年、同天皇の延暦九百九十七年、同天皇の延暦九百九十八年、同天皇の延暦九百九十九年、同天皇の延暦千年、同天皇の延暦千一年、同天皇の延暦千二年、同天皇の延暦千三年、同天皇の延暦千四年、同天皇の延暦千五年、同天皇の延暦千六年、同天皇の延暦千七年、同天皇の延暦千八年、同天皇の延暦千九年、同天皇の延暦千十年、同天皇の延暦千十一年、同天皇の延暦千十二年、同天皇の延暦千十三年、同天皇の延暦千十四年、同天皇の延暦千十五年、同天皇の延暦千十六年、同天皇の延暦千十七年、同天皇の延暦千十八年、同天皇の延暦千十九年、同天皇の延暦千二十年、同天皇の延暦千二十一年、同天皇の延暦千二十二年、同天皇の延暦千二十三年、同天皇の延暦千二十四年、同天皇の延暦千二十五年、同天皇の延暦千二十六年、同天皇の延暦千二十七年、同天皇の延暦千二十八年、同天皇の延暦千二十九年、同天皇の延暦千三十年、同天皇の延暦千三十一年、同天皇の延暦千三十二年、同天皇の延暦千三十三年、同天皇の延暦千三十四年、同天皇の延暦千三十五年、同天皇の延暦千三十六年、同天皇の延暦千三十七年、同天皇の延暦千三十八年、同天皇の延暦千三十九年、同天皇の延暦千四十年、同天皇の延暦千四十一年、同天皇の延暦千四十二年、同天皇の延暦千四十三年、同天皇の延暦千四十四年、同天皇の延暦千四十五年、同天皇の延暦千四十六年、同天皇の延暦千四十七年、同天皇の延暦千四十八年、同天皇の延暦千四十九年、同天皇の延暦千五十年、同天皇の延暦千五十一年、同天皇の延暦千五十二年、同天皇の延暦千五十三年、同天皇の延暦千五十四年、同天皇の延暦千五十五年、同天皇の延暦千五十六年、同天皇の延暦千五十七年、同天皇の延暦千五十八年、同天皇の延暦千五十九年、同天皇の延暦千六十年、同天皇の延暦千六十一年、同天皇の延暦千六十二年、同天皇の延暦千六十三年、同天皇の延暦千六十四年、同天皇の延暦千六十五年、同天皇の延暦千六十六年、同天皇の延暦千六十七年、同天皇の延暦千六十八年、同天皇の延暦千六十九年、同天皇の延暦千七十年、同天皇の延暦千七十一年、同天皇の延暦千七十二年、同天皇の延暦千七十三年、同天皇の延暦千七十四年、同天皇の延暦千七十五年、同天皇の延暦千七十六年、同天皇の延暦千七十七年、同天皇の延暦千七十八年、同天皇の延暦千七十九年、同天皇の延暦千八十

（龍大、別置×谷大、宗丙・五七）（杉紫朗）

肝要鈔 ❶(B)Kana-yō-shō. ❷一卷 ❸存、假名聖教（惠空筆寫八八部）之内 ❹寫本（谷大、宗丙・四八）

肝要鈔 ❶(B)Kana-yō-shō. ❷二卷 ❸存 ❹寛信（應德元―仁平三 A.D. 1084―1153 一説作仁平二頃）撰 ❺（参考）諸宗章疏錄第三 ❻建治四寫 ❼（高大、寄・一・六六）

肝要條 ❶(B)Kana-yō-jō. ❷一卷 ❸存 ❹元祿三刊 ❺（龍大、一一三・七〇）

肝臨鈔 ❶(B)Kan-rin-shō. ❷一卷 ❸存 ❹西院流傳法灌頂三昧耶戒の口決。

旱霖集 ❶(B)Kan-rin-shū. ❷一卷 ❸存、續群書類從第一二、五山文學全集第一 ❹夢巖祖應（―應安七 A.D. 1374）作、通量編

❺東福寺四十世大智圓應禪師夢巖祖應和尚の詩文集である。師は博學宏辯、詩にも秀で、詩文を以て中岩圓月と共に當時に鳴り、太岳周崇、東海健易、大愚性智、岐陽方秀、惟肖得巖等の諸英俊も其の門下に出でた。敕むる所、楚辭四、古詩（五・六・七言）三十三、律詩（五言）六、律詩（七言）六十九、疏二十六、序七、跋四、字說二十二、銘六、祭文十一、雜著二、行狀一、である。祭文には大道、越山、藏叟、月菴、撤桂、眼筠、月海等を祭る文があり、行狀は虎關師錬和尚傳である。

❻（参考） 扶桑禪林書目 （大久保堅璃）

邯鄲市上昨非談 ❶(B) Kan-tan-shi-jō-saku-hi-dan. ❷一卷 ❸赤松光映著 ❹明治二二刊 ❺（正大、一三九・四三）

卷荷遺香 ❶(B)Kwan-ka-i-kō. ❷一卷 ❸存、眞宗全書第七三 ❹隆性（―文政二 A.D. 1819）記

❺詩集、著者の義弟玄公の編纂にかゝる。春夏秋冬の四季の部及雜部に分ち總じて約五百首に及ぶ、林常快道を笑弔する一首の如き以て著者の識見を窺ふに足る。（大原性實）

卷數 ❶(B)Kwan-su. ❷一卷 ❸存 ❹大日本佛教全書第五一 覺禪鈔第七之内 ❺覺禪（康治二―詩永元後 A.D. 1143―1182）撰 ❻寫本（谷大、餘大・二一二）

卷數書據 ❶(B)Kwan-sū-kaki-yo. ❷一帖 ❸存 ❹宗朝撰

卷數集 ❶(B)Kwan-su-shū. ❷二軸 ❸存 ❹良意記 ❺（高大、寄・一〇六六）

卷數鈔 ❶(B) Kwan-su-shō. ❷一卷 ❸存 ❹宥快（貞和元―應永二三 A.D. 1345―1416）撰 ❺延寶九刊（京大、一・二六カ・七）足利時代寫（寶龜院×（龍大、研佛）×晉ケ・五・有・二二六）寫本（谷大、餘大・一九一四）（高大、寄・一・七二）

卷數目錄 ❶(B) Kwan-su-mokuroku. ❷一卷 ❸存 ❹宥快（貞和元―應永二三 A.D. 1345―1416）撰 ❺（正大、一四〇・一五）

卷頭讃記 ❶(B)Kwan-tō-san-ki. ❷一卷 ❸存、十二部雜纂之内 ❹（龍大、一〇三・八）

卷頭讃辨義 ❶(B) Kwan-tō-san-ben-gi. ❷一卷 ❸存、十四部雜纂之内 ❹（龍大、一〇三・七）

應官司問辨明宗意書 ❶(B) Kwan-kō-shi-mon-ben-mei-shū-i-sho. ❷一卷 ❸存 ❹僧曇記 ❺天明二（A.D. 1782） ❻（参考）

淨土眞宗教典志第二

官符等編年雜集 ❶(B)Kwan-fu-tō-hen-nen-zō-shū. ❷一卷 ❸存、弘法大師全集第一五 ❹長谷寶秀編 ❺明治四三（A.D. 1910）十月

❻弘法大師全集刊行にあたり、弘法大師及びその弟子に關係ある官符、上表文等を類聚國史、三代實錄、類聚三代格、東寺要集、東寶記、弘法大師年譜、續弘法大師年譜等から抄出し年次に順ひて纂集したもの。延喜二十一年勅旨大師號の時までを限として、請令僧空海入唐留學表から延喜十八年勅令三十帖策子目錄、延喜十九年の三十帖策子勅文に至る百三十四篇を收めてある。大正十二年弘法大師全集再版の時、被許得度官符等十六篇が增補せられた。目次左の如くである。

（一）請令僧空海入唐留學表。（二）篇大師下筑紫觀音寺官符、大同二年四月二十九日。（三）被免課役官符、大同三年六月十九日。（四）篇令大師住京寺下和泉國司官符、大同四年七月十六日。（五）特免淸水寺不加破壞天下諸寺修治東西二寺之例勅書、弘仁元年十月五日。（六）補大師乙訓寺別當官符、弘仁二年十一月九日。（七）嵯峨天皇以墾田若干施入東寺御起請符文、弘仁三年十一月二十七日。（八）御手印緣起。（九）讃岐國司欽令大師築萬農池別當請官裁狀、弘仁十二年四月。（一〇）同裁許官符。（一一）置定額僧五十口於東寺官符、弘仁十四年十月十日。（一二）同官符、弘仁十四年十二月二日。（一三）補大師造東寺別當官符、天長元年六月六日。（一四）應改寫年料經官符、天長元年九月二十二日。（一五）應以神願寺替高雄寺爲定額并定得度經業等官符、天長元年九月二十七日。（一六）高雄寺最初定額僧交名（一七）爲東寺每年安居令請守護經下僧綱所官符、天長二年四月八日。（一八）高野大師御談議（一九）爲東寺塔材伐稻荷神社神木聚射不豫授同社從五位下位田詔、天長四年正月十九日。（二〇）令諸寺修文殊會官符、天長五年二月二十五日。（二一）補大師大安寺別當官符、天長六年十一月五日。（二二）應以東寺住僧五十口內撰定三綱官符、承和元年十二月二十四日。（二三）後七日御修法官符、承和元年十二月二十九日。（二四）定衆寺定額五十人供料官符、承和二年正月六日（二五）篇言宗三業度人官符、承和二年正月二十二日。（二六）同官符、承和二年正月二十三日。（二七）應令僧官并僧綱相共檢校文殊會官符、承和二年六月三日。（二八）應試年分度者學業定得度日處官符、承和二年八月二十日。（二九）殯行三鈷記眞然、承和二年十月　日。（三〇）高野山領四至內永令免課役官符。（三一）置金剛峰寺僧別當官符、賜造塔料官符并賜修繕料官符。（三二）應東大寺眞言院置定額僧二十一人官符、承和三年五月九日。（三三）同僧綱牒、承和三年五月三日。（三四）阿波國大龍寺緣起眞然、

承和三年九月十三日。（三五）觀心寺緣起實錄帳實慧、承和四年三月三日。（三六）東寺最初補任定額僧名僧綱牒、承和四年四月五日。（三七）應眞言宗僧每年任諸國講師官符、承和四年八月五日。（三八）請令東寺僧別當撿知眞言宗雜事表實慧、承和五年九月。（三九）以字治郡法琳寺爲修法院官符、承和七年六月三日。（四〇）觀心寺三綱錄勸進文、承和七年七月二十七日。（四一）定東寺少別當井神護寺別當官符、承和七年十二月五日。（四二）恩施金剛峰寺燈明料官符、承和八年二月七日。（四三）應於東寺定傳法職位并修結緣灌頂官符、承和十年十一月十六日。（四四）同玄蕃寮牒、承和十年十一月十六日。（四五）諸授眞紹傳法職位奉狀、承和十年十一月二十七日。（四六）應授眞紹傳法職位官符、承和十年十二月九日。（四七）應給東寺結緣灌頂燈油料官符、承和十一年六月十一日。（四八）應給東寺結緣灌頂佛供料官符、承和十一年六月十六日。（四九）應給東寺御願料官符、承和十一年六月十六日。（五〇）應給堂童子一人時服并食官牒、承和十一年六月十六日。（五一）應給東寺灌頂調布三十端官符、承和十一年九月十一日。（五二）答實慧僧都請法却綜藝種智院充東寺傳法會料書右大臣。（五三）應法却綜藝種智院充東寺傳法會料官符、承和十二年九月十日。（五四）應停春節灌頂永成修法官符、承和十三年三月十三日。（五五）同玄蕃寮牒、承和十三年三月二十六日。（五六）承和十四年東寺傳法會表白、承和十四年四月。（五七）金剛峰寺製定眞然。（五八）以伊勢國法雲寺爲眞言別院官符、嘉祥二年正月。（五九）任圓明練律師策命、嘉祥三年七月二十七日。（六〇）任道雄練少僧都圓明律師策命、嘉祥三年十二月八日。（六一）應海印寺爲定額僧別當并定年分度者官符、嘉祥四年三月二十二日。（六二）應加補度者三人前後六人同於東寺試於兩寺金剛峰寺神護寺得度高野三月二十一日高雄四月三日官符、仁壽三年四月十七日。（六三）以安詳寺預定額恩施燈油料勅詔、齊衡二年六月。（六四）應得度嘉祥寺年分者三人官符、天安三年三月十九日。（六五）應嘉祥寺授年分度者三人官符、貞觀元年三月十九日。（六六）緣皇太后御願置安祥寺年分度者三人願文、貞觀元年四月十八日（六七）應得度安祥寺年分者三人官符、貞觀元年四月十八日（六八）辭律師表堅惠、貞觀二年。（六九）應施拾水田若干不退超昇兩寺官符、貞觀二年冬十月十五日。（七〇）爲眞如法親王圓國修行下山除山陽南海西海道等諸國司官符、貞觀三年三月二十九日。（七一）應每年請用兩會聽衆並堅義者安祥寺僧各一人官符、貞觀三年四月十三日。（七二）賜金剛峰寺大塔修理料官符、貞觀三年七月十五日。（七三）賜大師文田公之門宿禰姓官符、貞觀三年冬十一月十一日。（七四）授堅惠官位勅書、貞觀四年七月五日。（七五）應建立禪林寺官符、貞觀五年九月六日。（七六）室生山佛隆寺鐘銘、貞觀五年九月十一日。（七七）制定僧綱位階官符、貞觀六年二月十六日。（七八）眞雅僧正已下律師已上十六人任法印法眼法橋策命、貞觀六年二月十六日。（七九）應一據舊例得度者受戒官符、貞觀七年三月二十五日（八〇）緣皇太后御願於安祥寺永代相承持念尊勝眞言轉讀孔雀王經及諸宗經論願文、貞觀七年七月十九日。（八一）以菱演任權僧正策命、貞觀七年十月十六日。（八二）應安祥寺置二人阿闍梨每季修孔雀經法官牒、貞觀七年十月十六日。（八三）請辭權僧正表菱演、貞觀七年十月十三日。（八四）同勅答、貞觀七年十月廿八日。（八五）重請辭權僧正表菱演、貞觀七年十二月十三日。（八六）同勅答、貞觀七年十二月十九日。（八七）定相應寺四至勅書、貞觀八年十月二十日。（八八）應濟僧正謚號勅書、貞觀九年八月二十九日。（八九）佛隆寺三綱記、貞觀十四年六月十九日。（九〇）應改嘉祥寺年分號稱貞觀寺年分官符、貞觀十四年七月十九日。（九一）應預正月御齋會聽衆安祥寺僧官符、貞觀十六年二月十七日。（九二）於貞觀寺設大齋會願文、貞觀十六年三月二十三日。（九三）稻荷鎭座由來又云稻荷大明神緣起眞雅。（九四）請辭僧正表眞雅、貞觀十六年七月十一日。（九五）重請辭僧正表眞雅、貞觀十六年八月二十日。（九六）三請辭僧正表眞雅、貞觀十六年八月廿六日。（九七）同勅答、貞觀十六年八月廿六日（九八）置貞觀寺定額十六口官符、貞觀十六年九月廿一日。（九九）眞然僧正自筆日記、貞觀十七年三月廿一日。（一〇〇）高雄山神護寺鐘銘、貞觀十七年八月廿三日。（一〇一）請以毓峨院爲大覺寺表并勅詔、貞觀十八年二月廿五日。（一〇二）免紀伊國四郡所在水陸田廿八町和永屬金剛峰寺官符、貞觀十八年七月廿二日。（一〇三）置貞觀寺座主官符、貞觀十八年八月廿九日。（一〇四）置高祥寺定額七口官符、元慶二年二月五日。（一〇五）應令義澄等四人入住超昇寺官符、元慶二年四月九日。（一〇六）宗叡任僧正遍照任權僧正忠孝任律師策命、元慶三年十月二十三日。（一〇七）請大覺寺置僧別當并度者狀、元慶　年九月。（一〇八）令金剛峰寺年分試度復舊僞官符、元慶六年五月十四日。（一〇九）觀心寺勸錄緣起資財帳、元慶七年九月十五日。（一一〇）應改定試度貞觀寺年分者日官符、元慶七年十二月五日。（一一一）應不傳勅使阿闍梨及證師專一試度玄蕃寮牒、仁和元年六月二十二日。（一一二）應授益信阿闍梨位灌頂牒、仁和三年正月二十九日。（一一三）應授寶寶阿闍梨位灌頂牒、仁和三年三月九日。（一一四）應以圓成寺爲定額官符、寬平元年七月廿五日。（一一五）任聖寶貞觀寺座主勅書、寬平二年。（一一六）應置圓成寺年分度者二人官符、寬平二年十一月廿三日。（一一七）應授仁和寺年分度者二人官符、寬平二年十二月二十三日。（一一八）應改定得度者受戒官符、寬平七年三月六日。（一一九）應授阿闍梨灌頂觀賢官牒、寬平七年十二月十三日。（一二〇）應任仁壽三年官符六人同於東寺試於兩山得度官符、寬平九年六月二十六日。（一二一）應置仁和寺圓堂院分擘明業年分度者一人官符、昌泰三年十一月二十九日。（一二二）應授付法灌頂寂禪官牒、延喜二年七月三日。（一二三）應授付法灌頂眞顯官牒、延喜三年六月五日。（一二四）應以勸修寺爲定額寺并置年分度者二人官符、延喜五年九月二十一日。（一二五）應圓成寺師資相傳令領知寺中雜務官符、延喜六年九月十九日。

関音経霊験記 ❶(日)Kwan-gō-shu-sho-ga-zen-gi. ❷名 ❸名 ❹(書名)

関口流柔術秘伝 ❶(日)Kwan-kō-ryū-ji-hō-zō-dan-rin-hikae. ❷1巻 ❸名 ❹安永四頃 ❺ 谷大(谷大八)

関山国師語録 ❶(日)Kwan-zan-shi-soku-shin-jō-butsu-gi. ❷11巻 ❸名 ❹伝慧 (貴末1天一宝暦1五 A. D. 1639—1702)撰 ❺天和七(A. D. 1694)

関雪綺譚抄 ❶(日)Kwan-tei-ryak-kwan-shō. ❷1帖 ❸名 ❹幕末頃代写 ❺(東博記)

関勝人伝零墨 ❶(日) Kwan-dō-has-shū-kō-yō. ❷11巻 ❸名 ❹新井11平 ❺(宝大)1〇七・11111元)(安書) ❻安政四年七月成稿

観音経本生物語記 ❶(日)Kan-jō-sō-moku-jō-butsu-shi-ki. 観音経本生物語記 ❷1巻 ❸名 ❹天文(室町末期) ❺(東京人一延喜年間 A. D. 841—901—)撰 ❻〔参考〕 観音経霊験記11 ❼宝大(宝大)日大系・11五〇)

観文 ❶(日)Kam-mon. ❷1巻 ❸名 ❹天平11写 ❺(東博記)

漢書集 ❶(日)Kan-ko-shū. (支)Han-hsū-chi. ❷1巻 ❸名 ❹新撰字鏡頃 ❺(東博) 新撰字鏡巻第十

漢書考証 ❶(日)Kan-ko-dō-go-roku. (支)Han-hsū-t'ang-yū-lu. ❷1巻 ❸名 ❹安永頃 ❺(宝大)1111一安永十A.D. 1635—1694)撰 ❻〔参考〕 唐宋八大家文抄

Kwan-ge-ichi-gyō-zen-ji-ji-mo-hyō. ❷1巻 ❸名 ❹(安書)

関雪春秋手習草紙 ❶(日)Kwan-gō-shu-sho-za-zen-gi. ❷名 ❹(宝大)

関口流柔術秘伝零墨抜萃 ❶(日) Kwan-kō-ryū-ji-hō-zō-dan-rin-hikae. ❷1巻 ❸名 ❹安永四頃 ❺ 谷大(谷大八)

関山国師語録 ❶(日)Kwan-chū-soku-shin-jō-butsu-gi. ❷11巻 ❸名 ❹伝慧 (貴末1天一宝暦1五 A. D. 1639—1702)撰 ❺天和七(A. D. 1694)

関雪綺譚抄 ❶(日)Kwan-tei-ryak-kwan-shō. ❷1帖 ❸名 ❹幕末頃代写 ❺(東博記)

関勝人伝零墨 ❶(日) Kwan-dō-has-shū-kō-yō. ❷11巻 ❸名 ❹新井11平 ❺(宝大)1〇七・11111元)(安書) ❻安政四年七月成稿

観音経本生物語記 ❶(日)Kan-jō-sō-moku-jō-butsu-shi-ki. 観音経本生物語記 ❷1巻 ❸名 ❹天文(室町末期) ❺(東京人一延喜年間 A. D. 841—901—)撰 ❻〔参考〕 観音経霊験記11 ❼宝大(宝大)日大系・11五〇)

漢文 ❶(日)Kam-mon. ❷1巻 ❸名 ❹天平11写 ❺(東博記)

漢書集 ❶(日)Kan-ko-shū. (支)Han-hsū-chi. ❷1巻 ❸名 ❹新撰字鏡頃 ❺(東博) 新撰字鏡巻第十

漢書考証 ❶(日)Kan-ko-dō-go-roku. (支)Han-hsū-t'ang-yū-lu. ❷1巻

漢書考証 ❶(日)Kan-ko-dō-toku-tsū-o-shō-gyō-jō. (支)Han-hsū-t'ang-tê-t'ung-ho-shang-hsing-chu-ang. ❷1巻 ❸名 ❹新撰字鏡頃 ❺〔参考〕 唐宋八大家文抄

漢訓集 ❶(日)Kan-kō-shū. (支)Han-hung-chi. ❷1巻 ❸名 ❹新撰字鏡頃 ❺(東博) 新撰字鏡巻第十

漢字大辞典 ❶(日) Kam-mei-dai-shi-den. (支) Han-ming-ta-shih-ch'uan. ❷1巻 ❸名 ❹明治時代写 ❺(東博)

明治時代写十八年刊行漢文字典

寒山拾得縁起 ❶(日) Kwan-shō-koku-shi-i-kō-shū-tsuketari-ryaku-den. ❷1巻 ❸名 ❹室町末期頃 ❺(宝大)1十1・三1) ❻ 秀実記

寒暑説 ❶(日)Kan-kaku-shō. ❷三巻 ❸名 ❹鎌倉時代(一二世紀—一三世紀 A. D. 1240—1304 1)撰 ❺宝大)1)写 ❻〔参考〕 唐土歴代名賢確論巻三

寒山詩集 ❶(日) Kan-shitsu-dō-mon. ❷11巻 ❸名 ❹法明(一三世紀1〇 A. D. 1760—)撰 ❺宝大(宝大)1)六1九・1 11)(谷大)寒大・11七九六)

寒山拾得縁起絵巻 ❶(日)Kan-gan-zen-ji-shi-jō-ketsu. ❷1巻 ❸名 ❹鎌倉時代 ❺(東博) 宋法華経記

寒山拾得縁起絵巻 ❶(日) Kan-gan-zen-ji-ryaku-den. ❷1巻 ❸名 ❹鎌倉時代 ❺ 寒山拾得縁起

❻寒山拾得の伝説は唐の時代で、新唐書及び宋史等に出ている。寒山は天台山国清寺の僧で、拾得はその寺の食堂の下働きであった。寒山は文殊の、拾得は普賢の化身であるとされ、両人は常に親しく交わり、詩を作り、狂歌を歌い、奇行を演じたと伝えられる。この説話は、中国の禅僧の間に広く流布し、日本にも伝来して、鎌倉時代以降、禅僧の間に盛んに画かれた。この絵巻は、その代表的な作品である。

寒山拾得縁起絵巻 ❶(日) Kan-zan-shi-kwan-ge. 寒山拾得縁起絵巻 ❷1巻 ❸名 ❹安永頃写(貴末1)一一安永十A.D. 1635—1694)撰 ❻〔参考〕 唐宋八大家文抄

寒山拾得縁起 ❶(日) Kan-zan-shi-shū-sho. ❷11巻 ❸名 ❹(参考) 唐宋八大家文抄

寒山拾得集 ❶(日)Kan-zan-shi-shū. ❷1巻 ❸名 ❹南宋頃写(一二世紀 A. D. 627—649—)記 ❺新井11平 ❻(宝大)

寒山拾得集抄 ❶(日) Kan-zan-shi-shū-kwan-ge. 寒山拾得抄 ❷1巻 ❸名 ❹安永頃写(貴末1)一一安永十A.D. 1635—

名所行脚 ● (名寺巡礼)巡礼 ● 月々の行脚 ● (歴史巡礼)巡礼 ● 沈黙行脚 ● 代々木行脚 ● 本書 ● 巡礼内容 ● 巡礼 ● 巡礼 ● 巡礼

1694)歳 ❻貫文 | | 匁 ❼(唐大"唐尺)

漢山詩素考 ❶(日)Kan-zan-shi-shū-kō. ❷| 巻 ❸存 ❹(宋大(南大)

漢山詩新講 ❶(日)Kan-zan-shi-shin-shaku. ❷| 巻 ❸存 ❹小夏宗鼎著 ❺明治四〇年 ❻(南大) ❼東京内平田俊雄

漢山詩圓機記聞 ❶(日)Kan-zan-shi-sen-dai-ki-mon. ❷四巻 ❸存 ❹白隠慧鶴(貞享|| —明和元 A. D. 1685—1768)著 ❺貞享|| 年 ❻(南大)(帝国"|〇天・|天七) ❼京都建仁寺

漢山詩註講 ❶(日) Kan-zan-shi-hyō-shaku. ❷| 巻 ❸存 ❹(参考) 雲巣日章

漢山詩評語 ❶(日) Kan-zan-shi-wa-i-u. (支)Han-shan-shih-ho-yün. 韓山新語集 ❷四巻 ❸存 ❹呉宜曾著(天保||—弘化四 A. D. 1295—1370)著 ❺明"天保| 四年刊行 ❻(南大)

漢山詩和歌頌 ❶(日) Kan-zan-shi-wa-ka-ju. ❷| 巻 ❸存 ❹貞叔三郎記 ❺(参考) 雲巣日章

漢山和尚詩註講 ❶(日)Kan-zan-jit-toku-shi-shū. (支)Han-shan-shih-tê-shih-chi. ❷|| 巻 ❸存 ❹鼎鼎禅師著 ❺四国正覚(—貞観年 A. D. 627—649—)頃

❻この本書は"漢山詩"の中の詩の一部分を選出したものである。唐代の詩人で、特に禅の思想を詩に表現したものである。禅の思想は、詩の中に含まれている。禅の思想は、詩の中に含まれている。禅の思想は、詩の中に含まれている

人、。面田天、鶴和泉。有人、。。草山詩三百。応
鈴。有、。馬、亡上人愛。頭山、見、。谷天
上人、。。。

の行を立て本願を信じ名號を唱へながら、一念多念の二の義うしろあわせなるべき樣如何にもいかにもある問數事ぞかし(中略)陳寛は、一念の力にて無窮の生死を盡しつるは、ゆゝしき事かなと思ふたびに、すゞろに唱へられ、一稱の力にて、無漏の安樂に生れん事は、不思議かなと疑ゆるに附けても、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と申さるゝ事にてこそあれ。左れば日日に之を念じ、時々に是れを稱する也。是れに依て陳寛日日に八萬四千遍怠らず申す事は、一念の御法にあかぬ嬉さに數過を重さぬる也。左れば一念を信ぜん人は多念を毀るべからず」等と云へる邊など、法然上人に承けたる御法と覺ぜらる。 (今岡達音)

閑虚漫草 ❶(日)Kan-ro-man-sō. ❷二卷 ❸存 ❹大漢(寶曆九—文化元 A.D.1759—1804)述 ❺寫本(龍大、一七五・四〇)

閑論 ❶(日)Kan-ron. ❷二卷 ❸存 ❹業津義圭(—寛政一一 A.D.1799)著 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第二 ❽天明二刊 ❾(龍大、一〇四・四)(帝國、二〇九・六六一)

閑話錄 ❶(日)Kan-wa-roku. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

堪忍辨 ❶(日)Kan-nin-ben. ❷一卷 ❸存 ❹古山撰 ❺寫本(龍大、二〇九九・一三七)

管劇集 ❶(日)Kwan-ke-shū. ❷一卷 ❸存 ❹鶴鈴撰 ❼(參考)禪籍目錄

喚醒集 ❶(日) Kwan-sei-shū. (支) Huan-hsing-chi. ❷一卷 ❸存 ❹朝鮮志安喚醒撰 ❼(參考) 禪籍目錄

皖山正凝禪師示蒙山法語 ❶(日) Kwan-zan-shō-gyō-zen-ji-ji-hō-go. ❷一卷 ❸存、誠初心學人文之內 ❺寫本(京大、藏・二四カ・四)

感應寺興隆記 ❶(日)Kan-ō-ji-ki-ryū-ki. ❷一卷 ❸存 ❺寫本(立大、D.O、三三一)

感恩小話 ❶(日)Kan-on-shō-wa. 家庭讀本感恩小話 ❷一卷 ❸存 ❹藤岡了空著 ❽明治四三刊 ❾(谷大、餘洋・八三)

感山雲臥紀談 ❶(日)Kan-zan-un-ga-ki-dan. (支)Kan-shan-yün-wo-chi-tan. 雲臥紀譚、雲臥紀談 ❷二卷 ❸存 卍續二乙・二一・一 ❹曉瑩述 ❺南宋紹興二五(A.D.1155) ❽享和二刊 ❾(內閣)(帝國、特別・一・ヘ・一二)

感山雲臥紀談 ❶(日)Kan-zan-un-wa-ki-dan. (支)Kan-shan-yün-wo-chi-tan. 冠註感山雲臥紀談 ❷四卷 ❸存 ❽享保二刊 ❾(駒大)

感山雲臥紀談 ❶(日) Kan-zan-un-wa-ki-dan. 國譯感山雲臥紀談 ❷二卷 ❸存、國譯禪宗叢書第一

感山雲臥紀譚解題 ❶(日) Kan-zan-un-wa-ki-dan-kai-dai. 雲臥紀譚解題 ❷一卷 ❸存、國譯禪宗叢書第一

感山雲臥紀譚輯略 ❶(日) Kan-zan-un-wa-ki-dan-shū-ryaku. 雲臥紀譚輯略 ❷二卷 ❸存 ❽享保二刊 ❾(京大、藏・二四カ・一一)

感身學正記 ❶(日) Kan-jin-gaku-shō-ki. 金剛佛子叡尊感身學正記 ❷一卷 或三卷 ❸存 ❹叡尊(建仁元—正應三 A.D.1201—1290)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二 ❽貞享四影寫 ❾(谷大、餘大・三九二九)

感想錄 ❶(日)Kan-sō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹南條文雄(嘉永二—昭和一一 A.D.1849—1927)著 ❾明治三九刊(谷大、餘洋・二一二)(帝國、四〇・七六〇)明治四〇刊(京大、二九カ・一)

感嘆鈔 ❶(日)Kan-tan-shō. ❷一卷 ❼存、讚佛感恩集之附錄 ❹光遠院惠空(正保元—享保六 A.D.1644—1721)撰 ❾貞享五刊(龍大、一五〇二・一九四)元祿一〇寫(谷大、宗大・二五七五)元祿一四寫(谷大、宗大・三〇二八)刊本(谷大、宗大・六四〇)

感通傳 ❶(日)Kan-tsū-den. (支)Kan-tung-chuan. 律相感通傳 ❷一卷 ❸存(大正四五・八七四 Zo. 1893、卍續二・一〇・一) ❹道宣(開皇一六—乾封二 A.D.596—667)撰 ❺唐麟德元(A.D.664) ❼(參考) 日本國承和五年入唐求法目錄、慈覺大師在唐送進錄、入唐新求聖教目錄 ❾異本校訂本(京大、藏・四ノ・六)

感通錄 ❶(日)Kan-tsū-roku. (支)Kan-tung-lu. 集神州三寶感通錄 ❷三卷 ❸存、大正五二・四〇四 Zo. 2105 續露七 ❹道宣(開皇一六—乾封二 A.D.596—667)撰 ❺唐麟德元(A.D.664) ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄 2821

感得佛舍利記 ❶(日)Kan-toku-bu-shaa-ri-ki. ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集第一六記釋之內 ❹慈雲飲光(享保三—文化元 A.D.1718—1824)記

感夢記 ❶(日)Kam-mu-ki. 夢記 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二八、第一一三 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D.814—891)說寛平四、年七八寂)撰 ❼智證大師圓珍は、唐大中十年(西曆八五六)正月に洛陽を出發して浙江に到り、越州(今の浙江紹興縣治)開元寺の良諝座主に從つて天台宗の奧旨を受け並に天台宗の章疏三十五卷を授與され、五月晦日開元寺を出發、六月四日には天台山國清寺に達したと「圓珍傳」に記してある。

圓珍が開元寺に到著した月日は不明であるが、凡そ二三十日間位は滯在したのであらうと考へられる。本書は「大中十年五月十日齋後の夢」を記したものであるから恐らく越州開元寺に留錫中の記事であらう。夢の記事は右大臣藤原良房が圓仁を天台座主たらしめんと欲することを相談し、次に水瓶と陀羅尼文との賢瑞をし、次に右大臣の宅に持念道場を造り普賢延命像を揭げたことを記してある。圓仁は貞觀元年(西曆八五四)に既に座主となつてゐる。この事を圓珍が入唐してゐて知らないから夢みたのであらうが、この記事は疑へば疑ふべき餘地がある。然し圓珍が圓仁を先輩として尊敬してゐたことは確實であるが、思ふに傳教大師滅後、傳教大師の直弟子と義眞和尚系の人々との不和が或は本書を作らしめたのではあるまいか。可考。

❼(參考) 紙外新定智證大師書錄、山家祖德撰述篇目集卷上、本朝台祖撰述密部書目 (田島惠音)

感夢記密語 ❶(日)Kan-mu-ki-mitsu-go. ❷一卷 ❸缺 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D.814—891)說 寛平四、年七八寂)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、密乘撰述目錄

感攀一流五重傳法之箇條 ❶(日) Kam-yo-ichi-ryū-go-jū-den-ko-no-ka-jō. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(正大、一五五二・一一五)

感攀派一乘戒傳九條 ❶(日) Kam-yo-ha-ichi-jō-kai-den-ku-jō. ❷一卷 ❸存 ❹鷲山(—延享頃 A.D.1744—1747—)記 ❹寫本(正大、一五五二・三五五)

感攀派宗脈五箇條 ❶(日) Kam-yo-ha-shū-myaku-go-ka-jō. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(正大、一五五二・一七五)

感靈錄 ❶(日) Kan-rei-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(帝國、乙・二二一)

寛印供奉塵願行西文 ❶(日) Kwan-in-gu-bu-chi-wan-gyō-sai-mon. ❷一卷 ❸缺 ❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

寛永寺圓頓院年中行事 ❶(日) Kwan-ei-ji-en-don-in-nen-chū-gyō-ji. 東叡山寛永寺圓頓院年中行事 ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、餘大・三五九六)

寛永年間諸國末寺言上書 ❶(日)Kwan-ei-nen-kan-sho-koku-matsu-ji-gon-jō-sho. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

寛永八年西六條境內圖 ❶(日) Kwan-ei-hachi-nen-nishi-roku-jō-kei-dai-no-zu. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、研史)

寛永六年遣方日記 ❶(日)Kwan-ei-roku-nen-ken-hō-nik-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

寛記撮要 ❶(日)Kwan-ki-satsu-yō. ❷二卷 ❸存、日蓮宗々學全書日蓮正宗部 ❹(—享保一一 A.D.1726—)述 ❺正德五(—享保七 A.D.1715—1722) ❻日蓮正宗(富士大石寺派)中世の碩學たる大貳阿闍梨日寛の講述。

日寛大石寺學頭蓮藏坊に住し重要御書を講述すること多年、觀心本尊鈔文段等重要御書の註釋を造り其の稿本大石寺に藏せらる。大正年中同門現代の學匠堀慈琳是等稿本中より特に同宗獨特の他門不共の妙解のみを抄錄して「寛記撮要」と題したのである。

上下二卷に分れ、上卷には「安國論愚記」「開目鈔愚記」「撰時鈔愚記」「報恩鈔文段」の四篇を收め、下卷には「取要鈔文段」「題目鈔文段」「當體義鈔文段」「修行鈔筆記」「曼荼羅鈔記」の五篇を錄す。

安國論愚記は「御書結集ノ事」「此論所破ノ事」以下「此題含ニ三箇祕法ノ事」「善神聖人捨國去所文」に至る八項。

開目鈔愚記は上下に分れ上卷は「當鈔大意ノ事」「當鈔題號ノ事」以下「文底祕沈文」、「雖然未發迹顯本」「眞一念三千不ゝ顯文」「此疑此書肝心等文」等の十三項、同下卷は「證前寶塔上等文」以下「諸佛釋迦如來分身等文」「種熟脫名字猶無何況其義文」「我日本國ノ柱トナラン等文」等の二十四項。

撰時鈔愚記は上下に分れ、上は「將ゝ釋ニ氏抄題ニ須ゝ了ニ通別ゝ、釋子日蓮述文」以下、「後五百歲遠沾ニ妙道ゝ文」「語」代像終末始等文、法華經流布時二度有ゝシ等文」等の十六項。同下は「亡國ノカナシサ等文」「日蓮凡夫ナリ等文」以下「ヨモ今年ハスゴシ候ハジ等文」「俱惜無上道文」等の十一項。

報恩鈔文段は上下に分れ、上は「當鈔大意」以下「月氏教主釋尊等文」に至る四項。同下は「如是我聞上妙法蓮華經卽一部八卷肝心文」以下「一同ニ他事ヲ捨テ南無妙法蓮華經ト唱ゝシ文」等の七項。取要鈔文段は「題號」以下「上行所傳妙法蓮華經五字也文」に至る九項。

題目鈔文段は「法華題目鈔文」以下「時時彌陀等諸佛名號等文」に至る七項。

當體義鈔文段は「將ゝ律ニ當鈔ニ須ゝ約ニ三門ニ」以下「故正像二千年國王大臣ヨリモ末法非人ハ尊貴也ト釋ニ此意ニ也文」「俱體俱用無作三身等文」「本門壽量教主金言等文」に至る二十四項。

如說修行鈔筆記は「此鈔大意依ニ宗教五箇ニ弘ニ通宗旨三箇ニ必有ニ三類大難ニ相ヲ御書シテ、宗祖弟子如說修行ノ人ナルコトヲ判シ玉フ也」以下「題號含ニ三大祕法ニ事」「人法俱不老不死文」等の十項。

妙法曼荼羅供養鈔記は「當鈔大意事」「當鈔題號事」の二項。

是等の各項を揭げて各書の要點につき同宗獨特の見解を以つて解說してある。 (馬田行啓)

寛嚴禪師語錄 ❶(日) Kwan-gen-zen-ji-go-roku. ❷三卷 ❸存 ❹萬敬、享保共編 ❼(參考) 禪籍目錄

寛江和尙語錄 ❶(日) Kwan-kō-o-shō-go-roku. 宵澤寛江和尙語錄 ❷二卷 ❸存 ❹寛江語、智嚴等編 ❽文化三刊 ❾(駒大)

寛江詩集 ❶(日)Kwan-kō-shi-shū. 西湖寛江詩集 ❷二卷 ❸存 ❹寛江撰、寛邦編 ❾刊本(駒大) ❿京都貝葉書院

寛政元年長州法義訂正 ❶(日) Kwan-sei-nen-chō-shū-hō-gi-tei-sei. ❸存、眞宗全書第六一、眞宗小部集附錄卷二

⑪長門の僧にて秀慧、西天、惠秀なる三人が本山法主及び能化(功存)等の命令なりとて功存の願生歸命辨の所說を所據として、三業歸命、願生歸命の說をもつて長州一國の法義を訂正すると號して勸說をなしたるに對して、萩の清光寺の隱居閑信院より寛政元年九月二十日、その說の是非を本山に窺へる覺書、それに對して同年十月十二日附をもつて七里內膳、島田大和守、島田讃岐守、下間長部卿の名によつて秀慧等の說の非なることを述示せる文書を一括して長州法義訂正と名づく、三業惑亂關係文書として注意さるべきものである。 (大原性實)

寛政元年與琉球尼講中消息

❶(日)Kwan-sei-gwan-nen-gyō-kyō-ama-kō-jō-ni-shō-shi-seki. ❸存、眞宗全書第六二、眞宗小部集附錄卷二 ❹功存(享保五—寛政八A. D. 1720—1796)記

❺寛政元年多十月二十三日、琉球國尼講中(佛教婦人會)に寄てた能化功存の消息である。先づ年々志を運ぶことを謝し、相承の安心を略述し、報謝の相續を勸進してある。當時琉球國人と本願寺教團との間に交通ありしことを語る文獻として價値あり。(大原性實)

寛政六年叡山對本宗關係文書 ❶(日)Kwan-sei-roku-nen-ei-zan-tai-hon-shū-kwan-kei-mon-jo. ❷一卷 ❸存 ❹(立大、D○・三二九)

寛文五年性應寺へ御成之記 ❶(日)Kwan-bun-go-nen-shō-ō-ji-e-nari-no-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大、別置)

寛文七年大阪天滿寺由緒 ❶(日)Kwan-bun-shichi-nen-ō-saka-tem-ma-ji-yui-sho. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

寛文板書籍目錄 ❶(日)Kwan-bun-han-sho-seki-moku-roku. ❷二卷 ❸存 ❹寫本(龍大、研史)

寛平法皇一千年忌曼荼羅供懷實 ❶(日)Kwan-pyō-hō-ō-ichi-sen-nen-ki-man-da-ra-ku-yō. ❷一卷 ❸存 ❺昭和七刊 ❻京都藤井佐兵衛

寛平法皇九百回忌勅會曼荼羅供次第 ❶(日)Kwan-pyō-hō-ō-kyō-hyak-kwai-ki-choku-e-man-da-ra-ku-shi-dai. ❷一卷 ❸存 ❺元祿一二寫 ❻(谷大、餘大・三一九一)

寛補超會傳考 ❶(日)Kwan-pō-chō-kai-den-kō. ❸存、大日本佛教全書第一一五遊方傳叢書第三

寛睦答書寫 ❶(日)Kwan-boku-tō-sho-utsushi. ❷一卷 ❸存 ❹寛睦記 ❻寫本(龍大、一九七一・三一)

管窺錄 ❶(日)Kwan-ki-roku. 眞宗法要藏外諸書書寫錄 ❷一卷 ❸存 ❹竹内(享保四—寶曆一二A. D. 1719—1762)撰 ❺教典志に云く「帖外和讃至吉水絲傳鈔、凡八十三部、研覈眞僞、淘汰純雜、於中首列三十一部雜著十四部疑僞部三十八部」云云 ❼(參考)淨土眞宗教典志第二

管見肝要鈔 ❶(日)Kwan-ken-kan-yō-shō. ❷一卷 ❸存 ❹實弘撰 ❼(參考)大日本佛教全書撰刊豫定書目

管見疑文 ❶(日)Kwan-ken-gi-mon. ❸缺 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A. D. 814—891)說寛平四、年七八說)撰 ❺永和一〇(A. D. 848) ❼(參考)本朝古疑撰述書部書目

管見茶話 ❶(日)Kwan-ken-sa-wa. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大・二八二・一)

管見錄 ❶(日)Kwan-ken-roku. ❷五卷 ❸存 ❹速山交易(寛永一二—元祿七A. D. 1635—1694)撰 ❺貞享三刊 ❻(谷大、餘大・三三三四)

管絃相成義 ❶(日)Kwan-gen-sō-jō-gi. 秘密因緣管絃相成義 ❷二卷 ❸存、大正 七九・八〇四 No. 2341 ❹法住(享保八—寛政一二A. D. 1723—1800)撰 ❺天明五(A. D. 1785) ❻寛政七刊 ❼(京大、日大未・六七)(正大、一四二・一四〇)(晉け・三・左・三一)(高大、一・五七)(谷大、餘大・二一七)(龍大、二六六二・四九、研佛)

管絃相成義算引 ❶(日)Kwan-gen-sō-jō-gi-san-in. ❷二卷 ❸存 ❹法住(享保八—寛政一二A. D. 1723—1800)撰 ❺寫本(正大、一四二・一三二)(京大、日大未・六八)

管蠡鈔 ❶(日)Kwan-rei-shō. ❸存 ❼(參考)禪籍目錄

漢音正辨 ❶(日)Kan-on-shō-ben. 梵字須知漢音正辨 ❷二卷 ❸存 ❹素眞記 ❼刊本(帝國、一二七・一七八)

漢音梵唄譜 ❶(日)Kan-on-bom-bai-fu. ❷二卷 ❸存 ❼刊本(帝國、二一二・一〇八)

漢學紀原 ❶(日)Kan-gaku-ki-gen. ❷五卷 ❸存 ❹伊地知季安(天明二—慶應三A. D. 1783—1867) ❼(參考)禪籍目錄

漢語燈錄 ❶(日)Kan-go-tō-roku. ❷十卷 ❸存、黑谷上人語燈錄(大正八三・一〇五 No. 2611)之內、淨土宗全書第九 ❹源空(長承二—建暦二A. D. 1133—1212)撰、了惠(寛元二—元德二A. D. 1244—1330)輯 ❺文永一一(A. D. 1274)十二月八日墓輯 ❻本書は、法然上人の著作、講說、消息、遺誡の中漢文から成れる者を墓輯せる者である。編者の序文を抄錄せん。

「大唐の善導大師が、楷定古今の疏を作製して安養是報土五乘齊齊入、萬行爲雜行、稱名爲正行、と定判し給へり。是れに依て、稱名別願の理致、凡入報土の大意が明らかになりし處に、その後ち五百餘歲を經て、黑谷上人深く善導大師の楷定の疏意を知りて、蓮西大乘之淨土宗門始めて本朝に恢弘し、稱名の聲音、閻國に洋々たり。然るに黑谷上人の門徒の中に、師說を傳ふと稱して、異說を募り、互に是非を爭ふの奇觀を展開せり。第三者は其金錄を辨へ難く、岐路に迷ふに至りね。編者了慧は、上人の寂後百歲の下に生れ、委く其流を絕む。敢て經敎を守成せんと欲し、遺文を集めて龜鏡に備へ以て門徒の異義の正邪を辨へんと欲す。此の遺文は、實に行者の心行を照すの大明燈なり。仍て名けて語燈錄と云ふ。遺文に和字の者あり。漢文の者あり。漢文から成れる者を漢語燈錄と云ふ。漢文總へて十七章、十卷から成る。幷に拾遺一卷あり云云」。

案ずるに漢語燈錄に新古の二本あり。古本漢語燈錄は、元祿の頃、良照義山が、和州三輪神宮寺の寶庫に得て、之を洛西二尊院本と對校したる者にして、大谷派初代の講師惠空得昇が、寫し取りて其法流に傳播せり。本書の解題執筆者は、五乘院講師の傳承本を、曾て書林にて買得す。此の古本には前揭の序文並に拾遺を闕く。新本漢語燈

餘は、建武四年七月、下總鎭木の里光明寺の良求が、室西樣所集の語燈錄を浮寫して、武州金澤稱名寺の文庫に奉納せしが、後ち之れが豆州藥王山寺に傳はる。寶永二年三月、知恩院四十二代の貫首白譽秀道、昔時遊歷の日親しく一覽せしを以て、弟子某をして後處に到り請うて將來せしめ、良照義山、並に其門倒をして、從來所傳の本と對校治定せしむ。正德元年十二月功畢、正德五年正月刊行せる者の如し。此の新本に就て、白譽貫首の說は「取捨を去り全璧に還らしめたり」と云ふ。眞宗の敎典志は之と反對に「僞徒が私情を以て文を曲げ字句を直せる者」と觀る。近來醍醐の三寶院所傳の法然上人傳記(一期物語)が發見せらる。見聞出=夢觀房=とありて、拾遺語燈錄の淨土隨聞記と趣旨粗ぼ同じ。眞宗敎典志が言ふが如く、古本漢語燈錄にて、上人の遺文が完璧とならざること明らかである。良照義山が、宗典蒐集の功を無視し毀疵するを休めて、大に之を稱揚せねばならぬ。

本書に十卷ある中第一卷は大經釋、第二卷は觀經釋、第三卷は小經釋、如法經書寫法則、如法念佛法則をあぐ。就中小經釋は、新本と古本と大に異る。古本大に勝る者あり。卷末に上人が從來世に知られざりし善導大師の觀經疏を發見し、敎回之を讀み義理を領解して一向專修の義を宣べたる旨を述べられた。如法經法則は、大和の前司入道見佛が、後白河法皇の追薦の御法事を率修せんと欲せし時、夢告を感じ上人に語りしかば、上人卽ち法華經の如法經に準じて、淨土如法經法則を撰して之を與へ給ふ。如法念佛法則は目次のみありて、未だ本文を求ね得ずと云つてゐる。

卷四は選擇集前半、卷五は選擇集後半を敎む。

卷六は往生要集大綱、同略料簡、同料簡、同設要の三篇を敎載す。

古本は往生要集釋、同略料簡、同料簡、同設要の四篇とす。是れ上人が、往生要集を講說せられた時の草稿であらう。袋中の選擇集之傳に、上人が保元三年二十六歲の時法性寺殿忠通公が、諸宗の碩德を集めて、往生要集を講說せしめし時、法然上人の講說最も勝れたるを以て、智慧第一の譽を得たりと見ゆ。今の往生要集釋等は、當時の講說の草稿、若くは筆錄であらう。上人の講說に左の如き趣旨見ゆ。

倩案=此問答=(要集問答)依=此要集意=欲レ遂=往生=者、先發=緣事大菩提心=、次持=十重木叉=以=深信至誠=、常稱=彌陀名號=、隨レ願決定得=往生=是則此集正意也。

上人の鑑識にては、往生要集の正意が、大菩提心を發し、淨戒を持ち、念佛を行じて、決定往生と主張せるは、是れ所被を善機に局る者である。上人が善導大師に依て主張せらるゝ一向專修は、機の善惡を問はず戒の持破を簡ばずして、誠信當稱=佛名=の行者を救ふと宣べ給ふ。是れ要集よりも一層廣く衆生を救ふの佛の願意を宣揚し給ふ。卽ち上人は要集の正意を解して自己の主張を明らかにし給ふ者である。

卷七は逆修說法の前半、卷八は同後半を敎載す。逆修說法は安樂房遵西の父外記禪門が、三尺立像の阿彌陀佛を造立して、五十日の逆修供養を行ひし時、初七日乃至六七日の六座に、上人の講說せられたる者である。第七七日は眞觀房感西に唱道せしめ給ふた。中に就て初七日は三尺の立像佛並びに大小兩經、第二七日は觀經並びに同疏、第三七日は阿彌陀佛並びに大小兩經、第四七日は阿彌陀佛並びに觀經、第五七日は阿彌陀佛並びに五祖影、第六七日は阿彌陀佛並びに觀經を讚歎して講說せられた。此の講說の中に阿彌陀佛報身、阿彌陀佛を無量壽佛と稱へ奉りて無量光佛と稱へざること、今造立する佛は來迎引接の御佛にましますが故に、此の御佛が先達となりて、命終る行者を淨土へ導き給ふ等の旨を明し給うた。

蓋し眞創に往生を求むる者の爲めに講說達識せるが故に、選擇集、三經釋とともに逆修說法は上人の主要法門と觀る。卷八の終に、俱此錄有=二本=或有=眞字=或有=假字=未レ知=何正=とあり。執筆が何人なるかいづれの層年なるかをあげず。案ずるに安樂房の執筆に成り、選擇集以前の講說であらう。

卷九は類聚淨土五祖傳と善導十德とをあぐ。淨土五祖とは曇鸞、道綽、善導、懷感、少康を云ひ、唐宋兩傳、瑞應傳、新修往生傳の中に五祖の傳歷を抄錄して、五祖の下に類纂し給ひたるを類聚淨土五祖傳と名づく。善導十德とは至誠念佛の德、三昧發得の德など、善導大師の十德をあげ給ふ。

卷十は、略要文、初學抄、請遺誡文、遺=北越=書。諸方答書の五篇をあぐ。中に就て略要文は、元久元年二月、伊豆山源延が爲に上人の集められたる者にして、安樂集の聖淨二門、乃至修行淨業時節延促の文等を略擧せらる。選擇集の如く私釋は詳らかでない。唯だ上人が尊び給ふ經釋の要を知るを得。淨土初學抄は、華嚴・天台・三論・法相・地論・攝論・大乘律・眞言・成實・俱舍・四分律の十有一宗の經論章疏を擧げ寬りて、五敎十宗、十玄六相(華嚴)。三觀六卽(天台)。八不中道二諦方言(三論)。唯識三性十地因果行位(法相)。敎證二道六相圓融(地論)。十種性相諸法唯心(攝論)。成佛得道(大乘律)。立=三部五部=稱=諸尊=(眞言)。三乘聖道(成實)。諸法體用凡聖因果(俱舍)。以=上行二義=遠期=三乘道果=(小乘律)の旨を明すも、未だ往生極樂の趣をあげず。然るに天台の十疑論、惡恩の西方要訣等に、西方淨土の阿彌陀佛の寶座に生ぜんことを勸む。唐の懷感、和の惠心、慈に往生を勸む。その他三論、眞言の祖師も念佛往生を勸勵し給ふと述べられた。案ずるに本書は勢觀房源智など幼童の爲めに物せられたる者であらう。請遺誡文に三通あり。一は沒後起請文。これに沒後追善と房舍衣鉢等を淨ふべからずとの二條あり。是れ建久九年四月の御認めの遺誡である。蓋し建久八年秋上人大患に襲らせられ、九年春選擇集を撰述したる後ち此の遺誡を認め給うた。一は七箇條起請、是れ元久元年七

月、門類に示されたる捉である。一は珍山門、起請文、上人が專修を弘め給ふが故に、眞言止觀が衰亡すると云ふ讒言起る。依つて元久元年十一月、聖覺を執筆として、山門の座主へ上られたる起請文にして、源空性師無不ゞ好ゞ化導「而有ゞ謗說「由ゞ不ゞ得ゞ已とあり。斷じて僻說を傳弘せざる旨、詰ゞ先賢之古蹟ゞに過ぎずと雪ひ給うた。證ゞ北越ゞ書は、北越に流行せる一念義が邪法なる旨を示し給うた。承元三年六月の年曆あり。蓋し勝尾寺に於いて認め給へる書である。諸方答書は、兵部卿基親と空阿彌陀佛とに賜はりたる返書なるが、何づれも勝尾寺に於いての作であらう。拾遺漢語燈錄一、三昧發得記。附勢感聖僧記。二、淨土隨聞記。附熊野祥瑞記。三、答ゞ傳陸門ゞ書の三篇を收載してゐる。中に就いて三昧發得記は、建久九年正月十七日恒例の別時念佛の後ち、淨土の依正莊嚴を觀しく觀照せられし旨を自記し給うた。法然上人行狀畫圖卷七に「かの三昧發得の記は、上人存日の間は披露なし。勢觀房遺跡を相承の後、之を披見せられけり」とあり。されば大谷の廟塔が、嘉祿年間に山門の僧兵に破壞せられし後、四條天皇の文曆の頃、勢觀房源智が大谷の舊廟並に僧房を復興せる時、此の三昧發得記を手に入れたのである。夢感聖僧記も行狀畫圖卷七に出づる者と大いに同じ。淨土隨聞記は、前述の如く醍醐本の法然上人傳記と大旨同じく、唯だ辭句が多少異るのみである。是れ勢觀房が、上人から傳承せる法門物語を記述したものである。答ゞ傳陸ゞ書は、九條殿下の問に答ふる書である。於に且徴ゞ弟子善惠ゞ今明之間拜ゞ侍セム閤下ゞとあり。是れ九條傳三上、月輪殿御不審事と題する條下に符合する記述である。蓋し九條傳は、此の狀に取材して、一の疑、又一の疑とを分解して、それに上人の請文(答)をあげて讀み易く叙述し、被ゞ召候弟子の僧善惠房は今明日中に進ずべく候と附叙してゐる。案答ゞ傳陸ゞ書は、光明寺公(善惠房の勸化が混說せらるゝに似ず候)に盡く。更に餘談あるべからず。(今回達書)

漢語八轉聲 ❶(日)Kan-go-hat-ten-sei ❷一卷 ❸存 ❹基辨(享保三—寶政三A.D. 1718—1791)撰 ❺明和八刊 ❻(正大、一〇六・一八三)(京大、日大未・一九八)(高大、寄・一・五一)(京專)

漢語八轉聲學則 ❶(日) Kan-go-hat-ten-sei-gaku-soku. 漢語八轉聲學則 ❷一卷 ❸存 ❹基辨(享保三—寶政三A.D. 1718—1791)撰 ❺明和八刊 ❻(谷大、長保・二三三)(正大、一〇六・一五六・一〇六・四二)(龍大、研佛)

漢口本願寺創建願末 ❶(日) Kan-kō-hon-gwan-ji-sō-ken-gan-matsu. ❷一卷 ❸存 ❹田中哲學編 ❻刊本(龍大、一九四・二)

漢光類聚 ❶(日) Kan-kō-rui-jū. 天台傳南岳心要鈔、漢光類聚鈔 ❷四卷 ❸存、大正七四・三七三No. 2371、大日本佛教全書第一七 ❹東陽坊忠尊(治曆元—保延四A.D. 1065—1138) ❺大治三(A.D. 1128)

❻本書は「天台傳南岳心要」を忠尊が注解したものである。漢光類聚なる題號は忠尊が大治三年七月晦日に叡山山王の十禪師社に參籠した時、權現の告示によつたのである。權現の告げとは「十禪師權現は本地は忉利附鬼の薩埵(彌勒菩薩のこと。十禪師の本地は一般には地藏とするが、まれに彌勒とすることがある。本書はその一例)であるが、垂迹しては禪漢と號する。禪漢が本書を守護しその法光を增すから漢光鈔と題すべきである」といふのである。南岳心要は血脈(卷四)によれば多寶塔大牟尼尊が南岳大師に授け、南岳は天台大師に授け、天台—灌頂—智威—惠威—玄朗—湛然—道邃—行滿—傳教大師—慈覺大師—惠亮—滿賀—良源—源信—覺超—勝範—長章—忠尊と次第に相承してゐる。但しこの心要と共に「法花略玄」と「文句要義」とも併せて傳へた。忠尊は心要の注解を記したのみでなく、種々の要義を錄したといふ。心要は摩訶止觀の要文を鈔錄したもの。摩訶止觀は法華經の精神を天台大師の見識によつて述べてゐる。換言すれば釋迦佛の語を天台大師が傳に若つて說いたものといへる。故に本書も亦「釋迦佛が忠尊の心中に入つて錄せしめたものである」(十禪師の神告)といへる。本書は「南岳心要」は機と法との二種の口傳の相承したものである。法の口傳は止觀の內證による境智不二門と證同有相門との二門に分つ。境智不二門は天眞獨朗の法體を明し、證同有相門は境智亡況本解成立すれば一々の修行も證悟も行住坐臥悉く皆止觀の正傳であると說くのである。これを傳教大師は道邃に傳つて一言で傳へた。次に機の口傳は傳教大師の心地四重の機を口傳するものを取る。四重の機とは、一、には次第昇出の機。二、には本住不下の機。三、には本住不進の機。四、には二相不立の機。傳教大師は私に第五に證修有相の機を加へて五重の機を口傳してゐる。本書は傳教大師將來台州錄に「摩訶止觀心要一卷八紙」を指すものであらう。然るに台州錄には「南岳書」とも「南岳釋」とも記してない。そこで「故阿闍梨」の說であるとして「此の心要は章安が天台南岳塔中口傳の異義を書き寫したものし」といふ。この說によれば傳教大師將來越州錄の「止觀記中異義一卷蓮座主記天台沙門乾淑集」を指すが如くにも考へられる。乍然、前者は現存の「天台傳南岳心要一卷六紙」と同一であるかが不明であり、後者の現存本は今の心要とは全く別である。但し本書は現存の「天台傳南岳心要」を註解したものであることは明瞭である。本書の云ふ所によれば台州錄越州錄の巡官錄には記してないが、傳教大師は道邃和尙から貞元二十一年六月二十四日に龍興寺禪樂淨土院に在つて「略義と略文と心要」とを授けられたのである。このことは隱身錄には記してあるといふ。この說は頗る疑ひがある。また本書によると摩訶止觀十卷を廣略の合本とし、第一大意の章を略止觀とし摩訶止觀十卷全部を廣止觀としてゐる。次に一家の相承には

宗旨宗款の二種がある。傳款大師は道邃行滿に傳つて一家天台の法門を傳へた。道邃相承によれば四款五時本迹の法門は宗款相承。止觀心要の實說は宗旨相承。宗旨相承を自行化他に分つ。自行門は一念三千の觀であり、化他門は四性推撿と空無生觀と一心三觀との三門に分ち、又は境智不二と證同有相との二門にも分つ。證同有相門を九重に分つて相傳し、これを宗旨心要の口傳といふ。この宗款相承は禮那流に宗旨相承は惠心流に傳つてゐる(三頁上。一〇九頁下)又教行證三重の口傳の內では今の心要は教行の口傳である。證分の心要は相傳すべきものではない。教相を以つて眞理を定め、教の如くに修行するのが今の心要である。教相を四教とな す。一、は應同局情教。爾前の教相をいふ。二、は破同局情教。爾前滯權の局情を破同して諸法實相を開顯する法花迹門の所說。三、は本覺教。法花本門の脣諦常住三千本來の實義を明すもの。四、は直顯眞實教。今の心要に述ぶる所の六即十章の文字が皆不思議法然の自用、華思本妙の形である。行門も亦四重に分つ。爾前・迹門・本門・觀心がそれ。今の心要の行は普迹本の教門の行を捨てゝ不思議未分の自體の行である。一心三觀・一念三千・四性推撿等は普未分の重の實體である。この教行證三重の血脈の意を得て天台傳の悟りを得べきである。要するに本書は多寶塔中の相承を記したものである。上記の如く止觀の六即十章を道邃相承を正とし行滿相承を傍として口傳法門を詳述したものであるが、これが果して「忠尊の記」であるか疑ふ時は直ちに然りとは答へ難い點が多々ある。第一は引用文の大藏は現存書には記されてゐないこと。第二は偽書若しくは書名だけで實存しない書を僞作して引用文に用いてゐること。第三は史實に適合しないものが多い。第四は日蓮上人の用いた文上文底の如き寶味の說(佛全一七ノ一三頁上)がある。第五は「略義・略文の註釋」(佛全一七ノ二一頁上)を記したこと。これが佛全一六に收載してある見聞・聞書であれば四〇頁上四一頁下等に「私ㄱㄱ御義」「私云ㄱㄱ」とあることによつて鈴明以後の惠心流行皇坊流の一派の筆になつたものといはねばならぬ。第六は直建の圓人に解行具足の人、唯信無餘の人、唯聞不解の人の三機を立てること(三〇頁上)。第七は正修止觀を別時の一念三千、常用の一念三千、臨終の一念三千、に分つこと(二七頁上。七一頁上)等。ところが三九頁には「傳教大師から都率聖超に至る六代の間は口傳を筆記しなかつたが、都率は少々註したけれども多くは口決を本としてゐた。余(忠尊)は末代の童蒙のために委細に註した」とある。「余」を「忠尊」とすれば何等の疑ひもないのであるが、「余」とは假託したものであると考へれば上記の如く頗る多方面から疑點が續出するのである。何れにしても本書は日本天台の中古に於ける口傳法門を研究する者の好資料たることには何等の史的價値に輕重はない。猶一言したいことは本書の姉妹篇とも認むべきものが傳教大師の著述中に加へられてゐることである。即ち修禪寺決、傳法偈、牛頭決、七面相承口決等がそれである。 (田島德晉)

漢三和尙語錄 ❶(日) Kan-san-wa-shō-go-roku. ❷一卷 ❸存 ❹澄三道一(—文政八A.D. 1825)述 ❼(參考) 禪籍目錄

漢詩二首 ❶(日)Kan-shi-ni-shu. ❷一卷 ❸存、傳教大師全集第四 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三 A.D. 767—822)作

❻一首は傳教大師最澄が弘仁七年(A.D. 八一六)大阪四天王寺の聖德太子廟に參拜して讚詠した五言律。この詩は傳教大師の日本天台宗は支那天台宗そのものではなく聖德太子の教へに基いた天台宗であることを證明する唯一の史料。光定の一心戒文卷中(全集別卷一九七頁)に出づ。

次の一首は紅葉溪の聯であつて最澄が空海へ送つたものと傳へられてゐる。この聯は最澄が比叡山に山居してゐる有樣を如實に表現してゐる名句。 (田島德晉)

漢巴四部四阿含互照錄 ❶(日) Kan-pa-shi-bu-shi-a-gon-go-shō-roku. 赤沼目錄 ❷一卷 ❸存 ❹赤沼智善著 ❻(一)漢巴四阿含四部對照。(イ)長阿含經。(ロ)中阿含經。(ハ)雜阿含經。(ニ)增一阿含經。(二)巴漢四部四阿含對照。(ヤ)Dīgha nikāya. (ロ)Majjhima nikāya. (ハ)Saṃyutta nikāya. (ニ)Aṅguttara nikāya. (三)附錄。(イ)別譯雜阿含經。(ロ)雜阿含經。(ハ)七處三觀經。(ニ)梵文阿含經。(ホ)西藏文阿含經。

(四)補遺。

❺昭和四刊 ❼名古屋硫摩閣

漢文類聚 ❶(日) Kan-bun-rui-ju. 宣疏集 ❷一卷 ❸存 ❹寫本(正大、一〇八・二二)

漢滿蒙四體合璧大藏全呪 ❶(日) Kan-man-mō-shi-tai-gat-tsai-dai-zō-zen-shu. (支)Han-man-Meng-zō-chi-hi-ta-tsang-chuan-chou. ❷八十八卷 ❸存 ❹上海商務印書館編 ❺乾隆二三刊 ❻(谷大、一〇一・一二二)(高大、寄・一・三〇)

漢和對照妙法蓮華經 ❶(日)Kan-wa-tai-shō-myō-hō-ren-ge-kyō. ❷八卷 ❸存 ❹鳥地大等(明治八—昭和二A.D. 1875—1927)編 ❺大正七刊 ❻東京明治書院

監軍使再修經藏院記 ❶(日)Kan-gun-shi-sai-shū-kyō-zō-in-ki.(支)Chien-chun-shih-tsai-hsiu-ching-tsang-yüan-chi. ❷一卷 ❸缺 ❼(參考) 智證大師請來目錄

監事所記錄 ❶(日)Kan-ji-sho-ki-roku. ❷一卷 ❸存 ❻嘉永元寫(龍大、別藏)文久元寫(龍大、別藏)慶應四寫(龍大、別藏)

監事萬檢錄 ❶(日)Kan-ji-yorozu-shirabe-roku. ❷一卷 ❸存 ❺弘化四寫 ❻(龍大、別藏)

潤底隱者記 ❶(日) Kan-tei-in-ja-

Ki. ❹缺
❺阿娑縛抄北斗帖（大日本佛教全書第四〇阿娑縛抄第六、P. 84）に云く「北斗集（洞底隠者集）。安海集、大教房記同之。素流云、東塔南谷藥恒撰。玄師云、道場供奉作也、東塔南谷道場房也。北斗護摩抄、南山隠者集也」云云。
❼（参考）本朝台祖撰述聚都書目

潤亭函底鈔 ❶（日）Kan-tei-kan-tei-shō. ❷三卷 ❸存 ❹日具（應永三〇—文龜元A. D. 1424—1501）述、日重（—明治三八A. D. 1905）記 ❺明治二九寫 ❻（立大、DO・六三）

諫王經 ❶（日）Kann-ō-gyō.（支）Chien-wang-ching.（梵）Rājāvavādaka.（藏）Hphags-pa rgyal-po la gdams-pa shes-bya-ba theg-pa-chen-poḥi mdo（Skt. Ārya-rājāvavādaka nāma mahāyānasūtra）❷一卷 ❸存、大正一四・七八五Zo. 514、館宙六、卍一〇・六、北2256女、南270女、元278女、明北244才、落234才、麗260傷、天267女、指243傷、法253傷、至235得、明南273才、Nj. 248 ❹沮渠京聲（—和平五A. D. 464）譯
❺極めて短少の經。平易な散文にて書かる。佛が舍衛國祇樹給孤獨園に在つた時、來詣した不難先尼王に王治に就いて爲された說法を記してゐる。佛は王に對し王は正法を以て治め、節度を失ぜず、慈心を以て人民を養育し、民事を統理して倨狂せざるを勸め、王者と言へども人間たる以上老病死の苦あり、人世は無常にて、王が区下多く、財寶に富み、園林廣く、榮華であつても、一segment 死の時が來れば、群臣人民が泣き悲んでも免れない。往昔の諸王は榮榮榮貴であつたが、隱れて今は見るを得ない。之れは無常の明かな論しである。王は經典を思ふこと無く、侯言を受けず、忠諫を受け、節度を以て治め、地獄酷治之痛を長るべく、生活を貪り、殺生をなすべからず、孝順にて父母を慈養し、沙門に供事し、老人を尊敬し、慈心を以て財寶を民に惠與して共に歡ぶべし、と說法されてゐる。王は弟子と爲つて五戒を受けたと。
佛は出世間の說法のみでなく、王治等について自らの佛教的立場より王者を教化した例として一の貴重な文獻である。
❼（参考）三實紀第一〇、内典錄第四、譯經圖紀第三、開元錄第五、貞元錄第八（平等通昭）

諫王經 ❶（日）Kann-ō-kyō. 現代意譯諫王經 ❷一卷 ❸存、現代意譯佛教經典叢書第一二

諫王經 ❶（日）Kann-ō-gyō.（支）Chien-wang-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❷（参考）法經錄第三、武周錄第三

諫曉神明記 ❶（日）Kan-gyō-shinmei-ki. ❷一卷 ❸存、萬代龜鏡錄之第二 ❹寫本（谷大、餘大・五八四）

諫曉八幡鈔 ❶（日）Kan-gyō-hachiman-shō. 諫曉鈔、八幡鈔 ❷一卷 ❸存、日蓮聖人御遺文。原文對照口語譯日蓮上人全集第二 ❹日蓮（貞應元—弘安五A. D. 1222—1282）述 ❺弘安三（A. D. 1280）
❻日蓮が弘安三年十二月身延に於て述作した書。
鎌倉八幡宮炎上に就て、こは日本國を救ふ日蓮を氏子たる鎌倉幕府が迫害するのを法華經守護の八幡大菩薩が所詞しないからか、日、月、四天に讃賞されたのであらうか、又は八幡大菩薩及教主釋尊の垂迹であるから、其の寶殿を燒いて諸法の國を捨て天に上られたのであらう。然らば八幡大菩薩は必ずや法華經の行者が日本國に居るとすれば其の頂きにやどられるに相違ないと、八幡大菩薩の法華經の行者守護を諫曉したものである。
尙ほ此書の末文には有名な左の如き日本佛法興隆の一文がある。「天竺國をば月氏國と申すは佛の出現し給ふべき名也。扶桑國をば日本國と申すあに聖人出で給はざらむ。月は西より東に向へり、月氏の佛法東へ流るべき相也。日は東より西へ入る日本の佛法月氏へかへるべき瑞相なり。月は光あきらかならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり、五五百歲の長き闇を照すべき瑞相也」。
❼錄内啓蒙三十二、御書鈔二〇、錄内拾遺六、錄内扶老一二等（馬田行啓）

諫三禪和乘車子歌 ❶（日）Kan-zan-zen-wa-jō-shā-shi-ka.（支）Chien-san-chan-ho-ch'eng-tzu-ko. ❷一卷 ❸存 ❹法雲（元祿六—寶保元A. D. 1693—1741）撰 ❺寫本（龍大、一九七一・八）

諫迷論 ❶（日）Kan-mei-ron. ❷十卷 ❸存 ❹日蓮（—永應三A. D. 1654）撰 ❺（京大、日大未・五五六）（龍大、研佛）（智、え六・右・九）慶安三刊（谷大、餘大・四一〇）（立大、AO五・二五—三〇）

諫母草 ❶（日）Kan-bo-sō. ❷一卷 ❸存 ❹愛雲述 ❺文化一三刊（正大、一五五五・六二）安永七刊（正大、一五五五・五九、六一）明治八刊（京大、日大未・六四七）明和八刊（龍大、二六八四・一六一）

諫苑遺芳 ❶（日）Kann-en-i-hō. ❷一卷 ❸存、四河入海之内 ❹太岳周崇（貞和元—應永三〇A. D. 1345—1423）述 ❼（参考）日本禪林撰述書目

諫墨禪 ❶（日）Kan-boku-zen. ❷一卷 ❸存 ❹性潡高泉（寛永一〇—元祿八A. D. 1633—1695）述、道清編 ❼（参考）禪籍目錄

諫林院等集 ❶（日）Kan-rin-in-tō-shū.（支）Han-lin-yüan-teng-chi. ❷一卷 ❸缺 ❼（参考）傳教大師將來越州錄

諫林胡蘆集 ❶（日）Kan-rin-ko-ro-shū. ❷十七卷 ❸存、五山文學全集詩文部 ❹登徐周麟（永享一二—永正一五A. D. 1440—1518）述
❺後土御門天皇を始め足利足澄等の當時の貴紳に歸依せられ、等持院、鹿苑寺、相國寺に歷住し、後柏原天皇永正十五年三月二日（A. D. 1518）壽七十九にて示寂せる、景徐周麟禪師の語要詩偈等十七卷で、五山文學

全集に收むる所は、上堂二卷、雲溪一卷の語要を除いた詩文十四卷である。此の十四卷本の第三卷詩の部を撿韭書類從に「宜竹殘稿」として輯錄してある。今、五山文學全集の十四卷本に據れば、第一卷は横川景三、月舟壽桂等の當時の五山禪僧の詩山住院の賀疏、第二卷は學人に授與した道號、第三卷至第六卷は叙情叙事の詩、第七卷は文、第八卷は字說、銘、跋、第九卷は字說、書、第十卷は像賛、韻、第十一卷は賦賛、第十二卷は足利義滿等及び諸尊宿の爲の象炬、第十三卷は足利義政等の追善に際しての拈香、第十四卷は足利義滿、赤松氏等の忌辰に際しての陞座の法語である。卷七卷九に足利義澄の命によつて草した遣朝鮮國書を收めて居る。
❼（参考）扶桑禪林僧寶傳、日本禪林撰述書目（大久保堅璃）

翰林五鳳集 ❶（日）Kan-rin-go-hō-shū. ❷六十四卷 ❸存、大日本佛教全書第一四四—一四六 ❹以心崇傳（永祿一二—寛永一〇A. D. 1569—1633）等編
❺後水尾天皇が五山詩僧の詩偈を、當時の五山禪僧等數十名に命じて書寫編錄せしめ、以心崇傳に序を、剛外令柔に跋を撰せしめられたもので、義堂、絕海、策彦、村庵、虎關、天隱、江西、仲芳、横川、惟肖、心田、萬里等數十名の五山詩僧の述作を集め、誠に彩色絢爛たるものがある。後水尾天皇元和九年七月二十九日（A. D. 1623）崇傳の撰に成る序によれば、宋太宗の時、賈黃中、宋白、李至、呂蒙正、蘇易簡の時代の俊風たる五人が翰林學士に榮進した故事より、元和九年秀忠家光兩將軍が參內し嗣子相印を佩し列第三員共に榮を奬たる五瑞に因んで本書の書名を採つたのである。崇傳は三代將軍家光に於ける天海僧正と共に二代將軍に於ける金地院崇傳は天下の黑衣の宰相と稱せられて居た。跋文は同年六月東福寺二百三十世剛外令柔の撰、書寫擬錄に當つた五山の禪僧は、建仁寺利峰東鋭、南禪寺英房景洪、建長寺最岳元良等を始め、相國、天龍の諸尊宿並に東福の剛外も參加して居る。全六十四卷を、春、試筆、夏、秋、冬、招寄分、雜和韵、和韵、送行、雜花坤門、雜人倫、雜氣形門、雜生植、雜食器、雜器財、雲岡、扇面、本朝名賢、本朝人名、道號、支那人名、孝純、戀、語雜、旅泊、感懷、祝讚の二十七部門に分け、其の部門の中に同種の內容に屬するものを類聚し、閱讀者に便して居るのは、五山禪僧の詩を諸種の題目の下に一括して閱讀し得るものとして、極めて好都合のものである。
❼（参考）日本禪林撰述書目（大久保堅璃）

翰林殘稿 ❶（日）Kan-rin-zan-kō. ❷四卷 ❸存 ❹周顒（旃室）（後花園帝頃？A. D. 1429—1464）述 ❺東坡詩抄 ❼（参考）日本禪林撰述書目、禪籍目錄

憨休禪師語錄 ❶（日）Kan-kyū-zen-ji-go-roku. ❷六卷 ❸存 ❹惠休 ❼（参考）禪籍目錄

憨休禪師敲空遺響 ❶（日）Kan-kyū-zen-ji-kō-kō-i-kyō. ❷四卷 ❸存 ❹惠休 ❼（参考）禪籍目錄

憨山大師夢遊全集 ❶（日）Kan-zan-dai-shi-mu-yū-zen-shū.（支）Han-shan-ta-shih-meng-yu-ch'üan-chi. 憨山夢遊集、夢遊全集 ❷五十五卷 ❸存、卍續二・三二・二—五 ❹明憨山德清（嘉靖二五—天啓三A. D. 1546—1623）語、明代編著、通炯共編
❺本書は、紫柏、雲棲と共に明末の三大宗師と稱せられる憨山德清禪師の語錄で編著、通炯等これを編錄し、劉起相重校して、明の永曆十四年（A. D. 1660）に成つたもので、初め錢謙益の校讐により編して四十卷としたものである。續藏本に於ては、本書の卷四十一より卷四十四に收められた撰厳懸鏡、法華擊節、撰厳補注、撰伽補遺の四部は釋教部へ別出して居る。
その列次の大要を示せば、卷一に像賛序記目錄、卷二至十二に法語。卷十三至十八に書簡。卷十九至二十六に序、記。卷二十七至三十に塔銘、傳。卷三十一至三十五に題跋、贊。卷三十六に頌、箴、銘。卷三十七至四十に偈、說、疏文。卷四十一に撰厳懸鏡（別出）。卷四十二に法華擊節（別出）。卷四十三に撰厳補注（別出）。卷四十四に撰伽補遺（別出）、並に大學決疑。卷四十五、六に憨山の諸彈の論說。卷四十七至四十九に夢遊詩集。卷五十至五十一に示衆の語要、法語、常住清規。卷五十三、四に自叙年譜を敕め天啓二年七十七歲までを自叙し、聖年示寂の年は上足の弟子福善が續記して居る。卷五十五は憨山の塔銘二種。傳。塔院碑記。諸人の輓詩。法眷等の書狀。舊序である。全佛禪に關する內容の說要が頗る多いのは注目すべきである。（大久保堅璃）

憨山夢遊集 ❶（日）Kan-zan-mu-yū-shū.（支）Kan-shan-meng-yu-chi. 憨山大師夢遊全集、夢遊全集 ❷二十卷 ❸存、卍續二・三二・二—五 ❹明憨山德清（嘉靖二五—天啓三A. D. 1546—1623）語、福善、通炯共編 ❼（参考）禪籍目錄

憨初禪師語錄 ❶（日）Kan-sho-zen-ji-go-roku. ❷四卷 ❸存 ❹憨初 ❼（参考）禪籍目錄

憨予還禪師語錄 ❶（日）Kann-yo-zen-zen-ji-go-roku.（支）Kan-yü-hsien-ch'an-shih-yü-lu. ❷六卷 ❸存 ❼（参考）禪籍目錄

寰中和尚傳 ❶（日）Kwan-chū-shō-den. ❸存、撿韭書類從第九
❺肥後國飽託郡花園村柿原（舊地名、柿原村）萬歲山成道寺開山寰中元志（寰中一作寰仲）和尙の傳記である。寰中は同國合志郡尾足村の人にして俗姓小足、女常信が天滿宮に祷りて得たる天神の申子なりと傳へて居る。臨濟宗南禪寺派下の同國菊池郡陵府の熊耳山正觀寺に投じて出家し、京都建仁寺西來院、南禪寺等に寓し、中華に入りて元の佛日普照慧璡禪師楚石梵琦和尙に參じ、歸朝して正觀寺八世の住持と成り、寺中に西鶴軒（一作栖鶴軒）を建て、嘉吉元年（A. D. 1441）少貳高經が足利幕府に叛きたるを以て大內教世と共に是を討ち豪勇を現したりと云ふ彼の菊池持朝公の請に應じて成道寺を賜め八十三歲にて同寺に寂し

た。菊池風土記卷四に據れば、寶中の楚石梵琦禪師に參じたのは十七歲の時であると云ふ。（大久保堅璋）

簡境十策 ❶(B)Kan-kyō-jū-saku. (支)Chien-ching-shih-tse. ❸缺 ❹宋柏庭善月(紹興一九—淳祐元 A. D. 1149—1241)撰 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

韓國開敎論 ❶(B)Kan-koku-kai-kyō-ron. ❷一卷 ❸存 ❹加藤文敎著 ❺明治三刊 ❾(帝國、八二・二一四)

韓長老詩文集 ❶(B)Kan-chō-rō-shi-bun-shū. ❸存 ❹文英清錄(元和七 A. D. 1621)撰 ❼(參考) 禪籍目錄

環溪和尙語錄 ❶(B)Kwan-kei-wa-jō-go-roku. (支)Huan-chi-wei-ho-shang-yu-lu. 環溪惟一禪師語錄 ❷一卷 ❸存、卍續二・二七・一 ❹元環溪惟一(—至元一九 A. D. 1283—)語、曇此編 ❾寫本(京大、續・一七カ・五)(帝國、八二二・九)

環溪和尙語錄並行狀 ❶(B)Kwan-kei-wa-jō-go-roku-narabini-gyō-jō. (支)Huan-chi-ho-shang-yu-lu ze hsing-chuang. ❷一卷 ❸存 ❹元環溪惟一(—至元一九 A. D. 1283—)語、曇此編 ❼(參考) 禪籍目錄

環溪惟一禪師語錄 ❶(B)Kwan-kei-yui-itsi-zen-ji-go-roku. (支)Huan-chi-wei-i-ch'an-shih-yu-lu. ❷一卷 ❸存、卍續二・二七・一 ❹元環溪惟一(—至元一九 A. D. 1283—)語、曇此編 ❾南岳下二十世環溪惟一禪師の九會語錄を法嗣たる秀州海鹽天寧寺曇此和尙が編錄し、元世祖至元十九年自撰の環溪惟一禪師行狀を添へ、同二十年正月普明の跋、同年四月章鑑の序並に同年十月既望(A. D. 1283)黃龍の覺性の跋を附して梓行したもので、校訂者は慶元府天童山の普明である。上下二卷、卷上に九會の語錄を收む。卽ち南宋理宗淳祐六年十月初住地たる建寧府瑞巖禪寺入院語錄、臨江軍瑞筌山惠力禪寺語錄、隆興府雲潭山寶峯禪寺語錄、同府黃龍山崇恩禪寺語錄、建昌軍寶峯禪寺語錄、瑞州蓍壁山報恩光孝禪寺語錄、袁州仰山太平興國禪寺語錄、福州雪峯崇聖禪寺語錄並に南宋度宗咸淳九年三月十一日慶元府太白名山天童景德禪寺入寺語錄を收めて居る。卷下は小參、拈古、頌古、普說、法語、佛祖讚、偈頌、題跋、小佛事、自讚である。卷末に曇此の撰に成る環溪惟一禪師行狀を載せて居る。（大久保堅璋）

還源叢書 ❶(B)Kwan-gen-sō-sho. ❷六卷 ❸存 ❹法洲(明和二—天保一〇 A. D. 1765—1839)著、益谷末吉編 ❺明治二七刊 ❾(正大、一五七・五三)

還山錄 ❶(B)Kwan-zan-roku. 益霖道霈禪師還山錄、鼓山寶藏禪師還山錄 ❷四卷 ❸存、卍續二・三〇・五 ❹清益霖道霈(—康熙三四 A. D. 1695—)語、興燈(清聖祖代 A. D. 1662—1722)等編

關山和尙百則公案 ❶(B)Kwan-zan-o-shō-hyaku-soku-kō-an. ❷一卷 ❸存 ❹瑟玄關山(建治三—延文五 A. D. 1277—1360)撰 ❼(參考) 禪籍目錄

關山國師別傳 ❶(B)Kwan-zan-koku-shi-betsu-den. 關山國師別傳附圓通大應國師塔銘 ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大、研史)

關邪護法策錄 ❶(B)Kan-ja-go-hō-saku-roku. ❷一卷 ❸存 ❹香山院龍溪(寶政一二—明治一八 A. D. 1800—1885)撰 ❾寫本(谷大、宗大・一一一六)

關中創立戒壇圖經 ❶(B)Kwan-chū-sō-ritsu-kai-dan-zu-kyō. (支)Kuan-chung-chuang-li-chieh-t'an-t'u-ching. 戒壇圖經 ❷一卷 ❸存、大正四五・八〇七 No. 1892、卍續二・一〇・一 ❹道宣(開皇一六—乾封二 A. D. 596—667) ❺唐乾封二(A. D. 667)

❶道宣が乾封二年二月八日終南山北澧郷之院、長安縣淸官鄕淨業寺に戒壇を創立した事に就て、戒壇に關する事柄を律と史傳とに依り自說をも加へて發表したもの。自序あり。本文十章に分る。一、戒壇元結敎興は樣至比丘が佛陀に結戒受戒の處に立壇を請ひたるを以て三壇が祇樹園中に創立されたことを。二、戒壇立名圖號は戒壇と戒場の別、祇洹戒壇の構造を。三、戒壇形重相狀は三重壇、北天竺烏仗那國東の石壇、戒壇周圍の守護神について寶唱の神鬼錄を引き。四、戒壇高下廣狹は烏仗那石壇は高一丈許、廣二百步、祇樹園の六十四院と異說、支那戒壇建立史を。五、戒壇大界內外は大界と戒壇の關係を。六、戒壇結法先後は戒場を先づ制し後に大界を結することを。七、戒壇集僧這近は先づ自然に集めて戒場を結し後に五六比丘を引いて大界を結することを。八、戒壇作業成敗は約相集僧、依相三唱、明事義、作業に分けて行法の儀格なることを。九、戒壇受持儀軌は受戒の行儀、創立戒壇に來つて受戒したる者三十九人の處寺人名を擧げ。十、戒壇功能這近は結界地の不滅を說き。十一、戒壇發菩薩戒は開壇創受戒場之壇文、戒壇之銘、戒壇佛舍利之銘、荊州等界寺無行の戒壇舍利贊、大唐中原關輔戒壇儀を載す。卷末に景德院惟定の宋紹興二十二年刊記あり、中に音て罰悟の刊本ありしを記す。

❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第二、東域傳燈錄卷下、諸宗章疏錄卷二 ❺宋紹興二十二年刊の覆刻（大野法道）

關通和尙行業記 ❶(B)Kwan-tsū-wa-jō-gyō-gō-ki. ❷三卷 ❸存、淨土宗全書第一八 ❹道弟編輯

❶關通は淨土宗。元祿九年四月八日尾張國海西郡大成郷橫井氏に生る。一蓮社向譽と號し別に雲介子と稱す。字は無畏。六歲の頃より歸佛の念あり、初め同郡小茂井村專德寺吳峰に投ず。爾來剃度授戒を終へ後ち江戸に出で芝增上寺にて學業を勤策す。時に敎界の風儀みだれ、淨土宗內また一向專修の法門に違背することを認めらる。依つて敎首和上、靈潭和上などの高德を訪ねて菩薩戒を重受して己が身を律し、口稱名號を盛んにして餘宗に紿るゝが如き法式を排して一向專念無量壽佛を主眼とし佛前の莊嚴の如きも簡易にして嚴格たらしむ。世にこれを關通流と呼ぶ。東海道、中仙道を敎化し、京洛に入りて本三本木關通寺、北野

轉法輪寺などに據りて道俗を敎化し、當時の官僧に刺戟を與ふ。爲めに忌避に觸れ度々迫害をうけたることさへあり。また反面熱烈なる求道の士女を集め得たり。其の感化の力は後世遙及び、今に至るまで關通流と稱し追慕せられてゐる。明和七年(A. D. 1770)二月二日七十五歲にして京都北野下の森轉法輪寺にて寂を示す。本書三卷はこの和尙の一代の行業と法語とを併せ輯む。版木今尙ほ轉法輪寺(現今右京區龍安寺山田町に移轉)にあり。卷頭に天明四年天龍瑞紫桂洲の題文と享和元年七月華頂山大僧正仰譽の撰になる序文とを掲ぐ。而して終りに遺弟の筆になる跋文を載す。跋文は本書編輯の顚末を明すものにして、これより先きに覺山の眞名の傳、安藝光明院學信の假名の傳、徒弟等が筆錄せる傳等ありしを仰譽大僧正の御せにより三十三回忌(享和二)を記念して改め編輯せるものがこの三卷なりといふ。

覺山の眞名文の傳、學信の假名文の傳共に見當らず。現今、寫本にて十三卷傳と一卷傳と別に傳はる。十三卷傳を檢するに其の中、前九卷にて斷まり殘四卷は前の抄錄なり。惟ふに是等十三卷傳は前述の遺弟達の蒐輯せる傳にして本書の前身ならんか。又一卷傳は學信の假名傳ならんかと思はるれど尙ほ考證を要す。

❺享和二刊 ❾(谷大、宗大・一〇三二)(龍大、二九六五・一一四)(正大、一五一〇・二三〇)(京大、一・二一カ・五)(帝國、二〇九・六九)（井川定慶）

關通話類 ❶(B)Kwan-tsū-wa-rui. ❷一卷 ❸存 ❹常川恕澄著 ❺大正六刊 ❾(龍大、研眞)

與關通書 ❶(B)Kwan-tsū-ni-atō-sho. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大、宗大・一五七八)

關典錄 ❶(B)Kwan-ten-roku. ❷三卷 ❸存 ❾(哲、こ・七・中・四)

關東往還記 ❶(B)Kwan-tō-ō-kan-ki. ❸存 ❹思圓容尊(建仁元—正應三 A. D. 1201—1290)記 ❼(參考) 禪籍目錄

關東下向日記 ❶(B)Kwan-tō-ge-kō-nik-ki. 要法寺一作關東下向日記 ❷一卷 ❸存 ❹日東記 ❾寫本(立大、D O・三一三)原本(本隆寺藏)

關東古義並諸宗法度 ❶(B)Kwan-tō-kō-gi-narabini-sho-shū-hat-to. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

關東萬覺鑑 ❶(B) Kwan-tō-yorozu-kō-kan. ❷一卷 ❸存 ❺天保六—一四寫 ❾(龍大、別藏)

關東來緣記 ❶(B)Kwan-tō-rai-en-ki. ❷三卷 ❸缺 ❹荻俊記 ❼(參考) 淨土眞宗敎典志第二

關東和讃喋題目 ❶(B)Kwan-tō-wa-san-kyō-dai-moku. ❷一卷 ❸存 ❹石川流宜(—元祿頃 A. D. 1688—1703—) ❺享保六刊 ❾(帝國、一八九・二〇二)

關南集 ❶(B)Kwan-nan-shū. ❷一卷 ❸存 ❹祖珍編 ❺文化一二刊 ❾(駒大)

鹹水喩經 ❶(B) Kan-sui-yu-kyō. (支)Hsien-shui-yu-ching. (巴)A. VI. 15 (Udakupamā. ❷一卷 ❸存、大正一・八一一 No. 99、續浴八、卍一四・一、北678止、南634止、元676止、明北554續、清653續、龍674容、天671止、指623容、法653容、至995登、明南523續、Nj. 558 ❺西晉代(A. D. 265—316)譯

❶この經典は中四水喩經(大正一・四二四a)、A. VI. 15 (Udakupamā. 增三九・三水喩(大正二・七二九c)と、この經典の四本があり、中四水喩經最も委しく、他の三本は大同小異である。水中に臥する人と、水より出で、還沒する人と乃至、水を出で、岸に住し、水を渡りて彼岸の人となれる人と七人を喩へて、人の罪惡に溺れ居る狀態より證悟の高き位に至る七段階を編はしたるものである。（赤沼智善）

鹹味 ❶(B)Kan-mi. ❷一卷 ❸存 ❹本宮惠滿著 ❺明治一九刊 ❾(京大、一・二四カ・一)

勸王持五戒經 ❶(B)Kwan-ō-ji-go-kai-kyō. (支)Ch'uan-wang-chih-wu-chieh-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、武周錄第二二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

勸往歌 ❶(B) Kwan-ō-ka. ❷一卷 ❸存 ❹朝鮮佛敎總書刊行豫定書目

勸戒指南 ❶(B)Kwan-kai-shi-nan. ❷一卷 ❸存、菩薩戒落草談附錄 ❺明治三六刊 ❾東京佛敎館

勸誡海東記 ❶(B)Kwan-kai-kai-ki. ❷一卷 ❸存 ❹善藏院惠然(元祿六—寶曆一四 A. D. 1693—1764)述 ❾寫本(谷大、宗大・二〇一四)

勸誡鈔 ❶(B)Kwan-kai-shō. ❷一卷 ❸存 ❹存眞(大永二—天正二 A. D. 1522—1574)述 ❾寫本(龍大、二六八四・六五)

勸學院用諸表白 ❶(B)Kwan-gaku-in-yō-sho-hyō-byaku. ❷一括 ❸存 ❺足利時代寫 ❾(寶龜院)

勸學會十講論題 ❶(B) Kwan-gaku-kai-jū-kō-ron-dai. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(高大、寄・一・四八)

勸學會打集草案 ❶(B) Kwan-gaku-kai-da-shū-an. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(高大、寄・一・四八)

勸學記 ❶(B)Kwan-gak-ki. 學徒敎誡 ❷一卷 ❸存、日本大藏經法相宗章疏第二解說上人小章集之內 ❹眞慶(久壽二—建保元 A. D. 1155—1213)記

❶本書は、當時學徒の爲に、十ケ條の淸規を設けられたものであつて、行文平易、何人にも直ちに了解し得らるゝのである。而して又其實踐刺行に當つては、實に至難中の至難かと思はれる點がある。それは第一條に晝夜十二時の時間割を示して、子丑休息寅卯學等と規定せるが如き、睡眠時間は僅に二時卽ち四時間しかないのである。此の一事を見ても、如何に當時南都の先德が、經說遺誡の奉行に念であつたかゞ知られる。そして其他九ケ條の規定に至つては、何れも皆理健眞實善く當時僧界の念

處を断いて居る。

本書の著者は、日本大藏經には解脫上人小章集に編入されて居るが、實は良遍僧都作と傳說されて居るものである。行文の平易流暢き並に理健親切さは、常に良遍著書中に見るものに酷似し、讀者をして覺へず著者の溫容風丰に接するが如き感があるのである。而して何れも解脫上人系統の學徒規定であるから、解脫上人著と傳說されしも無理からぬことゝ思はれる。(佐伯良謙)

勸學泰神抄 ❶(B)Kwan-gaku-tai-jin-shō. ❷三卷 ❸存 ❺大正一二寫 ❹(谷大、餘大・三六七二)

勸行有證經 ❶(B) Kwan-gyō-u-shō-kyō. (支)Chüan-hsing-yü-chêng-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❻雜阿含經の抄出 ❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第四、仁壽錄第三、靜泰錄第三、第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

勸愚鈔 ❶(B)Kwan-ku-shō. ❷一卷 ❸存 ❹刊本(立大、A〇四・二九八)

勸化一聖電 ❶(B)Kwan-ka-i-shō-den. ❷三卷 ❸存 ❹龍正(一寶曆九A.D.1759—)述 ❺寶曆一〇刊 ❹(正大、一〇九・二〇八)

勸化王經 ❶(B) Kwan-ka-ō-kyō. (支)Chüan-hua-wang-ching. ❷一卷 ❸缺 ❼(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第一五、貞元錄第二五

勸化甘露談 ❶(B)Kwan-ka-kan-ro-dan. 眞宗安心勸化甘露談 ❷五卷 ❸存 ❹法麻述 ❺安永三刊 ❹(龍大、一〇五五・一一)

勸化徑路修行頌 ❶(B)Kwan-ka-kei-ro-shu-gyō-ju. ❷一首 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第一

勸化求道集 ❶(B) Kwan-ka-gu-dō-shū. ❷七卷 ❸存 ❹慶察(一享保一五A.D.1730)撰 ❺享保八刊 ❹(正大、一八五九・一一×京大、一・二六ゟ・五)

勸化言要集 ❶(B)Kwan-ka-gen-yō-shū. ❷一卷 ❼(參考) 淨土眞宗聖教目錄

勸化讃仰鈔 ❶(B)Kwan-ka-san-gyō-shō. ❷五卷 ❸存 ❹刊本(龍大、一〇五五・一二)

勸化至要鈔 ❶(B)Kwan-ka-shi-yō-shō. ❷五卷 ❸存 ❹了意(一元祿四A.D.1691)述 ❺享保四刊 ❹(龍大、一〇五五・一四)

勸化取要鈔 ❶(B)Kwan-ka-shu-yō-shō. ❷六卷 ❸存 ❹智顗述 ❺寶曆七刊 ❹(龍大、一〇五五・一三)

勸化唱道知津 ❶(B) Kwan-ka-shō-dō-chi-shin. ❷五卷 ❸存 ❹觀道(寶曆二—文政五A.D.1752—1822)述 ❺寶曆一〇刊 ❹(龍大、一〇五五・一五)

勸化世事談 ❶(B)Kwan-ka-se-ji-dan. ❷一卷 ❸存 ❹圓信(一明和七A.D.1770—)述 ❺嘉永二刊 ❹(正大、一〇九・二〇九)

勸化大旨 ❶(B) Kwan-ka-tai-shi. ❷一卷 ❸存、異義集(了詳寫本)第一〇、假名聖教(恵空筆寫八十八部)、眞宗大系第三六 ❹傳、蓮如(應永二二—明應八A.D.1415—1499)

❻本書は、往生禮讃の日夜無常偈以下、初夜、中夜、後夜、晨朝、日中等の諸偈を始め、十因、唯信鈔、往生講式等の諸典の文語を抄出し、生死無常、轉變常なきは世相であり、最も厭離すべきは人間生活の現實相であることを說き明かし、彌陀佛の本願を賴みて、西方淨土を願生せよと勸めてある。而して、此の淨土に生れ往くのは、彌陀佛の本願を信ずるに因るのであるが、そのことを明にせんため、更に淨土見聞鈔の文を引き、本願を信ずるとは、如何なることであるかを示し「うたがひなくおもふを信とはまうすなり」と云ひ、此の信は偏邊本願によることが說いてある。此處で一段落を切り「あなかしこ」の結語を置き、更に、章段を改めて、「袖中寶」の標語とも見るべき語を記して、蓮如上人小部集の中、袖中鈔と題する典籍の一部を抄出してある。其處には、五問答が列記せられてあり、第一問答では、一切衆生が、法性眞如の都から流出したのは、一念の無明によるものであることが述べてある。第二問答では、法性眞如の中にあつて、佛と差別のなかつた衆生が、如何にして無明に誘はれて、迷界に流出するに至つたかを說き明して、初一念の無明は、法性に類似して居り、殆んどその別がないために、衆生は神別することが出來ず、不ゞ知不ゞ知のうちに、無明に誘はれて、法性を迷ぎかるやうになつたのであると云うてある。第三問答では、かく衆生は、無明に誘はれて迷界に沈論することとなつたのであるが、法性眞如の界では、衆生と平等であると云はれて居る佛が、どうして、衆生の如くに、迷界へ沈論しないかと云ふ疑問に對して、佛は迷の相をしろしめさず、衆生本來法性であると、見られるからであると云うてある。第四問答では、阿彌陀佛の本願力によつて救はれ、淨土に往生したものは、再び迷ふことがないと說き、第五問答では、阿彌陀佛の本願力によつて彌陀佛の淨土に往生したものは、無念無相の法性界に還元するのであるが、又淨土の土德として、再び迷界の衆生救濟のため、出現することを說いてある。僧祐師は此勸化大旨を批評して「いかなる愚僧のおぼへかきやらん、引つられたる諸文、前後文理あひ屬せず。三途の苦をとくもおはらず、妄語をいましむる文をいたし、なにの義もなきに、女人の五障をあかし、或は、涅槃經四大毒蛇の文をば、三毒憍慢のことゝとりなしなんど、さま〳〵不都合なること多し。無始の罪障を懺悔して、彌陀を念ずるは、これ大乘懺悔の法也等、一向蓮師のおぼせられそもなきことを云云せる、わけもなきもの也」と云うて居るが、內容を通觀するに、此の批評は、當を得て居るやうである。而して、此の典籍の後半部である「袖中寶」については「一如師事などの、こざかしきものゝ所作ならん、無相無念空寂の一理を、宗祖と認めたるさま、一乘の圓說は、つゆもしらざるものゝ作と見えたり。ことに、全く宗義に惑なきものなり」と云うてある。

此の僧祐の批評は、袖中寶と云ふ典籍全部の思想に對するものである。然し、此の勸化大旨に、袖中寶と云うて、引用してあるのは、袖中寶の全部でないから、上記の批評は、そのまゝ用ゐることは出來ないが、此の勸化大旨所說の思想を、考察するに、參考とすべきものと思ふのである。又妙音院了祥師は、「先德所記として、淨土見聞鈔を長引す、知名願各別の計にして、無相無念の眞理に歸するを、一念歸命として、一向專修とは、この無念無想の念佛なるなり、正に一遍と救を同ずるなり」と云ひ、全體としては、知識歸命計の部類に屬すべきものと云うて居る。

尙ほ、撰述者については、首題の下に蓮如撰と明確に記してあるから、蓮如撰とするが當然のやうに考へられる。然し、その所說思想を考察する時、或は別人の作にあらざるかと云ふ疑を起すのである。故に、泰嵩師は、初の部分は、文和蓮師のやうであるが、多少疑問とすべき處もあり、後の袖中寶と細註を置き、無明法性の問答を列ねてある章段は、存覺上人の著作のやうにも見られるから、眞僞未決の書であると云うて居り、了祥師も、警海の作として居るから、今は、著作者不明として置く。

❼(參考) 淨土眞宗聖教目錄、淨土眞宗教典志第一 ❹惠空寫傳本(谷大、宗丙・四八)元祿五刊(谷大、宗甲・一七) ❹和原屋清右衛門 (可西大秀)

勸化大要抄 ❶(B) Kwan-ka-tai-yō-shō. ❷一卷 ❼(參考) 淨土眞宗聖教目錄

勸化短偈鈔 ❶(B)Kwan-ka-tan-ge-shō. 淨土二十九種莊嚴勸化短偈鈔 ❷六卷 ❸存 ❹盜阜東清述 ❺寬保三刊 ❹(龍大、一〇五五・一六)

勸化南針抄 ❶(B)Kwan-ka-nan-shin-shō. ❷七卷 ❸存 ❹慶察(一享保一五A.D.1730)述 ❺寶永八刊 ❹(正大、一五五八・九—一〇×龍大、一〇五五・一七)

勸化辨能鈔 ❶(B)Kwan-ka-ben-nō-shō. 五部要文勸化辨能鈔 ❷七卷 ❸存 ❹一寒述 ❺元文四刊 ❹(龍大、一〇五五・一八)

勸化法音辨類鈔 ❶(B)Kwan-ka-hō-on-ben-rui-shō. ❷七卷或六卷 ❸存 ❹厚譽(一享保一五A.D.1730—)述 ❺享保一五刊 ❹(正大、一五五八・一二—一三)(谷大、宗大・八三〇)

勸化法要鈔 ❶(B)Kwan-ka-hō-yō-shō. ❷五卷 ❸存 ❹開敎述 ❺寶曆一〇刊 ❹(龍大、一〇五五・二〇)

勸化本朝新因緣集 ❶(B)Kwan-ka-hon-chō-shin-in-en-shū. ❷五卷 ❸存 ❹洗盛集 ❺安永六刊 ❹(正大、一〇九・二〇五×龍大、二六八九・三)

勸化茗談集 ❶(B)Kwan-ka-mei-dan-shū. 茗談集 ❷一卷 ❸存 ❹南溟撰 ❺大正四刊

勸化命信鈔 ❶(B)Kwan-ka-mei-shin-shō. ❷五卷 ❸存 ❹白嶺述 ❺明和六刊 ❹(龍大、一〇五五・二七)

勸化譽辨鈔 ❶(B)Kwan-ka-yo-ben-shō. ❷五卷 ❸存 ❹蓮清述 ❺寶曆六刊 ❹(龍大、一〇五五・二四—二五)

勸化要文 ❶(B)Kwan-ka-yō-mon. ❷六卷 ❸存 ❺享保五刊 ❹(龍大、一〇五五・二二)

勸化要文便蒙鈔 ❶(B)Kwan-ka-yō-mon-ben-mō-shō. ❷十卷 ❸存 ❹了意(一元祿四A.D.1691)述 ❺元祿九刊 ❹(龍大、一〇五五・二二)

勸化翼 ❶(B)Kwan-ka-yoku. ❷三卷 ❸存 ❺明和二刊 ❹(龍大、一〇五五・二三)

勸化論語 ❶(B)Kwan-ka-ron-go. ❷三卷 ❸存 ❹菅原智洞(一享保五A.D.1720—)述 ❹(京專×哲・七・左・四)

勸許可次第 ❶(B)Kwan-ka-kan-shi-dai. ❷二帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(寶龜院)

勸向西方編 ❶(B)Kwan-kō-sai-hō-hen. ❷三卷 ❸存 ❹菅原智洞(一享保五A.D.1720—)述、書法等記 ❺安永七刊 ❹(龍大、一〇五五・三二×京專)

勸考 ❶(B)Kwan-kō. 孝奬授・釋迦八相・二十四聖勸考 ❷一冊 ❸存 ❹大仙等述 ❹寫本(龍大、一〇五五・二九)

勸考 ❶(B)Kwan-kō. 神明三ケ條・本願成就文勸考 ❷一冊 ❸存 ❹淨心房述 ❹寫本(龍大、一〇五五・三一)

勸考 ❶(B)Kwan-kō. 觀經・述懷・現利和讃・十二曦名勸考 ❷一冊 ❸存 ❹寫本(龍大、一〇五五・二八)

勸考 ❶(B)Kwan-kō. 信心靈得・彌陀初會・樸師法話勸考 ❷一冊 ❸存 ❹寫本(龍大、一〇五五・三〇)

勸修寺一流印信 ❶(B) Kwan-jū-ji-ichi-ryū-in-jin. ❷一軸 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(寶龜院)

勸修寺緣起 ❶(B)Kwan-jū-ji-en-gi. ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第一一九寺誌叢書第三、群書類從第一六、新校群書類從第一八、國文東方佛敎叢書第六

❻本書は假名書の勸修寺緣起である。內容は誰れも知れる如く、藤原高藤卿と宮道家との關係より、勸修寺の起れる來由を陳べたものである。(土宜覺了)

勸修寺灌頂 ❶(B) Kwan-jū-kwan-jō. ❷一帖 ❸存、學念流勸五帖之內 ❹寫本(金剛三昧院)

勸修寺灌頂記 ❶(B)Kwan-jū-kwan-jō-ki. ❷一軸 ❸存 ❺永和四寫 ❹(寶善提院)

勸修寺長吏次第 ❶(B) Kwan-jū-chō-ri-shi-dai. ❷一卷 ❸存、續群書類從第四、史籍集覽第一二

❻本書は、勸修寺長吏初代大僧都濟高より第三十二代無品法親王尊孝に至る迄、即ち醍醐天皇の延長年間より、中御門天皇の享保に至る迄の約八百年間の長吏の御名と、其年表的略傳とを附した最も整うたる長吏次第である。然し其史料的價値から云へば、勸修寺文書の中に採收せられて居る別當次

第の方が優れて居る。尚此長吏次第の最初に勤修寺の創建は醍醐寺よりは以前にありと記せるは、勤修寺文書の別當次第の律師承俊傳中にある承俊奏狀などに依て正當の事であることも判る。（土宜覺了）

勤修寺法務初度作法 ❶(日) Kwan-ju-ji-hō-mu-hō-do-sa-hō ❷一帖 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・六五)

勤修寺文書 ❶(日) Kwan-ju-ji-mon-jo ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三

❺今一口に勤修寺文書と云ふも、之れを內容より判斷すれば明かに二部よりなる。勤修寺と勤修寺諸記抜萃との二部之れである。勤修寺の方は、其最初に承曆三年八月四日參御寺之次、相琳寺家注書也。於不審事者、所琳申別當僧正年（故殿御抄也、御自筆正文在左中將爲陰御許之）とあれば、勤修寺の堂舍、西堂長者次第、勤修雜事、別當次第並に御八講事を白河天皇の承曆三年八月四日に記述したることを、寶信法務が認割したるものである。以て當時の勤修寺の盛大の有樣が想像出來る。次に勤修寺抜萃記の方は天正十三年七月十五日の文書をも採收しあれば、何と云ふことなしに、鎌倉、室町時代の四五の文書を採收したるものである。唯其中に室町時代に於ける持明院の消革を略記せるは注意すべき事である。（土宜覺了）

勤修寺理明房私鈔目錄 ❶(日) Kwan-ju-ji-ri-myō-bō-shi-shō-mokuroku. ❷一軸 ❸存 ❹寫本(金剛三昧院)

勤修寺流隨聞記 ❶(日) Kwan-ju-ji-ryū-zui-mon-ki. ❷一卷 ❸存 ❹定晩(一寫曆二A. D. 1327)記 ❺永正四寫 ❻(帝國、か・二二)

勤修抄 ❶(日) Kwan-ju-shō. ❷二軸 ❸存 ❹建久三寫 ❺(高大、寄・一・六四)

勤修定慧結社文 ❶(日) Kwan-jō-ji-hō-e-ka-ha-mon. (支) Chin-hsiu-hsi-tsu-hui-chieh-wen. 定慧結社文 ❷一卷 ❸存、禪門規要卷下 ❹朝鮮普照智訥(正隆三—大安二A. D. 1158—1210)撰 ❺朝鮮隆熙二刊 ❻(駒大)

勤修淨業歌 ❶(日) Kwan-jō-jō-gō-ka. 法の手鑑 ❷一卷 ❸存 ❹曾祇撰 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第二 ❺寛政三刊 ❻(龍大)

勤修淨土三章 ❶(日) Kwan-jō-jō-do-san-shō. (支) Chin-hsiu-ching-tu-san-chang. ❸存、雲棲法彙第一六 ❹明株宏(嘉靖二一—萬曆四〇A. D. 1542—1612)一說萬曆四三年八一寂)述

勤修淨土切要 ❶(日) Kwan-jō-jō-do-setsu-yō. (支) Chin-hsiu-ching-tu-chie-yao. 淨土切要 ❷一卷 ❸存、卍續二・一四・五 ❹清代眞益頌纂述

❺本書はまた單に淨土切要とも云はれ、首に無相室と潘曾瑩との序文があり、終に黃贊元の跋がある。是によると、本書は言言金玉、字々珠璣、念佛して淨土に往生すべきを勸むる最良の書として、贊元が成興五年(一八五五)、特志を以て印行したのを、同十一年に重刻したものが、底本とされてゐる。

序には念佛の功德利益を述べ、本文には(一)發心して念佛すべきを說き、(二)念佛するに當つては、實心を以てして、有名無實なるべからざることを云ひ、(三)念佛しては、專ら淨土に往生すべきことを求めて、世の組報を求むべからざるを說く、(四)淨土に往生せんには四種の正行・六種の助行を、雙べ修すべきことを說き、更に修行の人と兼ね、努めて人倫五常を守るべきこと道個二敎を奉ずるもの、亦念佛すべきを勸め、念佛の儀式、發願廻向文、十念法を加へ、更に錫明の念佛不可邪敎、念佛不可當錄用と龍序の寄庫無益說を附錄とし、最後に臨終舟裕要語を添へてゐる。

本書が念佛を勸むるに當つては、主として淨土の三經に據つてゐることは、その引用する所によつて明であるが、特に求生淨土の段には、四十八願中の第十八願の文を引いて、大悲願力の攝受を述べ、修行の人も世法を輕んずべからざるを說ける所などは、注意すべきである。（龍澤成淳）

勤修念佛記 ❶(日) Kwan-jō-nen-butsu-ki. ❷二卷 ❸存 ❹一條兼良(應永九—文明一三A. D. 1402—1481)記 ❺刊本(谷大、宗大・七七六)(正大、一五五三・一二三、一五三三・一二八)

勤十六觀堂緣起 ❶(日) Kwan-jū-ro-kwan-dō-en-gi. ❷一卷 ❸缺 ❹俊碩(仁安元—安貞元A. D. 1166—1227)記 ❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

勤章五重義 ❶(日) Kwan-shō-gi-jō. ❷一卷 ❸存、四法大意開記附錄 ❺寫本(龍大、研究)

勤奬天台宗年分學生八箇條式 ❶(日) Kwan-shō-ten-dai-shū-nen-bun-gaku-shō-hach-ko-jō-shiki. ❷二卷 ❸缺 ❹最澄(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—812)撰 ❺弘仁九(A. D. 818) ❼(參考) 山家組德撰述篇目集卷上、本朝台組撰述書部書目

勤請頌 ❶(日) Kwan-jō-ju. ❷一紙 ❸存 ❹德川時代寫 ❺寶龜院)

勤請集 ❶(日) Kwan-jō-shū. ❷一卷 ❸存 ❹仁海(天曆九—永承元A. D. 955—1046)一說永承元、年九六寂)撰 ❺寫本(京大、日大未・三三七)寛延三寫(高大、寄・一七二)

勤信因果小子訓 ❶(日) Kwan-shin-in-ga-shō-shi-kun. ❷一卷 ❸存 ❺(正大、一〇八・一〇七)(晉、て・七・中・三四)

勤信黃葉譚 ❶(日) Kwan-shin-ō-yō-dan. ❷三卷 ❸存 ❹慈辨撰 ❺寶曆七刊 ❻(龍大、二六九二・三)(立大、A〇四・三一五、A〇四・二八四—二八六)

勤信義談鈔 ❶(日) Kwan-shin-gi-dan-shō. ❷三卷 ❸存 ❹了章(—元祿四A. D. 1691)述 ❺寶曆一一刊 ❻(谷大、宗大・二七〇七)(龍大、一〇五五・三三)

勤信念佛集 ❶(日) Kwan-shin-nen-butsu-shū. 勤信念佛法語 ❷一卷 ❸存 ❹了章(—元祿四A. D. 1691)集 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第二 ❻刊本(谷大、宗大・一四一三)

二六二八)

勤心詠歌 ❶(日) Kwan-jin-e-i-ka. ❸存、岡文東方佛教叢書第八 ❹無能(元祿元—享保三A. D. 1688—1718)作

❺無能上人の浮業の餘暇、折にふれて念死念佛の懷を述べ、勤化の意を詠じたる和歌五十首を撰びたるものである。

うき舟の身をば難波によするとも
心なとめそよしとあしとに

を卷頭として、極重惡人無他方便唯稱彌陀往生極樂の意を述べて、

あしかりし身は難波江のすて小舟
たゝひくなみや南無阿彌陀佛

と詠み、世人薄俗共淨不染之事を

いそぐべきみちをはとはで難波江の
よしあしことに身をつくすかな

念死念佛を

たゆみなき羊の歩み日につれて
せまる影にも南無阿彌陀佛

遠路遂委捷心淨域と題して

心をば寶の池にすましめて
あとをとをさかる夢の世の中

小欲知足を

なにごともなきにたりぬる身ぞやすき
おもひもとむる心なければ

とよみたるたぐひ、最も聞えたるものとしては

のちの世もこの世も共に南無阿彌陀佛
佛まかせの身こそやすけれ

などの歌であるが、これ等で略全篇が察知される。（中谷在輝）

勤心往生論 ❶(日) Kwan-jin-ō-jō-ron. (支) Chin-hsin-wang-shen-lun. ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一五 ❹忍空(—仁平四A. D. 1154)述 ❺仁平四(A. D. 1154)

❻本書冒頭に十五の問答を設け、二十種のことを擧げて穢土の濁惡を厭ふべく、淨土の妙境を欣ぶべきことを說き、淨土を願求する方法は念佛であるが、天台の觀意三昧、慧心の隨事念佛は境に託して觀を修する作法である。今茲に其要領を三門に區分して說明する。一に心性は本來の佛性、二に諸法は骨彌陀、三に歷緣對境の念佛である。初に心性は本來佛性であると云ふは、眞如實相は眞佛である、如來藏の理は心性である。然らば心佛の同異は水波の如き關係である。其心體は不可思議にして有と云へば無所得、無と云へば一念に三千の諸法を具して寂然たるものである。三諦圓融の觀を以て彌陀を念ずれば眞の念佛である。次に諸法骨彌陀と云ふは阿彌陀を譯して無量壽、無量光、淸淨光と云ふ。無量壽は三世の利益無限なる事を顯はす法身の德である。無量光は十方世界を利益し攝取する意を顯はす報若の德である。淸淨光は業垢を消除する利益の用を顯はす解脫の德である。佛德は此三德に過ぎない。此三德圓滿の彌陀を念ずれば無量罪を滅除して本覺の性を悟り淨土に往生するのである。三に歷緣對境とは且らく六廛に就て念相を說明すれば一に境に卽して念佛し、二に事に寄せて欣求し、三に緣に託して願願するのである。初に境に卽して念佛すとは六廛の境界悉く彌陀法身の顯現なることを觀ずるのである。行住坐臥にも此念を退せざれば三昧現前して彌陀の眞佛を見上つることを得るのである。次に事に寄せて淨土を欣求すとは慧心の云ふが如く直ちに念佛すること能はざるものは事に寄託して其心を勸發するのである。卽ち一々の相好莊嚴を憶念して淨土を欣ぶのである。三に緣に託して厭離すとは穢土の諸境は解脫の障礙なることを深く心に止めて執着を離るゝことに努め、境界に對する毎に厭離の心を强めて稱名念佛すれば三昧成就して決定往生を得るのである。

❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄 ❽永應三刊(正大、一五三三・六六) (岩崎敏玄)

勤心往生論直解 ❶(日) Kwan-jin-ō-jō-ron-jiki-kai. ❷二卷 ❸存 ❹盤齋(—享保一五A. D. 1730)述 ❺刊本(谷大、宗大・一五三一三)元祿二刊(正大、一五三三・六八)(龍大、二六八一・一六二)(京大、日大未・五九八)

勤心往生論拙不解 ❶(日) Kwan-jin-ō-jō-ron-setsu-fu-ge. ❷一卷 ❸存 ❺寫本(谷大、宗大・一四一二)

勤心往生論分科 ❶(日) Kwan-jin-ō-jō-ron-bun-ka. ❷一卷 ❸存 ❺寫本(谷大、宗大・一四一四)

勤心往生論悲訓鈔 ❶(日) Kwan-jin-ō-jō-ron-hi-kun-shō. 勤心悲訓集 ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一五 ❹了譽聖問(—應永二七A. D. 1341—1420)述

❺本書は忍空が仁平四年に勤心往生論を作りし後二百五十三年を經て應永三年に著者が別到なる註釋を作つたものである。忍空は天台宗であり著者は淨土宗であるから兩宗に於て解釋を異にするものに對しては注意を加へて居る所もあるが、原本が天台の念佛を說くのであるから淨土宗とは大に其趣きを異にするものである。本書の分科は題目と釋文とに分ち、題目に能動所動門、修因得果門、能詮所詮門の三門を立て、釋文は普通の序分、正宗分、流通分の三科に分ちて文相を詳しく說明したものである。

❻慶安二刊(正大、一五三三・六七)永應三刊(龍大、二六八一・一六二)享保四寫(谷大、宗大・一四一一) (岩崎敏玄)

勤心往生論悲訓鈔講解玄談 ❶(日) Kwan-jin-ō-jō-ron-hi-kun-shō-kō-sen-dan. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・一四一四)

勤心往生論悲訓鈔拙解 ❶(日) Kwan-jin-ō-jō-ron-hi-kun-shō-setsu-ge. ❷一卷(卷上) ❸存 ❺寫本(谷大、宗大・一四一三)

勤心悲訓集 ❶(日) Kwan-jin-hi-kun-shū. 勤心往生論悲訓集 ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一五 ❹了譽聖問(—應永二七A. D. 1341—1420)述 ❼(參考) 淨土正依經論書籍目錄

勤進往生偈 ❶(日) Kwan-jin-ō-jō-ge. ❷一首 ❸缺 ❹源信(天慶五—寛仁元A. D. 942—1017)撰 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第一

勤進往生極樂義 ❶(日) Kwan-jin-ō-jō-go-ku-ra-gi. ❷一卷 ❸缺 ❷(參

考〕 唐土祖師禅師語録目録

観音経義疏 ❶(日) Kwan-jin-gaku-dō-kyō. (梵) Ch'üan-chiu-hsüeh-tao-ching. ❷一巻 ❸仏 ❹天竺僧(一説宋代)訳 紀元後223—253(A. D. 223—253)頃

❺観音経に関する注釈書。観音経義疏とも云う。略して「義疏」。

❻〔参考〕 国定遺産一五、国定遺産一四

観音経義疏 ❶(日) Kwan-jin-gaku-dō-kyō. (梵) Ch'üan-chin-hsüeh-tao-ching. ❷一巻 ❸仏 ❹天竺僧公賢

❺観音経に関する注釈書。観音経義疏とも云う。略して「義疏」。

❻〔参考〕 国定遺産一五、国定遺産一四

観音経記 ❶(日)Kwan-jin-zoku-shū-ki. ❷五巻 ❸仏 ❹釋山(本姓一〇一)天明七年A. D. 1725—1787)記 ❺〔参考〕 大日本仏教全書遺編所収本

観音寺 ❶(日)Kwan-jin-chō. ❷一巻 ❸仏 ❹本朝法華験記中の一説話。

❺観音経(本文上)一説話。紀元後A. D. 1295—1334(一)記 ❻〔参考〕 一九七・一五(国宝)(梵天・保天・三〇七八)所本(梵天・一〇三・五一)

観音義明令参照 ❶(日)Kwan-jin-yū-zū-nem-butsu-sho. ❷一巻 ❸仏 ❹浄土(梵天・保天・一七四五)

観天十二光 ❶(日)Kwan-zui-jū-ik-kwan. ❷十二巻 ❸仏

❹観音寺(現在)所蔵の日記。観音経文、観世音菩薩の霊験、内容は、仏教に関する説話、仏教的説話の霊験、内容は、仏教に関する説話、仏教的説話の霊験、内容は、仏教に関する説話、仏教的説話

観音菩薩心経 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)玄奘訳(唐代)

観音菩薩心経義疏 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-gi-sho. ❷1巻 ❸不 ❹(隋)吉蔵撰(隋代)

観音菩薩心経幽賛 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-yū-sai. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)窺基撰(唐代)

観音菩薩心経略疏 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄記 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄記文 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄記文聞 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄記文聞書 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄記文聞書見聞 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-kikigaki. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄記文聞書見聞抄 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄記文聞書見聞抄記 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄記文聞書見聞抄記文 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun. ❷1巻 ❸不 ❹(唐)智周撰(唐代)

観音菩薩心経略疏連珠記文鈔私記聞書見聞抄記文聞書見聞抄記文聞書見聞 ❶(日)Kwan-on-bosa-shin-kyō-ryaku-sho-renju-ki-mon-shō-shi-ki-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon-shō-ki-bun-kikigaki-kenmon

漢印記 ❶(日)Kwann-in-ki. ❷1巻 ❸各 ❹正和元年 ❺(家書目録)

漢羅 ❶(日)Kwan-gyō. (支)Kuan-ching. 四月八日羅漢 ❷1巻 ❸各 ❹火曜 ❺(参考) 田三郎記録四

漢頂 ❶(日)Kwan-jō. 漢頂小鈔 ❷宗叡(未詳—一人安四 A. D. 1074—1148)作 ❸(参考) 三家記録部目録

漢頂灌仏作法 ❶(日)Kwan-jō-a-ka-sa-hō. ❷1帖 ❸各 ❹(家書目録記)(家書記)

漢頂灌仏水汲作法 ❶(日)Kwan-jō-a-ka-mizu-kumi-sa-hō. ❷1帖 ❸各 ❹藤川時代写 ❺(家書記)(家書目録記)

漢頂印信 ❶(日)Kwan-jō-in-jin. 漢頂印信 ❷1巻 ❸各〃 法光大僧都全雲撰ヤ〃 日天天暦五年(安和元年)—天禄元年11 A. D. 774—835)記〃 書し給ひ給ふ。

❹又は漢頂印信とも名づけ奉る。正覚院の大阿闍梨全雲撰作者口伝に曰く、漢頂印信1巻と云ひ、真言宗灌頂儀式に印信1巻(中巻)に云ふ。之を云ふ時は先れも同子のやうなり。全雲撰伝授灌頂次第に頂印に真言宗の印信と言ひ、次に真言宗灌頂次第に印信と言ひ、次に真言宗灌頂次第に印信と言ひ、次に真言宗灌頂次第に

飾く左老病死の四苦を脱ると説く。

第二巻は佛、鷲提山中天帝石室に在せし時、諸の比丘等が惡魔毒蛇熊象獅猴等に逼害せられて各各驚走し不安にして證果することを得ざる狀態を見て、之に對して百七十二鬼神王の名字と其功德を説き之等の鬼神王を信ずれば一切の不安を除き去ることを得と説く。

第三巻は佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在せし時、修陀羅等七人の比丘尼等、諸の惡鬼神に惱されて精氣を失ひ、遂に其の苦惱を脱るゝ聖術を問はれた。時に佛は須彌山上より七萬及び大海中より五萬の鬼神を各〻召し來て此等不安の比丘尼聖を擁護することを說き鬼神の名字を擧げ其功德を詳說する。

第四巻は佛、羅閱祇國大精舍の中の一房に獨坐せし時、自ら思念すらく、我涅槃の後四部の弟子聖破戒無懺にして衆魔蠭起、邪惡人民を惱ます、我云何にして之を排除すべきやと。玆に於て佛は帝釋天の請により萬姓を守護し安穩にして邪惡を離れ諸魔の害を防がんために伊利寐羅等百神王の名字と其功德を詳說する。而して此等百神王の名字を記して帶持すれば身體無病心意無憂であると說く。

第五巻は佛、摩竭國に在せし時、城を去る千里の所に波羅閱國あり村民の宗主を迦羅那といふ。聖化來だ及ばずして災厄に惱害せられた。時に佛は目連に命じて迦羅那の爲に惡鬼神の災厄を除去せしむ。時に目連は佛の教勅を受け神通を現じ、來りて迦羅那の爲に大神呪を說き、迦羅那の危厄を免れしめた。猶ほ迦羅那は目連の說かれし大神呪の效驗の大なることを驚歎し、其師は誰なりや等と尋ね、目連をして我師は智慧弘廣三世の事に通達し、三十二相を以て莊嚴せる佛世尊なりと告げ、遂に迦羅那は佛の在所を尋ね佛に歸依して眞正の道を修行すと說く。又坐中に普觀菩薩あり。佛は普觀菩薩に請はれて東南西北中央の五方神王の名を說きて、此等五方の神王を受持すれば一切の災厄を去つて吉祥幸福を獲と說く。

第六巻は佛、鳩尸那城に在して入涅槃せんとする時、諸多の比丘等は同聲合掌して竊に阿難に如來滅後殯葬の法を問ひ、阿難は衆に代つて胡跪合掌して佛に、其法を問尋せらる。玆に於て佛は阿難の請を受けて殯葬の法は轉輪聖王と同じくせよと言ひて轉輪聖王の葬法を說き示さる。又更に塚墓の事を說く。曰く、佛涅槃の後は、遺身の舍利を以て塚墓を作り、其處に八萬四千の塔廟を起てゝ供養せよといひ、東南西北の四方灌頂章句たる神呪を說き、此の神呪を受持し塚墓を護持すれば鬼神の災厄を除いて善神の擁護を得と說く。

第七巻は佛、舍衛國に在せし時、帝釋天の請に應じて五方大神のことを說く。五方大神とは一、東方は寶遮阿加、身長一丈二尺、青色の衣を著け青氣を吐く。二、南方は摩呵祇千、身長一丈二尺赤色の衣を著け赤氣を吐く。三、西方は移兜涅羅、身長一丈二尺白色の衣を著け白氣を吐く。四、北方は摩訶伽尼、身長一丈二尺黑色の衣を著け黑氣を吐き。五、中央は烏呾羅嚩、身長一丈二尺黃色の衣を著け黃氣を吐くといひ、又多帋哆・曾伽羅・婆摩斯・坦婆那・曇婆羅・彌輪多・者那合等七鬼神を出し、此の神印を見聞すれば邪惡を退散することを得といひ又阿利陀女人神なるもの、佛の灌頂章句封印大神呪經を說くことを聞き佛の弟子と爲りて戒法を受けし因緣等を說く。

第八巻は佛、舍衛國に在せし時、世間天下の人民が諸の邪魅鬼神に惱害せらるゝことを怒み、過去七佛、八大菩薩、五百阿羅漢、十大弟子、三十三天、三十五龍王、三十三王、二十四鬼、四十九山精鬼等數多の名字をあげ此等の毒神鬼神等は能く人類の急難を救うて吉祥幸福を獲得せしむといひ又衆中に善可と稱する一居士あり、阿難に佛滅度の後大神呪經を讀誦する法を問ひ、阿難之に對して神呪經を讀誦せんと欲せば十方諸佛過去七佛菩薩阿羅漢及び諸天子善鬼神聖を香華供養すべし云々と說く。

第九巻は佛、王舍城竹林精舍に在せし時維耶離國に疫癘疾病流行し中毒し死者無數であつた。故に、阿難は佛に救護の法を請はれた。玆に於て佛は迦に五方龍王即ち東方青龍神王、南方赤龍神王、西方白龍神王、北方黑龍神王、中央黃龍神王等の上首の名字と其功德を說き、而も佛は、阿難に誰か能く龍王を召して、維耶離國に往くかと問ふ。時に衆中に一少年の比丘禪提有り、佛の教命を受けて其國に往き、人民の諸疾病を救治し、百姓を歡樂喜慶せしめたことを說く。

第十巻は佛、因沙崛山中に在せし時、梵王は長眉合掌して佛に一百の偈頌を以て神策と爲さんことを請はれた。玆に於て佛は未來五濁惡世像法の衆生は諸の疑惑多くて邪見に陷り眞正の道を識らざれば、之等を慈悲哀愍して、梵王の請を聽許され一百の偈頌を以て神策と爲すことを說かれたのである。

第十一巻は佛、鳩尸那城國娑羅雙樹の間に在して般涅槃せんとする時、十方國土無數の大衆天龍八部禽獸雜類皆佛所に到來して稽首作禮す。時に佛は若し疑ある者は今皆當に問ふべし云々と申さる。爾時に他方國土の菩薩と稱する菩薩あり、佛に對して十方國土に往生するに何の功德を修して往生すべきやと願生の因緣を問はれ、佛は普賢の請に應じて、東方(香林刹入精進菩薩)東南方(金林刹雲精進菩薩)南方(樂林刹不捨樂菩薩)西南方(寶林刹上精進菩薩)西方(華林刹智精進菩薩)西北方(金剛刹一乘度菩薩)北方(道林刹行精進菩薩)東北方(青蓮刹悲精進菩薩)下方(水精刹淨命精進菩薩)上方(欲林刹至誠精進菩薩)等十方淨土の相及び其佛號を唱すれば臨終の後必ず彼の淨土に往生することを得る因緣を說かる。

第十二巻は佛、維耶離城音樂樹下に在せし時、文殊師利菩薩は長跪叉手して世尊に未來像法の衆生の爲に過去諸佛の名字淸淨國土莊嚴の事を說きたまへと請はる。玆に於て世尊は、文殊師利に對し、東方に淨土ありて藥師琉璃光如來在すと告げ、是れよ

り藥師如來の十二上願を列擧して其の內容を述べ更に其淨土の莊嚴の相をば「此藥師琉璃光如來國土淸淨五濁無く愛欲なく惡垢なく白銀琉璃を以て地となし、宮殿樓閣悉く七寶を用ゆ亦西方無量壽國の如く異ることなし云々」と述べて此の佛を禮拜供養する功德を說かれる。玆に此經に藥師琉璃光佛本願功德經・灌頂章句十二神王結願呪經・拔除過罪生死得度經との三名あることを述べる。從て本經は藥師經五譯の一となる。以上灌頂經は雜密經とする。本經の譯者密多羅は高僧傳等によれば呪術に長じ孔雀王經を譯して神呪を明にし功驗彌盛なるものがあつたといふが猶ほ本經に就ては更に研究を要すべきものがある。

❷(注釋) 疏一巻(神藝)。疏二巻(堪興)。音義二巻。珠林一巻(行感) (岡田製昌)

灌頂經 ❶(日)Kwan-jō-kyō. (支)Kuan-ding-ching. ❷一巻 ❸長信經 ❹(參考) 出三藏記第五、法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四

灌頂經音義 ❶(日)Kwan-jō-kyō-on-gi. (支)Kuan-ding-ching-yin-i ❷二巻 ❸缺 ❹(參考) 東域傳燈目錄卷上

灌頂經疏 ❶(日)Kwan-jō-kyō-sho. (支)Kuan-ding-ching-shu. 灌頂疏 ❷二巻 ❸缺 ❹堪興(一朗)開元入D. 631—)述 ❺(參考) 東域傳燈目錄卷上

灌頂經疏 ❶(日)Kwan-jō-kyō-sho. (支) Kuan-ding-ching-shu. ❷一巻 ❸缺 ❹神叡撰 ❺(參考) 新編諸宗教藏總錄第一

灌頂口 ❶(日)Kwan-jō-ku. ❷一軸 ❸存 ❹元海(寬治七—保元元入D. 1093—1156)說 ❺天正一〇寫 ❻(寶龜院)

灌頂口決 ❶(日)Kwan-jō-ku-ketsu. ❷一巻 ❸存 ❹成賢(應保二—寬喜三入D. 1162—1231)記 ❺建久七(入D. 1196) ❻建久七年六月十一日より十四日迄、曼洞院に於て、勝賢より灌頂章位に關する唯授一人の大事口決を受けて記す(密教大辭典)

灌頂口決 ❶(日)Kwan-jō-ku-ketsu. ❷一軸 ❸存 ❹信助(永仁五—建武四入D. 1297—1337)口、弘元、了賢記 ❺元弘元(入D. 1331) ❻寬永一二寫 ❼(金剛三昧院)

灌頂口決 ❶(日)Kwan-jō-ku-ketsu. ❷一帖 ❹憲敎作 ❺(參考) 三寶院聖敎目錄

灌頂口決 ❶(日)Kwan-jō-ku-ketsu. ❷一帖 ❹賀茂空願上人如實(一寬元元入D. 1243—)口決 ❺(參考) 三寶院聖敎目錄

灌頂口決 ❶(日)Kwan-jō-ku-ketsu. ❷三帖 ❸存 ❹性善(延寶四—寶曆一三入D. 1676—1763)記 ❺文化一二寫 ❻(寶善提院)

灌頂口決抄 ❶(日)Kwan-jō-ku-ketsu-shō. 傳法灌頂作法口決抄 ❷一軸 ❸存 ❹室町時代寫 ❺(金剛三昧院)

灌頂口決條々 ❶(日)Kwan-jō-ku-ketsu-jō-jō. ❷一軸 ❸存 ❹(高大、寄・一・六八)

灌頂口決並卽位 ❶(日)Kwan-jō-ku-ketsu-narabini-sokui. ❷忠實記 ❸(參考) 三寶院聖敎目錄

灌頂口說 ❶(日)Kwan-jō-ku-setsu. ❷一巻 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・六八)

灌頂口傳 ❶(日)Kwan-jō-ku-den. ❷一軸 ❸存 ❹正和三寫 ❺(寶善提院)

灌頂口傳鈔 ❶(日)Kwan-jō-ku-den-shō. ❷一帖 ❸存 ❹長享二寫 ❺(金剛三昧院)

灌頂具目錄 ❶(日)Kwan-jō-gu-moku-roku. ❷一冊 ❸存 ❹德川時代寫 ❺(寶龜院)

灌頂觀中記 ❶(日)Kwan-jō-kwan-chū-ki. ❷定尊記 ❸(參考) 三寶院聖敎目錄

灌頂加行日記 ❶(日)Kwan-jō-ka-gyō-nik-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(金剛三昧院)

灌頂加行事 ❶(日)Kwan-jō-ka-gyō-ko-koto. ❷一巻 ❸存 ❹足利時代寫 ❺(寶龜院)

灌頂外儀法則 ❶(日)Kwan-jō-ge-gi-hō-soku. ❷一巻 ❸存 ❹亮淳(天文六—慶長七入D. 1537—1602)記 ❺元祿元寫 ❻(谷大、餘大・九九〇)

灌頂決義抄 ❶(日)Kwan-jō-ketsu-gi-shō. ❷四帖 ❸存 ❹寬正四寫 ❺(高大、寄・一・六八)

灌頂見合抄 ❶(日)Kwan-jō-ken-gō-shō. ❷一帖 ❸存 ❹足利中期寫 ❺(金剛三昧院)

灌頂見聞集 ❶(日)Kwan-jō-ken-mon-shū. ❷二巻 ❸覺超(天德四—長元七入D. 957—1034)說長元七、年八三寫撰 ❹(參考) 山家組德撰述篇目集卷下

灌頂後夜行記 ❶(日)Kwan-jō-go-ya-gyō-ki. 灌頂後夜行記金剛界 ❷一巻 ❸存 ❹寫本(京六、印哲N・六)

灌頂後夜法則 ❶(日)Kwan-jō-go-ya-hō-soku. 灌頂護摩法則胎藏界 ❷一帖 ❸存 ❹足利時代寫 ❺(高大、寄・一六八)

灌頂護摩 ❶(日)Kwan-jō-go-ma. ❷一帖 ❸存 ❹宥快(貞和元—應永二三入D. 1345—1415)記 ❺足利中期寫 ❻(金剛三昧院)

灌頂護摩 ❶(日)Kwan-jō-go-ma. ❷一帖 ❸存 ❹水祿七寫 ❺(寶善提院)

灌頂護摩 ❶(日)Kwan-jō-go-ma. ❷三帖 ❸存 ❹寬永三寶曆七寫 ❺(高大、寄・一・六八)

灌頂護摩口決 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-ku-ketsu. ❷一帖 ❸存 ❹文政八寫 (高大、寄・一・六八)寫本(寶龜院)

灌頂護摩作法 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❹成賢(應保二—寬喜三入D. 1162—1231)作 ❺寬政九寫 ❻(寶善提院)

灌頂護摩作法 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-sa-hō. 灌頂護摩次第 ❷一帖 ❸存 ❹榮海(弘安元—貞和三入D. 1278—1348)記 ❺寫本(金剛三昧院)

灌頂護摩次第 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-shi-dai. ❷成賢(應保二—寬喜三入D. 1162—1231)作 ❸(參考) 三寶院聖敎目錄

漢頂護摩大系 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-shi-dai. ❷1帖 ❸仏 ❹[illegible]1巻 ❺(東寺宝記)

漢頂護摩大系 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-shi-dai. 無四護摩大系抄明記法 ❷1帖 ❸仏 ❹宝永(〔illegible〕記)

漢頂護摩大系私記 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-shi-dai-shi-ki. ❷1帖 ❸仏 ❹宝徳1巻 ❺(〔illegible〕記)

漢頂護摩私記 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-shi-ki. ❷1帖 ❸仏 ❹[illegible]記 ❺天文1丸(A. D. 1550) ❻西院流無四護摩大系。

漢頂護摩供大系 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-jin-gu-shi-dai. ❷仏 ❹[illegible]記 ❺天正1巻(A. D. 1574) ❻宝永(〔illegible〕記)

漢頂護摩壇荼理 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-dan-ryō-ri. ❷1帖 ❸仏 ❹[illegible]時代写 ❺(東寺宝記)

漢頂護摩奉請法 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-narabini-jin-gu. ❷1巻 ❸(参考) 小野方[illegible]記考分

漢頂護摩表白 ❶(日)Kwan-jō-go-ma-hyō-byaku. ❷1巻 ❸仏 ❹宝永(〔illegible〕・天人)

漢頂作法 ❶(日)Kwan-jō-sa-hō. ❷1帖 ❸仏 ❹弘長(一〔illegible〕A. D. 1297) ❺[illegible]写 ❻(〔illegible〕記)

漢頂作法 ❶(日)Kwan-jō-sa-hō. 無四作法西院流 ❷七帖 ❸仏 ❹[illegible](一〔illegible〕A. D. 1258—1341)記 ❺[illegible]写(A. D. 1306) ❻[illegible]写 ❼(〔illegible〕記)

漢頂車流口決 ❶(日)Kwan-jō-sai-hi-ku-ketsu. ❷1帖 ❸仏 ❹[illegible]1巻 ❺(〔illegible〕記)

漢頂雑記 ❶(日)Kwan-jō-zak-ki. ❷[illegible]記([illegible]—[illegible]1巻)A. D. 1262.—1309)記 ❸(参考) [illegible]記考分

漢頂雑記 ❶(日)Kwan-jō-zak-ki. ❷1巻 ❸[illegible]記([illegible]—[illegible]巻1)A. D. 1249—1321) ❹[illegible]1巻(A. D. 1275) ❺(参考) 小野方[illegible]記考分

漢頂雑記書作法 ❶(日)Kwan-jō-zak-ki-chū-sa-hō. ❷1帖 ❸仏 ❹[illegible]写 ❺(東寺宝記)

漢頂雑事 ❶(日)Kwan-jō-zatsu-ji. ❷1巻 ❸仏 ❹[illegible](一〔illegible〕巻1)A. D. 1351) ❺(参考) 小野方[illegible]記考分

漢頂雑事私記 ❶(日)Kwan-jō-zatsu-ji-shi-ki. ❷1巻 ❸仏 ❹[illegible]記 ❺[illegible]中所写 ❻(〔illegible〕記)

漢頂雑業 ❶(日)Kwan-jō-zatsu-jō. ❷[illegible]([illegible]—[illegible]巻1)A. D. 1184—1252 1巻 ❸[illegible]巻1)A. D. 1178[illegible])巻 ❹(参考) 諸宗[illegible]

漢頂雑業 ❶(日)Kwan-jō-zatsu-jū. 無四雑記 ❷天巻 ❸仏 ❹[illegible]記 ❺[illegible]A. D. 1292)

❻[illegible]中の無四雑天巻なりと云ふ。[illegible]記[illegible]無四の天巻に相当するものなり。無四の法巻につきて[illegible]と云へり。[illegible]巻、[illegible]巻、[illegible]巻、

錄、可透錄、龍宗錄等外七種の目錄は何れも胎藏灌頂七日行事鈔と呼べり。但し修禪錄のみは胎藏灌頂行事鈔兩界各三卷と呼び胎藏界金剛界の行事鈔を綜合して呼んでゐる。本書に關して、樂邦の蓮邪正記には、延師撰「兩部灌頂行事鈔」は是順曉闍梨次第傳授作法也と云へり。可透果實何れも大師の撰とす。然るに修禪錄には本書を「右丹」部に錄し本朝台祖撰遂密部書目には本書を舉げ註記して蓮邪神正云私云此錄是義觀和尚之時所撰也一本批記在圓證和尚治山之時署判」と記してゐる。

本書は傳教大師入唐中順宗永貞元年四月越州龍興寺に於て順曉阿闍梨より兩部灌頂を傳授す。これは大師關政論に自記せり。即順曉傳授の作法と傳へらる。胎藏界灌頂七日間の行事を鈔記せるものである。即左の如し。

（上卷）

第一日—定惡乃至除三毒の三十三行事
第二日—師弟行事乃至結界の七行事
第三日—穿孔埋寶發行事乃至結界の五行事
第四日—結界乃至大結界の十七行事
第五日—行道乃至作壇の三行事

（中卷）

第六日—弟子十德乃至守護の四十一行事

（下卷）

第七日—作冠乃至示像の百十六行事

本書の內容は專ら大日經、義釋、菩悉地經集經等に依りて胎藏界灌頂の行儀を明らかにせるものにして本朝灌頂行事鈔として

は最も古き形式を留む。

灌頂七萬二千神王護比丘呪經（眞入亮忠）

❶(B)Kwan-jō-chichi-man-ni-sen-jinnō-shi-ko-jū-kyō (支) Kuan-ding-chi-wan-erh-chien-shen-wang-hu-pi-ch'iu-chou-ching. ❸存、灌頂經卷第一(大正二一No. 1331. 1)

灌頂實深記 ❶(B)Kwan-jō-jisin-ki. ❷一卷 ❸存 ❹盧匡(建久三—弘長三 A. D. 1192—1263)口、實深(建永元—建治三 A. D. 1206—1277)記

❺三寶院流の口決。初に三昧耶戒場儀式道具等に關する口決を述べ、次に三摩耶戒式及び兩界式につきて口傳を記す。(密教大辭典)

灌頂呪宮宅神王守鎭左右經

❶(B)Kwan-jō-ju-gu-taku-jin-o-shu-shin-sa-o-kyō (支) Kuan-ting-chou-kung-chai-shen-wang-shou-chih-tso-yu-ching. ❸存、灌頂經卷第五(大正二一 No. 1331. 5)

灌頂受暗誦 ❶(B)Kwan-jō-jō-an-ju. ❷五紙 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・六八)

灌頂受者作法 ❶(B)Kwan-jō-jō-sha-sa-hō. 灌頂受者作法三寶院 ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(實龜院)

灌頂受者用意 ❶(B)Kwan-jō-jō-sha-yō-i. ❸存 ❺德川時代寫 ❹(實龜院)

灌頂授與記 ❶(B)Kwan-jō-ju-yo-ki. ❷二卷 ❹宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)記 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三

灌頂誦經草 ❶(B)Kwan-jō-jū-kyō-sō. ❷一紙 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(實龜院)

灌頂集記 ❶(B)Kwan-jō-shū-ki. 玉日鈔 ❷四卷 ❸存 ❹興然(保安元—建仁三 A. D. 1122—1203)記 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❹寫本(石山寺)

灌頂集要 ❶(B)Kwan-jō-shū-yō. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(實善提院)

灌頂十二萬神王護比丘尼經

❶(B)Kwan-jō-jū-ni-man-jinnō-i-kyō (支) Kuan-ting-shih-erh-wan-shen-wang-hu-pi-ch'iu-ni-ching. ❸存、灌頂經卷第二(大正二一 No. 1331. 2)

灌頂重口訣 ❶(B)Kwan-jō-jū-kuketsu. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(實龜院)

灌頂初後夜 ❶(B)Kwan-jō-shotsu-ya. ❷三帖 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・六八)

灌頂初後夜教授作法 ❶(B)Kwan-jō-shō-tsu-ya-kyō-ju-sa-hō. ❷一軸 ❸存 ❺鎌倉時代寫 ❹(高大、寄・一・六八)

灌頂初後夜行法次第 ❶(B)Kwan-jō-shō-tsu-ya-gyō-hō-shi-dai. ❷二帖 ❸存、安雲灌頂部十六帖之內 ❺德川時代寫 ❹(實龜院)

灌頂初後夜作法聞集 ❶(B)Kwan-jō-shō-tsu-ya-sa-hō-mon-shū. 灌頂初後夜作法聞集三寶院 ❷一軸 ❸存 ❹玄海(文永四—眞和三 A. D. 1267—1347)記 ❺天文二二寫 ❹(金剛三昧院)

灌頂初後夜聲明集 ❶(B)Kwan-jō-shō-tsu-ya-shō-myō-shū. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、餘大・九二九)

灌頂初夜行記 ❶(B)Kwan-jō-shō-ya-gyō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(京大、印哲六・五)

灌頂初夜後夜作法 ❶(B)Kwan-jō-shō-tsu-ya-go-ya-sa-hō. 灌頂初夜後夜作法中院流 ❷三帖 ❸存 ❺享保一一寫 ❹(高大、寄・一・六八)

灌頂初夜表白等 ❶(B)Kwan-jō-shō-ya-hyō-byaku-tō. ❷七帖 ❼(參考) 小野方三寶院流分

灌頂所作 ❶(B)Kwan-jō-sho-sa. ❷一軸 ❸存 ❺鎌倉時代寫 ❹(高大、寄・一・六八)

灌頂書 ❶(B)Kwan-jō-sho. ❷二卷 ❸紛失作 ❼(參考) 三寶院聖教目錄

灌頂書 ❶(B)Kwan-jō-sho. ❷三帖 ❹銀瑩(善祿二—嘉元二 A. D. 1226—1304)作 ❼(參考) 三寶院聖教目錄

灌頂書目錄 ❶(B)Kwan-jō-shomoku-roku. ❷一軸 ❸存 ❺永和四寫 ❹(實善提院)

灌頂諸加持口決 ❶(B)Kwan-jō-shō-kaji-kuketsu. ❷一卷 ❸存 ❹鶴潮(寶永六—寶政七 A. D. 1709—1795)記 ❹寫本(高大、寄・一・六八)

灌頂諸家口決 ❶(B)Kwan-jō-sho-

-kyo-kuketsu. ❷一卷 ❹八坂上人筆 ❼(參考) 三寶院聖教目錄

灌頂諸作法類 ❶(B)Kwan-jō-sho-sa-hō-rui. ❷一結 ❸存 ❺足利末期寫 ❹(金剛三昧院)

灌頂諸用具 ❶(B)Kwan-jō-sho-yō-gu. ❸存 ❹寫本(金剛三昧院)

灌頂諸流印明 ❶(B)Kwan-jō-sho-ryū-in-myō. ❷一卷 ❸存 ❹覺阿記 ❺文治二(A. D. 1186)

❻諸流に亘りて、灌頂の諸印明四十四種を載す。奥に文治二年六月覺阿四十六とあり恐らく實範付法の覺阿なるべし。文治四年孟春醍醐寺に於て成賢書寫。(密教大辭典)

灌頂諸流口決 ❶(B)Kwan-jō-sho-ryū-kuketsu. ❹相意上人作 ❼(參考) 三寶院聖教目錄

灌頂諸流法印明 ❶(B)Kwan-jō-sho-ryū-hō-in-myō. ❹成賢(應保二—寛喜三 A. D. 1162—1231) ❼(參考) 三寶院聖教目錄

灌頂疏 ❶(B)Kwan-jō-sho. (支) Kuan-ding-shu. 灌頂經疏 ❷二卷 ❸缺 ❹慧興(一説耀元 A. D. 681—)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

灌頂召五方龍王攝疫毒神呪上品經 ❶(B)Kwan-jō-shō-go-hō-ryū-o-shō-ki-doku-jin-shu-jō hon-gyō. (支) Kuan-ding-chao-wu-fang-lung-wang-shi-i-tu-shen-ch'ou-shang-p'in-ching. ❸存、灌頂經卷第九(大正二一 No. 1331. 9)

灌頂抄 ❶(B)Kwan-jō-shō. ❷七帖 ❹貞室(付正)撰 ❸本書存缺未詳。飯室(付正につき、日本大師先德明匠記に云く「飯室先德、是有前後二前師算、後德忠云。亦云、德能、已上古先德云也。○異本、飯室先德琴禪。又修禪院和尚云。

❼(參考) 本朝台祖撰遂密部書目

灌頂抄 ❶(B)Kwan-jō-shō. ❷一軸 ❸存 ❺足利時代寫 ❹(實善提院)

灌頂掌中鈔 ❶(B)Kwan-jō-sho-sho-shō. 灌頂要掌中鈔、掌中鈔 ❷三卷 ❸存 ❹亮禪(正嘉二—曆應四 A. D. 1258—1341)作 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❺天正時代寫 ❹(實善提院)

灌頂掌中要鈔 ❶(B)Kwan-jō-shō-shō-yō-shō. 灌頂掌中鈔、掌中鈔 ❷三帖 ❸存 ❹亮禪(正嘉二—曆應四 A. D. 1258—1341)作 ❺元中四寫 ❹(金剛三昧院)

灌頂詳事記 ❶(B)Kwan-jō-shō-ji-ki. ❷一軸 ❸存 ❹勝覺(天喜五—大治四 A. D. 1057—1129)記 ❺應永五寫 ❹(實善提院)

灌頂成就 ❶(B)Kwan-jō-jō-ju. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(實善提院)

灌頂承應記 ❶(B)Kwan-jō-jō-ō-ki. ❷一卷 ❸缺 ❹逐敬(慶長一九—元禄六 A. D. 1614—1693)記 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三

灌頂神供 ❶(B)Kwan-jō-jin-kū. ❷一帖 ❸存 ❺寶永三寫 ❹(實善提院)

灌頂神供作法 ❶(B)Kwan-jō-jin-kū-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❺鎌倉時代寫 ❹(高大、寄・一・六八)

灌頂神供用意 ❶(B)Kwan-jō-jin-kū-yō-i. ❷一帖 ❸存 ❺享保一三寫 ❹(金剛三昧院)

灌頂隨願往生十方淨土經

❶(B)Kwan-jō-zui-gwan-ō-jō-jū-pō-jō-do-kyō. (支) Kuan-ding-sui-yuan-wang-sheng-shih-fang-ching-tu-ching. ❷一卷 ❸存、灌頂經卷第一一(大正二一・五二八 No. 1331. 11) ❹貞享四刊(正大、一一五〇・四二) 元祿七刊(龍大、二一八・三)

灌頂隨要記 ❶(B)Kwan-jō-zui-yō-ki. ❷二卷 ❸缺 ❹皇慶(貞元二—永承四 A. D. 977—1049)記 ❼(參考) 山家祖德傳述高目集卷下

灌頂胎金前後事 ❶(B)Kwan-jō-tai-kon-zen-go-no-koto. ❷一帖 ❼(參考) 三寶院聖教目錄

灌頂大唐本朝大事 ❶(B)Kwan-jō-dai-tō-hon-chō-dai-ji. ❷一卷 ❹玄傳 ❼(參考) 小野方三寶院流分

灌頂大法護摩作法 ❶(B)Kwan-jō-dai-hō-go-ma-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・六五)

灌頂嘆德經口訣 ❶(B)Kwan-jō-tan-doku-kyō-ku-kuketsu. ❷一帖 ❸存 ❹寫本(實龜院)

灌頂壇行事 ❶(B)Kwan-jō-dan-gyō-ji. ❷一帖 ❸存 ❺享保二〇寫 ❹(實龜院)

灌頂壇圖 ❶(B)Kwan-jō-dan-zu. ❷一帖 ❸存 ❺鎌倉時代寫 ❹(實善提院)

灌頂鎮守讀經作法 ❶(B)Kwan-jō-chin-ju-do-kyō-sa-hō. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(實善提院)

灌頂鎮守讀經法則 ❶(B)Kwan-jō-chin-ju-do-kyō-hō-soku. ❼(參考) 三寶院聖教目錄

灌頂塚墓因緣四方神呪經

❶(B)Kwan-jō-chō-bo-in-en-shi-hō-jin-shu-kyō. (支) Kuan-ding-chung-mu-yin-yuan-sih-fang-shen-ch'ou-ching. ❸存、灌頂經卷第六(大正二一 No. 1331. 6)

灌頂調子分 ❶(B)Kwan-jō-chō-shi-bun. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(高大、寄・一・六八)

灌頂調支具故實集 ❶(B)Kwan-jō-chō-shi-gu-ko-jitsu-shū. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❹(實龜院)

灌頂調支分々法 ❶(B)Kwan-jō-chō-shi-bun-bun-hō. ❷一帖 ❸存、安雲灌頂十六帖之內

灌頂通用私記 ❶(B)Kwan-jō-tsū-yō-shi-ki. ❷三卷 ❹南池院源仁(弘仁九—仁和三 A. D. 818—887)説寛平二年七三寂)作 ❼(參考) 諸宗章疏錄第三

灌頂付金剛名號記 ❶(B)Kwan-jō-tsukketsu-kon-gō-myō-gō-ki. ❷一卷 ❼(參考) 三寶院聖教目錄

灌頂付治承記 ❶(B)Kwan-jō-tsuketsu-ji-shō-ki. ❷二卷 ❹勝賢(保延四—建久七 A. D. 1138—1196)口、乘通記 ❼(參

考）三家記要抄日錄

漢頂手鏡 ❶(日)Kwan-jō-te-kagami. ❷四卷 ❸写 ❹〔参考〕 三家記要抄日錄

漢頂手鏡 ❶(日)Kwan-jō-te-kagami. ❷四卷 ❸写 ❹仏 ❺法相宗 ❻明和元年(A. D. 1768)

❼明和元年、法記光の西口僧を以て撰述せしもの。（宗教大辭典）

漢頂傳法記事私記 ❶(日)Kwan-jō-den-bō-senn-yō-shi-ki. ❷三卷 ❸写 ❹真言宗 ❺(参考) 三家記要抄日錄

漢頂傳聞記 ❶(日)Kwan-jō-dem-mon-ki. 灌頂記 ❷四卷 ❸仏 ❹灌頂記 ❺文保元年(A. D. 1720)

❻三家記要抄の口傳にもとづき記したる漢頂仏法の口訣なり。傳法灌頂記、傳法灌頂口令聞決、傳法灌頂口令聞決、傳法灌頂口令聞決

（奈良時代）

觀音經變相寫文千部願 ❶(日)Kwan-jō-yō-shuku-narabini-shi-kan-kitsu-rei. ❷1巻 ❸各 ❹天平時代 ❺(寫経記)

觀音經記 ❶(日) Kwan-jō-ryak-ki. ❷1巻 ❸写 ❹(日)記(説書)1冊—(唐)貞元A. D. 794—864)記 ❺(佛教) 観音菩薩の日本霊験

觀音經變相類編圖 ❶(日)Kwan-jō-ryō-kai-dō-jō-zu. ❷11巻 ❸各 ❹(日)絵(鎌倉)—(室)1冊A. D. 1123—1203)記 ❺仏教11説 ❻(奈良時代)

觀音經變文系 ❶(日)Kwan-jō-ryō-dan-shi-dai. ❷11巻 ❸(佛教) 観音菩薩の日本霊験

觀音經變口決 ❶(日)Kwan-jō-ryō-ju-ku-ketsu. 観音経変口決記 ❷1巻 ❸各 ❹天平時代説 ❺(奈良時代)

觀音寺毛越花記 ❶(日)Kwan-jō-rō-mō-san-ge-ki. ❷1巻 ❸各 ❹(佛教) 観音菩薩の日本霊験

觀音大菩文系 ❶(日)Kwan-jō-rok-kwan-shi-dai. ❷巻 ❸各(唐)(唐)—(唐)1冊 A. D. 841—901—) 記 ❹(佛教) 観音菩薩の日本霊験

觀機逆順義 ❶(日)Kwan-shoku-ji-ji-seki. (支)Kuan-chu-sū-shih-chi. ❷1巻 ❸各 ❹(佛教) 四諦機教逆順等用行義文等

觀法華經彩色經 ❶(日)Kwan-sem-butsu-gyō-zō-gyō. (支) kuan-hsien-fu-hsing-hsiang-ching. 観普賢菩薩行法経 ❷1巻 ❸各"大正1"No. 695" 観仏"卍1○•ヤ" 第271表" 第283表" 第285表" 第288表" 第288表" 第278表" 第280表" 第250表" 第266表" 第348表" 第第278表" Nj. 291 ❹西暦紀元後(唐代)A. D. 293—306"頃

❺この観普賢菩薩行法経は、日本の観音菩薩の日"観音菩薩"の信仰と結びつきながらも、観音菩薩の信仰とは異なるものである。観音信仰・観音信仰は、西方の阿弥陀仏の脇侍として、観音菩薩の

あるといふ。伊波勒菩薩の勸めに蒙遊が從つた結果、さすがの病患もこれによつて平癒した。この時から普門品が別行して流通したと、観音玄義下の第五敎相章(會本四ノ四十三丁)に記してある。それで涼・陳(西紀五世紀初め)已降講經甚多く、又觀音靈驗傳も東晉の謝敏によつて「觀世音應驗傳」が作られ、北齊の陸果また續集を作つてゐる(觀音義疏上火難の下。會本一ノ二九丁左)といふ。如何に普門品の觀音信仰が盛んであつたかを知ることが出來ると思ふ。本書及玄義に表れた他師との論難を見るに、玄義では古師・橫論師と異義を述べ、本書では有人の二家・他の四解・舊解・地人との異解を明にしてゐる。これによつて推考すれば天台大師以前に已に四五の學匠が普門品の講義を筆錄し公表してゐたようである。思ふに天台大師は此等の講錄を參照して自家の見解を述ぶれば先づ本經の章段を有人二家は序正流通に三分するが、天台大師は時に三段とし、或は三段の名を用ひず、ただ三章とし、一には無盡意問、二には佛答、三には持地歎と分ち、或は四章とし、三章は前と同じく第四章を圓品得益とし、或は二段とし、前の問答、後の問答と分ち、分章の多種は人の意樂にまかすといひ、三段の節目を立てて、前問答・後問答・圓品功德となす。そして法華經全體として觀察する時は三身・三諦・三德等の三分思想に基いてゐるのに、本經に限つて冥顯の二益・觀音菩門の人法・眞身應身の二身等の兩分の思想に立脚してゐるといふ。これを他の觀點からいへば普門品には經文中に法華なる語が一つもなく、また法華經の流通を勸進する語が全く缺けてゐる等によつて、法華經成立史研究上から論ずる場合、本經が法華の一品に加へられた所以及び其年代並に地方如何等の疑問が起る有力な點であると考へられる。さて本經の章段に關する文は章安大師灌頂が問卷の初頭に添附したものであるが、この章安の文によつて考へるに、天台大師は本經を數回講じたようである。然し天台大師の傳には本經の講じた時處及び回數は記されてゐない。經文を講ずるに當つて先づ前の問答を二分し、一には問、二には答とし、無盡意の問を四とし時節・極人・敎儀・正問に分ち、そして宇義釋・悉檀釋を試み、人に就いては小乘大乘の人を論じ、圓人を說いて本經の人なりと斷定。三諦說を述べては法即人の哲理を說く。かく理釋をなすばかりでなく、事釋を掲げては支那の古傳說を引き、最後に及んで觀解を出して今(法華)普門解前)權實の觀を示す。第四の正問—無盡意菩薩の發問—には前後兩番の問答が行はれる。前番には觀世音を問ひ、後には普門を問ふのである。佛これに答ふるに前番の時は先づ總じて答へ、次に別して答へ、最後に勸持したまふ。別答の下に口機の感應・意機の感應・身機の感應ありとし、口機の感應に於て七難から解脫することを說く。七難とは火難・水難・羅刹難・刀杖難・鬼難・枷鎖難・怨賊難である。此の七難の經文を貼文(文字解釋)約證(應驗を引證す)觀行(四敎の觀行を說く)の三門に分つて詳說し、次に意業の機の感應に於いて貪欲瞋の三毒を遠離すと說き、次に身業の機の感應に於いて求男求女の二求の願ひ滿足すと明す。これが前番問答に於ける三機の感應即ち七難・三毒・二求滿足である。意身二機の感應の段に於いても貼文・約證・觀行の三門に分けて委曲をつくして說明してゐる。後番問答は先きに既に觀世音菩薩は衆生の三業の顯機を所觀の境として、法身慧智の能觀の智を以つて冥に應じて利益を垂るるが故に觀世音と名づけらるる因緣を述べ終つた。この說を蒙つて已に領解したから、無盡意菩薩はしからば觀世音は云何にして娑婆世界に遊化するやと問ひを佛に呈した。佛はこれに答へて、觀世音は普門示現し、三十身十九說法したまひ、三業の顯應を垂れて衆生の冥機に應ずるから能く娑婆に遊ぶと十義を分つて述べた。これが後番問答である。十義とは觀音玄義に明す十普門の法・慈・福・應・味・願・迹・緣・願の十隻である。上述で知らるるように前番問答は觀世音の人を說き、後番問答は普門の法を明し、前番は七難三毒二求滿足を說くから顯益、後番は三十三身を應現し、十九種の說法を述べてゐるから冥益といはれる。このように前後の問答を玄義の人法乃至智斷の十隻に對當すれば上記の十隻で後問答の意義を明かに理解し得るのである。天台大師は長行だけ解釋し、偈頌は解說しない。元來、普門品の世尊偈は陰の関係軸多三藏が譯した「添品法華」の普門品にあつて、羅什の譯した「妙法華」には漏れてゐたのである。天台大師は羅什譯を用ひ軸多譯を用ひられなかつたから偈頌の疏が缺けてゐるのである。然るに知禮は偈頌を添へて解說を試みてゐる。本書は字句の解釋に際して四敎三觀の說を巧みに用ひて他師・舊解の說を疏斥し、觀音の信仰に於ける理論と觀行(觀解ともいふ)とを明示し、後人をして普門品解釋の指針たらしめた功績は大なるものがある。但し天台大師の學的態度が本書によつて見ても知られる如く、徹頭徹尾、觀心にあり圓修圓觀を示すための解釋であつて、決して字句の說明、若しくは經文の理論を論理的に證明することが目的でなかつたことは注意すべき點である。騎二求の下で男女論を詳說してゐられるが、大師時代でも宗敎上より觀た男女論は極めて曾倫間に臨つた題目であつたものと思はれる。

(田島德音)

観音義疏記 ❶(日)Kwann-on-gi-sho-ki.(支)Kuan-yin-i-shu-chi. 觀音經義疏記、觀音別行疏記、別行義疏記、別行疏記 ❷四卷 ❸存、大正三四・九三Zo. 1729、縮調五、卍三三・三、卍續一・五五・一—二、明南15514何、Nj. 1553 ❹宋知禮(建隆元—天聖六A. D. 960—1028)述 ❺天禧五(A. D. 1021)

❻本書は觀音義疏二卷を註解したもの。字句を訓詁風に說明し、其間に於いて知禮の學說による解釋を施してゐるが、彼自らは先師義通の敎示に問つてこれを註し、後昆を益せんと云つてゐる。玄義の場合と同樣

名所行發❸(名庫書)活藏所収❷月年の刊寫❶(参考多書解註)書末❺說解容内❹代年作著❸著者❷缺存❶數卷❸(名書)名題❶號略字數

に天台大師が觀音玄疏を說述した時代には未だ三千實相論、一念三千說が現れてゐないにも關らず、知禮は堂々と三千論を以て解釋を試みてゐる。これは天台大師敎學史の研究が未だ進歩してゐなかつた爲めに起つたものである。本書は彼の同門たる天竺懷主遜式の分科を用ゐて世尊偈の註釋を試みてゐる。要するに知禮は荊溪尊者眞然が天台大師の撰述に係る書を註解したけれども、別天台大師の撰述中、眞然が註してゐなかつた書を漏すところなく註釋を作つた。本書もその一。知禮の註釋は親切丁寧であるが、餘りに字義の解釋に力をそそぐ結果、本文の觀心爲本的調子を訓詁的にして仕舞つた。彼の影響は天台宗學を餘りに文字に拘泥せしむる學風に流れしめた。これは知禮敎學の缺點である。乍然、知禮の正統學派たる學說を建てた効果は實に偉大なるものであることは忘るべからざるものである。

❼(注釋) 觀音義疏講錄二卷 (田島德音)

観音義疏記會本 ❶(日)Kwann-on-gi-sho-ki-e-hon.(支)Kuan-yin-i-shu-chi-hui-pen. 觀音經義疏記會本 ❷四卷 ❸存 ❹刊本(龍大、二四一三・八)(立大、A一一・二一九、D一・一〇)(高大、寄・一・二三)

観音義疏記會本科文 ❶(日)Kwann-on-gi-sho-ki-e-hon-kwa-mon. 觀音疏記會本科文 ❷一卷 ❸存 ❹刊本(龍大・二四一三・九)

観音義疏記見聞 ❶(日)Kwann-on-gi-sho-ki-ken-mon. ❷四卷 ❸存 ❹寫本(正大、一一四三・三八)

観音義疏記條箇 ❶(日)Kwann-on-gi-sho-ki-e-ko.(支)Kuan-yin-i-shu-chi-tiao-ko. 別行條目、觀音義疏記條目 ❷一卷 ❸存、卍續一・五五・一 ❹本書は觀音玄義記・觀音義疏記との會本(明版・延寶版)によつて、條箇—條目ともいふ—を作つたもの。編著者の名を缺く。恐らく聖行の編か。每卷會本の丁數の順に從つて條箇を記してゐるから、索引として役立つ。但し丁數順に出來てゐるために項目によつて檢索し得られない不便がある。そして丁附の下に直ちに條箇を記したものは玄義・義疏の文であり、丁數の所に「記」と記してあるものは知禮の「記」の條箇である。科文と條箇とによつて目次と索引との役割を果してゐるのである。科文は目次に相當し、條箇は索引に相當するものである。享和版には「古本條箇未治」となつてゐる如く、享和版は延寶版をそのまま複刷し、校訂修正を施してゐない。これは出版者として讀者に對し甚だ不親切な刊行である。勿論、延寶版と享和版とに丁數の相違があるから、條箇を使用する場合には延寶版によらなければならぬ。延寶版と享和版との比較は玄義記條箇の下で記すこととする。參照せられよ。

❺觀音玄義記條箇一卷合本。延寶三刊。觀音玄疏記古本條箇未治一卷・享和四刊。

(田島德音)

観音義疏記條目 ❶(日)Kwann-on-gi-sho-ki-ji-moku. 觀音義疏記條箇 ❷一卷 ❸存、卍續一・五五・一 ❹(京專)

観音義疏講錄 ❶(日)Kwann-on-gi-sho-ko-roku. 觀音經義疏記講錄、觀音疏記講錄 ❷四卷或二卷 ❸存 ❹光謙靈空(承應元—元文四A. D. 1652—1739)述 ❺享保一〇刊 ❻(高大)(谷大、余大・三六八九)(龍大、二四一三・二六)(立大、A一一・二二二—二二四)(哲、の・五・左・一七)

観音經 ❶(日)Kwann-on-kyō. (支)Kuan-yin-ching. 觀世音菩薩普門品、法華經普門品、觀音普門品、普門品經、普門品 ❷2Zo. 25 ❸存、妙法蓮華經卷第七(大正九・五六Zo. 2Zo. 25) ❹康永四寫(寶壽院)延寶六刊(帝國、い・八三)明治一一刊(帝國、一五八・五〇)

観音經 ❶(日)Kwann-on-kyō. 科註觀音經 ❷二卷 ❸存 ❹守倫記 ❺慶安元刊 ❻(高大、寄・一・二三)(京專)

観音經會疏 ❶(日)Kwann-on-kyō-e-shō. 科解觀音經會疏 ❷四卷 ❸存 ❹刊本(龍大、二四一三・一)(哲、の・三・中・一五)

観音經義疏記 ❶(日)Kwann-on-kyō-gi-sho-ki.(支)Kuan-yin-ching-i-shu-chi. 觀音義疏記 ❷四卷 ❸存、大正三四・九三Zo. 1729、縮調五、卍三三・三、卍續一・五五・一—二、明南15514何、Nj. 1553 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)說、宋知禮(建隆元—天聖六A. D. 960—1028)記 ❺延寶三刊 ❻(谷大、餘大・三三六九)(立大、A一一・二二二)(京大、蓮・一七カ・三)

観音經義疏記會本 ❶(日)Kwann-on-kyō-gi-sho-ki-e-hon.(支)Kuan-yin-ching-i-shu-chi-hui-pen. 觀音義疏記會本 ❷四卷 ❸存 ❹刊本(高大、寄・一・二三)

観音經義疏記科 ❶(日)Kwann-on-kyō-gi-sho-ki-kwa.(支)Kuan-yin-ching-i-shu-chi-ko. ❸存、卍續一・五五・一 ❻觀音玄義記科の解說參照

観音經義疏記講錄 ❶(日)Kwann-on-kyō-gi-sho-ki-kō-roku. 觀音義疏講錄、觀音疏記講錄 ❷四卷 ❸存 ❹光謙靈空(承應元—元文四A. D. 1652—1739)述 ❺享保一〇刊 ❻(谷大、餘大・三六八九)(龍大、二四一三・二六)(立大、A一一・二二二—二二四)(哲、の・五・左・一七)(高大)

観音經功德鈔 ❶(日)Kwann-on-kyō-ku-doku-shō. ❷二卷 ❸存 ❹寫本(龍大、二四一三・一〇—一一)刊本(京大、日大未・五五)

観音經訓讀 ❶(日)Kwann-on-kyō-kun-doku. ❷一卷 ❸存 ❹刊本(高大、寄・一・二三)

観音經玄義 ❶(日)Kwann-on-kyō-gen-gi.(支)Kuan-yin-ching-hsüan-i. 觀音玄義、別行玄義、別行玄 ❷二卷 ❸存、大正三四・八七七Zo. 1726、縮調五、卍三三・二、明南15512何、Nj. 1555 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六A. D. 561—632)記

観音經玄義記 ❶(日)Kwann-on-kyō-gen-gi-ki.(支)Kuan-yin-ching-hsüan-i-chi. 觀音經玄義記

名所行發❸(名庫書)活藏所収❷月年の刊寫❶(参考多書解註)書末❺說解容内❹代年作著❸著者❷缺存❶數卷❸(名書)名題❶號略字數

an-i-chi. 觀音玄義記 ❹四卷 ❺存〔大正三四・九八〕No. 1727〔續藏五六〕〔卍二二・三〕〔卍續一・五五・一〕〔新纂1532頁〕Nj. 1556 ❻宋知禮(淨覺尊者—天聖六A. D. 960—1028)記 ❼天禧元(A. D. 1021) ❽(宋)重刊 ❾(宋)〔宋史藝文・三〇六〕

觀音玄義記會本 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-e-hon. 觀音玄義記會本 ❷四卷 ❸存 ❹刊本〔宋史・三〇六〕

觀音玄義記顯宗鈔 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-ken-shū-ge. 觀音玄義記顯宗鈔 ❷一卷 ❸存 ❹安居院(安居天人—貞享三A. D. 1668—1750)著 ❺玄義一〇〔卍二五・一〇〕〔續一二四三・四〕〔續六一二四一三・一二四〕〔大正八・一一・一二一六〕〔續六一二四一・一五〕玄義一八冊〔宋元・明・清・大正一五藏〕〔卍二二・一二四三・六七〕

觀音玄義記講義 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-kō-gi. 觀音玄義記講義 ❷四卷或三卷 ❸存 ❹豐後梅谷(安永末天—文久一A. D. 1780—1862)著 ❺嘉永元(A. D. 1860) ❻寫一一冊 ❼(宋)〔續六一・一四〕〔卍二二・一二四三・六七〕

觀音玄義記講錄 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-kō-jutsu. 觀音玄義記講錄 ❷一一卷或一卷 ❸存 ❹安房天寶(文化元—明治一一年A. D. 1804—1884)著 ❺(宋)〔宋史・藝文・三〇一〇〕〔續六一二四三・六七〕〔續六一二四一・一五〕〔卍二二・一二四三・六七〕

觀音玄義記講錄 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-sen-ge. 觀音玄義記講錄 ❷一一卷 ❸存 ❹安房(A. D. 1021) ❺(宋)〔宋史・藝文・三〇六〕

觀音玄義記會本 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-e-hon. 觀音玄義記會本 ❷四卷 ❸存 ❹刊本〔宋史・藝文・三〇六〕

觀音玄義記顯宗鈔 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-ken-shū-ge. 觀音玄義記顯宗鈔 ❷一一卷 ❸存 ❹安居(安居天人—貞享三A. D. 1668—1750)著 ❺玄義一〇〔卍二五・一〇〕〔續一二四三・四〕〔續六一二四一三・一二四〕〔大正八・一一・一二一六〕〔續六一二四一・一五〕玄義一八冊〔宋元・明・清・大正一五藏〕〔卍二二・一二四三・六七〕

觀音玄義記講義 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-kō-gi. 觀音玄義記講義 ❷四卷或三卷 ❸存 ❹豐後梅谷(安永末天—文久一A. D. 1780—1862)著 ❺嘉永元(A. D. 1860) ❻寫一一冊 ❼(宋)〔續六一・一四〕〔卍二二・一二四三・六七〕

觀音玄義記講錄 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-kō-jutsu. 觀音玄義記講錄 ❷一一卷或一卷 ❸存 ❹安房天寶(文化元—明治一一年A. D. 1804—1884)著 ❺(宋)〔宋史・藝文・三〇一〇〕〔續六一二四三・六七〕〔續六一二四一・一五〕〔卍二二・一二四三・六七〕〔卍續一・一五〕

觀音玄義記講錄 ❶(日)Kwann-on-gyō-gen-gi-ki-kō-wa. 觀音玄義記講錄 ❷一一卷 ❸存 ❹宗睿(一—大正一一A. D. 1923)著 ❺大正一一刊 ❻東京東京

觀音玄義記講話 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-wa. 觀音玄義記講話 ❷一卷 ❸存 ❹山田孝順(文久八—昭和三A. D. 1863—1928)著 ❺大正一〇刊 ❻東京東京

觀音玄義記講話 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-wa. ❷一卷 ❸存 ❹黃檗宇治 ❺大正一一刊 ❻東京內牛田慶雲

觀音玄義記講話 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-wa. 新撰觀音玄義記講話 ❷一卷 ❸存 ❹宗本谷宗重著 ❺明治四刊 ❻東京貴重

觀音玄義記會本 ❶(日)Kwann-on-gyō-ko-sui. ❷一卷 ❸存 ❹安藝玉刊 ❺(宋)

觀音玄義講義 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹天保京安(天保末—一四四一A. D. 1843—1908)著 ❺明治四三刊 ❻〔續六〕〔宋六〕一一四三・五五〕〔續六一二四一三・一一一〕〔宋六〕卷・一・一一六〕 ❼東京東京

觀音玄義講錄 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹天保京安(天保末—一四四一A. D. 1843—1908)著 ❺大正一五刊 ❻東京東京

觀音玄義講話 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-wa. 觀音玄義講話 ❷一卷 ❸存 ❹宗演(一—大正八A. D. 1919)著 ❺大正七刊 ❻東京東京

觀音玄義講話 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-wa. ❷一卷 ❸存 ❹宗田宗夏(一—大正一一A. D. 1923)著 ❺大正一一刊 ❻東京東京

觀音玄義講話 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-wa. ❷一卷 ❸存 ❹山田孝順(文久八—昭和三A. D. 1863—1928)著 ❺大正一〇刊 ❻東京東京

觀音玄義講話 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-wa. ❷一卷 ❸存 ❹眞言宗豐山派 ❺大正一一刊 ❻東京內牛田慶雲

觀音玄義講話 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-wa. 新撰觀音玄義講話 ❷一卷 ❸存 ❹宗本谷宗重著 ❺明治四刊 ❻東京貴重

之日本註

觀音玄義講話 ❶(日)Kwann-on-gyō-kō-wa. 觀音玄義講話 ❷一卷 ❸存 ❹(宋)〔宋史藝文・三〇六〕 ❺東京東京

觀音玄義國字解 ❶(日)Kwann-on-gyō-koku-ji-kai. ❷一卷 ❸存 ❹愛知七刊 ❺(宋)〔宋史・一〇七・一一七九〕

觀音玄義 ❶(日) Kwann-on-gyō-san. (梁)Kuan-yin-ching-tsan. ❷一卷 ❸缺 ❹西竺僧(天竺三—梁普天A. D. 549—623)著 ❺(參考) 奈良朝現在一切經產目錄2149〔新訂增補國史大系本一一〕

觀音玄義讚 ❶(日) Kwann-on-gyō-san. (梁)Kuan-yin-ching-tsan. ❷一卷 ❸缺 ❹今西榮著注 ❺(參考) 奈良朝現在一切經產目錄2150

觀音玄義拾遺記 ❶(日)Kwann-on-gyō-ji-gen-ki. (梁)Kuan-yin-ching-ch'ih-yen-chi. 觀音玄義拾遺記〔觀音玄義研究拾遺記〕 ❷一一卷 ❸存〔卍續一二・七・三〕 ❹法代周支撰記 ❺唐末一一六(A. D. 1659)

❻內容は觀音玄義拾遺記と題するが、又觀音玄義研究拾遺記とも題す。著者は法華玄義研究拾遺記に引續いて、後人の著作と思はれる。唐代にわたる諸の注釋の觀音玄義を集めて、法華玄義研究拾遺記と同時に、法華玄義研究拾遺記と共に、法華玄義研究拾遺記、法華玄義研究拾遺記、觀音玄義研究拾遺記、法華玄義研究拾遺記、天台觀音記、觀音記、法華玄義研究拾遺記、明治年間、觀音玄義研究拾遺記、法華玄義研究拾遺記、法華玄義研究拾遺記、法華

つて觀音經の概論を述べたものである。本書は門人章安大師灌頂の筆錄に係るが、天台大師が何處で、何年に講述されたものであるか不明。但し「摩訶止觀」說述以前のものであることは疑ひがない。所以は一心・三諦・三觀・十界・百界・千如までに至つて遂に一念三千の說に及んでゐないからである。四明尊者知禮は三千の法門によつて「記」の內で論じてゐるが、知禮の說は本書說述の年代を無視して、天台大師の思想を「摩訶止觀」に說いて註解する態度をとつたものである。本書は序文と五重玄義の正文との二門からなる。序文は一には眞應の益物を叙し、二には人法の標題を叙し、次に正文に至つては「法華玄義」が五章をもつて一經の大義を明したように、今品も釋名・出體・明宗・辨用・敎相の五章に分つて釋すといひ、先づ釋名の章では通釋と別釋との二說とし、人法の解釋を合して明す場合と、人法を各別に辯ずる場合とによつて通別の二釋を設くる理由とし、通釋を四段に分ち、一には列名。二には次第。三には解釋。四には料簡とし。第一の列名の下に於て十義を以つて經名を通釋してゐる。十義とは人法・慈悲・慧・菩應・藥珠・冥顯・權實・本迹・緣了・智斷である。第二の次第では經名の觀音の人と菩門の法との人法等の十義を敎と觀との兩章にかけて十義の次第順序を推理し、行門の因果と敎門の五時四敎との關係を說き、觀音菩門の解釋に天台大師獨特の說い論鋒を振ひ、本經は法華經の流通分の中の三昧流通であるけれども、今經が直ちに法華一經の眞面目を闡明するところなく發揮してゐることを明瞭にし、第三の解釋に至つては、又更に十義を三觀四敎にかけて詳說し、第四の料簡は上來述べた所に就いて問答して質疑を正し、十義を明確に領知せしめんと企てゝゐる。この內に於いて性善性惡の問ひに答へて「具す」と確言したことは、天台大師の敎學に於ける性惡論の根本義を述べたものである。故に知禮は「記」に「只一の具の字、彌々今宗を顯す」といつてゐることは有名な語である。別釋は先づ觀世音を明し、次に菩門を明し、境智・觀智・觀心を以て觀世音を解說することは、天台大師の敎學が文字解釋ではなくして、觀心立ちであることを明らかに示してゐるものである。この解說の中に於て世に三世間・十界・三十種世間・十如・百法界・千法界ある を述べてゐる 事は上述したように、摩訶止觀の一念三千と比較して、天台敎學の發展階程を考ふべきである。又摩訶止觀には一心・次第・不定の三種の三觀を說くのに、本書は次第三觀・一心三觀の二種のみを揭げてゐることも注意すべきである。菩門も亦通別の兩面より十義に約して十菩門の義を詳說し、こゝに「大慈代受苦」の說を出し、菩薩の慈悲行が自他の苦樂に徹して一人も漏すところなく救濟する深重の與拔の利益を說き、「菩」の意義を明示してゐる。次に釋體の章では雲智が法身に冥合するに至るを以て今經の本體であるとしてゐる。四明尊者知禮は始覺本覺の不二が經體であるといふ。次に明宗の章では感應を以て宗となすといひ、次に論用の章では慈悲利物なりといひ、次に敎相の章ではこの品は法華の流通分、圓敎の相を明してゐると。以上の如き經題の解說は他に全く見られないものであつて、天台大師にしてよくなし得たものと云へる。

❼(注釋) 觀音玄義記會本四卷、延寶三(A. D. 1675)刊。享和四(A. D. 1804)刊。觀音玄義略鈔一卷寶地房證眞撰。觀音玄義記講義三卷慧澄和尙瘟空撰、萬延元(A. D. 1860)刊。

觀音玄義記 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-ki(支)Kuan-yin-hsüan-i-chi. 觀音經玄義記、觀音別行玄記、別行玄義記、別行玄記 ❷四卷 ❸存、大正三四・八九二 Nr. 1727、續調五、卍三三・三、卍續一・五五・一、明南1576何、Nr. 1556. ❹宋知禮(建隆元—天聖六 A. D. 964—1028)述 ❺天碩五(A. D. 1021)

❻本書は天台大師智顗說、門人灌頂記に係る觀音玄義二卷を四明尊者知禮が註解したもの。今本書卷初の自序によるに知禮六十二歲の撰述。先師義通の提耳のまゝを粗記して後昆に遺したといふ。本書の記述は唐宋の學風たる訓詁主義に隨つて玄義の文々句々を解釋し、四明尊者の自說を立て性惡說・別理隨緣說等を論じてゐる。そして三千三觀の法門を以て玄義の三觀・十界・千法界を解說したが、これは知禮が圓解圓觀を一心三觀一念三千の法門を以て解すべしと考へた結果であつて、敢て謬說なりとは云はないが、天台大師敎學の發展史的考察を注意しないところから起つた偏頗的解說である。本書でも知禮は起信論の文を引用し法華の純圓と起信の纖大乘とを比較論評してゐる。

❺觀音玄義記講義三卷、東叡山淨名院比丘慧澄瘟空撰(萬延元 A. D. 1860)(田島德音)

觀音玄義記會本 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-ki-e-hon. 觀世音菩薩普門品玄義記會本、觀音經玄義記會本 ❷四卷 ❸存 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七 A. D. 531—597)說 ❺刊本(龍大、二四一三・二二)(立大、A一一・二二〇、D一・一一)(正大、一一四三・一九—二〇)(京大、藏・七カ・一—二)(谷大、餘大・三六二)

觀音玄義記會本科文 ❶(B) Kwann-on-gen-gi-ki-e-hon-kwa-mon. 觀音玄疏記會本科文 ❷一卷 ❸存 ❹刊本(正大、一一四三・二三、二四)(龍大、二四一三・二三)(高大、寄・一・一五)寫本(京大、藏・七カ・四)

觀音玄義記箇條 ❶(B) Kwann-on-gen-gi-ki-ko-jō 觀音玄義記條箇 ❷一卷 ❸存 ❺延寶三刊 ❻(正大、一一四三・三四)

觀音玄義記科 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-ki-kwa-(支)Kuan-yin-hsüan-i-ho-ke. ❷一卷 ❸存、卍續一・五五・一

❻本書は條箇と一對をなし、科文は詳細なる目次であり、條箇は索引である。作者は未詳であるが、恐らくは玉溪書提巷聖行の編であらう。更に後考を俟つ。觀音玄義及び

義疏の條箇の下を參照せられよ。

❺延寶三年版、明の崇禎四年版、享和四年版、清本

觀音玄義記顯宗解 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-ki-ken-shu-kai. ❷三卷 ❸存 ❹亮 潤(寬文八—寬延三 A. D. 1668—1750)述 ❺享保一〇刊(正大、一一四三・四〇、龍大、二四一三・二四〇、立大、A一一・二一六〇、高大、寄・一・一五〇、谷・の・五・左・八)享保八刊(谷大、餘大・八四六)天正一五寫(正大、一一四三・六七)

觀音玄義記講義 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-ki-kō-gi. 觀音經玄義記講義 ❷四卷或三卷 ❸存 ❹慧澄瘟空(安永九—文久二 A. D. 1780—1862)述 ❺萬延元刊(龍大、二四一三・二五〇、正大、一一四三・三二—三三)(京專)(立大、A一一・二二五〇、高大、寄・一・一五〇、谷・左・二二〇)(谷大、餘大・一四)寫本(谷大、餘大・六六七)

觀音玄義記講述 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-ki-kō-jutsu. 觀音經玄義記講述 ❷一卷或二卷 ❸存 ❹守脫大實(文化元—明治一七 A. D. 1804—1884)述 ❺明治四〇寫(正大、一一四三・六六)寫本(立大、A一二・四九一、D一・三七)(谷大、餘大・三〇一〇)

觀音玄義記條箇 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-ki-jō-(支)Kuan-yin-hsüan-i-chi-tiao-ko. 別行條目 ❷一卷 ❸存、卍續一・五五・一

❻本書は觀音義疏記條箇と合本で流布してゐる。觀音玄疏會本によつて本書を作つたのである。會本は工部王季居士の嘉樂によつて明の崇禎元年(A. D. 1628)玉溪(今の陝西省蒲田縣にあり信江の河流)菩提巷聖行が別行の觀音玄義二卷と觀音玄義記四卷とを合せて、これを分會し、菩提巷沙門法濟これを校閱し、門人の是遠・是定これを對校し、沙彌淨輪これを淨書し、王居士が三十金を捐捨して印刷流通することとなつたが、聖・崇禎二年の秋、適々吳興(今の浙江省吳興縣治)の閔明余老先生と楚先居士との援助を得て崇禎四年(A. D. 1631)に刊行されたものである。會本は玄義記も義疏記も共に四卷寇である。科文と條箇とは恐くこの時に出來たものであらうと思ふ。若し然らば聖行の集錄であるべきだが、この事は何處にも何等述べてゐないから知ることが出來ない。延寶版は明の崇禎版を複刻したものであるが重刻が極めて早く行はれたことは注目に價ひする。明版は西紀一六三一年で延寶版は西紀一六七五年であるから、その間僅かに四十四年を過ぎたばかりである。これを見ても江戸時代の支那文化輸入の速さが想像されて面白く感じられる。延寶版は複刻であるから卷末に音釋と助刻者氏名と新願の旨趣と會本製作關係者氏名と刊行年月日とが聖行の識語によつて知られる。更に又、聖行の「別觀音玄義疏記序」の文を讀めば先人が如何に印刷に苦心し努力せしやが明らかに知られて誤の出る程である。然るに享和版は叡山の實乘が「重刻觀音玄疏記會本附言」に、「玉溪聖行の分會が正しくなく、却つて眞益を踏亂してゐるから、考訂し、補接し、新たに刻した」と述べてゐる。これで知られるやうに延寶版即ち明版と享和版とは相違してゐる所が多い。又明版は玄義及義疏が各上下二卷寇に分れ、記は各四卷寇に分れてゐるのを無視して、玄疏を適宜に各四卷寇に分割してゐる。それを享和版即ち實乘は清本—清朝時代の刊本—を底本とし、他本を對校して印刷し、玄義の上下、義疏の上下、記の一二三四の調卷を明記し、原本の調卷を知らしめてゐる。これは讀者を益することが尠くない。但し明版の卷末の音釋と聖行の識語を削除してゐるが、この削除は千慮の一失といふべきである。聖行の傳は不明であるが、法花文句會本に序を記してゐる位であるから、實乘が「行師者時之望也」(重刻觀音玄疏會本附記)といふように明末に於ける錚々たる大學匠である。實乘の傳も未詳。本書の解說は觀音義疏記條箇の下を參照。

❺觀音玄義記條箇一卷但し觀音義疏記條箇一卷と合本、延寶三年(A. D. 1675)刊。觀音玄疏記古本條箇末治一卷、享和四年(A. D. 1804)刊 ❻(正大、一一四三、四五・四六、一一四三・六四)(高大、寄・一・一五)(田島德音)

觀音玄義記條目 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-ki-jō-mokku. ❷一卷 ❸存 ❹(京專)

觀音玄義記隨聞錄 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-ki-zui-mon-roku. ❷三卷 ❸存 ❹寫本(正大、一一四三・四四)

觀音玄義私記 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-shi-ki. 觀音玄略抄 ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第二四天台小部集釋、天台小部集釋第一八 ❹證眞(—文治頃 A. D. 1185—1189—)記 ❺寫文七刊 ❻(龍大、二四一三・一七)

觀音玄義疏記 ❶(B)Kwann-on-gen-gi-sho-ki. (支)Kuan-yin-hsüan-i-shu-chi. 觀音經玄義疏記 ❷四卷 ❸存、大正三四・九三六 No. 1729、續調五、卍三三・三、卍續一・五五・一—二、明南1534何、Nr. 1533 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七 A. D. 531—597)說、宋知禮(建隆元—天聖六 A. D. 960—1028)記 ❺崇禎四刊(書室)刊本(晉、の・五・右・一一七)(谷大、餘大・三六三、餘大・三二六九)(龍大、二四一三五—七)(正大、一一四三・三七)

觀音玄疏記會本科文 ❶(B) Kwann-on-gen-sho-ki-e-hon-kwa-bun. 觀音玄義記會本科文 ❷一卷 ❸存 ❹刊本(正大、一一四三・二三)(龍大、二四一三・二三)(高大、寄・一・一五)寫本(京大、藏・七カ・四)

觀音玄略抄 ❶(B)Kwann-on-gen-ryaku-shō. 觀音玄義私記 ❷一卷 ❸存、大日本佛敎全書第二四天台小部集釋、天台小部集釋第一八 ❹證眞(—文治頃 A. D. 1185—1189—)述

❻天台智顗の著、觀世音菩薩普門品玄義中の疑問點を要略抄出して此が答釋を作せる

原義である。

一説には二十四節気の第十四番目の意。其の頃は、日本の梅雨の時期に当り、農作物の成長を祈願する行事が盛んに行はれる。

(中村璋八)

観音現身画像 ❶(日)Kwann-on-gen-shin-zu-zō. ❷一巻 ❸絹 ❹彩色記 ❺(天)一〇点・四三)(和)あ・一・元・一二六)

観音講式 ❶(日) Kwann-on-kō-shiki. ❷一巻 ❸紙 ❹大正八四・八八六No. 2728 ❺貞慶(八書一)—建保元A. D. 1155—1213)撰 ❻建仁元(1201)

❼本書は本文中所収の発願文に基づき、貞慶が自分の為に作った講式である。貞慶は、法相宗の分析的、理論的、引用文の豊富さを特徴とし、以下に説く十二の講式の例に漏れず、この講式は、観音の功徳を讃嘆し

觀音列行略式 ❶(日)Kwan-om-betsu-gyō-ryaku-shiki. ❷1卷 ❸仏 ❹見開き印刷 ❺(成)(天)(安)・1・四九

觀音菩薩現世記 ❶(日) Kwan-om-bo-satsu-gen-sō-ki. (支) Kuan-yin-p'u-sa-hsien-hsiang-chi. ❷1卷 ❸仏 ❹(参考)明治維新後廃仏毀釈時行倒寺院日

觀音菩薩功能利方法 ❶(日)Kwan-om-bo-satsu-kō-ryū-hō-hō. (支) Kuan-yin-p'u-sa-chieh-li-fang-fa. ❷1卷 ❸仏 ❹(参考) 寺院説教本出版年日録

觀音菩薩普門品略號 ❶(日)Kwan-om-bo-satsu-sho-bon-gyō-shu. (支) Kuan-yin-p'u-sa-chu-p'in-ching-ch'ou. 觀音菩薩普門品 ❷人巻 ❸仏 ❹近代説教講 ❺(参考)(天)(安)・一七四・二五)(安天)(寛・一一九・四)

觀音法 ❶(日)Kwan-on-hō. (支) Kuan-yin-fa. ❷1卷 ❸仏 ❹(参考) 東京大学蔵写本目録

觀音法 ❶(日)Kwan-on-hō. ❷九巻 ❸仏 ❹源範(東安天—建仁)A. D. 1120—1203)撰 ❺諸本(安天)(日天)(寛・三四天・二)

觀音寺略記 ❶(日)Kwan-on-myō-ō-shū. ❷天巻 ❸仏 ❹(寛)(成)(天)三一巻 ❺1・1 A. D. 1663—1726)撰 ❻東本三所 ❼(安天)(・1・二)(寛・四九)(安天)(安天)(寛・二)(・一)

觀音菩薩經(**卷**) ❶(日)Kwan-on-mu-i-ron. (支)Kuan-yin-wu-wei-lun. ❷1巻 ❸説教説話 ❹(参考) 安同説教・1・五)(同)安説教・1・八)(日天)説教・二)八

觀音物語 ❶(日)Kwan-on-mono-gatari. ❷1巻 ❸仏 ❹小説説話文学書 ❺大正・五 印 ❻(寛)(天)・1・二〇 九・九・二四)

觀音問 ❶(日)Kwan-on-mon. (支) Kuan-yin-wên. ❷1巻 ❸仏 ❹仏教教義 ❺明代手本刊 ❻宣統天(安天)(寛・二四九・1・五)(安)(寛)(天)・1・二)

觀音靈感録 ❶(日)Kwan-on-rei-kan-fu. (支) Kuan-yin-ling-kan-fu. ❷1巻 ❸仏 ❹明代説話集 ❺元禄二印 ❻(安天)(寛・一八九・1)

觀音靈感現世記 ❶(日) Kwan-on-rei-kan-mi-kuji-shō. ❷1巻 ❸仏 ❹(宝天)・一〇三三・一六)

觀音靈驗記 ❶(日)Kwan-on-rei-gen-ki. ❷十巻 ❸仏 ❹説話(一前期)A. D. 1766—)撰 ❺刊本(正天)・一〇三三・十八)

觀音靈場記圖會 ❶(日) Kwan-on-rei-jō-ki-zu-e. ❷五巻 ❸仏 ❹寺院(一享保頃)A. D. 1716—1735—)撰 ❺刊本・一・九印 ❻(寛)(天)(延)

觀音和讃 ❶(日)Kwana-on-wa-san ❷仏 ❸国文学方歌謡歌謡歌人 ❹日蓮(人言)(一一二四)撰 ❺天巻 ❻(寛)(成)(天)三一巻 ❼1・1 A. D. 1663—1726)撰 ❽東本三印 ❾(安天)(・1・二)(・八・六)(安)(安天)(安天・1・二)(・八)

觀音菩薩記 ❶(日)Kwann-on-mu-i-ron. (支)Kuan-yin-wu-wei-lun. ❷1巻 ❸説教説話 ❹(参考) 安同説教・1・五)(同)安説教・1・八)(日天)説教・二)八

觀音物語 ❶(日)Kwann-on-mono-gatari. ❷1巻 ❸仏 ❹小説説話文学書 ❺大正・五 印 ❻(寛)(天)・1・二〇 九・九・二四)

觀音問 ❶(日)Kwann-on-mon. (支) Kuan-yin-wên. ❷1巻 ❸仏 ❹仏教教義 ❺明代手本刊 ❻宣統天(安天)(寛・二四九・1・五)(安)(寛)(天)・1・二)

觀音靈感録 ❶(日)Kwann-on-rei-kan-fu. (支) Kuan-yin-ling-kan-fu. ❷1巻 ❸仏 ❹説話説話集 ❺元禄二印 ❻(安天)(寛・一八九・1)

觀音靈感現世記 ❶(日) Kwann-on-rei-kan-mi-kuji-shō. ❷1巻 ❸仏 ❹(宝天)・一〇三三・一六)

觀音靈驗記 ❶(日)Kwann-on-rei-gen-ki. ❷十巻 ❸仏 ❹説話(一前期)A. D. 1766—)撰 ❺刊本(正天)・一〇三三・十八)

觀音靈場記圖會 ❶(日) Kwann-on-rei-jō-ki-zu-e. ❷五巻 ❸仏 ❹寺院(一享保頃)A. D. 1716—1735—)撰 ❺刊本・一・九印 ❻(寛)(天)(延)

觀音和讃 ❶(日)Kwana-on-wa-san ❷仏 ❸国文学方歌謡歌謡歌人 ❹日蓮(人言)(一一二四)撰 ❺天巻 ❻(寛)(成)(天)三一巻 ❼1・1 A. D. 1663—1726)撰 ❽東本三印 ❾(安天)(・1・二)(・八・六)(安)(安天)(安天・1・二)(・八)

觀音寺略記 ❶(日)Kwann-on-myō-ō-shū. ❷天巻 ❸仏 ❹(寛)(成)(天)三一巻 ❺1・1 A. D. 1663—1726)撰 ❻東本三印 ❾(安天)(・1・二)(・八・六)(安)(安天)(安天・1・二)(・八)

觀音菩薩功能利方法 ❶(日)Kwann-om-bo-satsu-kō-ryū-hō-hō. (支) Kuan-yin-p'u-sa-chieh-li-fang-fa. ❷1巻 ❸仏 ❹(参考) 寺院説教本出版年日録

觀音菩薩普門品略號 ❶(日)Kwann-om-bo-satsu-sho-bon-gyō-shu. (支) Kuan-yin-p'u-sa-chu-p'in-ching-ch'ou. 觀音菩薩普門品 ❷人巻 ❸仏 ❹近代説教講 ❺(参考)(天)(安)・一七四・二五)(安天)(寛・一一九・四)

觀音法 ❶(日)Kwann-on-hō. (支) Kuan-yin-fa. ❷1巻 ❸仏 ❹(参考) 東京大学蔵写本目録

觀音法 ❶(日)Kwann-on-hō. ❷九巻 ❸仏 ❹源範(東安天—建仁)A. D. 1120—1203)撰 ❺諸本(安天)(日天)(寛・三四天・二)

觀音寺略記 ❶(日)Kwann-on-myō-ō-shū. ❷天巻 ❸仏 ❹(寛)(成)(天)三一巻 ❺1・1 A. D. 1663—1726)撰 ❻東本三印 ❾(安天)(・1・二)(・八・六)(安)(安天)(安天・1・二)(・八)

觀音菩薩現世記 ❶(日) Kwann-om-bo-satsu-gen-sō-ki. (支) Kuan-yin-p'u-sa-hsien-hsiang-chi. ❷1巻 ❸仏 ❹(参考)明治維新後廃仏毀釈時行倒寺院日

觀音菩薩功能利方法 ❶(日)Kwann-om-bo-satsu-kō-ryū-hō-hō. (支) Kuan-yin-p'u-sa-chieh-li-fang-fa. ❷1巻 ❸仏 ❹(参考) 寺院説教本出版年日録

觀音菩薩普門品略號 ❶(日)Kwann-om-bo-satsu-sho-bon-gyō-shu. (支) Kuan-yin-p'u-sa-chu-p'in-ching-ch'ou. 觀音菩薩普門品 ❷人巻 ❸仏 ❹近代説教講 ❺(参考)(天)(安)・一七四・二五)(安天)(寛・一一九・四)

觀音法 ❶(日)Kwann-on-hō. (支) Kuan-yin-fa. ❷1巻 ❸仏 ❹(参考) 東京大学蔵写本目録

觀音法 ❶(日)Kwann-on-hō. ❷九巻 ❸仏 ❹源範(東安天—建仁)A. D. 1120—1203)撰 ❺諸本(安天)(日天)(寛・三四天・二)

觀音寺略記 ❶(日)Kwann-on-myō-ō-shū. ❷天巻 ❸仏 ❹(寛)(成)(天)三一巻 ❺1・1 A. D. 1663—1726)撰 ❻東本三印 ❾(安天)(・1・二)(・八・六)(安)(安天)(安天・1・二)(・八)

名所行脚●(名所巡・名蹟所地)●月々の行脚●(清水寺巡礼)清水寺●(京都市内)●代々の参詣●本尊●(観音)●(名所・名蹟)●(観音)●(観音)●(観音

觀經疏正觀記 ❶(日)Kwan-gyō-gi-sho-shō-kwan-ki. (支)Kuan-ching-i-shu-chēng-kuan-chi. 觀經疏正觀記、觀經疏正觀記、正觀記 ❷1卷 ❸佚 ❹宋末(一二世紀頃)A. D. 1174—1189—)撰 ❺宋末天刊 ❻(支天・佛)・11ム・11ム)(宋天・11四1・天・天天・11ム・11ム)(宋天・天・天〇天)

觀經疏正觀記補闕 ❶(日)Kwan-gyō-gi-sho-shō-kwan-ki-ho-ketsu. ❷註疏名稿三、正觀記の不足部註し、「四明觀山定慧大師定作」、「東天天年己丑、天台山修定定慧大師定作」、「宋天淳熙己亥、山修定定慧大師」、「宋天」、「明教觀國」、「宋天」、「明教觀國」とある。 ❸(參考) 陸子統宗教義考參照11

觀經疏玩味坊考法藏分 ❶(日)Kwan-gyō-gi-setsu-gi-gyō-tō-ken-kaku-shō. ❷1卷 ❸佚、「天正三年・四八三No. 2208C」 ❹(日)法藏(三世紀末—一世紀)A. D. 1240—1304)撰 ❺弘安九(A. D. 1286)

❻西山浄土宗教學研究所藏寫本「陸子統宗(天正三年・四三天No. 2208A)」四卷を著はしたり、著者の觀經疏に就ての見解を發したに對して、著者の法華經疏に就ての見解を發したに對して、「天台宗の開祖は、「了然法師」に對して十六本の法華經疏(天正三年・四七1No. 2208B)」1卷を著はしたが、之に對して、「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(1)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(2)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(3)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(4)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(5)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(6)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(7)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(8)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(9)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(10)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(11)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(12)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(13)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(14)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(15)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(16)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(17)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(18)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(19)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(20)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(21)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(22)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(23)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(24)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(25)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(26)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(27)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(28)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(29)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(30)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(31)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(32)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(33)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(34)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(35)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(36)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(37)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(38)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(39)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(40)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(41)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(42)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(43)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(44)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(45)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(46)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(47)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(48)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(49)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(50)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(51)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(52)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(53)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(54)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(55)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(56)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(57)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(58)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(59)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(60)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(61)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(62)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(63)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(64)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(65)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(66)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(67)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(68)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(69)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(70)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(71)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(72)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(73)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(74)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(75)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(76)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(77)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(78)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(79)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(80)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(81)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(82)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(83)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(84)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(85)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(86)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(87)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(88)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(89)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(90)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(91)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(92)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(93)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(94)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(95)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(96)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(97)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(98)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(99)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(100)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(101)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(102)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(103)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(104)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(105)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(106)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(107)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(108)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(109)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(110)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(111)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(112)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(113)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(114)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(115)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(116)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(117)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(118)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(119)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(120)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(121)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(122)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(123)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(124)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(125)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(126)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(127)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(128)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(129)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(130)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(131)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(132)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(133)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(134)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(135)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(136)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(137)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(138)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(139)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(140)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(141)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(142)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(143)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(144)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(145)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(146)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(147)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(148)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(149)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(150)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(151)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(152)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(153)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(154)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(155)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(156)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(157)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(158)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(159)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(160)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(161)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(162)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(163)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(164)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(165)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(166)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(167)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(168)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(169)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(170)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(171)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(172)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(173)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(174)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(175)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(176)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(177)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(178)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(179)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(180)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(181)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(182)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(183)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(184)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(185)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(186)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(187)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(188)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(189)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(190)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(191)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(192)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(193)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(194)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(195)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(196)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(197)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(198)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(199)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(200)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(201)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(202)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(203)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(204)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(205)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(206)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(207)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(208)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(209)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(210)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(211)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(212)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(213)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(214)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(215)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(216)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(217)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(218)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(219)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(220)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(221)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(222)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(223)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(224)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(225)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(226)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(227)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(228)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(229)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(230)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(231)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(232)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(233)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(234)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(235)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(236)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(237)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(238)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(239)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(240)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(241)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(242)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(243)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(244)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(245)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(246)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(247)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(248)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(249)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(250)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(251)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(252)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(253)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(254)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(255)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(256)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(257)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(258)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(259)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(260)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(261)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(262)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(263)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(264)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(265)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(266)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(267)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(268)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(269)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(270)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(271)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(272)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(273)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(274)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(275)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(276)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(277)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(278)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(279)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(280)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(281)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(282)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(283)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(284)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(285)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(286)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(287)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(288)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(289)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(290)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(291)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(292)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(293)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(294)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(295)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(296)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(297)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(298)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(299)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(300)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(301)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(302)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(303)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(304)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(305)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(306)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(307)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(308)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(309)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(310)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(311)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(312)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(313)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(314)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(315)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(316)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(317)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(318)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(319)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(320)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(321)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(322)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(323)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(324)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(325)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(326)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(327)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(328)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(329)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(330)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(331)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(332)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(333)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(334)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(335)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(336)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(337)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(338)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(339)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(340)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(341)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(342)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(343)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(344)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(345)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(346)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(347)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(348)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(349)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(350)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(351)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(352)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(353)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(354)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(355)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(356)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(357)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(358)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(359)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(360)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(361)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(362)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(363)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(364)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(365)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(366)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(367)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(368)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(369)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(370)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(371)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(372)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(373)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(374)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(375)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(376)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(377)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(378)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(379)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(380)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(381)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(382)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(383)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(384)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(385)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(386)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(387)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(388)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(389)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(390)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(391)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(392)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(393)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(394)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(395)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(396)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(397)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(398)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(399)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(400)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(401)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(402)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(403)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(404)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(405)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(406)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(407)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(408)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(409)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(410)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(411)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(412)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(413)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(414)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(415)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(416)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(417)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(418)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(419)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(420)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(421)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(422)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(423)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(424)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(425)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(426)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(427)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(428)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(429)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(430)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(431)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(432)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(433)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(434)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(435)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(436)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(437)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(438)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(439)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(440)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(441)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(442)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(443)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(444)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(445)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(446)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(447)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(448)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(449)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(450)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(451)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(452)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(453)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(454)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(455)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(456)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(457)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(458)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(459)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(460)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(461)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(462)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(463)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(464)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(465)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(466)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(467)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(468)「法華經疏」は、「大日經疏」を作りたもの」であるとして、(469)「眞言宗の開祖は、「法華經疏」を作りたもの」であるとして、(470)「法華經疏」は

觀經疏 ❶(日)Kwan-gyō-kō. ❷一卷 ❸存″十一祖師傳之內 ❹宗祖(弘大″三五•一八)〔〔宗大″一〇三•六〕〕

觀經疏傳通記 ❶(日)Kwan-gyō-san-zen-gi. 觀經疏 ❷一卷 ❸存″觀經疏之內(大正三七No. 1753)″佛土安全寺版目″城宗安全寺″七祖聖教卷中″佛土五祖十師傳三一—四 ❹佛祖統紀(大唐元—永徳)〔A. D. 613—681 一說觀經〕″年六九說)後

觀經疏傳通記定記 ❶(日)Kwan-gyō—san-zen-gi-kai-jō-ki. ❷十一卷 ❸存″大日本續藏全書版之內 ❹宗祖(弘大元)觀經疏之內 ❺山王全安寺 ❻天保(天仁—弘安)〔A. D. 1240—1304 一說建治三〕″年六七說)後

觀經疏傳通記目記 ❶(日)Kwan-gyō-san-zen-gi-ki-shi-ki. ❷五卷 ❸存″續宗大系版一〇 ❹寶曆(安永四—寶永四A. D. 1775—1851)後 ❺天保四(A. D. 1833)

❻卷卷初に序文なし″巻に本文解釋に入るに三卷を以て三分解釋するに五卷のうち第一卷を數し″更に〔〕卷を以て定善と散善に分ち″第四卷第五卷の二卷を以て三福九品の解釋を明らんとするものに對する所説少くなし″ (新版解説)

觀經疏傳通記目記第三卷博解 ❶(日) Kwan-gyō-san-zen-gi-ki-shi-ki-dai-san-gwan-ho-i. ❷存″續宗大系版目七

觀經疏傳通記 ❶(日) Kwan-gyō-san-zen-gi-ki. 觀經疏傳通記″觀經疏傳通記″ ❷一卷 ❸存″觀經疏傳通記之內(大正三七No. 1753)″佛土安全寺版目″城宗安全寺″七祖聖教卷中″佛土五祖十師傳三一—四 ❹佛祖統紀(大唐元—永徳)〔A. D. 613—681 一說觀經〕″年六九說)後

觀經疏傳通記定記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kai-jō-ki-kō. ❷八卷 ❸存 ❹宗祖(弘大″弘大•三六)

觀經四帖疏記 ❶(日) Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-ki. ❷十卷 ❸存 ❹新版(明和天—寶永四A. D. 1769—1851)後 ❺明治三〔〕年刊 ❻(龍大″一〇三〇•一〇)〔龍大″一〇三〇•一〇〕

觀經四帖疏義述 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-gi-sho. ❷一卷 ❸存 ❹新版(寶永四—寶永六A. D.1753—1825)後 ❺文政九″年六月說)後 ❻大正三〔〕年 ❼妙味社版

觀經四帖疏講錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-gi-tan. 佛土講錄 ❷四卷 ❸存″大正三七•四三九No. 2208 A ❹觀經疏(仁治元—寶元)〔A. D. 1240—1304 一說寶元三″年六七說)後 ❺寶文四年 ❻(谷大″谷大•一〇三五)〔龍大″一〇三五—一〇三七″版越〕

觀經四帖疏指定記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kai-jō-ki. 觀經疏指定記″觀經四帖疏指定記″指定記 ❷三十六卷 ❸存″大日本續藏全書版第六八—五九″ 西山全書版六一七 ❹觀經疏(仁治元—寶元)〔A. D. 1240—1304 一說寶元三″年六七說)後 ❺寶文四年 ❻(谷大″谷大•六三五)〔龍大″一〇三〇•八六一九五″版越〕

觀經四帖疏指定記考 ❶(日) Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kai-jō-ki-kō. ❷八卷 ❸存 ❹宗祖本(谷大″谷大•一〇九五六)

觀經四帖疏記 ❶(日) Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-ki. ❷十卷 ❸存 ❹新版(明和天—寶永四A. D. 1769—1851)後 ❺明治三〔〕年刊 ❻(龍大″一〇三〇•一〇—三″版越)

觀經四帖疏義述 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-gi-sho. ❷一卷 ❸存 ❹新版(寶永四—寶永六A. D.1753—1825)後 ❺文政九″年六月說)後 ❻大正三〔〕年 ❼妙味社版

觀經四帖疏講錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-gi-tan. 佛土講錄 ❷四卷 ❸存″大正三七•四三九No. 2208 A ❹觀經疏(仁治元—寶元)〔A. D.1240—1304 一說寶元三″年六七說)後 ❺寶文四年 ❻(谷大″谷大•一〇三五)〔龍大″一〇三五—一〇三七″版越〕

觀經四帖疏教相分 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kyō-sō-shō. ❷十卷 ❸存

觀經四帖疏講錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kō-gi. ❷十四卷 ❸存 ❹宗祖(寶永—寶永四A. D.1749—1821)後 ❺寶永六(A. D. 1794) ❻寶永六年(谷大″谷大•九一)〔〕明治三〇年(龍大″版越)〔谷大″谷大•一一一八八〕

觀經四帖疏講錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kō-gi. ❷十四卷 ❸存 ❹宗祖(寶永—寶永四A. D.1749—1821)後 ❺寶永六年(谷大″谷大•一四〇)

觀經四帖疏圖會記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-ken-shō-ki. ❷五卷寶十卷 ❸存 ❹宗祖(天保六—寶永四A. D. 1693—1764)後 ❺(參考) 佛土版宗教書考錄〔〕 ❻寶永(龍大″一〇三〇•四)〔谷大″谷大•九八六〕

觀經四帖疏產業錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kō-ei-roku. 觀經疏產業錄 ❷四卷 ❸存″大日本續藏全書版第六〇 ❹宗祖(弘安—〇一)〔〕明治三〇年A. D. 1287—1347)後 ❺寶永六年—四(A. D. 1342—1345) ❻寶永(谷大″谷大•一九六七)

觀經四帖疏講錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kō-gi. ❷五卷 ❸存 ❹文久三年 ❺(谷大″谷大•三七一〇)

觀經四帖疏講錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kō-gi. ❷十卷 ❸存 ❹寶月記原稿(寶永三—文政)〔A. D.1749—1817)後 ❺寶政六(A. D. 1794) ❻寶政六年(谷大″谷大•九一)〔〕明治三〇年(龍大″版越)〔谷大″谷大•一一一八八〕

觀經四帖疏講錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kō-gi. ❷十四卷 ❸存 ❹寶月記宗明(寶永三—文政)〔A. D.1750—1821)後 ❺寶永(谷大″谷大•四四〇)

觀經四帖疏講錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-jō-no-sho-kō-gi. ❷十四卷 ❸存 ❹寶月記宗明(寶永三—文政)〔A. D.1750—1821)後 ❺寶永(谷大″谷大•四四七八)

觀經四帖疏講錄 ❶(日)Kwan-gyō-

-shi-yi-no-shi-ki-roku. ❷十三卷 ❸存、眞宗全書第一四 ❹義敎(元祿七—明和五 A. D. 1694—1768)述

❺此の書、義敎の撰として傳はれども、或は門人の加筆せる箇所あるやも知れず、卷首の序を見るに、玄義分は寶曆五年(六十一歳)に講じたることを記せり。而して其の次に記せる文に、先師遺書の指示に依り、安永十年(沒後十三年)之を回講すとあるは、本と門人の冠註せるを、寫傳の際に本文に混ぜるならん。此の書全部十三卷中、玄義分その七卷を占め、文を逐うて解釋してあるが、他の三帖は要文を揭げて之を解釋し、而も往々にして如依釋」の三字を置き、其の講解を讓れり。されば彼の依釋と相俟ちて完結すべきものである。此の兩書は、著者の胸臆を披瀝せるもので、彼の最も圓熟せる觀經解釋を窺ふべき良書である。

❼寫本(龍大、一二・一六・五) (脇谷撰譯)

觀經四帖疏鑽仰記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-shi-san-jō-ki. ❷十一卷 ❸存、眞宗全書第一三 ❹隨慧—天明二 A. D. 1783)述 ❺寶曆七—明和五(A. D. 1757—1768)

❻眞筆本の跋文によつて脫稿の年時を見るに、玄義分讚仰記三卷寶曆七年夏斑鳩西光寺にて講了、序分義讚仰記三卷同十二年秋九月脫稿、定善義讚仰記三卷同十三年夏姫路にて講了、散善義讚仰記二卷明和五年九月稿筆となつてゐて、玄義、定善義の二帖は講了の年月を記してゐるが、他の二帖は脫稿と記してゐるから、恐らく前二帖も講了年時の前に脫稿してゐたのであらう。これを通算するに前後十二年間を費して成れるものである。廣く淨土宗鎭西派西山派は云ふに及ばず、淨影、天台、嘉祥等の淨土敎義を參酌し、最も懇切に善導敎學の眞義を發揮してをる。各帖の玄談に多言を用ひず、直に題號釋より本文解釋に入つてをる。

❼眞筆本(播摩國印南郡佐土村福乘寺)

觀經四帖疏私記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-shi-ki. 觀無量壽經四帖疏私記、觀無量壽經私記、觀經四帖疏秘鈔、秘鈔、實輪院私記、鶴木私鈔 ❷十八卷或十九卷 ❸存 ❹行觀覺撫(仁治二—正中二 A. D. 1241—1325)述 ❺元亨元(A. D. 1321)

觀經四帖疏私記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-shi-ki. ❷七卷 ❸存 ❹普行(寬政四—弘化元 A. D. 1792—1844)述 ❼寫本(龍大、一二二六・七)

觀經四帖疏重笠 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-chō-gasa. ❷九卷 ❸存 ❹南楚(文祿元—寬文二 A. D. 1592—1671)撰 ❼(參考) 淨土眞宗敎典志第三 ❺正保二寫 ❼(谷大、宗大・二一八七)

觀經四帖疏抄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-shō. 觀經玄義要義釋觀門義鈔 ❷十卷 ❸存、大日本佛敎全書第五五 觀門要義鈔之內 ❹證空(治承元—寶治元 A. D. 1177—1247)述 ❼寫本(谷大、宗大・四九六、宗甲・一五)

觀經四帖疏商量鈔 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-tō-ryō-shō. ❷二十卷 ❸存 ❹空慧(寬文元—延享三 A. D. 1661—1746)述 ❼(參考) 淨土眞宗敎典志第二 ❼寫本(谷大、長保・三一)

觀經四帖疏證定訣 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-shō-tei-ketsu. ❷十卷 ❸存 ❹敏藏(—天明頃 A. D. 1781—1788—)述 ❺天明四刊 ❼(谷大、宗大・六一九)

觀經四帖疏證定鈔 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-shō-tei-shō. ❷二十四卷 ❸存 ❹白來(元祿一一—安永四 A. D. 1688—1775)述 ❼寫本(龍大、一二二六・九—一〇)

觀經四帖疏新記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-shin-ki. 觀經疏新記、觀無量壽經四帖疏新記 ❷十六卷 ❸存 ❹貞準(—貞享二 A. D. 1685)述 ❺天和二刊 ❼(谷大、宗大・二二〇三、宗大・二三一)(正大、一一五三・一七二—一七三)(龍大、二四一五・一〇一—一〇二、研眞)

觀經四帖疏專想錄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-sen-sō-roku. ❷二卷 ❸存 ❼寫本(龍大、一二二六・一一)

觀經四帖疏蘿林解 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-ra-rin-ge. ❷十一卷 ❸存 ❹光遠院惠空(正保元—享保六 A. D. 1644—1721)述 ❼寫本(谷大、宗丙・三四)

觀經四帖疏他筆抄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-ta-hitsu-shō. 觀無量壽經四帖疏他筆鈔、他筆鈔 ❷十四卷 ❸存、大日本佛敎全書第五六—五七、西山全書第四—五 ❹證空(治承元—寶治元 A. D. 1177—1247)述 ❼文政九刊(谷大、宗大・三〇〇一)寫本(谷大、宗大・六三四)(龍大、二四一五・一〇三、研眞)

觀經四帖疏追考 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-tsui-kō. ❷十卷 ❸存 ❼寫本(龍大、研眞)

觀經四帖疏郢匠記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-tei-shō-ki. ❷六卷 ❸存 ❹了空(—寶曆一一 A. D. 1761—)述 ❼寫本(龍大、研眞)

觀經四帖疏傳意鈔 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-den-i-shō. ❷七卷 ❸存 ❼寫本(谷大、宗大・八八四)

觀經四帖疏傳通記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-den-tō-ki. 觀經疏傳通記、觀無量壽經四帖疏傳通記、傳通記 ❷十五卷 ❸存、大正五七・四九七N. 2236、淨土宗全書第二 ❹良忠(正治元—弘安一 A. D. 1199—1287)述 ❼(參考) 蓮門類聚經籍錄卷上、淨土眞宗敎典志第三 ❼寫本(谷大、宗大・五九六)(龍大、二四一五・一〇七—一一一)文政五刊(谷大、宗大・九四五、宗大・二二一七)(龍大、二四一五・一

○、六研眞)

觀經四帖疏傳通記見聞 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-den-tō-ki-kem-mon. 觀經疏傳通記見聞、觀無量壽經四帖疏傳通記見聞、大澤見聞、良榮見聞 ❷二十六卷 ❸存 ❹良心(弘長二—元亨三 A. D. 1262—1323)作、良榮(康永元—正長元 A. D. 1342—1428)說應永三〇寫)補

❺良忠の觀經疏傳通記を註釋したるもの。傳通記が本疏の各帖に從つてその題目を異にするが故に、本書も傳通記に從つて名を立て且つその卷數を分つ。觀經玄義分傳通記第一見聞三卷、同第二見聞乃至同第六見聞各二卷、觀經序分義傳通記第一見聞、同第二見聞各一卷、同第三見聞二卷、觀經定善義第一見聞、同第二見聞各二卷、同第三見聞一卷、觀經散善義第一見聞二卷、同第二見聞、同第三見聞各一卷としてある。良榮見聞、大澤見聞(良榮が大澤圓通寺を開きたれば)或は單に澤見とも呼んで居る。本書は良榮見聞、大澤見聞と呼ばるゝ如く良榮の著作の如きも、卷首に持阿の序文を附するより見ても、實は良榮が持阿良心の見聞を刪補し少しく自義を加へて記したものであるから、良榮單獨の著作ではない。眞宗敎典志第三に「(傳通記)見聞十五卷性眞作。良榮綱=修于後=榮問所=己意=、默華成=鈔=、今稱=大澤見聞=、卽此」と。又蓮門經籍錄卷上に「(傳通記)見聞十五卷、藤田性眞。良榮綱=修之=問加=己意=、故今曰=之大澤見聞=」と云ふはこれを指す。敎典志並に經籍錄に藤田性眞作と云ふは藤田性眞(心)と持阿良心とを同一人と見る誤解より來るもので、性眞でなく持阿良心とすべきである。寫本には各卷の首に良榮撰とあるも、三緣山木活本には撰號を附してない。寫本の奧書に「傳通記見聞畢最極之祕書也、不=可=及=他見=、可=祕々々、千金莫傳、此讚已再、衆集沙門良榮爲=後學=拾=相傳=書=之=、見人可=有=御訪=者哉。至德二乙巳歲正月四日奧州東海道岩城矢目談所住人理本良榮在判」とあるのは良榮が名越流觀に受法した持阿良心を如何に尊重するかを知るに足る。緣山木活本は享保十四年六月二十二日に印刷を始め同十六年十二月十五日に摺寫を終つて居る。その跋に本書校正印刷の因由を述べ、次に「傳通記逗洋鈔受決鈔異本校合點本緣山會下借本在之傳可寫之兩已」と附してある。

❼享保一四—一六刊 ❼(谷大、宗大・七五五)(正大、一一五四・一三六—一三九)

(原田養道)

觀經四帖疏傳通記再鈔 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-den-tō-sai-shō. ❷二十七卷 ❸存 ❼寫本(谷大、宗大・七五六)

觀經四帖疏傳通記受決抄緣起 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-den-tō-ki-ju-ketsu-shō-en-gi. ❷一卷 ❸存 ❹良心(弘長二—元亨三 A. D. 1262—1323)述 ❼明治四二寫 ❼(谷大、宗大・一二五六)

觀經四帖疏傳通記釋鈔 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-den-tō-ki-syaku-shō. 傳通記釋鈔、觀無量壽經四帖疏傳通記釋鈔、釋鈔 ❷四十八卷 ❸存、淨土宗全書第三 ❹座圓(曆應四—應永二七 A. D. 1341—1420)述 ❼(參考) 蓮門類聚經籍錄卷上、淨土眞宗敎典志第三 ❼明曆元刊(谷大、宗大・五九九)(龍大、二四一五・一一三、研眞) 明曆二刊(谷大、宗大・二二八三)

觀經四帖疏傳通記釋鈔米金鈔 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-den-tō-ki-syaku-shō-bei-kin-shō. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 蓮門類聚經籍錄卷上、淨土眞宗敎典志第三 ❼慶安二寫 ❼(谷大、宗大・二八八一)

觀經四帖疏祕決集 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-hi-ketsu-shū. 觀經祕決集、觀無量壽經祕決集 ❷二十卷 ❸存、大日本佛敎全書第五四、西山全書第一 ❹證空(治承元—寶治元 A. D. 1177—1247)述 ❼寫本(谷大、宗大・六三二)(龍大、二四一五・一三五)

觀經四帖疏祕鈔 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-hi-shō. 觀無量壽經四帖疏祕鈔、觀經四帖疏私記、秘鈔、實輪院私記、鶴木私鈔 ❷十八卷或十九卷 ❸存 ❹行觀覺撫(仁治二—正中二 A. D. 1241—1325)述 ❺元亨元(A. D. 1321) ❼刊本(龍大、二四一五・一〇〇、研眞)(正大、一一五三・一六〇)文明四—六寫(谷大、宗甲・一八)

觀經四帖疏深草抄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-fukaku-sasō. 觀無量壽經四帖疏深草鈔、觀經四帖疏抄、觀經記、深草鈔、深草鈔、觀經疏記 ❷四十八卷 ❸存、淨土宗全書第三 ❹座圓(曆應四—應永二七 A. D. 1341—1420)述 ❼(參考) 蓮門類聚經籍錄卷上、淨土眞宗敎典志第三 ❼明曆元刊(谷大、宗大・五九九)(龍大、二四一五・一一三、研眞) 明曆二刊(谷大、宗大・二二八三)

❺良忠の觀經疏傳通記を註釋したるもの。傳通記が本疏の各帖に從つてその題目を異にするが故に、本書も傳通記に從つて名を立て且つその卷數を分つ。觀經玄義分傳通記第一見聞三卷、同第二見聞乃至同第六見聞各二卷、觀經序分義傳通記第一見聞、同第二見聞各一卷、同第三見聞二卷、觀經定善義第一見聞、同第二見聞各二卷、同第三見聞一卷、觀經散善義第一見聞二卷、同第二見聞、同第三見聞各一卷としてある。良榮見聞、大澤見聞(良榮が大澤圓通寺を開きたれば)或は單に澤見とも呼んで居る。本書は良榮見聞、大澤見聞と呼ばるゝ如く良榮の著作の如きも、卷首に持阿の序文を附するより見ても、實は良榮が持阿良心の見聞を刪補し少しく自義を加へて記したものであるから、良榮單獨の著作ではない。眞宗敎典志第三に「(傳通記)見聞十五卷性眞作。良榮綱=修于後=榮問所=己意=、默華成=鈔=、今稱=大澤見聞=、卽此」と。又蓮門經籍錄卷上に「(傳通記)見聞十五卷、藤田性眞。良榮綱=修之=問加=己意=、故今曰=之大澤見聞=」と云ふはこれを指す。敎典志並に經籍錄に藤田性眞作と云ふは藤田性眞

深草鈔、深草鈔、觀經疏記 ❷三卷或十卷 ❸存、深草叢書第四—六 ❹圓空立信(建保元—弘安七 A. D. 1213—1284)述 ❼寫本(谷大、宗大・三二七四)(龍大、二四一五・一一六)

觀經四帖疏辨叢 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-ben-sō. ❷三卷 ❸存 ❹道龍(文政五—明治四〇 A. D. 1823—1907)述 ❼寫本(龍大、一二二六・一一)

觀經四帖疏聞記 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-mon-ki. ❷十五卷 ❸存 ❹圓乘院宣明(寬延三—文政四 A. D. 1750—1821)述 ❼寫本(谷大、宗大・九九二)

觀經四帖疏略抄 ❶(日)Kwan-gyō-shi-yi-no-sho-ryaku-shō. 觀無量壽經四帖疏傳通記略鈔、敎忍房鈔 ❷八卷 ❸存、淨土宗全書第二 ❹良忠(正治元—弘安一 A. D. 1199—1287)述 ❼(參考) 蓮門類聚經籍錄卷上、淨土眞宗敎典志第三 ❼慶安四刊(谷大、宗大・五九六)(龍大、二四一五・一〇七—一一一)文政五刊(谷大、宗大・九四五、宗大・二二一七)(龍大、二四一五・一

ム、弘長二年歟、玄義略鈔三典書云、弘長二年七月二十一日書之畢、老眼朦風勢隙不能筆、不堪案義、又卒爾也。又無才也、所書無其詮、但爲友徒然也、爲增信心也、努努不可他見、但所說者、莫非述聞金師經論矣、南無佛、然何六十有四歳云云」（此奥書今の本に見えず）と。以て本書述作の機由を知る。上述の如く此書は傳通記の草案本の鈔錄なれば、觀經玄義分本、沙門善導集記事、先勸大衆發願歸三寶事と列目する如く、觀經疏中の要點を逐次抽出して大體問答體にて其義旨を解釋して居る。各巻の項目數は次の如し。玄義分略鈔第一、七一。同第二、七四。同第三、二三。序分義略鈔一〇一。定善義略鈔第一、八一。同第二、六七。散善義略鈔第一、七一。同第二、七一。本書と傳通記との叙述の材料は略ぼ同じであるが、本書に在つて傳通記にない特殊の説明がないでもない。玄義分略鈔の我等愚痴凡夫の下で少智を出離の要道と思ふを誡むる段の如き、或は大願業力恐怖上旋の大願の解釋を通じて四十八願と所すると上に、別して十八、十九の兩願を見るが如きそれである。現行の傳通記は三校一覆行・飾傳、三十篇廻抉・所記、と云はるゝ程、屢々校正治定されたれば其内容の純整、叙述の精錄を觀るが、本書は時に錄磨の義なきにあらざるも、概して粗笨である。然しその潤色なき素朴な説明は傳通記を讀む好參考書と云はねばならぬ。

（原田霊道）

觀經四帖疏了音鈔 ❶(B)Kwan-gyō-shi-yō-on-shō-ryō-on-shō. 觀經疏六角鈔、觀無量壽經四帖疏六角鈔、了音鈔、六角鈔 ❷八卷 ❸存、大日本佛教全書第五七—五八、西山全書第五—六 ❹了音(—弘長頃A.D.1261—1263—)述 ❺享保五刊 ❻(谷大、宗大・六三三)(龍大、二四一五・一一七)

觀經四帖疏論 ❶(B)Kwan-gyō-shi-yō-ro-shō-ron. ❷二卷 ❸存 ❹南條神興(文化一一—明治二〇A.D.1814—1887)述 ❺明治三二刊 ❻(帝國、六九・一二一)

觀經四帖疏論義抄 ❶(B)Kwan-gyō-shi-yō-ro-shō-ron-gi-shō. 觀經疏論義抄 ❷八卷 ❸存 ❹圓慈(—康永頃A.D.1342—1344—)述 ❺永應二刊 ❻(谷大、宗大・二四九)(龍大、二四一五・二一八、研眞)(哲、う・二・右・一)

觀經四帖疏論草 ❶(B)Kwan-gyō-shi-yō-ro-shō-ron-sō. 四帖疏論草 ❷一卷或四卷 ❸存 ❹南條神興(文化一一—明治二〇A.D.1814—1887)述 ❺明治三二刊 ❻(龍大)(谷大、宗小・六二)(正大、一一五三・一一七五) ❼京都爲法館

觀經四品知識義 ❶(B)Kwan-gyō-shi-hon-chi-shiki-gi. ❷一卷 ❸存、大正八三・四九五No.2354 ❹道教顯意(仁治元—寛元二A.D.1240—1304)說 寛元三、年六七寅)述 ❺散善九品中、下四品に至て始て善知識を說きたるを說明す。曰く上五品の人は平生聞法せり臨終に善友の開導を須ひず、下四品の人は臨終に善知識の勸めを待て往生す、善導云下四品の人は臨終に善を藉て佛願力に乘じて往生すと、而して此知識は念佛の一法を說き淨土に歸せしむ。其說相に差異ありて、中下品は安心、二尊教を聞きて信解し即便往生す。下上品は起行、正雜二行の得失を顯して念佛を勸むる故、下中品は聞名佛力不思議を聞く故、下下品は作業、經文の如是至心は安心、令聲不絶等は作業なれば作業往生を要とす。而して安心の一念に願と行あれば、起行作業ありて往生す、聞名にも心行業を具すと。要するに觀經の十念往生は大經の乃至十念にして、此十念とは聞名往生なりと結着してゐる。❾文政二刊(谷大、宗大・六一三)文政五刊(谷大、宗大・一〇〇二)明治三一刊(龍大、二六八五・一)

觀經餌持記 ❶(B)Kwan-gyō-ji-ki. ❷三卷 ❸存 ❹行照(—文久二A.D.1862)述 ❺写本(龍大)

觀經直談鈔 ❶(B)Kwan-gyō-jiki-dan-shō. 觀無量壽經直談鈔 ❷十卷 ❸存 ❹淳譽隨波(—寛永一三A.D.1636)述 ❺正保二刊(京大、一・二三ヵ・一一)正保四刊(龍大、二四一五・八二)(谷大、宗大・二四五)

觀經述義 ❶(B)Kwan-gyō-jutsu-gi. 觀無量壽經述義 ❷二卷 ❸存、眞宗全書第六 ❹大諭(寶曆九—文化元A.D.1759—1804)述 ❺文化一三刊(京大、日大来・一一五)(谷大、宗大・五四九)(龍大、一二一三・二四、研眞)写本(龍大、一二一三・二五)

觀經釋 ❶(B)Kwan-gyō-shaku. ❷三卷 ❸存、黑谷上人語燈錄(後語)之内(大正八三No.2611)淨土宗全書第九、後語燈錄第二 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第一

觀經疏 ❶(B)Kwan-gyō-sho. (支)Kuan-ching-shu. 觀無量壽佛經疏 ❷一卷 ❸存、大正三七・一八六No.1750、續貂一、卍三三・三、明南1541約、No.1539、淨土宗全書第五 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七A.D.531—597)述 ❺正保五刊 ❻(高大、寄・一・二三)(立大、A一一・二七四)

觀經疏 ❶(B)Kwan-gyō-sho. (支)Kuan-ching-shu. 觀無量壽佛經疏、觀經四帖疏、四帖疏 ❷四卷 ❸存、大正三七・二四五No.1754、卍續一・三二・四、七祖聖教卷中 ❹唐善導(大業九—永隆二A.D.613—681)說龍朔二、年六九寅)述 ❼(參考) 淨土正依經論書籍目錄 ❾正大、一一五三・五四—五五)

觀經疏楷定記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-kai-ji-ki. 觀無量壽經疏楷定記、觀經四帖疏楷定記、楷定記 ❷三十六卷或十八卷 ❸存、大日本佛教全書第五八—五九、西山叢書第六 ❹道教顯意(仁治元—寛元二A.D.1240—1304)說寛元三、年六七寅)述 ❺寛文四刊 ❾(京專)(正大・一一五三・一六五)

觀經疏楷定記誤字考 ❶(B)Kwan-gyō-sho-kai-ji-ki-go-ji-kō. ❷一卷 ❸存 ❺寛政一一刊 ❾(谷大、宗大・一三一八)

觀經疏記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-ki. (支)Kuan-ching-shu-chi. ❸缺 ❹宋代石壁行靖述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

觀經疏記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-ki. (支)Kuan-chin-shu-chi. ❸缺 ❹宋實雲義通(天成二—嘉祐元A.D.927—956)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二

觀經疏歸敬序別行鈔 ❶(B)Kwan-gyō-sho-ki-kyō-jo-betsu-gyō-shō. 觀無量壽經歸敬序別行鈔 ❷二卷 ❸存 ❹緇空(—延寶二A.D.1673)述、超然(—享保二A.D.1717)訂 ❺元祿三刊 ❾(正大、一一五三・一九九)(龍大、研眞)

觀經疏聞書 ❶(B)Kwan-gyō-sho-kiki-gaki. ❷一冊 ❸存 ❺足利時代寫 ❾(寶善提院)

觀經疏玄義分會通別時意私考 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-e-tsū-betsu-ji-i-shi-kō. ❷一卷 ❸存 ❹阿蒲得聞(文政九—明治三九A.D.1826—1906)述 ❺嘉永四寫 ❾(谷大、宗大・二四二〇)

觀經疏玄義分開題 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kai-dai. ❷一卷 ❸存 ❾写本(谷大、宗大・三九八一)

觀經疏玄義分楷定記講錄 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kai-ji-ki-kō-roku. ❷二卷 ❸存 ❾写本(谷大、宗大・一三七四)

觀經疏玄義分己卯記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-ki-kō-ki. ❷八卷 ❸存 蓮井雲溪(—明治一八A.D.1885)述 ❺明治一二(A.D.1879) ❾写本(谷大、宗大・一六一六)

觀經疏玄義分癸酉記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-ki-yū-ki. ❷六卷 ❸存 ❹南條神興(文化一一—明治二〇A.D.1814—1887)述 ❺明治六(A.D.1873) ❾写本(谷大、宗大・一六一七)

觀經疏玄義分記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-ki. ❷二卷 ❸存 ❹圓熊(—弘化二A.D.1845)述 ❺天保一二(A.D.1841) ❾写本(谷大、宗大・一七五〇)

觀經疏玄義分記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-ki. ❷二卷 ❸存 ❹曾朗(明和六—寛永四A.D.1769—1851)述 ❾天保一五寫(谷大、宗大・三九八八)明治二七刊(谷大、宗大・一三〇)

觀經疏玄義分義疏 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-gi-sho. ❷二卷 ❸存 ❹曾眞(寶曆三—文政八A.D.1753—1825)述 ❾写本(谷大、長保・三三)

觀經疏玄義分聞書 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kiki-gaki. ❷三卷 ❸存 ❹圓乘院宣明(寛延二—文政四A.D.1749—1821)述 ❾写本(谷大、宗大・一五六)

觀經疏玄義分口義 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kū-gi. ❷四卷 ❸存 ❹圓乘院宣明(寛延二—文政四A.D.1749—1821)述 ❾写本(谷大、宗大・一八二九)

觀經疏玄義分愚聞記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-gu-mon-ki. ❷八卷 ❸存 ❹光遠院惠空(正保元—享保六A.D.1644—1721)述 ❾写本(谷大、宗大・二七三四)

觀經疏玄義分愚要抄 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-gu-yō-shō. ❷三卷 ❸存 ❹淨音(建仁二—文永八A.D.1202—1271)述 ❾写本(谷大、宗大・一九三八)

觀經疏玄義分科 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kwa. ❷一卷 ❸存 ❹光遠院惠空(正保元—享保六A.D.1644—1721)記 ❺寛文一二寫 ❾(谷大、宗丙・一八)

觀經疏玄義分科圖 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kwa-zu. ❷一卷 ❸存 ❹寶譽(延享三—文政一一A.D.1746—1828)記 ❺天保一四寫 ❾(谷大、宗大・三七二二)

觀經疏玄義分科文 ❶Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kwa-mon. ❷一卷 ❸存 ❾写本(谷大、宗大・一六一五)

觀經疏玄義分顯彰記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-ken-shō-ki. ❷三卷 ❸存 ❹香嚴院惠然(元祿六—寶曆一四A.D.1693—1764)述 ❾写本(谷大、宗大・七二四)

觀經疏玄義分顯彰錄 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-ken-shō-roku. ❷七卷 ❸存 ❹慧敏(—寛政五A.D.1793)述 ❾写本(谷大、宗大・二一七五)

觀經疏玄義分甲午記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-go-ki. ❷五卷 ❸存 ❹法海(明和五—天保五A.D.1768—1834)述 ❺天保五(A.D.1834) ❾写本(谷大、宗大・二六七)

觀經疏玄義分庚寅記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-in-ki. ❷三卷 ❸存 ❹淨雲(建仁二—文永八A.D.1202—1271)述 ❾写本(谷大、宗大・一九三八)

觀經疏玄義分庚寅記 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-in-ki. ❷三卷 ❸存 ❹曾眞(寶曆三—文政八A.D.1753—1825)述 ❾写本(谷大、長保・三三)

觀經疏玄義分講苑 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-en. ❷三卷 ❸存 ❹秀啓述 ❾写本(谷大、宗大・二八六九)

觀經疏玄義分講義 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-gi. ❷四卷 ❸存 ❹寶譽(延享三—文政一一A.D.1746—1828)述 ❺文政五(A.D.1822) ❺明治二五寫 ❾(谷大、宗大・一七五)

觀經疏玄義分講義 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-gi. ❷四卷 ❸存 ❹得住(—明治七A.D.1874)述 ❺文久二(A.D.1862) ❾写本(谷大、宗大・一九八五)

觀經疏玄義分講義 ❶(B)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-gi. ❷一卷 ❸存

❶寛政(貞享七—一新年二)〇A.D.1795—1887)歳 ❹文政元(A. D. 1825) ❺貞享(谷大″宗大•二一七二)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-gi. ❷一巻 ❸存 ❹小笠原長生(一慶應四年A. D. 1865—1867—)歳 ❺明治二六(A. D. 1893) ❻貞享(谷大″宗大•一六二八)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-gi. ❷二巻 ❸存 ❹芳賀矢一(一明治二九A. D. 1896)歳 ❺明治二〇貞 ❻(谷大″宗大•二七二二)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-gi. ❷二巻 ❸存 ❹藤堂了學(文政二—明治三三A. D. 1819—1900)歳 ❺明治二七(A. D. 1894) ❻貞享(谷大″宗大•一六二七)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-gi. ❷二巻 ❸存 ❹吉谷覺壽(天保一三—大正三A. D. 1842—1914)歳 ❺明治二七(A. D. 1894) ❻貞享(谷大″宗大•一六二九)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-gi. ❷二巻 ❸存 ❹三宅米吉(一大正六A. D. 1917)歳 ❻貞享(谷大″宗大•一六二四)

歌謡流支巻分講究刑決記

❶(日) Kwan—gyō-sho-gen-gi-bun-kō-kyū-han-ketsu-ki. ❷一巻 ❸存 ❹藤枝重胤(一天保四年A. D. 1864—)歳 ❺明治二三(A. D. 1890) ❻貞享(谷大″宗大•一六二四)

歌謡流支巻分講刑 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-han. ❷二巻 ❸存 ❹橘春暉(文化二一—明治二〇A. D. 1814—1887)歳 ❺明治二二刊 ❻(谷大″宗大•一八八)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-roku. ❷四巻 ❸存 ❻貞享(谷大″宗大•二九七二)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-roku. ❷七巻 ❸存 ❹荻生徂徠(文化三—明治一九A. D. 1806—1886)歳 ❻貞享(谷大″宗大•二一二〇)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-roku. ❷一巻 ❸存 ❹細川千巌(天保五—明治三〇A. D. 1834—1897)歳 ❺明治二一(A. D. 1888) ❻貞享(谷大″宗大•一六一八)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-roku. ❷二巻 ❸存 ❹藤堂了學(文政二—明治三三A. D. 1819—1900)歳 ❺明治二九(A. D. 1896) ❼明治二九刊 ❻(谷大″宗大•一一八)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-roku. ❷一巻 ❸存 ❹荻生徂徠(文政一〇—明治三七A. D. 1827—1904)歳 ❺明治二五(A. D. 1892) ❻貞享(谷大″宗大•一六二二)

歌謡流支巻分講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-kō-roku. ❷二巻 ❸存 ❹藤山雷太(天保八—大正一〇A. D. 1837—1921)歳 ❺明治四〇(A. D. 1907) ❼明治四〇刊 ❻(谷大″宗大•一〇六一)

歌謡流支巻分講中記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-san-gō-ki. ❷五巻 ❸存″ 延宗全等撰一三 [illegible] 母記之内 ❹四巻(一天明二A. D. 1782)歳 ❺明治四一頃 ❻(谷大″宗大•一一七五)

歌謡流支巻分弘記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-shi-ki. 藤原孝範撰 支巻分弘記″ 藤原孝範撰分巻抄 ❷五巻 ❸存″ 藤原孝範四帖秘歌弘記 ❹行阿撰(仁治二—正中二 A. D. 1241—1325)歳 ❻刊本(谷大″宗大•六八八)(谷大″二四一五•七二二)(正大″一一五三•一五五—一五六″一一五二•二一一四)

歌謡流支巻分弘長鈔 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-shi-jū-shō. ❷四巻 ❸存 ❹如願(一弘安—正和A. D. 1334—1341—)歳 ❺天保七頃 ❻(谷大″宗大•一一一八)

歌謡流支巻分抄要 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-shi-yō. ❷二巻 ❸存 ❹正覺撰 ❺明治一八頃 ❻(谷大″宗大•二四〇二)

歌謡流支巻分抄講記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-ji-kō-ki. ❷二巻 ❸存 ❹明和四(A. D. 1765) ❻貞享(谷大″宗大•一二)

歌謡流支巻分集釋 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-shaku-yō. ❷六巻 ❸存 ❹藤原(貞享元—文化一一)A. D. 1748—1816)歳 ❺明治四〇頃 ❻(谷大″宗大•一一二二)

歌謡流支巻分十四行呼事指記

❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-jū-shi-gyō-ge-ek-kan-ki. ❷一巻 ❸存 ❹了一(一寛政一〇 A. D. 1763)歳 ❻貞享(谷大″宗大•二五四四)

歌謡流支巻分十四行呼聞事

❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-jū-shi-gyō-ge-kiki-gaki. ❷一巻 ❸存 ❹藤原孝範 ❻(谷大″宗大•二一六九″宗大•二〇二一)

歌謡流支巻分十四行呼講義

❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-jū-shi-gyō-ge-kō-gi. ❷一巻 ❸存 ❹谷重(寛政八—文政四A. D. 1758—1821)歳 ❺文化九頃 ❻(谷大″宗大•一一三九八)

歌謡流支巻分十四行呼講義

❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-jū-shi-gyō—ge-kō-roku. ❷一巻 ❸存 ❻貞享(谷大″宗大•二三一〇)

歌謡流支巻分十四行呼書記

❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-jū-shi-gyō-ge-chō-ki. ❷一巻 ❸存 ❻貞享(谷大″宗大•一六二二六)

歌謡流支巻分十四行呼義釋

❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-jū-shi-gyō-ge-hin-gi. ❷一巻 ❸存 ❹春海(寛延三—文政二一 A. D. 1746—1828)歳 ❻文政五(A. D. 1822) ❼天保五頃 ❻(谷大″宗大•一一八六四)

歌謡流支巻分十四行呼聞講義

❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-jū-shi-gyō-ge-fu-ju-shū. ❷一巻 ❸存 ❼天

保一一二頃 ❻(谷大″宗大•二二五二六)

歌謡流支巻分抄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-shō. 藤原孝範撰支巻分抄 ❷一巻 ❸存 ❹今西成″大谷大学教授 ❻建保六(A. D. 1218) ❼明治二頃(谷大″宗大•二二五三)大正七年刊(谷大″宗大•三二五三)(正大″一四一五•七四)

歌謡流支巻分抄出 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-shō-shutsu. ❷二巻 ❸存″ 大日本歌書会事業五七 藤原孝範六帖抄之内 ❹了一(一弘安四 A. D. 1261—1263—)歳 ❻貞享(谷大″宗大•二一八六)

歌謡流支巻分抄要鈔 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-shō-ryō-shō. 支巻分抄要鈔 ❷五巻 ❸存″ 藤原孝範四帖秘歌抄要鈔之内 ❹宗碩(貞享元—延享三A. D. 1661—1746)歳 ❼享保四刊 ❻(谷大″宗大•三四五)(正大″一一二六•三六—三七″所載)

歌謡流支巻分事行講義科文

❶(日) Kwan-gyō-shō-gen-gi-bun-jō-gō-shaku-kwa-mon. ❷一巻 ❸存 ❻貞享(谷大″宗大•一五三八)

歌謡流支巻分題聞記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-zui-mon-ki. ❷四巻 ❸存 ❹芳賀(寛延一三—文政二一 A. D. 1763—1828)歳 ❼享保七頃 ❻(谷大″宗大•一一〇四)

歌謡流支巻分聞記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-chō-ki. ❷六巻 ❸存 ❻貞享(谷大″宗大•一一六二)

歌謡流支巻分聞記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bum-mon-ki. ❷一巻 ❸存 ❹荻生徂徠(文政一一—明治二三A. D. 1859)歳 ❻貞享(谷大″宗大•一一九三一)

歌謡流支巻分丁亥記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-tei-gai-ki. ❷五巻 ❸存 ❹藤谷俊雄(一明治二一一A. D. 1889)歳 ❺明治二〇頃 ❻(谷大″宗大•一六一九)

歌謡流支巻分鶴甲和雅 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-tek-kō-wa-ge. ❷一巻 ❸存 ❹荷屋(宝暦一四—寛政元 延享元—寛政元A. D. 1715—1789)歳 ❻貞享(谷大″宗大•二一七二)

歌謡流支巻分深草鈔 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-fuka-kusa-shō. ❷四巻 ❸存″ 藤原孝範四帖秘歌深草鈔之内 ❹四条宮(文安元—弘安七 A. D. 1213—1284)歳 ❻貞享(谷大″宗大•一一九六八)

歌謡流支巻分丙申鈔 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-hei-shin-ro-ku. ❷三巻 ❸存 ❹藤堂了學(文政二—明治三三A. D. 1819—1900)歳 ❻貞享(谷大″宗大•一六二〇)

歌謡流支巻分冥報鈔 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bun-mei-sō-roku. ❷十巻 ❸存 ❹盲僧(一弘化二一A.D.1845)歳 ❻貞享(谷大″宗大•二一〇四六)

歌謡流支巻分聞記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-gen-gi-bum-mon-ki. ❷五巻(四巻欠) ❸存 ❹本居宣長(享保一六—寛政一四A. D. 1693—1764)記 ❼寛政二一頃 ❻(谷大″宗大•二一九三二)

歌謡流支巻分聞記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-gen-gi-bum-mon-ki. ❷一巻 ❸存 ❹宣長記 ❻享保一七(A. D. 1732) ❻貞享(谷大″宗大•二〇六七)

歌謡流支巻分抄 ❶(日) Kwan-gyō-sho-kō-ei-shō. ❷四巻 ❸存″ 大日本歌書会事業六〇″ 西山宗因撰 ❹宗碩(弘安一〇—延和二A. D. 1287—1347)歳 ❻貞享元—四(A. D. 1342—1345)

❹本山寺の西山宗因は、その師宗碩の説を、宗砌、七条宗匠に伝し、貞享元年より四年を経て、七月二日より四十四日に大僧都寺の夏安居に会して四帖秘歌の説に関して一巻を講了せられたものを、筆録したものである。文中に母言、文化元年、佳宗法之講義の説を、宗砌、文々句句を問答し、之を筆録したが、本山寺の法要には、講義会、参聞会、講義会等に来会して聞書を取ったものである。(石原鶴雄)

歌謡流講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-kō-gi. ❷一巻 ❸存″ 雄略天皇御歌一〇

❹本書は、歌謡の講義を、雄略天皇御歌、清寧天皇御歌を以て説明したものである。註釈の精密を、雄略天皇の三重采女記、清寧天皇の播磨国風土記、雄略天皇の古事記、清寧天皇の日本書紀、雄略天皇の万葉集、清寧天皇の万葉集、雄略天皇の古今集、清寧天皇の古今集、雄略天皇の新古今集、清寧天皇の新古今集、雄略天皇の新勅撰集、清寧天皇の新勅撰集、雄略天皇の新千載集、清寧天皇の新千載集、雄略天皇の新拾遺集、清寧天皇の新拾遺集、雄略天皇の新後撰集、清寧天皇の新後撰集、雄略天皇の新続古今集、清寧天皇の新続古今集、雄略天皇の新後拾遺集、清寧天皇の新後拾遺集、雄略天皇の新続後撰集、清寧天皇の新続後撰集、雄略天皇の新続後拾遺集、清寧天皇の新続後拾遺集、雄略天皇の新千載集、清寧天皇の新千載集、雄略天皇の新拾遺集、清寧天皇の新拾遺集、雄略天皇の新後撰集、清寧天皇の新後撰

觀音流教傳奏案記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-ki-mi-ki. ❷四卷 ❸存 ❹寶永(宝永)四—文政(文政)一(A. D. 1746—1828)撰 ❺文政六(A. D. 1823) ❻大正七寫 ❼(谷大"宗大•二八八七)

觀音流教傳奏記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-ki. 教傳奏記 ❷四卷 ❸存 ❹宝暦(明和)六—嘉永四(A. D. 1759—1851)撰 ❺明治二十年(谷大"宗大•一四四)(龍大"一二二六•七四)

觀音流教傳奏記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大"宗大•四一七四)

觀音流教傳奏口傳 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-ku-hitsu. ❷二卷 ❸存 ❹文政四(文化)十四—明治二十二(A. D. 1817—1890)撰 ❺寫本(谷大"宗大•二八)

觀音流教傳奏顯彰記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-ken-shō-ki. ❷三卷 ❸存 ❹谷重定著(宝暦)—寫(宝永)—寫(一四(A. D. 1693—1764)撰 ❺寫本(谷大"宗大•三六一八"宗大•四二七五"宗大•四三〇六)

觀音流教傳奏庚申錄 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-shin-roku. ❷一卷 ❸存 ❹諸尾真臣(文政)〇—明治三十八(A. D. 1827—1905)撰 ❺寫(宝永)寫 ❻(谷大"宗大•一七五四)

觀音流教傳奏案外抄 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-ei-shō. ❷一卷 ❸存" 大日本佛教全書(谷大〇)觀音流教傳奏抄之內" 西山全書(谷大)

觀音流教傳錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-roku. ❷二卷 ❸存 ❹宝暦(宝永)—文政(文政)一〇—(明治)(A. D. 1287—1347)撰 ❺寫本(宝永)寫(A. D. 1342—1345)

觀音流教傳錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹明治江東了(一明治)(A. D. 1895)撰 ❺明治三年寫 ❻(谷大"宗大•三七一六)

觀音流教傳奏決疑錄記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-kyū-kec-chak-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫(一明治四四 A. D. 1911)撰 ❺明治(A. D. 1895) ❻寫本(谷大"宗大•一六四四)

觀音流教傳錄附 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-ge. ❷二卷 ❸存 ❹仲住(一明治十(A. D. 1874)撰 ❺寫本(谷大"宗大•六七五)

觀音流教傳錄刊 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-han. 教傳奏錄刊 ❷三卷 ❸存 ❹佛教協會(文化)一—明治二〇(A. D. 1814—1887)撰 ❺明治三三年刊 ❻(谷大"宗大•五二一)(龍大"一二二六•八〇)

觀音流教傳錄刊 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-han. 教傳奏錄刊 ❷一卷 ❸存 ❹渡辺寂秀 ❺明治三九刊 ❻(谷大"宗大•一〇〇九)(龍大"一二二六•七九)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-roku. ❷二卷 ❸存 ❹法華經 ❺宝治宗寫 ❻(谷大"宗大•四一二八)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-roku. ❷二卷 ❸存 ❹古松瑞麟(文政)七—明治四三(A. D. 1824—1910)撰 ❺明治二十八(A. D. 1895) ❻明治二十九刊 ❼(谷大"宗大•一〇一)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-roku. 教傳奏錄錄 ❷二卷 ❸存 ❹荒木良雄(文政)十—明治二十七(A. D. 1827—1904)撰 ❺明治三十三(A. D. 1900) ❻明治三十三刊 ❼(谷大"宗大•五六二)(龍大"一二二六•八〇)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹龍山泰瑞(天保)—大正一〇 A. D. 1837—1921)撰 ❺明治(谷大"宗大•二一九四)

觀音流教傳錄三心流七夏記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-san-jin-sho-shichi-ge-ki. ❷四卷 ❸存 ❹寫本(谷大"宗大•六八〇)

觀音流教傳錄仰記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-san-gō-ki. ❷二卷 ❸存" 教傳奏錄一 三觀觀四帖流教傳仰記之內 ❹宝暦(一天明)(A. D. 1782)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一六三七)

觀音流教傳錄私記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-shi-ki. 觀音流教傳錄私記" 觀音流教傳錄參 ❷六卷 ❸存" 觀音流教傳錄四帖流私記之內 ❹行觀(仁治)(一正中)(A. D. 1241—1325)撰 ❺寫(宝永)寫 ❻宝永(谷大"宗大•六九一)(龍大"一二四一五•七六)(谷大"宗大•一四一五•七七)

觀音流教傳錄私考 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-shi-kō. 觀音流教傳錄私考 ❷一卷 ❸存 ❹石橋觀音(文政)七—明治四三(A. D. 1824—1910)撰 ❺明治二十九刊 ❻(谷大"宗大•一〇一)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-roku. 教傳奏錄錄 ❷二卷 ❸存 ❹荒木良雄(文政)十—明治二十七(A. D. 1827—1904)撰 ❺明治三十三(A. D. 1900) ❻明治三十三刊 ❼(谷大"宗大•五六二)(龍大"一二二六•八〇)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹龍山泰瑞(天保)—大正一〇 A. D. 1837—1921)撰 ❺明治(谷大"宗大•二一九四)

觀音流教傳錄三心流七夏記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-san-jin-sho-shichi-ge-ki. ❷四卷 ❸存 ❹寫本(谷大"宗大•六八〇)

觀音流教傳錄仰記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-san-gō-ki. ❷二卷 ❸存" 教傳奏錄一 三觀觀四帖流教傳仰記之內 ❹宝暦(一天明)(A. D. 1782)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一六三七)

觀音流教傳錄私記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-shi-ki. 觀音流教傳錄私記" 觀音流教傳錄參 ❷六卷 ❸存" 觀音流教傳錄四帖流私記之內 ❹行觀(仁治)(一正中)(A. D. 1241—1325)撰 ❺寫(宝永)寫 ❻宝永(谷大"宗大•六九一)(龍大"一二四一五•七六)(谷大"宗大•一四一五•七七)

觀音流教傳錄私考 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-shi-kō. 觀音流教傳錄私考 ❷一卷 ❸存 ❹石橋觀音(文政)七—明治四三(A. D. 1824—1910)撰 ❺明治二十九刊 ❻(谷大"宗大•一〇一)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-roku. 教傳奏錄錄 ❷二卷 ❸存 ❹荒木良雄(文政)十—明治二十七(A. D. 1827—1904)撰 ❺明治三十三(A. D. 1900) ❻明治三十三刊 ❼(谷大"宗大•五六二)(龍大"一二二六•八〇)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹龍山泰瑞(天保)—大正一〇 A. D. 1837—1921)撰 ❺明治(谷大"宗大•二一九四)

觀音流教傳奏卯記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-shim-bō-ki. ❷二卷 ❸存 ❹寫本(宝暦)—文政十一—明治四三 A. D. 1824—1910)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一六三九)

觀音流教傳奏辛酉記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-shin-yū-ki. ❷三卷 ❸存 ❹寫本(寫本)—文政一 三A. D. 1748—1816)撰 ❺寫本(谷大"宗大•二八九)

觀音流教傳奏書記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-chō-ki. ❷三卷 ❸存 ❹宝暦(文化)四—明治四 A. D. 1807—1871)撰 ❺寫本(谷大"宗大•二六六四)

觀音流教傳奏分卦 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-bun-kwa. ❷存 ❹大谷(宝永)二—嘉永三 A. D. 1773—1850)記 ❺大正七寫 ❻(谷大"宗大•二九〇一)

觀音流教傳奏丙戌記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-hei-jutsu-ki. ❷七卷 ❸存 ❹宝暦(文化)十四—明治二十七 A. D. 1817—1894)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一六三八)

觀音流教傳奏理論抄 ❶(日) Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-ri-gen-shō. ❷一卷 ❸存 ❹幸雄撰 ❺寫本四寫 ❻(谷大"宗大•三九八二)

觀音流教傳奏論 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-ryō-sen. ❷二卷 ❸

存 ❹四東宗記(寫本)—文政四 A. D. 1749—1821)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一八三五)

觀音流教傳錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-san-zen-gi-roku-yō. ❷二卷 ❸存 ❹四東(一天明)(A. D. 1782)撰 ❺明治四一寫 ❻(谷大"宗大•一一〇八)

觀音流教傳奏巳記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-ki-shi-ki. 教傳奏巳記 ❷三卷 ❸存 ❹四東(文政)—明治三三(A. D. 1819—1900)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一六三五)(龍大"一二二六•六一)

觀音流教傳記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-ki. ❷二卷 ❸存 ❹宝暦(明和)六—嘉永四 A. D. 1769—1851)撰 ❺明治二十年刊 ❻(谷大"宗大•一三二)

觀音流教傳記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-ki. ❷二卷 ❸存 ❹新藤真貫(文政五—明治二九 A. D. 1822—1896)撰 ❺明治二十二(A. D. 1888) ❻寫本(谷大"宗大•一六三二)

觀音流教傳記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-ki. ❷一卷 ❸存 ❹小谷宗泰山(一嘉永四)(A. D. 1865—1867—)撰 ❺明治二十七(A. D. 1894) ❻寫本(谷大"宗大•一六三四)

觀音流教傳奏總案抄 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-gu-yō-shō. 觀音流教傳教傳奏抄 ❷三卷 ❸存 ❹陸奥(寛仁)—文永八 A. D. 1202—1271)撰 ❺寫本四寫 ❻(谷大"宗大•二六二二)(龍大"一二二六•一四四)

觀音流教傳奏案外抄 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-ei-shō. ❷一卷 ❸存" 大日本佛教全書(谷大〇" 觀音流教傳奏抄之內" 西山全書(谷大)

觀音流教傳錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-roku. ❷二卷 ❸存 ❹宝暦(宝永)—文政(文政)一〇—(明治)(A. D. 1287—1347)撰 ❺寫本(宝永)寫(A. D. 1342—1345)

觀音流教傳錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-gi. ❷五卷 ❸存 ❹宝暦(宝永)—文政(文政)(A. D. 1777—1861)撰 ❺宝永(A. D. 1858) ❻寫本(谷大"宗大•一六三二)

觀音流教傳錄說 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-setsu. ❷三卷 ❸存 ❹寶永(宝永)三—文政一一 A. D. 1746—1828)撰 ❺文政五(A. D. 1822) ❻明治四一寫 ❼(谷大"宗大•一一一〇)

觀音流教傳錄刊 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-han. 教傳奏錄刊 ❷一卷 ❸存 ❹佛教協會(文化)一—明治二〇(A. D. 1814—1887)撰 ❺明治六寫(谷大"宗大•一一三二)大正四刊(谷大"宗大•一一七七)(龍大"一二二六•六三"龍藏)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹利玄寫(一明治四一 A. D. 1908)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一六三三)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-roku. 教傳奏錄錄 ❷二卷 ❸存 ❹渡辺寂秀(天保)三—大正四 A. D. 1832—1915)撰 ❺明治三六刊 ❻(谷大"宗大•一〇〇八人)

觀音流教傳奏案外抄 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-ei-shō. ❷一卷 ❸存" 大日本佛教全書(谷大〇" 觀音流教傳奏抄之內" 西山全書(谷大)

觀音流教傳錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-roku. ❷二卷 ❸存 ❹宝暦(宝永)—文政(文政)一〇—(明治)(A. D. 1287—1347)撰 ❺寫本(宝永)寫(A. D. 1342—1345)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-gi. ❷五卷 ❸存 ❹宝暦(宝永)—文政(文政)(A. D. 1777—1861)撰 ❺宝永(A. D. 1858) ❻寫本(谷大"宗大•一六三二)

觀音流教傳錄說 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-setsu. ❷三卷 ❸存 ❹寶永(宝永)三—文政一一 A. D. 1746—1828)撰 ❺文政五(A. D. 1822) ❻明治四一寫 ❼(谷大"宗大•一一一〇)

觀音流教傳錄刊 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-han. 教傳奏錄刊 ❷一卷 ❸存 ❹佛教協會(文化)一—明治二〇(A. D. 1814—1887)撰 ❺明治六寫(谷大"宗大•一一三二)大正四刊(谷大"宗大•一一七七)(龍大"一二二六•六三"龍藏)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹利玄寫(一明治四一 A. D. 1908)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一六三三)

觀音流教傳錄錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-kō-roku. 教傳奏錄錄 ❷一卷 ❸存 ❹龍山泰瑞(天保)—大正一〇 A. D. 1837—1921)撰 ❺大正七刊 ❻(谷大"宗大•一一九一)

觀音流教傳奏書記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-shin-yū-ki. ❷四卷 ❸存 ❹寫本(寫本)—文政一三 A. D. 1748—1816)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一一九一)

觀音流教傳奏論 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-ron. 教傳奏論 ❷一卷 ❸存 ❹石橋觀音(文政)七—明治四三(A. D. 1824—1910)撰 ❺寫本 ❻大正一一刊 ❼(谷大"宗大•三〇〇九)

觀音流教傳奏卯記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-shim-bō-ki. ❷二卷 ❸存 ❹荒木良雄(文政)十—明治四三 A. D. 1824—1910)撰 ❺寫本(谷大"宗大•一六三九)

觀音流教傳奏辛酉記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-shin-yū-ki. ❷四卷 ❸存 ❹寫本(寫本)—文政一四 A. D. 1748—1816)撰 ❺寫本(谷大"宗大•二八九)

觀音流教傳奏書記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-chō-ki. ❷三卷 ❸存 ❹宝暦(文化)四—明治四 A. D. 1807—1871)撰 ❺寫本(谷大"宗大•二六六四)

觀音流教傳奏分卦 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-bun-kwa. ❷存 ❹大谷(宝永)二—嘉永三 A. D. 1773—1850)記 ❺大正七寫 ❻(谷大"宗大•二九〇一)

觀音流教傳奏丙戌記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-hei-jutsu-ki. ❷八卷 ❸存 ❹寫本(谷大"宗大•一六三八)

觀音流教傳奏門記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-mon-ki. ❷三卷 ❸存 ❹寫本(宝永)四—嘉永四 A. D. 1775—1851)撰 ❺宝永二寫 ❻(谷大"宗大•二八六)

觀音流教傳奏無定記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-mu-sha. 教傳奏無定記" 觀音流教傳奏無定記 ❷一卷 ❸存 ❹寫本(寫本)三—文政八 A. D. 1753—1825)撰 ❺文政八" 寫本(寫本)寫 ❻寫本(谷大"宗大•一四〇)(龍大"一二二六•六一"龍藏)

觀音流教傳奏門記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-mon-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(宝永)四—嘉永四 A. D. 1775—1851)撰 ❺宝永二寫 ❻(谷大"宗大•二八六)

觀音流教傳奏無定記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-mu-sha. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(寫本)三—文政八 A. D. 1753—1825)撰 ❺文政八" 寫本(寫本)寫 ❻寫本(谷大"宗大•一四〇)(龍大"一二二六•六一"龍藏)

觀音流教傳奏總案抄 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jo-bun-gi-gu-yō-shō. 觀音流教傳教傳奏抄 ❷三卷 ❸存 ❹陸奥(寛仁)—文永八 A. D. 1202—1271)撰 ❺寫本四寫 ❻(谷大"宗大•二六二二)(龍大"一二二六•一四四)

wan-gyō-sho-jō- zen-gi-gu- yō-shō. ❹巻 ❺存 ❻建暦(鎌倉)二|一—文永八 A. D. 1202—1271)写 ❼宮内庁(谷大"宗大•一|九三六)

歌経標式善導義記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-ken-shō-ki. ❷三巻 ❸存 ❹善導著述(天保六—寛政一|四 A. D. 1693—1764)写 ❺宮内庁(谷大"宗大•三六一|九"宗大•四二七四"宗大•四三〇四)

歌経標式善導義疑不分 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-kō-ei-shō. ❷一巻 ❸存"大日本仏教全書宗大〇歌経標式善導義疑之内" 西山全書宗八 ❹宗叡(弘安一〇—弘和三 A. D. 1287—1347)写 ❺西本文一四(A. D. 1342—1345)

歌経標式善導義問答 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-kō-gi. ❷二巻 ❸存 ❹善導(寛永三—文政一|| A. D. 1746—1828)写 ❺宮内庁(谷大"宗大•八二|)

歌経標式善導義問答 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-kō-gi. ❷四巻 ❸存 ❹慶長十五(文政二|—明治三三A.D. 1819—1900)写 ❺宮内庁(谷大"宗大•一|〇四三)

歌経標式善導義問刊 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-kō-han. 歌経標式善導義問刊 ❷一巻 ❸存 ❹明治四年(文化一|—明治三|〇A. D. 1814—1887)写 ❺大正四刊 ❻(谷大"宗大•一|七|九)(慶大"仏教)

歌経標式善導問答 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-kō-roku. 歌経標式善導問答 ❷二巻 ❸存 ❹慶長十五(文政二|—明治三|A. D. 1819—1900)写 ❺宮内庁(谷大"宗大•一|〇四三)

歌経標式善導問答 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-gu- yō-shō. ❷三巻 ❸存 ❹慶長(鎌倉)二|—文永八 A. D. 1202—1271)写 ❺宮内庁(谷大"宗大•一|九三六)

歌経標式善導義記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-ken-shō-ki. ❷三巻 ❸存 ❹善導著述(天保六—寛政一|四 A. D. 1693—1764)写 ❺宮内庁(谷大"宗大•三六一|九"宗大•四二七四"宗大•四三〇四)

歌経標式善導義疑不分 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-kō-ei-shō. ❷一巻 ❸存"大日本仏教全書宗大〇歌経標式善導義疑之内" 西山全書宗八 ❹宗叡(弘安一〇—弘和三 A. D. 1287—1347)写 ❺西本文一四(A. D. 1342—1345)

歌経標式善導問答 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-kō-gi. ❷二巻 ❸存 ❹慶長(寛永三—文政一| A. D. 1746—1828)写 ❺宮内庁(谷大"宗大•八二|)

歌経標式善導問答 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-kō-gi. ❷四巻 ❸存 ❹慶長十五(文政二|—明治三三A.D. 1819—1900)写 ❺宮内庁(谷大"宗大•一|〇四三)

歌経標式善導問答 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-kō-roku. 歌経標式善導問答 ❷二巻 ❸存 ❹慶長十五(文政二|—明治三|A. D. 1819—1900)写 ❺宮内庁(谷大"宗大•一|〇四三)

歌経標式善導問答仲記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-san-gō-ki. ❷三巻 ❸存"歌経標式善導問答|三巻" 歌経標式善導問答仲記之内 ❹宗叡(一天明三|A. D. 1783)写 ❺明治四一写 ❻(谷大"宗大•一|一|三)

歌経標式善導問答私記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-shi-ki. 歌経標式善導問答私記" 歌経標式善導問答私記之内 ❷五巻 ❸存" 歌経標式善導問答私記之内 ❹行願(鎌倉)—正中二|A. D. 1241—1325)写 ❺明治(谷大"宗大"宗大•六九〇)(正大"一|一五三•一五八)

歌経標式善導問答 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-shi-yō. ❷一巻 ❸存 ❹正徳(一明治元A. D. 1868)写 ❺明治一八写 ❻(谷大"宗大•三四〇一|)

歌経標式善導問答 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-shin-yū-roku. ❷五巻 ❸存 ❹享保(寛政元—文化一|三A. D. 1748—1816)写 ❺寛政元(A. D. 1801) ❻宮内庁(谷大"宗大•一|八七)

歌経標式善導問答記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-zui-chō-ki. ❷三巻 ❸存 ❹寛延(宝永四—寛永四A. D. 1775—1851)記 ❺法花一|写 ❻(谷大"宗大•一|一八)

歌経標式善導問答記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-chō-ki. ❷六巻 ❸存 ❹宝暦(谷大"文化一|四—明治一|一|A. D. 1817—1900)写 ❺明治三|一(A. D. 1899) ❻明治三|一刊 ❼(谷大"宗大•一|一|三)(慶大"一|一|一|六•六七)

歌経標式善導問答 ❶(日) Kwan-gyō-sho-jō-zen-gi-shi-ki. 歌経標式善導問答 ❷十六巻 ❸存 ❹貞享(一貞享二|A. D. 1685)写 ❺天和二|刊 ❻(正大"一|一五三•一|七|•一|七|)(谷大"宗大•一|一|一〇三"宗大•一|三一)(慶大"一|四一五•一|〇一•一|〇|"体裁)

歌経標新注 ❶(日)Kwan-gyō-sho-shin-chū. ❷八巻 ❸存 ❹(谷大"ふ•五•中•四)

歌経標抄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-ta-hitsu-shō. 歌経標抄 ❷歌経標式善導抄" 歌経標式善導抄" 大日本仏教全書宗大〇歌経標式善導抄" 西山全書宗四一五 ❸宗叡(弘長元—寛治元 A. D. 1177—1247)写

❹本抄は古来巻頭の図に巻末の田人を左に、現今の本図は左巻分三|"仏分巻五"定門巻三|"故実巻三|の十四巻"合巻十巻と成り、古来歌経標式和歌抄が人体しに歌経式の図の書式を日本仏式に新しとしたものに対して"歌門巻"を日本仏式に新しとしたもの。図巻あるもの"は"の巻巻巻

觀音經秘密分別講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-gi. 觀音經秘密分別講義 ❷二卷 ❸存 ❹新宮涼庭(安永九—文久二 A. D. 1780—1862)著 ❺寫本三冊 ❻(谷大"慶大•六三四)(文大"A二•二九〇)(京大"谷•一•一三六)(慶大"二四一三六•一二二二)

觀音經秘密分別講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-jutsu. ❷七卷 ❸存 ❹圓立(享保三—寶政四A. D. 1718—1792)著 ❺寫本七冊 ❻(谷大"慶大•二〇七七)

觀音經秘密分別講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-jutsu. 觀音經秘密分別講義 ❷五卷 ❸存 ❹宇治大僧(文化元—明治一七 A. D. 1804—1884)著 ❺寫本(谷大"慶大•七八一)(文大"A二一•二九二一—二九三"D二•三六"D〇•一四四四)(慶大"二四一三六•一二二三—一二四)

觀音經秘密分別講義 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-yō. ❷二卷 ❸存 ❹上野文榮著 ❺大正三(A. D. 1914)❻大正三刊 ❼觀音經秘密分別講義

觀音經秘密分別講錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-roku. 觀音經秘密分別講錄 ❷二卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四A. D. 1652—1739)著 ❺寫本二冊 ❻(谷大"慶大•二二六四)(天大"二三五三•二四二五)(文大"A二•二九八〇)(京大"谷•一•一三六)(慶大"二四一三六•一二二二)

觀音經秘密分別講錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-roku. ❷十卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四 A. D. 1652—1739)著 ❺寫本(谷大"慶大•一二三九四)

觀音經秘密分別講錄拾遺 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-roku-shū-i. 觀音經秘密分別講錄拾遺 ❷一卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四 A. D. 1652—1739)著 ❺寫本一冊 ❻(谷大"慶大•一七一)(慶大"二四一三六•一二七)(京大"谷•三•右•二三六)

觀音經秘密分別講錄索引表水 ❶(日) Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-roku-hi-in-ketsu. ❷三卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四 A. D. 1652—1739)著 ❺寫本一六冊 ❻(谷大"慶大•一六一)

觀音經秘密分別講雜考 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-zat-tō. ❷四卷 ❸存 ❹谷宗牧(享保一六—一七一 A. D. 1702—1769)著 ❺寫本(谷大"慶大•三七六一)

觀音經秘密分別私記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-shi-ki. ❷三卷 ❸存 ❹文盛(一)著 ❺(谷大"慶大•一八一三)

觀音經秘密分別指事記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-shi-shō-ki. ❷二卷 ❸存 ❹寶蓮(元禄)著 ❺(谷大"慶大•四一七)

觀音經秘密分別教授講記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-shi-kō-ki. ❷四卷 ❸存 ❹雲英(宝永二—寶永四 A. D. 1645—1707)著 ❺寫本(宝永二—一六一五六)

觀音經秘密分別講錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-roku. ❷十卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四)

觀音經秘密分別講錄拾遺 ❶(日) Kwan- gyō- sho- myō- shū- shō- kō -roku-shū-i. 觀音經秘密分別講錄拾遺 ❷一卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四 A. D. 1652—1739)著 ❺寫本一冊 ❻(谷大"慶大•一七一)(慶大"二四一三六•一二七)(京大"谷•三•右•二三六)

觀音經秘密分別講錄索引表水 ❶(日) Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-kō-roku-hi-in-ketsu. ❷三卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四 A. D. 1652—1739)著 ❺寫本一六冊 ❻(谷大"慶大•一六一)

觀音經秘密分別講雜考 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-zat-tō. ❷四卷 ❸存 ❹谷宗牧(享保一六—一七一 A. D. 1702—1769)著 ❺寫本(谷大"慶大•三七六一)

觀音經秘密分別私記 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-shi-ki. ❷三卷 ❸存 ❹文盛(一)著 ❺(谷大"慶大•一八一三)

觀音經秘密分別指事記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-shi-shō-ki. ❷二卷 ❸存 ❹寶蓮(元禄)著 ❺(谷大"慶大•四一七)

觀音經秘密分別教授講記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-shi-kō-ki. ❷四卷 ❸存 ❹雲英(宝永二—寶永四 A. D. 1645—1707)著 ❺寫本(宝永二—一六一五六)

觀音經秘密分別講錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-shaku-yō. ❷五卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四)A. D. 1667—1737)著 ❺寫本(谷大"慶大•一二一六三)

觀音經秘密分別講錄目 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-jō-moku. ❷一卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四)著 ❺寫本一冊 ❻(宝大"一一五三•一二三)

觀音經秘密分別講錄 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-sen. ❷一卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四)著 ❺寫本(谷大"慶大•一二一三一)(慶大"二四一三六•一三一)

觀音經秘密分別講錄考 ❶(日)Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-bi-mō. ❷一卷 ❸存 ❹宋惠雲(享保元—元文四)著 ❺寫本(谷大"慶大•一一〇九)

觀音經秘密分別聞講記 ❶(日) Kwan-gyō-sho-myō-shū-shō-mon-kō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹宋惠雲 ❺寫本(谷大"慶大•三七六〇)

觀音經略分 ❶(日)Kwan-gyō-sho-ryaku-shō. 觀音經四帖疏略分 ❷八卷 ❸存 ❹法然(宝治元—弘安一)著 ❺寫本(宝大"一一五三•九二)

觀音經大有分 ❶(日)Kwan-gyō-sho-rok-kaku-shō. 觀音經第六卷四帖疏大有分 ❷八卷 ❸存 ❹大日本學校全書編纂 ❺文永一二(A. D. 1265)❻了音著 ❼文永一二刊 ❽(宝大"一一五三•一二四)

❶觀音經の注釋書を本疏に分ち略疏の書名を用ひ、簡潔に西方淨土の思想を説く。❷略疏は法然の著作中最も重視せられ、西山派の教義の基礎となる。❸略疏は日本の一部分を代表するものであるとも、支那の思想の影響を受けたものであるとも、種々の見方があるが、略疏の思想は、支那の思想に比べて、日本の思想に近いものであることは、何人も認めるところである。❹略疏は、支那の思想の影響を受けたものであるとしても、支那の思想を、日本の思想に、適当に、取捨したものであるとも、支那の思想を、日本の思想に、適当に、取捨したものであるとも、支那の思想を、日本の思想に、適当に、取捨したものであるとも

壽經四帖疏私記之内 ❹行觀覺禪(仁治二—正中二 A. D. 1241—1325)述 ❾刊本(正大、一一五八・一五八)(谷大、宗大・六九〇)

觀經證定訣 ❶(日)Kwan-gyō-shō-jō-ketsu. 觀經四帖疏證定訣 ❷十卷 ❸存 ❹象藏(—天明頃 A. D. 1781—1788—)述 ❺天明四刊 ❾(正大、一一五三・一九〇)(谷大、宗大・六一九)

觀經證定疏題綱七門分別 ❶(日)Kwan-gyō-shō-jō-no-sho-dai-kō-shichi-mon-fun-betsu. ❷一卷 ❸存、遊學題綱雜林之内 ❺享和元刊 ❾(龍大、二〇三・六二)

觀經證定疏抜萃 ❶(日)Kwan-gyō-jō-no-sho-ba-sui. 觀無量壽經證定疏抜萃 ❷一卷 ❸存 ❹明秀(龍永一〇—長享元 A. D. 1403—1487)撰 ❺文政六刊 ❾(谷大、宗大・四八三)(龍大、研眞)

觀經定善義 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi (支)Kuan-ching-ting-shan-i ❷一卷 ❸存、觀無量壽佛經疏(大正三七No. 1750)之内、淨土宗全書第二、七聖聖教卷中 ❹唐善導(大業九—永隆二 A. D. 613—681)說龍朔二、年六九寂)述

觀經定善義楷定記 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi-kai-jō-ki. ❷八卷 ❸存、大日本佛教全書第五九觀經四帖疏楷定記之内、西山全書第七 ❹道教顯意(仁治元—嘉元二 A. D. 1240—1304)說嘉元三、年六七寂)述

觀經定善義記 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi-ki. 觀經疏定善義記、定善義記 ❷三卷 ❸存 ❹僧顯(明和六—嘉永四 A. D. 1769—1851)述 ❾明治二七刊(谷大、宗大・一三二)明治二八刊(帝國、一二九・一三六)寫本(龍大、研眞)

觀經定善義講義 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi-kō-gi. ❷四卷 ❸存、眞宗大系第九—一〇 ❹靈昭(安永四—嘉永四 A. D. 1775—1851)述

❺師が天保二(A. D. 1831)に序分義を講じ、天保四(A. D. 1833)に散善義を講ぜしより推せば本書も或はその前後の講述か。殊に本書の初に何等の序說なく、卷頭直ちに「既に上に於て一經の序分を解釋し終りて序分義と分けも、只今は第二に正宗分を釋する中定善散善の二あり」とあるよりみれば、天保二年序分義講記に引續いて講ぜしものであらう。入文解釋の態度は序分義講記に似てゐる。(柏原祐泰)

觀經定善義抄 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi-shō. 觀經疏定善義、他筆鈔、定善義他筆鈔 ❷三卷 ❸存、大日本佛教全書第五七觀經疏他筆鈔之内 ❹證空(治承元—寶治元 A. D. 1177—1247)述 ❾寫本(正大、一一五三・一四九)

觀經定善義抄出 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi-shō-shutsu. ❷三卷 ❸存、大日本佛教全書第五八觀經疏六角鈔之内、西山全書第六 ❹了音述 ❺文永二(A. D. 1265)?

觀經定善義新記 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi-shin-ki. ❷四卷 ❸存、觀經疏新記之内 ❹貞準(—貞享二 A. D. 1685)述 ❺天和二刊 ❾(正大、一一五三・一七〇)

觀經定善義傳通記 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi-den-tō-ki. ❷三卷 ❸存 觀經疏傳通記(大正五七No. 1769)之内、淨土宗全書第二 ❹良忠(正治元—弘安一〇 A. D. 1199—1287)述

觀經定善義傳通記見聞 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi-den-tō-ki-ken-mon. 良榮見聞 ❷三卷 ❸存、觀經傳通記見聞之内 ❹良榮(康永元—正長元 A. D. 1342—1428)說應永三〇寫)述 ❺享保一六刊 ❾(正大、一一五三・一三八)

觀經定善義略鈔 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-gi-ryaku-shō. ❷二卷 ❸存、淨土宗全書第二 觀經四帖疏略鈔之内 ❹良忠(正治元—弘安一〇 A. D. 1199—1287)述

觀經定善要義釋觀門義鈔 ❶(日)Kwan-gyō-jō-zen-yō-gi-shaku-kwan-mon-gi-shō. ❷六卷 ❸存、大日本佛教全書第五五觀門要義鈔之内、西山全書第三 ❹證空(治承元—寶治元 A. D. 1177—1247)述 ❺寫文一一刊 ❾(正大、一一五三・一五二)

觀經圖頌 ❶(日)Kwan-gyō-zu-ju. 觀無量壽經圖頌 ❷一卷或二卷 ❸存、卍續一・三三・一 ❹明代傳燈撰 ❺光緒三〇刊(龍大)延寶七刊(谷大、宗大・二一九三)(京大、藏・一一カ・五)

觀經叢林解 ❶(日)Kwan-gyō-jō-rin-ge. 觀無量壽經叢林解 ❷三卷 ❸存 ❹憲空(正保元—享保六 A. D. 1644—1724)述 ❾(參考) 淨土眞宗教典志第二 ❾寫本(龍大、一二二六・一四)

觀經中臺曼荼羅不審 ❶(日)Kwan-gyō-chū-dai-man-da-ra-fu-shin. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(正大、一一五八・四六)

觀經傳通記 ❶(日)Kwan-gyō-den-tō-ki. 觀經四帖疏傳通記、傳通記 ❷十五卷 ❸存、大正五七・四九七No. 2209、淨土宗全書第二 ❹良忠(正治元—弘安一〇 A. D. 1199—1287)述 ❾慶安四刊(正大、一一五三・二四〇)(立大、A三〇五三)(龍大、二四一五・一〇七、一一一)(谷大、宗大・五九六)文政五刊(龍大、二四一五・一〇六、研眞)(谷大、宗大・九四五、宗大・二二一七)

觀經傳通記見聞 ❶(日)Kwan-gyō-den-tō-ki-ken-mon. 觀經四帖疏傳通記見聞、良榮見聞 ❷二十五卷 ❸存 ❹良榮(康永元—正長元 A. D. 1342—1428 一說應永三〇寫)述 ❾寫本(正大、一一五三・一四二)刊本(谷大、宗大・七五五)

觀經二十八段與法華二十八品相合口傳事 ❶(日)Kwan-gyō-ni-jū-hachi-dan-to-hok-ke-ni-jū-hachi-hon-sō-gō-kū-den-no-koto. ❷一卷 ❸存、淨土西山流秘要藏第一 ❾寫本(谷大、宗大・二八〇三)

觀經祕決集 ❶(日)Kwan-gyō-hi-ketsu-shū. 觀經四帖疏祕決集、觀無量壽經祕決集 ❷二十卷 ❸存、大日本佛教全書第五四、西山全書第一 ❹證空(治承元—寶治元 A. D. 1177—1247)述 ❾西山教義の眞意は本書にある。そは餘程

名所行發●(名庫書)者藏所現●月年の刊寫●(書考參書釋註)書本●說解容內●代年作著●著者●缺存●數卷●(名書)名題●號略字數

格調の異なった說明の仕方で全く獨得己證の教旨なるが故、一部始終定散、念佛、來迎の名目を以て本相の見地より、御疏を通じて觀經の眞面目を開顯せられてある。總て事相の活眼を開いて淨土教を說明したるは恐らくは證空一師とす。さて定散とは、一切衆生機有二種一者定二者散にして人なり衆生なり。來迎とは深重大悲の佛を指す。念佛とは散なり即ち名體不二の名號にして我等衆生の心中に如來の大悲を領納して生佛一體なる南無阿彌陀佛の境界に體達したる證得の參考山の三尊松吹く風も聖衆來迎」であつて、天地萬有森羅萬像其のまま慈悲の實現彌陀の設化であり、それが能て御疏の意と合し、觀經の說と符合することを縱橫無盡に說示されてある。第二十卷云此疏者證者の御筆也未證の意を以て此文を見れば只狗の星を見るが如く此故に題目體正しく鳳る其口傳無くして淺りに無案を加ふれば及ばざるの識力を以て邪義を爲す故に釋の本意を失す。玉瑩かざるに劣れり、是を以て愚かなる人に疊しめん爲に義の意を顯して私に之を抄し字句を鳳して此れを書くは其の意を顯はさんこと勿れ是れ皆面受口決の要義を以て唯義意を知らせんが爲に之を抄し之を註す、出離生死の秘事也秘義也、今疊る人の無からん時の爲に書けしめんとして先師源空上人の本意を加註する所也云云以て知るべし。

❾刊本(正大、一一五三・一八三)寫本(龍大、二四一五・一三五)(谷大、宗大・六三二)

觀經扶新論 ❶(日)Kwan-gyō-fu-shin-ron. (支)Kuan-ching-fu-hsin-lun. 觀無量壽經扶新論 ❷一卷 ❸存、卍續一・三三・一、淨土宗全書第五 ❹宋戒度(—淨照頃 A. D. 1174—1189—)述 ❺貞享元刊 ❾(正大、一一五三・四九—五〇)(龍大、二四一五・一三六)(京大、藏・一一カ・二)(晉、う・三・左・二九)

觀經曼陀羅聚集聞書 ❶(日)Kwan-gyō-man-da-ra-ju-sho-kiki-gaki. ❷十卷 ❸存 ❹宏善(文明七—弘治三 A. D. 1475—1557)記 ❾寫本(龍大、二六八七・一七)

觀經曼荼羅不審抄 ❶(日)Kwan-gyō-man-da-ra-fu-shin-shō. ❷三卷 ❸存 ❺寶永八寫 ❾(谷大、宗大・一九一〇)

觀經曼陀羅略解 ❶(日)Kwan-gyō-man-da-ra-ryaku-ge. ❷二卷 ❸存 ❺正德二刊 ❾(龍大、二六八七・三)(谷大、宗大・二六三五)

觀經微笑記 ❶(日)Kwan-gyō-mi-shō-ki. 觀無量壽經微笑記 ❷六卷 ❸存 佛教大系第四六—四八、眞宗全書第四 ❹慧雲(享保一五—天明二 A. D. 1730—1782)述 ❾寫本(谷大、宗大・三九七四)(龍大、一二一三・四一)

觀經名目證據十七箇條 ❶(日)Kwan-gyō-myō-moku-shō-ko-jō-shichi-kō-jō. ❷一卷 ❸存、大正八三・四〇五No. 2627 ❹淨音(建仁三—文永八 A. D. 1203—1244)說建仁二 A. D. 1202生)述

❾西谷一流の名目を觀經の現文に配當し釋名したるもの。一佛諸佛體、二佛體佛話、三能觀所觀一同、四思惟無不足、五識知定散、六觀呪一同、七依散善自開落居拿提能請、八定散材木二觀棟木、九示觀二段告命、十序機正宗法、十一思惟正受二請未來流通請文也、十二三心經、十三臨終平生一同、十四識知見、十五前六觀序、十六十三觀序、十七上上品十一門口決。此十七條の中一は第七觀を根據とし、二は流通分の文を、三は實地觀を、四實樓觀を、五日觀の三識知を、六示觀緣を、七顯行緣を、八顯示二緣を、九序正一同を、十序正機法、十一定善結釋、十二上上品、十三下下品を、十四得益段を、十五第七觀を、十六欣淨緣を、十七九品の告命を證據として說明してゐる。

❾寫本(谷大、宗大・一三二九)(龍大、二六八五・二)

(石黑觀道)

觀經妙宗疏鈔條目 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-sho-jō-mokuro. 觀無量壽經疏妙宗鈔條目 ❷一卷 ❸存 ❺享保一三刊 ❾(谷大、餘大・一一九一)(龍大、二四一五・一三〇)(晉、う・三・右・二五)

觀經妙宗鈔 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō. (支)Kuan-ching-miao-tsung-ch'ao. 觀無量壽佛經疏妙宗鈔、妙宗鈔 ❷六卷 ❸存、大正三七・一九五No. 1751、續呂一、卍三三・三、明南宗(1543)韓、淨土宗全書第五、N. 1559 ❹知禮(建隆元—天聖六 A. D. 960—1028)述 ❺宋天禧五(A. D. 1021)萬治二刊(谷大、餘大・一二〇二)明曆三刊(立大、A一一・二七九—二八三)(晉、う・三・右・二五)

(石黑觀道)

觀經妙宗鈔會本 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-e-hon. 觀無量壽經疏妙宗鈔會本 ❷五卷 ❸存 ❹宋知禮(建隆元—天聖六 A. D. 960—1028)述、實觀分會、小林修禪書入 ❾(立大、D一・二五)

觀經妙宗鈔聞書 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-kiki-gaki. ❷五卷 ❸存 ❾寫本(正大、一一五三・三二)

觀經妙宗鈔講義 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-kō-gi. 觀無量壽經妙宗鈔講義 ❷三卷 ❸存 ❹謹慎空(安永九—文久二 A. D. 1780—1862)述 ❺嘉永三刊 ❾(立大、A一一・二九〇—二九一)(龍大、二四一五・一二二二)(谷大、餘大・六五四)(高大、答・一・一五)

觀經妙宗鈔講錄 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-kō-roku. ❷四卷 ❸存 ❾(晉、う・三・右・二五)

觀經妙宗鈔補忘記抜萃 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-fu-mō-ki-ba-sui. ❷二卷 ❸存 ❹小林修禪錄 ❾(立大、D一・三四)

觀經要義釋觀門義鈔 ❶(日)Kwan-gyō-yō-gi-shaku-kwan-mon-gi-shō. ❷四十七卷 ❸存、大日本佛教全書第五—五六、西山全書第三—四 ❹證空(治承元—寶治元 A. D. 1177—1247)述 ❺文化二刊(正大、一一五三・一五一)(龍大、二四一五・一三八—一三九、研眞)寫文一一刊(龍大、研眞)

右・九、う・二・中・三三)永應三刊(立大、A一一・二七六)同治一二刊(龍大、研眞)

觀經妙宗鈔會本 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-e-hon. 觀無量壽經疏妙宗鈔會本 ❷五卷 ❸存 ❹宋知禮(建隆元—天聖六 A. D. 960—1028)述、實觀分會、小林修禪書入 ❾(立大、D一・二五)

觀經妙宗鈔聞書 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-kiki-gaki. ❷五卷 ❸存 ❾寫本(正大、一一五三・三二)

觀經妙宗鈔講義 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-kō-gi. 觀無量壽經妙宗鈔講義 ❷三卷 ❸存 ❹謹慎空(安永九—文久二 A. D. 1780—1862)述 ❺嘉永三刊 ❾(立大、A一一・二九〇—二九一)(龍大、二四一五・一二二二)(谷大、餘大・六五四)(高大、答・一・一五)

觀經妙宗鈔講錄 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-kō-roku. ❷四卷 ❸存 ❾(晉、う・三・右・二五)

觀經妙宗鈔補忘記抜萃 ❶(日)Kwan-gyō-myō-shō-shō-fu-mō-ki-ba-sui. ❷二卷 ❸存 ❹小林修禪錄 ❾(立大、D一・三四)

觀經要義釋觀門義鈔 ❶(日)Kwan-gyō-yō-gi-shaku-kwan-mon-gi-shō. ❷四十七卷 ❸存、大日本佛教全書第五—五六、西山全書第三—四 ❹證空(治承元—寶治元 A. D. 1177—1247)述 ❺文化二刊(正大、一一五三・一五一)(龍大、二四一五・一三八—一三九、研眞)寫

名所行發●(名庫書)者藏所現●月年の刊寫●(書考參書釋註)書本●說解容內●代年作著●著者●缺存●數卷●(名書)名題●號略字數

観経了音鈔 ❶(日)Kwan-gyō-ryō-on-shō. 観経疏六角鈔、観無量壽経四帖疏六角鈔、六角鈔、了音鈔、八幡鈔 ❷八巻 ❸存、大日本佛教全書第五七—五八、西山全書第五—六 ❹了音述 ❺文永二(A. D. 1265)? ❻享保五刊 ❼京大・一・二三カ・二二)(龍大、二四一五・一一七)(谷大、宗大・六三三)

観経六字釈講義 ❶(日)Kwan-gyō-rokuji-shaku-kō-gi. ❷一巻 ❸存 ❹雲旺(安永四—嘉永四 A. D. 1775—1851)述 ❼写本(龍大)

観経論義抄 ❶(日)Kwan-gyō-ron-gi-shō. 観経四帖疏論義鈔、観経疏論義鈔 ❷八巻 ❸存 ❹圓慈(一康永頃 A. D. 1342—1344?)述 ❼(智)、う・二・右・一)

観経和讃遠化鈔 ❶(日)Kwan-gyō-wasan-enka-shō. ❷一巻 ❸存 ❹書藤聞精(天保一一—明治三七 A. D. 1840—1904)述 ❺明治三八刊 ❼(龍大、研究)

観経和讃講錄 ❶(日)Kwan-gyō-wasan-kō-roku. ❷一巻 ❸存 ❼写本(龍大、一二三六・八四)

観経和讃聴記 ❶(日)Kwan-gyō-wasan-chō-ki. ❷一巻 ❸存 ❹仁厳(宝政一一—天保六 A. D. 1759—1835)述 ❼写本(龍大、一二三六・八三)

観共往生集 ❶(日)Kwan-gu-ō-jōshū. ❷一巻 ❸缺 ❹禁西(榮西歟)集 ❼(参考) 浄土依憑経論章疏目錄

観空智慧 ❶(日)Kwan-kū-chie. ❷一巻 ❸存 ❺徳川時代写 ❼(寶善提院)

観月光菩薩記經 ❶(日)Kwan-gwa-kō-bo-satsu-ki-kyō. (支)Kuan-yue-shu-kuang-pu-sa-chi-ching. 観月光菩薩記 ❷一巻 ❸疑偽経 ❼(参考) 出三蔵記第五、法經錄第二、仁壽錄第四、内典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

観月和尚行實 ❶(日)Kwan-getsu-o-shō-gyō-jitsu. ❷一巻 ❸存 ❼(参考) 禪籍目錄

観虚空蔵菩薩經 ❶(日)Kwan-kō-kō-zō-satsu-kyō. (支)Kuan-hsü-kung-tsang-pu-sa-ching. 虚空蔵観経、虚空蔵菩薩経、虚空蔵菩薩観経、観虚空蔵経 ❷一巻 ❸存、大正一三・六七七Z. 452、館玄八、卍六・一〇、北55民、南55民、元51民、明北55帋、清55帋、羅55帋、天54民、指53帋、法52帋、至135發、明南52帋、N. 70 ❹曇摩蜜多譯 ❺劉宋元嘉元—一八(A. D. 424—441)

❻本經は犯戒の衆生が虚空蔵菩薩によりて罪滅することを明すものである。佛伐陀羅山に住したまひし時、長老優波離問ふ。世尊毘尼の中に犯戒の者を決定驅擯することを大石を載るが如しと說きたまひ、今虚空蔵菩薩の名を說いて一切諸惡律儀、不善業を治すと說きたまふ。如何が了解すべき。佛の言く、懈怠して三十五佛名を稱し、別して虚空蔵菩薩を稱し、懺悔滅罪して菩薩を勸請すれば菩薩身を現じ、頂上の如意珠と天冠を見む。菩薩の哀愍によりて罪滅するであらう。又問則の言く、人をして知らしめず、かくて懺悔して三十五佛を禮して虚空蔵を稱し、三七日懺悔をなさば、苦行の力によりて罪業永く除かるであらう。

以上は經の要旨である。現行經典には次に虚空蔵經の咒並びに諸經中の佛名及び咒を列ねてある。隨つて本經は虚空蔵菩薩經の附屬經典である。 (泉芳璟)

観考錄 ❶(日)Kwan-kō-roku. ❷一巻 ❸存 ❹安本圓海著 ❺昭和三刊

観察諸法行經 ❶(日)Kwan-zatsu-shō-kō-gyō-kyō. (支)Kuan-chu-fa-hsing-ching. ❷四巻 ❸存、大正一五・七二七Z. 643、館宇八、卍二一・九、北455欠、清455帋、羅455帋、天415欠、指356帋、法399帋、至415帋、明南454帋、N. 424 ❹闍那崛多譯 ❺隋開皇一五(A. D. 595)

❻無邊善方便行品、先世勤相應品、授記品の三品よりなり、喜王菩薩が「多人利益の爲に、多人安樂の爲に、憐愍世間の爲に……未來の菩薩が佛種性を斷ぜず、法種性を斷ぜず、僧種性を斷ぜざらんが爲」には如何なる三摩地に因るべきかを問ふに對し、佛は決定觀察諸法行なる三摩地を委細に說示し、更に喜王の本生を說き、寶月王、法上童子、乃至後宮婦女に到る眞俗の得道を說き、更に進んで之れが授記を說くに終つてゐる。十六字門所出の陀羅尼の功德を說き、無量壽佛の名を出だし、特に小乘を貶まざれ等の語を出だしてゐる事が注意される。大乘初期のものと思はれる。

❷(参考) 三寶紀第一二、内典錄第五、譯經圖紀第四、開元錄第七、貞元錄第一〇 (二宮守人)

観示名材 ❶Kwan-ji-kyō-tai. ❷一巻 ❸存 ❼写本(龍大)

観自在授記經 ❶(日)Kwan-ji-tai-jū-ki-kyō. (支)Kuan-tzu-tsai-shou-chi-ching. 大方廣曼珠室利經、観自在菩薩授記品第三十一 ❷一巻 ❸存、大正二〇・四五〇Z. 1101、三十帖策子第六 ❹不空譯 ❺天寶五—大曆九(A. D. 745—774)

❻三十帖策子第六には、その巻末に於て観自在多羅菩薩儀軌經と記してある。何本經の經題の異名は昭和法寶總目錄第一巻中の勘同目錄に列記してある(三四八頁)。本經は観自在菩薩授記品(第一)、観自在多羅菩薩經曼荼羅品(第二)、観自在多羅菩薩經畫像品(第三)、観自在多羅菩薩第二畫像品(第四)の四品からなる。第一品に於て観自在菩薩は、來世後摩數劫に於て、平等光明菩提如來と號すると云ふ記莂を授けられて居る。又観自在菩薩が、普光明多羅(Tara)眼球)三昧に入り、三昧力に依つて、その面輪の右の目瞳の中から、大光明を放ち、光明と俱に妙女の形を現ずる意を明してあるが、この妙女形が卽ち多羅菩薩である。十地の中の難勝地・不動地・善慧地・法雲地の菩薩は多羅尊の陀羅尼を受持することに依て、菩薩の位を滿足すると言はれてある。又多羅尊は普く人天を利し玉ふ所から、世間母の稱あり、観音・勢至等の諸大菩薩

は、多羅尊の奏育し玉ふ所であると云ふ理由で、敎若母と呼ばれて居る。第二の曼荼羅品に於ては、多羅菩薩の曼荼羅が明されてあるが、中臺には釋尊が畫かれ、釋尊の師子座の下に蓮華池あり、その池中に鉢寶蓮華あり、その蓮華の中に、多羅尊が畫かれる。その尊形は左手に青蓮華を持し、右手は仰むけて胯上に安じ、坐禪の姿勢を爲し、瓔珞にて嚴飾し、紗穀側霞の衣を着し、怡然として住し玉ふ。第三の畫像品に於て、多羅菩薩の畫像が明されてあるが、矢張、曼荼羅中の一尊として示されてある。この曼荼羅の中臺には釋尊を安じ、多羅菩薩は、無價の雜寶をもつて、莊嚴となし、身相は紺黃色にして盛年の形をなし、慈念微笑をなして、行者の覲を觀じ、觀自在菩薩に向つて、曲躬して住し、左手に青蓮華を持し、右手は吉祥果を執る勢を作す形に畫くことが注意されてある。第四の第二畫像品に於て別種の曼荼羅が明されてある。その中臺尊は無量壽佛にして、菩提樹に倚り、その右邊に四臂の觀自在菩薩を畫き、この菩薩の右邊に多羅菩薩が畫かれることになる。多羅尊は紺寶をもつて莊嚴し、身は紺黃色で合掌して青蓮華を捧じ、半跏にして坐し、恭敬曲躬の相を爲してある。尙第四品に於て多羅菩薩の陀羅尼と、一切羅刹陀羅尼とが記されてある。 (神林隆淨)

観自在心眞言觀行儀軌 ❶(日)Kwan-ji-tai-shin-shin-gon-kwan-gyō-gi-ki. (支)Kuan-tzu-tsai-hsin-chen-yen-kuan-hsing-i-kuei. 聖觀自在菩薩心眞言瑜伽觀行儀軌、瑜伽觀行儀軌、觀音瑜伽觀行儀軌 ❷一巻 ❸存、大正二〇・四Z. 1031、館閑一〇、卍二七・一、北1439又、南1435曲、元1439曲、明北1438嘉、清1438嘉、羅1353毫、天1435曲、至839息、明南1178竟、N. 1415 ❹唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ❺文永八寫 ❼(寶善院)

観自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門 ❶(日)Kwan-ji-tai-dai-hi-jō-ju-yu-ga-ren-ge-bu-nen-ju-hō-mon. (支)Kuan-tzu-tsai-ta-pei-ch'eng-chiu-yu-ch'ieh-lien-hua-pu-nien-sung-fa-men. 蓮華部念誦法門 ❷一巻 ❸存、大正二〇・一No. 1039、館閑一〇、卍續一・二・五 ❹唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯

❺この念誦法門は金剛頂部に屬して居り、この部の序品とも見做す可き程に、一般的の說明が施され、苟も密敎を知らうとする者の必讀の條項が明されて居る。その內容は、第一密敎修習者は、法式次第及び儀軌を知らなければ、眞言行は凡て効力なく、徒に勞苦を爲し、時日を空費するのみで、何等の益なきことを論し、第二に諸習學者は、先づ灌頂大三昧耶壇に入つて、菩提心戒行を受け、大悲心を起す可きこと、並に授法の弟子の資性等に就て詳說し、第三に念誦する者は、先づその修行道場の地を淨む可きことを論し、第四に息災・增益・降伏・敬愛等の修法の種類に依り、壇場の位置と行者の座處とを示し、第五に諸の供具を洗淨すること、第六に結印の時には、先づ佛部、蓮華部・金剛部の三部の三昧耶の印言を爲す可きことを說き、第七に晨朝時に修す可き印言を擧げ、第八に諸の觸穢處に入る場合の印言、第九に厠に往く時の印言、第十手を洗ひ口を漱ぐ時の印言、第十一に身中の一切魔障を除く印言、第十二に入浴の法、第十三に着衣の法、第十四に入堂の作法、第十五に澡浴の法、第十六に道場觀、第十七に身心を淸淨にする作法、第十八に五相成身觀、第十九に自らを灌頂する法、第二十に本尊觀として無量壽如來、觀世音、大勢至の三尊を出す。第二十一に頭より足に至るまでに、一一に種字を案布して觀ずること、第二十二に實車輅にて本尊を來迎す、第二十三に設座法、第二十四に遍伽(Argha)水の供養をなすことが明されてある。この次に結界として地界・四方結・結虛空界があるが、これ等は名稱だけ擧げて、作法の記述は略されてある。第二十五に供養作法を說き、その次に行ふ可き懺悔・發願・廻向等が略されてある。第二十六に念誦作法を出し、この次に正念誦がある筈であるが、以下は念誦・懺悔・發願・讚歎・歌詠・供養・解界・發遣等と次第だけを擧げて、詳細の記述が略されてある。

❻鎌倉時代写 ❼(寶善院) (神林隆淨)

観自在如意輪菩薩瑜伽法要 ❶(日)Kwan-ji-tai-nyo-i-rin-bo-satsu-yu-ga-hō-yō. (支)Kuan-tzu-tsai-ju-i-lun-pu-sa-yu-chieh-fa-yao. 觀自在如意法要 ❷一巻 ❸存、大正二〇・二一一No. 1087、館成一三、卍二二・八、北455羊、南452羊、元476羊、明北534念、清534念、羅479諦、天474羊、指439恙、法456恙、至655欠、明南474行、N. 538 ❹金剛智(咸亨二—開元二九 A. D. 671—741)譯 ❺唐開元一八(A. D. 730)

❻この瑜伽法要は不空譯、觀自在菩薩如意輪瑜伽と殆んど全同で、唯文字の使用に於て多少の相違があるだけである。

❼(参考) 開元錄第九、貞元錄第一四 (神林隆淨)

観自在祕密經 ❶(日)Kwan-ji-tai-hi-mitsu-kyō. 千光眼觀自在祕密法經、千光眼經、千光眼祕密法 ❷一巻 ❸存、大正二〇・一一九No. 1063、館餘四、卍續一・三・三 ❹唐代蘇磨羅譯 ❺平安朝時代寫 ❼(寶善提院)

観自在菩薩阿摩駄法 ❶(日)Kwan-ji-tai-bo-satsu-a-ma-tai-hō. (支)Kuan-tzu-tsai-p'u-sa-a-mo-t'o-fa. ❷一巻 ❸存、大正二〇・五〇二No. 1115、祕密儀軌集第一〇 ❹唐代(—成通七 A. D. 866)譯 ❺昔時于闐(Khotan)國に淸信士あり、觀自在菩薩の眞言を持念して、同尊の眞身を見ることを願眼した。或る夜空中に聲あり、「汝隣國に往いて王に謁せよ」と、淸信士は隣國に至り、王に謁見し遂に後宮に入るに悉く佛刹土の如くにして、その王は卽ち觀自在菩薩であつたと示ふことであるが、淸信士は、乃ち其の王菩薩から未來の法要を示された。この法要が卽ち阿摩駄(Amata)眞言である。阿摩駄を、この法經の題下に無長又は寬廣と譯してある。

この三摩地に安住した菩薩は、諸仏の秘密の教法を聞いて、身・口・意の三業の金剛を堅固にし、菩提心を離れず、諸仏の加護を受け、諸仏の大慈悲を具し、衆生を利益する。

❷菩薩＝＝菩薩　❸（宋本）（宋本・三十六本）

（魯迅文庫）

觀自在菩薩一切合壇法

❶（梵）Kwan-ji-zai-bo-satsu-ichi-in-nen-ju-hō. 觀自在菩薩一切合壇法　❷一卷　❸作、大正＝〇・＝＝＝No. 1041、編卷＝、卍續＝・＝・＝　❹宋本（魯迅文庫）　❺宋本（宋本・三十六本）（A. D. 746—774）

觀自在菩薩化金剛童子童女新伏藏金剛壇陀羅尼

❶（梵）Kwan-ji-zai-bo-satsu-ke-shin-jō-gu-ri-ei-dō-nyo-shō-buku-doku-gai-da-ra-ni-kyō. (漢) Kuan-tzŭ-tsai-p'u-sa-hua-shên-nêng-wu-li-i-t'ung-nü-hsiao-fu-tu-hai-t'o-lo-ni-ching. (梵) Jaṅgulī-nāma-vidyā. (藏) Dug-sel shes-bya-baḥi rig-sṅags. 觀自在菩薩化金剛童子童女新伏藏金剛壇陀羅尼　❷一卷　❸作、大正＝＝・＝＝No. 1264、編卷＝、卍＝・八、昭1370宋、宋1374金、元1363元、明永956永、宣956永、清1322金、天1354金、明宣1004宋、清力文字印金剛薩埵之所　❹宋本（魯迅文庫）（A. D. 705—774）藏　❺梵本（宋本・三十六本）（A. D. 746—774）藏

❶梵語、Nīlakaṇṭhadhāraṇī の直訳は「青頸の陀羅尼」の意味である。「青頸」とは、シヴァ神の別名である。「陀羅尼」とは、文字を連ねて、一種の呪文を唱えることによって、神秘的な力を発揮するものである。この陀羅尼は、文字を連ねて、一種の呪文を唱えることによって、神秘的な力を発揮するものである。この陀羅尼は、文字を連ねて、一種の呪文を唱えることによって、神秘的な力を発揮するものである。この陀羅尼は、文字を連ねて、一種の呪文を唱えることによって、神秘的な力を発揮するものである。

觀自在菩薩一切合壇法

❶（梵）Kwan-ji-zai-bo-sas-shin-shin-gon-ichi-in-nen-ju-hō. (漢) Kuan-tzŭ-tsai-p'u-sa-hsin-chên-yen-i-yin-nien-sung-fa.　❷一卷　❸作、大正＝〇・＝＝＝No. 1041、編卷＝、卍續＝・＝・＝　❹宋本（魯迅文庫）（A. D. 705—774）藏

❶之は四に分かれたもので、合壇法の儀軌である。第一は、金剛界の曼荼羅を作り、第二は、金剛界の三昧耶形を作り、第三は、金剛界の諸尊を作り、第四は、金剛界の諸尊の真言を唱えることである。

（大村秀雄）

觀自在菩薩心呪經

❶（梵）Kwan-ji-zai-bo-satsu-zui-shin-jū-kyō. (漢) Kuan-tzŭ-tsai-p'u-sa-sui-hsin-ch'ou-ching. 觀自在菩薩隨心呪經　❷一卷　❸作、大正＝〇・四No. 1103、編卷＝、卍＝〇・＝〇、宋319宋、宣330宋、元327宋、明永321宋、宣318宋、清527金、明宣303金、Nj. 325　❹新刊本　❺宋本（A. D. 653）

❶この題は＝＝の意である。「＝」は、梵語本文の中では、明示されていない。梵語本文の中では、「心」の語は、「心臓」の意味に用いられている。「心臓」は、「中心」の意味にも用いられる。この題は、「中心の真言を唱えることによって、衆生の願いを満たす」という意味になる。「呪」は、「真言」の意味である。「真言」とは、「文字を連ねて、一種の呪文を唱えることによって、神秘的な力を発揮するもの」である。

觀自在菩薩如意心陀羅尼經

❶（梵）Kwan-ji-zai-bo-satsu-setsu-fu-gen-da-ra-ni-kyō. (漢) Kuan-tzŭ-tsai-p'u-sa-shuo-p'u-hsien-t'o-lo-ni-ching. (梵) Samantabhadra-nāma-dhāraṇī. (藏) Kun-tu bzaṅ-po shes-bya-baḥi gzuṅs. 觀自在菩薩普賢陀羅尼經　❷一卷　❸作、大正＝〇・＝No. 1037、編卷＝、〇、卍＝・＝〇、宋1377宋、宣1381元、元1371元、明永975永、宣975永、清1334元、天1362元、宋1113宋、宋671宋、明宣1020

宋、明宣980宋、Nj. 980　❹宋本（魯迅文庫）（A. D. 705—774）藏

❶梵語、Padmacintāmaṇi-dhāraṇī-sūtra. の直訳は「蓮華宝珠陀羅尼経」である。「蓮華宝珠」とは、「蓮華」と「宝珠」との合成語である。「蓮華」とは、「蓮華の花」である。「宝珠」とは、「宝石の珠」である。「蓮華宝珠」とは、「蓮華の花の中に宝珠のある」ものである。「蓮華宝珠」は、「蓮華の花」と「宝珠」との合成語であるが、その中の「蓮華の花」は、「蓮華の分別智」を表わし、「宝珠」は、「如来の大慈悲」を表わす。「蓮華宝珠」は、「蓮華の分別智」と「如来の大慈悲」との合成語であるが、「蓮華の分別智」は、「如来の大慈悲」を表わす。「蓮華宝珠」は、「如来の大慈悲」を表わす。「如来の大慈悲」は、「蓮華の分別智」を表わす。「蓮華宝珠」は、「蓮華の分別智」と「如来の大慈悲」との合成語であるが、「蓮華の分別智」は、「如来の大慈悲」を表わす。「蓮華宝珠」は、「如来の大慈悲」を表わす。「如来の大慈悲」は、「蓮華の分別智」を表わす。「蓮華宝珠」は、「蓮華の分別智」と「如来の大慈悲」との合成語である。

意輪心陀羅尼の意である。大谷甘珠爾目錄 No. 370参照。

❼(注釋) 略疏二卷刊、卍續No. 372)…

儀法 (参考) 開元錄第九、貞元錄第一三、淨土依憑經論章疏目錄 (椙部文雄)

觀自在菩薩如意輪呪課法

❶(日)Kwan-ji-tai-bo-satsu-nyo-i-rin-ju-kwa-hō.(支)Kuan-tzu-tsai-p'u-sa-ju-i-lun-chou-kuo-fa. 如意輪呪課法 ❷一卷 ❸存、大正四六・九八三No. 1952、縮成一四、卍三〇・八、明北一五一四補、Nj. 1521 ❹宋仁岳—治平元A. D. 1064)撰

❺本書は仁岳が講習の暇、經藏を開いて如意輪咒凡四本を得、其の文を詳にするに、何れも同本異譯なりと述べる。所謂四本とは一、實叉難陀譯觀自在菩薩秘密藏如意輪陀羅尼神咒經。二、實思惟譯觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經。三、義淨譯觀自在菩薩如意心陀羅尼呪經。四、菩提流志譯如意輪陀羅尼經にして、就中義淨譯は所說の法式極めて簡略にして觀想儀軌等完備せざるを以て、他の三譯を以て、義淨譯の缺を補助したものが本書である。而して總じて一、法式 二、觀想 三、禮讚 四、持誦 五、懺願 六、證驗 七、釋疑等の七種に就て說いてゐる。 ❻清康熙六刊 (岡田契昌)

觀自在菩薩如意輪念誦儀軌

❶(日)Kwan-ji-tai-bo-satsu-nyo-i-rin-nen-ju-gi-ki.(支)Kuan-tzu-tsai-p'u-sa-ju-i-lun-nien-sung-i-kuei. 觀自在如意輪菩薩念誦法、如意輪菩薩念誦法、如意輪念誦儀軌 ❷一卷 ❸存、大正二〇・二〇三No. 1085、縮同一〇、卍二六・一〇、北1423又、南1427曲、元1412曲、明北1357杜、清1387杜、麗1345乾、天1407曲、法1145鄰、至252淵、明南1156竟、Nj. 1394 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯

❺この儀軌は四度加行の如意輪法次第の原本である。その內容は先づ淨三業の印言、懺悔、歸寄、勸請、發願、佛部三昧耶の印言、蓮華部三昧耶の印言、金剛部三昧耶の印言、結護身被金剛甲冑の印言、地界金剛縛の印言、方隅金剛牆の印言、道場觀、三力偈、大虛空藏菩薩供養の印言、實車輅の印言、請車輅の印言、請本尊三昧耶陣至於道場の印言、馬頭觀自在の印言、上方金剛網の印言、金剛火院密鎖の印言、獻閼伽香水の印言、讚歎偈、本尊觀、根本陀羅尼、如意輪心呪の印言、心中心呪の印言、念珠加持、正念誦、入三摩地觀、普供養の印言、散香花乃至閼伽水、讚歎、發願、火院結界、送車輅、護身の印言、三部三昧耶の印言、出道場。以上。

右の次第は密教修行作法の模範と成つて居るから、此の行法の順序は殊に注意して觀て可きである。

又此の儀軌の卷頭に依。灌頂道場經」說。修陀羅尼法門」求菩出三離生死大海」とあるから、この儀軌が同經から由來して居ることが解る。然るに此の灌頂道場經とは現存の何れの經を指すか明かでない。唐菩提流志譯の如意輪陀羅尼經の題下に此經出=大瑜祇金剛三昧耶加持秘密無障碍經」(大正二〇・一八八、No. 1080)とあるから、此の經を指すものとも思はれるが、この經は現存して居ないから解らない。又唐の不空譯の觀自在菩薩如意輪瑜伽の卷頭には、我今順=瑜伽金剛頂經」說。摩尼薩尼薩埵部如意念誦法」(大正二〇・二〇六、No. 1086)とあるから、金剛頂部の經に隨順して說かれてあることが明かである。然るに此の金剛頂經は未淺未譯の經に屬し、今日の所では不明である。 (神林隆淨)

觀自在菩薩如意輪瑜伽

❶(日)Kwan-ji-tai-bo-satsu-nyo-i-rin-yu-ga.(支)Kuan-tzu-tsai-p'u-sa-ju-i-lun-yu-chieh. 觀自在菩薩如意輪瑜伽念誦法、如意輪瑜伽念誦法、如意輪瑜伽 ❷一卷 ❸存、大正二〇・二〇六No. 1086、縮同一〇、卍二六・一〇、明北1395杜、Nj. 1402 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯

❺この念誦法は觀自在菩薩如意輪念誦儀軌と相對照して熟讀す可きもので、かの儀軌に於て說明の缺けて居る所は、本法で補ふことに成つて居る。本法中殊に注意すべきは入壇授法の弟子の攝摩羅摩と、如意輪觀音の六臂の意義と、現世成佛思想と、行後に讀誦す可き經として、楞伽、華嚴、般若等が擧げてあることである。 (神林隆淨)

觀自在菩薩母陀羅尼經

❶(日)Kwan-ji-tai-bo-satsu-mo-da-ra-ni-kyō.(支)Kuan-tzu-tsai-p'u-sa-mu-t'o-lo-ni-ching.(梵)Avalokiteśvara-mātṛ-dhāraṇī. (藏譯)(藏)Jiphag-pa ayan-ma-gi-gzugs-dhah-phyag-ḍun ehen-bya-bahi gzungs. 觀自在母經 ❷一卷 ❸存、大正二〇・五〇六No. 1117、縮成一〇、卍一五・五、北1265鱗、南1278鱗、元1272鱗、明北905深、清205深、麗1265陪、天1357鱗、法1377毅、至790興、明南936興、Nj. 910 ❹宋法賢(—成平四A. D. 1001)譯

❺佛が廣般城に在せし時、菩賢菩薩が佛の許可を得て、觀自在菩薩母陀羅尼を說くことが述べてある。その陀羅尼を敍述した後之れを受持すれば罪業消滅し、一切怖畏の時に於て常に擁護を得る等の功德を明してをる。 (久野芳隆)

觀自在明王經

❶(日)Kwan-ji-tai-myō-ō-kyō.(支)Kuan-tzu-tsai-ming-wang-ching. 金剛恐怖集會方廣軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王經 ❷一卷 ❸存、大正二〇・九No. 1033、縮同一〇、卍一六・八、南1350伊、明北1042止、麗1304伊、三十帖策子第六、Nj. 1047 ❹不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯

❺本書一卷の內容目次は序品第一、成就品第二、成就如意寶品第三、療一切病品第四、一切有情敬念品第五、義利成就品第六、成就軌儀品第七、普通成就品第八、成就心眞言品第九で、今、序品より「說菩提場行門法要」に至るまでは序分、「時觀自在」より文末に至るまでは正宗分、「觀自在菩薩說此經已」以下は流通分である。(諸儀軌嘉承錄)。本書は宋海圓仁惠運圓珍等の請來する所で、雜密經、觀音部、羅尼法、序品

に於ては、觀自在菩薩は佛の敎勅を承けて、三世最勝の一法たる自心の眞言及び頭、頂、眼、心、甲冑、鉤、挑、箭、網、羂、最上心、警覺心、心發生輪等十五種の眞言を說き、更に此心眞言の功德をば「此心眞言は能く諸の疾患を息め能く一切義利を成就す、乃至死者を更生せしむ」等と述べる。第二品では觀自在菩薩は心眞言の功德を重ねて說き、更に、畫像の法を說く、曰く、畫人は齋戒して中央に阿彌陀如來を畫き、右に觀自在菩薩、左に金剛手菩薩を畫き、と述べ、かくて阿彌陀佛を中心とする觀音曼荼羅を造り之を供養し呪唱する法を說く。第三品第四品等は如意寶を成就し、又頭痛癲病等を去り又論議訟訟等に勝を獲んとせば尊像の前に於て香華を供へて供養し或は手を以て像の頭を摩せば苦痛自ら去る等と說く。第五品に於ては尊像の前に於て眞言を誦して供養し或は又祭壇婆十萬眞言を造り拈香散花して供養するときは悉地を得ると說く。第六品第七品等も亦能く諸の呪咀法を說き第八品に於ては觀自在菩薩馬頭觀自在菩薩、白衣觀自在菩薩、名稱慧觀自在菩薩、月身觀自在菩薩等の諸種觀音の眞言を出し、更に地界金剛擬飯食諸藥物瓜果等の諸種の供養の眞言及び護摩の儀軌法則等を說く。第九品に於ては畫像の法として中央に菩提樹を畫き、其樹下に阿彌陀如來を畫き佛の左に摩得大勢至菩薩を、右に觀自在菩薩を畫き、觀自在菩薩の下に多羅菩薩を畫き、其上に四淨居天子を畫き、又、梵天を畫き、而して其等の曼荼羅の前に於て供養すれば、一切の供藏を見るといひ、又十波羅蜜の印相眞言と其の功德とを述べ、行者晨朝之れを結誦すれば一切の宿業罪障皆消滅すと說く。 (岡田契昌)

觀食法

❶(日)Kwan-jiki-hō. (支)Kuan-shih-fa. 觀心食法 ❷一卷 ❸存、卍續二・四・一 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)撰 ❼(參考) 智證大師請來目錄

觀修淨業記

❶(日)Kwan-ju-jō-ki.(支)Kuan-hsiu-ching-yeh-chi. ❷一卷 ❸缺 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)撰 ❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

觀誦經記

❶(日)Kwan-jo-kyō-ki. (支)Kuan-sung-ching-chi. 觀心誦經法記 ❷一卷 ❸存、卍續二・四・一 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七A. D. 591—597)說、荊溪(景雲二—建中三A. D. 711—782)記 ❼(參考) 傳敎大師將來台州錄

觀所緣緣論

❶(日)Kwan-sho-en-en-ron. (支) Kuan-so-yuan-yuan-lun. (梵)Ālambana-parīkṣā (藏傳) (藏)Dmigs-pa brtag-pa. ❷一卷 ❸存、大正三一・八八八No. 1624、縮來一〇、卍三一・二、北633命、南647命、元639命、明北1167投、清1167投、麗635盡、天634命、指596盡、法630盡、至1355昏、明南1379昏、Nj. 1173 ❹玄奘(仁壽二—麟德元 A. D. 602—664)譯

❺唐圓慶二(A. D. 657)

❻諸譯對照上に於ける本論の形態 本論には漢譯藏譯中、陳眞諦(Paramārtha)によつて譯せられた(A. D. 557—569)無相思應論一卷あり、西藏藏經丹珠爾、經疏部第九十五函の第四に觀所緣(偈)(dmigs-pa brtag-pahi tshig-leḥur byas-pa ālambana-parīkṣā-kārikā)と第五に觀所緣註(dmigs-pa brtag-pahi ṭīkā)とがある。その觀所緣註は觀所緣(偈)を引用しては註釋するものであり、觀所緣緣論と同じ形を有するものであり、無相思應論は偈本のみを先づ別出し、その後には偈文を引用せず註釋のみを出した。若しその偈を註釋中に引用して所謂觀所緣緣論や西藏譯觀所緣註の如き體裁とするならば、余がジュウルナル・アジアティク(一九二九年一月—三月)に玄奘譯と對照して示した如くなるのである。

本論の偈文は西藏譯及び玄奘譯本の示す如く四句一行の偈八行より成る。無相思應論の偈は四句一行にて算へるならば十一行となるが、その內容は西藏譯及び玄奘譯を越えた何ものをも示すものでないから、他の諸論本の眞諦、玄奘、西藏の三譯對照の一般類例より考へて八行偈が本論の本來の偈の形と想はれる。而して偈と註釋との配當は玄奘譯に於ては、他の諸論に於ても常にそうであるが、偈が四句一行に一處に纏めて揭出されたものと見るべく、余が無相思應論に於て西藏譯に從つて偈を註釋に配當したのがその意味から考へても本來の形であることが知られるであらう。三本中にては西藏譯がその文章最も簡潔である。無相思應論は後半に於て多少文章が註釋的になつた跡を見るが意味の上で西藏譯と殆んど一致するものである。

本論所說の概要 本論はその題號の示す如く所緣即ち識を生ぜしむる所緣緣の觀察吟味であり、菩譯が無相思應と云ふ如く相・體相(bhāva)・外境(bāhyārtha)としての與へられたる所緣を破して內識のみが外境に似て顯現すると說く。その後、世親の唯識二十論が有外境論を破して唯識を立するに相似たるものがある。かくして新因明の建設者としての陳那の著書は因明に關するものが多いのであるが本書の如きはまた唯識教學に關するものであり、唯識宗に於ては所依の經論たる六經十一論中の一論として此の論を依用する。

今本論の偈の所說に從つて本論內容の大意を解說するなれば、始め五偈は有外境論(bāhyārthavāda)の破析である。その中、第一・二偈を以て極微(paramāṇu)白極微の聚(和合saṁhata)も識を生ずる所緣緣たるべからざるを論ずる。謂く「境とは識がその相に似て生ずるものであるが識は極微の相に似ては生ずないから極微は境たり得ない。又極微の和合は實有でなく假法である、實有でないならば第二月の如きもので第二月として見ゆる覺は生じてもその覺は第二月に由つて生じたものでないから第二月の境たり得ざる如く、聚・和合も實有でないから境たり得ない」と。第三偈は有外境論者なる外人の立論であつて外人によれば「諸極微中に於ける和合相(玄奘譯によれば和集相saṁghātakāra)は諸極微中に在るから實

體として有りて識の因性たることを得、又集相(shūjikisō)であるから識はそれに似て生ずることを得、乃ち、先に練磨と和合とが燒たり得ざりし所以の缺點を補うて和合相(和集相)はこれを識の境をなすことを得る」とする。第四及び五の兩偈は更に此外人說の破析である。謂く「世間に和合相として知らるゝものに瓶瓶等があるが、その識を生ずる和合相なる唯一相の境に於て瓶疊瓶疊等の種々なる疊を生ずることは不可能である。練磨の多少は瓶等の形の大小の差とはなるが疊の種類の差異を生ぜない。若しかゝる疊の差異が形相の差異より起るとするならば、かゝる差異は假法上には考へられるが練磨と云ふ體量なき一微圓性なる實體の上にては考へられない。乃ち形相の差異は世俗に於てのみ存する。又瓶等を實(dravya)として存すると云ふ者もあるが、實ならば自らと關係あるものを除析しても青等の色の如くに自らの疊を捨てないであらうけれども、練磨を一々除析するときは瓶等の疊は破らるゝから瓶は實として存するものでない」と。

かく練磨と和合と和合相(和集相)との三宗を破して第六偈以下に自宗を說いて曰ふ「外境は實有でなく、識は青等にて習慣づけられた内の習氣の熟することによりてその青等の相を具して生じ(1)又彼内に存する青等の所取分(grahyāṃśa)有るときそれを因性として彼識は生ずる(2)と云ふ二義を具するから内識が所緣緣たり得るのである。かく所緣はその識の一分であり俱生したものであるけれども境の相が識と相隨ふから、俱時起であるけれども識の所緣緣となる。倘此の俱時起の所取分が所緣たるのみならず次第起に於ても此のことは許さる。そは、彼所取分の滅するときは阿賴耶識中に自らの功能を置き、その功能は後の刹那に於て同生する法を成就するとき自らと等しき識を生ぜしめ、そこに彼二義を具するからである。而して境に關しては同樣に相も亦、能く自らの果なる眼等の識を發する識中の功能を言ひ、かくして境の相を具する識と根なる功能との此の二は相互に有因性として起り、此の因果展轉は無始以來である。即ち滅は習氣なる功能成熟せるにより識は境の相あるものとして起り、滅は彼境の相ある識中に功能生じ、註に因と果との展轉相續不斷絕にして無始以來性である」と。

本論の註釋書及び參考書　本論については印度に於て所謂瑜伽行派の二流の各の系統に於て一寃その註釋が傳つて居る。一は護課藏經中に存する護法菩薩造觀所緣論釋一卷(義淨譯 Ar. D. 710)で他は西藏藏經丹珠爾經疏部(Ze. CXII)に存する訓伏天(Vinītadeva)造、觀所緣(論)註釋(Ālambanaparīkṣāṭīkā)である。蓋し後者の著者訓伏天論師は安慧造唯識三十釋に復註を造れると又その論師の著述内容に於ける諸種の傾向より見て安慧の系統を繼承すると見られるからである。護法の釋論は民國の佛教學者呂澂、釋印順兩氏の共編なる觀所緣釋論會譯にも指示せられ注意せらるゝ如く、第七偈の問起に關する釋論以下殘缺して居るから、本論に於て自宗を述する下の大部分を缺如する訓はと殘簡本であり、又簡樸華解で爲に有の呂澂氏等も「簡文難字以暢之」と云ふ狀態である。訓伏天の註釋は西藏譯に於て十四葉即ち普通漢譯の約一卷に相當するものであるが、其註釋は首尾良く整頓して本論研究の爲の必須の註釋書である。此の註釋書の中で著者が二回に亙りて護法論師(Ācārya Dharmapāla)の所說を引用し、而も自らはその說に關心せざることを記せる點などに於て、護法の註釋のその當時に於ける意味と又訓伏天が護法の後を汲むものでないことゝを示すところが見られる。(此の註釋並びに先に關說せる西藏譯本論の偈及び釋についてはコルディエ西藏藏經目錄第三卷(Palmyr Cordier, Catalogue de fonds tibétain, 3e partie) 四三四、四三五、四五〇の諸頁參照)

漢土に於ては觀所緣緣論會釋一卷、明明昱會釋。觀所緣緣論直解一卷、明智旭解。觀所緣緣論釋記一卷、明明昱錄記。觀所緣緣論釋直解一卷、明智旭解あり、共に大日本續藏經中に編入せられて居る。

本論に就いては前記民國の呂澂、釋印順編觀所緣釋論會譯が支那内學院の内學第四輯第三種として出版せられ、漢譯二本と西藏譯の編者の譯と護法の釋論とを本論の字句に從つて對照し、終に編者の附註と附論として漢譯本之特徴とを擧げてある。余は前にも記した如く一九二九年一月—三月のジュウルナル・アジアティク(Journal Asiatique)に於て "Examen de l'objet de la Connaissance (Ālambanaparīkṣā)" として本論の西藏譯を擧げ、次に漢譯二本を對照的に揭出し、訓伏天の註釋の解明と共に主として西藏譯に由る本論の佛譯を施した。その佛譯中に於て、別出特記せなければならない本項は且らく措き、訓伏天註釋に於て本論の諸文句を解明し詳言すると思はれるものは殆ど此を本論の間に挾註的に依用した。由つて訓伏天註釋の大意も略それに由つて知らるゝであらう。倘一九三〇年十月—十二月のジュウルナル・アジアティクに於てラ・ヴァレ・プサン氏(M. La Vallée Poussin)は "Note sur l'Ālambanaparīkṣā" と題して余の著作に批評を加へ、觀所緣論の第六偈が假眞性(Tattvasaṃgrahaṭīkā)の註釋中に引用せられ第七偈の第二句に關する長行も引用せられてある等、本論研究に關する有益なる資料を提供せられた。

❼(參考) 内典錄第五、譯經圖紀第四、開元錄第八、貞元錄第一一　❽安永八刊　❾刊本(正大、一一九二・三三)(京大、鹿・一四カ・三六四五)

(山口益)

觀所緣緣論會釋 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-e-shaku. ❷一卷 ❸存、卍續一・八三・二、相宗八要解卷上之内 ❹明明昱(—萬曆頃 A. D. 1573—1619)會釋 ❺觀所緣緣論の註釋で、本論の句を一々擧げ逐次解釋を施して居る。著者明昱は萬曆年代に出でゝ本論の如き特殊なるものを殆くも詳しく研究したのは當代には珍らしい學者である。

❾刊本(谷大、餘大・一三一七)(三好鹿雄)

觀所緣緣論記 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(龍大)

觀所緣緣論義疏 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-gi-sho. ❷一卷 ❸存 ❹快道(寶曆元—文化七 A. D. 1751—1810)述 ❺文化七(A. D. 1810) ❻寫本(正大、一一九六・四〇)

觀所緣緣論講草 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-kō-sō. ❷一卷 ❸存 ❹太了榮天(元文二—享和元 A. D. 1737—1801)撰 ❺(龍大)

觀所緣緣論講錄 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹實雲(寬政三—弘化四 A. D. 1791—1847)述 ❺寫本(谷大、餘大・二五三九)(龍大、研佛)

觀所緣緣論講錄 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹龍譯述 ❺寫本(龍大、二四三四・二)

觀所緣緣論直解 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-jiki-ge. (支)Kuan-so-yuan-yuan-lun-chih-chieh. ❷一卷 ❸存、卍續一・八三・二、相宗八要直解第一 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)述 ❺陳那の『觀所緣々論』の註釋で、本論の科段を分ちて先づ破外執・申正義の二とし、更に破外執を破二計・破諸轉計・結非外色の三に、申正義を總敍破・別奪破・結違理の三とし、條理整然として解釋してゐるのが特色である。

❻寶永二刊(谷大、餘大・二二二)基寶九刊(正大、一一九二・二三)(京大、藏・一一四カ・三)

觀所緣緣論釋 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-shaku. ❷一卷 ❸存 ❹了道述 ❺(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

觀所緣緣論釋 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-shaku. ❷一卷 ❸存 ❹基綽(享保三—寬政三 A. D. 1718—1791)述 ❺寫本(京大、日大來・一五二)

觀所緣緣論釋記 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-shaku-ki. (支)Kuan-so-yuan-yuan-lun-shih-chi. ❷一卷 ❸存、卍續一・八三・二、相宗八要解第五 ❹明明昱(—萬曆頃 A. D. 1573—1619—)述 ❺『記』とは、護法菩薩の『觀所緣論釋』の註解である。卷頭に病居士王野の序と、著者明昱が萬曆己酉の年に加へた題詞とがあり、卷尾に問答釋疑がある。題詞では著者が最初『觀所緣論釋』を見た時日は墨に面するが若くは句する能はなかつた。蓋し義は海潤の如く宏いのに語が精約なる爲だと云ふので、これを補はんとして瑜伽顯揚等の論、深密佛地等の經を探り、この『記』を書いたとあり、正宗分を破外執、明自宗の二大段に分ち、更に破外執の中に於て練磨と和合との二執に對する總別二破、二種轉計の別破に分ち、更にその下に細科を分ちて『論釋』の始終を明にして居る。最後の問答釋疑では問答によつて陳那の『觀所緣論』作製の目的が述べてある。

(三好鹿雄)

觀所緣緣論釋直解 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-shaku-jiki-ge. ❷一卷 ❸存、卍續一・八三・二、相宗八要直解卷中之内 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)述 ❺護法菩薩の『觀所緣緣論釋』を註釋せるもので、著者智旭は本論の『直解』に於て詳細なる科段を作つて釋したので、こゝでは特に分科の重複をきけて逐句說明して居る。

❻刊本(正大、一一九二・三三二、一一九二・二三)(龍大、二四三四・三)(京大、藏・一四カ・二、藏・一四カ・四)(谷大、餘大・二二二)

(三好鹿雄)

觀所緣緣論集解 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-shū-ge. (支)Kuan-so-yuan-yuan-lun-chi-chieh. ❷一卷 ❸存 ❹眞界撰 ❺萬曆二七刊 ❻(龍大、二四三四・四)

觀所緣緣論述記 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-jut-ki. (支)Kuan-so-yuan-yuan-lun-shu-chi. ❷一卷 ❸缺 ❹唐基(貞觀六—永淳元 A. D. 632—682)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下

觀所緣緣論述本記 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-jutsu-hon-gi. ❷一卷 ❸缺 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄 2433

觀所緣緣論疏 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-sho. (支)Kuan-so-yuan-yuan-lun-shu. ❷一卷 ❸缺 ❹唐神泰(—永徽六 A. D. 655—)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、注進法相宗章疏、諸宗章疏錄第一

觀所緣緣論疏 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-sho. (支)Kuan-so-yuan-yuan-lun-shu. ❷一卷 ❸缺 ❹唐圓測(大業九—萬歲通天元 A. D. 613—696)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一

觀所緣緣論疏 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-sho. (支)Kuan-so-yuan-yuan-lun-shu. ❷一卷 ❸缺 ❹唐基(貞觀六—永淳元 A. D. 632—682)述 ❼(參考) 諸宗章疏錄第一

觀所緣緣論疏 ❶(B)Kwan-shō-enn-en-ron-sho. (支)Kuan-so-yuan-yuan-lun-shu. ❷一卷 ❸缺 ❹新羅太賢(—景德王二 A. D. 753—)述 ❼(參考) 新編諸宗教藏總錄第三

觀所緣論釋 ❶(B)Kwan-shō-enn-ron-shaku. (支)Kuan-so-yuan-lun-shih-shiu. ❷一卷 ❸存、大正三一・八八九 No. 1625、龕往一〇、卍二一・二、北634奇、南648奇、元645奇、明

寺1168寺、法1168寺、唐632唐、天635寺、
聖597聖、法621聖、天1356法、明治1380年
Nj. 1174 ❶唐法華經題、觀音（只觀音）—元
天1（A. D. 635—713）唐 ❹法名題（A.
D. 710）

❹『觀所緣々論』の註釋である。外緣を說
いて、自法を明かす中の內緣だけで、
客觀に及んでいない。明の知見は、實は表天
學に完璧したものだが、實は所緣論論師
であったので、多くの說が、實は所緣論論
師であったのである。故に明治一四年
頃、山田氏が、『觀所緣々論』を文
部省に提出した時、文部省は『觀所緣論論
師』とならって『明本』には『觀所緣々
論師』とならって『明本』には『觀所緣

歌会始（㊐）Kwan-jin-gohajime-no-sho-ko-gi. 歌会始の儀 ㊐ 宮中で毎年一月に行なわれる和歌の会。天皇・皇后・皇族・内閣総理大臣・歌人・一般の人の詠歌を選び、天皇・皇后・皇族・内閣総理大臣・歌人・一般の人の順に披露する。

歌会始の儀（㊐）Kwan-jin-gohajime-no-sho-ko-gi. 歌会始の儀 ㊐ 歌会始の儀式。

歌会始の儀式（㊐）Kwan-jin-gohajime-no-sho-ko-shiki. 歌会始の儀式

尊鈔 ❷一卷 ❸存、大正八四・二七二No. 2592、縮霜一〇、佛教大系第二八、日蓮聖人御遺文第九二八—九四五、原文對照口語譯日蓮聖人全集第五 ❹日蓮(貞應元—弘安五A. D. 1222—1282)述 ❺文永一〇(A. D. 1272)

觀心二百問 ❶(日)Kwan-jin-nihyaku-mon. ❷一卷 ❸存 ❹細井八中 ❺延寶五刊 ❻(立大、A一二・四三二)(哲・ヰ・七・左・一一)

觀心念佛 ❶(日)Kwan-jin-nem-butsu. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第二四天台小部集釋、天台小部集釋第一 ❹佛、覺運(天曆七—寛弘四A. D. 953—1007)撰

❺題號下に天台大師斯修西方業儀式と細註あり。然して念佛せんと欲する時、先づ一心三觀を修し、次に阿彌陀佛の四字を觀じ、次に名號を唱へて念佛すべきことを勸め、これらの功德を記し、これらの功德によりて、「願阿彌陀佛三寶境界願」現念念念佛心中、即滅」弟子及法界衆生無始罪障」往」生極樂世界上品上生」給」と西方極樂世界の往生を念じてゐる。

❻(參考) 淨土依憑經論章疏目錄 ❼寫本(正大、一三四・二〇)

觀心本尊顯本抄 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-kem-pon-sho. ❷三卷 ❸存 ❹寫本(立大、A〇二・六八)〈帝國・特・に・一六〉

觀心本尊抄 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho. 如來滅後五五百歲始觀心本尊鈔、本尊鈔、觀心鈔 ❷一卷 ❸存、大正八四・二七二No. 2592、日蓮聖人御遺文第二八、日蓮聖人全集第二八、日蓮聖人御遺文第九二八—九四九、原文對照口語譯日蓮聖人全集第五 ❹日蓮(貞應元—弘安五A. D. 1222—1282)述 ❺文永一〇(A. D. 1272)

❻日蓮宗の最高聖典である。日蓮聖人の三大部、五大部中の一に數へられ、又開目鈔と本鈔とを人法、教觀に相配して併稱す。

如來滅後五五百歲始の九字を冠するは、佛滅後二千二百餘年此書撰述に至るまで未曾有の法なるを顯し、獨後末法萬年に廣宣流布して時機相應の大法なる所以を顯はすのである。五五百歲は二千五百年末法を指し、如とは未曾有と如顯とを顯はすの意である。觀心本尊の四字は、所弘の大法をいふ。この書の內容につきて古來多くの異說あり、要約するに三說に歸す。一に觀心を正意とするもの、二に本尊を正意とするもの、三に觀心と本尊とを併へ明すとするものである。これ等の異說によつて題號の解釋、讀方に多岐を分ち、從つて內容分科の上に諸說の異りがある。主とする處は殊りとするも何れもこの書に於て觀心と本尊との二事を明すとするに一致する。

觀心とは、天台所說の理性所具の三千を觀ずる理一念三千觀に對して、事具一念三千の觀心を明す。本觀とは即ち、妙法蓮華經の五字の信心唱題にして天台の三觀の慧を以て三諦の理を觀ずるに殊り、事相圓顯の曼荼羅に對して、信心直達の事觀を用ゆるのである。故に觀心の名を用ゆと雖も、實には信心にして、宇宙の立行を觀心の名によつて顯したに過ぎない。觀は觀知ではなく、信解である。これを日蓮聖人の宗義上の名目に於ては三大祕法中の本門の題目をいふのである。次に本尊とは、信心の對境たる十界具足の大曼荼羅をいふ。大曼荼羅は實に日蓮聖人この書を撰述して後、直に佐渡に於て圖顯し、「佛滅後二千二百餘年の間未曾有の大曼荼羅也」と讚歎せる獨自の本尊である。即ち凡心の當相に十界を具足せる相を顯し、これを以て久遠本佛の像とせらる。凡夫の自體顯照にして又本佛の十界光被の尊形である。これを三大祕法中には本門の本尊といふ。本尊と題目と之に加ふるに本門の戒壇を以て三大祕法とし、日蓮宗立行の三大樣式とする。この書は正しく本尊と題目とを說けば題號に觀心本尊抄といふのである。若戒壇は全く說かざるにはあらざれども、具說せられないのである。

本書先づ天台の理一念三千觀を說きて序分とし、次に正宗分に入りて次第に理より事に轉過して事具の一念三千觀を說き、說明的三千觀を妙法蓮華經の五字の本法に結び、遂に能觀の題目として「我等この五字を受持すれば、自然に佛の因果の功德を讓り與へ給ふ」と說き信心に結歸せらるゝは即ち能觀の題目段とある。次に所觀の本尊を說かんとして、依正三千の本體を說明し、これを敎法體としての妙法に結び、更にこれを本尊圖顯によつて說明し、十界曼荼羅の相を示し、この本尊即ち十界互具の當相、凡心所具の當體なるを明にし、遂に久遠本佛の現身なるを顯して絕待唯一の本尊なるを贊め、所觀段を結びて、正宗分を終る。次に流通分に入りて、この法は末法流布の正法、この法を弘むる日蓮は、末法の正導師なるを論じて一鈔を觀るのである。

この書の主張に於ての重要なる點は、十界互具の本體論的說明、信心成佛の宗敎的體驗の提示、主客絕待の本佛本尊の定定、法華經の末法爲正論、一切の宗敎を同類統一する本法三段の敎判論、惡逆幼稚の萬機を救ふ本因下種論、一閻浮提の正中基本大日本國の提唱等である。

❼(注釋) 本尊抄愚狀、日當の本尊抄見聞、日朝の本尊抄見聞、日耀の本尊抄講談、日辰の本尊抄見聞、日性の本尊抄註、日遠の本尊抄私記、日講の本尊抄啓蒙、日寬の本尊抄文段、日好の本尊抄拾遺、問扶老、日導の圓書綱要、日輝の本尊抄略要等百を以て數ふべし。 ❽大正三年全部寫眞版として刊行せらる。(御眞跡寫眞帖) ❾原本(下總中山法華經寺藏)刊本(立大、A〇一・三七—四一、A〇一・一一四〈哲、え・一・右・一六〉〈京大、日大未・五三九〈龍大、二六九一・一一〉)(望月歸厚)

觀心本尊抄王講 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-o-kō. ❷一卷 ❸存 ❹田中智學述、長瀧智大編 ❺(立大、D〇・一三九)

觀心本尊鈔遠記 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-on-ki. ❷十一卷 ❸存 ❹日蓮(元龜三—寛永一九A. D. 1572—1642)述 ❺明治三三寫 ❻(立大、D〇・七三)

觀心本尊鈔啓蒙 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-kei-mō. 錄內啓蒙 ❷四卷 ❸存、錄內啓蒙第一六—第一九、佛教大系第二八 ❹日講(寛永三—元祿一一A. D. 1626—1698)述 ❺元祿八(A. D. 1695)

❻日蓮の御書中錄內四十卷壹百四十六篇に註釋を施したるものを、日講の錄內啓蒙といふ。この書はその中の一部にして四卷あり。分節を科し、義を講じ、句を釋し、出典を出し、且つ敎義を論述す。註釋中の白眉と稱せらる。特に古來の諸師未刊の講錄を轉錄し是非を判ぜるが如きは、大いに參考とするに足る。日蓮聖人の御書研究に缺くべからざる註釋である。(望月歸厚)

觀心本尊鈔見聞 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-kem-mon. ❷一卷 ❸存 ❹日當(建保四—正安元A. D. 1216—1299)述 ❺(參考) 大日本佛敎全書續刊豫定書目

觀心本尊抄見聞 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-kem-mon. ❷一卷 ❸存 ❹日意(應永二八—文明五A. D. 1421—1473)述 ❺寫本(立大、A〇二・一一〇、D〇・三一六)〈原本(石川海豐藏)〉

觀心本尊鈔見聞 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-kem-mon. 觀心本尊鈔私記、補施集、本尊抄、劄鈔 ❷八卷 ❸存、日蓮宗々學全書六・一〇・一一、佛教大系第二八觀心本尊鈔 ❹日朝(應永二九—明應九A. D. 1422—1500)述 ❺文明八(A. D. 1476)

❻日朝の日蓮上人御書講義は、四十卷以上を數へらる。この書はその中の一部である。日講の錄內啓蒙と併び稱せらるべきものであつて、特に古色と中古天台敎義を取入れたる點とに特色がある。

❼原本(身延久遠寺所藏) (望月歸厚)

觀心本尊鈔見聞 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-kem-mon. ❷二卷 ❸存、日蓮宗々學全書第一〇 ❹日忠(永享一〇—文龜三A. D. 1438—1503)述 ❺明應元(A. D. 1492)

❻本門法華宗(舊稱八品派)に屬する日忠が、八品の宗義を以て本尊抄を解釋したるもの、名字信心の觀心、本因行者具德の本尊等を說く。 (望月歸厚)

觀心本尊鈔見聞 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-kem-mon. 御書鈔、耀鈔 ❷二卷 ❸存、御書鈔第八、佛教大系第二八 ❹日耀(嘉吉二—大永二A. D. 1442—1522)述 ❺大永七(A. D. 1527)

❻日蓮上人の錄內御書について日健、日諦、日能、日耀等の講義を集めて御書鈔二十五卷を寫す中の一卷である。觀心本尊鈔は日耀の見聞を載錄されてゐる。講義の特色は平易にあるが、また完全なるものとはいへない。 (望月歸厚)

觀心本尊鈔見聞 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-kem-mon. ❷二卷 ❸存 ❹日好(明曆元—享保二〇刊 ❺享保二〇刊 ❻(立大、A〇二・七)

觀心本尊鈔御書註 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-go-chū. 本尊鈔圓智註、本尊鈔圓註 ❷卷、御書註卷一〇、佛教大系第二八 ❹日性(天文二三—慶長一九A. D. 1554—1614)述

❻圓智院日性の御書註中の第十卷である。本尊鈔の中の引文等についてその典據を檢出せるものである。 (望月歸厚)

觀心本尊鈔講義 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹田邊善知述、長井純順編 ❺明和二寫 ❻(立大、B〇四・一四〇)

觀心本尊鈔講錄 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-kō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹大須賀秀道著 ❺大正一一(A. D. 1922) ❻刊本(龍大、二六九一・二二〈谷大、餘大・三八二三〉)

觀心本尊鈔私見聞 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-shi-kem-mon. 常師見聞 ❷一卷 ❸存、佛教大系第二八觀心本尊鈔、日蓮宗々學全書第一八 ❹日當(建保四—正安元A. D. 1216—1299)述 ❺弘安六(A. D. 1283)

❻日蓮上人の本尊鈔註釋中の最古のものとせらる。著者については異說あるも、一般には日當の著と信ぜらる。日蓮上人の觀心本尊抄得意抄に準じて五段の大科を分ちて本鈔を講ず。

❼延寶八刊 ❽(谷大、餘大・二九二) (望月歸厚)

觀心本尊鈔拾遺 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-shū-i. 錄內拾遺 ❷一卷 ❸存、錄內拾遺第二、佛教大系第二八 ❹日好(明曆元—享保一九A. D. 1655—1734)述 ❺享保三〇(A. D. 1718)

❻拾遺八卷中の第二卷の一部に收めらる。拾遺の名は錄內御書講義の先賢の考へ遺されたる出典、據處等について拾錄せるものである。 (望月歸厚)

觀心本尊鈔副狀 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-fuzo-jō. ❷一紙 ❸存、日蓮聖人御遺文第九五七、原文對照口語譯日蓮聖人全集第五 ❹日蓮(貞應元—弘安五A. D. 1222—1282)記 ❺文永一〇(A. D. 1273) ❻觀心本尊鈔を著して富木常忍に與へられたるときの副狀である。「この事日蓮當身の大事也」と記されてゐる。

❼(參考) 日講の錄內啓蒙等 ❽原本(下總中山法華經寺藏) (望月歸厚)

觀心本尊鈔探靈 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-tan-ryō. 冠註觀心本尊鈔探靈 ❷一卷 ❸存 ❹日辰記 ❺明治二七刊 ❻(立大、A〇四・三八五、A〇四・六四六七)

觀心本尊鈔探靈略記 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-tan-ryō-ryaku-ki. ❷一卷 ❸存 ❹日辰記 ❺明治二六刊(谷大、餘大・五九七)明治二七刊(龍大、二六九一・一三〈帝國、一六・二二三〉)

觀心本尊鈔師見聞 ❶(日)Kwan-jin-hon-zon-sho-shi-kem-mon. ❷二卷(現存第七、八卷) ❸存 ❹日朝(應永二九—明應九A. D. 1423—1500)述 ❺明治二九寫 ❻(谷大、餘大・一〇九五)

觀心本尊鈔得意鈔 ❶(日)Kwan

-jin-hon-zon-shū-to-ku-i-shō. 観心抄得意 ❸存、日蓮聖人御遺文第一三三〇、原文對照口語譯日蓮聖人全集第五 ❹日蓮(貞應元—弘安五A. D. 1222—1282)述 ❺建治元(A. D. 1275)

❻富木日常よりの來狀に答へられたもの、初めに贈物に對する謝意を述べ、次に觀心本尊抄の迷門未得道の文について曾谷氏の傳解を解いて未得道の迷門とは天台所弘の迷門なりと明し、三に北方の能化の、爾前の諸經を引用するについての非難に、答へられたのである。特に第二段の迷門の解釋は、日蓮宗中の一我勝劣兩派の爭議の根的とせられてゐる。

❼古寫本と信ぜらるもの 佐渡世尊寺にあり。

觀心本尊鈔得意鈔副書 ❶(B) Kwan-jin-hon-zon-shō-tiku-i-shō-sō-tsaki. ❷存、日蓮宗々學全書第一八 ❸日頂(建長四—嘉暦三A. D. 1252—1328)記 ❹德治三(A. D. 1308)

❺題の如く日蓮上人の得意抄の副書である。日蓮上人の錄内得意抄、四菩薩造立鈔、錄外得意抄等の心によつて、迷門拾つべからずの義を述べたものである。僞書なりとの說もある。 (望月歇厚)

觀心本尊鈔日常見聞 ❶(B) Kwan-jin-hon-zon-shō-nichi-jō-ken-mon. ❷一卷 ❸存 ❹日常(建保四—正安元A. D. 1216—1299)述 ❺延寶八刊 ❻(立大、A〇二・一—二)

觀心本尊鈔扶老 ❶(B)Kwan-jin-hon-zon-shō-fu-rō. 錄内扶老 ❷存、錄内扶老第六、佛教大系第二八 ❸日好(明暦元—享保一九A. D. 1655—1734)撰 ❹享保一三(A. D. 1728)

❺老軀の流忘を扶けるの意を以て名づく。錄内扶老十五卷中にあり。講義簡要、出典明確である。 (望月歇厚)

觀心本尊鈔文段 ❶(B)Kwan-jin-hon-zon-shō-mon-dan. ❷二卷 ❸存、日蓮宗々學全書第七 ❹日寛(寛文六—享保一一A. D. 1665—1725)述 ❺享保六(A. D. 1721)

❻日蓮宗大石寺派(日蓮正宗)の立義によつて觀心本尊抄を講ぜるもの、人法一體を說きて宗祖日蓮を本尊とするをその特色とす。 (望月歇厚)

❼原本(駿河大石寺藏)

觀心本尊鈔略頌 ❶(B)Kwan-jin-hon-zon-shō-ryaku-ju. ❷一卷 ❸存 ❹延寶八刊 ❺(立大、A〇二・五五)

觀心本尊鈔略要 ❶(B)Kwan-jin-hon-zon-shō-ryaku-yō. ❷一卷 ❸存、元治國全集第二、佛教大系第二八 ❹日輝(寛政一二—安政六A. D. 1788—1859)述

❺諸本註の要を取りて指針を示し、是非を分別して明了、宗義を論斷して正確、本尊鈔を讀むものゝ必ず依るべき書である。

❻(京大、日大未、五四〇〇(立大、A〇二・五六—六三)(哲、え・三・右・三二)(望月歇厚)

觀心無作念佛 ❶(B) Kwan-jin-mu-sa-nen-butsu. ❷一卷 ❸存、傳教大師全集第三 ❹山家相承書無長絺釋

❺傳教大師全集に蒐錄さる。原本は西教寺藏本寫本年時不詳の本である。本書は傳教大師の撰述に非ず。理由一、修禪錄等十餘種の大師撰述目錄に本書名を全く錄せず。二、山家相承善無長絺釋とあるも善無長誠後六十九年にして山家傳教の生誕を見るを以て善無長の直授に非ず。又次第相承とするも大師の親しく撰する處とは考へられず。三、本書の内容密教を中心とせる顯密一致の念佛にして、大師に顯著一致及彌陀教の思想あるも本書の内容とは其教懸隔あり。恐らくは叡山中古の先哲の僞撰。

❻原本(西教寺藏、❷東京淺草寺天台宗典籍刊行會 (慶入亮忠)

觀心遊心口決記 ❶(B)Kwan-jin-yū-shin-ku-ketsu-ki.(支)Kuan-hsin-yu-hsin-kou-chieh-chi. ❷一卷 ❸缺 ❹階智顗(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)述

❼(參考) 入唐新求聖教目錄、諸宗章疏錄第一

觀心要決集 ❶(B) Kwan-jin-yō-ketsu-shū. ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一二 ❹了譽聖冏(曆應四—應永二七A. D. 1341—1420)撰

❺本書は著者が富士山麓の大宮に參詣せしとき、通夜せる道俗百餘人中の十人が交々自己の所信を授述した物語りを筆錄して初學魯蒙に資したものである。十人中の初めは巫女が和歌の深意を稱讚し、次に一俗人は君子の大道を演說し、次に一童子は孝弟仁義の要諦を說く、第四人已下は皆僧俗であつて或は持戒修禪說、或は三論の諸法皆空、或は天台の四教五時一心中道觀、或は眞言の十住心三密加持、或は華嚴の十重無盡法界圓融、或は拍手大笑するもの、或は參禪開悟の樞要を論述して終りとして居る。

❼(參考) 淨土正依經論書籍目錄 ❽明暦元刊(谷大、宗大・九〇三)安政四刊(正大、一五五四・一一三、一五五四・一一一)

(岩崎藏文)

觀心要論 ❶(B)Kwan-jin-yō-ron. ❷一卷 ❸缺 ❹禪瑜撰 ❼(參考) 山家祖德撰述篇目集卷下

觀心略要集 ❶(B)Kwan-jin-ryaku-yō-shū. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第三一、惠心僧都全集第一 ❹源信(天慶五—寛仁元A. D. 942—1017)說 寛仁二或長和三寛)述

❺著者自らこの書の著述態度を語つて曰く「一には自心を練らんが爲なり……二には他人を誘はんが爲なり……」と。心の師となるとも心を師とする勿れとは日蓮の法語にしば〳〵引かるゝもの、これ第一の自心を練るの釋に引かるゝところ、又第二は鎌倉期佛教の同行思想の先驅である。この書十門を分ち、一、娑婆界の過失をあげ。二、念佛に寄せて觀心を明し。三、極樂の依正の德を歎じ。四、空假中を神じて執を蕩し。五、凡聖は一心に備る事を釋し。六、流轉生死の源を知らしめ。七、出離生死の觀を敎へ。八、空觀を修し、懺悔を行ひ。九、眞正の菩提心を發し。十、問答料簡して疑

を釋いてある。由來、この書の卷頭に「それ觀法は諸佛の祕要にして衆敎の肝心なり。この故に天台宗は之を以て規模と爲す」と道破したること、往生要集に「往生之業、念佛爲本」と說き、ヤヽ口稱念佛を勸むるに傾きたると、全く相反するものゝ如く論ずるものが多いのであるが、之は觀心の眞意義に徹底しないものゝいふ事である。この書に「往生極樂の業因は菩提心を根本と爲す」といへる菩提心と念佛とは全く同じものである。故に次下に「安樂集に大經を引いて曰く、凡そ淨土に往生せんと欲せば、要ず須らく菩提心を發して源となすべし云云。當に知るべし、菩提心はこれ欣求淨土の綱要なり。もし偏らば云何ぞ之を發さゞらんや」というてゐる。更に第十料簡の章にて「問ふ、末代の行者は理觀に堪えず、妄染轉じ難し、臨生の中にその行爲んぞ成らん…如かず、只彌陀の名號を唱へて聖衆の來迎を待たんには。かの五逆を造るの輩も、纔に臨終の十念の力に依つて往生を得るが故に。この義如何。答ふ、この言をなす者は口に西方を期すと言ふと雖も、意は實に其志なきなり。淨名經に曰く、其心淨ければ則ち佛土淨まらん云云と。若し往生淨土の意あらば、何ぞ先づ妄心を制すを欲せざらんや。…業累を除かずして安養を欣ぶ者には佛の大悲願と雖も、而も引攝の力猶ほ及び難きか」と先づ道破して於て、さて次下に不育惜意の身を以て上品を期すること必しも非分の望に非ずとし、理觀を修せずしてたゞ一佛の名號を稱ふる人も往生を得と許し、更に一轉して彌陀の加被に依らずして唯だ自心を觀ずるだけでは往生する事は出來ぬと斷定してゐる。理觀と彌陀の加被と懈怠の口唱念佛と大菩提心と極樂往生と實は全同なのである。之を敎ふるものがこの觀心略要集である。それが卷末に著者をして「願逆ともに緣を結び、互に引導を蒙らんと欲す、南無阿彌陀佛……南無極樂界會一切淸淨大海衆。」と記さした所以である。くれん〳〵もこの書と往生要集と乃至一乘要決と著述の目的を異にすると見るは大妄見である。

❼(參考) 淨土依憑經律論章疏目錄、淨土眞宗敎典志第一 ❽寛文一一刊(龍大、二六八一・二五五—一五六)(正大、一三六・二〇、一三六・二二)(高大、寄・一・六九)寛永三刊(谷大、餘大・二四一二)刊本(立大、A一二・三四〇、A一二・三四二)(哲、や・七・中・二九) (二宮守人)

觀心略要集 ❶(B)Kwan-jin-ryaku-yō-shū. 冠註觀心略要集 ❷一卷或四卷 ❸存 ❹寛文一一刊 ❽(正大、一三六・二一、一三六・五九)(谷大、餘大・一〇二九、宗大・二三二)

觀心略要集 ❶(B)Kwan-jin-ryaku-yō-shū. 首書觀心略要集 ❷二卷 ❸存 ❹寛文一一刊 ❽(龍大、二六八一・五四、研眞)

觀心略要集講錄 ❶(B)Kwan-jin-ryaku-yō-shū-kō-roku. ❷二卷 ❸存 ❹上杉文秀著 ❺大正一二(A. D. 1923)

❻(龍大、研眞)(谷大、宗大・三二四二)

觀心類聚 ❶(B)Kwan-jin-rui-ju. ❷九卷 ❸存海撰 ❼(參考) 山家祖德撰述篇目集卷下

觀心類聚 ❶(B)Kwan-jin-rui-ju. ❷十卷 ❸存 ❹忠尊(治暦元—保延四A. D. 1065—1138)撰 ❺大正三寫 ❽(谷大、餘大・二七一〇)

觀心類聚鈔 ❶(B)Kwan-jin-rui-ju-shō. ❷十卷 ❸存 ❺明暦元寫 ❽(龍大、研佛)

觀心論 ❶(B)Kwan-jin-ron. (支) Kuan-hsin-lun. 破相論 ❷一卷 ❸存、燉煌出土スタイン氏蒐集本、同ペリオ氏蒐集本、大正八五・一二七〇No. 2833、異本は禪門撮要卷上觀心論、少室六門集破相論 ❹達磨撰と傳ふるも神秀撰說あり(上山弐春氏觀心論私考に依る) ❺燉煌本(大英博物館)(巴里國立圖書館)

觀心論 ❶(B)Kwan-jin-ron. (支) Kuan-hsin-lun. 達磨大師觀心論 ❷一卷 ❸存、禪門撮要卷上 ❹菩提達磨(—大通二A. D. 528)說大通元、或大同二寅)撰 ❽(龍大)

觀心論 ❶(B)Kwan-jin-ron. (支) Kuan-hsin-lun. 頓乳論 ❷一卷 ❸存、大正四六・五八四No. 1920、鎮陽九、卍續二・四・一 ❹陪智顗(中大通三—開皇一七A. D. 531—597)述

❺觀心を中心とする四種三昧を敎勸するを以て觀心論と名づける。一名頓乳論とは弘法之人、利物の爲の故に多く加水の乳を施し聽者をして眞の道味を失はしむるを歎いて三寶の力を承けてこの論を造るといふ序に基くのであらう。先づ序に作論の大意二あり。卽ち一には自らを責め諸學徒の爲にし、二には外諸の四衆をして信受解脫せしめる爲であると述べ、像法決疑經を引いて法禪律の三師が佛法を破り名利の眷屬となるを呵して次の正說分で三十六問を出して自生心を觀ずるの得失通達に盡へてゐる。今疏によつてその三十六の偈を十章に分別すれば下の如くである。轍ち初の一偈は敎理の圓妙不可說を明し、二の兩偈は理敎に達つて見思の二惑を起すを明し、三の四偈は悟理の淺深によつて四敎の別を致すを明し、四の一偈は敎理を尋ねんとせば四種三昧の方軌によつて修すべきを明し、五の一偈は妙理は頓に階るべからず先づ二十五方便を修すべきを明し、六の一偈は心觀理實なるも諸境は雜發不同なることを明し、七の一偈は一境を觀ずるに臨ひ十乘觀法を用ふべきを明し、八の七偈は十法觀成すれば諸地住位を證し諸法門を具すること不同なるを明し、九の十四偈は化他起用の法不同なるを明し、十の四偈は自行化他の法門を總結して並びに一心に在り言語道斷なるを示してゐる。

❼(注釋) 觀心論疏五卷(章安) (參考) 新編諸宗敎藏總錄第三、東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、傳敎大師將來台州錄、智證大師請來目錄 ❽明暦四刊(正大、一三四・七)(高大、寄・一・一五)刊本(正大、一三四・二、一三四・五)(京大、藏・一五ヵ・三)(哲

ま・一・中・二七〇、立大・A 一一・三四〇）（加藤觀澄）

觀心論疏 ❶(日)Kwan-jin-ron-shō-(支) Kuan-hsin-lun-shu. ❷五卷 ❸存、大正四六・五八七 No. 1921、續陽九、卍三三・七、明北1565補、明南1563補、N. 1575 ❹隋章安灌頂(天嘉二—貞觀六 A. D. 561—632)述

❺天台大師智顗の觀心論の本旨を闡發したる名著。五卷の內容は先づ論の序正流通の分科を爲し序文の說明に卷一及び卷二の半ばを用ひ、以下全部正說分の說明に終つてゐるが、卷二には正說分十章の內三章迄を、卷三には四章の四種三昧と五章の二十五方便との說明に了り、卷四には六章の十種境界一心三智を說明し十法成乘の第二迄の說明に及び卷五は第三の破法遍以下第十不起順道法愛の說明に至り六即義を釋して結んでゐる。その思想はかなり摩訶止觀に據つてゐるやうに見らるゝが觀心論を讀むには必須缺くべからざる良參考書である。

❻(參考) 新編諸宗敎藏總錄第三、東域傳燈目錄卷下、諸宗章疏錄第一、傳敎大師將來台州錄 ❼明曆四刊(谷大、餘大・一一二二)(正大、一三四・七) （加藤觀澄）

觀心論隨文疏 ❶(日) Kwan-jin-ron-zui-mon-sho.(支)Kuan-hsin-lun-suei-wen-shu. ❷1卷 ❸缺 ❹舟丘(一本作圓丘)撰 ❺(參考) 智證大師請來目錄

觀身九道經 ❶(日) Kwan-jin-kudō-gyō.(支)Kuan-shen-chiu-tao-ching. ❷1卷 ❸缺 ❹失譯 ❺(參考) 法經錄第三、仁壽錄第三、靜泰錄第三

觀身成佛儀軌 ❶(日)Kwan-jin-jō-butsu-gi-ki. (支)Kuan-shen-ch'eng-fo-i-kuei. 妙吉祥平等瑜伽祕密觀身成佛儀軌 ❷1卷 ❸存、大正二〇・九三〇 No. 1193、續成一二、卍二七・一下、明北1412續、明南1256後、N. 1438 ❹宋代慈賢譯

觀世音詠託生經 ❶(日)Kwan-ze-on-ei-taku-shō-kyō.(支) Kuan-shih-yin-yung-t'o-sheng-ching. ❷1卷 ❸缺 ❹疑僞經 ❺(參考) 法經錄第二、仁壽錄第四、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

觀世音義疏 ❶(日)Kwan-ze-on-gi-sho.(支)Kuan-shih-yin-i-shu. 觀音義疏 ❷二卷 ❸存、大正三四・九二一 No. 1723、續調五、卍三三・三、明北1530續、明南1533何、N. 1557 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七 A. D. 531—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六 A. D. 561—632)記 ❺正保四刊 ❻(正大、一一四三・五—六)(高大、寄・一・一五)

觀世音經 ❶(日)Kwan-ze-on-kyō.(支)Kuan-shih-yin-ching. ❷1卷 ❸失譯 ❹法華經第八卷普門品の抄出 ❺出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六 ❻(參考)

觀世音經贊 ❶(日) Kwan-ze-on-kyō-san.(支) Kuan-shih-yin-ching-tsan. ❷1卷 ❸缺 ❹陪吉藏(太清三—武德六 A. D. 549—623)述 ❺(參考) 東域傳燈目錄卷上

觀世音經疏 ❶(日) Kwan-ze-on-gyō-sho.(支)Kuan-shih-yin-ching-shu. 觀音義疏 ❷二卷 ❸存、大正三四・九二一 No. 1723、續調五、卍三三・三、明北一五五〇續、明南一五三三何、N. 1557 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七 A. D. 531—597)述、灌頂(天嘉二—貞觀六 A. D. 561—632)記

觀世音經疏 ❶(日) Kwan-ze-on-gyō-sho. ❷1卷 ❸缺 ❹聖德太子(敏達帝二—推古帝二九 A. D. 573—621)撰 ❺(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2579

觀世音求十方佛名爲受記經 ❶(日)Kwan-ze-on-gu-jū-pō-butsu-myō-jū-ki-kyō. (支) Kuan-shih-yin-chiu-shih-fang-fo-ming-wei-shou-chi-ching. ❷1卷 ❸失譯 ❹悲華經の抄出。 ❺(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、武周錄第二、開元錄第一六、貞元錄第二六

觀世音觀經 ❶(日) Kwan-ze-on-kwan-gyō.(支)Kuan-shih-yin-kuan-ching. ❷1卷 ❸缺 ❹宋沮渠京聲(一大明八、A. D. 464)譯 ❺(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第一四、貞元錄第二四

觀世音玄義 ❶(日) Kwan-ze-on-gen-gi.(支)Kuan-shih-yin-hsüan-i. 觀音玄義、觀音玄 ❷1卷 ❸存、大正三四・八七七 No. 1726、續調五、卍三三・二、明北1545續、明南1531何、N. 1555 ❹隋智顗(中大通三—開皇一七 A. D. 531—597)說、灌頂(天嘉二—貞觀六 A. D. 561—632)記 ❺慶安元刊 ❻(龍大、研傳)(正大、一一四三・二)

觀世音三昧經 ❶(日)Kwan-ze-on-zan-mai-kyō. (支) Kuan-shih-yin-san-mei-ching. ❷1卷 ❸失譯 ❹疑僞經 ❺(參考) 法經錄第二、仁壽錄第四、武周錄第一八、貞元錄第二八

觀世音懺悔除罪咒經 ❶(日) Kwan-ze-on-zan-ge-jo-zai-shu-kyō. (支) Kuan-shih-yin-ch'an-hui-chu-tsui-ch'ou-ching. ❷1卷 ❸缺 ❹蕭齊代達摩摩提譯 ❺(參考) 仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第一四、貞元錄第二四

觀世音寺一切經目錄 ❶(日) Kwan-ze-on-ji-i-sai-kyō-mo-ku-roku. ❷1卷 ❸缺 ❹(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2888

觀世音寺大鏡 ❶(日)Kwan-ze-on-ji-o-kagami. ❷1卷 ❸存 ❹東京美術學校編 ❺昭和四刊

觀世音寺資財帳 ❶(日)Kwan-ze-on-ji-shi-zai-chō. ❷1卷 ❸存、大日本佛敎全書第一一七寺誌叢書第一、群書類從第一五、新校群書類從第一九 ❹筑紫觀世音寺の嘉保年間(A. D. 1094—1096)に於ける寶藏實錄日記で、骨綱所謄に依り調製されたものである。

寺有の什器寶物道具等を分類し、「見在・無實」の二大別をおき、見在の部では十六個の韓櫃と別納との內容を悉く點檢記錄して、延喜・寬治兩帳との異同有無を檢記し、

無實の部では大刀伍柄以下武具金銀の紛失せるものを集錄し、「以前寶藏雜物見在無實具以勘錄、至子無實者、以去天慶四年爲被掠取也」と述べてゐる。日本三戒壇の一として西國に勢威並びなかつた觀世音寺も、藤原純友の亂には其の掠奪を蒙つたことが窺はれる。 （紀氏陸眞）

觀世音持驗記 ❶(日)Kwan-ze-on-ji-gen-ki.(支)Kuan-shih-yin-chih-yen-chi. 觀音經持驗記 ❷二卷 ❸存、卍續二二乙・七・五 ❹清代周克復撰 ❺天和三刊(京大、藏・一九カ・二)刊本(谷大、餘大・三八〇六)

觀世音授記經 ❶(日)Kwan-ze-on-ju-ki-kyō.(支)Kuan-shih-yin-shou-chi-ching. 觀世音受記經 ❷1卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(一太康初—永嘉末 A. D. 265—312—)譯 ❺宋曇無竭譯觀世音菩薩授記經と同本、第二譯、闕本。

❻(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

觀世音十大願經 ❶(日)Kwan-ze-on-jū-dai-gwan-kyō. (支) Kuan-shih-yin-shih-ta-yüan-ching. ❷1卷 ❸疑僞經 ❹(參考) 法經錄第二、仁壽錄第四武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

觀世音所說行法經 ❶(日)Kwan-ze-on-sho-setsu-gyō-ho-kyō. (支) Kuan-shih-yin-so-shuo-hsing-fa-ching. ❷1卷 ❸缺 ❹後漢代失譯 ❺(參考) 出三藏記第四、法經錄第一、三寶紀第四、仁壽錄第五、靜泰錄第五、內典錄第一、武周錄第一、開元錄第一、第一四、貞元錄第二、第二四

觀世音成佛經 ❶(日)Kwan-ze-on-jō-butsu-kyō.(支)Kuan-shih-yin-ch'eng-fo-ching. ❷1卷 ❸缺 ❹失譯 ❺(參考) 出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

觀世音不空羂索毋身印呪 ❶(日)Kwan-ze-on-fu-kū-ken-saku-mo-shinn-in-ju. (支)Kuan-shih-yin-pu-k'ung-chüan-so-mu-shen-yin-ch'ou. ❷1卷 ❸存、曼殊實利烟曼德迦萬愛祐衛如意法之內 ❹寫本(京大、藏・一六マ・二)

觀世音普門品影響鈔 ❶(日) Kwan-ze-on-fu-mon-bon-yō-kō-shō. ❷六卷 ❸存 ❹元祿五刊 ❺(龍大、二四一三・四)

觀世音菩薩 ❶(日)Kwan-ze-on-bo-satsu. ❷1卷 ❸存 ❹大谷光瑞述 ❺昭和四刊 ❻東京大乘社支部

觀世音菩薩往生淨土本緣經 ❶(日) Kwan-ze-on-bo-satsu-ō-jō-jō-do-bonn-en-gyō.(支) Kuan-shih-yin-p'u-sa-wang-sheng-ching-t'u-pen-yüan-ching. ❷1卷 ❸存、卍續一・八七・四 ❹西晉代失譯

❺本經は其の題名の示すが如く、觀世音菩薩が釋尊の會座につらなりて極樂世界の往生淨土の因緣を明せし經典であるが、古經錄に見えず、從て正藏にも編入されず、續藏經中印度撰述補遺の中に收められ、而も西晉錄に附すといはるゝも、時代的に後の產物であり、失譯といはるゝも蓋し僞經に入るべきもの、その內容思想共に淨土門興隆以後の色彩頗る濃厚で、觀世音菩薩の本生因緣を示し、補陀落山が觀世音菩薩常住の道場であることを如實に示されてゐる。

本經の登場人物は釋尊、總持自在菩薩、觀世音菩薩、阿彌陀如來などであつて、釋尊が例によつて王舍城靈峰山頂に在せし時、佛前に大光明出現し、南閻浮提と他方佛國土とを遍く照し、而も引きつゞき次の樣な偈頌が流れ出た。成就大悲解脫門、常在靈鷲補陀山、晝夜六變觀世音、本願因緣利一切と本經成立の因由を示してゐる。然るに會座の大衆何故なるか理解することが出來なかつた。その時衆中の總持自在大菩薩進み出で、釋尊に問ふていはく「何の因緣に依つて此の光明が出現せしや、又何人に依りて放出されしや、我等大衆は斯の光明を見、偈頌を聞けども未だ其の因緣を知らず。願くは我等にその因緣を說き給へ」と。

爾の時釋尊はその問の尤もであるとして、只今西方極樂世界の一生補處の大士觀世音菩薩此の土に來つて往生淨土の本末因緣を顯示しやうとして光明を現じ、偈頌を誦せし爲なりと答へられた。爾の時觀世音菩薩は鷲峯山の頂に降臨、頭面禮佛讚嘆供養し已りたれば、總持自在菩薩は佛威神力を承けて、大衆の未だ理解し能はざる所を尋ねられた。こゝで觀世音菩薩の說法は初められたのである。今その大要を述ぶれば次のやうである。乃往過去不可說阿僧祇劫前に、南天竺に摩訶婆吒と名くる國あり。國內に富豪梵士長那あり、妻摩那斯羅との間に長らく兒なきを歎恨して、天神に祈禱して兒を求めたれば雲雖あらたかに忽ちに孕妊娠なし月滿みて男子を生む、端正無比であつた。三才になりし頃次男が生れた。兄名早離、弟名遠離、兩親の喜び限りなかつたが、相者之を悅ばず、兩親に別離するの相ありと觀じた。然れども夫妻相共に愛育して厭はなかつた。然るに兄七才弟五才になつた頃、母摩那斯羅四大不調に陷り、重病卒に起り、形色衰損日々病惱殘るばかりであつた。兩兒母側にありて悲哭限りなければ、悲母二兒の頭を摩して生死敗壞免脫することは出來ない。昔て相者のいへる誡あり、只恨むらくはお前達の成人を見ずして別離することだが、お前達は決して忘れてはいけない、それは明操至道を得んとせば菩提心を發すに過ぎたるはない、菩提心といふは大悲これなり、若し成人するに至らば、四恩を報じて堅しく發心せよと。又夫を呼んで、我れ今は汝と車の兩輪の如く、鳥の兩翼の如く、平和であるが、二子ありて我れ先に死し、汝生く。汝二子を愛養すること我れ生存中の如く異る勿れとの遺言を以て逝いた。長那妻の死別を悲めども、二子の養育は緩なくしては不可なりとして毗羅梵士の一女を娶りて後妻となせしこと、時偶ま畢世飢饉袋ひ起りて財穀枯渴車藏空になつたので、長那は北方檀羅山に妻及び二子の爲に甘蔗鶴頭を取りに出掛けられたが、二週間經たれども歸宅せず、妻は大い

に不安を感じて、子孫の繁昌に不利であるとして、自分の妻帯子を捨て、同じく不安を感じて、子孫の繁昌に不利であるとして、自分の妻帯子を捨てた。

これらの不善業は皆、過去の罪障の報いである。我れ今、これを懺悔し、諸仏の前に於て、自ら誓願して、これを除かんと願ず。

これ、一切の衆生、無始の時より、貪欲・瞋恚・愚癡の三毒の為に、身・口・意の三業を造り、十方の国土に於て、一切の衆生を、悪道に堕して、苦を受くること、無量無辺なり。今、我れ、懺悔

[illegible]

觀世音菩薩普門品 ❶(日) Kwan-ze-on-bo-satsu-fu-mom-bon. 觀音經・法華經普門品・觀音普門品・普門品・普門品・普門品 ❷外 妙法蓮華經第二十五 (大正九・五六 No. 262. 25)

❸仏法法華經第二十五の略称で観音菩薩の誓願行やあらゆる人々に観音菩薩の普門品・観音経・普門品・普門品・普門品・観音菩薩の普門示現の仏教的意義を説いたものである。信解品は、仏法法華経第二十五の略称である。

觀世音菩薩普門品義疏記 ❶(日) Kwan-ze-on-bo-satsu-fu-mom-bon-gi-sho-ki. (支) Kuan-shih-yin-p'u-sa-p'u-mên-p'in-i-shu-chi. 観音菩薩普門品義疏記・観音義疏記 ❷四巻 ❸外 大正三四・九三六 No. 1729 卍続一・五五・一一二 ❹安和元年(一九六八年)A. D. 959—1028)撰 ❺観音三昧(谷大・慶大・三二六九)(慶大・二四一三・三一七)(東京国立博物館)(正大・一一四三・三一七)(東大・三六三)

觀世音菩薩普門品玄義記會本 ❶(日) Kwan-ze-on-bo-satsu-fu-mom-bon-gen-gi-ki-e-hon. (支) Kuan-shih-yin-p'u-sa-p'u-mên-p'in-hsüan-i-chi-hui-pên. 観音菩薩普門品玄義記会本・観音玄義記会本 ❷四巻 ❸外 ❹明治二二年(正大・一一四三・一九一二〇) (谷大・慶・七九・一・慶・七九・二)(谷大・慶大・三六二)(慶大・二四一三・一九一二〇) (谷大・慶大・三六二)(慶大・二四一三・一九一二〇)

觀世音菩薩普門品義疏 ❶(日) Kwan-ze-on-bo-satsu-fu-mom-bon-gi-sho. (支) Kuan-shih-yin-p'u-sa-p'u-mên-p'in-i-shu-chi. 観音菩薩普門品義疏・観音義疏 ❷四巻 ❸外 大正三四・九三六 No. 1729 卍続一・五五・一一二 ❹安和元年(一九六八年)A. D. 959—1028)撰 ❺観音三昧(谷大・慶大・三二六九)(慶大・二四一三・三一七)(東京国立博物館)(正大・一一四三・三一七)(東大・三六三)

觀世音菩薩普門品義疏會本 ❶(日) Kwan-ze-on-bo-satsu-fu-mom-bon-gi-sho-e-hon. (支) Kuan-shih-yin-p'u-sa-p'u-mên-p'in-hsüan-i-chi-hui-pên. 観音菩薩普門品義疏会本・観音義疏会本 ❷四巻 ❸外 ❹明治二二年(正大・一一四三・一九一二〇) (谷大・慶・七九・一・慶・七九・二)(谷大・慶大・三六二)(慶大・二四一三・一九一二〇

示す。意味は観音菩薩以後の仏教行道の作法である。

〔参考一十二〕 此の巻は観音菩薩の法記を説いたものである。此の巻の其文を梵語に直して大唐三蔵玄奘が漢語に翻訳し、大乗三論・三論玄義・中論・百論・十二門論・大智度論・般若経・法華経・華厳経・涅槃経・大集経・金光明経・仁王経・維摩経・勝鬘経・楞伽経・深密経・解深密経・密厳経・大乗起信論・唯識論・成唯識論・摩訶止観・天台四教儀・法華玄義・法華文句・天台四教儀・法華玄義・法華文句・天台四教儀・法華玄義・法華文句

觀音法門私記 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-ki. 訂正觀音勢觀音法門私記 ❷11卷 ❸存 ❹良忠(正治元—弘安1○A. D. 1199—1287)記 ❺印本(谷大"宗大•1七11六)(文大"A三○•1○九)

觀音法門私記忍註 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-ki-kwan-chū. ❷存" 浄土宗全書第四 ❹良忠(正治元—弘安1○A. D. 1199—1287)撰 ❺浄土宗全書所收西系の諸11書たる絵図良忠"觀音法門"を註釈したる書にして"1"に解"其大意"11"に解"題號"1"三"に解"文句"1"に解"其の行儀"を解釈する者にして"1"に解"は"三"に其理三昧"を明らかにし"文句"を解すること其理三昧"を明らかにし"文句"を解すること

本文句を辿り"解釈してある。

本書は著者の著作元祖の著に倣ひて"其の他の註釈書と同じく"其宗義を以て解釈せ"そこに其の特徴"あるが"文句を解すること解釈"1"に参考すべきものである。

本書は古く成立されて外題には觀音法門"本文を区切り""要註"解釈"本の切貫"に古版"全書尼に收め"解釈を"要註"として"外題に訂正"觀音の字を加へて上梓したが"それを浄土宗全書尼に收め"解釈を"要註"として"要註"を別々に

❹巻尼に出されてある。

❺寛永天刊(正大"1五三1•九大"1五三1•九11"1五三1•111六)(龍大"1六八1•三六)(谷大"宗大•七○11)(前"ふ•六•右•1111)(高大"音•1•1八) (珍祥面)

觀音法門私記 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-ki. ❷11卷 ❸存 ❹良忠(正治元—弘安1○A. D. 1199—1287)記" ❺印本(谷大"宗大•1七11六)(文大"A三○•1○九)

觀音法門私記見聞 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-ki-kem-mon. ❷11卷 ❸存" 浄土宗全書第四 ❹良秀(正平元—正応元A. D. 1342—1428)撰 ❺良忠の觀音法門私記に" 著者の見聞による" 正応元A. D. 1342—1428)撰 ❻良忠の觀音法門私記に" 著者の見聞によりて註釈を施したもの。著者は鎌倉時代の人"西宗名僧"法然に出でて"善恵房を合せ来け"下許大原"圓房寺を開めて"後を弘め"著述多し"中に"元徳元年の良忠の觀音法門私記の"見聞"を作ったから"それを大原見聞"又良忠見聞と併せられて"所立"に"其の見聞と共に"其の宗義上の主張である。本書も其の見聞と共に"其の宗義上の主張である。本書も其の見聞と共に"其の宗義上の主張であるから"私記解釈上の参考である。

❼〔参考〕 浄土宗全書第三 ❽字体1七用(正大"1五三1•1111"1五三1•11111○) (珍祥面)

觀音法門私記見聞 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-ki-kem-mon. ❷11卷 ❸存" 浄土宗全書第四 ❹西象善勝(貞治元—永享111 A. D. 1366—1440)撰 ❺西象善勝の浄土宗義西系の諸人に出たる西象善勝が" 良忠の觀音法門私記に" 自らの見聞を加へて"

たる所に"より"て註釈を施したるもの。著者は"自宗の分裂"したる者なり"著述"自宗の著述法"其宗義に就"て見解を異にして居るから"本書は私記解釈上の参考たるに止まる。自宗著述解釈の著を加へ"教証"であるから。

❽用本(谷大"宗大•八○1)(龍大"11六八1•三九) (珍祥面)

觀音法門私記私鈔 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-ki-shi-shō. ❷11卷 ❸存" 浄土宗全書第四 ❹良秀(一寛文頃A. D. 1661—1672—)撰 ❺良忠の觀音法門私記の文々句々に"自宗的註釈を施したもの。著者は法華宗"修験"教学者の私記にも註釈を施して居るが"私記解釈上の良参考書である。

❻寛文刊用 ❼(正大"1五三1•1三五"1五三1•1四1)(谷大"宗大•11三三11) (珍祥面)

觀音法門私記用捨鈔 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-ki-sō-zoku-shō. 觀音法門用捨鈔 ❷11卷 ❸存 ❹西象善勝(貞治元—永享1 11 A. D. 1366—1440)撰 ❺明暦四刊 ❻(龍大"11六八1•四11)(正大"1五三1•1111五"1五三1•1111七—11 11八)(谷大"宗大•11111"宗大•1七11三)

觀音法門私記記鈔 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-ki-hi-shō. ❷11卷 ❸存 ❹行觀覚運(仁治11—正中11 A. D. 1241—1325)撰 ❺寛永刊(龍大"11六八1•四1)

觀音法門私考 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-ki. ❷1卷 ❸存 ❹新蓮(享保八—天明三A. D. 1723—1783)撰 ❺〔参考〕 浄土宗全書第三11

觀音法門私鈔 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-shō. ❷11卷 ❸存 ❹(前"ふ•七•中•1)

觀音法門私用心鈔 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-shi-yō-jin-shō. ❷四卷 ❸存 ❹新圓(一寛文頃A. D. 1334—1341—)撰 ❺〔参考〕 浄土宗全書第三

觀音法門手印鈔 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-shin-bō-roku. ❷八卷 ❸存 ❹良忠(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)撰 ❺〔参考〕 宗大系用行業文書目

觀音法門手印記 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-jin-shin-ki. ❷六卷 ❸存 ❹白隠慧鶴(文政七—明治四年A.D.1824—1910)撰 ❺明治四1筆 ❻(谷大"宗大•1 1○六)

觀音法門卷 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-sen. ❷11卷写四卷 ❸存 ❹新蓮(享保八—天明三A. D. 1723—1783)撰 ❺寛永(谷大"宗大•三四)

觀音法門卷鈔 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-sō-zoku-shō. 觀音法門私記用捨鈔 ❷11卷 ❸存 ❹西象善勝(貞治元—永享1 11 A. D. 1366—1440)撰 ❺寛永天11四刊)撰 ❻〔参考〕 浄土宗全書第三" 浄土宗全書第四 ❼明暦四刊(谷大"宗大•1七11三)(龍大"11六八1•四11)(正大"1五三1•1111五"1五三1•1111七—11 11八)(谷大"宗大•11 1

1 1)

觀音法門卷林 ❶(日)Kwan-nen-hō-mon-sō-rin. 觀音法門卷林鈔 ❷1卷 ❸存" 続浄土宗全書1○ ❹天保記(嘉永—文久A. D. 1644—1721)撰 ❺宝暦三(A. D. 1713) ❻〔参考〕 浄土宗全書第11 ❼印本(谷大"宗大•1七11三)(文大"A三○•1○九)

觀音法門卷林鈔 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-sō-rin-shō. 觀音法門卷林 ❷1卷 ❸存" 続浄土宗全書1○ ❹天保記(嘉永—文久A. D. 1644—1721)撰 ❺宝暦三(A. D. 1713)天11十五日寺門静"合に著者七十歳"

❻著者の觀音法門を註釈したもの。著に觀音法門の著者の著述" 林道の名の著" 聞書と大意" 聞書の説明等をなし" 本に天文の解釈を加へしてある。

❼寛永天刊所載本は文政天時本に著者自序を加へて改訂したもの。

❽白隠本(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)撰(谷大"宗大•11○1六) (珍祥文書)

觀音法門卷記 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-chō-ki. ❷11卷 ❸存 ❹新蓮(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)撰 ❺天保11(A. D. 1831) ❻印本(谷大"宗大•四四11八)

觀音法門卷記 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-chō-ki. ❷1卷 ❸存 ❹新蓮(天明八—嘉永11 A. D. 1788—1869)撰 ❺嘉永刊 ❻(谷大"宗大•11九七五)

觀音法門卷記 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-chō-ki. ❷11卷 ❸存 ❹良天(龍大"1111六•1111)

觀音法門卷鈔 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-hi-shō. ❷11卷 ❸存 ❹行觀覚運(仁治11—正中11A. D. 1241—1325)撰 ❺〔参考〕 浄土宗全書第三 ❻印本(龍大"宗大•1六四八)

觀音法門卷記 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-hik-ki. ❷1卷 ❸存 ❹新蓮(安永四—嘉永四A. D. 1775—1851)撰 ❺印本(龍大"1111六•1111)

觀音法門卷記 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-hik-ki. ❷11卷 ❸存 ❹大安(文化元—明治1六 A. D. 1808—1883)撰 ❺印本(龍大"1111六•1111)

觀音法門卷文 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-bun-kwa. ❷1卷 ❸存 ❹新蓮(安永四—嘉永四 A. D. 1775—1851)撰 ❺天保11刊 ❻(谷大"宗大•三六○11)

觀音法門卷義釋聞記卷鈔 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-yō-gi-shaku-kwan-mon-gi-shō. 觀音法門卷義釋聞記卷鈔 ❷11卷 ❸存" 大日本仏教全書第五六六"聞記卷義釋之内"西山全書第四 ❹良秀(谷大"宗大—寛治元 A. D. 1177—1247) 撰 ❺〔参考〕 浄土宗全書第三11

觀音法門卷略記 ❶(日) Kwan-nen-hō-mon-ryaku-ge. ❷11卷 ❸存" 続浄土宗全書1五 ❹良秀(安永11—文政七 A. D. 1773—1824)撰 ❺文政四(A. D. 1821) ❻觀音法門の注釈書。文化四年頃" 浄土宗西山学派の学僧" 良秀" 著したもの。著者は

浄土宗系諸学派の学匠であり"観音学"である。著者は観音を本尊として居る。

内容は先づ総説を説き" 後に文に入りて解釈す。其の総説は1に観音の行相を説はんとして説かず" 11に今経の所説を示さんとして説かず" 其の後に文を分ち" 其の説を示さんとして説かず" 11に観音学説を説はんとして説かず" 11に観音学説を説はんとして説かず" 11に観音学説を説は

由旬　四、即見東方　五、但見寶地寶座六、諸大菩薩以爲眷屬の六項目を掲げ、問答體を以て其の要文を釋したものである。例せば第一若見菩賢の項目に於て「問、經文若見菩賢及不見者除却罪數云云顯ニ何事耶。答見ニ菩賢色身、或不見人俱除ニ罪障、云也。付ヶ之見ニ菩賢、人除ニ罪障ニ事可ヶ爾、不ヶ見人如何除ニ罪障耶、例如ヶ被不ヶ念ニ觀音ニ者不ヶ蒙ヶ利益ニ如何。答除ニ滅罪障ニ事不ヶ顯ニ見佛一行、或讀ニ誦大乘經ニ或唱ニ諸佛名號ニ等也、若爾者隱不ヶ見ニ菩賢色身、修ニ此等行ニ深重懺悔之類除ニ罪苦ニ故、及不見者除ニ却罪數ニ云也。」とある如し。但し原本には項目なく「卍藏に之を補入せりと記して居る。奥書によれば執筆者は清瀧となつてゐる。（馬田行啓）

觀普賢經記 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-ki. 觀普賢菩薩行法經記 ❷二卷或一卷 ❸存、大正五六・二二六No. 2194、大日本佛教全書第二六智證大師全集第二 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A.D. 814—891)説寛平四、年七八寂)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上 ⑩文政一〇刊(龍大、二四一三・二二七)安永九刊(谷大、餘大・二二六)刊本(谷大、餘大・一一三八)

觀普賢經記 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-ki. 觀普賢經玄贊 ❷三卷 ❸缺 ❹守朝(—延長頃? A.D. 923—930—)述 ❼〔參考〕東域傳燈目錄卷上

觀普賢經記 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-ki. 訂正觀普賢經記 ❷二卷 ❸存 ❹敬光(元文五—寛政七A.D. 1740—1795)校 ⑩安永九刊(京大、日大未・五九)文政一〇刊(立大、A一二・三三二)

觀普賢經義疏 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gi-sho. (支) Kuan-pu-hsien-ching-i-shu. 普賢觀經義疏、觀普賢菩薩行法經疏 ❷二卷 ❸存、卍續一・五五・二 ❹本如(太平興國七—皇祐三 A.D. 982—1052一説皇祐二寂)述、盧成續解 ⑤寶永元刊 ⑩(龍大、研佛)(谷大、長保・一四八)(正大、一一四五・一四)(京大、藏・一九カ・一)

觀普賢經科 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-kwa ❷一卷 ❸存 ⑩刊本(龍大、二四一三・二九)

觀普賢經玄贊 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gen-san. 觀普賢經記 ❷三卷 ❸缺 ❹守朝(—延長頃? A.D. 923—930—)述 ❼(參考) 注進法相宗章疏

觀普賢經私記 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-shi-ki. ❷一卷 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A.D. 814—891)説寛平四、年七八寂)述 ❼(參考) 山家眞慈撰述寫目集卷上

觀普賢經序 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-jo. (支) Kuan-pu-hsien-ching-hsu. ❷一卷 ❸缺 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

觀普賢經注記 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-chū-ki. ❷一卷 ❸缺 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D. 814—891)説寛平四、年七八寂)述 ❼(參考) 山家眞慈撰述寫目集卷上

觀普賢經本記 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-hon-gi. (支) Kuan-pu-hsien-ching-pen-chi. ❷一卷 ❸缺 ❹最眞證(永元—太建元A.D. 499—569) ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

觀普賢經文句 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-mon-ku. ❷一卷 ❸存 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D. 814—891)説寛平四、年七八寂)述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上 ⑩慶永五刊(谷大、長保・一五〇)文政一〇刊(龍大、二四一三・二八)

觀普賢經文句合記 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-mon-go-ki. 觀普賢菩薩行法經文句合記 ❷四卷 ❸存、大日本佛教全書第二六智證大師全集第二 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D. 814—891)説寛平四、年七八寂)撰 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

觀普賢菩薩行法經 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-ten-tai-yu. ❷一卷 ❸缺 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A.D. 814—891一説寛平四、年七八寂)撰 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

觀普賢菩薩行法經 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-kyō. (支) Kuan-pu-hsien-pu-hsing-fa-ching. 普賢觀經、觀普賢菩薩法經、觀普賢菩薩經、出塵功德經、普賢經、觀普賢行法經、觀普賢經 ❷一卷 ❸存、大正九・三八九No. 277、鉢曇四、卍一・四、北381得、南392得、元338得、明北392短、清390短、厦380改、天115風、指353改、法372改、至389改、明南378同、N. 314 ❹曇無蜜多譯 ⑤劉宋元嘉元—一八(A.D. 424—441)

❶本經には前後三譯がある。第一譯は東晉時代、西域沙門祇多蜜多(Gitamitra)譯「普賢觀經」、第二譯は姚秦時代鳩摩羅什(Kumārajīva)譯「觀普賢菩薩經」、第三譯は本書で、第一第二兩譯は夙に缺けて傳はらない。原名は Samantabhadra-bodhisattra-dhyānacarya-dhārma-sūtra で、直譯すれば「普賢菩薩觀行法經」となる。「出塵功德經」と譯するのは本經の内容たる普賢觀の功德をとつて意譯したものである。本經の經典中の位置は、天台大師が法華の結經と判定してから、確定的なものとなつた。天台がこれを法華の結經と判定したのは、本經の内容が法華の最後たる「普賢菩薩勸發品」を承けて普賢菩薩を觀ずる方法と功德とを説き、經典の受持讀誦乃至流布を勸進して居るからである。

本經の序分は阿難、摩訶迦葉、彌勒の二犀聞一菩薩が、如來の滅後に云何してか衆生、菩薩の心を起し、大乘方等經典を修行し、正念に一實の境界を思惟せん。云何してか無上菩提の心を失はざらん。云何してか後當に煩惱を斷ぜず五欲を離れずして諸根を淨め諸罪を滅除することを得、父母所生の清淨の常眼、五欲を斷ぜずして而も能く諸の障外の事を見ることを得べき」と問ふて居る一段である。

正宗分は右の問に對する答で、これが「開正説宗分」と「勸物會修分」とに二大

分され、前者は「普賢菩薩觀」と「六根懺悔法」との二大段に分れ、後者は「大乘の讀誦」と「菩薩戒及び善戒の受持」と「破戒惡に對する懺悔」の三大段に分れて居る。

後通分は、佛が最後に來世此の懺悔法を修習する者は必ず作佛すべきを説き、聞法者が得益した一段である。

本經を一貫する思想は、普賢觀と大乘經典の受持讀誦により六根の懺悔清淨にある。

❷(注釋) 義疏二卷(刊、卍續No. 528)本如・盧成。本記一卷眞諦。私記一卷圓仁。文句一卷(刊、佛全)圓珍。料簡來由一卷圓珍。記二卷圓珍。科註一卷定珍。記(玄贊)三卷守朝。略釋一卷眞興。〔參考〕出三藏記第二、三寶紀第一〇、内典錄第四、譯經圖紀第三、開元錄第五、貞元錄第七（馬田行啓）

觀普賢菩薩行法經 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-kyō. 科註觀普賢菩薩行法經 ❷一卷 ❸存 ⑩慶安五刊(谷大、餘大・三〇四二)(駒大)

觀普賢菩薩行法經 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-kyō. 現代意譯觀普賢菩薩行法經 ❷一卷 ❸存、現代意譯佛教經典叢書第八

觀普賢菩薩行法經 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-kyō. 國譯觀普賢菩薩行法經 ❷一卷 ❸存、國譯大藏經部第一 ❹清水梁山譯

觀普賢菩薩行法經 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-kyō. 國譯觀普賢菩薩行法經 ❷一卷 ❸存、國譯一切經法華部 ❹馬田行啓譯

觀普賢菩薩行法經記 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-ki. 觀普賢經記 ❷二卷 ❸存、大正五六・二二六No. 2194、大日本佛教全書第二六智證大師全集第二 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A.D. 814—891)説寛平四、年七八寂)述 ⑤仁和四(A.D. 888) ⑥本書解説は觀普賢菩薩行法經文句合記の條參照。 ❼觀普賢菩薩行法經文句 ❼參照 ⑩安永九刊(谷大、餘大・二二六)(京大、日大未・五九)文政一〇刊(龍大、二四一三・二七)(立大、A一二・三三二)刊本(谷大、餘大・一一三八)(田島德音)

觀普賢菩薩行法經義疏 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-gi-sho. (支) Kuan-pu-hsien-pu-hsing-fa-ching-i-shu. 普賢觀經義疏、觀普賢經義疏 ❷二卷 ❸存、卍續一・五五・二 ❹宋本如(太平興國七—皇祐三 A.D. 982—1052一説皇祐二寂)述、盧成續解 ⑤寶永元刊 ⑩(正大、一一四五・一四)(京大、藏・一九カ・一)(龍大、研佛)(谷大、長保・一四八)

觀普賢菩薩行法經義疏科 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-gi-sho-kwa. (支) Kuan-pu-hsien-pu-hsing-fa-ching-i-shu-ko. 普賢觀經義疏科 ❷一卷 ❸存、卍續一・五五・二 ❹刊本(高大、唐・一・二三)寫本(京大、藏・一・七カ・六)

觀普賢菩薩行法經文句 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-kyō-mon-ku. 普賢經文句 ❷一卷 ❸存 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A.D. 814—891)説寛平四、年七八寂)撰 ⑥本書解説は觀普賢菩薩行法經文句合記を參照。 ❼龍明鈔(卷數未詳)三井敬長撰。科註普賢經二卷、圓城寺日光院禮信正亮述撰、慶長十七年壬子秋)。私記一卷圓仁撰。料簡來由一卷圓珍撰。科註一卷定珍撰。觀普賢經玄贊三卷守朝撰。觀普賢經略釋一卷眞興撰。(以上日本撰述)。本記一卷眞諦撰。普賢觀行法經疏一卷孤山智圓述。普賢觀行法經義疏二卷神照本如撰、法眞盧成續集。(以上支那撰述)(佛全、二六。智證大師全集第二ノ五一二頁參照) ⑤慶安五刊 ⑩(谷大、長保・一五〇)(田島德音) ⑩中野五郎左衛門（田島德音）

觀普賢菩薩行法經文句合記 ❶(B) Kwan-fu-gen-gyō-gyō-hō-kyō-mon-go-ki. 觀普賢經文句合記 ❷四卷 ❸存、大日本佛教全書第二六智證大師全集第二 ❹圓珍(弘仁五—寛平三A.D. 814—891)説寛平四、年七八寂)記、敬光(元文五—寛政七A.D. 1740—1795)分會 ⑥圓珍が法花經の結經たる觀普賢經の註疏として、文句一卷と記二卷とを作つた。それを圓城寺法明院敬光が經文と文句と記とを合會し上下に各本末を分けて四卷としたものが本書である。文句は經文の分科を設けて一經の組織を立て序正流通に分ち大綱を示してゐる。一卷二十四紙。一紙左右各十行。一行二十字。記は上下上卷九十三紙。一紙左右各十一行。一行二十字。冠頭に校異を附してある。記は先づ經題を天台大師の五重玄義の釋題によつて、五門に分別し、釋名・辨體・明宗・辨用・判教の一一に就いて解釋してゐる。次に入文解釋に於ては經文を擧げ、内典外典の各方面より博く引文して文々句々を説明し、初門のものにも能く解し易いように記述してある。但し經文の組織を知るためには文句を對照せねばならぬのである。文句の製作年代は不明であるが、文句は記よりも先きに作られたが、文句だけでは經文の意義が知れないので、幼童のために更に稿を起して記上下二卷を作つたのである。記の撰述は卷尾に「仁和四年六月二十一日略して勸へ了る」とあるから、著作年月は明知される。然るに本書撰述の目的が三つあるように思はれる。一は上記の如く、文句だけでは初學者には經文の意義が理解されないために作つたこと。(佛全二六ノ四一〇頁參照)二は文句の終末に四字偈六句、五字偈一句、四字偈一句を叙してゐるが、第一には「兩處三聖を奉殿し、早く權現の六根五塵を洗ひ、今日決(定)して無上の三佛を證せんことを、十八明神も、皆同じく是くの如し」とある。かく山王二十一社の奉爲に「一經を科釋し」たとあるのに、記には「略して觀普賢經至要の句義を集め、敬て以つて傳教眞師(傳教大師)報恩の志を莊嚴す。願くは我が三聖、十七聖を領じ、普賢三七日の懺を圓修せしめたまへ云云」といひ、山王を二十社に數へてゐる。兎に角、圓珍は仁和二年十月、光孝天皇の御不豫に際し、勸を

蒙って持念し験を得たので、天皇は圓珍に勅賞を與へんとしたまひ、希望を問ひたまはれた。珍は山王明神の神託を蒙って渡海求法することを得た故、願くは大小比叡二神の品位を賚けんために、年分度者を賜り神恩に報じ奉らんと奏答した。これによって聖三年三月、年度二人を山王權現のために勅賜せられた。この圓珍の傳記の記事に就いて考へても、文句は仁和四年、若しくは仁和三年に著述され、記は四年に作られたものと思ふ。要するに文句も記も山王權現二十一明神若しくは二十聖の神位を賚け奉らんがために著述してゐる。三は記の最後に「先の豫州我が使君藍、今日決して無上佛果を證せんことを。今日は正しく是れ那の四十九日である」と記してゐること。豫州の氏名は未詳であるが、中陰の所念冥資にこの記の著作を擬したものであると思はれる。この三種の目的が文句と記との撰述の場合に存在してゐたと思はれる。文句は悉皆一貫して分科を詳記してゐて混雜した所がない。然るに記に於ては寫誤もあるやうだし、また一二箇所本經の註記に無關係の記事が揭げてある。（佛全二六ノ五〇九頁上參照）。又平安朝初期の本邦佛堂の使用法、講經論議の場合に於ける批難、南都の僧等が北嶺の僧を集會に於いて訓誡する不駄、其他一般僧侶の破戒無戒を難ずる如き時事問題を各所で記述してゐる。記は諸師の解釋を經文の一一に當てて記し、次に「今案ずるに」又は「今謂く」等として自說を述べてゐる。圓珍は天台宗旨によって「觀普賢」の觀を重視し、すべての經文を解釋し說明してもこれが物知りたらんがためではなく、經文の一一を圓修圓觀せんがために記してゐる。例せば「崑令藍國」の解說に觀心釋を主眼とし、普賢菩薩の依報眞身の說明にも觀心を力說してゐる等がそれである。要するに一文一句悉く自心の圓觀を修する指針であり、文々句々皆修觀の法門であることを明示せんとしてゐる。この點は天台大師の三大部の立場と同樣であるが、特に唐朝の教禪融和思想の反映であるとも考へられる。このことは唐代佛教を尊重して日本佛教を批難してゐるのをみても、如何に當時唐風尊重の傾向が盛んであったかが認められるのである。

❼觀普賢菩薩行法經文句の條參照（田島德晉）

觀普賢菩薩經 ❶(日) Kwan-fu-pen-pō-sa-gyō. (支) Kuan-pu-hsien-p'u-sa-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 344—413)譯 ❺劉宋曇無密多譯 觀普賢菩薩行法經と同本、第二譯、同本。 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

觀佛三昧經 ❶(日) Kwan-butsu-zam-mai-kyō. (支) Kuan-fo-san-mei-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 344—413)譯 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

觀佛三昧海經 ❶(日) Kwan-butsu-zam-mai-kai-kyō. (支) Kuan-fo-san-mei-hai-ching. 觀佛三昧經 ❷十卷 ❸存、大正一五・六四五 Nr. 643、鎬黃五、卍一・一〇、北401復、南114復、元456復、明北426位、清256位、麗402可、天456復、指374、法395可、至455可、明南453位、Nr. 430 ❹佛陀跋陀羅譯 ❺東晉隆安二—永初二(A. D. 397—421) ❻本經は佛を觀じ、佛を念ずるには如何にすべきかを詳叙し、且つその殊勝なる功德を敷衍するもの。全篇十卷十二品に分れ、その品目並に梗概は約ね次の如くである。

〔卷第一〕 六譬品第一、佛迦毘羅城、尼拘樓陀精舍に於て、來訪せし父王の問に對し、衆生如何が佛の身相を觀ずべきかに端を起し、衆生佛を觀ずれば、その心佛と異ること無しとの義を述べ、六箇の譬喩を擧げ。(1)師子王の胎兒の譬、(2)伊蘭と栴檀の譬、(3)金翅鳥死して龍王明珠を探るの譬、(4)殃伽陀樹の譬、(5)波利質多樹の譬、(6)毘摩質多羅帝釋と戰ふの譬。觀地品第二、佛の境界を觀じ、佛の相好を觀ずるを說き、三十二相、八十種隨形好を列ね、順逆兩樣の觀法を擧げ。觀相品第三の一。

〔卷第二〕 觀相品第三の二。

〔卷第三〕 觀相品第三の三。

〔卷第四〕 觀相品第三の四。觀相品は前の觀地品を承けて四箇の小品に分れ、如來の頂相より始めて佛を觀ずるを叙べる。白毛相に就て佛の誕生時、納妃時、出家時、苦行時、降魔時、成道時等に亘り、記述詳細を極む。降魔のことを叙するも魔の形容甚だ詳かである。阿鼻獄のこと、魔女のことと、佛の威力不可思議にして降魔の勝事白毛相より生ずとなす。成道の時大人相現は毛相より生ずとなす。成道の時大人相現は れ、種種三昧の列擧あり、道場の變相、狐廣平相、眉相、眼睫相、耳相、方頰車相、師子欠相、鼻相、髮相、脣相、齒相、廣長舌相の詳述、さては頭相等の諸相に及ぶ。堀惡不善心のものはかゝる勝相を見ずして、只純黑炭人の如きを見ると云ふ。次に放常光相、眉間光明、面上三輪相、鼻出光明、面門光明、耳出五光、缺盆骨滿相、胸德字萬字相、胥臆鐵圍如象王鼻相、餉相等に及び、十方に光明を放つことを叙ぶ。

〔卷第五〕 觀佛心品第四、佛の心臟は紅蓮華の如く、その華葉の間に八萬四千の白色光ありて五道の衆生を照すと云ひ、此の下種種詳細なる地獄の記述がある。他の經典と稍異色を呈する地獄の記述に注意すべきである。

〔卷第六〕 觀四無量心品第五、佛の心臟より十種の白光出で、佛心とは慈、悲、喜、捨の四無量なりと說く。觀四威儀品第六の一。

〔卷第七〕 觀四威儀品第六の二、出世間に何の利ありやと父王の問へるに對し、性來極めて佛を憶忌せし須達長者の老母が化度せらるゝ因緣說話、さては佛が母后摩耶夫人のために忉利天に昇りて說法すること、鬼神毒龍を降伏せし物語を載せる。かくて三十二相の中唯一相を餘すのみと云ふ阿難の話を終りとして次の品に入る。

〔卷第八〕 觀馬陰藏品第七、佛、諸の嫉女の疑を解かんが爲に、馬陰藏相を現ずること、姪女の由來、並に佛、少年を化作して姪女を度せしこと、佛の神通尼犍子を度せしことを叙べて、此一相を觀ずる旨を明す。

〔卷第九〕 本行品第八、觀佛の功德を述べ、一切施長者の本生說話、十方諸佛の顯現、財首菩薩の散華等のことあり。

觀像品第九、彌勒身の瓔珞を解いて佛を供養し、佛は請に依りて觀像法を說く。

〔卷第十〕 念七佛品第十、過去七佛を念ずることを明し、念十方佛品第十一、十方諸佛を念ずることを明し、觀佛密行品第十二、最後に念佛三昧の功德を明してこれを讚ふるに六箇の喩を擧げる。(1)紫金を鑄物に鑄むの喩、(2)金印寶瓶の喩、(3)長者死に臨みてその女に如意珠を貽すの喩、(4)仙人王を叱責するの喩、(5)力士船師に酬ゆるの喩、(6)金剛山の喩。かくて阿難にこの經を付囑する。

以上本經は觀佛に始まりて念佛に結歸するも、實際には本經の觀佛と念佛とは其の意義殆んど區別無きが如く、時に觀佛即ち念佛と言へる箇處すらあるは注意すべきである。又所々に華嚴經に言ふが如しとあるより見れば、本經の編成は華嚴經を基礎とするが如く、兎まれ佛の奇瑞神變の叙述微に入り細を穿ち、譬喩說話に富み、且つ眼横に印度神話を引用せること大乘經典中の出色の一とするに足る。

❼(參考) 淨土眞宗教典志第一 ❹寛政六刊(正大、一一五〇・三五、一一五〇・四九—五〇〇)高大、寄・一・二三) (皇芳遠)

觀佛三昧海經抄 ❶(日) Kwan-butsu-zam-mai-kai-kyō-shō. (支) Kuan-fu-san-mei-hai-ching-chiao. ❷一卷 ❸缺 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

觀佛相好經 ❶(日) Kwan-butsu-sō-gyō-kyō. (支) Kuan-fo-hsiang-hao-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹觀佛三昧海經の抄出。 ❼(參考) 開元錄第一六、貞元錄第二六

觀法師奉答皇太子所問諸經與義並牒 ❶(日) Kwan-hō-shi-hō-tō-shi-sho-mon-shi-kyō-go-gi-to-narabini-chō-to-o-hō-tō-se-ta-ru. (支) Kuan-fa-shih-feng-ta-huang-t'ai-tzu-so-wen-chu-ching-yü-i ji tieh. ❷一卷 ❸缺 ❼(參考) 入唐新求聖教目錄

觀法用心 ❶(日) Kwan-hō-yō-jin. ❸缺 ❹慶超(天德四—長元七 A. D. 960—1034)說 長元七、年八三)撰 ❼(參考) 諸宗章疏錄第二、山家祖德撰述篇目集卷下

觀彌勒下生經 ❶(日) Kwan-mi-roku-ge-shō-gyō. (支) Kuan-mi-lo-hsia-sheng-ching. 彌勒下生經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒當來下生經、彌勒成佛經、下生經 ❷一卷 ❸存、大正一四・四二一 Nr. 453、鎬黃五、卍一〇・五、北197位、南228位。元204位、明北201貞、麗198貴、明南193貞、Nr. 326 ❹竺法護(—泰始二—建興元 A. D. 265—313—)譯 ❺西晉泰安二(A. D. 303) ❻寛文七刊(正大、一一七四・一)寛文八刊(龍大、二一七・二三)刊本(谷大、餘大・四〇五)

觀彌勒下生經 ❶(日) Kwan-mi-roku-ge-shō-gyō. (支) Kuan-mi-lo-hsia-sheng-ching. 彌勒下生成佛經、彌勒當來成佛經、彌勒受決經 ❷一卷 ❸存、大正一四・四二三 Nr. 454、鎬黃九、卍一〇・五、北207位、南240位、元205位、明北203貞、麗199貴、至276必、明南201貞、Nr. 205 ❹鳩摩羅什譯 ❺姚秦弘始四—一四(A. D. 402—412) ❻高麗版(谷大、餘大・三八六一)寛文八刊(龍大、二一七・二三)刊本(谷大、餘大・四〇六)

觀彌勒上生經 ❶(日) Kwan-mi-roku-jō-shō-gyō. (支) Kuan-mi-lo-shang-sheng-ching. 觀彌勒菩薩上生兜率天經、彌勒上生經、兜率天經、上生經 ❷一卷 ❸存、大正一四・四一八 Nr. 452、鎬黃九、卍一〇・五、北196位、南237位、至276必、元203位、明北206貞、麗193貴、明南196貞、Nr. 204 ❹沮渠京聲(—大明八 A. D. 465—)譯 ❺劉宋孝建二(A. D. 455—) ❻寛文七刊(正大、一一七四・一)寛文八刊(龍大、二一七・二三)(谷大、餘大・三八六一)刊本(貞、ゑ・二・中・三二)×高大、寄・一・二三)(正大、一一七四・八)高麗二五刊(龍大、二一七・一九)

觀彌勒上生經疏 ❶(日) Kwan-mi-roku-jō-kyō-sho. (支) Kuan-mi-lo-shang-sheng-ching-shu. 觀彌勒上生兜率天經贊、彌勒上生經瑞應疏 ❷二卷 ❸存、大正三八・二七二 Nr. 1772、卍續一・三五・四 ❹唐窺基(貞觀六—永淳元 A. D. 626—682)述 ❺平祚錄、永超錄には疏、藏俊錄には贊と云ひ、高麗の義天錄には瑞應疏と傳へてゐる。本書にも題下に大慈恩寺基撰と基の一字名を以つて註してゐるが、慈恩大師の名は窺基と云ふよりも基と一字名を以つて稱するのを正當だと思ふ。窺の字は衍字ならんとは學者の云ふところである。

基師は本經を釋するにあたり五門を以つて分別すと云ひ、(一)佛成權實、(二)慈氏所因、(三)時分有殊、(四)往生難易、(五)問答料簡の五門を出してゐるが、五門分別を終つて隨文解釋に這入つてゐるから結局は六門分別となる。その中(一)佛成權實とは一種の佛陀論であつて法・報・應の三身中、法身と自受用報身とは不可見不可識の無量無邊の佛身であつて之を佛の眞實身となし、他受用報身と應化身とは隨機應現の佛にして佛身の權なるものとなし、地前の衆生と地上の菩薩とによつてその可見の別なることを料簡し、淨土には二乘女人等の生不能を明し、次で彌勒の三會成道の相を說き、彌勒の賚機圓滿なるに關して說いて

の男性を超える能力を授けられ、其性質は人間の男子と異なる。（二）婦氏底母とは婦人、言して婦氏とは、その婦人の性は婦氏と称せらるるなり。（三）婦氏底母とは婦人、言して婦氏とは、その婦人の性は婦氏と称せらるるなり。

觀音菩薩

❶(梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-to u-shuai-t'o-t'ien-ching 觀彌勒菩薩上生兜率天經、彌勒菩薩上生經、彌勒上生經、上生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 452、續圓光、卍一〇・五、北196葉、帝207葉、宇203葉、新北200葉、鹿195葉、潯273葉、新帝198葉、Nj. 204 ❹出經次數（一大部八 A. D. 464 言 ❺法華經初四一一四(A. D. 402—412) ❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）刊本(谷大・三八〇)

觀彌勒菩薩上生兜率天經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-jō-shō-to-sotsu-da-ten-gyō. (梵) Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-to u-shuai-t'o-t'ien-ching 觀彌勒菩薩上生兜率天經、彌勒菩薩上生經、兜率天經、上生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 452、續圓光、卍一〇・五、北196葉、帝207葉、宇203葉、新北200葉、鹿195葉、潯273葉、新帝198葉、Nj. 204 ❹出經次數（一大部八 A. D. 464）言 ❺新譯（菩薩一一八No. 455—）❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一四・一)（谷大・三八二）貫文人刊(鹿大、一一一七・一一三)（谷大・三八〇）刊本(谷大・三八〇)

觀彌勒菩薩上生兜率天經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-jō-shō-to-sotsu-ten-gyō. (梵) Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-tou-shuai-to-t'ien-ching. (藏) Hphags-pa byaṅ-chub-sems-dpaḥ byams-pa gaḥ-ldam gnam du skye-ba blaṅs-baḥi mdo. (梵藏)觀彌勒菩薩上生兜率天經、觀彌勒菩薩上生兜率天經、觀彌勒菩薩上生經、彌勒菩薩上生經、上生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 452、續圓光、卍一〇・五、北196葉、帝207葉、宇203葉、新北200葉、鹿195葉、潯273葉、新帝198葉、Nj. 204 ❹出經次數（一大部八 A. D. 464）言 ❺新譯（菩薩一一八No. 455—）❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一四・一)貫文人刊(鹿大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）貫文人刊(鹿大、一一一七・一一三)（谷大・三八〇）刊本(谷大、一一一七四・八)(鹿、ゑ・一一・中・三一三)(鹿大、谷・一・一一三)貫書一一五刊(鹿大、一一一七・一九)

觀彌勒菩薩上生兜率天經贊

❶(日)Kwan-mi-roku-bo-satsu-jō-shō-to-sot-ten-gyō-san. (梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-tou-shuai-t'ien- ching-tsan. 觀彌勒上生兜率天經贊、觀彌勒上生經贊、彌勒上生經贊 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 1772、卍續一・三五・四一一）❹新譯次數 ❺(參考) 慈恩傳四、玄奘譯 ❻(參考) 慈恩傳四、玄奘譯

觀彌勒菩薩上生兜率天經贊

❶(日)Kwam-mi-roku-jō-shō-to-sot-ten-gyō-sho. (梵) Kuan-mi-lu-shang-shêng-tou-shuai-t'ien-ching-shu. ❷四卷疏11卷 ❸存、大正三八・一一七一No. 1772、卍續一・三五・四 ❹佚書疏（以前六一—未詳完 A. D. 632—682）疏 ❺貫文人刊 ❻(宣大、谷・一・一一一)

觀彌勒菩薩下生經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-ge-shō-gyō. (梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-hsia-shêng-ching. 觀彌勒菩薩下生經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒下生經、下生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一一No. 453、續圓光、卍一〇・五、北197葉、帝208葉、宇204葉、新北201葉、鹿198葉、潯帝199葉、Nj. 308 ❹佚次數（一參照 11—一數 A. D. 256—313—）言 ❺四卷(參安11) A. D. 303) ❻貫文七刊(宣大、一一一七四・一)貫文人刊(鹿大、一一一七一一三)(谷大、谷大・四〇五)

觀彌勒菩薩下生經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-ge-shō-gyō.(梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-hsia-shêng-ching. 觀彌勒菩薩下生經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒菩薩下生經、彌勒菩薩下生經、彌勒下生經、下生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一一No. 454、續圓光、卍一〇・五、北207葉、帝210葉、宇206葉、新北203葉、鹿199葉、潯276葉、新帝201葉、Nj. 205 ❹次數 言 ❺法華經初四一一四(A. D. 402—412) ❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）刊本(谷大・三八〇)

觀彌勒菩薩上生兜率天經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-jō-shō-to-sotsu-da-ten-gyō. (梵) Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-to u-shuai-t'o-t'ien-ching 觀彌勒菩薩上生兜率天經、彌勒菩薩上生經、兜率天經、上生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 452、續圓光、卍一〇・五、北196葉、帝207葉、宇203葉、新北200葉、鹿195葉、潯273葉、新帝198葉、Nj. 204 ❹出經次數（一大部八 A. D. 464）言 ❺新譯（菩薩一一八No. 455—）❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一四・一)貫文人刊(鹿大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）貫文人刊(鹿大、一一一七・一一三)（谷大・三八〇）刊本(谷大、一一一七四・八)(鹿、ゑ・一一・中・三一三)(鹿大、谷・一・一一三)貫書一一五刊(鹿大、一一一七・一九)

觀彌勒菩薩上生兜率天經贊

❶(日)Kwan-mi-roku-bo-satsu-jō-shō-to-sot-ten-gyō-san. (梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-tou-shuai-t'ien- ching-tsan. 觀彌勒上生兜率天經贊、觀彌勒上生經贊、彌勒上生經贊 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 1772、卍續一・三五・四一一）❹新譯次數 ❺(參考) 慈恩傳四、玄奘譯 ❻(參考) 慈恩傳四、玄奘譯

觀彌勒菩薩上生兜率天經贊

❶(日)Kwam-mi-roku-jō-shō-to-sot-ten-gyō-sho. (梵) Kuan-mi-lu-shang-shêng-tou-shuai-t'ien-ching-shu. ❷四卷疏11卷 ❸存、大正三八・一一七一No. 1772、卍續一・三五・四 ❹佚書疏（以前六一—未詳完 A. D. 632—682）疏 ❺貫文人刊 ❻(宣大、谷・一・一一一)

觀彌勒菩薩下生經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-ge-shō-gyō. (梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-hsia-shêng-ching. 觀彌勒菩薩下生經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒下生經、下生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一一No. 453、續圓光、卍一〇・五、北197葉、帝208葉、宇204葉、新北201葉、鹿198葉、潯帝199葉、Nj. 308 ❹佚次數（一參照 11—一數 A. D. 256—313—）言 ❺四卷(參安11) A. D. 303) ❻貫文七刊(宣大、一一一七四・一)貫文人刊(鹿大、一一一七一一三)(谷大、谷大・四〇五)

觀彌勒菩薩下生經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-ge-shō-gyō.(梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-hsia-shêng-ching. 觀彌勒菩薩下生經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒菩薩下生經、彌勒菩薩下生經、彌勒下生經、下生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一一No. 454、續圓光、卍一〇・五、北207葉、帝210葉、宇206葉、新北203葉、鹿199葉、潯276葉、新帝201葉、Nj. 205 ❹次數 言 ❺法華經初四一一四(A. D. 402—412) ❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）刊本(谷大・三八〇)

一) ❻佚次數言11(A.D. 455—)

❼觀彌勒菩薩上生兜率天經、觀彌勒菩薩上生兜率天經、彌勒菩薩上生經、上生經、上生經分之一。❽1卷 ❾存、大正一四・四一八No. 452、續圓光、卍一〇・五、北196葉、帝207葉、宇203葉、新北200葉、鹿195葉、潯273葉、新帝198葉、Nj. 204 ❿出經次數（一大部八 A. D. 464）言 ⓫法華經初四一一四(A. D. 402—412) ⓬貫文人刊(宣大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）刊本(谷大・三八〇)

觀彌勒菩薩下生兜率天經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-ge-shō-gyō. (梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-hsia-shêng-ching. 觀彌勒菩薩下生兜率天經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒下生經、下生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一一No. 453、續圓光、卍一〇・五、北197葉、帝208葉、宇204葉、新北201葉、鹿198葉、潯帝199葉、Nj. 308 ❹佚次數（一參照 11—一數 A. D. 256—313—）言 ❺四卷(參安11) A. D. 303) ❻貫文七刊(宣大、一一一七四・一)貫文人刊(鹿大、一一一七一一三)(谷大、谷大・四〇五)

觀彌勒菩薩下生兜率天經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-jō-shō-to-sotsu-ten-gyō. (梵) Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-tou-shuai-to-t'ien-ching. (藏) Hphags-pa byaṅ-chub-sems-dpaḥ byams-pa gaḥ-ldam gnam du skye-ba blaṅs-baḥi mdo. (梵藏)觀彌勒菩薩上生兜率天經、觀彌勒菩薩上生兜率天經、彌勒菩薩上生經、彌勒菩薩上生經、上生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 452、續圓光、卍一〇・五、北196葉、帝207葉、宇203葉、新北200葉、鹿195葉、潯273葉、新帝198葉、Nj. 204 ❹出經次數（一大部八 A. D. 464）言 ❺新譯（菩薩一一八No. 455—）❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一四・一)貫文人刊(鹿大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）貫文人刊(鹿大、一一一七・一一三)（谷大・三八〇）刊本(谷大、一一一七四・八)(鹿、ゑ・一一・中・三一三)(鹿大、谷・一・一一三)貫書一一五刊(鹿大、一一一七・一九)

觀彌勒菩薩上生兜率天經贊

❶(日)Kwan-mi-roku-bo-satsu-jō-shō-to-sot-ten-gyō-san. (梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-tou-shuai-t'ien- ching-tsan. 觀彌勒上生兜率天經贊、觀彌勒上生經贊、彌勒上生經贊 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 1772、卍續一・三五・四一一）❹新譯次數 ❺(參考) 慈恩傳四、玄奘譯 ❻(參考) 慈恩傳四、玄奘譯

觀彌勒菩薩上生兜率天經贊

❶(日)Kwam-mi-roku-jō-shō-to-sot-ten-gyō-sho. (梵) Kuan-mi-lu-shang-shêng-tou-shuai-t'ien-ching-shu. ❷四卷疏11卷 ❸存、大正三八・一一七一No. 1772、卍續一・三五・四 ❹佚書疏（以前六一—未詳完 A. D. 632—682）疏 ❺貫文人刊 ❻(宣大、谷・一・一一一)

觀彌勒菩薩下生經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-ge-shō-gyō. (梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-hsia-shêng-ching. 觀彌勒菩薩下生經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒下生經、下生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一一No. 453、續圓光、卍一〇・五、北197葉、帝208葉、宇204葉、新北201葉、鹿198葉、潯帝199葉、Nj. 308 ❹佚次數（一參照 11—一數 A. D. 256—313—）言 ❺四卷(參安11) A. D. 303) ❻貫文七刊(宣大、一一一七四・一)貫文人刊(鹿大、一一一七一一三)(谷大、谷大・四〇五)

觀彌勒菩薩下生經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-ge-shō-gyō.(梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-hsia-shêng-ching. 觀彌勒菩薩下生經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒菩薩下生經、彌勒菩薩下生經、彌勒下生經、下生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一一No. 454、續圓光、卍一〇・五、北207葉、帝210葉、宇206葉、新北203葉、鹿199葉、潯276葉、新帝201葉、Nj. 205 ❹次數言 ❺法華經初四一一四(A. D. 402—412) ❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）刊本(谷大・三八〇)

觀彌勒菩薩上生兜率天經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-jō-shō-to-sotsu-da-ten-gyō. (梵) Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-to u-shuai-t'o-t'ien-ching 觀彌勒菩薩上生兜率天經、彌勒菩薩上生經、兜率天經、上生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 452、續圓光、卍一〇・五、北196葉、帝207葉、宇203葉、新北200葉、鹿195葉、潯273葉、新帝198葉、Nj. 204 ❹出經次數（一大部八 A. D. 464）言 ❺新譯（菩薩一一八No. 455—）❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一四・一)貫文人刊(鹿大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）貫文人刊(鹿大、一一一七・一一三)（谷大・三八〇）刊本(谷大、一一一七四・八)(鹿、ゑ・一一・中・三一三)(鹿大、谷・一・一一三)貫書一一五刊(鹿大、一一一七・一九)

觀彌勒菩薩上生兜率天經贊

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-jō-shō-to-sot-ten-gyō-san. (梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-shang-shêng-tou-shuai-t'ien- ching-tsan. 觀彌勒上生兜率天經贊、觀彌勒上生經贊、彌勒上生經贊 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一八No. 1772、卍續一・三五・四一一）❹新譯次數 ❺(參考) 慈恩傳四、玄奘譯 ❻(參考) 慈恩傳四、玄奘譯

觀彌勒菩薩上生兜率天經贊

❶(日)Kwam-mi-roku-jō-shō-to-sot-ten-gyō-sho. (梵) Kuan-mi-lu-shang-shêng-tou-shuai-t'ien-ching-shu. ❷四卷疏11卷 ❸存、大正三八・一一七一No. 1772、卍續一・三五・四 ❹佚書疏（以前六一—未詳完 A. D. 632—682）疏 ❺貫文人刊 ❻(宣大、谷・一・一一一)

觀彌勒菩薩下生經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-ge-shō-gyō. (梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-hsia-shêng-ching. 觀彌勒菩薩下生經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒下生經、下生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一一No. 453、續圓光、卍一〇・五、北197葉、帝208葉、宇204葉、新北201葉、鹿198葉、潯帝199葉、Nj. 308 ❹佚次數（一參照 11—一數 A. D. 256—313—）言 ❺四卷(參安11) A. D. 303) ❻貫文七刊(宣大、一一一七四・一)貫文人刊(鹿大、一一一七一一三)(谷大、谷大・四〇五)

觀彌勒菩薩下生經

❶(日)Kwam-mi-roku-bo-satsu-ge-shō-gyō.(梵)Kuan-mi-lu-p'u-sa-hsia-shêng-ching. 觀彌勒菩薩下生經、觀彌勒菩薩下生經、彌勒菩薩下生經、彌勒菩薩下生經、彌勒下生經、下生經 ❷1卷 ❸存、大正一四・四一一No. 454、續圓光、卍一〇・五、北207葉、帝210葉、宇206葉、新北203葉、鹿199葉、潯276葉、新帝201葉、Nj. 205 ❹次數言 ❺法華經初四一一四(A. D. 402—412) ❻貫文人刊(宣大、一一一七・一一三)（谷大・三八二）刊本(谷大・三八〇)

觀彌勒菩薩上生兜率天經

❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-gi-sho. (梵)Kuan-wu-liang-shou-i-shu. 觀無量壽佛經義疏、觀無量壽佛經疏、觀無量壽佛經記、觀無量壽佛經疏 ❷1卷 ❸存、大正三七・一七三No. 1749、卍續一・三一・四、陸土宗全書第六 ❹出經次數（未詳四一四四一一四四一一一A. D. 523—592）疏 ❺(參考) 貫道傳日發卷上、新羅智藏法師觀經疏一

觀無量壽佛經疏

❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō. (梵)Kuan-wu-liang-shou-ching. 觀無量壽佛經疏、觀無量壽佛經、觀經、觀無量壽經 ❷1卷 ❸存、大正一一一・三四〇No. 365、續藏一一一、卍一〇・四、北194葉、帝205葉、宇201葉、新北194葉、鹿194葉、潯191葉、宇203葉、新177葉、鹿188葉、潯270葉、新帝193葉、陸土宗全書第一、陸土宗全書第一、Nj. 198 ❹貫文次數 ❺(參考) 慈恩傳一一九(A. D. 424—442) ❻觀無量壽佛經疏の項を見よ。

❼(參考) 慈恩大師撰述著作目錄、陸土宗聚經傳法世系、陸土宗聚經傳法世系日錄、陸土宗聚經傳法世系、陸土宗聚經傳法世系、陸土宗聚經傳法世系

觀無量壽經 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō. 真言宗所依の経典 ❷1卷 ❸存 ❹刊本(續大1・11・1・1)

觀無量壽經 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō. 浄土宗所依の経典 ❷1卷 ❸存 ❹明曇鸞註(安大1・1・11・8・8)(正大1・1・1・5・1・1・11・1・1・11)(續大1・5・1・11・1・11)

觀無量壽經 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō. 現代語訳浄土宗所依の経典 ❷1卷 ❸存、現代語訳浄土宗所依の経典 ❹大谷大学出版部之内 ❺宗教部編纂委員会

觀無量壽經 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō. 唐代浄土教の基本的経典 ❷1卷 ❸存 ❹天保五刊 ❺(安大・11・七・九)(續大1・体裁)

觀無量壽經 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō. 国訳観無量寿経 ❷1卷 ❸存 国訳大蔵経々部所収

觀無量壽經 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō. 国訳観無量寿経 ❷1卷 ❸存 ❹刊本(安大1・11・11)

觀無量壽經 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō. 浄土教の基本的経典 ❷11卷 ❸存 観無量寿経義疏之内 ❹天保11刊(續大1・体裁)大正1・11刊(續大1・〇・1・11)"英訳"

觀無量壽經 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō. 母子観無量寿経 ❷1卷 ❸存 ❹刊本(安大1・11・11・9・11)

觀無量壽經坊譯 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-e-shaku. ❷大卷 ❸存、観経会参考資料 ❹浄土社(完治七—明治元A. D. 1694—1768)頃

❺著者自ら「今仏法流布、諸「故師流」、「諸「法」」の「観経」の解釈の結論を明かす。観経の観無量寿経の文章に理解すべきものの文章の『四帖疏』中、疑義を生じ、以外、更に次の著あり、而して文殊師利菩薩を其の中に置く所あり、また仏は彼の菩薩を其の中に置く所あり、また仏は彼の菩薩を其の中に置く所あり、即ち著者の観経に対する解釈を示すもの。

❻(安大・11・11・11・11)

(藤谷誠豊)

觀無量壽經會疏 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-e-sho. 観無量寿経会疏注記、観無量寿経会疏注記、観無量寿経会疏注記 ❷11卷 ❸存 ❹岡教(正保11—寛永四A. D. 1645—1707)頃 ❺(参考) 浄土宗所依の経典

觀無量壽經會疏引考 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-e-sho-in-kō. ❷11卷 ❸存 ❹(安大・11・四・1・五・五11)

觀無量壽經會疏請要分 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-e-sho-shaku-yō-shō. 観無量寿経疏抄 ❷1卷 ❸存 ❹岡教(正保11—寛永四A. D. 1645—1707)頃 ❺(安大・11・四・1・五・五・体裁)

觀無量壽經會疏註記 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-e-sho-chū-gyō. 観無量寿経会疏注記、観無量寿経会疏、観無量寿経会疏注記 ❷11卷 ❸存 ❹岡教(正保11—寛永四A. D. 1645—1707)頃 ❺(安大・11・四・1・五・五四)(續大・11・1・1・1・11・11)(安大・11・1・1・1・11・11)

觀無量壽經記 ❶(日) Kwan-mu-ryō-ju-kyō-ki. (支) Kuan-wu-liang-shou-ching-wang-shêng-chi. ❷四卷 ❸存 ❹浄土教(一宋末年間A. D. 1086—1093)頃 ❺(参考) 浄土教所依の経典

觀無量壽經往生淨土決擇行願二尖記 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-ō-jō-jō-do-ketsu-gi-gyō-gwan-ni-hō-mon. (支) Kuan-wu-liang-shou-ching-wang-shêng-ching-t'u-chüeh-i-hsing-yüan-êrh-la-mên. 往生浄土決擇行願二尖記 ❷1卷 ❸存、大正四七・1・四四No. 1968" 編纂1・1・" 己三〇・八・" 明治1507刊" 明治1492刊" Nj. 1514 ❹法蔵(宋初元—明治元A. D. 963—1032)頃 ❺(参考) 浄土教所依の経典

觀無量壽經會疏 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-on-gi. ❷1卷 ❸存、浄土宗所依観無量寿経之内(大正五七No. 2207) ❹信瑞(一鎌倉初A. D. 1249—1255—)頃 ❺(参考) 浄土教所依の経典

觀無量壽經顯國記 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-on-ken-ki. 観無量寿国記 ❷1卷 ❸存、十二部経之内 ❹宗本(安大・1・〇11・八)

觀無量壽經顯定義 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-on-shō-gi. ❷11卷 ❸存 ❹信瑞(安永三—安政元A. D. 1774—1858)頃 ❺宗本11刊 ❻(安大・体裁)

觀無量壽經開題 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-kai-dai. ❷1卷 ❸存 ❹(参考) 浄土教所依の経典 ❺浄土宗聖典編纂委員会編日蔵

觀無量壽經合讚 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-gas-san. ❷11卷 ❸存 ❹結城聞慈(明暦11—天保1・1・大A. D. 1657—1731)頃 ❺宗教1・11刊(安大・体裁)(安大・11・1・11)

觀無量壽經刊正記 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-kan-shō-ki. (支) Kuan-wu-liang-shou-ching-kan-chêng-chi. ❷11卷 ❸存 ❹天慶11刊(天平勝宝元—延喜元A. D. 976—1022) ❺(参考) 浄土教所依の経典編纂委員会編1・ 浄土教所依の経典

觀無量壽經義贊記 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-gan-sha-ki. ❷九卷 ❸存 ❹性愛(明和11—天保九A. D. 1765—1838)頃 ❺浄土宗(安大・1・11・11・11・5・〇)

觀無量壽經記中卷 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-ki-chū-roku. ❷九卷 ❸存、浄土教大系編纂11刊 ❹鳥山記法(宋—明治元—天保元A. D. 1768—1834)頃 ❺文政(A. D. 1829)

❻文政十11に巳年分の浄土教大系の編纂を目的として完成した注釈である。全巻に亜の観無量寿経疏を中心として注釈、天台、善導分の観無量寿経疏を中心として注釈のそれぞれを比較研究し、それは浄土の本質観に対する浄土宗所説の四種四宗と浄土教の教理上の別を見て言説し、更に人の観を説き、「不思議の妙法」を説き、「大乗の教」を説くものである。彼の著作の特徴としては、大乗仏教の代表的のものである。先づ仏教に対して、「本質」を観念の明確を期し、次に浄土三部経観念の説明、四宗教の相違に関して、「更に本質の説明を説く」、「説」を説く、「説」を説く、「説」を説く

歌集書籍目録 九品往生思惟集

(中) Kwan-mu-ryō-jō-kyō-ka-bon-ō-jō-mon-dō. ❸1巻 ❹(仮名) 慈土真宗の教義書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwan-mu-ryō-jō-kyō-ka-bon-ō-jō-zyō-ron. ❸1巻 ❹(仮名) 慈土真宗の教義書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwan-mu-ryō-jō-kyō-ka-bon-ō-jō-zyō-ron-chō. 慈恵僧正良源著 ❸1巻 ❹漢文体の教義書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwan-mu-ryō-jō-kyō-ge-bō-sho. ❸1巻 ❹(仮名文体)日本往生伝の一。寛和元年(A. D. 1012—1083)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwan-mu-ryō-jō-kyō-kei-rin-ki. (文) Kwan-mu-ryō-jō-kyō-kenn-gi-shō. 慈恵僧正良源著 ❸1巻 ❹漢文体の教義書 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwan-mu-ryō-jō-kyō-kenn-yō-chi. (文) Kwan-wa-liang-shou-ching-chiang-lin-chi. 慈恵僧正良源著 ❸1巻 ❹漢文体の教義書 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwan-mu-ryō-jō-kyō-kenn-yō-kei-shō. (文) Kwan-wa-liang-shou-ching-shin-yao-chi. 十六観経疏 ❸11巻 ❹漢文体(一条兼良)A. D. 994—995)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

Kwam-mu-ryō-jō-kyō-kenn-yō-ki-ha-mon. 慈恵僧正良源 ❸1巻 ❹漢文体(一条兼良)A. D. 994—1017)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-kwa-mon. (文) Kwan-wa-liang-shou-ching-ki-o-wen. ❸1巻 ❹漢文体(慶滋保胤)A. D. 1048—1116)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-kwa-mon. (文) Kwan-wa-liang-shou-ching-ko-wen. ❸1巻 ❹漢文体(慶滋保胤)A. D. 1048—1116)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-ku-gē. ❸1巻 ❹漢文体(空海)A. D. 774—835)頃

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-ku-gē. ❸1巻 ❹漢文体(空海)A. D. 774—835)頃

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-gu-mon-ki. ❸4巻 ❹漢文体 ❺慈恵僧正良源(延暦一寺座主)A. D. 1648—1721)頃、紀氏記 ❻東本願寺蔵(漢文体)A. D. 1721)頃

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-dan. ❸1巻 ❹漢文体(慶滋保胤)A. D. 1048—1116)頃

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-kwa-mon. (文) Kwan-wa-liang-shou-ching-ko-wen. ❸1巻 ❹漢文体(慶滋保胤)A. D. 1048—1116)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-ge-gi. (文) Kwan-wa-liang-shou-ching-hsuan-i. ❸1巻 ❹漢文体(慶滋保胤)A. D. 1048—1116)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-gen-gi. (文) Kwan-wa-liang-shou-ching-hsuan-i-fen. ❸4巻 ❹漢文体(慶滋保胤)A. D. 1048—1116)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-gen-gi-bun. (文) Kwan-wa-liang-shou-ching-hsuan-i. ❸4巻 ❹漢文体(慶滋保胤)A. D. 1048—1116)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-gen-gi-bun-ki. (文) Kwan-wa-liang-shou-ching-hsuan-i. ❸1巻 ❹漢文体(慶滋保胤)A. D. 1048—1116)頃 ❺(仮名) 浄土教信仰書。

歌集書籍目録 九品往生論

(中) Kwam-mu-ryō-jō-kyō-gen-gi

1325)巻 ❹(寛文"一一四一五・七一一)

觀無量壽經疏之卷分義私記 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-gen-gi-bun-shige-gasa. 觀無量壽經疏之卷分義私記 ❷四巻 ❸作" 觀無量壽經疏之卷分義私記 ❹(支那)明末(支那末一貞文一一一A. D. 1592—1671)巻 ❺(寛文"一一四一五・七一一)

觀無量壽經疏之卷分鈔 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-gen-gi-bun-shō. 觀無量壽經疏之卷分鈔 ❷一巻 ❸作 ❹李通玄(一説李通玄A. D. 1247)巻" 大谷大学蔵写本 ❺天正十年 ❻(寛文"一一五三・一一〇四—一一〇五)

觀無量壽經疏之卷分私集鈔 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-gen-gi-bun-ta-hitsu-shō. 觀無量壽經疏之卷分鈔 ❷三巻 ❸作" 大日本佛教全書所収元亨釋書巻巻之内 ❹(支那)宋(一説宋元A. D. 1177—1247)巻 ❺(寛文"一一四一五・七一五)(正文"一一五三・一四七)

觀無量壽經疏之卷分義巻觀門義鈔 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-gen-gi-bun-yō-gi-shaku-kwam-mon-gi-shō. 觀無量壽經疏之卷分義巻觀門義鈔 ❷作" 大日本佛教全書所収元亨釋書巻巻之内" 佛教大系所収一九 ❹(支那)宋(一説宋元A. D. 1177—1247)巻

觀無量壽經疏之卷談 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-gen-dan. ❷一巻 ❸作 ❹起信(安徳人一天明三 A. D. 1723—1783)巻 ❺(寛文"一一四一五・七一一)

觀無量壽經疏之卷談 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-gen-dan. ❷一巻 ❸作 ❹文政元年 ❺(寛文"一一四一五・七一一)

觀無量壽經疏之卷談 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-gen-dan. ❷一巻 ❸作 ❹明治三十五年 ❺(寛文"一一四一五・七一一)

觀無量壽經疏古標記 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-ko-shak-ki. (支) Kuan-wu-liang-shou-ching-ku-chi-chi. 觀無量壽經疏古標記 ❷一巻 ❸版 ❹新羅元曉(一説善導A. D. 753—)巻 ❺(参考) 新羅撰述佚文輯存巻巻一" 仏教大学蔵写本 ❻(寛文"一一四一五・七一一)

觀無量壽經疏鈔改 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-ko-sui. ❷三十巻貞享十五巻 ❸作 ❹寛永一一刊 ❺(正文"一一五三・一一〇四—一一〇五)

觀無量壽經疏考 ❶(日)Kwam-mu-ryō-ju-kyō-kō. 觀無量壽經疏考 ❷一巻 ❸作" 十一師巻巻之内 ❹(支那)宋(寛文"一一〇三・六)(宋文"宋文・一五一一)

觀無量壽經疏光明四帖疏 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-kō-myō-shi-jō-no-sho. (支) Kuán-wu-liang-shou-ching-kuang-ming-ssŭ-t'ieh-shu. 觀無量壽經疏光明四帖疏 ❷作" 大正三十七・三四五No. 1753 ❹(参考) 陸士諤宗教義考巻巻一一

觀無量壽經疏光明四帖疏 ❶(日) Kwam-mu-ryō-ju-kyō-kō-myō-shi-sho. (支) Kuan-wu-liang-shou-ching-kuang-ming-shih-shu. 觀無量壽經疏光明四帖疏 ❷四巻 ❸作" 大正三十七・三四五No. 1753" 卍續一・三一一・四" 陸士諤宗教義考巻巻一一" 七巻巻巻